悲劇を覆すもの〜クルデンホルフの黒い翼

へびひこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
悲劇を覆すもの～クルデンホルフの黒い翼

【Ｎコード】
Ｎ２６５５Ｘ

【作者名】
へびひこ

【あらすじ】
聖戦に敗れすべての責任を背負って処刑されるルイズ。
死んでいったサイトや友人達。
こんな悲劇的結末は認められないと憤慨したカミサマが悲劇を覆す者として主人公を召喚してゼロの使い魔によく似たこの世界に転生させます。
来たるべき悲劇を回避するために主人公はとりあえず努力してみる物語です。
原作破壊要素あり、現在王道勇者ルートへ進行中です。

チート主人公は世界を救って英雄になれるか？

序章　そして訪れた悲劇（前書き）

はじめまして、久しぶりに小説を書いてみました。

このサイトで数々の魅力的な二次創作に触れて、自分でも書きたくなってしまい。ついに書いてしまいました。

久しぶりの小説、久しぶりの二次創作なので、まだ手探り状態です。

原作を読んだのもだいぶ前で一人称とか口調とかは記憶が怪しく、設定もネットで調べて何とかやってみました。

はっきりいって原作とは雰囲気がまるで違います。

原作準拠じゃなきゃ認められないという方は読まない方が精神的にいいと思います。

僕の〇〇はこんなキャラじゃないという方も以下同文。

こんな設定原作にないぞと言われてもオリジナル要素ですとしかいえません。

あとテンプレ、ご都合主義、物語の展開上イメージが悪化しているキャラなどいますが仕様です。

こんなものはゆるせんという方は他の作品を読んだ方がきっとしあわせになれます。

序章　そして訪れた悲劇

なんだこれは？
なぜこんな事になった。
認められない、許容できない、許せない。
私はこんな結末は認めない！

・ルイズ視点・

わたしはルイズ。
わたしはルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。
わたしはゼロのルイズ。
わたしは虚無のルイズ。
わたしは聖戦の巫女ルイズ。
そしていまのわたしは魔女のルイズ。
トリステイン王国を偽りの聖戦に導き、人心を惑わし、ついに祖国を滅亡に追いやった最悪の魔女。そういわれている。

ちがう。
わたしはそんなことを望んでいなかった。
わたしが望んだのはようやく見つけた最愛の人との穏やかな生活。
その人は平民で、わたしの呼び出した使い魔だった。
それが運命の中で功績をあげて貴族に任じられ、わたしも落ちこぼれのゼロのルイズから伝説の虚無の使い手として多くの人に認められた。
それだけで終わっていればよかった。

そうすればわたしは最愛の人とたくさんの友人に囲まれて幸せに暮らしていただろう。
けれど周囲がそれ以上を望んだ。
戦争で活躍してしまった私たちを担ぎ上げ、私たちがいれば戦争に勝てると人々に信じ込ませた。

人々は熱狂した。
いや狂ったというべきか。
ロマリアの誘いに乗り聖戦などという馬鹿げたハルケギニア全土を巻き込む大戦を引き起こし、そして無様に負けた。
当たり前だ。
わたしやわたしの使い魔がどれだけ強かろうとも数万や数十万の大軍を相手にできるわけがない。
わたしたちがどれほど奮戦しても、わたしたち以外の部隊が敗走を続けていればどうしようもない。
そしてトリステインは敗北し、降伏した。
そして戦争の責任者として名前があがったのがわたしだった。
虚無の力を誇大に語り、アンリエッタ女王を惑わした。
自分の力を示したいという虚栄心から聖戦に賛成し、結果大勢の同胞を死地に追いやり、ついには祖国を滅亡させた。

ちがう。
わたしは反対した。
あの大国ガリアに小国であり常に財政難であえいでいるトリステインが戦争を挑むなど馬鹿げているといった。
それを虚無が味方にいるから負けないなどといっていたのはこの国の上層部と、何より女王その人だ。
わたしはもうこの人をアンリエッタ様だとか姫様だとか親しく呼ぶ気もおきない。
馴れ馴れしくルイズと呼び捨てにされるのも嫌だ。

できれば関わりたくない。
この気持ちは事情を知ればきっと理解してもらえると思う。

女王はロマリアも味方している。
聖戦なのだから負けるはずがない。
そんなことをいってわたしの訴えを聞かなかった。
たしかに虚無の呪文は強力だ。
けれど戦争向きではない。大軍同士がぶつかる戦争ならばわたし一人よりも十人程度の高位のメイジの方がよほど働けるだろう。
虚無は詠唱に時間がかかる。
そしてわたしの知る虚無の呪文で戦闘に特化したものは一つしかなかった。
そしてそれは莫大な精神力を必要としていた。
一度大軍を蹴散らすのに使ってしまえば、次はもう使えない。
せいぜい普通のメイジと同等の戦果しか上げられない。

何度もそう主張した。そして誰も聞く耳を持ってくれなかった。
女王はいった。
虚無がこちらの味方だという事実が何より重要なのだと。
それが味方の士気を高め、敵の士気をくじく、虚無におびえる敵軍を蹴散らすなど虚無を得た軍なら訳はないのだと。
なにを馬鹿なことをと怒鳴りたかった。
使えない張りぼての秘密兵器などでいつまでも敵がおびえるわけがない。
味方だってやがて疑う。
そうすれば数の不利があっという間に戦況を決めるだろう。

女王はいった。
ルイズ。
あなたはわたしの大切なお友達です。

わたしはトリステインのためにこの戦に勝たなければなりません。
あなたの力を貸してくれますね？

わたしは肯けなかった。
ためらうわたしに女王はどこか歪な笑みを浮かべた。
昔はあんな顔をする方ではなかった。
いつ頃からだろう、使い魔を得た頃？　虚無の系統に目覚めた頃？　ああそうだわたしと使い魔が愛し合っていると告げたときに女王はあの笑みを浮かべていた。
アルビオンの皇太子と愛し合っていながら、彼は女王との愛よりも王族の名誉を胸に戦死した。
それに比べてみればわたしはいつの間にか馬鹿にしていた使い魔に心惹かれ、彼もそれに応えて、いつもそばでわたしを守り支えてくれた。
それを見る女王の顔にはあの歪な笑みがあった。
きっとあの頃から女王の胸にわたしに対する隠された想いがあったのだろう。

女王はわたしを脅迫した。
女王の命令を公爵家の三女が拒否するのか？
公爵家がどうなってもいいのか？
平民である使い魔に貴族の名誉を与えたのは自分だ。
それのおかげでお前達は結ばれたのだろう。
その貴族の位を取り上げて再び平民に落とすこともできるのだぞ？
平民の身分に落ちた使い魔とおまえの恋愛など誰が認めるのか？
遠回しに、うわべだけ優しい毒の刃でわたしを痛めつけた。
その毒が使い魔の身の安全にまで及んだとき、わたしは半ば泣きながら承諾していた。

成り上がりの平民を疎む貴族は大勢いる。

そんな者にわたしが一声かけるだけで何が起こると思う？

わたしはこのときから女王を友人と思うことをやめた。

彼女にとってわたしは利用しやすい駒なのだと身をもって思い知らされた。

大切なお友達。

その一言で表沙汰にできないことや無理難題も承伏させられる便利なお人形。

やっぱりルイズは頼りになるお友達ね。

そういって抱きついてくる女王の真っ白い首をへし折ってやりたいと思った。

そして降伏したトリステインから戦争犯罪人の名前が挙がったとき、女王はわたしには何もしてくれなかった。

女王はそれどころではなかったのだろう。

戦勝国であるガリアに対して、自分はトリステインとアルビオンの血を引いている。

二つの始祖の血を絶やさないためにわたしは死ぬわけにはいかないと必死に根回しをしていたらしい。

自分の子ならトリステインとアルビオンの正当な後継者になれる。

夫にはガリア王家の血を引くガリア貴族を迎えればどうかとまでいったらしい。

無様にみっともなく命乞いをして回る姿は笑い話として広まっていた。

その頃には牢に入れられていたわたしの耳にまで届くほどだ。

きっと血相を変えて自身の助命に奔走していたのだろう。

そういったトリステインの事情を話しに来るガリア貴族にわたしは問わずにはいられなかった。

もう友情など信じてはない。

けれど女王に少しでも良心の呵責があるのならばと。

「女王陛下はわたしのことをなにかいっていませんでしたか？」
その男は何ともいえない笑みを浮かべた。
嘲笑？　いや哀れみだろうか？
なんとあの女王は積極的に今回の聖戦はわたしによってそそのかされたものであると公言しているらしい。

わたしは納得していた。
女王が生き残るためにはすべての責任が自分にはないと、誰かのせいだと言わなければならないだろう。
その相手はわたしだった。
お友達なら代わりに責任もとってくれと言うことだろうか？
怒り狂って泣きわめいてもいいはずだった。
けれど、わたしはただ納得していた。
あのお方ならそうだろうと。
それにもうその頃のわたしには怒りをあらわにする元気も余裕もなかった。
ガリアに捕らえられ牢に放り込まれたが、その後のトリステインの状況、特にわたしと個人的に親しかった者のその後については知らされていた。
その話がわたしを痛めつけ、苦しめ、ただ涙を流させた。

ギーシュ。
あの気障だけれどどこか抜けていた男は敗走するトリステイン軍の中で水精霊騎士隊（オンディーヌ）を率いて最後まで勇敢に戦った。
彼の騎士団は学生達ばかりで戦闘力はあまり高くはない。
それでも彼らは押し寄せるガリア軍に戦いを挑み続けて味方を逃がし、ついには戦死した。
学院の庭で騎士ごっこと半ば馬鹿にされながらも朗らかに笑い。
訓練に明け暮れていた仲間達とともに死んでいった。

タバサとキュルケ。
タバサは実はガリアの王族だった。
ジョゼフ王の弟、オルレアン公シャルルの娘。
シャルロット・エレーヌ・オルレアン。
オルレアン派の人々をまとめ上げ戦争に参加するもトリステインの敗北で地下に潜り抵抗活動を始めていた。
そのそばには親友であるキュルケの姿が常にあったという。
戦後の混乱を利用しジョゼフ王暗殺を決行するも失敗。
その後隠れ家を強襲され、キュルケは最後までタバサを護るために戦い、殺された。
タバサは捕まりその後処刑された。
タバサの処刑当日一匹の風竜が襲ってきたらしい。
おそらくタバサの使い魔のシルフィードだろう。
主を救うために処刑場に乗り込んだのだとわたしにはわかる。
しかしシルフィードは数十人のメイジによって殺され、タバサは抜け殻のような有様のまま処刑されたらしい。

ティファニア・ウエストウッド。
彼女は親友になっていたクルデンホルフ大公家のベアトリスによって大公家にかくまわれていた。
しかしクルデンホルフ大公領にガリア軍が侵攻し、絶望的な防衛戦の末クルデンホルフ大公の屋敷で大公家の人々と一緒に自害して果てた。

モンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシ。
トリステイン貴族に対する民衆の決起、貴族狩りに襲われ屋敷から逃げ出したが、逃げ切ることができずに殺された。
貴族を守るはずの王家である女王は自分の保身しか活動せず。
貴族達は自分の身は自分で守るしかなかった。
ましてモンモランシ家は財政が厳しく軍備などほとんどなかった。

ガリア貴族に扇動され、聖戦の軍備による財政の圧迫で重税を課していたトリステイン貴族に対する平民達の逆襲が開始されたときに身を守るすべがなかった。

敗戦で軍勢を失ったトリステイン貴族達は多くが屋敷を焼かれ、息も絶え絶え逃げ出しても平民達に各地で追われ、口にするのもおぞましい平民達からの復讐を受け惨殺されていった。

特に若い女性はすぐには殺されずに捕らえられ、平民達の欲求のはけ口として扱われていると聞いた。

わたしは友人がせめて苦しまずに死ねたと思いたかった。

ギーシュを愛していたモンモランシー。

愛する男が戦死し、自身は平民にその純潔を汚されて殺されたのではあまりにも不憫だった。

トリステイン魔法学院も悪しき貴族の象徴として火を放たれた。

オールド・オスマンは王宮からの召し出しを拒否し、学院長室で炎と消えた。

使者に対して、オールド・オスマンはこう言ったという。

「わしの大事な生徒を無理矢理戦地に送り、死なせた王家になんぞ従う義理はかけらもない。この上この学園を蹂躙するのならばわしは学院長としてこの学院を最後まで見守るだけじゃ」

この言葉を聞いたときにわたしは昔のわたしを殴りたくなった。

あの頃のわたしは学園長を軽蔑していた。

学院の長のくせに何もせず。

いつも無責任に見え、高名なメイジとはいえあんな人物が学院長なのかと見下していた。

わたしは何もわかっていなかった。

あの人は誰よりも生徒のことを想い、学院を大事に想っていた方だったのだ。

けしてわたし如き愚か者が見下していい人物のはずがない。

そしてコルベール先生。彼は学園の焼き討ちされる当日にどこからかふらりと現れて、学院を襲撃したガリア軍相手に大暴れしたらしい。

「私は私の生徒を守れなかった！　しかしこの学院はあの子達の帰ってくる場所だ。私はここを護らなければならない！」

傷だらけになっても戦い続けガリア軍の包囲を突破すると、彼は燃えさかる学院の中に姿を消したらしい。

おそらく学院長と最後を共にしたのだろう。

そしてシェスタ。

わたしの友達。

わたしはシェスタに今後のことを言い含めて敗戦濃厚のトリステイン軍から落ち延びさせた。

内容は簡単だった。

誰かに聞かれてもけしてわたしたちと個人的に親しかったといってはいけない。

あくまでも女王の命令でメイドとして働いていただけだと主張しろ。

彼女は平民だ。貴族ではない。

ガリア軍も貴族につけられていたメイド一人に目くじらを立てまい。

しかしわたしたちと親しかったとなると話が違ってくる。

わたしへの嫌がらせか脅迫材料として彼女の身柄を確保する可能性を考えた。

あの女王ならそのくらいやるという確信があった。

だからあくまでも女王の命令で嫌々わがままな名門貴族や成り上がり貴族に仕えていただけだと主張しろといった。

シェスタが彼に好意を持っていたのは多くの人が知っているが彼は貴族に成り上がってから人が変わってしまったといって愛想を尽かしたことにしろと。

泣きながら抱き合い、別れを惜しんだ。
そして彼女を送り出した。
その後彼女の話を聞かないことから推測すると彼女はうまく逃げられたのだろう。
捕まったならそう言われるだろうから。
連中はわたしのいやがる報告は嬉々として持ってくる。
わたしから彼女のことは聞けない。
聞けばわたしが彼女に関心があると教えてしまうことになり彼女が危険だ。
だから推測するしかない。
同じ男を愛した女同士彼女には無事生き延びて欲しい。

最後にサイト。
わたしの使い魔。
伝説の使い魔にしてアルビオンで七万の敵軍を食い止めた英雄。
神の左手ガンダールヴ。
彼は最後までわたしのそばにいてくれた。
崩れていくトリステイン軍の中でわたしの手を引き、必死に戦場から離脱しようとした。
他の威勢のいいことをいっていた貴族達はあっという間に逃げ散ってしまいわたしはサイト一人に護られて逃げ続けた。
右手に大剣デルフリンガーを握り、左手でわたしの手を引いて必死に戦った。
もう少しで逃げられると思ったとき、銃声が響いた。
サイトの胸から血が飛び散り。
わたしの手を握る手のひらが力を失い。
彼は倒れた。
その後、わたしは逃げることも忘れて必死にサイトに抱きつき彼を呼んだ。
サイトは何か言いたげな顔をしてほほえみ、そのまま亡くなった。

デルフリンガーが必死に「一人ででも逃げろ！」と叫んでいたがわたしは動けなかった。
サイトを置いて一人で逃げるなんてできなかった。
そしてもう何もかもがどうでもよくなった。
わたしに抵抗する様子がないことから、ガリア兵がゆっくり包囲し近づいてくるのを感じてわたしは最後にサイトの手にあったデルフリンガーをにぎり、それで自分の首を裂こうとした。
けれどデルフリンガーはとても大きく重い剣だった。
サイトは軽々と振り回していたけれどわたしの腕には重すぎた。
周囲のガリア兵がわたしのしようとすることに気がついてわたしを取り押さえデルフリンガーと杖を取り上げた。

そしてわたしはガリアの捕虜になった。
わたしは最後までサイトと一緒にいさせてと懇願したが、誰も聞いてくれなかった。
わたしは牢に入れられ、わたしはトリステインが崩壊し、友達が死んでいったことを聞かされた。
どうやらこれはジョゼフ王の嫌がらせらしい。
捕らわれ何もできないわたしに祖国が蹂躙されていく様を、大切な友達が無残に殺されていく様を聞かせてわたしが苦しむ様子を聞いて喜んでいるらしい。
連中はわたしの嫌がりそうな情報は嬉々として教える。
何度も嫌だと。もう聞きたくないと泣きわめいても殴られ蹴られ、身体を兵士達に押さえつけられて祖国や友人を襲った悲劇を何度でも聞かせる。
わたしはそのうち怒ることがなくなった。
怒鳴る気力も暴れる体力も抜け落ちてしまった。
ただ泣いた。
声も出さずにただ涙を流すだけになった。

わたしの家族は真っ先に殺されたらしい。
父は戦争の責任者の一人として処刑された。
母はかつて軍人だったという過去から敗戦に関しての責任を問われ処刑された。
エレオノール姉さまは貴族を憎む平民達にまるで餌のように放り込まれた。
暴動のように暴れ狂う平民に襲われて姉様は殺された。
ちぃねえさまは貴族ばかりが優遇される象徴として、目の前で飼っていた動物たちを殺され、最後は魔獣をけしかけられて食い殺された。
お父様は何も悪くない。
お父様は戦争に最後まで反対し、わたしを旗頭に使うことに抵抗していた。
お母様は何も悪くない。
お母様が軍人だったのは過去の話だ。
なぜ戦争に負けた責任をかぶらなくてはいけないのだろう。
エレオノール姉さまはただのアカデミーの研究員だ。
それは多少傲慢に見えるかもしれない。
けれどエレオノール姉さまが平民に理不尽なことをしたところなどわたしは見たことがない。
ちぃねえさまは別に贅沢をしていたわけではない。
ただ身体が弱く、外出もできず友人も作れないのでたくさんの動物たちを助けて世話をしていただけだ。
自分の身体が動かないぶん、怪我をした動物を救い彼らの元気な様子を見て喜ぶのはそんなに悪いことだろうか？
そしてその処刑のすべては女王の許可の元行われたと聞いた。
わたしはただ悲しかった。
女王ならば、わたしを友達といってくれるならばなぜほんの少しの慈悲もかけてはくれなかったのだろう。
処刑されるならばせめて貴族の名誉を守るために自決を許してく

れてもいいではないか。
あんなに残虐な方法で殺す理由がわたしの家族のどこにあるのか？
せめて安らかに苦しまないように殺すことはできなかったのか？
たとえ命を救えなかったにしても、そのくらいの慈悲を示してくれてもいいのではないだろうか。

このことは女王にとって生涯つきまとう汚点になるだろう。
そう思ったのは私怨ではない。と思う。
女王が自分の保身ばかりに奔走して家臣たちの安全や名誉には目もくれていないという噂話はトリステインを嘲笑する格好の噂話になっているらしい。
こんな女王ならば滅んで当然だと。
女王は命をながらえても、きっともう誰にも信用されず。
忠誠など向けられず。ただ軽蔑と嘲笑を一身に受けて生きていくことになるだろう。
そういえば銃士隊の隊長であるアニエスが自害したらしい。
おそらく女王の変貌ぶりに失望し、絶望したのであろうと聞いた。
アニエスは本当に女王に忠誠を誓っていた。口の悪いものは女王の忠犬とまで言っていた。
しかし今の女王はアニエスを失望させたことだろう。
生き残ることばかりに目がいき、他のことなどどうでもいいと言わんばかりだ。
わたしだってついてなどいけないと感じるだろう。もっともわたしはもっと前からそう感じていたけど。

さあ、そろそろ時間だろう。
今日は私の処刑の日。
今日だけはいつものぼろ布のような服ではなく、いかにも貴族らしい豪勢な服を与えられている。
髪も櫛で整えられ、薄く化粧もされた。

別に貴族の名誉を守るためではないだろう。
この敗戦を呼び寄せた魔女として平民達の憎悪を一身に背負うためにはいかにも貴族ですという格好の方が具合がいいに違いない。
化粧も美しく見せるのではなく、牢屋暮らしでやつれているのを隠すためだろう。
見るからに弱まりやつれ果てた姿で処刑場に出したら、まかり間違ってわたしに同情する者もいるかもしれない。
わたしは人々に憎まれる魔女として処刑されなくてはならないのだろう。
そのことに関してわたしの心は何も感じない。
わたしはむしろ今日を心待ちにしていた。
自害を防がれ、牢に入れられてからも自害を禁じられた。
わざわざ魔法を使って自殺を禁じてくるのだから念がいっている。
おかげでどんな屈辱的なことをされても舌をかみ切ることさえできなかった。
それも今日までだ。
今日衆人環視の元わたしは死ぬ。
どんな残虐で苦痛に満ちた死であろうともかまわない。
死ねばもしかしたら家族や友達や、愛する人のもとへいけるかもしれないのだから。
そして牢獄の扉が開いた。

断頭台に縛りつけられ、人々の罵詈雑言を受け、わたしはただ涙を流した。
悲しかったわけじゃない。つらかったわけじゃない。
ただうれしかった。
これでもう苦しまなくてすむ。
思い出したくもない屈辱を受けることもない。
「最後の言葉があるか」
その言葉にわたしは首を横に振った。

わたしの言葉はきっと死んだ後にわたしを待ってくれているサイトや家族や友人達への言葉だ。この場で口にするようなことではない。

まっていて。すぐに追いかけるから。

一生懸命追いかけたらきっとまた一緒にいられるから。

まっていて……。

断頭台の刃が落ちたとき、きっとわたしは。

きっとしあわせに笑っていたと思う。

・カミサマ・

こんな事は認められない。

何でこんな事になった。

わたしは認めない！

「世界に響く祝福の調べよ！　世界を統べるすべて者たちに願う…わたしの見た悲劇を止められる力を持つ者を、わたしが感じた悲しみを打ち払う者を、この小さな世界の悲劇を覆す者よ！　我が祈りに応えよ！　我が魂に応えよ！　我はあらゆる因果を超えて汝にこの手をさしのべる。この手を握れ悲劇を覆す者よ！　我が召喚に応じよ！」

・？・

今日もいい天気だ。

『愛読者達の集い』も順調にいっている。

あいつらジャンルにこだわりすぎなんだよ。

本好きに悪い人間はいないのだから仲良くすればいいのだ。うん。
あまりにも小サークルが乱立して喧々諤々うるさいから説得して鎮圧して統一したらいつの間にかそのサークルの会長になっていた。
おかげでちょっとした有名人だ。
どうやら僕は群雄割拠の図書サークルを統一した英雄らしい。
そんなたいしたことしてないんだけどな。
まぁ、実害はないからいいけど。
僕はこうして静かに本を読んでいられたらそれでしあわせなんだから。
ああ、いい天気だ。
これからもずっとこんな日が続けばいいのに。
『見つけた』
ん？　なにか変な声が？
あれ、なんか胸が痛い。
おや、息が苦しい。
目がかすんで……。

こうして僕はしあわせを満喫しているところでいきなり死亡した。
なにをいいやがると思うかもしれないが、
僕こそいいたい。
僕がなにをしたっていうんだ？

序章　そして訪れた悲劇（後書き）

まずこの序章のルイズはアンリエッタが大嫌いです。
なので呼び方はどこまでも突き放して女王と呼びます。
理由は本文を読んで察してあげてください。
書いてみて思ったのは意外に難しいなぁと言うことでした。
ルイズの雰囲気を表現できなかったのです。
まぁこの序章のルイズは原作ルイズとはすでに別物ですから余計に面倒でした。
本当はもっと暗く悲惨だったのですが下手をすると十八禁になりそうなので自重しました。
その名残でモンモランシーが悲惨なことになってます。
ルイズもぽろっとなんか呟いてますし。
本編に入れば明るくなると思います。

追伸　内容を若干修正しました。

一章　カミサマとの契約（前書き）

本編開始、なのですがまずはカミサマとの対話場面です。
大抵の転生ものでは神様は主人公を転生させるだけですが、うちのカミサマはその後のサポートまでしてくれるので今後も登場します。たぶん。
この主人公、人格的にすでにチートです。
さらに今回オヤクソクな転生特典のおかげでさらにチートに磨きがかかります。
最終的に聖戦を回避するか勝利するまで持っていかないといけない主人公なので、カミサマもできる限りサポートします。
そして僕は影技が大好きです。漫画は読んでいないですかノベライズとアニメは見ました。
なのでディアス最高と声を大にして言います。

一章　カミサマとの契約

・？・

気がついたら見知らぬ場所にいた。
まるで雲の上にいるような気分にさせる頼りない床と、太陽のない割にはやたら明るい青い空。
軽く深呼吸。
「うん、空気はあるな」
とりあえずそんなことをいってみる。
窒息死はしないみたいだよかったね。
飛ばされた先が真空とか石の中だったら死んじゃうからね。
身体を見下ろすと学校の制服のままだった。
ポッケにハンカチとティッシュを確認。胸ポケットの学生証は、ないな。
あれがなくなると紛失届とか出さないといけないんだけど。
弱ったな。

「あなた。落ち着いてますね～」
「慌てふためいても事態は改善されない。これは常識だ」
平然と応えつつ相手を観察。
中学生ぐらいの女の子を発見。
銀髪に赤い目をしている。
服装は、なぜかうちの高校の女子制服だ。
「あなたは誰ですか？」
「カミサマです」
「ほう、そりゃすごい」
「疑ってますね～、それは信じられないのも無理はありません」
「別に疑ってはいない。信用はしていないが」

「どっちなんですか」
あきれたように問い返してくる。
ふん、愚問だな。
「あなたがなにかしら普通の存在でないのはこの状況を見ればあきらかだ。だがそれが神に直接結びつくかと問われればその答えは否だ」
ほーっと自称カミサマはため息をついた。
「びっくりするぐらい冷静な人ですね。これは期待が持てそうですよ～」
期待？
「ところで状況の説明を要請する」
「あなたはいつもそんな妙なしゃべり方なんですか？」
「失礼な。これは非常時用だ。普段のコミュニケーションにはちゃんとそれにふさわしい言葉遣いを心がけている」
思考回路を全力回転させたり極度のストレスにさらされるとこんな口調になってしまうんだから仕方ない。
それだけ今は心理的に余裕がないという意味なんだが、まぁそこまで説明はしない。
いきなり他人に弱みを見せるほどアホなことはないし。
サークルの連中はこの状態の僕を「皇帝モード」と呼んでいた。
理由はやたら偉そうで威圧感があるのだそうだ。
交渉ごとなどこのモードでやるとかなり効果的だった。
女子生徒相手に全開かまして泣き出してしまったことがあったな。
今回も相手は正体不明とはいえ女の子だ。
適度に加減しておこう。同じミスをするのは大変よくない。
「それで、状況は？」
「はい、わたしがあなたを召喚しまして、これから事情を説明して使命を与えるところですね～」
「召喚？　それはライトノベル的な魔法のようなものと解釈していいか？」

「はい、あなたの全存在である魂ごと召喚しました。結果、あなたの世界でのあなたは死亡しましたね～」
……な、なに？
「少し待て、そうすると何か。ここから帰してもらうということは不可能なのか？」
「あなたなにをいっているんですか？　死んだ人間は生き返りませんよ。生き返ったらホラーですね～」
少し待て、思考しろ。
考えろ。
つまり僕の今の状況は。
「つまり僕は死んでここにいる。つまり僕にとってここは死後の世界と大差ないということか？」
「まぁ、そうなりますね」
「おまえが召喚したと？」
「そうですねぇ、がんばりました～」
「つまりおまえが僕を殺したということか？」
自称カミサマの視線が明後日の方向に泳いだ。
「結果的にはそれにちかいものがあるかもしれないと思うことも可能ですね～」
「しかも帰せない。なぜなら死んだ者は生き返らないからと」
「はい。理解しました？」
ああ、理解したとも。
「この人殺しがぁ！　僕の日常を平穏を返せ！」
つかみかかるとひょいっと自称カミサマが逃げた。
「だめですよ～。女性の胸元つかもうなんてセクハラですよ～」
「黙れ殺人鬼！」
「あ、傷つきました。こちとらやむを得ぬ事情があって理を曲げてまであなたを召喚したというのになんという言いぐさでしょう。天罰落としますよ～」
落ち着け、思考しろ。

つまり僕はもう死んでいる。
生き返れないということは僕の運命はおそらくこの自称神の思うままということに。
すべて信じればの話だが。
「僕が死んだという証拠を見せろ」
「あー、はい。なんとかなるかな～。死体見せれば納得します？」
そう言って宙をじっと睨みつける。
そしてにぱっと笑った。
「決定的な証拠発見！　はい、見てくださいあなたのお葬式ですよ。自分のお葬式なんて激レアですね～」
空中にあきらかに通夜か告別式かという光景が映し出され、そこに飾られている写真はあきらかに僕だった。
その事実と涙を流しながら毅然と対応する両親と泣き続ける妹の姿に衝撃を受ける。
そしてさらに。
「おい」
「なんです、まだ不満ですか？」
「なぜ僕は僕の名前や家族の名前を思い出せない？」
僕が僕であることを自覚している。
記憶もあると思う。
しかしそこから自分の名前や家族の名前が抜け落ちていた。
「あ、たぶん死んだ影響ですね。普通死ぬと記憶を失いますから。まぁ普通の死に方ではありませんから召喚による中途半端な記憶喪失状態ですね」
「そうか……」
もう消してくれと頼む。
自称カミサマは特に反論せずに映像を消した。
「納得してもらえましたか？」
「いろいろと言いたいことはある気がする。けれど残念なことに今はそんな気力がわかない」

どうやら自分の葬式の光景が思った以上にショックだったらしい。軟弱とは思わない。

誰だって家族が自分の死に対面し悲しんでいたらこうなるだろう？

両親はどう思っただろう。

朝は元気だった息子が学校に行ったら突然死んだなんて、そもそも僕の死因は何だ？

「僕の死因はなににになっている？　まさかカミサマに召喚されたじゃすまないだろう」

「あちらでは原因不明の突然死、おそらくは急性的な心肺停止。ショック死に近いと思われているようですね。もしかしたらなにかしらの持病があったのではないかと疑われているようですが事件性がないからそれ以上調べようがないようですね」

「そうか、家族は納得しているのか？」

「おそらく、死んでいる以上納得するしかないでしょう。死因を調べたら生き返るわけではないですし」

「そうか」

おずおずと自称カミサマが問いかけてきた。

「あの、もしかしてわたしは悪いことをしたのでしょうか？」

「ああ、多少の罪悪感はあったのか、安心したよ」

その程度の皮肉しか出ない。

まいったな。

絶好調なら原稿用紙を埋め尽くすほどの勢いで責め立てられるのに。

「すみません。そちらの状況もわきまえず呼び出してしまって。実を言うとわたし人間を召喚したのはじめてだったりしまして、死ぬことにそんなに問題があると認識していませんでした」

「神は死んでも問題がないのか？」

「神は死にません。存在を保てなくなった場合世界と同化するだけです」

「死とは違うのか？」

「違います。世界と同化するのは神としては最高位に近づいた証のようなものです。人間の死のように忌避することはありませんし、世界と同化しても消え去るわけではありません」
「よくわからない」
「まぁ、神の概念から教えなければ理解できませんよ」
「ああ、そうか。理解した」
「わかったんですか？」
「僕が知る必要がないと言うことと、おまえが神と呼ぶ存在に近いことを理解した」
はあそうですか。と少々こちらを伺うような視線を向けてくる。

僕は白い床に座り込みしばらく目を閉じた。
賢明なことに自称カミサマはその間黙って僕のことを待っていた。
空気が読めるってすばらしいね。
僕の状況は理解できた。
退路はなく。僕はすでに死亡しており、このおそらく神はなんらかの理由があって僕をわざわざ召喚した。
使命といったか、僕になにをさせる気か？
僕はしがない読書愛好家だぞ。
間違っても伝説の勇者とかじゃない。
そしてそれがどれだけふざけた使命でもおそらく拒否はできない。
ならばどうすれば最善か？
まずはこのさすがに良心がとがめている様子のカミサマを完全にこちらの味方にしてしまうべきだ。
味方にしてしまえばさすがに無茶は言えないだろう。
あるいは無茶なことでも助力くらいは期待できるだろう。
さてどうやって味方につける？
「事情はだいたいわかった。キミにはなにかしら理由があって僕を召喚した。そして僕にやってもらいたいことがある。あっているかい？」

若干余裕ができてコミュモードだ。
皇帝モードは威圧はできるが懐柔には不向きだ。
僕の言葉と柔らかい態度に安心したように自称カミサマは肯いた。
「はい、あなたにはとある小世界におもむきそこで起きる悲劇を回避して欲しいのです」
おいおい、まさか勇者ルートか？
「キミが僕になにを期待しているかわからないが、僕は本好きのただの高校生だ。そんなだいそれた事はできないと思うけど？」
「いえ、あなたには素質があります。そういう人を召喚したんです。そしてその素質を最大限発揮できるように私がサポートします」
「サポートとはどんな具合に？」
助力は得られるのか？　具体的にはどの程度までだ？
自称カミサマはどんと胸を張っていった。
「あなたの才能を最大限伸ばし、かつ必要な能力も身につけられるようにします。また能力の開花や学習効率なども最大限効率化して最適化します」
「つまり僕の才能がさらに伸び、その使命を果たすための能力を身につけることができ、そしてそれを身につけることの効率化と最適、つまり努力に対して成果が最大限の効率で手に入ると」
つまり努力さえすれば結果は必ず手に入ることになる訳か？
「はい、努力さえすれば結果は楽勝でついてきます。努力のしぞんはさせません。ゲームで言えば経験値百倍といったところでしょうか？」
カミサマの世界にもゲームはあるのか……いやそんな情報はどうでもいい。
「つまり努力しなければ始まらないと？」
「あー、それなんですけど後で説明します。そうしないと不都合なんです」
「ふむ、ではそのサポートを受けた結果として使命を果たせる可能性はどのくらいあるんです？」

「可能性ですか？　数字にするのは難しいです。あなたを送りこんだ時点で世界が変質しますから可能性ゼロはまずありません。そこからは努力次第ですが低い可能性ではないはずです。あまりにも問題がある場合は私が介入しますし」

カミサマの直接介入？　それはおもしろいサポートだ。

いや、まて。

「キミが直接介入できるなら、僕が行く意味がないのでは？」

「いえ、それは違います。あなたが行くから介入できるのです。そしてその介入は限定的なものになります。なんでもできるわけではありません。あくまでもサポートと思ってくれれば」

ちっ、意外に役にたたんな。

まぁそれができていれば僕が死ぬ必要もなかったわけだから仕方がない。

内心の舌打ちを笑顔で隠して質問を続ける。

「それでその悲劇とはなんだ？」

「それはまずこれを見てください」

再び現れる映像。

葬式の映像ではない。これはなんだ？

「戦争か？　しかし嫌に旧時代な、いや待て、なにか変だ」

「はい、この世界では科学があまり発展していない代わりに魔法があります。まぁあくまでも特権階級の使える力に過ぎませんが」

全員が魔法を使えるわけではないのか。

特権階級が独占しているのか？

「この戦争に負けることによって、本来なら世界を救うはずだった人たちが軒並み死んじゃうのです」

ピンク色の髪の少女がギロチンにかけられる映像を最後に映像が消えた。

あの女の子。最後にきれいに笑っていたな。

処刑されるというのに、なぜ？

「僕はその戦争に勝たなければいけないのか？　正直人選ミスとい

う気がするけど」
僕向きではないな。
僕は間違っても戦争の英雄にはなれないだろう。
運動能力はせいぜい人並み、戦闘技能はゼロだ。
軍略や戦術にしても歴史小説などで目にしたことがある程度だしな。
「いえいえ、戦争を起こさないという選択もありますし、あなたが本気で学べば戦場の勇者だろうと不敗の名将だろうと楽勝でなれるはずです。そのためのサポートです」
なるほど。今の僕の能力を基準にしても仕方ないのか。
あるいはあの魔法というものを極めればどうだろう？
「僕も魔法を使えるのか？」
「あの世界の魔法はあの世界に行けば使えるようにします。異なる魔法も学べば可能になるはずです」
異なる魔法？
「魔法というのはたくさん種類があるのか？」
「はい、世界の数だけあると言っても過言ではないほど。まぁ根っこは似たり寄ったりな場合が多いのですけどね」
「たとえば僕が本で読んだ架空の魔法などを習得しようとした場合はどうなる？」
自称カミサマは即答した。
「努力すればそれはその世界で発現可能な形に若干修正されて習得は可能でしょう。よほどの無茶でない限りは人間の想像できる範囲のことなら実現可能なはずです」
「よほどの無茶とは？」
「人間が想像できないことです。たとえば神殺し、世界崩壊とか」
神殺しはまず神がどんな存在か不明なら不可能。しかし世界崩壊は。
「世界崩壊は可能なのではないか？　住んでいる星を砕けばいい」
「それは惑星破壊に過ぎません。世界はもっと大きいんです」

なるほど、惑星を滅ぼしても宇宙がある。
宇宙を滅ぼそうにも宇宙の全容を知る人間などいないし想像もできないか。
「能力に関してはあまり心配しないでください。数年がんばればおそらく世界最高クラスになれるはずです」
「そんなに時間があるのか？」
「あなたが世界に現出するのはあの悲劇があったおよそ二十年前です。あれ十八年だったかな？　まぁそれだけあれば準備は可能なはずです。それにそれまでの間にいろいろ行動すればそれだけで未来が変わる可能性があります」
「ちょっとしたタイムトラベルものみたいだな」
「まぁ、未来を知ってから過去にいくのですからその認識でも間違っていませんが、時間移動はそう簡単にできませんよ？」
「簡単じゃなければ可能なのか？」
自称カミサマは肩をすくめた。
「必死にがんばれば時間移動の魔法を身につけるぐらいはできるかもしれないというだけです。でもそんな暇があるならまっとうな能力を伸ばした方が役に立つと思いますけどね」
「具体的にどのくらいかかる？」
「えっと五十年かければ時空間魔法の達人になれるかも」
「サポートはどうした？」
半眼で訪ねると自称カミサマがふくれっ面になった。
「仕方ないじゃないですか、あの世界には時空間魔法そのものがまだないんです。つまり師も無く先例も無く手探りで初めて独学で能力を伸ばせば達人といえるまでになるにはそのくらいかかります。確かに努力が成果に結びつきやすいですが、限りなく無理なものを可能にするにはかなりの努力が必要です」
あ、でもと付け足した。
「自由に時間移動するまではいかなくても、軽く時間停止させたり数日時間移動する程度ならもう少し早く習得できますね」

「どのくらい？」
あまり期待しない。
「三年ぐらいですね」
あまりの落差にめまいがした。なんだその差は。
すると自称カミサマが少しまじめな顔をした。
「あのですね。初心者になるのと達人になるのでは努力の量がまるで違います。なににたいして努力するのかにもよりますが、世間一般なものならかなりお手軽に、世間では絶対不可能なものに挑戦すればそれだけ難しくなります。それもちょこっと使えるだけと自由自在に使いこなすのではＲＰＧのレベル１０とレベル２５５以上の差があります」
なるほど、同じ魔法でも初心者向けなら簡単に習得できるが達人向けとなると難しい。
ましてやそれがその世界の常識的に絶対不可能と断じられるものなら余計か。
ふむ。だいたいわかってきたな。
つまりこの世界基準で一般的な能力ならば僕はすぐに達人クラスになれるというわけか、それならば戦争の英雄にだってなれるかもしれないな。
それにその世界で常識的に不可能とされる能力でも、理論上その世界で可能であるのならば実現させることができる。
ただしその場合通常よりも時間がかかる。
極めようとすればなおさらということか。
「だいたいわかった。それで僕はその世界に行って二十年暮らすことになるのか」
「正確には一生ですね。いけばその世界から死ぬまで出られません。まぁ世界から解脱できる魔法でも極めれば別ですが」
「となると戦争当時は四十近い年齢になるな。まぁそれなりの地位に昇れればなんとかなるか」
すると一瞬ぽかんとしてから神様が首を振って否定した。

「違います。あなたはその姿のままあの世界に現出するのではなく。あの世界の人間として新たに生まれてくる形で現出します」
新たに生まれてくる？
「つまりあの世界の特定の人物の子供として生まれてくるんです。今の記憶と各種才能と能力を持ったまま。そうでないとあまりに不自然です」
たしかに突然あの世界にほっぽり出されてもどうしようかと思っていたところだ。
確かな家の子供に産まれればあの世界の常識も学べるだろうし、子供時代から勉強もできる。
また無力な幼児期には守ってもらえる。
「それで誰の子になるんだ」
「えっと、候補としてはいくつかありますが。ガリア王家関係者は敵対関係になりやすいから却下、ゲルマニアは世界への干渉力が弱いので却下、アルビオン王家は本命の戦争前に滅びる可能性が高いので却下、トリステイン王家という手がありますが、環境が悪いのでおすすめはしません。けれどトリステインの名門貴族あたりはおすすめです。平民はダメです。魔法が使えないし、この世界では平民は地位が低すぎて世界への干渉力が半端なく弱いですし、生存可能性まで下がります」
平民は魔法が使えない。
やはり特権階級が技術を独占しているのか？
「平民で魔法が使えるやつはいないのか」
「いたとしたら貴族崩れだけですね。ああ、誤解の無いようにいっておきますがこの世界での基本的な魔法は遺伝で才能が継承されます。つまり魔法使い＝貴族なのです」
特権階級が独占しているのでは無く、魔法が使えるから特権階級なのか。
なんともまぁそれでは平民の立場が無いな。

「想像がつくと思いますが、この世界では魔法使いが支配者、それ以外は家畜同然という考え方さえはびこっています。一部の良識ある方々は平民にも優しいですがそんなものは例外的存在で、平民はあくまで支配される側です」
「それで生存能力が高く、使命成功の可能性の高い家はどこなんだ？」
「ええ、ちょっとむずかしいですけどここなんてどうでしょう。クルデンホルフ大公家」
「王家とは違うのか？」
「トリステイン王家の縁戚で属国とはいえ一応独立国です。経済的にも裕福で治安もよく人材も豊富、大公家の子供は現在娘が一人だけ、ここにあなたを大公家の跡継ぎとしてねじ込みます」
「その利点は？」
「トリステイン王国は経済的にも軍事的にも政治的も超弱小国です。そのトリステイン王国が何とか外国にたいして体裁を整えられる秘密がクルデンホルフ大公国からの援助というか借金です。つまりトリステイン貴族の大半はクルデンホルフ大公家に頭が上がりません。王家でさえ、借りがあるので粗略にはできないのです。つまり名目以上に実質の影響力は大きいのです。そこの跡取りだとなったら、わかるでしょう？」
「しかも王家の血縁。傾いた国の王子として生まれるよりもうまみがあるな」
「いや～、なんか悪そうな顔してますね？　それでも一応王家よりも格下なのであまり表立っては威張れません」
「そんなもの、名より実を取ればいい」
「いよいよ悪党っぽいですよ？　そっちが本性ですか～」
「それで欠点は」
「あ、はい。そうですね強いてあげればトリステイン本国に生まれるより世界への影響力が弱まることですが、このあたりは行動で何とかできる範囲内です。正直この使命を果たすのならトリステイン

を何とかしなければならないのでそっちに生まれた方がいい気がするんですが、ここならトリステイン貴族を抱え込んで外からトリステインを操るなんて悪党みたいな真似もできます。あとはやはり大公国の跡取りとなるとしがらみもできますから下手を打つと行動の範囲が狭まる可能性もあります」

なるほど、そこに生まれるならば積極的に動いてトリステイン貴族に恩を売り貸しを作り、トリステインへの影響力を増やしていかないと肝心なときに外国の人間扱いでシャットアウトされてしまう可能性があるな。

そのあたりは行動次第か。

「他に候補は？」

「ヴァリエール公爵家という手もあります。トリステイン一の大貴族で影響力はクルデンホルフ大公家より上です」

「そちらを勧めなかった理由は？」

「権力がありすぎるせいで他の貴族の反発を受けやすいです。下手を打つと反ヴァリエール勢力なんてのが簡単にできそうです。それに当主夫妻が頑固な人なのでここに生まれたらそれほど自由に動けるか疑問です。ここに生まれるとここでも跡取り扱いを受けますから余計ですね」

「クルデンホルフは平気なのか？」

「あちらは余裕が有り余っているのでよほどの失態をしなければある程度放任してくれるでしょう。ヴァリエール公爵家は周囲の貴族の目もありますから余計窮屈かもしれません」

なるほど、自由に動けないのは痛いな。

「ならばクルデンホルフでいい」

「そうですか、私もその方がいいと思いますよ。それでどうします。娘がいるのですがその兄として生まれることでいいですか、弟だと年齢的に戦争に絡むのが難しくなりますし、双子ということにしてもいいですけど？」

「兄でいい」

葬式で泣いていた妹の顔を思い出す。
新しく生まれた場所で妹を大事にするのも悪くない。
ただの自己満足だが、それでもこの胸の苦しみからは逃れられるかもしれない。
名前も忘れてしまった妹、仲はよかった。
それだけにあれだけ泣かせてしまったという事実が重い。
もうどうしようもないというのに。

「では正式に契約しましょう」
契約？
「その契約とは何だ？」
「はい、あなたは私の従者、あ、人によっては使途とか徒弟とか呼びますね。になって私の代わりにあの世界の悲劇を回避する使命を帯びる。そして私はそんなあなたを守り補佐する義務を負う。そんな契約です」
ふむ。まぁ問題は無いか。
それにどのみち自称カミサマのサポートは有用だ。
なにが起こるかわからないのだから手札は多い方がいい。
できれば完全な味方であって欲しいが。
「どうすればいい」
「じっとしていてください」
すると僕の周囲に様々な図形が浮かび上がった。
魔方陣、か？
「では契約します」
柔らかく、暖かい感触。
「な、な、なにをする！」
この女、ぼ、僕にキスを！
「はい契約終了。私の名前はセラファナです。あなたに私は神の魂と意志を持って名付けます。あなたの名前はディアス。ディアス・ラグです」

瞬間、僕の身体が存在が、なにかが大きく脈打った。
「な、なにをした。それに名前だと？　どういう事だ」
「神から名前を授けられたということです。あなたにとってマイナスにはなりません。私の名を知り私に名を与えられたあなたはいつでも私の意志に触れ何事でも相談でき、時にはその助力を得ることも出来るようになりました。あ、それと先ほどもいった才能や能力ももちろん与えましたよ。他のプレゼントは向こうに行ってからにしましょう」
「他にもあるのか？」
「あって損にはならないものばかりですよ？　いらないんですか～」
「いや、ありがたくもらっておく。しかしディアス・ラグかどこかで聞いたような気もするがなにか意味があるのか」
するとよくぞ聞いてくれましたと言いたげに自称カミサマ、セラファナは胸を張った。
「私的にクルダ最強の闘士である『黒い翼（ブラック・ウイング）』のディアス・ラグです。この人強いですよ。かっこいいですし、優しいですし、身体壊さなければたぶん最強だったんじゃねって確信しています！」
「クルダ？」
「あれー、知りませんか？　影技ですよ。漫画の」
ぐらりと身体が傾いた。
なにかしら由緒ある名前かと思ったら、漫画のキャラクターだと？
「神がつける名前が、漫画のキャラか……」
「何か不満ですか？　架空だろうと空想だろうと最強キャラですよ。しかも私的イメージでマイナス要素はすべて排除してますから実は身体壊すフラグとかいうのもなしです」
「まさかその漫画のように強くなるとか？」
「もちろん。鍛えればさらにその上をいけます！　戦場の英雄なんて楽勝ですよ！」
デタラメだ。いろんな意味で。
まぁ、いい。

プラスになるのならば手札が増えたと思うことにしよう。
マイナス要素もないらしいしな。
「では、そろそろいいですか？」
「ああ、もういいよ。なんだかつかれた」
本当になんでだろう。異様に疲れた。
「後で聞きたいことが出来たら私に呼びかけてください。ああ、声に出さなくても私には通じるので独り言を呟いて見えない誰かと会話する痛い子とかいわれないですよ～」
声に出さなくても通じるだと？
「はい」
つまり僕の思考はこいつにダダ漏れ？
「もちろん！　あ、エッチな妄想とかしても別にセクハラで訴えたりしません。年頃の男の子の生理現象と理解しています」
「いつからだ！」
頭を抱えて怒鳴る僕にセラファナはきょとんとした。
「契約してからですよ。当たり前じゃないですか」
うかつなことは考えないようにしよう。
「大丈夫ですよ。言論の自由より思考の自由はさらに奥が深いのです。実はやなこと考えてても口に出さなければマナー的にセーフですよ～」
もういいや。考えるだけ無駄だ。
そういうものと割り切ろう。
「はい、私も自分に話しかけられているのでもないのにいちいち心の声に突っ込むほどマナー知らずでも暇でもないですから、それとあまりにも嫌な思考だったらこっちでブロックしますから気にしないでくださいな～」
そうだね。
うん、カミサマだもんね。
「やっと納得してもらえました～」
喜んでいる。

踊りながら喜んでいる。そんなに神と認められるのがうれしいのだろうか？

くるりとこっちに振り返りにっこりほほえむ。

「はい。うれしいですよ。神は神と認識されるのがとてもうれしいのです」

神の理論はよくわからないな。

「それでは転生を行いましょう」

「転生か」

「はい、なるべく幸せに暮らせるように祝福してあげますから安心してください。少なくとも家庭内暴力や家族不和とかとは無縁です」

それはありがたい。家族に恵まれない人生は不幸だからな。

「では、よい人生を」

僕を光が包み込み、すべての景色が消え、僕の意識は純白の光の中に落ちていった。

「ようこそ、ゼロの使い魔の並行世界へ。この世界の主人公はあなたです」

セラファナが微笑んだ気がした。

一章　カミサマとの契約（後書き）

カミサマとの対話、さらに契約のお話です。
この主人公の腹黒さが表現できていればいいです。
今回はそれほどでもなかったですが、この主人公、基本的に計算高い人です。
笑顔の裏で打算をしっかり計算しています。
皇帝モードと普通モードさらにコミュモードを自在にかき分けられるようになりたいです。
次回はいよいよクルデンホルフ大公家に待望の跡取り息子が誕生します。

追伸　内容を若干修正しました。

二章　父と母とカミサマとの対話（前書き）

すみません嘘をついてしまいました。
気がついたら調子に乗って父親と母親のことばかり書いていました。
主人公は台詞すらありません。
あ、でも一応主人公誕生しているから嘘じゃないよね。
しかし前置きが長すぎるかな。本筋に入るまで後どれくらいかかるだろう。
でもこれ削るわけにもいかないし。
ちなみにクルデンホルフ大公や先妻、母親の設定などはオリジナル設定です。
お金持ちなんだから領地経営上手いだろ。領地経営上手いなら平民とのつきあい方もわかっているんだろうなと考えてとても良識的な貴族になりました。
こうなるとベアトリスも大幅な性格の改変が入ることでしょう。
この両親に育てられて原作みたいな真似はしないだろうからなぁ。

二章　父と母とカミサマとの対話

・オルトルス・フォン・クルデンホルフ視点・

私の最初の妻はトリステイン貴族出身らしく誇り高く、そして美しい女性だった。
クルデンホルフ大公家の大公妃としての威厳を備えた申し分の無い妻だった。
しかし彼女との間に子供はついに生まれなかった。
流行病に倒れた妻は子供を産めなかったことを涙を流して詫びていた。
詫びる必要などない。
私は彼女がそばにいて支えてくれるだけで十分幸福だったのだから。
そして妻は死んだ。
大公家の当主としての政略結婚だったが、私は妻を愛していた。
妻が亡くなった翌日から私の元には後添えの話が山のように舞い込んだ。
私は怒鳴り散らして暴れたかった。
最愛の妻を亡くしたばかりの私に、今すぐ他の女をあてがうつもりか！
しかし私は懸命にこらえた。
私には大公家当主としての面子も意地もある。
妻に先立たれて醜態をさらしたなどといわれては先だった妻に合わせる顔もない。
私はなんとか大公家に取り入ろうとする貴族をやんわりと遠ざけしばらく心の傷を癒やすことにした。
その日は後から考えると運命の日だった。

大公家は多くのトリステイン貴族に援助という名目で金を貸している。

トリステイン貴族の多くが自尊心ばかりが肥大して服を着せているような輩ばかりなので領内の統治などうまく出来ようはずがない。

統治とはいかに平民とうまくつきあうかの一言に尽きると私は考えている。

平民の不安を鎮め、こちらに感謝させ、信頼させて、懸命に働ける環境をつくってその代わり税を納めてもらう。

そして税を払ってくれる以上大公家の面目にかけてその平民達を庇護し、彼らの生活が少しでも豊かになるように計らってやる。

たったそれだけのことだ。

難しい理屈や学問など必要としない。

持ちつ持たれつお互いを必要としてお互いに気を配っていれば何の問題も無い。

トリステイン貴族はそれが出来ない。

彼らは平民を家畜のごとく思っており、適当に怒鳴りつけ、痛めつければ自分のために懸命になって金を運んでくると思い込んでいる。

これでは効率のよい統治など出来るはずがない。

まして彼らの大半はおそろしいほどの浪費家で、なんの頓着も見せずに大金を無駄に使う。

結果彼らは財政的に困窮し、なんの考えもなく領民にさらなる重税を課し、

さらに統治効果を下げ、領地の経済を破壊して税収を落ち込ませ、底なし沼のような財政難に陥る。

愚かとしかいいようがない。

我がクルデンホルフ大公家の家臣たちがトリステイン貴族を馬鹿にするのもやむを得ない。

実際に大半はまさに愚か者を地でいっているうえに本人達はその自覚がないという薬のつけようもない状態だ。

私に泣きついて援助を受けても、たいがいが領地の立て直しなどには目もくれず自分の贅沢と見栄のために散財してしまうのだから目も当てられない。

馬鹿な貴族どもが家ごとつぶれようと私の知ったことではないが、貸した金は返してもらわないと困る。

それで私は家臣をたまに貴族たちのもとへいかせて借金の返済を促したり、返済計画を尋ねたりしていた。

よほど家柄がいいか、あるいは家臣たちには手のつけようもないくらい状態が悪い家には私自身が出向くこともあった。

もっとも彼らにもっと領地経営に力を込めろと説いたところで右から左に流れていくのは経験から知っている。

彼らはどうしたら領地の状態がよくなるかもわからないのだ。

そもそもなぜそんなに悪化したのかさえ理解していない馬鹿貴族が多い。

私は今日そんなつぶれかけの貴族の屋敷を訪ねて、丁寧にわかりやすく領地を立て直す必要性と有用性を説いてきたところだ。

馬鹿貴族は笑顔で神妙に話を聞いていたが何の感銘を受けた様子もなく、さらなる援助を要求してきた。

厚かましいにもほどがある。

見切りどきだなと私は考えた。

あの貴族は近いうちに経済難からつぶれるだろう。

そのときのために彼の借金は王国の借金であることを王家に認めさせなければならない。

そうしなければ彼がつぶれたとき私は借金を平然と踏み倒されるだろう。

交渉はスムーズにいった。なにしろこれが最初ではないのだ。

トリステイン貴族を庇護する義務をトリステイン王家がもつのだから彼らが借金を払えなくなったときにその肩代わりをするのは王家以外あり得ない。

当然のことだ。
もっともおかげで最近の私は王家から結構嫌われている。
金の亡者などと陰口をたたかれたりもしているらしい。
私としては貸した金を返してもらうのは当然なので気にはしない。
むしろ返せない方が悪いと居直っていた。
そんな心がささくれ立つような会談が終わり、王宮を後にしようとすると見知った顔を見かけたので懐かしさから声をかけた。
「お久しぶりです。セレヌンティア伯爵。お身体の具合が優れないと聞いていたのですが」
相手はかつて一度、金を貸したことのある貴族だった。
領地で新しい作物の栽培を促進し、結果的にそれに失敗して多額の借金をつくり私に援助を求めた貴族だ。
もっとも彼は他の馬鹿貴族とは異なり私から引き出した援助で領内を立て直し、やがて細々とだが新しい作物の栽培にも成功していた。
返済はもう済んでおり、最近は顔を合わすことも滅多になかった。
理由としては彼がもう高齢であり、伯爵家当主の座を息子に半ば譲っていたことがある。
老伯爵は老いを感じさせない明るい笑顔を見せた。
「ほっほ、クルデンホルフ大公、これは久しぶりですな。最近は息子に任せきりだったのであまりご挨拶も出来ず面目もないことです」
「いえいえ、伯爵がお元気であればそれで私にとってはうれしいことです」
お世辞ではない。
この老伯爵は私が心を許せる数少ないまっとうな貴族の一人だった。
友人とさえ思っている。
「今日はの。正式に息子に伯爵位を継がせるために来たのだが、うれしい再会もあったものよ」
「ほう、それはおめでとうございます」

本心から家の相続を祝福した。
相続者のいない家は取りつぶされてしまうのだから、その相続が無事に出来ることは貴族にとってなによりも喜ばしいことだ。
残念なことに私にはまだ子供はいないのだが。
妻が子供を残してくれていたら。
不意にそんなことを考えた自分を恥じた。
あれほど死の間際まで子供を産めなかった己を悔いていた妻に向かって私はなんという悪しきことを考えるのか。
内心で暗澹たる気分に浸っていると、老伯爵は優しい瞳でこちらを見つめた。
「奥方のことは聞いておるよ。残念な事であったな」
「はい」
妻の話題になると私の口はとたんになにも言えなくなるようだった。
最近では皆が妻の話題を避けるようになった。
よほど私は妻のことになるとひどい顔をしているに違いない。
「後添えの話を蹴ったことも聞いた」
「そんな気持ちにはなれませんでしたので」
「そうじゃろうな。わしがもう少し若ければ思わず口説きたくなるくらいに奥方はいい女じゃった」
不思議とこの老伯爵がそんな下世話な冗談をいっても不快にならない。
他の馬鹿貴族の発言なら私は決闘を挑むだろう。
「じゃがな。おぬしは大公家の当主じゃ。いつまでもこのままというわけにはいくまい」
その言葉が胸に突き刺さった気がした。
他の多くの貴族が言葉をかえてそのようなことを私にいってきたが、この老伯爵がいうと重みが違う。
年の功というやつだろうか。

老伯爵の言葉になにも言い返せない私をどう見たのか、彼は気安げに私の肩を叩きいった。

「そうじゃ、なんならこの老いぼれの相談事に乗ってくれまいか？」

なんの相談だろう？

もはや伯爵家の財政は健全化しているはずだから援助の申し込みではないだろう。

とすると新伯爵の後見、あるいはそれとない政治的支援を望まれているのだろうか？

とりあえず私は承諾しては伯爵家の屋敷に赴いた。

伯爵家の屋敷としてはいささか質素だったが、この老人が無駄な浪費を嫌う人物であるのは承知しているので私は特に違和感を感じなかった。

客間に案内され、意外にも上質なソファーに内心驚いていると老人はいささか苦笑したようだった。

「客をもてなす場所くらいはそれなりに金をかけておる」

しまった。どうやら顔に出ていたらしい。

「今日の相談というのはの。わしの娘のことでの」

娘、セレヌンティア伯爵家の娘は三人いたはずだ。上二人はすでに嫁いでいるが末の娘はまだ嫁いでいなかったな。まさか。

「末の娘なのじゃがな。歳をとってから生まれた子なのでいささか甘やかしすぎた。まったく貴族の娘だというのに自分で料理をしたがるわ。裁縫をやらせればどのメイドよりも上手いだとか自慢しだすわ。パーティーに誘えば仮病を使って欠席するわといささかわがままに育ってしまっての」

どうやら子供の愚痴をいいたかっただけのようだ。

一瞬警戒してしまった自分が恥ずかしい。

「器量はいいんじゃがの。人当たりもいいし、性格だって悪くはない。しかしそんな有様だからどうも変わり者扱いされておっての」

確かに変わっているだろうと思ったが口には出さない。貧乏貴族の娘ならともかくセレヌンティア伯爵家の娘が料理に裁縫？　あり

得ない。
「おお来たようじゃ。よかったらおぬしからもなんかいってやってくれ」
なにかいってくれといわれても初対面の女性になにをいえというのか？
老伯爵の真意がわからずに困惑していると扉を開いて一人の女性、いや少女が現れた。
明るい金色の髪。
優しげにほほえむ蒼い瞳。
唇は小さく形よく笑みの形になっていた。
まるでその場の空気を入れ換えたような圧倒的な存在感を私は感じた。
まるでその場だけ春の草原に作り替えられたようなさわやかで健康的な美がそこにあった。
まだ十代、少女と言っていい年齢だろう。
背丈はあまり高くなく体つきは華奢で腰など抱きしめたら壊れてしまいそうなほどだ。
私はこの日運命に出会った。
少女は柔らかくかつ元気よく挨拶をした。
「はじめまして、私はエレーナ・イシス・セレヌンティアと申します」
私はまるで魔法にかかったように彼女の元にひざまずき、熱に浮かれたような口調で求婚していた。
彼女は唖然としていた。
後で聞いた話になるが後ろでは老伯爵もあまりの私の豹変ぶりに呆然としていたそうだ。
その後、彼女は特に問題もなく私と結婚した。
多少娘を持つ貴族達が騒いだらしいが、そんなもの私たちには関係ない。
老伯爵はこれで肩の荷が下りたと笑っていたし、息子の新伯爵も

素直に私たちを祝福してくれた。
今は亡き妻が、私をこの少女に逢わせてくれたのだとなんの疑いもなく私は信じた。
この少女を愛することが亡き妻への裏切りとは思わない。
なぜなら二人はまるで違う美しさを持った女性だったからだ。
亡き妻は貴族の妻はこうあるべきという模範を形にしたような美しく聡明な女性だった。
そしてこの新しい妻は、貴族の肩書きなどなんの束縛にはならないと自由に翼を羽ばたかせる自由な少女だった。
正反対の女性にどうやら一目惚れをした私は、妻の墓に向かって新しい妻を迎えたことを報告し、二人で育てた大公家をさらに育て私の子供に託すことを誓った。

・エレーナ・イシス・フォン・クルデンホルフ視点・

いまでもあのときのことを思い出すと笑い出したくなる。
私の夫は私を一目見た瞬間なんとまるで王族にたいするかのようにひざまずき私に熱烈な求婚をしたのだ。
唖然とした。
呆然とした。
と同時におかしくてたまらなかった。
私は目の前の男性が、年頃の娘達の注目の的であるクルデンホルフ大公であることを知っていたし、私が貴族社会でどれだけ風変わりで変わり者と笑われているか知っていた。
その変わり者に向かっていきなり挨拶も自己紹介もなしに求婚したのだ。
貴族達が目の色を変えて娘を嫁入りさせようと画策している大公家の当主がぜひに私を妻に迎えたいと懇願しているのだ。

私は大公家なんかになんの興味もなかった。
大公家に嫁入りし、大公妃となることを夢見る同世代の友人達を冷めた目で見ていた。
その私に求婚したのだ。
私はその場を上手く取り繕い。後でお父様から断ってもらおうと考えていた。
甘かった。
お父様はどうやら最初から私を大公殿下の妃にと考えて対面させたらしい。
予想外に食いつきがよかったとお父様は笑っていた。
そして私はお父様から大公殿下の人柄について説明を受けた。
とても聡明で優しく、大公として申し分がないだけでなく一人の男性として信頼が出来るとほめあげた。
その中で私が興味を引かれたのは彼の領地の統治理念だった。
平民たちと持ちつ持たれつ。互いに信頼関係をつくり互いに相手のことを気遣い手助けをして領地を発展させる。
そんなことを考えるトリステイン貴族がどれほどいるだろうか。
まずいないだろう。
彼らは私から見ると醜悪なほど貴族であることに自尊心をふくれあがらせ平民をまるで奴隷のごとく扱っている。
私からすると頭がおかしいとしか思えない。
確かに平民は非力だ。そもそも魔法が使えないからメイジである貴族に勝てはしないだろう。
しかし彼らが団結して、貴族に愛想を尽かしその領地を去った場合貴族達はどうするつもりなのだろう？
残るのは無人の領地。無人の領地が税を払ってくれるわけがない。
そして貴族の収入源は絶たれる。足場が崩壊する。
そうなって没落した貴族も実際に存在する。
しかし大公殿下は違うらしい。
平民と協力して領地を発展させる。

建前だけかもしれないが、その建前さえ持たない貴族が多いのだ。
私は彼に興味を持ち、しだいにお父様やお兄様、結婚先からわざわざ駆けつけたお姉さま達の説得におされ、ついには結婚を承諾した。

内心では怖かった。
こんな私が大公妃としてやっていけるのか。
笑われるのではないか、相手にされないのではないか、大公殿下もそのうち熱から冷めて愛想を尽かすのではないか。
そんな不安は大公殿下との結婚式で霧を吹き飛ばすような歓声が吹き払ってくれた。
領民達がこぞって私たちを祝ってくれる。
祝福してくれる。
これほどうれしいこととは思わなかった。
私はきっと領民達のためになる大公妃になろうとそのとき心に誓った。
お父様もなにかあったら婿殿に頼れ、それでもだめならわしらに遠慮なく頼れといってくれた。
不安はある。
けれど私はそんなものに負けるほど弱くも繊細でもない。
貴族社会でさんざん変わり者と後ろ指を指されても平気な顔で我が道を歩いてきた私だ。
大公妃の道ぐらい笑顔で歩いてみせる。
そして私は夫と共に大公家という人生を歩き始めた。
そして数年。周囲の期待に後押しされるように私は新しい命をお腹に宿した。
それを知らせたときの夫の喜びようは笑いをこらえるのに苦労したほどだ。
まだ無事に生まれてもいない。
男か女かもわからない子供のためにいくつも名前を考え、赤子用

の衣服やベッドを用意し、子育ての心得などを子供をもつ家臣に相談していたりしていた。

そして私は不思議な夢を見るようになった。
夢の中で私は金色の髪の少年を育てていた。
その子はとても利発で勇敢で、優しかった。
その子が成長するとその子はその才能を伸ばし、様々な活躍をし始めた。
まるで物語の英雄を見ているかのようで私は夢の続きを楽しみにしていた。
そう、この夢は続いているのだ。
数日に一回くらいの割合で少年の夢を見る。
同じ夢の繰り返しの日もあればその続きの日もあった。
私の夢の中の私の息子の成長と活躍を楽しみにしていた。
ある日私はその夢のことを夫に話した。
ほんのたわいもない世間話のつもりだった。
子供が生まれるのが楽しみで、生まれてきた子供の夢を見てしまうほどに浮かれている自分を夫に少し笑って欲しかったのかもしれない。
自分でも度が過ぎていると思わなくもなかったから。
しかし意外なことに夫は笑わなかった。それどころか深刻な顔をして私に念を押した。
「本当に金色の髪の少年の夢を見ているのだな？」
「はい、そういっているでしょう？　どうしたのです？」
夫はしばらく悩み込んだかのように黙り込んだ。
私は不安になった。たかが夢の話なのになぜこんな深刻な顔をするのだろう？
「……私も同じような夢を見続けている」
夫の言葉に私はいささか不謹慎ながら夫の正気を疑った。
「同じ夢をですか？」

「ああ、金色の髪の少年が私の息子として成長し、活躍していく夢だ」

私たちは言葉もなくお互いを見つめた。お互いに相手は、そして自分は正気なのかと疑うような目だった。

「まさか始祖の神託などということはないだろうな……」

夫は恐れるかのように声を震わせた。

私たちはそれほど熱心なブリミル教徒ではない。

領地内の信仰を認め、寄進などもかかさないがそれはブリミル教徒の総本山ロマリアを半ば恐れたからだ。

彼らの機嫌を損ねれば下手をすれば異端者の烙印を押され問答無用で処断されかねない。

もし神託なのだとしたら。

この子はとてつもなく大きなものを背負って生まれてくることになる。

大公国の跡取りどころではない。

場合によっては世界の行く末にすら関わる大難がこの子に降りかかるかもしれない。

私は不安になって自分のお腹に手をあてた。

もう十分大きくなったお腹の中に私の子供がいる。

この子はあの夢の中の少年なのだろうか？

そして私たちがこの夢を見る理由はなんなのか？

私たちは答えを出せずこのことはけして他言しないことを誓い合った。

こんな事が外に漏れたらなにが起こるかわからない。

私は可能ならば神託などあって欲しくなかった。

私の子供は普通に生まれ、普通の子供として育ち、将来は大公国を問題なく継げればいいのだ。

神託の子や英雄などと呼ばれる子供になって欲しくない。

そんな名前をつけられた子供が平坦な道を歩けるはずがないからだ。

私はあまり信じてもいない始祖に祈った。
どうか私たちの子供を取り上げないでください。
どうかこの子に普通の幸せと人生を与えてください。

ついにその日が来た。
それは運命の日だった。
私は必死にただ普通の子供に産まれて欲しいと願い。
そして息子を出産した。
私と同じ金色の髪と青い目の男の子。
あの夢と同じ男の子。
夫と二人で跡取り息子の誕生を喜びながらも、内心に黒い影がかかるのを自覚していた。
あんな者はただの夢だと。
そう言い切れたらどれだけ楽か。
昨日私と夫は同じ夢を見た。
成長した金色の髪の少年は人々の歓声を浴び、英雄とたたえられていた。
その夢の現実感は私たちを打ちのめした。
もうただの夢の話と笑い飛ばすことは私たちには出来なかった。
そして運命はさらに私たちに歩み寄ってきた。
夫と二人生まれたばかりの赤子を抱いて今後のことを話し合っていたとき不意に声が響いてきた。
『選ばれた子供を産んだ人間達よ』
頭の中に声が響き、私は腕の中の赤ん坊を思わずきつく抱きしめた。
私の息子は少し苦しそうに泣き出した。
夫は頭を押さえてその声に応えた。
「何者だ。これは魔法か？」
『我はいと高き座にありしもの、その座よりおまえ達を見守り慈しむもの』

声は若い女性のようにも聞こえたがその声に込められた威圧感と高貴さに私たちは身動き一つとれなくなった。
「おまえは、誰だ」
夫が顔を蒼白にさせて声を振り絞る。
『我は汝達の定義するところの世界の外に在りしもの。ある者は神と称する』
神……。
「まさか始祖ブリミルか！」
『我が名はブリミルにあらず。また何人も我をブリミルと呼ばず。我は汝らに名を告げたこともなく。名を称えられたことない』
「名もない神、いや名も知られぬ神というか？」
『我は世界の悲劇を食い止めるために一人の人間を汝らの世界に遣わした』
やめて！
『汝らの息子は世界の悲劇を回避する鍵である』
そんなことはいわないで！
『その子供はいずれ運命に導かれ、おのが使命を果たし世界の悲劇に立ち向かうであろう』
「私の子供を取り上げないで！」
私はついに叫んだ。
赤ん坊をけして放すまいと胸に抱き、聞こえてくる声にあらがう。
『人間よ。安心するがいい。その子供は汝らの子供にして汝ら以外の子にあらず。ただ使命を帯びているのみ』
使命なんていらない。
私の子供にそんなものは必要ない。
声はさらに続く。
『悲劇を回避する鍵を生み出した人間達よ。汝らにも使命はある』
「それはなんだ？」
夫は私のそばで私と子供を守るように杖を構えていた。
『その子を守り、慈しみ育てるがいい。その子を愛すれば愛するほ

ど鍵は力を身につけ己に降りかかる厄災を打ち払うであろう。けして間違うな人間達よ。その子は強く育たねばならない。そうしなければ悲劇の波はその子を殺すであろう』

「悲劇とはなんだ！」

『まだ起こりえぬ悲劇を語ることは許されない。注意せよ人間達。その子は悲劇を回避する鍵。いかに守りいかに遠ざけようとも悲劇の波はこの子を襲う。この子が生き延びるには悲劇を回避し、それに打ち勝つのみ。それがこの子供の使命であり運命である』

いやだ。

私の子はそんな大それた使命なんていらない。

『我は夢の中で警告し、教えた。その子供の使命と運命を』

いやだいやだいやだ！

『我はその子供の名を汝らに告げる。その子供はディアス・ラグの名を継承せしもの。その子供がその名と共にある限り、我はその子供を守り慈しむだろう』

ディアス、ディアス・ラグ。

夢の中で歓声を受けていた英雄の名前。

それがこの子の名前。

私の意識が急激に切り替わった。

この声は今この子を守るといった。

ディアス・ラグの名前と共にある限りと。

「この子にディアス・ラグの名前を与えればあなたはこの子を守ってくれるのですか？」

『我はそう契約した。その子供はディアス・ラグの名前を継承し、おまえ達の子供として生まれることを選んだ』

この子が、私たちを選んだ？

「それはこの子が自分からその悲劇を食い止める役目を引き受けたということか？」

夫が尋ねた。声は肯定した。

『その子供は自らの運命を受け入れ、その運命に立ち向かうために

汝らの子供として生を受けた』

運命に立ち向かうために、私たちの子供になることを選んだ。

この小さな息子が私たちを選んだ？

『人間達よ。悲劇を回避する鍵を生んだ人間達よ。汝らの使命は汝らの子供により願われ託された願いである。慈しみ育てよ。やがて来る災厄に負けない強い子に育てよ。汝らはそれが出来ると汝らの子供によって見込まれ信頼された。人間達よ。使命を受け入れるか？』

受け入れるか？　受け入れなかったらどうなる？

「断ったらどうする？」

『その子供を回収し、次にふさわしい親を探す』

「わかりました」

私の言葉に夫が驚いたように振り返った。

「この子は私たちが責任を持って育てます。けれど悲劇を回避するためだとか、使命だとか運命など関係ありません。この子は私たちの子供です。私たちに出来る全力でこの子を守り育てます」

『使命を否定するのか？』

「それを決めるのはこの子です。この子が成長したときその使命に従って悲劇とやらに立ち向かうなら私たちはできる限り我が子のために力になりましょう。けれどこの子が使命など知らないというならば私はこの子の好きにさせます」

声はしばらく沈黙した。

『子の意志に任せるか。かまうまい。その子が使命を受け入れようと否定しようと我は我の契約を遵守する』

「この子の名前を聞いてくださいますか？」

『聞こう』

「この子の名前はディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ。クルデンホルフの長子にして跡取り息子です」

『承知した。その子がその名前と共にある限り、我はその子に祝福を与え加護することを誓おう。よい子に育てるがいい。気高き母親

とそれを守る父親よ』
声はそれっきり聞こえなくなった。
私はほっと息をつき泣いている息子、ディアスをなだめた。
「よかったのか？」
夫がそう尋ねてくる。
「私は私の子供が取り上げられるなんて許容できません。要はこの子を立派に育てればいいのです。後はこの子が自分でどうとでもするでしょう」
夫は納得したような出来ないような中途半端な表情で肯いた。
けれど私の胸の中には別の想いがあった。

そう、強く育てよう。誰よりも強く、賢く、優しく。非の打ち所のないように。
その上でこの子に使命も運命も食いちぎらせてしまおう。
別にこの子があの神を名乗るもののいいなりになる必要なんてどこにもないのだから。
私はそう心に誓った。
神の使命にも運命にも負けない子供に育てようと。

・セラファナ視点・

いやぁまいったね～。
あの両親ってば意外に強情だよ。
使命を受け入れさせるのに手間取った。
いっそなにも知らせない方がよかったかな？
まぁ、やっと生まれた子供が可愛いからだろうけど。
なにやら画策しようとも考えているようだけどそうはいかないのです。

ディアスはなにしろ使命を受諾して私と契約しているのですから、両親がごねたくらいで契約は反古に出来ません。
巻き込まれ型主人公のごとく勝手にやっかいごとに巻き込まれて気がついたら使命を果たしていたというのがオチでしょう。
しかしあの口調は、本当に疲れるよね。
なんで他の神仲間はあんな態度が四六時中とれるんでしょう。
しかし改めてこの世界の中に入ってみると変な世界だよね。
まず精霊の力が異様に強い。これなら魔法が発達するよね。
けど、なんだか少しおかしい。
なんだか精霊の力のバランスが崩れているような気が？
うん、ディアスが成長したら、彼に何とかさせましょう。
試しに話しかけてみたけど、生まれたばかりじゃまだ意志がはっきりしていないのかな？　返事がなかった。
もう少し成長してから話しかけよう。
ふふふ、私のディアス・ラグ育成計画に勝てるかな。お母さん？
この私が見事ディアスを悲劇を覆す者として立派に育て上げてくれる。
カミサマ舐めるなよ人間め！
さーて、今から育成プランの検討と、プレゼントの選択でもするかな。
さーてどう育てよう。
美少年を自分の思うまま育成する。ロマンだね～。

二章　父と母とカミサマとの対話（後書き）

主人公のご両親のお話でした。
ご両親、今のところ主人公の使命に否定的です。
なぜか？　誰だって可愛い息子に苦難の道を歩んで欲しくないでしょうともさ。
しかし我らがカミサマ、セラファナが平穏ルートなど許すはずもなく、
主人公は巻き込まれ型主人公か、
覚悟を決めて自ら特攻する主人公になるしかないのです。
さてどんなタイプの主人公にするか、ちょっと悩んでいます。
でもどう見ても熱血型じゃないから。
選択肢はあまりないかも。

追伸　内容を若干修正しました。

三章　クルデンホルフの天才児（前書き）

なんというか前置きが長い物語だと自分でも思います。
今回は前置きのまとめのような感じかな？
前回のカミサマの神託もどきの反応やらディアス君のチートっぷりとかのお話です。

三章　クルデンホルフの天才児

・オルトルス・フォン・クルデンホルフ視点・

我が息子、ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフの誕生から数年。

あの不思議な夢と声に関しては妻と二人徹底して秘事とした。

我々の心配をよそに息子は健やかに育ち、普通の子供となにも変わらずに育っていった。

普通に笑い、遊び、怒り、泣く。実に普通の子供だった。

なにかしら特殊な子供なのではと身構えていたが、その心配は杞憂だった。

もしかしたらこのまま何事も起きずに平穏無事に育ってくれるのではと妻と二人安心したものだ。

しかしこの子が文字を覚え始めてから、徐々に私たちの不安はよみがえってきた。

ディアスはあっという間に文字を覚えると徐々に本にのめり込んだ。

それも子供が好むような絵本や物語ではない。

いやそういうものも読んでいたが、ある日ふと目を離すと息子は屋敷の図書をあさり、幼い子供がまず興味を示さないような本。政治や経済、歴史や軍事などの本を読みあさっていた。

理由を聞いてみると、はやく大きくなって父さまの役に立つんだと可愛いことをいっていたが……。

試しに様々な話題を振ってみた。

最初は簡単なものから、徐々に大人相手に話すような内容にあげていくと我が息子はたまに考え込んだりしたがそれに的確に答えて

きた。
どうやら本の内容を確実に知識として蓄えているらしい。
そう確信するのにたいして時間はかからなかった。
そしてこの子はどうやら天才らしいと妻と二人結論に至ったのは、五歳になったディアスに試しに魔法を教えてみたときだった。
最近は一般知識に飽きてきたのかもっぱら魔法書のたぐいを読んでいると聞いて試しに魔法を教えてみることにした。
時間をあけて私自ら魔法を教える。
本当はもう数年たってから専門の教師をつける予定だった。
ただ私は試してみたかった。
試して安心したかったのだ。この子は普通の子供だと。
しかしこの子は普通は数週間かけるはずの最初の杖との契約にわずか数時間で成功し、初めて使う魔法を成功させた。
いくつかの基礎的なコモンマジック。そして系統魔法の初歩。
驚いたことに一度も失敗することもなく、系統魔法もすべての系統を成功させた。
得意系統は水かあるいは風が得意そうだった。おそらくは風の方が強いだろう。
すでにドットクラスとしては破格の魔力を持ち、後しばらく訓練すればすぐにもラインクラスになりそうな勢いを見せた。

いや、これはそれどころではない。
将来的には達人レベル、スクエアクラスにもなり得る魔法の天才だった。
私は息子の才能を喜ぶよりも嘆いた。
あの声の言葉は本当だったのかもしれないと。
この子は確かに将来英雄にもなり得る天才児だった。
私は周囲の人間の手前息子の魔法の才能を喜んで見せた。
まさか親が我が子の才能を喜ばないなどということがあるわけがない。

もしそんな態度を表に出せば周囲は私がこの子を疎んじていると考えるだろう。

大げさに喜んで見せながらも私の心は重かった。

妻にも相談した。

二人で話し合った結果、たとえこの子がどれだけの才能に恵まれようとも普通の子供と変わらずに接し、愛していこうと二人で改めて誓い合った。

あの声の言葉が現実になるかどうかまだわからない。

だがこの子は間違いなく普通の子供ではない。

控えめにいっても天才児。

私の本心をあけすけにいえばあきらかに規格外の才能の持ち主だった。

おそらくその才能故に悩み、苦しむときがくるに違いない。

人は突出した才能を表面上は称えても裏では妬み、憎むこともあるのだ。

二人でこの子を守っていこうと決意して、私はまずこの子に教え諭した。

「ディアス。おまえは間違いなく普通の子供より賢く、魔法の才能もすばらしい。皆のいうように天才といってもいいくらいだ。しかしな、優れた才能を持つ者はそれと同じくらいの試練を課せられる。強い力を持てばそれには責任がついて回る。間違っても自分の才能におごってはならない。おまえは天才かもしれない。けれどおまえは子供で、あくまでもただ一人の人間に過ぎない。くれぐれも才能と力に増長し、それにおぼれてはならない。おまえがもし自分の才能に酔いしれおごりを見せたなら私も母さんもおまえを叱る。そのときに今の言葉を思い返し自らを振り返るんだ。いいな、優れた才能はおまえに試練を与える。強い力はおまえに重い責任を背負わす。くれぐれも忘れてはならない。いいな？」

小さなディアスはきょとんとしていたが神妙な顔で肯いた。

まだこの子には理解できないかもしれない。

賢いとはいえまだ小さな子供だ。
だがこれはいっておかなくてはならない。
忘れそうになったら何度でも言い聞かせなければならない。
私たちはこの子の優れた才能を正しく伸ばし、この子を守らなくてはならない。
あの声の通りに動いている自分を苦々しく思いながらも私にはそうするしかないのだと理解していた。

たとえこの子の将来になにが待ち受けていようとも私たちの大切な子供だ。
間違った道に進ませるわけにはいかない。
この子のために。
あの神を名乗る者の言いなりになるのではなく。ただこの子のために。
私はこの子を正しく導くことの責任と困難を思い。
自分に課せられた責任の重さを理解した。
英雄の親などくそくらえだ。
だが目の前にいる才能に恵まれた子供にとって立派な親であり、人生の師であらなければならない。
すべては我が愛する息子のために。

・ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ視点・

あの馬鹿女め！　なにが両親には事情を話しておいたからね、だ！
道理でときおり僕を見る目が不審そうなはずだ。
将来の英雄。
悲劇を回避する鍵。
そんなことを神を自称する謎の声に聞かされれば下手すれば気味

悪がられて疎まれかねないんだぞ！

僕はごく普通に子供として振る舞い。

五歳まではごく平穏に暮らしていた。

僕が微妙に異変を察したのは父さまがあきらかに僕の知識を試すような会話を持ちかけたときだが、まさか本好きの特性が悪影響を与えるとは思わなかった。

見知らぬ世界の学問や知識や歴史を好奇心から調べまくったのはまずかった。

しかし持ち前の好奇心と読書欲には勝てずに普通の子供のように遊びながらも本を読む時間はきっちり確保していた。

これだけはやめられないんだよ。

絵本だけじゃ満足できないんだよ。

仕方ないじゃないか、元々僕は本を読んでいれば幸せな活字中毒患者なのだから。

子供らしく振る舞うことに関してはなにもボロを出さなかった。

というか意識しなくてもどうやら僕の精神の一部は幼くなっているらしく、ごく自然に子供として振る舞えた。

セラファナに確認したところどうやら精神が身体の影響を受けて幼くなっているのだという。

もともと赤ん坊として生まれて育ってきたから普通に子供というか幼児らしい精神を持ち合わせているらしい。

あくまで引き継いだのは才能や知識なのだという。

つまり頭でっかちなだけの幼児なのだという。

これから身体と精神も鍛えてくださいねとお気楽にいった馬鹿女を殴ってやりたい。

なぜ秘密をばらした。

こんな事を打ち明けるメリットなどない。

普通にただの天才児扱いにすればよかったのだ。

盛大なバックストーリーを余計につけて僕の人生の難易度を上げ

やがって！
しかも本人は手際よく僕の世話を焼いた気分でいるから余計腹が立つ。
余計なことをするな！
おかげで僕の予定が狂った。
おそらく両親は僕を普通の子供としては見ないだろう。
あるいは疎まれるかもしれない。
最悪だ。
そしてなにを思いついたのか父さまが魔法の訓練をしようと言い出した。
確かに最近は暇だから魔法関連の本を読んでいたが、まずかったのだろうか？
どのくらいやればいいのかわからないので覚悟を決めてリラックスしてけして全力を出そうなどとは思わずに訓練に望んだ。
まず杖を渡されて杖との契約というものをやらされた。
簡単な説明を受けたが本で読んだので知っている。
杖を自分の魔法発動体として活用するために自分の魔力になじませ自分との間に魔力のつながりを持たせる儀式だ。
一瞬でこなしたらまずいような気がして、体感時間で二時間ばかり努力するふりをして成功させた。
なぜか驚かれた。
まずかったのだろうか？
杖というか指揮棒みたいなものを手に、次は魔法を実践する。
最初に初心者用のコモンスペルというものをやったのだが、二時間も努力し続ける演技に疲れていてつい一回で成功させて終わらせてしまった。
またも驚かれた。
というか半分予想通りという顔をされた。
そして次は系統魔法。
火、水、風、土。

すべて出来た。
火の玉が飛び、水の球体を浮かび上がらせ、風の刃を放ち、石の弾丸を放った。
あきらめたような顔でその様子を眺めていた父さまは。
「おまえは風か水が得意のようだ。訓練すればすぐにラインクラスになれるだろう」
といった。
メイジはそれぞれ得意の属性が一つあり、基本的にその才能が伸びやすいらしい。
そして我が父は続ける。
「おまえは魔法の天才といっていいだろう。ここまで飲み込みのはやい子供を私は知らない」
冷や汗が流れた。
どうやらやり過ぎたらしい。
我が父上はどこかあきらめたような目をしてこちらを見つめた。
これは、まずいのでは？
内心びくびくしている僕の頭を優しくなで我が父上は優しくいった。
「おまえは努力すればスクエアクラスにもなれるだろう。きっと私よりも魔法の才能がある。これからも努力しなさい」
そういってくれた。

が、僕の内心は穏やかではない。
僕が四系統すべての魔法を一度の失敗もせずに成功させたことと、我が父上殿が「将来はスクエアクラスになれる」と太鼓判を押したことが屋敷中にあっという間に広まり、もともと賢い坊ちゃんだった僕の評価はクルデンホルフ大公家の天才児と呼ばれるほどになった。
いや、まだスクエアになったわけじゃないし。
いくらなんでも持ち上げすぎだろと辟易しながらも、褒め称えて

くれる使用人達に愛想よく応対していた。
しかしあのカミサマいわく『経験値百倍』と『努力のしぞんはあり得ない』がある以上、確かに努力すれば達人レベルといわれるスクエアクラスにもなれるだろうが。
両親がどういう対応をしてくるかが僕の頭痛の種だった。

おそらく杖の契約はもっと手こずるのが普通なのだろう、初めて使う魔法も何度も失敗してみせるくらいすべきだった。
とどめは四系統すべてつかってしまったことだ。
普通は自分の得意の系統だけか、他は使えても最初はごく弱い効果しか出せないらしい。
かえりみて僕はため息しか出ない。
四系統普通に使ってしまった。
我が父上殿が「風か水が得意」といったのはあくまで比較しての話だろう。
おそらく僕は四系統すべて同じように使えてしまう気がする。
これで僕が普通ではないとはっきりしたはずだ。
両親がどう出るか、最悪ここを逃げて一人で生きていくことも視野に入れなければならないだろうか？　そうなったら極悪難易度な人生は確実だろう。
そのように内心びくびくしていると翌日我が父上殿の呼び出された。
そしてこんこんと説教された。
「優れた才能には困難な試練が、強い力には重い責任がついてまわる」
おごってはならない。
間違えてはいけない。
あくまで僕はただの子供で、一人の人間でしかない。
どれだけの才能があろうとも、たとえ天才と呼ばれようとも。
僕は即座に返答できなかった。

これはどう捉えるべきだ。
どうやら我が父上殿は本気で僕のことを心配しているのではないか？
優れた才能と馬鹿げた使命を背負った我が子が増長し、人の道から外れることがないように戒めているのではないか？
思考しろ、冷静に、客観的に。
知恵と知識と直感を元に思考を組み立て、それは一本のルートを見いだす。
どうやら両親は僕を疎んじる気はないらしい。
あくまでも自分たちの子供として育てたいと思っているのだろう。
使命についてはどう思っているか不明だが、少なくとも僕に悪感情は抱いていないようだ。
それならば話は早い。
そのときが来るまで僕は両親の庇護のもと自分を鍛え、普通に天才児として育てばいい。
なるべく使命のことには触れずに、才能を伸ばすのも両親の期待に応えるために努力していることにすればいい。

さすが僕の父さま。物わかりがいい。
そういえばセラファナも家庭不和などあり得ないといっていたな。
少なくとも僕は両親に愛されているのだろう。
ふふふ、ならばその期待に応えようじゃないか？　両親自慢の天才児として自分を鍛え、来るべき時に備えさせてもらおうじゃないか。
愛していますよ。父さま。母さま。
あなたたちが僕を愛してくれる限り。

・セラファナ視点・

どうやらうまくいったようだ。

あれからしばらくしてディアスの自我がはっきりした頃に私が両親に「おまえ達の子供は将来世界を救う英雄だ」的なことをいったと伝えたらひどい剣幕で怒られた。

だ、だって普通こういうものは神の啓示的なあれが両親にあったりするのお約束でしょう？

そう言い訳したら「僕を殺したいのか馬鹿女！」と罵られた。

あう。

私はあなたが今後やりやすいようにしようと思っただけなのに。

傷ついちゃいます。

天罰落とそうかな？

ディアスは「これで僕の人生の難易度が上がった」と嘆きその理由を語った。

特殊な事情をもち、人間離れした才能を持つ子供を常人である両親はどう思うか？

気味悪がらないか？

自分の手に余ると思わないか？

なによりそんな特殊な子供を恐れない保証があるのか？

私のやったことは「あなたたちの子供は普通じゃありません。怪物のようなものです」と伝えたにも等しいらしい。

一言もなかった。

そういわれればそうかもしれない。

そこまでの悪印象を与えたら家族に恵まれるという祝福もどこまで効果があるか……。

これはいざとなったら干渉する必要があるかもしれないと慎重に見守っていたら、なんとも人のよいご両親は「どれだけ才能があろうとも自分たちの子供」と結論を出したらしい。

ほっと一安心。

妹も生まれたことだし、下手すればディアスが抹殺か追放されるところだった。
危なかった。
今後人前に出るときは気をつけよう。

よく考えたらそこまで深い事情を話す必要はなかった。
ただ夢の中で彼の名前を告げて、彼の名前をディアス・ラグにするように意識を誘導するだけでよかったのに。
初めて人間を仲介して世界に干渉することに浮かれてとんだ失敗をするところだった。
そう私が人間を従者にして世界に干渉するのは実はこれが初めてなのですよ？
初めてなのだからいろいろ失敗するのは仕方ないですよね。
まぁディアスにはいいませんが、教えたらきっと怒るし。
しかしディアスは順調に才能を伸ばしていますね。
やはり最初に強力な能力を埋め込むより、自分で才能や能力を開花させた方がなじみがいいですね。
私も楽ですし。
実は転生先に強力な能力を引き継ぐなんて高等技術、私はできる自信がなかったんですけど。
最低限のサポート能力でもディアスは十分育っていますね。
ああ、これもディアスにはいえませんね。なにしろ初めてですからね。
初心者マークでもつけるべきでしょうか？

でもディアスと契約したおかげで私も世界に干渉できますし、その気になれば今のディアスに能力を付け加えるのは可能ですし。
難しいのは転生時に持ち越す技術ですからね。
普通転生ってすべて初期化しておこなうものが基本ですから、知識や能力、それも破格のものを引き継ぐのは難しいのです。まぁそ

のうちに出来るようになりたいですが。
まぁ、プレゼントはもう少し育ってからでいいでしょう。
楽しみです。
私の育成計画。
こんなところで挫折するほど脆くはなかったのですよ。はっはっは！

・エレーナ・イシス・フォン・クルデンホルフ視点・

一時はどうしたものかと夫と二人頭を抱えたけれど腹を決めてしまえば、別にたいした問題でもなかったですね。
あの子がどんな使命や運命を持っていようが、どれだけ才能に恵まれようがあの子は私がお腹を痛めて産んだ大切な息子です。
自分の子供を愛し守り、正しく導くのは親として当たり前のことです。
夫と二人でどうしてそんな簡単なことで悩んでいたのであろうと今は二人で笑い合っています。
なにかおこれば私たちが全力であの子を守ればいいだけのことです。
ただ少し不安なのはあの子は自分の運命や神を名乗る者に託された使命を知っているのかということでしょうか。
知らないのならばいいのですが、知っているのならば一人で悩んでいないか心配です。
でもどうやらあの子の本好きはあの子の個性みたいなもので、別に無理に勉強しているわけでもなさそうですし、魔法もただ私や夫にほめられるのがうれしいから熱心に練習しているだけのようです。
それだけ見れば運命も使命もまだあの子は知らないのかもしれません。

ただまたいつかの神を名乗る者が今度はディアスに語りかけるのではとそれが不安の種ですが、今のところはその兆候は見られませんね。

悲劇がおこるといっていましたが、それがいつおきるかも私たちは知らないのです。

もしかしたらディアスが大人になってからの話なのかもしれません。

むしろそうであって欲しいです。

今すぐディアスをそんな困難に立ち向かわせろというのならば私は神にでも杖を向けてあの子を守るでしょう。夫も同じ気持ちです。

ディアスを生んで二年後。

いまから三年前に私は今度は女の子を出産し、夫もディアスも喜んでくれました。

名前はベアトリス・イヴォンヌ・フォン・クルデンホルフ。

優しい女の子に育ってくれるといいですね。

夫は娘の誕生に歓喜し、ディアスは妹が出来たとさっそく兄ぶってあれこれベアトリスの世話を焼いたりちょっかいを出したりしていました。

いっそ魔法を習わせるという荒療治でしたが、ディアスの問題も一応心理的解決を見せました。

幼いベアトリスも天才と呼ばれる兄に気後れすることなく懐いていますし、なにも問題はありません。

少し不安なのはベアトリスの才能ももしかしてディアス並みなのではないかという不安がありますが、ディアスはいろいろ特殊ですからそれはないでしょう。

むしろ魔法を習い始めて才能の差があまりにひどいようだと仲が悪くなってしまうかもしれないという不安もあります。

できれば兄と妹二人仲良く過ごして欲しいですね。

そういえば最近ディアスが剣術や戦闘術を習いたいといっている

のですが、あの子はそんなことにも興味があるのでしょうか？
正直ディアスが戦いに関することを学ぶのは抵抗がありますが、本人が望むのならば危険のない範囲で応援してあげましょう。
男の子なのですから最低限の護身術くらいは身につけるべきでしょうし……あのディアスのことだからすぐに大人顔負けの強さになるなんてことはないでしょうね？　不安です。

不安がってあの子の行動を縛っても意味がないでしょうから止めませんが、あまり規格外っぷりが有名になるのは避けて欲しい。
なんとなくあの子が有名になりすぎるとトリステイン王家やその取り巻きの貴族がうるさそうですから。
息子をあんな腐った輩の見世物にされるなどとても耐えられません。
夫にいってそのときは厳重に息子を守るようにしてもらわなければ。
あの子はこのクルデンホルフでのびのびと育ってくれればいいのです。
使命だとかそういうことは後で考えれば済むことです。
実際ディアスの性格なら放っておいても勝手に強くなりそうなので神とやらも文句はないでしょう。

そういえば気のはやい貴族がディアスの婚約者の押し売りに来ていましたね。
ふん、私のディアスにはそんなものまだ不要です。
もう少し成長して、せめて男女の仲がわかる年頃になってからでも遅くないでしょう。
どうせ大公家の跡取りで顔もよく性格もよく魔法の才能もあるディアスならいくらでも選び放題のはずですから。
はぁ、ディアスもいずれお嫁さんをもらってその女に夢中になるのでしょうか？

嫁いびりなどする気はありませんが、なんとなくそんな光景を目にしていたらきっと小言くらいはいってしまいそうです。
いつまでも私の可愛いディアスでいてくれればうれしいのに。
まぁ、そんなことは無理なんですけどね。
……あの子が恋人を連れてきたらどうしましょう？
ディアスなら頭の悪い馬鹿女にだまされることはないと信じたいですが、それでもろくでもないのに引っかかったりしたら……。
そのときは、うん、魔法で吹き飛ばしても別に罪はありませんよね？
大事な息子が悪い女につきまとわれていたら害虫を駆除するのも母親のつとめでしょう？
ふふ……ええ、当然それも母親のつとめよね？

・ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ視点・

なんだか寒気がした。
なんだ？　またあの馬鹿女が何かしたのか？
いや考えすぎかちゃんと釘は刺したのだし、しばらくは心配ないだろう。
それにしても魔法を習って数日でラインクラスってやばくないか？
どうやら数日の訓練で風のラインクラスになったらしい。
教師役の家臣が驚いていた。
「すごいですね。この調子なら十歳になる頃には風のスクエアになっているかもしれません。うらやましいほどの魔法の才能。いや親和性とでもいうのでしょうか、ディアス様が魔法を使う様子を見ているとまるで熟練のメイジのように魔法を自然に使っておいでです。おそらく適正がすさまじくいいのでしょうな」
自身は風のトライアングルである男はそういった。
口元にひげを蓄えた紳士的風貌の男だ。

名前はティフォーン・オーラグレイという。
風のトライアングルで水のラインメイジだ。
僕ともっとも得意魔法の相性がいいという理由で選ばれた魔法の教師役だ。
戦闘よりももっぱら学者肌の人物で、僕という才能を研究しようとでもいうかのように事細かに分析している。
教え方はわかりやすいし、親しみやすいので気に入ってはいる。
「あまりおだてると調子に乗っちゃうよ？」
「ディアス様はそんな軽薄な性格はしておりませんよ。むしろほめられても本当にそうなのかと常に自分を見つめ直す方です。正直子供らしくないとは思いますな」
「僕のことは嫌いかな？」
「あいにく子供が苦手なので、ディアス様が普通に子供らしかったらなんとしても教師役を断ったでしょうな」
いいたいことをはっきりいうところも好感が持てる。
「やっぱり戦闘訓練って出来ない？」
「それは以前に申し上げたとおり、私の戦闘の才能はそれはもうお粗末なものです。せいぜい敵に向かって魔法を放つぐらいしか出来ません。無理です」
落胆する僕に向かってティフォーンはいぶかしげな声を出した。
「ディアス様はまだ魔法の訓練を始めたばかりでしょう。なにをそんなに焦っておられるのです？」
まずいな。
ごまかすか。
「そう見える？」
「見えますな。普通なら今は魔法の上達にもっとも関心を示すはずです。数日でラインクラスになったなら一ヶ月続ければトライアングルになれるのではないか、という風に」
「僕はいろいろ本を読んだ。それで知ったのだけど魔法が役に立つのはやはり一番は戦闘なんだと思った。だから魔法の訓練っていう

のは魔法を使うだけじゃなくて一緒に戦闘訓練もやるものだと思っていた」

「つまり予想と違っていて落胆されましたか」

「ちょっとね」

ティフォーンは僕が勘違いから戦闘訓練を熱望したものと納得してくれたようだ。

その上で丁寧に持論を述べた。

「確かに魔法、特にディアス様が得意とされる風の魔法は戦闘でこそ真価を発揮するといっていいでしょう。なにしろ最強の系統と呼ばれるほどですからな。けれどディアス様は魔法を習い始めて日が浅い。確かに驚くほどの才能はありますが戦闘に活用するにはもう少し訓練が必要でしょうな」

「やっぱりまだまだか」

「はい、せめて自由自在に攻撃魔法を連続で放れるくらいにはならないと無理ですな。今のディアス様は精神を集中して周囲の安全が確保された上で魔法を使っています。実戦ではそんなことはあり得ません。周囲は危険だらけ、敵はこちらが魔法に精神を集中していると知ればすぐに殺しにかかってきます」

「なるべく速く魔法を発動できなくてはいけないんだね？」

「速く正確にかつ高威力にです」

ティフォーンは軽くほほえんだ。

「風の魔法が最強といわれる由縁は速さです。自由自在に攻撃力の高い魔法を次々と敵に叩きつけるのが風のメイジの基本戦法です」

「なるほど。そうだ風もいいけど水の魔法の訓練もしたいな。水の魔法は治癒とかで役に立つんでしょう？」

ティフォーンは軽く肯いた。

「はい、水の魔法は戦闘に不向きといわれていますが治癒などで味方に大きく貢献できます。私はどちらかというとそちらの方が味方の役に立ったことが多いですな」

「本当に戦闘が苦手だったんだね？」

「嘘でこんなことはいいませんよ。それとディアス様なら水の魔法でも十分な攻撃力をもたせられるかもしれません。水の魔法も熟練者の手にかかればおそろしい攻撃力を発揮しますので」

なるほど。要は使いようと魔法に対する熟練度か。

クラスも重要なのだろうが、彼は僕なら水でもトライアングルクラスになれると思っているそうなのでその点で心配されていないのだろう。

「他の系統は少なくとも風と水の成長が一区切りついてからでいいでしょう。あれもこれも手を伸ばして器用貧乏に終わっても情けないですからな」

確かに。努力すれば他の系統もおそらく伸びるだろうが時間がかかる。

それならその時間を使って風と水を極めた方が戦力的には大きいだろう。

僕の当面の目標は風と水の系統を極める。

少なくとも実戦レベルまで上げることだな。

戦闘訓練は剣術などを教われば流用できるだろう。

そっちも交渉しているからそのうち教師がつくだろう。

さて、限られた時間でどこまで強くなれるかな。

僕の命に関わりそうだからな。手が抜けない。

もちろん必死になりすぎて疑われるのは論外だ。

あくまで魔法は貴族の義務的な感覚をキープして、戦闘訓練は護身用などと理由をつければいい。

僕の受けているサポートを考えればそれでも十分すぎるくらいの成果が得られるはずだ。

なにしろ経験値百倍だからな。

ふん、準備は念入りにしておかないとな。

いずれくる面倒ごとを片手間で片付けられれば最高だ。

これから忙しくなるな。

三章　クルデンホルフの天才児（後書き）

これからいよいよ主人公は来るべき時のために本格的な準備にかかります。

つまり修行です。
レベルアップです。
しかし次の話はそのあたりの仮定をすっ飛ばして、
いきなりある程度強くなった主人公が現れる予定です。

理由はちまちまと修行するところを書いてもつまりませんから。
十歳くらいまで一気に飛ばうかなと考えています。
そこらの大人よりもよほど強い十歳児、なんというかネギま！のネギみたいですよね。

まぁうちの主人公はあんなに純真無垢ではありませんがね。

追伸　内容を若干修正しました。

四章　モンモランシー（前書き）

ついに原作キャラ登場です。
モンモランシー、僕は実はこのキャラ好きです。

原作ではあまり目立ってないような気もしますが、
一途にギーシュに恋していた少女として印象に残っています。
序章ではさんざんな目に遭わせましたが、本編では幸せになって欲しいキャラの一人です。

ベアトリスは性格と能力が大幅改変されています。
性格は今回はあまり目立ちませんが、能力的には優秀になりました。
本編の物語に絡むかは未定です。
ちなみに主人公は妹激ラブです。

四章　モンモランシー

・ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ視点・

どうも、ディアス・ラグは十歳になりました。
英才教育とカミサマサポートのおかげで周囲が驚くほどの成長をしちゃいました。
もはや両親が僕を見捨てることなどあり得ないと確信した僕は、一切自重しませんでしたからね。ふっふっふ。
めでたく十歳という幼さで風のスクエア、水のトライアングルに昇格しました。
周囲はクルデンホルフ大公家始まって以来の天才だとほめてくれました。
魔法の熟練度も教師役のティフォーンが「すでに十分実戦レベル。すでに私に教えられることなどなにもない。むしろ私が教えを請いたいぐらいだ」と呆れるほどです。
どうも僕の魔法の熟練度はすでに達人級で「どこまで伸びるか恐ろしいほど」とまでいわれました。
火と土の系統もラインクラスに余裕でなりました。もうすぐトライアングルは確実だろうといわれています。
この子は四系統スクエアの偉業を成し遂げるのではないかともっぱらの噂です。
やろうと思えばきっと出来ますが、魔法は風と水だけでも十分戦闘力として破格なのであまりそっちに熱意はありませんが。
戦闘技術も格闘術、剣術を基本に槍術なども習いました。
基礎トレーニングもこつこつおこない、今では大人の兵士を楽勝でノックアウトできます。
三対一でも余裕。五対一になるとちょっと面倒というくらいの本当に十歳かと驚かれる戦闘力を発揮して周囲にちょっと引かれまし

た。あはは。
どうやら僕は戦闘には天才的な才能があるらしいです。元傭兵経験者の家臣にいわせると「実戦に出ても一騎当千の働きが出来るほど」らしいです。
さすがクルダ最強の闘士の名前を与えられただけはありますね。
両親はちょっとだけ遠い目をしてため息をついていました。
あきらめてください、僕はもう自重しませんよ？

セラファナに特殊な武器を作るようにいわれて、セラファナにいわれるまま練金とマジックアイテムの作成方法を一週間ほど猛勉強しました。
セラファナと心の中で相談しながら武器を制作。
できあがったのは大きな黒いブーメラン。
なぜかセラファナは大喜びでした。
これは『黒い翼』ディアス・ラグが愛用した最強の武器ブラックウィングを改良したものらしいです。
いくつかの魔法がかけられており、本家ブラックウイングより扱いやすさや威力は上らしいです。
ただし僕にしか使えませんが。
さらにセラファナが神としての力を注ぎ込んでさらにチート化したそうです。
しかしブーメランですか。
なんというか主人公ならお約束はやっぱり剣ではないかと内心不満でしたが、使ってみて気が変わりました。
自由自在に操れるブーメラン。
風の魔法をまとい猛然と空を切って飛ぶ姿はなんというか小型の竜巻が飛んでいるような迫力がありました。
そんな威力のブーメランがこちらへ戻ってくるのは内心恐怖以外の何者でもありませんが、僕の差しだした手の中にずしりとした重さと共に確実に戻ってきます。

よく手になじむし、風の魔法をまとわせてそのまま殴れば、木だろうと岩だろうと叩き斬ります。
いつも携帯している必要がなく、呼べばどこにでも現れる魔法がかけられています。
ただしこの魔法はこちらでは一般的ではないため緊急時以外は使うなとセラファナに忠告されましたが。
というわけですっかりブラックウイングが気に入った僕は両親や妹に見せびらかして自慢してしまいました。
妹のベアトリスは素直に驚いて自分も投げたいと駄々をこね。
両親に危ないからと止められていました。
僕にしか使えないと説明すると自分にもつくって欲しいと言い出しましたがこれも両親が止めました「女の子が武器なんて持つものじゃない」本心はこれ以上、妹をチート化しないで欲しいということだったのでしょうね。

妹チート化。
別に僕が言い出したことではありませんよ？
兄に比べて魔法の才能に劣ると悩む我が愛しの妹が、僕に相談に来たからイケナイのです。
涙ながらに自分には才能がないと嘆く妹を前にして力を貸さない道理はないでしょう？
もっとも比較対象が悪いだけでけしてこの妹が才能がないわけではなかったのですがね。
水系統が得意でこの幼さですでにドットスペルは完璧に習得している妹です。
普通に優秀なのですが、僕という規格外を比較対象にしているため才能の基準がいささかおかしくなっています。
お兄ちゃんは妹の将来が心配ですね。
三年前の涙の相談からこっそり妹の教師役を務めて、妹を立派な水のトライアングルメイジに育て上げましたよ。

もちろん僕考案の水系統攻撃魔法も習得させました。
普通に強いですよ。我が妹は。
さらに格闘術の初歩と短剣を使った護身術も教えました。
おかげで我が妹は並の兵士を倒せるくらいの猛者になりました。
両親がこっそりため息をついていたのを知っていますが、何度も繰り返しますが僕はもう自重しないのです。
可愛い妹の頼みだったので余計ですね。

でも他人を強くすることも出来るのかとセラファナに相談してみると「おそらく何でも出来る男」という微妙な称号を与えられました。
妹に教えているうちに人を育てる効率のいいやり方や才能を引き出し伸ばす教育者としての才能を伸ばしてしまったらしいです。
はっきりいって魔法や戦闘技能の師匠としてならすでに一流だそうです。
もはやなんでもありですね。
兄と妹そろってクルデンホルフ大公家の天才と呼ばれるようになってしまい。
それのおかげで父さまが苦労しているそうです。
なんでもトリステインの王族や貴族がそんなにすごい子供なら見せろといってきているらしいですが母さまはそんな貴族達のいいように怒り、父さまはそんな有象無象を上手く煙に巻いて追い返しているそうです。
二人が言うには「子供を見世物にされてたまるか」ということらしいです。
普通できのいい子供なら自慢して見せびらかしそうですが、
僕が規格外過ぎるのと、ついでに妹まで天才扱いなのと、
貴族の見栄なんて踏みつぶしても後悔のないほど子供を溺愛する両親ですからいろいろ事情があってそんな野次馬どもをシャットアウトしているのでしょう。

そんなある意味クルデンホルフ大公領内で温室育ちな僕ですが、このたびトリステインへ行くことになりました。
父さまと旧知の貴族でモンモランシ伯爵という人が援助を求めているらしいです。
なんでも開拓事業に失敗し、多額の借金をこさえしかもなにやら大事なお役目からも降ろされて踏んだり蹴ったりな有様らしいので、父さま自ら今後の領地整備の相談になることになったらしいです。
なぜそれに僕がついていくのか疑問でしたが、先方がぜひご子息も一緒にと誘ったらしいです。まぁ評判の天才児を見たかったのかもしれませんね。
父さまも親交のある貴族の頼みを無下に出来ないのかなんとも微妙な表情で僕に同行するように命じました。
ああ、そうそうその前に忠告されました。
「いいかディアス。おまえはクルデンホルフ大公家の跡取りだ。だからおまえは常に責任ある行動を求められる。そして、なんだ。つまりおまえは男として常に身辺に気をつけなくてはならない。将来は大公家にふさわしい女性を妻に迎えることになるのだから女性にたいして軽はずみなことをいったりやったりしてはいけないのだ。わかるな？」
なんでしょう？
正直よく理解できないのですが？
「とにかく先方にはおまえと同じ年頃の娘がいるが間違っても軽はずみな約束をしてくれるなよ。賢いおまえならわかるだろう？」
すみません。本当によくわかりません。
それ、本当に僕に関係のある話なのですか？
えっと思考しよう。
つまりなんだ。先方には僕と同じ年頃の娘がいて、僕は大公家の跡取りで……。
あぁ、そういうことかその貴族が僕に娘を嫁入りさせようと画策

するかもしれないということとか、そしてそれに間違っても乗るなということとか。

十分に気をつけますと返答すると父さまは少し安心したような顔をした。

初めての領地外への旅行を僕は楽しみにしていた。

妹のベアトリスは行き先がラグドリアン湖の近くだと聞くと自分も行きたいと駄々をこねた。

ラグドリアン湖はトリステイン最大の観光地のようなものらしい。

それは好奇心旺盛な妹にすればぜひ行きたいだろうなぁ。

母さまに叱られておとなしくなったが僕を見る目が恨めしそうだった。

……お土産でも買ってくるか、お土産屋さんとかあるのかな？

そして僕にも不満があった。

当然のように愛用の武器であるブラックウイングをもっていこうとしたら父さまに止められた。

何でも貴族が武器を持ち歩くのは不名誉なことらしい。

魔法に自信がないと受け取られるからだそうだ。

納得がいかない。

僕の魔法の腕前は周知の事実で、しかも僕のブラックウイングは剣や槍と違って実際に使わなければ武器とみられることは少ない。

なにしろ最初は「ずいぶん仰々しいおもちゃを作ったな」などといわれたのだ。

この世界にブーメランはないのだろうか？　あれはもともと狩猟用の武器だったはずだが。

僕がごねると父さまからの説教が始まった。

「いいか、おまえが武器の扱いを習ったり、自分の武器を作ったりしたことを責めはしない。だが貴族社会には貴族社会の暗黙の了解というものがあるのだ。貴族の見栄といってもいい。特にこれから行くトリステインはそれが強い。もしおまえが武器を肌身離さずい

たらおまえの名誉のみならず大公家の名前にも傷がつくのだぞ。おまえが好きなことに熱中するのはいまさら責めないが、せめて貴族として大公家の人間として恥ずかしくない態度を、せめて外側だけでも取り繕ってくれ」

領地内ならいくらでもかばえるが、外ではそうもいかんのだと半ば懇願されて僕は渋々ブラックウイングを自室に戻した。

こんなつまらないことで父さまに迷惑をかけるのも気が引けるし、大抵の相手ならブラックウイングなしでも余裕で対処可能だろう。

しかし、貴族の見栄か。

くそっ、くだらないことで僕の愛用の武器を持っていけないとはトリステインめ、いつか思い知らせてやるぞ。

半ば逆恨みじみた怨念を胸にトリステインのモンモランシ領へ向けて馬車で旅に出る。

父さまの他には護衛の家臣もついてくる。世話役のメイドもいる。なかなかの大所帯だった。

父さまは領地内を出かけるときもあまり大仰になるのを嫌い、せいぜい護衛を数名連れ歩く程度だったが今回はずいぶん多い。

これも貴族の見栄なのだろうか。

なんだか行く前からトリステインというところが嫌いになれそうだった。

どうやらずいぶんめんどくさい国らしい。

行き先の貴族とやらもその娘もめんどくさい人物じゃないだろうな？

もしそうなら僕は一人で勝手にラグドリアン湖でも見物してお土産買って速攻で帰るぞ？

・モンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシ

視点・

「初めまして、僕はディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフです」
いま私の目の前に評判の天才がいる。
柔らな金色の髪、優しそうな蒼い瞳。
どこか中性的で神秘的な少年。
私と同じ歳ですでに風のスクエア、魔法の天才として知られる大公家の跡取り。
私は彼がうちの領地に、そして屋敷に訪れるのを指折り数えて心待ちにしていた。
噂の天才少年とはどんな人なのだろう。
そんな好奇心で様々な人物像を思い浮かべて夜もなかなか寝付けなかったほどだ。
それほど尊敬していたし、あこがれてもいた。
私はまだ水のドットスペルが多少扱える程度で教師から遠回しに魔法の才能があまりないといわれていた。
努力してもトライアングルになれるか怪しいらしい。

貴族にとって魔法の才能は重要だ。
なぜなら優れた魔法の使い手なら優れた子孫を残せると考えているからだ。
魔法の才能は親からの贈り物だ。
親はまたその親から、先祖代々受け継がれる遺産であり名誉なのだ。
その才能が私にはあまりない。
水の名家であるモンモランシ家に生まれた私にとってその事実を知ったときのショックは言葉にしがたいものがある。
両親は私を慰めてくれるし、家臣たちも遠回しに魔法だけが才能ではないといってくれるが私は悔しかった。

そんなときクルデンホルフの兄妹の話を聞いた。
兄は生まれながらの天才といってよく。五歳で風のラインクラスになり、十歳にしてスクエアに上り詰めた。
妹は最初はドットクラス程度だったらしいが兄の指導を受けて私よりも年下なのに今では水のトライアングルになったという。
まるで物語の英雄に出会ったように感じた。
世の中にはそんなすごい人たちもいるんだ。
不思議と嫉妬や反感を感じなかったのは自分でもよくわからない。
純粋にあこがれた。尊敬した。
私も努力すればもしかしたら才能を開花させられるのではないかと夢想したりもした。
兄の方はともかく妹の方は最初はドットクラス、その後兄の指導のもと努力してトライアングルに辿り着いたという話には感動さえした。
どこかで自分には出来るわけがないと冷めている自分を自覚しながらも、私は彼らにあこがれた。
そのあこがれの少年が自分の屋敷を訪ねてくる。
そう聞いたときは私は喜びのあまり若干はしたない歓声をあげてしまい母に叱られた。
喜びの次に私の胸に襲いかかったのは、あこがれの天才少年にたいしてどのような姿でどのような態度で接しようということだった。
私は狼狽した。
慌てふためいて手持ちの服をすべて出して部屋にばらまいた。
うちははっきりいって貧乏だ。
平民よりはましだろうが貴族としてはきっと底辺だろう。
当然高価なドレスも宝飾品も私には夢の中の代物だった。
そして来るのはクルデンホルフ大公家の当主と跡取りなのだ。
みすぼらしい格好ではきっと笑われる。
大公家はトリステイン王家や貴族達に多額の援助が出来るほど裕福な家なのだから、あまりにもみすぼらしい姿で会ったらきっと軽

蔑されるに違いない。
そんなのは嫌だ。
あこがれの彼に貧乏たらしい貴族だと軽蔑の視線を向けられることを想像して私は絶望しそうになった。
嫌だ。そんなのは嫌だ。

嫌われたくない。
その一心で服をあさり、私は必死に考えた。
そしていくつかの服を組み合わせることでなかなかセンスがいい雰囲気の姿に着飾れるまで試行錯誤した。
私には豪華に着飾ることは出来ない。
それなら質素でも可愛く見えるように工夫すべきだ。
その努力の成果を着て私は緊張しつつ自己紹介した。
「初めまして、私はモンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシです。お会い出来て光栄です。ディアス殿下」
かしこまって自己紹介する私に噂の天才少年、クルデンホルフ大公家のディアス殿下は柔らかく微笑んだ。
想像していたよりずっと親しみやすく優しい笑顔だった。

父たちが難しい話をしている間、私は父に命じられてディアス殿下を案内していた。
屋敷の中など特に見るべきものなどなかったので庭園にでて密かな自慢であるたくさんの花が咲き誇る一角に案内した。
「きれいな庭ですね」
ディアス殿下も喜んでもらえたようだった。
この庭は母と私が手を入れ世話をしているものだ。
手入れも行き届いているし季節の花がいつも咲いていている。
普通の贅沢など出来ない我が家の精一杯の贅沢だった。
ディアス殿下はまるで花をいとおしむようにあちこちの花を見て、私に様々な質問をした。

この花の名前は？　育てるにはどうしたらいいか？　好奇心旺盛な方のようだ。

私はそんな質問に何とか答えることができた。

しらないなどといったらきっと殿下は機嫌を悪くされたことだろうが、ここの世話は私もしているのだ。

なんとか私の知る範囲の質問だったのも幸いだった。

一通りの知的好奇心を満たしてしまうと殿下と私の間の会話は途絶えてしまった。

困った。

なにを話したらいいんだろう？

けれど案内役としてこのまま無言でいるわけにはいかない。

「殿下は魔法の天才と呼ばれていますが、なにかコツでもあるのですか？」

言葉が口を滑り出してから私は頭を抱えたくなった。

なんて失礼なことをいっているのだ私は、これでは殿下が努力してスクエアになったことをまるでなにか特殊な裏技でもあるように勘ぐっていると思われてもしょうがない。

すぐさま謝罪すべきだと思いつつ私は緊張のあまり言葉が出なくなってしまった。

思わず泣きそうになる。

私はなんて馬鹿なのだろう。

しかし殿下は別に気を悪くしたようでもなく、しばらく考え込んだ後こう言った。

「魔法を使うのではなく、魔法を頼むような感じですかね」

魔法を頼む？　誰に？　なんの話をしているのだろうこの天才少年は。

理解不能な私の様子を察したのか殿下は詳しく説明してくれた。

「私の教師もそうだったのですが普通のメイジはごく自然に自分の魔法によって様々な現象を引き起こすのを当然と思っているようなんですが」

当たり前だ。なにを言っているのか。
そういえば天才のことは凡人では理解出来ないと聞いたことがある。
これはそれだろうか？
「普通の魔法が魔力頼みに頭から命令しているのだとすれば、私の魔法は魔力を渡す代わりにこうして欲しいとお願いする魔法なのですよ。ようは心構えの話ですね」
ゆっくりその言葉の意味を考える。
頭ごなしに命令する魔法とお願いする魔法。なにが違うんだろう？
「それはなにが違うのでしょう？」
「実際の効果としては僕のやり方の方が魔力が身体になじみやすい。だから発動も速いし制御も楽だ。威力を上げるのもはるかに容易になる」
「そんなことでそこまで違うのですか？」
「違うみたいだね。妹にこの方法を教え込んだとたん制御も威力も格段にあがってあっという間にラインクラスになった」
私は目を見開いた。
ドットクラスだったベアトリス殿下。
彼女が飛躍したその秘密を今私は聞いているのだ。
そう自覚すると胸が高鳴った。
興奮した。
感動した。
そしてなによりもっと知りたいと突き動かされた。
「殿下、もしよろしければ私に魔法を教えていただけませんか」
一世一代の勇気を振り絞って私はそうお願いしていた。
この機会を逃せば次はないと直感していた。
私がメイジとして一人前になるには今この場でこの天才に教えを請う以外にない。
そんな私の決意を前にディアス殿下は優しく請け負った。
「いいよ。魔法の訓練場はあるかな。ここでは魔法を使いたくない。

花がかわいそうだ」
異論はまったくない。
私は殿下を私がいつも修行場にしている魔法の訓練場に案内した。
そこで私はまず自分の魔法の腕を披露した。
「コンデンセイション！」
私が全力で杖をふるうと私の前に少し歪な水の塊が浮いていた。
情けなくなるくらい小さな水の玉。
これが私の全力なのだ。
おそるおそる殿下の顔を盗み見るとなにやら難しい顔をしている。
失望されたかもしれない。
この程度なのかと。
泣きそうになるのをこらえていると殿下は私に不思議な指示を出した。
それは杖に頭を下げて、自分の魔法に協力してくださいとお願いしろというものだった。
わけがわからないが、とりあえずいうとおりにする。
馬鹿げたことをやっているなとちらりと思いながらいわれたことをこなす。
すると今までの優しい瞳が嘘のように鋭く私を射貫いた。
「真面目にやろう？　いいたいことはわかるね？」
口調は優しいがその言葉に込められた気迫に私は震え上がった。
この師匠は私の普段の教師の何倍も厳しい人だとそのときになって悟った。
もう半分泣きながら杖に頭を下げ必死にお願いした。
どうか私の魔法に協力してください！
不意に杖がほんのり暖かくなったような気がした。
これは、杖と契約したときと同じ？
それを見届けた殿下はもう一度同じ魔法を使うように指示した。
今度は驚くことにきれいな球体ができあがっていた。大きさは変

わらないがさっきの歪で不格好な水球が嘘のようなきれいな水球だった。
私は思わず歓声をあげた。
今までどれだけ練習してもこんなにきれいな水球が出来たことはない。
うれしかった。
そんな私に殿下は教えてくれた。
「ようはまず杖の契約からしていまいちだったんだよ」
と。
私は愕然とした。
殿下がいうには私の魔法の発動体である杖が中途半端にしか私の魔力になじんでいなかったらしい。
一応魔法は発動するが、その状態で制御を行うのは至難きわまりないと断言された。
まさか魔法を教わる以前から躓いていたとは、我ながら自分の才能の乏しさにあきれかえった。
私の教師はなにも言わなかった。
もしかして気づいていなかったのだろうか？
そんな疑問に殿下はあっさり答えた。
「気がつかなかっただろうね。魔法は発動されている以上まさか発動体に問題があるとは思わないらしいから」
それにあっさり気がついた殿下ってやっぱりすごい人なのね。
それからまず私は殿下流の魔法心得をたたき込まれた。
今までの魔法の常識を忘れて、殿下流が当たり前だと信じられるまでそれは続いた。
具体的に身体中に魔力を満たした状態でずっと次の言葉を頭の中で繰り替えさせられた。
「私の魔法は世界の力を借りて行います。私は私の魔力をあなたに差しだし、あなたは私の望む現象を実現します。私は世界に願いますどうか私と私の魔法を受け入れてください」

祈るように繰り返した。
始祖への祈りもここまで真面目にやったことはない。
なにしろ少しでも魔力が弱まったり、雑念が入ると殿下が優しいが威圧感たっぷりの声で私を叱るのだ。
私は半泣き状態でそれを繰り返した。
そろそろ足が疲れて痛くなってきた頃、私は自然に私の身体に魔力を満たすことが出来るようになった。
殿下流の魔法思想に染まれたかどうかは自信がなかったが殿下は次の指示を出した。
それは魔法の実践だった。
世界に願うように、頼むように魔法を使え。
私は自信が持てなかった。
正直にその思いを言った。
私には正直殿下の理論が理解出来ないと。
殿下は少し考えたあと簡単に答えた。
「なら君は水の系統のメイジなのだから水の精霊に願うように魔法を使ってはどうか？」
水の精霊に願う。
これでもラグドリアン湖の水の精霊との交渉役を続けてきた家の娘だ。それならばと私は挑戦した。
お願い。水の精霊様。私の魔法に協力して！
先ほどと同じ魔法。
そして似たような結果。きれいな球体が目の前にあったがそれだけだ。うまくいかなかったのか、それとも殿下の理論が意味がないのか。
殿下は若干不機嫌にいった。
「なんで全身の魔力を使わないんだ？　今の君なら出来るだろう？」
なんのことだろう？
「君は杖をふるった腕の魔力しか使っていない。せっかく全身に魔力が満ちているのにそれ以外はほったらかしだ。これでは先ほどの

訓練の意味がない」
どうやら先ほどの訓練は全身に魔力を満たすこととその魔力を自在に扱う訓練も兼ねていたらしい。
私は再び魔法をふるった。
心の奥底から水の精霊に願い。全身の魔力を杖に集中させて魔法を放つ。
私は驚いて尻餅をついてしまった。
目の前には人の身長ほどの巨大な水球が浮いていた。
殿下はうれしそうに祝福してくれた。
「おめでとう。それが今の君の本当の全力だ」
全身に魔力を満たし、精霊に願い、それを杖に集中して魔法を放つ。
たったそれだけで私の実力は今までと比べものにならないほどになった。
私は涙が止まらなくなった。
私には才能がないとあきらめていた。
けれどやり方次第で、これだけのことが出来た。
うれしくて、心が浮き立つほど楽しくて、殿下に感謝の気持ちがあふれてきて、涙が止まらなかった。
気がつけば大声で泣き始めていた。
今までの悔しさや失望、周囲の哀れむような視線。気遣う言葉。
私がどれだけ魔法の才能を欲しがっていたか私自身今まで気がつかなかった。
私はこれがずっと欲しかったんだ。
殿下はそんな私の頭を優しく撫でて私が泣き止むまでそばにいてくれた。
泣き止んだ私に殿下はこれからも今のような訓練を続けるようにいった。
ベアトリス殿下も基本的に似たような訓練をしてトライアングルクラスになったともいわれた。

私は大声で泣いたことの恥ずかしさから殿下と目を合わせられずに、とりあえず一生懸命さっき習ったばかりの全身に魔力を満たす訓練を始めた。

もちろん心の中では水の精霊への感謝とこれからも協力して欲しいとお願いしながら。

そんな私に殿下はこの訓練は魔法と魔力を私の身体になじませる訓練でもあると語ってくれた。

魔力と魔法理論が身体になじめばなじむほど制御が容易になり威力も大きくなると。

そしてこの訓練によって魔力の制御も向上するといった。

「万能の訓練みたいですね」

本当に魔法を向上させるためのあらゆる要素がつまった訓練らしく私はそんなことをいった。

「万能ではないけど、魔法の上達には最適な訓練だよ」

殿下はそういって私の訓練の様子を見守り時折注意をしてくれた。

杖をふるう右腕に魔力が集中しすぎている。全身にまんべんなく魔力を流せ。

魔力が弱くなっている。別に魔力を消費しているわけではないのだからしっかり魔力を制御しなければならない。

魔力が強すぎる。力みすぎだ。魔力を強く流せばそのぶん効果が上がるわけではない。適度に調整する方が制御能力は上がる。

気がつけば殿下の注意はなくなっていった。

もう注意しなくても上手くやっているということなんだろうか。

不思議なことにこの訓練が進むごとに身体の疲労が抜け疲れがとれてきた。

もう足も痛まない。

そしてどんどん魔力を全身に流す行為が強く意識しなくても出来るようになってきた。

身体に魔力がなじんできた気がする。

いまならどんな魔法でも自在に使えると錯覚を起こしそうだ。

そして不意に目の前がいや自分の世界が広がった気がした。
若干魔力の集中が乱れる。
なんとか持ち直したがなにかがおかしい。
先ほどとは魔力がなにか違う？
不意に拍手が聞こえた。
目を開くと殿下がうれしそうに拍手していた。
なんだろう？
「おめでとうミス・モンモランシ。君はラインクラスになった」
殿下の言葉が理解出来ずに私は魔力制御の訓練も忘れて惚けてしまった。
「これほど飲み込みの早い生徒は初めてだな。ベアトリス以上だ。もっとも僕の生徒は今のところ三人だけなんだが」
私はようやく殿下の言葉の意味に気がつき自分の身に起こったことを自覚し、不覚にも殿下の目の前で歓声をあげて大はしゃぎしてしまった。

屋敷に帰って父と母に殿下の訓練のおかげで魔法が上達しラインクラスになったと報告した後、両親は大いに喜びクルデンホルフ大公とディアス殿下にお礼をいっていた。
ささやかなお祝いが開かれ大公殿下とディアス殿下も出席して私のことを祝ってくれた。
その席でディアス殿下は努力し続ければトライアングルクラスくらいなら楽になれるだろうと私の才能を認めてくれた。
まるで世界中に祝福されている気分だった。

そんな私が殿下の前でのあの醜態をようやく思い出したのは夜寝る前だった。
一気に気分はどん底に突き落とされた。
明日殿下にどんな顔をして会えばいいのだろう。
はしたないこと思われただろうか、おてんばだと思われただろう

か。
　ついラインクラスになれたことにはしゃいでしまった自分を呪いたい。
　今日は屋敷に泊まり明日はラグドリアン湖を見物する予定の大公殿下とディアス殿下を案内するのに同行する予定だが、体調が悪いといって断るべきだろうかなどと考える。
　けれど殿下と二人でラグドリアン湖を見て回れたらとても楽しいだろうなと想像してしまって私はベッドの上で転げ回った。

私はひょっとしてディアス殿下に恋をしたのだろうか？
わからない。
けれど殿下のことが嫌いではない。嫌いなはずがない。
あの人は私の恩人で、私を落ちこぼれから救い出してくれた英雄だ。
でもそれだけじゃない。
優しい笑顔。暖かい雰囲気。そして訓練の時の威圧感。
なにもかもが好ましく愛おしい。
でも私はモンモランシ家の一人娘。
いずれ婿をとって家を継がなければならない立場だ。
大公家の跡取りと結ばれるわけがない。
そこまで考えて胸が張り裂けそうになった。涙がこぼれる。
わたしは恋をしているのだろうか？
けれどそれはきっと叶わない恋。
傾きかけた伯爵家と大公家では釣り合いもとれない。
それでも、少しでもディアス殿下のそばにいたい。
少しでいいから私のことを好きになって欲しい。
結ばれなくてもかまわない。
それでも私はあの人を好きでいたい。
それぐらいはきっと許される。
それさえ許されないというのならば、私はきっと生きていけない。

私は今日、深い恋という呪いにかかった。
結ばれる可能性のない恋。
それでも私は。
あの人を好きでいたい……。

四章　モンモランシー（後書き）

主人公がフラグを立てるお話です。
モンモランシーとほぼ同じ方法でベアトリスも主人公は育てています。

でも初めての生徒であるベアトリスよりも三人目の生徒であるモンモランシーの方が教え慣れています。
モンモランシーの成長がベアトリスよりも早い云々はそのせいなのです。

あと主人公がついに専用武器ブラックウイングを手に入れました。
けどゼロの使い魔の世界では確かメイジが武装するのは不名誉だとかなんとかという設定があったのですよ！
おかげでまだ使えません。
そのうち主人公をブラックウイング片手に大暴れさせてやると密かに構想を練っています。

追伸　内容を若干修正しました

五章　ラグドリアン湖の水の精霊（前書き）

いよいよ水の精霊の話です。
いまのところ順調に更新出来ています。
これからも順調だといいなぁ。
あとお気に入り登録が増えてすごくうれしいです。
テンションあがりますよねぇ。このシステムは。

五章　ラグドリアン湖の水の精霊

・ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ視点・

昨日はなかなか有意義な一日だった。
トリステイン貴族ということで身構えてしまったがモンモランシーはごく普通の可愛い女の子だった。
話していると楽しく、つい魔法を教えることも承知してしまった。
しかも物覚えがよく、あっという間に吸収してラインクラスに成長してしまった。
いままでドットクラスだったのは教え方が悪かったからだろう。
才能はあると思う。
努力すればトライアングルクラスは楽にいくだろう。

今日もあまり派手ではない控えめながら可愛らしい服を着て僕を案内してくれている。
いま僕らはラグドリアン湖周辺を歩いていた。
父さまやモンモランシ伯爵も一緒だったのだが、なぜかモンモランシ伯爵が僕たちを二人で送り出した。父さまは特になにも言わなかった。
なにか企んでいるのではないか？
しかし事情を聞けばモンモランシーはモンモランシ家の一人娘だ。男子はいない。
家の存続を考えれば婿を取るべきで、大公家へ嫁入りなどさせるはずがない。
ということは時期大公家当主であろう僕と個人的に親しくさせておこうということか。
その程度なら、まぁいいだろう。
トリステイン貴族との交流も使命達成には必要だしな。

モンモランシーと一緒にラグドリアン湖を間近で眺める。
ラグドリアン湖は巨大な湖だった。
どれだけ巨大かといえば国境線をぶち抜いてガリア領までまたがる巨大さだというのだからすごい。
見た目はまるで海だ。
僕は前世で琵琶湖を見たことがなかったが、もし見ていたら同じようなことを思ったのだろうか？
「モンモランシ家は代々、この湖に住む水の精霊様との交渉役だったんです」
水の精霊様ね。水の神様みたいなものなのだろうな。
「それはすごいね」
何気ない相槌にモンモランシーが硬直した。
「実はお父様が馬鹿なことをしでかして水の精霊様を怒らせて、交渉役を降ろされてしまったんです……」
馬鹿なこと？
「よりもよって水の精霊様を屋敷に招待した際に水の精霊様に「歩くな。床がぬれる」などと暴言を！」
それはそれは、詳しい事情は知らないがモンモランシーの怒りようから察するによほど愚かな物言いなのだろう。
「おかげでお役目を降ろされるわ、開拓事業は水の精霊様のお怒りに触れて水害でだめになるわ……」
踏んだり蹴ったり、なるほど暴言一つでこの有様か。僕も口には気をつけよう。
怒りに身を震わせるモンモランシー。
実は父親のことを軽蔑していないか？
おいモンモランシ伯爵、あんた娘に嫌われかかっているぞ？
はっとモンモランシーが我に返った。
「す、すみません殿下、こんなつまらない話をしてしまって」
「いや、かまわないよ」
殿下、殿下ね。

親しくなるなら名前で呼ぶようにいうべきかな。
でもまだそれほど親しいわけじゃないしなぁ。
つきあいといえば魔法を教えたぐらいだ。
距離感は大事だ。馴れ馴れしく接して引かれても困る。
ここは慎重に行こう。

「それで水の精霊っていうのは……こういうのをいうのかな？」
僕はモンモランシーを振り向いて尋ねた。
モンモランシーは顔を青くして絶句している。
僕たちの前で湖が盛り上がりそこに人間の形をした水があった。
まったく突然現れるからびっくりしたじゃないか。
「ふむ、驚かしたかな？」
水人形がしゃべった。
モンモランシーは説明してくれない。
というか話せる状態じゃないな、これは。
「君はなんだい？」
僕は水人形に身体ごと向き直り尋ねた。
モンモランシーが短い悲鳴のような声を上げた。
なにやら僕の服の袖をつかんでくいくい引っ張っている。
「我らは水の精霊と呼ばれるものだ。天の眷属よ」
モンモランシーの手がぴたりと止まった。
「天の眷属とは僕のことか？」
「他におるまい？」
「悪いが心当たりがない呼び方だ。僕の名前はディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフだ」
「単なる者の呼称に興味はない。おまえは天の眷属だろう？」
「天の眷属とはなんだ？」
なんとなく予想はつく、僕は仮にも神と名乗るものと契約を交わしている身だ。
「いと高き座にありし者。この世界の外にありこの世界を見守る者。

汝らのいう神こそ我のいう天。そしておぬしはその天の眷属であろう」

困ったな、ここにはモンモランシーがいる。

ちらりとうかがうと真っ青な顔をしてこちらを凝視している。

否定してとぼけるべきか。

しかし仮にも水の精霊様などと呼ばれている存在だ。

推測するに水の神様のようなもの相手に嘘が通じるのか。

あるいは正直に話すべきか？

もしそれによって利益があるのならば……。

「よくわからないが、もしそうならなんだというのだ。なにか用事でもあるのか？」

「おぬしが天の眷属なら頼みがある」

「頼み？」

厄介ごとの匂いがする。

ここは全力でとぼけて煙に巻き、さっさとここを離れるべきか。

モンモランシーはなんとか言いくるめればいい。

「この世界の精霊力が乱れている。このままではこの世界は大いなる悲劇に見舞われる」

悲劇……聞き捨てならない単語が出てきたな。

「具体的にはなにが起こるというんだ」

「まずは地下に在りし風の力が暴走する。大地にすむ単なる者は大半が死ぬだろう」

地下に風、なんだ？

『それです！』

突如頭に大声が響いた。

契約したカミサマ、セラファナだ。

なんだ。いきなり。

『かつて見せた悲劇を憶えていますね？　あの聖戦が起きた直接の原因は地下にある風石、風の魔力を秘めた鉱石の暴走による大陸浮遊説です。それによって人々は大陸浮遊を避けるべく戦争を起こし

ました』
　なぜ？
『浮遊しない部分に移住しようと考えたからです。具体的にはエルフの住まう東方の地です。そしてそれに反対しエルフと同盟したガリアとの戦争になりました』
　そして負けた、と。
『はい、聖戦はガリアとエルフの強固な同盟とトリステイン、ロマリアの国力、軍事力がガリアに大きく下回ったために負けました』
　アルビオンとゲルマニアは？
『アルビオンはその前の戦で滅亡して他国の植民地化していました。ゲルマニアは聖戦の同盟には参加したものの事態を静観して軍を動かしませんでした』
　なるほど。
「信じられぬか？　天の眷属よ」
「いや、水の精霊が嘘をつくとも思わない。だが、それを僕に話してどうなる？　僕になにが出来るというのだ？」
「謙遜するな天の眷属。おまえは無力な単なる者とはちがう。いまも天とつながりその意志を受けていた」
　こいつ、セラファナとの会話を聞いたのか？
『ありえません。おそらくディアスと私とのつながりを感知しているだけでしょう』
　どちらにせよ、こいつには僕の正体がほとんどばれているということか。
『そうなります。可能ならば味方につけた方がいいと私は思います。それはかなり強力な存在です。戦えばディアスでも勝てません』
　水の神様みたいな存在という認識であっているか？
『だいだいあっています。もっと具体的にいえばこの世界を司る存在の一部です』
　一部？
『はい、本体。というか世界の神ともいうべき、そうですね仮に精

霊王と呼びますがそんな存在の一部です』
それはまた。
「なるほど。おまえの頼みとはその悲劇の回避。いやその根本である精霊力の正常化か？　精霊王の眷属」
水の人形がぴくりと動いた。
「精霊王の眷属か、おまえのいう精霊王とは我らが根源のことか？」
「さあ、あなたがそう思うならきっとそうなのだろうね」
水の人形がぷるぷる震えた。
しかし表情が変わらない水人形だな。交渉しづらい。
「おもしろいな、天の眷属よ。いままで我らの根源を見抜いた単なる者など数えるほどしかいない」
「いたことはいたのか」
「ああ、大抵は我らの眷属となった」
「眷属とは？」
「おまえと同じだ。我らと契約し、その加護を得たものだ」
「モンモランシ伯爵家は代々あなたとの交渉役と聞いているが彼らも眷属なのか？」
「始まりの者はそうであった。その子孫は違う」
モンモランシ伯爵家の開祖は水の精霊と契約した精霊の眷属だった。
なるほどねぇ、由緒正しい精霊との交渉役だったわけだ。
モンモランシーの様子をうかがうと必死に冷静になろうと努めながら話を聞いている。顔色はもはや真っ白だ。
まぁ世界が崩壊します的なことをいわれて、あげく僕は天の眷属という謎の存在。
そして自分の祖先も精霊と契約した眷属だと衝撃の情報のバーゲンセールだ。
錯乱しないだけましだな。
「それで改めて聞くがあなたは僕になにを望む？」
「風の精霊の暴走を押さえ、この地の精霊のバランスを正しい状態

に修正して欲しい。我らはそのために天の眷属に加護を与えることを約束する」
「加護とは？」
「我らの力を望めば我らの力を貸そう。知識を望むなら与えよう」
『受けるべきです！　それを受ければあなたはその地の水の精霊すべてを味方に出来ます！　どのみち目的は一緒です！』
うるさい、馬鹿女。まだはやい。
「我らとは水の精霊だけをさすのか？」
「いや、この地にあるすべての精霊が加護を与える」
破格だ。
「風や炎や大地も？」
「むろん」
『受けるべきです！』
セラファナが絶叫する。
確かにいい条件だ。
どうせ目的は同じでしかもこれを受ければ今後精霊たちはすべて僕の味方になる。
その力や知恵を借りることも出来る。
いいじゃないか。
「いいだろう。精霊の力を正常に戻すために尽力しよう。力を貸してもらえるか？」
「では契約を結ぼう天の眷属よ」
そして水の人形は若い女性の姿になった。
そして僕に近づき身体を引き寄せ、僕の唇に……。
キスをしやがった。
しかもなにかが口の中に入ったぞ？　そのまま腹に落ちていった。
「ぐっ！」
ずきんと身体が痛んだ。
な、なんだ？
しかしすぐに収まり不思議と身体が軽くなったような気がする。

気のせいか視界がはっきりしていつもより世界が広くなった気さえする。
「よろしく頼む天の眷属、我らが盟友よ。我らの助力を願うときは遠慮なく呼ぶがいい。この世界にある限り我らは力を貸そう」
「つまらないことを聞くがその姿はなんだ？」
「ふふ、これはこの地で我と最初に契約した者の姿だ。そこにいる単なる者の源である」
源？
「祖先という意味か？　ではその姿は初代モンモランシ家の精霊との交渉役か？」
「いかにも」
その言葉にモンモランシーが驚愕したようにまじまじと水人形の、若い女性の姿を見つめる。
自分の祖先の姿と聞けば、まぁ興味もわくか。
あ、そうだ。
「ついでに頼みたいことがあるんだけど」
「なんだ、天の眷属」
その天の眷属呼ばわりやめて欲しいな。
まるであの馬鹿女の手先みたいにいわれているようで不愉快だ。
『事実ですよ～』
黙れ、馬鹿女！
『ふふ、でも今回私役に立ちましたから怒りませんよ～、むしろ感謝しなさい～』
ああ、その調子でいつも役に立ってくれ。
おっと気を取り直して。
「モンモランシ家を再び交渉役に認めて欲しい」
「あの単なる者は好かん」
「どうしてもダメだと？」
「……不可能とはいわない、だが不快だ」
ならば。

「ならその娘であるこのモンモランシーを交渉役にしては、彼女はあなたの扱いが悪かったことをずいぶん気にかけていましたよ」
モンモランシーがびっくりしたようにこちらを見ている。
「よかろう。その娘を交渉役に認めよう」
「ついでにモンモランシ領の水害を収めてくれたらさらに感謝します」
「……承知した。しかしおまえはどこまでも我らを扱き使うな」
「もちろん寛大な水の精霊様には感謝していますよ」
本当だよ？　だって僕の役に立ってくれているからな。
これでモンモランシ家に小さくない恩が売れる。
くくく、もともと資金を援助している大公家だ。
これでクルデンホルフ大公家にもそして僕にもモンモランシ家はそうそう逆らえないだろう。
くくは、実に役に立ってくれたぞ。水の精霊よ！
水の精霊は何事か考えたように沈黙したあと湖面からなにかを取り出した。
指輪か？
「これが欲しいか、天の眷属よ？」
「それはなんです？」
「アンドバリの指輪だ。我らの力の結晶たる指輪だ。これを使えば単なる者を自由自在に操り死者さえもよみがえらせよう」
「水の精霊様の秘宝！」
モンモランシーが驚愕の声をあげる。
そんなにすごいものなのか。
しかし……。
「いらん」
「なぜだ天の眷属。単なる者なる喜んで受け取るものだ。過去には我らから奪おうとした者までいるほどの秘宝だぞ？」
「もらったとしても僕なら破壊するか封印する」
「なぜだ。その力をふるいたくないのか？」

ふん、確かに便利な力に聞こえるが。
おそらくそれは誰にでも使えるたぐいのマジックアイテムだろう。
自分の手にあるうちはいいが、奪われたらそれで終わりのたぐいの代物だ。
そんなものは秘宝とはいわん。
呪いの品か死亡フラグというんだ。
そんなものをもらって毎日指輪が奪われないか心配して暮らすなんて冗談じゃない。
「僕はそんなものはいらない。必要がない。それは持ち主を不幸にするものだ」
水の精霊は沈黙し、モンモランシーは僕の物言いに目を見張った。
「ふふふ、愉快だ。とても愉快だぞ天の眷属よ。おまえがなぜ天に選ばれたのかを理解した気がする。おまえのいうとおりだ。これは持ち主を不幸にする。だから我らが元に封印した。いつか正しく使う者が現れることを祈ってな」
「そんな日はこない。その指輪を望むこと自体がその人間が不幸である証のようなものだ。そんな人間がその指輪を正しく使えるはずがない」
「なるほど。しかし我らはこの指輪の正しい使い方を思いついた。受け取るがいい」
水人形の手の中でアンドバリの指輪が砂のように崩れ去った。
「壊したのか？」
「いや、魔力を使い切った」
使い切っただと？
「……なにに使った？」
「アンドバリの指輪のすべての魔力をもって、天の眷属の魔力を増大させた。必ず役に立つだろう？」
僕の魔力を増大させた？
まさか、別になにも変わっては……。
『あの～魔力が微妙に変わったみたいですよ？　試しに使ってみた

らどうですか？』

セラファナがいうなら、確かに魔力が変わったのだろうな。

馬鹿女だが、カミサマだからな。

『微妙に傷つきますね～、いい加減天罰落としますよ～』

いつものように全身に魔力を流し、魔力で満たし、身体能力を向上……な、なんだこれは！？

そばにいたモンモランシーが吹き飛ばされ尻餅をついていた。

僕の身体から魔力が漏れ、全身を覆っていた。

僕をもってして完全に制御出来ないほど、この魔力は、強い！

軽く拳を握る。

身体能力もおそらくいままでとは比較にならないほど向上しているだろう。

『おおー、い、いまこそディアス・ラグの真価を試すときですよ！湖の向こうに向かって魔力を込めた拳を打ち出してください。全力で！　技名はハーケンでお願いします！』

いやに熱狂するカミサマ。

そして僕の中に技のイメージが送りこまれてきた。

これか。

きっと本家ディアス・ラグの技とかあの馬鹿女が好きな漫画の技だったりするんだよな。

しかたない。ものは試しだ。

拳を握り全力で魔力を込め、両足は大地を踏みしめ拳を振り上げ、振り抜いた。

「ハーケン！」

まるで拳から竜巻でも発生したようだった。

周囲を砂埃が舞い。拳から打ち出されたおそらくは空気の刃は暴風をまき散らして対岸に消えていった。

……あれ、対岸に被害が出たりしないだろうな？

『すごいです！　まさに『黒い翼』のハーケン！　クルダ流交殺法表技ですよ～』

やっぱりか。
「気に入ったか天の眷属よ」
「ああ、完全に制御するのにしばらくかかりそうだけど役には立ちそうだ。心から感謝する」
こんなに手軽に戦力アップが出来るとは思わなかった。棚からぼた餅か？
いまならあの映像の戦場に放り込まれても無双して勝てるんじゃないか？
『いえいえ、無双したかったらクルダ流交殺法を極めるぐらいしないと無理でしょう。いまのあなたは馬鹿力だけが売りの状態ですよ～』
わかっているさ。訓練は怠らない。
『なので後で私が知る限りのクルダ流交殺法のイメージを送っておきますね。きっといまのあなたならなんの苦労もなく再現出来るでしょう。楽しみです～、ああ愛しのディアス・ラグがこんなにお手軽に再現出来るなんて～』
クルダなんとかは可能な限り使わない。そう心に決めた。
『な、なぜ？』
モンモランシーを見てみろ。
かわいそうに腰を抜かしてこちらを見つめている。
あの眼はちょっとおびえてそうだな。
嫌われたかもしれない。
魔法万能主義のこの世界で、魔法も使わずにあんな天変地異技使ったらあっという間に人外認定食らうわ。
よほどやばくならなければ使わないのが得策だ。
『あうぅ、もったいない～』
確かにこの戦闘力は惜しいが、普通ならここまでの力はまず必要ないだろう。
必要になったら、そのときは躊躇はしないが。
『でも一応技のイメージは送っておきますね。いざとなったら使っ

て、魔法で強化しているからこのぐらい出来るとか言い訳してくださ い～』

それしか手がないな。

モンモランシーにもそういっておこう。

「それでは我らは戻る。我らはいつでも共にある。いつでも呼んでくれ、盟友よ」

水の人形か湖水に消え、僕はモンモランシーに手を伸ばした。

「大丈夫か？　すまない。あんなに魔力が漏れるとは思わなかったんだ」

「ま、魔力？」

「ああ、君にも教えただろう？　全身に魔力を巡らす魔力制御法を」

「そ、それで、あんなことができるんですか？」

モンモランシーは意識してか無意識が差し出された僕の手を取らない。

「君には初歩を教えた。あれは訓練を続ければ強力な身体強化能力が得られる。たとえば僕の妹みたいな女の子でも大人の兵士を殴り飛ばせるぐらいにはなれる。さらに極めれば、そして強力な魔力があればあんな事も出来る」

「……あれは魔法なのですか？」

「魔力を使っているのだから魔法なんじゃないのかな？　君も訓練を続ければあの威力はどうかと思うけど魔力の刃や衝撃波ぐらいは出せるようになるよ。コモンマジックみたいなものさ」

納得したのかどうか、モンモランシーはようやく差し出された僕の手に気がついて手を伸ばした。

抱え上げるように優しく立たせると彼女は真っ赤になった。可愛いなぁ。

「それで、あ、あの水の精霊様とのあの話はいったい？」

「ああ、それは説明するよ。けれど説明するのは君だけだ。他の人にはただ僕が水の精霊に気に入られて契約したといってくれないかな？　モンモランシ家の交渉役復帰の願いは水の精霊と契約した僕

が願ったからということでいい。ただ世界を襲う悲劇だとか精霊の力のバランスとか、そういう詳しいことは僕たちだけの秘密だ」

「私たちだけの……秘密」

「そう、秘密だ。まだいろんな人に話せる段階じゃない。いずれ時が来たら話す。それまで黙っていてもらえるかな？」

モンモランシーはじっと考え込んだ。

「……私たちはこのままだと死んじゃうんですか？」

「そうしないように僕は精霊に頼まれたのさ」

安心させるように微笑むとモンモランシーは顔をこわばらせた。

あれ、失敗したかな？

「あなたは、一人で精霊の与えた使命に挑むのですか？」

使命を与えたのは元を正せばカミサマなんだよな。いわないけど。

「そうだね」

モンモランシーはじっと考え込んだ。

急かしてはいけない。

強引に迫ってもいけない。

あくまでも彼女に考えさせ決断させなくては約束は守れない。

僕は内心冷や汗だらだら流しながら彼女の返答を待った。

「私も、連れて行ってください」

はい？　なんですと？

「きっともっと強くなります。必死にがんばります！　だからなんでも一人で背負い込まないでください。私が一緒に……ディアス殿下と一緒に戦います」

僕は驚いて少女を見つめた。

多少の苦労はしたとはいえ、しょせん箱入りの貴族のお嬢様が世界の危機に一緒に挑むという。

事態を甘く見ているのか？

それともなんとかしなければ自分も家族も死ぬという現実に立ち向かおうというのか？

君がどうこう出来ることじゃない。

そういいかけて僕はやめた。
最近は天才児だのなんだのもてはやされているが、僕だって元を正せばただの読書マニアだ。
戦うというのならば、そのために強くなるというのならば。
歓迎しよう。
共に戦う同志として。
「わかった。一緒に戦おう。世界に悲劇を訪れさせないために」
「はい……ディアス殿下」
僕は少し不満に感じた。
「ディアスでいい」
「え？」
「僕も君をモンモランシーと呼ぶ。だから僕のこともディアスでいい。僕らは友人で共に戦う戦友で、同じ目的に向かって努力する同志だろう？」
モンモランシーはようやく笑顔を見せた。
彼女の庭に咲く花のようなきれいで香り立つような笑顔だった。
そして僕は初めての仲間を得た。

五章　ラグドリアン湖の水の精霊（後書き）

世界の悲劇を覆す者ディアスがさらなる力と仲間を得る話です。
カミサマと精霊から使命を託されたディアス。
このまま王道勇者ルートへ行くのかな？

あ、あと地味にレコン・キスタ失敗フラグが立っています。
アンドバリの指輪がなくなったらエセ虚無のおっちゃんはさぞ困るだろうなぁ。
けけけ、作者はレコン・キスタの連中が嫌いです。

追伸　内容を若干修正しました。

六章　人々の思惑（前書き）

今回は前回の騒動の余波を被った人々を焦点に当ててみました。

しかし改めて読み返してみる誤字脱字がちらほらと、今度時間をとって修正しないとダメですかね。

六章　人々の思惑

・モンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシ視点・

今日私ははじめて両親に嘘をついた。
それも重大な事実を押し隠す嘘だ。
けれど私の胸に罪悪感はなく、むしろ誇らしささえ感じていた。
これはディアスと私だけの秘密なのだ。
ディアスは私にいろいろ教えてくれた。
この世界の精霊の調和の乱れ、その結果による風の精霊の暴走。
そして起こる地下に蓄えられた膨大な風石鉱脈による大陸浮遊現象。
空に浮かぶ大陸であるアルビオン大陸のようになれればいいが、大抵の大地は崩れ落ち、そこに住む人々は死ぬであろう事。
それを防ぐためには風石の暴走を押さえ、風の精霊の暴走を鎮めて精霊たちの調和を取り戻さなければならないこと。
けれどまだなにをしていいかわからないこと。
それをこれから精霊と相談しつつ探っていくこと。

その説明を受けながら私は疑問を感じた。
つい先ほど精霊に使命を受けたばかりにしてはディアスは実によくその悲劇のことを知っていたからだ。
そのことを尋ねるとディアスは顔色を変えた。慌てたようだ。
そしてしばらく黙り込んでから「くれぐれも秘密だ」と念を押して明かしてくれた。
自身の秘密を。
自分が神と名乗る者によってすでに同じ使命を受けていたことを。
それは始祖なのだろうか？　そうたずねると違うらしい。

「いまだ誰にも知られぬ神」
そう名乗られたらしい。誰も知らない神様……そんなものが本当にいるのだろうか？
ディアスはそんな私の疑問にも気分を害すわけでもなく、もっともだと肯いた。
彼も半信半疑だったらしい。
けれど今日水の精霊様に同じ使命を託されたことで信用することにしたらしい。
天の眷属。
そう呼ばれていたことを尋ねるとディアスは苦々しい顔をしていた。
その呼び方が嫌いらしい。
その神がいうには彼は生まれたときからその悲劇を回避する使命を帯び、神の加護を受けていたらしい。

生まれながらに重大な使命を受けていた子供。
だからそれを知ったときから懸命に努力したと彼はいった。
いずれ来たる使命を果たすときにそなえて必死に努力したのだと。
その結果がクルデンホルフの天才児という評判であり、十歳にしてスクエアメイジという実力なのだろう。
さらに水の精霊との契約により精霊の加護と、魔力の強化までされている。
そこまでしなければ果たせない使命なのかと私は気が遠くなりそうな自分を叱咤した。
私はディアスについていくと、彼の力になると決めたのだ。
彼と一緒にいたいという邪念があることは否定出来ないが、決めた以上は絶対に彼の力になる。足手まといになんてならない。
これからはもっと必死に努力しよう。
少なくともトライアングルクラスに、可能ならさらに上を目指そう。

そして実戦向けの訓練もしよう。戦いに使える魔法もいっぱい覚えて訓練しよう。

ディアスに教わった訓練法を使えば、身体能力の向上も出来るらしい。

運動が得意でない私でも戦えるぐらいにはなれるかもしれない。

私は父や母に真実を隠し、ディアスが水の精霊様に気に入られて契約しその加護を得たと報告した。

そしてディアスの願いによりモンモランシ家は再び水の精霊様によって交渉役に任じられ、その交渉役には私が指名された。そう報告した。

両親は驚き、水の精霊の加護を受けたディアスを讃え、交渉役に任じるように願ってくれたことに感謝した。

交渉役復帰という降ってわいた幸運に両親の喜びようは娘として恥ずかしいぐらいのはしゃぎぶりだった。

普段私に淑女らしくと叱る母まで涙を流し声を上げて喜んでいる。

両親が喜ぶのはうれしいし、家のためにもなったとも思うのだが。

ディアスや大公殿下が見ているのだからもう少し自重して欲しいと私は恥ずかしさに身を縮こまらせていた。

・モンモランシ伯爵視点・

今日は我が家にとって実によい日だった。

我が家に訪れていた大公殿下のご子息ディアス殿下が水の精霊に気に入られその加護を得たらしい。

それはすばらしいことだが我が家にはあまり関係がない。

大事なことはそのときディアス殿下が我が家を再び交渉役に任じるように水の精霊に頼んでくれたことだ。

そしてあの高慢な水の精霊は意外にもそれを受け入れ、我が家は

めでたく交渉役の名誉を取り戻すことが出来た。
交渉役に当主である私ではなく娘を指名されたのは仕方がない。
私は水の精霊に嫌われているのだからな。
私もあの水の精霊が嫌いだ。
人間を見下しているあの態度にはいらいらさせられる。
さいわいなことに娘はディアス殿下の指導のおかげで立派な水のメイジとしての才能を開花させた。なんの心配もない。
さっそく後日王宮に報告して正式に交渉役にもどしてもらうように働きかけよう。
大公殿下も口添えを約束してくれたし必ず成功するだろう。
思わず大公殿下の前で妻と抱き合って歓声をあげてしまったほど、私たちは降ってわいた幸運に感謝し、喜んでいた。
もう大公殿下やディアス殿下には感謝してもしたりない。
出来るならば娘を嫁に出してもいいくらいだ。
それからしばらくして落ち着くと、娘の様子がおかしいことに気がついた。
ディアス殿下と名前で呼びあい。ディアス殿下のこととなると妙にムキになり、たまに頬を可愛らしく染める。
妻が一発で見破った。
娘は恋をしていると。
相手は確かめるまでもない。

クルデンホルフの天才児。
精霊の加護を受けた少年。
ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ殿下。

私は無理だと考えた。
確かに私は大公殿下とは旧知だ。友人といっていい。
モンモランシ伯爵家も名家だ。家柄的にけして釣り合わないわけでもない。

交渉役に戻れば名誉も経済状態も回復するだろう。
問題は私の愛する娘が私たちのたった一人の子供ということだ。
このままなら娘は婿を迎えてモンモランシ家を継いでいかなければならない。
ディアス殿下は大公家の期待の跡取りだ。
婿になどもらえるはずはない。
かといって娘を大公家に嫁がせれば、モンモランシ家を継ぐ子がいなくなる。
私は妻と話し合った。
はやいうちに諦めさせるべきだろうかと。
しかし幼い娘にそれはあまりにもつらいことではないか。
話し合いはながく続き、我々は一つの結論を得た。
奇策といってもいい。
娘の恋は応援しよう。嫁にいくというのならば可能な限り尽力しよう。
ただしモンモランシ家も娘に継いでもらう。
名目上は嫁入りした娘を代理当主にして実質は大公家が領地を治める。
そして二人の間に子供が生まれればその子を次期モンモランシ伯爵にする。
嫁入り先が普通の貴族ではこの方法は使えないだろうが、相手が独立国であるクルデンホルフ大公家ならばなんとかなるはずだ。
大公家の力は莫大だ。伯爵家一つを代理統治するぐらい可能なはずだ。
そのためにはまず根回しをしなければならない。
貴族たちを黙らせ、王家に認めさせなければならない。
難しいが不可能ではない。
とどめに大公家からの支援が入ればこれはもう確実だ。
根回しは私が時期を見ておこなっておこう。
そして同時に大公殿下と婚姻の約束を取り付けて、政治工作に協

力してもらえば……。
不可能ではない。
いや十分実現可能な未来図だ。
娘も幸せになり、モンモランシ伯爵家も安泰。
おまけに次期当主である子供は大公家の血筋を、引いては王家の縁戚の血筋を引くことになる。これほどよい話はない。
ふっふっふ、これは実にやりがいのある仕事ではないか。
娘のため、モンモランシ伯爵家のために。
私はこの仕事をやり遂げようではないか。

・オルトルス・フォン・クルデンホルフ視点・

モンモランシ伯爵領から帰ってきた私は自室にこもり頭を抱えた。
息子がまたやらかしてくれた。
いや悪いのはディアスではない。
悪いのは物好きにも我が息子に加護など与えた水の精霊だ。
ただでさえクルデンホルフ大公家始まって以来の天才と呼ばれ、十歳にして風のスクエアに上り詰め、表沙汰には出来ないが神を名乗る者から使命まで与えられている息子だ。
モンモランシ家の娘に魔法を指導したのはいい。
その結果モンモランシ伯爵が娘は魔法の才能に乏しいと嘆くほどであったのが、あっという間にラインクラスになったのはまぁいいとしよう。
我が息子が妹を指導してトライアングルクラスまで育て上げたのはすでに有名だ。
いまさらな話で驚くほどではない。
もしかしたらこれを機に、貴族どもから自分の子供を指導して欲しいなどといってくるかもしれないが、そんなものははねのければ

いい。
私の息子は貴族の子弟相手の家庭教師ではない。
それはいい。別にいい。まだましだ。
問題は精霊と契約してその加護を得たということだ。
なんだそれは？　聞いたことがない。前代未聞の珍事だ。
念のため息子に確認したら、どうやら本当に精霊の力を借りた魔法が使えるらしい。
好奇心の強い我が息子はさっそく試してみて、成功させてしまったらしい。
精霊の力を借りた魔法？
まるでエルフの魔法のようではないか？
下手をすればロマリアから異端審問官が来るぞ？
もはやため息も出ない。
私は息子を守れるのだろうか？
いやいや、ここで弱気になってどうする。
私はなにがあっても息子を守ると誓ったのだ。
それにしても水の精霊め、余計なことをしてくれおって、私の愛する息子を破滅させたいのか！
こんな事なら連れて行くのではなかった。
いまさら後悔しても遅いがそうとしか思えない。
もはや手遅れではないか？
私は息子を守れないのではないか？
噂を聞きつけ王宮やロマリアあたりから使者が来るのはそう遠くないのでは？
いかん、どうも弱気になっているようだ。
そうだ妻に報告しよう。そして相談しよう。
私の悩みを共有してくれるのは妻しかいないのだから。特に我が息子関係においては。
本当に世話の焼ける息子だ。親を困らせてばかりいる。
本人は別に悪くないところが余計にたちが悪い。叱ることも出来

ない。
才能におぼれることなく責任を自覚し、常に努力を欠かさない我が息子は本当の意味で天才に違いないと認めていた。
才能におごり傲慢になって破滅する愚か者などとは違うのだ。

それはいいのだ。
いいことなのだ。
きっといい息子なのだ。

なのになぜか問題ばかりが次々とわきだしてくる。
私は息子の才能に喜ぶだけの無邪気な父親には生涯なれないらしい。
まぁ、息子誕生のおりに神を自称する存在にあんな馬鹿げたことをいわれれば、それも仕方ないと思えるが、若干寂しい。
せめて娘は普通であってくれと願い。
その願いは始祖によって叶えられたと思ったらこれも息子が台無しにした。
いや、これも我が息子は悪くない。
兄との才能差に悩む妹に泣きながら相談を受ければ、それなら自分が指導して才能を伸ばしてやろうと思うのは兄ならば当然だ。
私の息子は妹に本当に甘いからな。
娘が恋人でも連れてこようものならその男に決闘を挑みかねない。
私はむろんそんな大人げないことはしない。
ただほんの少し我が娘とつきあうにふさわしい男か試すかもしれないが。
その結果として魔法で吹き飛ばすかもしれないが。
それは父親として当然の……いわば義務だろう?

・エレーナ・イシス・フォン・クルデンホルフ視点・

また私のディアスがなにかしでかしたらしい。
本当にあの子は……騒動がやってくる妙な運命を背負っているようですね。
夫が気落ちした様子で詳しい事情を話してくれた。
なんとまぁ、前代未聞だった。
私のディアスが今度は精霊の加護を受けて、しかも精霊の力を借りた魔法が使えるようになったらしい。
なんですかそれ、エルフが使う先住魔法みたいなものですか？
夫も詳しくはわからないらしい。
肝心の息子も先住魔法を見たことがないから違いがわからないらしい。
私はもはや途方に暮れかけている夫を眺めてため息をついた。
本当にあの子は……なんというかどんどん常人の境界線を平然と越えていきますね。
さてどうすべきかと冷静に考える。
隠しとおすのは無理だろう。
こんな大事件が隠蔽出来るはずがない。
トリスティインの象徴のような水の精霊が私のディアスを選びその加護を与えた。
王族でさえ、そんなことがあったなどという話は聞かない。
あっという間にトリスティイン中に広まるに違いない。
そして真っ先に騒ぐのは王宮だろう。
王族でもあり得ないような栄誉を大公家の息子が得たのだ。
特に王族は心穏やかではないだろう。
だがそれはどうにかなる。
息子は大公家の血筋、つまり王族の血を引いているのだ。
うまくなだめられるはずだ。

もう一つはロマリア。
熱心なブリミル教徒から見れば精霊の加護を受けた息子は異端に等しく扱われかねない。
彼にとっては始祖ブリミルの残した魔法こそが唯一であり、それ以外の魔法など認めるかどうか。
まして精霊の力はエルフの力という認識が強い。
そう考えられたらさすがにまずい。
どうするか。
隠蔽は不可能。
ならばいっそ開き直るか？
トリステインは水の王国。
水の精霊はトリステインの象徴。
その加護を受けた息子は誰よりもトリステイン貴族としてふさわしいと水の精霊に認められたということにしてはどうか？
水の精霊がなぜ息子を選んだかなど誰にもわからない。
それならばそう主張してしまったもの勝ちだ。
それに息子は十歳にして風のスクエア、水のトライアングルになった魔法の天才だ。
周囲もあの天才児ならと思わせられるかもしれない。
私は考えをまとめて夫に話した。
次第に夫の顔に生気がよみがえってくる。
「うむ、そういうことならこちらから王宮とロマリアに使者を立ててこの件を報告しよう。こちらの主張を含めて、な」
「それがいいでしょう。不確実な噂が広がるよりもはやく首根っこを押さえるべきです」
「王家とロマリア相手に首根っこを押さえるか、大それた事だな」
「そのくらい出来なければあの子の親はつとまらないでしょう」
夫は乾いた笑いをあげた。
これからの苦労を思うと気が重いのだろう。
私たちはきっとこれからも息子のことでは苦労することだろう。

しかしそれは息子が生まれたとき、あの声と向き合ったときにわかっていたことだ。
そしてこの子を守ると決断した。
それならば出来る知恵と力を使って私たちの息子を守る。それが私たちの使命であり運命なのだろう。

ようやく気を取り直した夫にはいわないが私は少し疑っている。
水の精霊は本当に息子を気に入って加護を与えただけなのだろうか？
確かに私のディアスは天才といっていい。こんな人間はそうはいないだろう。
だけどそれだけだろうか？
ラグドリアン湖の水の精霊といったら水を司る神といって差し支えない存在だ。
もしかして息子の背負う使命を知ってそれで力を与えたのではないだろうか？
そしてその使命を息子に話したのではないだろうか？
これからはもっと慎重に息子を見守る必要があるかもしれない。
もしあの子が使命の重さに苦しんでいるのなら母親として手をさしのべなければならないだろう。
夫にもいずれいう必要がある。
けれどいまはいい。
いまは王宮とロマリアへの対処に専念してもらおう。
息子のことは私がしっかり見ていよう。
私の可愛いディアスが苦しまないように、もし泣きたくなったときに抱きしめてあげられるように。
それが母親の義務だろう。

六章　人々の思惑（後書き）

モンモランシーの決意とモンモランシ伯爵の悪巧み。
さらに主人公の両親の苦労。
うちの主人公はこの両親がいなければ破滅ルートまっしぐらですね。
実に頼りになる両親です。

追伸　内容を若干修正しました。

七章　ヴァリエール公爵家（前書き）

原作ヒロイン登場の回です。

七章　ヴァリエール公爵家

・ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド視点・

ヴァリエール公爵家にあのクルデンホルフの天才児が招かれる。
そのことを耳にした僕はヴァリエール公爵にお願いして同じ日に自分も招待してもらえるようにした。
世間で評判の十歳にして風のスクエアメイジなどということに僕は興味はない。
きっと才能に恵まれ向上心があり、努力を怠らなかった人物。
ただそれだけだろう。
けれどこの噂が僕には重要だった。
「彼は水の精霊に認められその加護を受けた人物らしい」
ヴァリエール公爵の興味もこれだろう。
水の精霊の加護を受けた魔法の天才。
聞けば水の系統もトライアングルクラスらしい。
不治の病に苦しむカトレア嬢を治療出来る可能性を信じて招いたのだろう。
僕も公爵家に生まれながらも病弱でろくに普通の生活をすることも出来ない彼女を哀れに思う。
公爵も僕が彼女のことを心配して様子を見に来ると思った節もある。
なにしろ家族ぐるみのつきあいで気心も知れている。
そう思われてもおかしくない。

けれど僕の興味は彼だ。
ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ殿下。
この時期に精霊の加護を受けた魔法の天才。
まるでこれから起こる悲劇にそなえるように力を与えられた天才

児。
　将来起こるであろうあの悲劇の原因は精霊の力の暴走である可能性が高いと思っている。
　もしやこの少年は水の精霊からそのことを聞いていないか？
　なにか解決策を授けられたのではないか？
　僕にはそう思えてならない。
　そうでなければ不自然すぎる。
　過去に水の精霊の加護を受けたメイジなどいなかった。
　それが母の研究が示していた世界の危機が近づきある現在、一人の若い天才メイジに水の精霊が接触し、力を与えた。
　偶然とは僕には思えなかった。
　考えすぎかもしれない。
　けれど確かめてみる価値はある。
　ちがっていたらそれでいい。いままで通りに僕は一人で可決策を探すだけだ。
　だが、もし彼が想像通りの人物だったなら……。
　僕は重要な手がかりと強力な味方を得られるかもしれない。
　僕はその日を心待ちにしていた。
　子供とはいえ男に会うのにこれほど胸を焦がすのは初めての経験だった。
　噂ではずいぶん見目麗しい少年らしい。
　どうせなら女の子であればよかったなどと思う。
　そんな馬鹿げたことを考えられるぐらいには僕にもまだ余裕はあるようだ。
　ああ、楽しみだ。
　どうか僕の期待に応えてくれよ。噂の天才少年。

・ヴァリエール公爵視点・

「はじめまして、公爵閣下。僕はディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフです。以後よろしくお願いします」
初めて会った少年はまさに大公家の人間にふさわしい物腰と魅力の持ち主だった。
人を引きつけてやまないだろう笑顔に態度。
おそらく大公家でも人望があるに違いない。
噂のアルビオン王国のプリンス・オブ・ウェールズにも劣らないだろう。
いや、魔法の才を考えればこちらが上かもしれん。
こんな息子が私にいれば、とふと思う。
クルデンホルフ大公がうらやましい。

私は妻との間に三人の子に恵まれたが全員が女の子だった。
しかも長女は気位が高く、気が強く育ってしまったため男どもに敬遠されておるし、
次女は生まれつき病弱でいままでどんな高名なメイジの治療を受けても治癒出来なかった。
三女も長女ほどではないがいささか気が強くわがままだ。
しかも魔法の才能は絶望的ときている。
私は娘たちを愛していたが、公爵家の先行きを考えると頭が痛いのも事実だった。
そんな私にはこの少年は正直目に毒だった。
こんな息子がいれば、いや婿でもいい。
こんな跡取りがいればとそんなことばかり考えてしまう。
挨拶もそこそこに、用件を切り出す。
いささか礼を失する態度だが、幸いにも大公家の少年は特に気を悪くするでもなくこちらの心情を察してくれた。
「では早速カトレアの治療を試してもらえないだろうか？」
少年はいやな顔一つ見せず了承した。

渋る大公を半ば脅すような形で無理矢理息子を呼び寄せたのも、すべては難病に苦しむ娘のためだった。

水の精霊の加護を受けた魔法の天才。

私はその噂を聞いたとき本気にはとらなかった。

しかし直後に大公自身が王宮にやってきて、息子がラグドリアン湖を訪れた際に水の精霊の加護を受け、その力を借りることが出来るようになったと報告したのだ。

王宮内は大騒ぎになった。こんなことは過去に前例がない。

ラグドリアン湖の水の精霊。

水の王国トリステインの象徴的存在であり、莫大な力をもつ水の神のような存在だ。

またその力は特に怪我の治療や病の治癒に優れているという。

水のメイジなどとは比べものにならないほどに、だ。

私の強引な要請に大公は息子を寄越すことに渋々同意したが、交換条件を出した。

それは息子のことだった。

メイジでありながら水の精霊の加護を受け、その力を使える息子はいろいろな者から目をつけられやすい。

大公は治療の結果によらず息子を守ることに協力しろといってきた。

私は了承した。

確かに口やかましい貴族どもが騒ぎそうな話だと感じていたからだ。

王家でも例のない精霊の加護を受けた王家の傍系の大公家の人間。

いろいろな厄介ごとが起きる可能性がある。

しかもいまこの王国は王座が空位という前代未聞の状態だ。

本来なら先王が崩御された以上、太后マリアンヌか、アンリエッタ王女が王位を継ぐべきなのにマリアンヌ太后は政治に関わろうとせず。アンリエッタ王女は幼さを理由に王位につくのを拒否してい

る。

そこへアンリエッタ王女とそう歳の変わらない、王家の血を引く少年が脚光を浴びはじめた。

十歳にして風のスクエア、水のトライアングルになった天才児。

しかもトリステイン王国初かもしれない水の精霊の加護を受けた人物。

しかも会ってみればこういっては不敬だが箱入り娘なアンリエッタ王女などよりよほど王族らしい器量を持つ大公家の息子。

水の王国トリステインの王に水の精霊の加護を受けた天才を迎える。

貴族どもが騒ぎそうな話だ。

大公に野心があればちがうだろうが、大公は権力や王座に野心などかけらももっていないように見える。

彼の関心事はクルデンホルフ大公家と大公領の維持と発展だろう。

そのために絶対不可欠な跡取り息子を王家にとられるなど我慢出来ないだろうな。

私はその条件を承諾し、結果がどうあろうと大公に協力すると約束した。

本心だ。

たとえ治療に失敗しようとも、大公や大公の息子を恨むことなどあり得ない。

そんな感情を抱くにはあまりにも治療に失敗する人間を多く見過ぎていた。

彼に頼むのも、一縷の希望にすがるようなものだ。

内心ではそれほど期待してはいない。

そんな私のわがままに応えてくれた大公親子に悪いようにすることなどあり得ない。

それは貴族の誇りを捨て去る行為だ。

カトレアの部屋でベッドに腰掛ける娘に丁寧に挨拶して彼は診察

を始めた。
意外な思いだった。
彼は病人の診察の経験があるのだろうか？
それほど彼の手際はよく、態度も落ち着いたものだった。
まるで熟練の水のメイジを見ているようだった。
とても末娘である私の小さなルイズと同じ歳とは思えない。
魔法でカトレアの身体を診察してから、彼はしばらく考え込んだ。
小さくなにかを呟いたが聞こえなかった。
そして彼は「コップに水を一杯、お願いします」と頼んできた。
のどが渇いたのかと思って飲み物を用意させようとすると重ねて
「水をお願いします」といってきた。
訳がわからない。
いうとおりに用意させるがテーブルの上に置かれたコップを前に
我慢出来ずに尋ねた。
「これはなにか意味があるのかな？　治療に使うのか？」
少年はなんとも言いづらそうに答えた。
「診察の結果、僕の扱う系統魔法では不可能だと感じました。なの
で用意させました」
「なんのために？」
系統魔法での治療は不可能といわれてショックだったが、またか
と思ってその想いを押し殺した。
それより彼がこれからなにをやるのかが興味深かった。
「我が盟友を呼ぶために」
そういうと彼は悪戯っぽく微笑んだ。
「我が友、水の精霊よ。力と知恵を貸してくれ。ここに来てくれな
いか？」
そう彼はコップの水に語りかけた。
するとコップの水から小さな水の小人が現れた。
私は呆気にとられた。
まさかこれは……。

「盟友よ。いつも窮屈なところに呼ぶものだな？」
「すまないね。この方が便利なんだ」
「まぁいい。それで今回はなんだ」
「彼女の病を治して健康体にして欲しい」
彼は平然と水の小人と会話を交わした。
まさかあれは水の精霊なのか？
「盟友よ。契約だから文句はいいたくないが、おまえは本当に我らを扱き使うやつだな」
「感謝していますよ。寛大なる水の精霊にして我が盟友よ」
やはり！
彼は水の精霊をどこにでも召喚出来るのか！？
そして私が呆気にとられている間に治療はスムーズに進んだ。
我が娘ながら私よりもよほど胆力のあるカトレアは平然と水の精霊に自己紹介していた。
水の精霊にいうとおりにカトレアはコップの水を一口飲んだ。
しばらくするとカトレアがなにやら驚いた顔をしていた。
「どうかな？」
「治療はした。その単なる者はもはや健康体そのものだ。ただ若干弱っているがそれは自分でなんとかしろ」
「感謝するよ。盟友」
「かまわない。たいした手間ではなかった。またいつでも呼ぶといい」
そういって水の精霊はコップの中に消えた。
私はようやく口を開くことができた。
「ディアス君。その、カトレアの治療は本当に成功したのか？」
「ええ、水の精霊の保証付きです。ただ少し身体が弱いそうなので少しずつ運動をして体力をつけるといいでしょう」
「カ、カトレア？　気分はどうだ？」
「はい、驚くほど身体が軽くて気分もいいです。こんなことは初めてです」

私は思わず床に膝をついた。
長年の悲願が目の前であまりにもたやすく叶えられてしまったことで気が抜けてしまったようだ。
「お父様、しっかりしてください」
そんな私をカトレアが支えて立たせてくれた。
私は涙をこらえるのに必死だった。
あのカトレアがこんなに明るく笑っている。
いつも笑顔だったが私の目にはどこか無理をしているのではないかといつも心配だった。
そのカトレアが健康になって私を支えて笑っている。
「治療を感謝する。ディアス君。屋敷でゆっくりくつろいでくれ」
それ以上言葉が出なかった。
私は自室へ向かった。
あそこなら人目はない。娘のこれからの幸せを願って泣こう。
それまでは我慢だ。
私は公爵家の当主だ。これ以上の無様は見せられない。
流れる涙をぬぐい。
私は足早に廊下を歩いた。

・ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール視点・

ちいねえさまの治療が成功したらしい。
治療の内容はなるべく内密にするというお父様の方針で私はちいねえさまの治療に立ち会えなかった。
立ち会ったのはお父様だけ。
お父様は教えてくれないだろうから、後でちいねえさまにこっそりどんな治療法だったのか聞いてみよう。

応接間でお母様が治療を成功させた男の子にお礼をいっている。
ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ。
いま評判の天才少年だ。
噂では水の精霊の加護を得たと聞いたけどほんとなのかしら？
もし本当ならちいねえさまを治療したのも水の精霊様の力なのかも。
見た目はきれいな男の子だった。
お母様との会話もしっかりしていてとても同い年には思えない。
とても大人びているように見える。
いまこの部屋には治療を成功させた恩人である男の子と、お母様、それと治療を受けたばかりのちいねえさまが元気そうな様子で同席していた。
こっそり大丈夫なのですか？　と尋ねたら「もう心配はないのよ」と笑顔で答えてくれた。
どうやら本当に治ってしまったようだ。
お父様はなぜかこの場にいない。
お母様はそっとしておいてあげなさいといって気にしていないようだった。
客の立場の男の子もお母様が非礼を詫びると「気にしていませんよ」と問題にしなかった。
二人はお父様の気持ちがわかっているように見えた。
私にはわからない。
お父様は本当ならここで真っ先にお礼をいわなければならないのではないだろうか？
それが貴族としての礼儀だと思う。
そんな不満が顔に出ていたのか隣に座っていたもう一人の客であるワルド様が私の頭を軽く撫でた。
「小さなルイズ。君にはわかりにくいと思うけど男には一人になりたいときがあるのだよ」
ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド子爵。

私のあこがれのお兄様だ。
若いのにもう風のスクエアで魔法衛士隊に所属しているエリートだ。
亡くなったお父様が私のお父様と友人だったらしく家族ぐるみのつきあいで本当のお兄さんみたいに優しい人だ。
今日はちいねえさまの治療を見届けるためにわざわざ休暇を取って駆けつけてくれた。
ワルド様もこの男の子に期待していたのかな？
「ディアス殿下は自身が魔法の天才であるだけでなく指導者としても優れておられるとか？　妹君のベアトリス殿下やモンモランシ伯爵のご令嬢に魔法の指導をされてその才能を開花させたとうかがっております」
「自己流でとても威張れたものではありませんが、多少お教えしました」
「ご謙遜を。モンモランシ伯爵はたいそう殿下に感謝しているそうですよ。娘の才能を見いだし育ててくれた恩人だと」
おかげでクルデンホルフ大公の息子に子供の魔法の教師を頼もうとする貴族が大勢いるらしいとお母様は語った。
「すべて大公殿下に断られているらしいですけど。息子は家庭教師ではないと」
「僕などより専門の教師を頼んだ方がいいでしょう。僕の教え方はあくまで自己流に過ぎません」
「魔法など私にいわせればすべて自分で腕を磨くものです。そうではありませんか？」
男の子はお母様にやり込められて苦笑していた。
なんかいやな話の流れね。
いやな予感がするわ。
「そこにいるルイズはいままで様々な教師をつけましたがまったく魔法が上達しません。今日この場で知り合ったのも何かの縁でしょう。どうかルイズの魔法を見てやってくれませんか？」

「公爵夫人。僕はカトレア様の治療のために呼ばれたのです。魔法を教えるためではありません」
「そんなにたいしたことをして欲しいわけではないのです。少しこの子の魔法を見てなにかアドバイスなりしてくだされればとてもありがたいのですが」
やめて欲しい。
こんなきれいな男の子の前で恥をかきたくない。
「お母様、無理をいってはディアス殿下に失礼……」
遠回しに拒否しようとしたらすごい眼で睨みつけられ、舌が凍り付いた。
お母様怖い。
今に始まったことではないけど……怖すぎ。
「どのみち主人が戻って来るまでまだ時間があります。その間に少しでいいのです」
男の子は仕方がないといいたげに承諾した。
まったくため息をつきたいのはこっちよ。
「よし、なら僕もつきあおう。ルイズもこんな魅力的な男の子と二人っきりでは緊張して成功する魔法も失敗してしまうだろう?」
ワルド様がそう冗談っぽくいって微笑んだ。
私に気を使ってくれているのだろう。
けれど私の醜態をワルド様にも見せることになるなんて……。
ちいねえさまが元気になったのはうれしいけど……最悪の気分だわ。

庭の魔法の訓練場に行くと、私はいまさらながらこの男の子をなんと呼んでいいかわからず迷った。
さっきは殿下って呼んだけど、あれはお母様の前だったからで、家柄的にうちが上なのよね? でも相手はちいねえさまの恩人で大公家の跡取り、呼び捨てなんてとんでもないわね。
ここは無難に……。

「ミスタ・クルデンホルフ。まずなにをすればいいでしょうか？」
「僕のことはディアスでいいですよ。ミス・ヴァリエール」
「では私のこともルイズで」
「わかったよルイズ。では簡単な魔法を使ってくれるかな。得意系統の初歩でいいよ」
思ったより親しみやすい子だけど、なんとも酷な指示を出してくれた。
私は屈辱に耐えながら、申告した。
ワルド様が口を挟もうかどうしようか迷っていたけど、これは人にいわれる方が心にくるものがあるのよね。
「ディアス。私は得意系統に目覚めていないの」
ディアスは少し意外そうな顔をした後「なら、使えるコモンマジックを」といった。
自己嫌悪に震えながらさらに申告を繰り返した。
「コモンマジックも使えないのよ」
少し離れた場所で見学しているワルド様が気遣うような目でこちらを見ている。
その視線がいまは心に痛い。
ディアスはしばらく考え込んだ後。
「杖との契約は出来ている？」
と聞いてきた。
まさかここまで初歩の初歩まで出来ないとは思わなかったんでしょうね。
私だって思いたくないわ。
「契約は出来たわ。けれど使えないの」
「それは魔法が成功しないという意味かな？」
「ええ、失敗するの」
「どんな魔法も？」
「ええ、どんな魔法でも」
少し杖を見せて欲しいというから手渡そうとしたら出来れば手に

持って魔力を流し込んで欲しいといわれた。
いわれたとおりにするとディアスは首をかしげた。
「問題ないね。契約もしっかりしているし魔力も十分にある。制御だってたいしたものだ」
「それでもなんの魔法も使えないのよ」
私は自嘲した。いままで何人の教師が同じようなことをいったことか。
「それじゃ、ライトを使ってみて」
「使ってもいいけどまず確実に失敗するわ」
「それを見てどこが悪いか知りたいんだ」
思ったより真面目に教えてくれるらしい。
そんな彼をあの失敗魔法に巻き込むのは申し訳なく、私は彼に少し離れているようにいった。
彼は不思議そうな顔をしたけど数歩後ろに下がった。さらに下がってというと驚いたようだが素直に従ってくれた。
彼が離れたのを見届けてから私はできれば成功したいと奇蹟を願った。
杖に魔力を適量込めて、ほのかに明るい光をイメージする。
「ライト！」
勢いよく私の周辺が爆発した。

奇蹟はやはり、起きなかった。
「ルイズ！　無事か！？」
爆風で巻き上げられた砂埃を弱い風の魔法で吹き飛ばしながらディアスが駆け寄ってきた。
そして私の全身を見てとりあえず安堵したようだった。
「怪我はないか？」
「ないわ」
「服が汚れてしまったね」
「この程度いつもの事よ」

爆風で煤まみれになった服をはたいて私は強がった。
そんな私に彼は真剣な顔で問うた。
「いまのはなんだ？」
「魔法に失敗したのよ」
「いつもこうなるのか？」
「いつもこうね。もう慣れっこよ」
彼は真剣な顔で考え込んだ。
どうしたのだろう？
おかしくないのだろうか？　笑わないのだろうか？　呆れないのだろうか？
彼は真剣に考え込んで口を開いた。
「ルイズ、離れたものに魔法をかけられるか？」
「出来るわ」
すると彼は練金の魔法を使って、少し離れた場所に金属の射撃の的を出した。
「あれに向かって、そうだなマジックアローを使ってみてくれ」
「それは知らないわ。なんの系統魔法？」
「コモンマジックだ。やり方はこう」
自ら杖をふるって簡単にマジックアローを実演してみせる。
魔力の矢が飛んで的の中央に当たって消えた。
どうやらたいした威力はないみたい。
……いえ、ちがうわね。
魔力を押さえて的を壊さない威力にしたのね。たぶん。
「でもきっと失敗するわ」
「今度は離れた場所に魔法をかけるから、爆発で怪我をすることもない。もう一度見せてくれ」
熱心に頼まれて私は先ほど見た魔力の矢をイメージして杖をふるった。
やはり魔力の矢は現れずにただ的が爆砕した。
ちょっと力みすぎたわね。近くでなくてよかったわ。

ほらこの通りといおうと彼のほうを見ると彼は再び考え込んでいた。
「ルイズ。はっきりいう。君は魔法に失敗していない」
なにを言われたのかわからなかった。
「なにをいっているの？　失敗しているじゃない」
彼は厳しい表情で否定した。
魔法に失敗したならばなにも起こらない。
魔力が現象を引き起こせずにただ霧散する。結果なにも起きない。
爆発などしない。
しかも私は爆発をある程度制御している。
魔力がある程度制御され、爆発という現象を起こしている。
「ルイズ、君は魔法に失敗しているんじゃない。おそらく爆発魔法を制御し損なっている」
「そんな魔法聞いたことがないわ」
「僕もない」
あっさりいわれてどう反応していいかわからなくなった。
彼は続ける。
「しかし君を見る限り、魔法自体は成功している。ただし呪文の内容にかかわらずに爆発という一つの現象だけを引き起こしている。おそらく他の系統魔法でも同じなのだろう？」
「……ええ、同じね」
「考えられるのは君の魔力が爆発かあるいはそれに近いものに特化している可能性。もう一つは君が正しい呪文を唱えていない可能性だ」
理解出来ない。
魔力が爆発に特化している？
正しい呪文を唱えていない？
「正しい呪文を唱えているわ。どこも間違えていない」
「ちがう。そうじゃない。君の魔力を正しく発動させられる呪文を唱えていないのだと思う。それは普通の呪文とはおそらくちがうん

だ。君の魔法を見る限り呪文も正しく魔力も制御されているのに、魔力が放出された瞬間別の魔法に変化している。結果爆発している。おそらく通常の呪文では君の魔力を行使出来ないんだ」

その仮定を整理すると。

「君の魔力はおそらく四系統の魔法とはちがう魔法を操る魔力であり、それを正しく扱うための呪文は少なくともいま使っている呪文ではないのだと思う」

「意味がわからないわ。四系統以外の魔法ってなによ？」

彼はしばらく宙を睨み、ぽつりと呟いた。

「……まさか、虚無か？」

小声だったが私には聞こえていた。

私の系統が虚無？　あの伝説の系統？

なんておかしな事を考える人だろう。やっぱり天才って人とはちがうのね。

彼はしばらく呆然としていたがやがて首を振っていった。

「まぁ、そんなところが僕の推測だ。君は魔力制御、呪文の詠唱どれをとってもある程度出来ている。少なくとも普通ならドットクラスの魔法なら楽に扱えているはずだ」

まるでなにかをごまかすような笑顔だった。

まるで恥ずかしがっているような。それともいまの独り言をごまかしているつもりなのだろうか？

まさか本気で私が虚無の使い手と信じているわけじゃないでしょうね？

そんなこと、ある訳ないじゃない。

「つまりあなたでもどうしようもないということね」

「そうでもない。あるものを使えばいいだけさ」

天才でもどうにも出来ないだろうと嫌みをいうと、彼はそれに気づいた様子もなく微笑んだ。

「君は爆発魔法なら使えるんだ。ならいまはとりあえずその制御を完璧にしてしまえばいい。これはこれで強力な魔法だ」

「これが？」
「ああ、軽くコモンマジックを使っただけで金属製の的が木っ端微塵になるんだ。人間ならひとたまりもないし、亜人だって倒せるさ」
驚いた。私の失敗魔法をそんな風にいう人ははじめてだ。
さすが天才、発想が常人とは違うわね。
「爆発魔法を自由自在に扱えるようになってからちがう魔法のことも考えればいい。あるいはなにか方法が見つかるかもしれない」
あればいいけど。
「まぁ、なければないで使える魔法を使えばいいさ。ルイズには僕のとっておきの訓練法を教えてあげよう。それを訓練すれば魔力制御が格段に上手くなり、そのうち魔力を直に使う魔法が使えるようになる」
「なによそれ？」
いま見せるよというと彼の身体に魔力がみなぎった。
そして彼は軽い調子でジャンプした。その身体が５メイルは飛び上がったのを見て驚いた。
軽い調子で着地すると彼は再び練金を唱えすぐ間近に金属製の的を出した。続けて離れた場所にも同じ的を。
そして軽く的を殴りつけると金属製の的が木っ端微塵に吹き飛んだ。私は声も出なかった。
続けて彼はどっしりと腰を落として遠くの的へ向かって拳を振るった。
ものすごい風圧が走り的を粉砕する。
「これが魔力制御による魔法、身体強化。最後に見せたのは魔力による衝撃波だ」
私は声も出せずに彼に近づき、その細いがしっかりと筋肉のついた腕に触れ、先ほど金属製の的を粉々にした拳を撫でた。
とてもあんな怪力をだしたとは思えない。筋肉はついているが細い子供の腕だった。
ちなみに拳にはかすり傷一つなかった。

「驚いた？」
「あ、あなた本当に人間？」
ディアスはその言葉に口を開けて笑った。
「たまにいわれるけど人間だよ。特にこの身体強化を見せるとたいていの人は似たような反応をするね」
「最初の魔法はレビテーション？」
「いや、ただ普通にジャンプしただけ。身体強化をかければあのくらいの身体能力は発揮出来る。まぁ、魔力制御の能力次第ってところがあるから、すぐにあれが出来るわけじゃないけど」
すごい。
呪文も唱えずに魔力だけであんな人間離れした動きや破壊力、あげくに並の魔法よりも強そうな魔法を使って見せたのだから。
「ルイズの爆発魔法は呪文を唱えて杖から魔力を放出すると起きるみたいだ。なら魔力を直接は放出しない身体強化は確実に使えるだろうし、杖を使わない魔力衝撃波も出来るかもしれない。まあ攻撃力に関してはルイズの場合は爆発魔法を使いこなした方が強いだろうけど」
「杖を使わないの、その魔法？」
「使わないよ？　だってこれは身体で魔力を制御するんだもの」
「私に出来るの？」
正直使っている相手が人間離れしているから出来る魔法にしか見えない。
「妹だって出来るよ？　大人の兵士を殴り飛ばすぐらい余裕だし。モンモランシ伯爵のところのモンモランシーにもこれの基礎の訓練法を教えたからそのうち使えるようになるだろうね」
むくむくとやる気がでてきた。
妹ということは私より年下の女の子よね？　しかもモンモランシ家の娘にも教えたですって？　それで私が出来ないはずがないじゃない。
「教えてくれる？」

「教えるよ。ただし条件として爆発魔法の訓練もすること。ただし安全に気をつけてね。もっともこの訓練をやれば爆発魔法の制御もかなり向上するはずだけど」
私は一も二もなく承諾した。
私にも魔法が使えるかもしれない。
普通の魔法じゃないけれど、これはこれですごい魔法には違いない。

それからみっちりディアス流魔法理論を叩き込まれて全身に魔力を流しながら制御する訓練をやらされた。
そのとき気がついたのだけどこの子、訓練となると人が変わるわね。
ちょっとでも気を抜くとものすごい威圧感をかけてくる。言葉は優しいけど迫力が尋常じゃない。
正直はじめて叱られたときはびっくりして思わず粗相をするところだった。なんとかこらえたけど。
しばらく魔力制御の訓練を続けていると次第に楽になってきた。
なんとなく疲労が抜けていく気がする。これも魔力制御の効果なのかしら。
「がんばっているようですね」
「お母様！」
「誰がやめていいといったのかな？　ルイズ？」
「……はい、ごめんなさい」
お母様の前でも遠慮なしね。
すごい迫力だわ。小さな子供だったら絶対泣くわ。
「しっかり教えてもらっているようで感謝します。ディアス殿下」
「いえ、あまり役にたてませんでした。せめて魔力の制御法ぐらいはと思って教えましたが」
「それで十分です。後はあの子が自分で努力すればいいことですから」

訓練の結果とんでもない怪力を発揮するようになったらお母様はどんな顔をするかしら？　ふふふ、おもしろそうね。

その顔を見るためにも努力するわ。

「ルイズ？　真面目にやろうね？」

「……はい」

なんでわかるんだろう。少しでも集中が途切れると容赦なく叱られる。

「ルイズの魔力はかなり特殊だと僕は感じました。詳しい話は後でしますが……」

「特殊、そうでしょうね。普通は魔法に失敗しても爆発などしないですから」

「僕なりの推論はあります。出来れば公爵にもお話ししておきたいのですが」

「わかりました。どうぞこちらへ主人ももう戻っております」

「あ、私も……」

「ルイズはもう少しがんばっていなさい。せっかく殿下がご厚意で訓練をしてくれたのですから忘れないうちに身体に覚え込ませなさい」

「はい……」

「なら、僕はルイズの訓練をもう少し見守っているよ。ルイズも一人では寂しいだろう？」

「ありがとうございます。ワルド様」

「……あと公爵夫妻との話がすんだら僕と少し話をしないかな。殿下の魔法理論にはとても興味がわいてね。少し話したいんだ。いいかなディアス殿下」

「かまいませんよ。話がすんだらこちらに来ます」

「待っているよ」

ワルド様もこの魔力制御に興味があるのかしら。

ワルド様は魔法衛士隊だものね。あの身体強化とかいうのはあきらかに戦闘向きだし興味を持たれたのかも。

「ルイズ。集中しなきゃダメだよ」
「……はい」
ワルド様にまで叱られた。
そんなに私ってわかりやすいのかしら？

・ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ視点・

あれでよかったのか？
『はい、ルイズは自分が虚無と認識することで少なくともコモンマジックは使えるようになります。いまはこれくらいでいいでしょう』
訓練途中、ルイズの爆発の原因を考えていると突然セラファナが言い出したのだ。
『この子は虚無の担い手です。四系統魔法は使えませんよ？』
そして爆発の魔法を自分の魔法と自覚させること、可能ならば虚無の系統であると思わせることと指示してきた。
おかげでつまらない芝居をする羽目になった。

公爵夫妻もうすうす察してそうだったな。
僕はルイズが特殊な魔力を持つこと。
通常ありえない爆発魔法は単純な魔法の失敗ではないこと。
正しい呪文を唱えればルイズは爆発の魔法を完全に制御して使えるのではないかということなどを話した。
虚無とははっきりと明言しなかった。
そんなことをいきなりいわれてもうさんくさいだけだろうから。
うすうすルイズが普通ではないと感じていた公爵夫妻は一言もなく僕の推論を聞いた後、ルイズの魔法を見てくれたことを感謝された。
そしてルイズの魔力が特殊なことは出来るだけ他言無用に頼むと

お願いされた。

『まぁ、あきらかに普通ではないですからね。それでも娘が伝説の虚無の担い手だ。などといわれたらショックでしょうね。始祖の再来とか呼ばれるほどですから。まぁおかげで悪い大人に利用されたりするんですけどね』

それがあの処刑か。

『はい、彼女は虚無の担い手として戦意向上に利用され、敗戦後はすべての戦争責任を押しつけられて処刑されました』

公爵夫妻はルイズを守らなかったのか？

『戦前はなんとかルイズを利用させないようにがんばりましたが国中の貴族やロマリアの圧力に負けました。戦後はルイズの無罪と女王の責任を主張して家族ごと処刑されました』

救われない話だな。

『だからあなたを呼んだのですよ～、すべてはあなたにかかっています』

彼女のために僕は殺されたのか、たいしたカミサマだな。

『いやですねぇ。まだ根に持っているんですか？　ちがいますよ？彼女のためではありません。別に人が死ぬのはかまわないのですが納得の出来ない結末ってあるじゃないですか？　私的に絶対あれはないと思うんですよ。流れ的に。もうちょっとこうあるじゃないですか、もうちょっとでハッピーエンドがあるのになんかきれいな感じでバッドエンドルートに落ちちゃったときの絶望感はわかるでしょう？』

くだらないことをいっている馬鹿女は放置して、僕は歩き始めた。

貴様のおかげで僕の人生がバッドエンドになったわ！

とかいってもいまこうして生きているじゃないですかとかいいそうだ。

残された家族がかわいそうだろといっても、案外幸せに暮らしていますよとか言い返してきそうだ。

この馬鹿女に人の心の機微を理解しろという方が無茶なのだ。

基本的に楽しければいいとか思っていそうだしな。
わりとノリで動くし、後先考えないし。
さて気を取り直して……。
ワルド子爵がまっている。いくとするか。
さてなんの話やら。

七章　ヴァリエール公爵家（後書き）

カトレア治療、水の精霊召還初披露、ルイズ強化フラグです。
あとついでにカミサマの理不尽さも再説明。

このカミサマ、基本的にディアスの活躍をゲーム感覚で楽しんでいます。
目指せハッピーエンド、バッドエンドだったら必殺リセットとか考えているでしょう。
まぁカミサマだから、人間とはものの見方が違うと思ってもらえれば。
ディアスは初対面で理解出来ないしする必要もないと諦めています。

それと初期の前書き後書きで不快にさせてしまった方にお詫びします。
少しばかり気分が落ち込んでいろいろ不適切なことを書いてしまいました。反省しています。
今後はそういうことのないように、努力します。

追伸　内容を若干修正しました。

八章　巡りあえた主君（前書き）

今回ちょっと変わった書き方をしました。
ちょっと読みにくいかな？　あまりやらない書き方なのですが。
まず結論から入って、そこにいたる課程を書き再び結論する。
よくある技法です。

そしてついに王道勇者ルート確定です。
以降は王道タグでもつけようかな。

八章　巡りあえた主君

・ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド視点・

ディアス殿下の見せた魔力制御という技術に僕は天才というものが存在するのだと信じられた。

あれはまさに新たなる魔法体系といってもいい技術だ。

それを十歳の子供が発見し、習得し使いこなした。

ただの才能ある子供ではない。

まさに世界に祝福された才能だ。

僕も風の魔法に関しては一流を自認しているが、あんな技術は思いつきもしなかった。

一般的に魔法とは身につけている魔力とイメージによって使用する。

魔力の直接制御など誰もやらない。

せいぜい使う魔法の威力を制御するくらいだ。

それをディアス殿下は徹底的に基礎から魔力を制御することを基本としている。

しかもイメージの伝達を円滑化するために命じるのではなく。世界に呼びかけ頼み込むという理論まで取り入れている。

それらによって得られる効果は絶大だ。

おそらく魔法の制御能力の強化。魔法発動速度の短縮化。魔法の威力の増大。

さらにディアス殿下は魔力制御により新たなる魔法とでもいうべき技を使って見せた。

魔力による身体能力の向上。魔力の直説放射による遠距離攻撃法。

おそらくまだまだ技を隠しもっているに違いない。

正直ディアス殿下と魔法で戦っても勝てる気がしない。

同じスクエアクラスとはいえ、全力を出してもおそらく及ばない

だろう。
それほど魔力制御という技法の威力はすさまじかった。
そして恐るべきはそれだけではない。その知恵もまたすばらしい。
小さなルイズの魔法を見ただけでその本質を見て取りその特殊性に気がついた。
それに気がつけるのは僕ぐらいだとうぬぼれていたが、ディアス殿下はあっという間に見抜かれた。
すばらしい。
感嘆と賛辞の言葉しか心に思い浮かばない。
彼を味方に出来ればどれほど心強いか。出会う前から考えていた。
そしてこうして出会い。その実力と人柄に触れた僕の心には変化が生まれていた。

ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ殿下。
もし世が世ならと考えてしまう。
このトリステインの王に、これほど将来に輝かしい未来を感じさせる人物は他にいない。
もし実現すればこの国は大きく変わるに違いない。
しかし現実には彼は大公国の跡取りで、王家にはアンリエッタ王女がいる。
彼が王位を継ぐのは難しいだろう。
魔法衛士隊として王家に忠節を尽くすのは限りなく栄誉なことだ。
しかしそれも王家が王国を統治し、貴族と民衆を庇護してこそだ。
わがままをこねて王位を拒否するような王族に忠誠を尽くす。
そんな現実に内心失望を感じている僕にとって殿下はまさに新たなる主と望みたいほどの人物だった。

そう。目の前にいる少年は、僕の希望になり得る存在だった。
金色の髪が日の光に輝き、蒼い瞳はすべてを包み込むような包容力と威厳をもって僕の心を引きつける。

黒一色のローブ姿ながらその存在感は着飾った貴族どもなど足下にも及ばない。
生まれながらの王者と信じられた。
彼は僕に手をさしのべた。
「一緒に戦ってもらえますか？　ワルド子爵」
僕は躊躇しなかった。
その手を取り、片膝をつき頭を垂れる。
「我が杖を殿下のために捧げます……どうかこの世界に訪れるであろう悲劇を食い止めていただきたい。微力ながら我がすべてをもって殿下の力となりましょう」
僕は真に敬愛できる主を見つけた。
僕の忠義はもはや王家にはない。殿下にこそ我が杖は捧げられるべきなのだ。
僕は思い返して、つくづく僕は愚かだったと自嘲していた。

話し合いの前にはディアス殿下から情報を聞き出すためにいろいろ小細工を考えていたが、本人と二人きりで向き合ってそんな考えは吹き飛んでしまった。
どこまでも澄み切った蒼い瞳に魅入られてしまった。
まるですべてを見透かし、理解し、許しを与えるような。
そんな瞳だった。
僕はその瞬間に心が折れた。
ちっぽけな見栄や自尊心が粉々に砕かれ、目の前の少年に心が服従してしまったのだろう。
驚くほど素直に母の研究を話し、地下の風石の大鉱脈のこと、その風石に魔力が年々強力になってきていること、
このままでは大陸は風石の魔力の暴走により浮き上がり崩壊することを打ち明けた。
そしてディアス殿下に水の精霊からなにか聞いてはいないか問いかけた。

すがるような思いだった。
誰にも話せない。
話したところで相手にもされないであろう事実を語ったのだ。
ディアス殿下次第で僕の未来が決まるといっていい。
彼自身に今のところ権力はない。
しかし彼がその気になれば父である大公を動かし、ヴァリエール公爵を動かし、妄言を吐いて殿下を惑わそうとした罪人として僕を排除することなどたやすくできるはずだ。
大公は息子を溺愛していると聞いているし、ヴァリエール公爵も今回のことでディアス殿下に深く恩を感じているだろう。
彼ならばこの国有数の実力者二人を動かせるのだ。
いま僕の将来は、殿下の手に握られていた。
内心おびえる僕に殿下はひどくあっさりと答えた。
「知っている」
と、なんの気負いもなくいいきった。
水の精霊から聞いていると、そしてそれは精霊の力のバランスの崩壊により風の精霊の力が暴走している結果だと。
それを止めるための使命を水の精霊から受けていると。
では、そのための方法はあるのか？
僕が問うと、精霊の使命を受けた少年はとりあえず大地の精霊の力を借りて地下の風石の魔力を押さえ、その魔力を弱めていると答えた。
それで解決するのか？
とりあえず自分の命のある限りとディアス殿下はいう。
精霊の加護を受けた自分が生きている限り、精霊たちは自分に従い風石の暴走を押さえる。その間に根本的解決を図るという。
つまりハルケギニアの精霊のバランスを回復させると。
そんなことが可能なのかと僕は畏れた。
それは神でもなければ不可能な奇蹟ではないかと。
「水の精霊はいずれ可能になるといった。いまはまだ無理だが時期

が来ればその方法を教えると」
そのためにいまは力をつけていると。
僕はただ呆然として目の前の少年を見つめるしかできなかった。
この少年はたぐいまれな才能を持って生まれ、今なおその才能をさらに昇華すべく努力している。
そんな少年に水の精霊は使命を託し、その力を貸している。
僕はいままで自分こそがこの世界を救うのだと思い上がっていた。
だがそれは思い上がりであり、傲慢だった。
風のスクエアとなり魔法衛士隊で才能を示したことで僕は自分が選ばれた人間であるような錯覚をしていた。
それは身の程知らずな増長だった。
世界に選ばれたのは僕ではなかった。
目の前にいる天才児こそ、世界に選ばれ、世界に愛された英雄だ。
僕などはその前に立てばただ魔法が人より得意なだけの若造に過ぎない。
「僕は……世界を救う力になれないのか……？」
それは絶望の言葉だった。
自分が選ばれた人間ではないという現実を知り、いままでの自尊心が、誇りが、自負が崩壊した言葉だった。
そんな僕に世界に愛された少年は手をさしのべた。
「一緒に戦ってもらえますか？　ワルド子爵」
それは天から差しのべられた救いの手だった。
こんな愚かな僕を、必要としてくれるというのか？
「僕一人でできることには限界があります。ワルド子爵ほどの実力者の助力が得られるならばこれ以上のことはない」
僕は、たとえば彼の立場であったなら、こんな風に他人に手を差しのべ協力を請うことができただろうか？
彼の力を欲したのだって、手詰まり感から万に一つの手がかりを求めてのことだった。
自分の才能の限界に絶望し、自分の無力さを嘆いた末に他人の力

を当てにしただけだった。
僕が彼の立場だったら、彼ほどの才能がこの身にあったならば。
際限なく増長し傲慢になり、凡人の協力などなんの役にも立たないと切り捨てて一人孤独に戦ったのではないか？
人間としての器が違いすぎた。
「我が杖を殿下のために捧げます……どうかこの世界に訪れるであろう悲劇を食い止めていただきたい。微力ながら我がすべてをもって殿下の力となりましょう」
僕はジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルドは彼に忠誠を誓った。

申し訳ありません母上、不肖の息子はあなたの意志を継げなかった。
けれどお喜びください。あなたの意志を継ぎ世界に愛された人物に出会いました。
彼ならばきっと来るべき悲劇を食い止めてくれる。
僕は彼の杖となり、彼を襲う危難から彼を守り、敵を打ち払う力となります。

喜んでください母上。
母上の研究は無駄ではなかった。
母上の研究があったから僕はひたすら自分を鍛えた。
母上の研究があったから僕はこの方に巡りあえた。
僕はあなたの意志をこの方に託し、この方と共に悲劇を食い止める。
どうか見守っていてください。
僕は、我が使命を託すことのできる主を見いだしました。

ああ、我が主君よ。
僕はさらなる努力を誓約しよう。

来たるべき時、我が主君を守り戦えるだけの力を得て見せよう。
どうか我が主と僕の進む道に祝福がありますように。
天に召された母上、どうか我が主と僕を導いてください……。

・ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ視点・

なにやら感動している様子のワルド子爵に忠誠を誓われた。
さきほど話をしているうちに、なんだか首を吊りそうなほど落ち込んでしまった。
なので母親の研究の成果ならば、きっと自分の力でなんとかしてみたかったのだろうと察して協力をお願いしてみたら、うってかわって幸福そうな満ち足りた表情で協力と忠誠を誓約されてしまった。
なにやら落差のひどい人だな。
大丈夫だろうか？
まぁ、ヴァリエール公爵に聞いた限りでは風のスクエアでかなりの実力者らしいし、魔法衛士隊に所属しているということは王宮方面での情報収集なども期待できるだろう。
いて困る手駒ではない。
できれば信頼できる仲間になって欲しいものだ。

ワルド子爵の元を去り、一人考え事をする。
しかしヴァリエール公爵といい、ワルド子爵といい。
なんで僕と面と向かうとやたらびびるんだ？
僕は愛想よく、礼儀正しくしているのに……。
『それはですねぇ～。大公家で人の上に立つ貴族として教育を受けてきた結果、あなたのカリスマ性がものすごい勢いで上昇しているのですよ。はっきりいって一国をまとめあげられるレベルですよ～』
なんだそれは？　聞いてないぞ？

得意げに語るセラファナに問いかける。
『カミサマサポートの経験値百倍を舐めたらいけませんよ～。単なる戦闘力や知識だけでなくそういった人格面などの才能も磨けばどんどん光るのです』
カミサマ、セラファナは愉快そうに笑った。
『十歳の子供がそこらの王様などはるかに超えた王者の威厳をまとっていたらたいていの人はそれは驚きます。驚かなかったらよほど鈍感なのか大物なのかどちらかですね～』
まて、つまり僕は内面だけではなく外見的第一印象的にすでに普通ではないのか？
『いまさらですねぇ。外見的に美少年で、対外的には人格面も完璧でなにをいまさら～』
それもカミサマサポートの結果なのか？
『あたりまえですよ～。あんなに幼い頃から徹底的にしつけられればこうもなりますよ～』
確かに大公家の跡取りとしてふさわしいように教育は受けたが……。
外見もどうにかなるのか？
『人間の人相なんて精神的なものの積み重ねに影響されますからね～。あなたの場合は両親がそろって美形ですから素材がいいし、育った環境もおそらく最高、外面を取り繕う技術も一流ですからね。たいていの人はだまされますよ』
……詐欺師になれそうだな。
『すでになっている気もしますねぇ』
やかましい。
ということはワルドの忠誠心は信じてもいいのか？
嘘をついているようにも見えなかったしな。
『ちなみに他人の嘘や演技を見抜く観察眼も鍛えられますよ？　嘘発見器いらずになれます』
そうか、それは役に立ちそうだな。今度から注意していよう。

おそらく無意識でも鍛えられるだろうが意識していた方が効率よく身につくだろう？

『比べればそれは努力していた方が身につきますね。いっそハルケギニア統一王にでもなりますか？』

興味ない。

僕はゆっくり本を読んでいられる生活が送れればいい。

『読書マニアは健在ですねぇ』

僕のアイデンティティだ。

いったいいつになったらそういう生活が送れるんだろうな？

『期待していればそのうち来るんじゃないですか？　一生はながいですし』

当分来ないということか……まぁいまはいろいろ鍛えなければならないからな。

特に精霊魔法に関しては急がないと。

『あ～、精霊のバランスを修正する方法を教える条件でしたね。精霊との親和性の向上。自由自在に精霊を行使出来る才能。確かに精霊を使う魔法を極めればその条件はきっとクリアできますね。あなたの考える精霊魔法は精霊との親和性が高くないと不可能な技術ですから』

いまでも十分高いらしいが、もう少し欲しいらしいな。

精霊の問題を解決するのだから、精霊との相性が重要なのはわかる。

しかしそれまで具体的な方法を教えられないというのはなんだかうさんくさいな。

『おそらくですが、ある程度の条件をクリアしたものだけに教えられる秘密のようなものなのでは？　神にもありますし、ある程度の条件をクリアしないと授けられない力とか知識とか』

僕にもか？

『はい、神と契約した眷属にも該当するものがあります。たとえば神の力を直接借りて使用する魔法とかは神との同調能力が必須です』

ほう、そんな魔法があるのか？
僕にも可能なのか？
『正直あなたの役に立つレベルのものはまだ無理です。あなたは正直神との同調率はあまり高くありません。鍛えれば向上するでしょうが』
よし、気が向いたときに鍛えるとしよう。どうすればいい？
『とりあえず馬鹿女呼ばわりはやめてください。ちゃんと信心深くなって神の存在を認めてください。それが最低条件です。正直あなたの信仰への意識の低さはちょっと呆れるほどですよ』
現代日本人舐めるなよ？　信仰心皆無がデフォだぞ？
『威張らないでください。けして褒められたことではありません』
ま、そうだろうが。
信心深さね。要は神の実在を信じる心だろう。
カミサマの実在は知っている。
その実像が限りなく馬鹿でアホでかけらも尊敬できないことも知っているが一応カミサマだ。
御利益ください。具体的には平穏とゆっくり読書に没頭できる環境をください。
カミサマが僕の祈りに応えて吠えた。
『間違っています！　私は馬鹿でもアホでもありませんし、神に願い事してどうする気ですか！　ただ神の実在を受け入れその意志を受け入れればいいんです！　願望の実現なんて自分でやりなさい！　この無信心者め！」
怒られた。
まぁ、おいおい努力するよ。
『はぁ、これだから無信心者は嫌いです。なにを勘違いしているのですか？　神は人間の願望実現装置じゃないのですよ？　欲望まみれの祈りをぶつけられても気分的には腐った生ゴミ投げつけられているようなものです」
そういわれても現代日本的には神様に祈るといえば普通は願掛け

ぐらいだからな。
　このハルケギニアでも普通に神頼みは健在だし。
　始祖に家の無事を祈ったりするんだぞ？
『そこから間違っています。意味が違います。願掛けとは神の前で目標とそれを達成するための努力を誓うことです。断じて神任せで願いを叶えるものではありません。それは魔法の領域です』
　つまり神に願い事を叶えさせる魔法は実在するということか？
『あなたのような不信心者には絶対に不可能ですがね～』
　ふん吠えていろ。
　そのうち僕の願い事を叶えさせてやる。
　なにしろ経験値百倍だ。
　努力さえすればあっという間なのだろう？
『……外道』
　ふふふ、どうやら当たりらしいな。
　そうか、僕は努力すればそのうちおまえに願い事を叶えさせることもできるのか？
　それはちょっと愉快だな。
　僕を殺して厄介ごとを押しつけたぶんこき使ってやるぞ。覚悟しておけ。
『根に持つ人ですね。もういいじゃないですか。大貴族の跡取り息子に産まれてなに不自由なく暮らしているのですし、あなたの元いた世界もなんの問題もなく存在しています。あ、家族もそれなりに幸せそうでしたよ？』
　見たのか？
『暇つぶしに見てみましたが、妹さんはお兄さん似の彼氏と仲良くしていましたし、両親はいい男を見つけたと大喜び、いつ婿に来てもいいぞといっていました』
　……そうか。
　そうか。
『嬉しくないのですか？　家族が幸せなのに』

その幸せの中に自分が居ないことが寂しいといったところで、おまえには理解出来ないだろうよ。

でもそうか、幸せにやっているのか。

僕がいなくなっても、幸せになれたのか……。

『あの、もしかして私はまたなにか悪いことをしましたか？　きっと家族のその後が気になっているだろうと思ったのですが……』

別におまえは悪くない。僕を殺したこと以外はな。

いまの感情は僕のただのわがままだ。

別におまえが気に病むことではない。

気にするな。

家族が幸せ？

おおいに結構じゃないか！

妹が彼氏を見つけた？　しかも僕に似たやつか、きっと幸せになるさ。

あいつは頭がいいし顔立ちもそこそこよくて要領もよかったからな。

婿にくると喜んでいる？

結構なことじゃないか。

跡継ぎができるのはいいことだ。

仲がよいならなおいい。きっと二世帯家族で幸せに暮らすだろうさ！

ああ、すべていいことさ。

なにも問題はない！

『あの、ごめんなさい』

謝るな！　余計いたたまれなくなるわ、この馬鹿女！

『はい……』

ふん。まぁ、いい。

よく知らせてくれたな。おかげで前世への未練も切れた。

僕はこの世界でディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフとして使命を果たす。

そして前世よりよほどしあわせになってやるさ。
本に囲まれて、毎日読書を楽しみながら暮らすのだ！
『結局あなたの幸せは本なのですか……恋とか、財産とか権力とかないのですか？』
興味ない。
本に囲まれて本を読んで生活できるならばそれ以上贅沢なことはない。それ以上は望まない。
恋愛については相手がいないし、そもそも恋愛感情というのがよくわからない。
異性の相手に好意を持っていれば恋をしているということなのか？
恋愛関係の本も読んだがさっぱり理解出来なかった。
異性に好意を持ったことはあるが、それが恋愛なのかはさっぱり理解出来ない。
友人となにが違うのだ？
『言葉で説明するのは難しいのですが、ようは感情や感覚的なものなのでは？　友人以上を求めるというか、なんというか』
肉体関係を求めるということか？
『仮にも私は女の子なのですからそういう直接的な物言いはどうかと思いますけど』
ふむ、それは単純な性欲となにが違うんだ？
こういってはなんだか前世で女の子相手に劣情を催したことぐらいあるが、別に特別好意を抱いた相手でもなかったし、数日もすれば忘れてしまった。
これが恋なのだとしたらずいぶん唐突であっけなく終わる恋だな。
『それは単に性欲を刺激されただけなのでは？　いいたくないですが人間というものは好意がなくても異性に性的興奮を感じる生き物です。それと単純な性欲を恋と呼ぶのは普通に恋愛をしている人たちに失礼なのでやめてください』
性欲と恋愛は違うか。まぁ当然だな。
それではなにをもって友人以上とするのだ？

『あ～、なんだかめんどくさくなってきましたよ。意外にめんどくさい性格していたんですね？』

答えろカミサマ。満足な返答が得られないときはこの程度のことも知らないダメなカミサマということで今後自称カミサマと呼ぶぞ？

『やめてください。私は正真正銘神です。でもあまり偉くないので万能でもすべてを知っているわけでもありません』

それで返答は？　下っ端。

『くっ……下っ端でも神です。それはともかく友人以上に接したい。もっとそばにいたい。独占したい。愛されたい、愛したい。いろいろ理由がありますが用は自分にとっての特別な相手であるという認識だと思えばそう間違ってもいないでしょう』

特別な相手か。いままでそういう相手はいなかったな。

『あなたは恋愛感情がわからないのではなく。おそらく恋愛をしたことがないのでしょう。だから理解出来ない。つまりはお子様ということです。はいはいいい子ですね～もうちょっと大きくなったらわかりますからいまは我慢しましょうね～』

ちっ、いつか殴ってやりたい。

しかし、まぁ恋愛経験がないのはおそらく確かだろうな。

いつも妹のことばかり気にしていたし、個人的な時間はほとんど読書にあてていたからな。

強いて特別な友人というと、小サークル統一活動中の同志たちくらいか。

数々のジャンルごとに乱立した小サークルを説得し威圧し交渉して、ついには弱小サークルの群雄割拠状態だった図書室をジャンルの壁を越えた一大勢力にまとめあげたあの頃の仲間たち。

女子も結構いた。仲のよかった女子も多かった。

お互いにおすすめの本を教え合い。

その感想や意見で楽しい議論を交わしたものだった。

いま思い返してみると案外好意を持たれていたのではと思える相手もいる気がする。

あれは恋だったのか？
大切な友人であり、仲間だった。
もしかしたらもっと時間をかけてつきあえばセラファナのいうような特別な感情を抱いたかもしれないな。
もう手遅れだが。
こちらではいまのところ女っ気ないしな。
使用人に年頃の女性もいないでもないし、遊び相手として同い年くらいの少女と会ったりしたが、それはすべて父さまや母さまが用意してくれた人たちだしな。
両親からきつく女性問題は起こしてくれるな的なこともいわれているし。
恋人か。
この世界でいつか出会うのだろうか。
僕が特別だと感じて、愛していると思える女性に。

・ヴァリエール公爵視点・

目の前にすごいいい笑顔の妻がいる。
なんともすごい主張をされて私としてはどう答えていいのやら答えようがない。
よりにもよって私の小さなルイズの婚約者にあの少年、ディアス殿下をあてがうなど。
大公が承知するはずがない。
人の良さで知られる御仁だが、その政治力は侮れない。大公国独自の情報網もだ。
調べればすぐにルイズに魔法の才がないことがばれるだろう。
それは貴族の婚約者としては致命的な失点といえる。
汚点とさえいえるかもしれない。いったヤツは家ごと潰す覚悟が

あるが。

「幸いカトレアも健康になりました。エレオノールとカトレアのどちらかに婿を取らせれば公爵家は安泰です。ルイズには心置きなく大公家に嫁いでもらいましょう」

たしかに性格に難があって男が寄りつかないエレオノールには頭を痛めていたが、カトレアは穏やかで魔法の才能もあり、健康になった以上問題はなにもない。

年齢的にもまだ問題になるような年齢ではない。

探せばよい婿が見つかるだろう。

妻の主張はこうだ。

ルイズの魔法は特殊であり、それはルイズにとって生涯ついて回る欠点になる。

必ず系統魔法の使えない娘として後ろ指を指されるだろう。

そんなルイズの相手はルイズの特殊な魔法を許容でき、ルイズを守れる強い男でなければならないと妻は主張する。

もっともだ。

私としては気心の知れているワルド子爵などどうかなと考えていたのだが。

まぁ、ワルド子爵とディアス殿下を比べたら権力財力、人格才能、ほとんどにおいてディアス殿下が上回るだろう。

それでも家族ぐるみでつきあってきた男だ。

信頼できるし、ルイズも懐いている。

しかしそれも将来的な話だ。

念のためワルド子爵と婚約の口約束でも取り付けておこうかぐらいで……いますぐ嫁になどとんでもない。

「私はディアス殿下を観察していましたが、彼がルイズを軽蔑したり見下したりする様子はありませんでした。おそらく特殊な魔法もルイズの個性ぐらいにしか思っていないでしょう。あの方は魔法を便利な技術程度にしか考えていないのでしょう。だから新しい魔法技術の確立など思いつけるのでしょうね。系統魔法を神聖視してい

るなら新しい魔法の開発と習得などするわけがありません」
「不敬にあたりかねん思想だな。カリーヌ」
「どうしてでしょう。私もまったく同感です。魔法は便利な技術、使い手次第で良くも悪くもなる。当然のことではありませんか？　魔法が神聖な始祖の賜り物？　そんなものは建前に過ぎません」
ブリミル教徒って本当にめんどくさいですわね。と妻は笑う。
おそらく本心だろう。
この妻にかかれば始祖ブリミルとてただの最初のメイジに過ぎないのだろうな。
ロマリアあたりに知られたら大騒ぎだろうが、我が妻は建前を上手く利用する術を心得ている。ボロなど出すはずがない。
ロマリアのクソ坊主どもの前では自分はいかにも敬虔に始祖への信仰に生きているという態度で接するのだから、女は怖いと思う。
私でもあれだけの演技は無理だ。
つまり我が愛する妻の意志はこうだ。
ルイズへの偏見がなく、それを許容できるだろうディアス殿下の元へ嫁にいかせてクルデンホルフ大公妃にしてしまえと。
大公妃に面と向かって侮蔑の言葉を浴びせられるものはそういないだろう。
トリステイン王家の縁戚で独立国の統治を許されているクルデンホルフ大公の妻を侮辱などしたら家ごと潰されるだろう。
しかもその大公妃の実家は我がヴァリエール家だ。
これはもう王族でさえ、おいそれとうかつなことはいえまい。
「しかし大公はいままで貴族の縁組み話をことごとく断っている」
「ヴァリエール家から嫁に出すといっているのです。なにか問題が？　本人同士が親しければなおさらなにもいえないでしょう。大公は息子を溺愛していると評判です。見も知らぬ娘などお断りでも息子の親しい娘ならばと思うのでは？　どのみちいつかは誰かを妻に迎えなければならないのですから」
家の力関係でねじ込め。

それでも無理なら子供同士を仲良くさせて納得させろ。
最終的にはうちの娘が嫌なら誰を嫁にもらう気だと問い詰めろ、ということか？
「し、しかしディアス殿下とは今日初めて会ったばかりでまだよく人柄を知っているわけでもないわけだしな……」
私はあえて殿下という敬称を強調して、言外に嫁入りの難しさを訴えたが妻は知らぬ顔だ。
「あら、ディアス君などと呼んでずいぶん気に入ってらしたようですけど」
一言もない。
私は初対面からあの少年が気に入っていた。
だから殿下などと堅苦しく呼ばずに親しく声をかけていたのだが。
しかし。
だからといって。
私の小さなルイズが嫁にいく？　ありえん。
まだ十歳だぞ？
あんなに可愛いのだぞ？
それはディアス君には恩があるし、よい少年だと思うが。
まだはやすぎるだろう？
「婚約の約束だけでも取り付けるべきです。あれだけの好物件、評判が広まれば広まるほど他の家がやかましくなるでしょう。手早く押さえるべきです」
大公家の跡取りをまるでどこかの別荘のようにいうのは我が妻ぐらいだろうなぁ。
「しかしやはりもう少し様子を見て」
「必要ありません」
なんとか引き延ばそうとする私に妻はばっさりと断言した。
そして言い放った。
「わたくし自らが、殿下がどれほどの男か見極めてくれましょう」
心臓が止まるかと思った。

ま、まさか、我が妻は大公の息子に決闘でも挑むつもりか！？
いくら大公がヴァリエール家に遠慮しているとはいっても息子をボコられておとなしくしているわけがないぞ？
妻は楽しそうに笑った。
「もちろん手加減はします。もっとも評判通りならば手加減など無用でしょうが。ああもちろんただの手合わせ、訓練のようなものです。別に問題にならないでしょう？」
それを決めるのは大公側なのだが……。
ダメだ。
これはもう止められない。
すまないディアス君。
君には感謝しているし、君のことは好ましく思っている。
けれど私は君を守ることができない。
せめて怪我をしてもきちんと治療だけはするから許して欲しい。
ああ、妻が実に楽しそうに笑っている。
あれはきっと評判の天才児と戦ってみたいだけだろう？
それを指摘できるほどに若かったら君を救えたかもしれないが、私も自分の身は可愛い。
死にたくはないし、ベッドに強制送還されてそのまま療養する羽目にはなりたくない。
「ああ、楽しみですわ。きっとまだまだ実力を隠していそうですもの。ひょっとしたら負けてしまうかもしれませんわね」
それはありえない。
すまない。
本当にすまない。
私には君を救う力がないんだ。
だから、なんというか……。
がんばってくれ。

八章　巡りあえた主君（後書き）

ワルド仲間化、主人公の恋愛音痴発覚、カリスマ能力発覚、
さらにルイズ婚約者フラグとあのヴァリエール公爵夫人、伝説の『
烈風カリン』との対戦フラグが立ちました。
地味に物語の重要情報が出ていたりもしますが。
重要情報のくせに地味なのは仕様です。

追伸　若干内容を修正しました。

九章　烈風との対決（前書き）

タイトル通り、烈風との戦闘です。
あくまでもこれは訓練です。
公爵夫人的には娘にふさわしい男か見極めるための試験です。
でもディアス的には降ってわいた災難でしかありませんが。

九章　烈風との対決

・ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド視点・

僕は今ヴァリエール家の魔法演習場に来ている。
広々とした訓練場だ。ここならちょっとした部隊の演習ぐらいできそうだ。
いま僕は頭を悩ませている。
我が主君と忠誠を誓ったディアス殿下と公爵夫人がこれからここで訓練をするらしい。
どうやら殿下の使う新しい魔法が興味を引いたらしい。
僕が忠告する暇もなくあっさりと殿下はそれを引き受けてしまった。
仕方がないので後でこっそり教えた。
ヴァリエール公爵夫人がかつて魔法衛士隊の一隊マンティコア隊の隊長だったこと。
烈風カリンと呼ばれた伝説の人物であること。
そしておそらく現在でもトリステイン最強の人物であることを伝えた。
さらにいえば僕でもまったく手に負えない人物であること。
いくら殿下とはいえこの訓練、という名の実質は決闘に近いと思っているが……無謀であること。
殿下はいくらか動揺されたあと小声で確認してきた。
「殺されることはない。と思うのは楽観しすぎだろうか？」
「僕の時は腕をへし折られました。そして片腕が使えなければもう片方の腕で杖をふるいなさいと立ち上がれなくなるまで魔法で吹き飛ばされ続けました」
沈痛な表情で殿下の楽観論を吹き飛ばす。
あのときほど死の恐怖を感じたことはなかったな。

殿下は心なしか青ざめた。
無理もない。大の大人だって逃げ出す烈風カリンの訓練だ。
十歳の殿下がおびえても仕方がない。
「なんとか取りやめられませんか？　正直無謀ですし、殿下が怪我でもすれば下手をすれば問題になりかねません」
「ワルド子爵が頼んでくれるか？」
「申し訳ありません。僕では力不足です」
「僕の直感のようなものなのだが……」
殿下は小声でささやいた。
「なんだかどこまで逃げても追い詰められて訓練を受ける羽目になりそうな気がする」
確かに。
一度引き受けた以上逃げるなど論外といって勝手に訓練をはじめそうだ。
それは他人から見たら襲撃に近いだろうが、本人は訓練と主張するだろう。
普段は分別があり礼儀正しいまさに貴族の妻といった方なのだが、どうも訓練となると人が変わる傾向がある。
困ったものだ……。
「ご武運をお祈りします」
申し訳ありません殿下。
このワルドの力不足故に死地から救えず。
おのれへの無力感でこの胸が張り裂けんばかりです。

・ヴァリエール公爵視点・

ワルド子爵となにやら会話していたディアス君に私はせめて声をかけた。

「ワルド子爵から妻のことを聞いたかな」
「伺いました。たいそうな女傑だそうですね。片腕へし折ってさらに魔法で叩きのめすなんて我が家の訓練ではありえません。僕でもそこまではしません」
これでも大公家では自分の訓練は通常の十倍すさまじいといわれていると自嘲気味に語った。
気持ちはよくわかる。
わかるのだが、どうしようもない。
「腕のいい水系統のメイジと秘薬は用意してあるから安心してくれ。ワルド子爵の時も問題なく治療した腕のいい人物だ」
「負傷前提ですか。これでも僕は大公家の息子でそれなりの重要人物だと自分の立場を理解しているつもりですが」
おまえらなにしようとしているのか理解しているか？　ん？
という感じだな。
気持ちはよくわかる。
わかるのだが。
「すまない。私には妻を止めることはできない。というか我が家で妻を止められる人間などいないのだ。あれの気の済むようにするしかない」
情けないが事実だ。
どうにもならないから諦めて殴られてくれ。
こういっているに等しいな。
我ながらひどいことをいっている。
相手は十歳の子供だぞ？　私の小さなルイズと同じ歳の少年だ。
天才でも子供なのだ。
妻だって、多少は自重して……くれるといいな。
心配して二人の娘も様子を見に来ている。
長女は今日は不在だ。
あれは生真面目だからいたら絶対に止めようとがんばっただろう。
いろいろといわれているが根はいい子なのだ。

なぜそれが世間の男たちにはわからないのだろう？
「あの、くれぐれもお気をつけてください。母はたぶん子供でも容赦しないと思いますから十分に注意してくださいね……」
カトレアが心底心配そうに忠告した。
子供だから手加減してくれるなんて甘い考えは確かに今すぐに捨て去った方がいい。
そういう相手だ。
「戦場で相手が子供だからと敵が手加減してくれるとでも？」
いかん幻聴が聞こえた。
いかにもいいそうだ。
ルイズは蒼白な顔で激励した。
「災難だと思うけど、こうなったら覚悟を決めて当たって砕けなさい。男でしょう？」
いっていることはきついがその目はあきらかに目の前の少年に同情している。
素直に自分の心情が口に出せない難儀な子だ。
そこがまた可愛いのだが。
とにかく、健闘を祈るとしかいいようがない。
まさか訓練をはじめる前からお願いだから生きて帰ってきてくれなどといえない。
思っていても、口に出せない。
もし死んだり、重傷を負ったらどうしよう？
さすがにまずい。
「ワルド君……いざとなったら私が妻を足止めするから、君がディアス君を抱えて逃げたまえ」
「わかりました。僕の命に代えてディアス殿下をお守りします」
悲壮な覚悟でワルド子爵が承諾した。
しかしいくらなんでも大げさじゃないか。などということを私は思わない。
私が倒された後はおそらくワルド子爵が妻の標的になるのは間違

いない。
それでもヴァリエール公爵家は多大な犠牲を払ってディアス殿下をお守りしようとしたという実績が必要なのだ。
せめてもの言い訳のために。
これくらいしかできないおのれの無力が、胃に重い。

・ヴァリエール公爵夫人……『烈風』カリーヌ・デジレ・ド・マイヤール視点・

ふふっ、逃げずに来たとはいい度胸です。
顔色から察するに夫かワルド子爵から私の話は聞きましたね。
せいぜい楽しませてくださいな。
最近は少し運動不足でしてね。
美容にもよくないでしょう？　運動不足は？
私は動きやすい乗馬用の上着とパンツという軽装で、軽やかに演習場で待つ敵の前に立った。
十歳にして風のスクエアとなった天才児、水の精霊の加護を受けた少年。
そして新たなる魔法技術を確立しつつある魔法の先駆者。
ああ、ぞくぞくしますね。
どんな魔法を見せてくれるのでしょう。
身のこなしから見て体術もかなりできるようですし、なによりあの身体強化という魔法は厄介ですね。
私もできないかしら？　訓練方法はこっそりのぞいていたからだいたい把握していますが。
でも、最初は敬意を表して私の魔法だけで戦ってあげましょう。
どれほどのものなのか。
ルイズを託すにたる男かどうか。

天才の真実を見せてもらいましょう！

夫が開始の合図をすると同時に、私は肩慣らしにウインドの魔法を唱えた。

強力な突風が少し離れた場所に立つ敵に襲いかかる。

さてどう動く？

予想外の行動に出た。

彼は拳を握りしめ突風を殴り飛ばした。

なんてデタラメな。魔法を殴り飛ばすなんて。

なんておもしろい子。

「いきなりとは心臓に悪いですね」

「あら準備万端のようだったのでつい」

私の目から見たらはじめる前からこの敵は臨戦態勢だった。

全身から魔力があふれ、身体を覆っている。

先ほどの身体強化よりも強力そうだった。

あのときは身体に魔力を流していただけだった。それが今は身体を魔力が覆っている。おそらく魔力の防御。あれで風の魔法を殴り進行方向をねじ曲げたのか？

弱い魔法ではあの防御は貫けないだろう。ならば。

複数の風の刃を放つ。殺傷力の強い魔法ならば防御を打ち破れるはず。

さあどうする？

この敵はさらにおもしろかった。

なんと風の刃の間をすり抜けてこちらに接近してきた。

私は身構えると目を見張った。

敵は瞬間移動のように突然私に接触していた。手が触れるほどの至近距離、これは？

腹部にすさまじい衝撃を受ける。

ウインドだ。

なんという少年だろう。

まさか初撃のウインドを私にやり返すなんて！
しかも威力も十分だった。
とっさに彼の魔力防御をまねて腹部に魔力を集めていなければ今頃胃液をぶちまけていただろう。
「……収束させて威力を増したウインドですか？　なかなかです」
「プレゼントのお返しです」
「あらあら、それは嬉しいわ。ところであの瞬間移動はなにかしら？」
「訓練が終わったら教えてもいいです。やめますか？」
あら、これでやめるわけないじゃない。
「いえ、もっと楽しみましょう。私に一撃入れた相手は久しぶりなので、嬉しくて嬉しくて、このままでは眠れないでしょう！」
ふたたびウインド。
彼はあの瞬間移動で逃げた。
どこへ？　そちらか！
彼の魔力を察知してエア・ハンマー。殺傷力は低いがこれならばすり抜けられないでしょう？　迫り来る風の槌、平面の威力をどう防ぎます？
彼の選択は避けられないなら貫けばいいという単純なものだった。
強力な風の槍が風の槌を貫き無効化する。
驚きました。いまのは結構魔力を込めたのですが簡単に相殺されましたね。
さすがスクエアクラス、魔力も強力なようです。
楽しい。
これほど楽しいとは思わなかった。
「もっとです。もっとあなたの魔法を見せなさい。ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ！」
私は杖にブレイドをかけ、彼に向けて数十の風の刃を放った。
もう油断はしない。
相手は高速で移動する未知の魔法の使い手、魔力もおそらくは互

角並はあり、しかも接近戦闘もこなせる。
しかも弱い魔法では牽制にしかならない謎の防御魔法まで使っている。
楽しい。
これほどの敵は、これほどのおもしろい敵ははじめてだ！

・ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール視点・

予想外だった。
お父様もワルド様も驚いている。
ちいねえさまは拍手してディアスを応援していた。
あっという間にズタボロにのされるだろうと思っていたディアスが、あのお母様を相手に互角に戦っていた。
魔法を撃ち合い。時に避け時に相殺し、接近してはブレイドで剣術の試合のように斬り結び、それでらちがあかないなら蹴り飛ばし、殴り飛ばそうと格闘まで始める。そして隙ができれば至近距離から容赦なく魔法を放つ。
距離が離れれば魔法の撃ち合い、接近すれば剣技の勝負、さらに密着して格闘戦、さらに魔法を使って仕切り直し。
その繰り返しだ。
私が気になったのはときおりディアスが瞬間移動のようにものすごい速さで移動することだ。あれはなんの魔法なのだろう。
あ、いまもやった。
するとお母様が嬉しそうに笑った。
「見せてもらいましたよ。その瞬間移動！」
そして今度はお母様がすごい速度で移動した。
まさに突撃という感じの高速移動だった。

いきなり接近戦に持ち込まれたディアスが驚いている。
「まさか瞬動を見ただけで会得したんですか！？」
「そうですかこれは瞬動というのですか、便利な技ですね。もっともまだ私ではあなたほどの速さは出ないようですが」
「デタラメな人だ。あなたは」
「あら、天才にそういわれると照れますわね。でもまだまだ驚いてもらいましょう」
お母様の身体から魔力が爆発的に放射された。
「ふむ、加減が難しいですね。でもだいたい覚えました」
お母様は杖をもっていない左手でディアスの顔をつかみ無造作に投げ飛ばした。
人が投げ飛ばされるのは初めて見たけどこんなに飛ぶものなの？
二十メイルは飛んだわよ？
「まさか！　あれは殿下の身体強化では！？」
ワルド様が驚愕したように目を見開いた。
ディアスは空中でなんとか体勢を立て直して着地した。
「まさかどころじゃないですね。まさに僕の身体強化、しかも魔力防御付きです。それはまだ誰にも教えていないんですけど？」
ディアスがどこか憂鬱そうな顔をしている。
まぁ、自分のオリジナル魔法をあっさり真似されたら、さすがにプライドが傷つくかもしれないわね。
「教えていただきましたよ。現にいま見せていただいています」
「見ただけでできるのですか？　ちょっとショックですね。僕でも身体強化から魔力防御に発展させるのに三日かかったのに」
三日……たった三日？
そんなに簡単なの？　それともディアスの才能がデタラメなのか。
きっと後者だ。
「たった三日で新しい技法を確立する方がよほどデタラメですわ。それに誤解しないように、私は努力していないわけではありません」
努力もなにも、見ただけでできたってのは努力とはいわないわ。

お母様はいった。
「魔力制御の訓練を思いついたのがまさか自分だけだとお思いですか？」
「ああ、なるほど。基礎はすでに身につけていた。後は応用技なら見てしまえば真似できますね。よほどのセンスがあればですけど」
「ええ、もっともわたしは感覚的に身につけただけであなたのように応用技を考えたり、人に教えたりはできませんでしたけどね」
お母様も魔力制御ができるの？
聞いたことがないけど？
「私の魔力制御の技はたった一つです。全身に魔力を満たすのは同じ、でも私はそれを身体強化ではなく魔法の威力の増幅に使いました。部下にもいろいろ教えてしごいてみましたが会得したものはついに誰もいませんでしたね。才能がなかったのか私の教え方が悪かったのか、前者だと信じていましたけどあなたを見るにどうやら後者だったようです」
「まさか先輩がいるとは思いませんでしたよ」
「私も後輩がいるとは想像もしていませんでした。次は全力でいきます。受け止めなさい」
お母様はカッタートルネードを唱えた。
すべてを切り裂く巨大な竜巻を生み出すスクエアスペル。きっとお母様の全力だ。
私はその光景をじっと観察した。
お母様の魔力が身体に満ち、杖に収束され爆発するようにさらに魔力が強く輝き、巨大な竜巻ができあがる。その光景を私は確かに見た。
あれが魔法の威力の増幅。お母様の強さの秘密の欠片。
私にも、あれができるだろうか？

・カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・フォンティーヌ視点・

お母様が巨大な竜巻を起こしたのと同時にディアス君も同じ魔法を唱えていた。
そして驚いた。
ディアス君の竜巻の方が大きかったのだ。
まさかディアス君の方がお母様よりも魔力が高いのかしら。
真空の刃をぶつけながら巨大な竜巻がしのぎを削る。
私は本心からディアス君を応援していた。
彼が私の恩人だからというのもあるかもしれないけど。
あんな小さな子にこんな決闘じみた訓練をふっかけたお母様に内心反発していたからだ。
きっと天才といわれる彼の才能がどのくらいか興味があったのだろうけど、これはあきらかにやり過ぎだと思う。
もし彼の実力がこれほどでなかったらどうするつもりだったのか？
お母様の悪い癖だ。
強いと評判の人、才能のある人を見つけるとその実力を試したくなって我慢出来なくなる。
ワルド子爵の時もそうだった。
あのときは大変だったらしい。
利き腕を折られて降参するワルド子爵をお母様は許さずに彼が気絶するまで魔法を叩き込んでいたらしい。
私は話に聞いただけだけど、そのとき自分の母親がそんな非道なことをするわけはないと信じたかった。
そして実際怪我の治療を受けている痛ましい姿のワルド子爵を見たときに思わず涙を流して母の非道を詫びていた。
ワルド子爵は自分の未熟が原因といってくださったけど、ディアス君が同じような目に遭いそうなら私が止めるつもりで見学に来ていた。

お父様とワルド子爵もいざというときはディアス君を助け出して逃がそうと相談していたようだ。
そして事態は予想外なことになった。
二人の実力がまったく互角に見えることだった。
ディアス君は体格の不利をものともせずにお母様と戦った。
それだけでも賞賛に値すると思う。
おそらくトリスティンのメイジたちのほとんどよりディアス君の方が強い。魔法も、心も。

正直うらやましい。
私もあんな風に子供の頃に才能を発揮出来ていたら。
私には自分の部屋だけが世界のすべてのようなものだった。
やがて傷ついた動物たちを引き取りその子たちの治療と世話をし始めた。
その子たちが傷を癒やし、再び世界へ旅立てるようにと祈りながら。
困ったことに半数以上の子が私の部屋に居着いてしまったけど。
ディアス君にはのびのびとその才能を伸ばして欲しい。
誰かに強制されてではなく、自分の望むままに自由に生きて欲しい。
まだ子供なのだからそれが許されるはずだ。
私はいまさら子供に戻れない。
きっと近いうちにお見合いでもして婚約者を探して婿を迎えることになるだろう。
姉さんがいつまでたっても結婚できないから、健康になった私にその分期待がかかるだろう。
ここで食い止めなければならない。
ルイズには自由に生きて欲しいから。
公爵家に縛られるのは私と姉さんだけでいい。
ルイズは自由に好きなように生きて欲しい。いつか好きな人を見

つけてすてきな恋をして欲しい。
貴族の娘にそれは難しいことはわかっているけどそう願わずにはいられない。
そして同じ事をディアス君にも思う。
年齢とは不釣り合いの思慮深い瞳。
自分の立場を理解し、やるべき事をわきまえた分別ある大人の態度。
十歳の子供の姿じゃない。
あの子はもっと自由に、わがままになるべきだ。
だからここで負けて欲しくない。
お母様の暴力に勝って、自分の好きなように生きて欲しい。
なににも負けず縛られず。どこまでも自由に。

私の祈りが通じたように感じた。そう信じられた。
ディアス君の竜巻はお母様の竜巻を飲み込みお母様に襲いかかった。
お母様は慌てずにフライの魔法で空へ逃げた。
これで決着はついただろう。
ディアス君は勝ったんだ。
まるで自分のことのように嬉しく。誇らしかった。

・ヴァリエール公爵視点・

唖然とした。
あの妻が負けた。
妻の本気は実戦限定だ。
これは訓練に過ぎない。もちろん手加減はしただろう。
つまり殺すつもりで戦ってはじめて本気になったといえるのだが、

それにしてもあの魔法はおそらく妻に出せる最大の魔法だったはずだ。
戦闘技術では手加減していても魔法の威力で手を抜いたとは思えない。
その魔法にディアス君の魔法が勝ってしまった。
つまり単純な魔法の撃ち合い。魔力の力比べではディアス君の方が強いということになる。
これは、どうなる？
ここで終わるか？
終わらなければ大変なことになる。
妻が、カリーヌが本気になってしまう。
ディアス君が魔法で空を舞いカリーヌに近づいてなにやら話しかけた。
おそらく訓練の終了を確認したのだろう。
その返答として妻は、
ディアス君を殴り飛ばした。
吹き飛ぶディアス君を十数の風の刃が追撃する。
必殺の間合いといってよい。
「やり過ぎだ！　カリーヌ！」
私は思わず叫んだ。
隣でワルド子爵がフライの魔法を使って空へ舞った。
しかし間に合わない。間に合わないのだ。
ディアス君は不可視の刃に切り刻まれ……いや、消えた。
あの瞬間移動か！

・ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ視点・

やってくれるじゃないか、烈風。

そんなに魔法の威力で押し負けたのが悔しかったか？
なにが。
「戦闘中に敵に話しかけるとは覚悟が足りない！」
なにが戦闘中だ。
空に飛んで逃げたはいいが、呆然としていたくせに。
自分が負けることはありえないと思っていたのか？
勝者はいつも自分で、戦いが終われば這いつくばった僕に説教の一つもするつもりだったか？
いいじゃないか。
むかついた。
僕の全力をもっておまえを叩きのめす。
『黒い翼（ブラック・ウイング）』の異名に恥じない戦いをしてやろう。
僕は『黒い翼』のディアス・ラグだ。
「失礼した『烈風』殿。僕の名前はディアス・ラグ。『黒い翼（ブラックウィング）』のディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフだ。あいにく愛用の武器は手元にないが、我が全力でもってあなたを倒させてもらう」
彼女はしばらく呆然とこちらを見つめた。
「……私を倒す、と？」
「戦いを望んだのはあなただろう？　僕は全力であなたを叩きつぶす」
僕はすべての魔力を解放した。魔力の渦が物理的な圧力となって周囲に渦巻く。
今までは完全に制御出来る範囲の全力で戦った。
ここからは掛け値なしの全力だ。
水の精霊によって強化され、制御が難しくなった魔力。
そのすべてをもって叩きのめしてやろう。
彼女は驚愕した。
そしてその顔色を一瞬青ざめさせた。

・『烈風』カリーヌ・デジレ・ド・マイヤール視点・

唖然とした。
私の最大の魔法が、飲み込まれ消えていく。
私は敗北したのか？
意識せずに魔法を使い。向かってくる巨大な竜巻を空へ飛んで回避する。
しばらくすると竜巻が消えた。彼が魔法を解除したのだろう。
彼は別に勝利に高揚するでもそれを誇るでもなく自然な態度で私に近づいてきた。
そして話しかけてきた。
そろそろ終わりにしませんかと。
まるでごく普通の手合わせをして、それを終わらせるように。
この私の魔法を破ったというのに。
それを誇るでもなく。子供らしく喜ぶのでもなく。勝利の高揚など欠片も見せずに。
これが当たり前だといっているように見えた。
きっと錯覚だろう。この子はそんな傲慢な子ではない。
しかしそのなんでもないような穏やかな微笑みを見た瞬間、私は自制が聞かなくなって彼を思いきり殴りつけていた。
覚えたばかりの身体強化を最大にして、そして怒鳴った。
「戦闘中に敵に話しかけるとは覚悟が足りない！」
意味不明だ。
これは訓練だ。
実戦ではない。
ここはヴァリエール公爵家で私は公爵夫人だ。
そして彼はクルデンホルフ大公の息子だ。
私は気が動転している。
冷静な部分がそうささやく。

けれど私に染みついた感覚が不遜な敵を排除するために魔法を放っていた。
殴られ体勢を崩した敵に追撃の風の刃を。

しまった。
彼を殺してはまずい。
しかし放たれた魔法はもはや私のいいなりにならない。
私は彼が私の知らない防御法でももっているのを期待するしかなかった。
瞬間彼の姿が消え、少し離れた場所に現れた。
例の瞬間移動だろう。
私は驚いた。
あれは魔力を込めた足で大地を踏みしめ急激な加速を得る技術だと思っていたのだ。
空中で使えるとは思わなかった。
彼の表情は、驚くほど冷静だった。
不意打ちに怒ったわけでも理不尽な言葉に呆然とするわけでもない。
ただ静かに私を視線で射貫いた。
今までの穏やかさが嘘のような強い瞳だった。
そして口を開いた。
「失礼した『烈風』殿。僕の名前はディアス・ラグ。『黒い翼（ブラックウィング）』のディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフだ。あいにく愛用の武器は手元にないが、我が全力でもってあなたを倒させてもらう」
私は呆然とした。
これではまるで戦場の名乗りではないか。
「……私を倒す、と？」
私の言葉はあきらかに理不尽だっただろう。実際に彼はその言葉を笑い飛ばした。
「戦いを望んだのはあなただろう？　僕は全力であなたを叩きつぶ

す」

待って欲しい。
今のは少し気が動転していただけだ。
私はあなたと殺し合う気はない！
しかし制止の声を叩きつけるよりはやく物理的な圧力さえ伴う強力な魔力が私の口を止めた。
いままで、彼は私と互角程度の魔力を持っていると考えていた。
事実は違った。
おそらく彼は私を殺さないように意図的に魔力を押さえていた！
その魔力を解放した意図は確実だ。誤解のしようもない。
彼は私を殺そうとしている。
彼の瞳からはあの優しく思いやりにあふれていた暖かさが消え失せていた。
そこにあるのは強い意志。純粋な闘志。
目の前の敵を打ち払うという決意。
戦場で優れたメイジが浮かべていた。本物の殺気。
それらよりもさらに純粋な闘う意志。

私は恐怖した。
私は歳をとった。
私はながく鍛錬をしていなかった。
私は公爵夫人という安全な地位にいて実戦から遠ざかっていた。
いきなり突きつけられた戦場とおそらく最強の敵に私は一瞬恐怖した。

「見るがいい我が魔力制御法。その技の一端を」
彼は短く魔法を唱えた。
短いコモンスペルだった。
「ブラックウイング」

彼の背には彼の身体を覆いそうなほどの翼が六枚現れた。
上の二枚の翼が彼の身体を覆いプロテクターとなる。
下の二枚の翼が変化し左手に盾を右手の杖と一体になるように剣となる。
中央の二枚が彼の背中でまるで翼人のように力強く羽ばたいた。
黒い翼に包まれた少年は宣言した。
「あなたは今日いまここで、最強の名を失う」
私はすべての逡巡を投げ捨てて全力で攻撃魔法を放っていた。
杖は接近戦に対応できるように常にブレイドを展開。彼が接近してきたら剣技で戦う。
全身には魔力の身体強化と魔力防御を。
意識を戦場全体に向け目の前の敵を意識する。
油断は欠片もできない。
手加減もありえない。
殺すつもりでかからなければ殺される。
「かかってきなさい。坊や」
私は久しぶりの戦場で、笑った。
相手はディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ殿下。
評判の天才児にして、水の精霊の加護を受けた人物。
そして見たこともないオリジナルスペルを開発。習得したまさに魔法の天才。
その姿は彼の自称したとおりだった。
『黒い翼（ブラックウイング）』のディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ。
今まさに黒い翼を広げて大空に羽ばたく姿は、その異名そのものだった。

内心冷や汗をかきながら私は笑ってみせる。
なんとか彼を無力化して、この戦闘を終わらせなければならない。
殺す気でかかってようやく出来るかどうかという難事だ。
説得など聞く耳持つまい。

私は無防備に話しかけてきた貴族の顔面を殴ったのだ。
決闘を吹っかけられ殺されても文句はいえない暴挙であった。
いかに温厚な少年とはいえ、さすがに理不尽には反発する。
ああ、この闘志。この意志の強さ。
成長すればひとかどの人物になり大公家を継ぎ、立派に治めていくだろう。
後は、この戦闘をなんとか無難に収めるだけだ。

本当にただ少し彼の実力を知りたかっただけなのに、なんでこんな事になってしまったのか？
少し調子に乗りすぎた？
自分が勝つに決まっていると相手を侮り、慢心していた？
あきらかに私の失態だ。
ああ……情けなくて今すぐ自室にこもり、ひたすらおのれの愚かさを悔いたい気分だ。
とりあえず。
今はこの怒れる少年をなんとかしよう。
なんとか出来るかしら？

九章　烈風との対決（後書き）

決着はまだつかず。
以降はディアスの本気モードの予定です。
高速移動術『瞬動』初披露（ネギま！より）、ディアスのオリジナルスペル『ブラックウイング』初披露。
ディアスの二つ名をどうやって『黒い翼』にしようと考え、得意とするオリジナル魔法の名前にすればいいという発想で生まれた戦闘用魔法です。
この作品の二つ名は主に得意とする魔法や特技などからつけられるようなので、自分の持っている武器を二つ名にするのは無理がありそうだなと考慮しました。
次回で烈風対黒い翼は決着予定です。

追伸　内容を若干修正しました。

十章　黒い翼（前書き）

烈風対黒い翼、決着編です。
うちの公爵夫人、悪い人ではないんです。
ちょっと性格に問題があるだけなんです。

十章　黒い翼

・ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド視点・

驚いた。
殿下が危ないと思わず飛び出したが、殿下はあっさり魔法を回避してしまい。
その後圧倒的魔力を見せ反撃を開始した。
黒い翼に包まれ空を羽ばたくディアス殿下。
あれは魔法なのか？
どうしたらあんな魔法が使えるのか、僕には理解出来ない。
どうやらコモンマジックのようだが、コモンマジックであんな高度な魔法が出来るとは聞いたことがない。
コモンマジックは魔法の基礎であり、初心者が最初に習うもの。
日常で便利なものも多いが、それだけの魔法だ。そのはずだった。
どうやらコモンマジックに関しても我が殿下は常識を覆しているらしい。
あの烈風と魔法を競って勝っただけでも驚愕したのに目の前の光景はさらに想像以上だ。
その烈風が。トリステイン最強と目される彼女が、天才とはいえ十歳の少年に一方的に押さえ込まれている。
いまだ健在なのは殿下に彼女を殺す気がないからだろう。
殺す気ならばすでに何度も機会があったはずだから。
これはすごい。
僕は二人の決闘を止めることなどすっかり忘れて目の前の戦いに目を奪われていた。

・ヴァリエール公爵視点・

……カリーヌの阿呆。

面と向かってはなかなかいえないが内心では容赦なくその行動を罵倒できる。

ただの魔法の力比べで終わらせればよかったのだ。

それならばただの訓練。

天才と評判の大公家の跡取りの実力を見てみたかっただけ。

それですんだかもしれないのに。

魔法で負けたことにムキになって決闘を挑む馬鹿がどこにいるか？

おまけにディアス君まですっかりその気になってしまったし、大公家の息子が話しかけただけで殴り飛ばされ、危うく死ぬような攻撃魔法をぶっ放されたのだから怒るのもわかる。

無理もない。彼はまだ十歳だ。

ヴァリエール公爵家の面目などいちいち考えるほど場慣れしているわけでもないだろう。

この後、おそらく事情はクルデンホルフ大公に伝わる。

大公になんといって詫びればいいのだ？

無理矢理大事な息子を治療のために借りて、治療を成功してもらい。

おまけに末娘に魔法の手ほどきまでしてもらったにも関わらずこの決闘騒ぎ。

幸いディアス君が怪我をしそうな様子はないが、問題はこんな騒動を起こしたことにある。怪我の有無は関係ない。

はじめる前は大げさなことをいったが、私はある程度妻を信用していた。

大事な客人に重傷を負わせることはないだろうと。

ところが予想外な実力に大喜びして本気を出すし、最後はまともに食らったら大怪我確実の魔法を撃ち合い。あげくその魔法比べに負けたら今度は殺し合いじみた決闘だ。

どうせ後で自分の行動を省みてくよくよと悩むのだから、最初から自重すればいいものを。
ワルド君の時だってさんざん悩んで落ち込んだくせに。
また似たような暴走をしてくれた。

私はため息をつき、空を見上げた。
空中では驚くほどの高速飛行でディアス君が妻を翻弄している。
妻はもういくつか怪我を負っているようだ。
なのにディアス君は無傷。
妻の攻撃はかすりもしていない。
まったく見事な魔法だ。
風系統のフライとは比べものにならないあの飛行速度に機動性能、あれなら風竜と戦っても勝てそうだ。
「あの、お父様」
「なんだ。カトレア？」
「止めなくてよろしいのですか？」
心配そうに尋ねてくるカトレアに私は苦笑した。
「心配いらない。ディアス君は上手く手加減してくれている。少なくとも空中戦ではカリーヌはディアス君には勝てない。もうすぐ決着がつく」
「お母様が負けるのですか？」
今度はルイズが信じられないように口を挟んだ。
目の前の光景が信じられないようだ。
私も正直、この目で見なければ信じられない光景だ。
もうカリーヌは気力で持ちこたえているだけだろう。
直に終わる。
ああ、二人が距離をとったな。
最後の一撃で終わらせる気か、なぶり殺しよりは一撃で打ち倒された方がカリーヌの気も晴れるだろう。
まったく。手のかかる妻だ。

・カリーヌ・デジレ・ド・マイヤール視点・

私はまったく歯が立たなかった。
ブラックウイングを使用したディアス殿下の動きは私の予想を軽く超えた。
フライではありえない高速移動。さらにはその速度で自由自在に動き回る機動性能。
とどめにときおり繰り出される空中瞬間移動。
私の魔法はかすりもせず。
彼はひたすら一撃離脱を繰り返して右手の漆黒の剣で私を痛めつける。
身体中が痛む。おそらく無数のあざが出来ていることだろう。
数カ所ほど切り傷を負った。おそらく加減を間違えたのだろう。
それほど深いものではないし、後で治癒魔法をかけてもらえば簡単に治療出来るだろう。
体力はすでに限界に近い。
魔力も先ほどまでにかなり消耗していた。
それは向こうも同じようなものだろうが容赦なく攻め立ててくる。
よほど怒らせてしまったらしい。
殿下との戦いでわかったことがある。

まず殿下の魔力は私より強い。
単純な魔法の撃ち合いでは私は負ける。
接近戦では体格差で私の方が有利だ。だがそれも後数年だろう。
殿下が成長し、それなりの体格を得たら私は手も足も出なくなるだろう。
戦闘経験では私の方が上だろう。殿下もおそらく私の経験を警戒

している。
だから派手に正面から魔法や接近戦を挑まず。高速移動による死角からの一撃離脱戦法を徹底している。
こちらに手を打たせないために息をつかせずに攻撃し、消耗を強いている。
そして空中戦の技術だが、これは圧倒的実力差で負けている。
本当にもうどうしようもない。
ひたすら攻撃を見切り、可能な限り防御して耐えるしか手がない。
あの移動速度への対応策はない。
魔法を撃っても避けられ、接近戦を挑もうにも速度差がありすぎて近づけない。
ならばカウンター狙いをと狙っていても一撃入れたら例の瞬間移動であっという間に距離をとられる。
あれを真似できれば活路があるかと思ったが、さすがにすぐには無理だ。
おそらく瞬動の応用技術なのだろうが。基礎より応用の方が当然難易度は高いだろう。
大規模な魔法で事態を打破しようにもそんな隙を与えてくれない。
もうお手上げだ。
少なくとも空中戦ではディアス殿下に勝てない。
幻獣に騎乗していても勝てそうにない。
地上戦に持ち込めればと思っても、進路をふさがれ滅多打ちに遭い。空へ逃げる羽目になる。
そしてあの魔法。
六枚の翼をはやす魔法ブラックウイング。
詳細はまだ不明だが、おそらくあの魔法を使用時には他の魔法は使えないのではないか？
実際あの魔法を使ってから殿下が他の魔法を使うことはなかった。
使う必要がないだけかもしれないが。

これは負けた。
不思議とすがすがしい気分でそう思えた。
先ほどの醜態が嘘のように敗北を受け入れられた。
「なるほど殿下は確かに強い。特に空中戦で殿下に勝てるメイジはいないでしょう。幻獣に乗ってさえ、勝てるものはいないでしょう」
「降参ですか？」
「はい、私は自分が慢心していたことに気がつきました。殿下は強い。そしてもっと強くなることでしょう。私では到達できない高みへ行かれる方でしょう」
「努力しましょう」
そう、努力を怠らないから、この子は強い。
「殿下は『黒い翼（ブラックウイング）』と名乗っていましたね」
「はい。まだ二つ名はありませんがいい機会ですので名乗らせてもらいました」
「その魔法が由来ですか？」
「この魔法と愛用の武器の名前です」
魔法はともかく武器にまでそんな名前をつけているのか。
なんだか妙に子供っぽく感じて。少し可愛く思えた。
「少し長いですね。いっそ『黒翼（こくよく）』と名乗られてはいかがですか？」
「黒翼、ですか？」
「はい。黒い翼を自在に操るもの。そして大空であなたの翼の前に敵はいないという意味を込めて」
殿下は少し笑った。
「我に空で敵なしですか、少し大袈裟では？」
「おそらく事実です。殿下以上に空中戦に長けたメイジはいないでしょう。並のメイジではあっという間に真っ二つでしょうし、よほどの達人でも殿下の動きにはついていけません」
殿下はおかしそうに笑った。
「僕は最強になったつもりはありませんよ？」
「最強の名を返上させると仰ったではないですか？」

「空では勝てます。魔法の力比べでも負けないでしょう。けれど地上での殺し合いならわかりません」
驚いた。ここまで無様をさらした私を評価してくれるのか。
「殿下のお情けにすがりたくお願いがあります」
「なんですか？」
「せめて最後の一撃で勝負をつけていただきたい。つまらない見栄とお笑いになるでしょうが……」
殿下は了承した。
「いいでしょう。最後に互いの全力の一撃を、それで終わりにしましょう」
それでは、烈風の敗北にふさわしい一撃を出して見せましょう。
しかしこの子はいい。
正直、私がルイズの年齢だったなら荷物をまとめて彼の元へ押しかけていただろう。
本当にすばらしい。
ちょっとルイズにはもったいない気がしてきた。

・ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド視点・

二人の会話は聞こえていた。
どうやら殿下は公爵夫人に最後の情けをかけたようだ。
互いに一撃必殺の勝負による決着。
懐の深い方だ。
僕なら逆上して切り刻んでいるところだろう。
僕の時は増長していたくせに僕があまりにあっさり負けてしまったことで不甲斐ないと怒られ、気絶するまで魔法を叩き込まれたからね。
腕を折られた激痛でもう魔法なんて使えなかったんだけど。
実戦だったら確かに腕を折られても魔法を使って反撃できなきゃ

いけないってのはいまならわかるつもりさ。
理解出来るけど、復讐できるなら喜んでやるとも。
もっとも僕じゃ勝てないけど。

ある程度距離を置いた二人が互いに魔力を高め合う。
おや、殿下の翼が。
殿下の身体を覆っていた翼と左手の盾となっていた三枚が右腕の剣に集められた。
あの魔法、形態の変化も出来るのか。
今までのは空中戦での接近戦用の形態なのだろう。
そしてこれはおそらく一撃必殺の形態。

まずは公爵夫人が魔法を放った。
カッタートルネード。
触れるものすべてを切り裂く巨大な竜巻。
そして殿下は鋭い視線で接近する竜巻を見つめ、手に持った漆黒の剣を斬り下ろした。
「ブラックエッジ」
そう聞こえた。
黒い刃。巨大な漆黒の刃が竜巻を両断して霧散させ、公爵夫人を打ち据えた。
一瞬ひやりとしたが公爵夫人が惨殺死体になることはなかった。
おそらく殺傷力を落としていたのだろう。
気を失ったらしい公爵夫人が落下する。
僕はそんな彼女にレビテーションをかけて地面に優しく着地させた。
殿下の完璧な勝利だ。
「手間をかけました。ワルド子爵」
近づいてきた殿下に労われた僕は恐縮した。
「いえ、殿下の危機になにも出来ずに申し訳ありません」

「まぁ無事に済んだからいいじゃないですか」
殴られた怪我ももう治療しましたしね。
そういって殿下は明るく笑った。
いつもの穏やかな殿下だった。
先ほどまでの歴戦の傭兵のような闘志は欠片も見られない。
どちらが殿下の本質なのだろうか。
まだまだ僕が殿下を理解するには修行不足のようだ。
僕も努力しなければならないな。

・ヴァリエール公爵視点・

「気がついたか？」
目を覚ました妻は周囲を見回して、かすかにため息をついた。
ここは屋敷の私たちの部屋だ。
そのベッドに治療を受けた妻が横になっている。
「私は負けたようですね」
「完璧に負けたな。しかも大怪我をしないように手加減をされていた」
私は憮然と妻の顔を見つめた。
負けたというのに妻は不思議なほど清々しい顔をしていた。
まったくそんな顔が出来るなら魔法勝負に負けたときにおとなしく負けを認めていればいいものを。
「悔しそうではないな」
「どちらかといえばあんな醜態をさらしたことが悔しいです。私もまだまだ未熟ですね」
また部屋にこもって一人でくよくよ落ち込むのか？
「どうせまた部屋にこもって一人で落ち込むのだろう？　だったら最初から自重しろと何度いわせる気だ」

「性分です。そう簡単には変われません」
どこかふてくされたような顔をする。
そんな顔には惑わされん。
何年夫婦でいると思っている。
「お願いだから大人になってくれ。今回のことがどれほど問題になるかわからないはずがないだろう？」
「ディアス殿下は怪我もないはずですが」
おまえが殴った怪我以外はな。殿下が自分で治療したらしいが。
「そんな結果論がなににになる。おまえが決闘まがいのことをしでかした方が問題なのだ」
「口止めしては？」
無理だろうけどと言いたげな、投げやりな口調だった。
ふてくされて見せてもだまされん。
今回のことでうちがどれほど被害を被るのかわかっているのか？
実際口止めなど無理だ。
「そのことに関しては父と相談してくださいと答えてくれた。幼くても大公家の跡取りだ。抜け目がない」
ディアス君は謝罪する私についに許すとは一言もいわなかった。
その件は父に。
つまり大公に謝罪を入れろということだ。
大公は激怒するはずだ。
無理を言って息子を呼びつけ、次女の病を治療させ、三女に魔法を教えさせ、あげく決闘騒ぎ。
私だって娘がこんな扱いを受けたら怒るだろう。
気が重い。
胃のあたりに不快感がある。
まったく、いい迷惑だ。
娘の治療と大公との取引をきっかけに、これから大公と良好な関係を作るつもりだったのに。
ディアス殿下のことは王宮では最大限力にならなければならない

だろう。
そうでもしなければ大公家が敵対を決意しかねない。
そんなことになれば大公に援助を受けている貴族や我が家に反感を持つ貴族たちが連合して我が家を包囲するだろう。
いくらヴァリエール公爵家がトリステイン王国一の大貴族といえ大公家を核として大多数の貴族が結束したら、我が家の勢力は大きく落ち込むことになる。
歴史ある家柄故に潰される危険はよほどのことがなければありえないと思うが、それでも力が削がれるのは痛い。
暗い未来図だ。頭が痛む。
大公に頭を下げて謝罪の品でも贈らなければならないだろう。
それぐらいでどうにかなるはずはないが、こういうことには形式が重要だ。
ヴァリエール公爵家がクルデンホルフ大公家に頭を下げ謝罪の品を贈ったという形式がな。
今までは家柄故にクルデンホルフ大公家は格下の家と扱えた。
しかし今後はそうはいかなくなるだろう。
頭を下げ、それを周囲に認知させ。
事実上ヴァリエール公爵家はクルデンホルフ大公家の下に立つことになるだろう。
さらに今後大公家への協力はどんな形であれ惜しまないことになる。
今後はトリステインの最大の貴族はクルデンホルフ大公家になるだろう。
「まったく馬鹿げたことをしでかしてくれた」
「……すみません」
妻がベッドの上で縮こまる。
顔色が暗い。今にも泣きそうだ。
さっそく今日から部屋にお籠もりだな。
数日落ち込んで泣いたらなんとか復活するだろう。

娘たちには決闘騒ぎを起こしたことで自分から謹慎しているとでもいうか。

「それでルイズの婚約の話ですが……」

「出来ると思うか？　決闘騒ぎで激怒する大公にそんな話を持ちかけて相手にされるとでも？」

上目遣いでなにやらこちらをうかがう妻を一刀両断で切り捨てる。

妻がすっかりしょげかえった。

いまさらながらに自分の軽率な行動の影響に気がついたか。

長年公爵家の妻をやっているからだいぶましになったと思ったが、やはりどうにもカリーヌは大貴族同士の力関係の微妙さが理解出来ていない節がある。

あまりいいたくないが実家はあまり家柄のいいところではなかったからな、そういうことに疎いのだ。

「今はまだ無理だ」

私は断言した。

大公の怒りが静まったとしても難しい。

トリステイン一と呼ばれる大貴族から嫁をもらうことを大公は喜ぶだろうか？

権力を望むのならば、さらなる力を望むなら喜ぶだろう。

だが大公はそういうことを望む人柄ではない。

平穏無事に大公国を統治していければ問題ないとする御仁だ。

ルイズの魔法のこともディアス君は気にしないだろうが大公はどうだかわからない。

ルイズとディアス君の仲も会ったばかりの知り合いに過ぎない。

妻に勝ったディアス君を褒めていたぐらいだから親しみぐらいは感じているだろうが、それだけでは説得力がない。

娘を助けてもらった恩という手も通じない。

いかに治療困難の難病とはいえ、世間一般からすれば娘の病を治しただけだ。

しかも跡取りの一人娘というわけではない。三人いる娘の一人に

過ぎない。
おまけに嫁に出したいのは治療された本人ではなくその妹では、誰も納得しない。
カトレアを嫁に出すといえば心情的に納得しやすいだろうが年齢差がある。
カトレアは十八、八歳も年上の嫁を大公は喜ばないだろう。
しかも結婚は今すぐにではない。
ディアス君が成長して大人になってからだ。
その頃まで待っていたらカトレアは世間一般的に十分行き遅れと後ろ指を指される年齢になりかねん。
つまり有効な手札がなにもないのだ。
しかも肝心の大公家との関係は今後確実に、一時的にしろ悪化しかねない。
「しばらく大公家の機嫌をとりつつ、風向きが変わるのを待つしかない」
ヴァリエール公爵家とクルデンホルフ大公家との縁組み。
家柄的に申し分ないが、トリステイン一の大貴族と王家から独立国を任されるほどの大公家。二つの家の接近を快く思わないものも多いはずだ。
たとえば王家とか。
よほど上手く根回しをしなければいらない横やりが入るだろう。
最近は王家の貴族に対する影響力がだいぶ弱まっている。
そこへ大貴族同士が婚姻によって結びついたら……上手くやれば国がとれるな。
ディアス君なら国王もこなせそうだし、それも悪くないが。
王家を裏切るのは歴史あるヴァリエール公爵家としては心苦しい。
どれだけ無力でも王家は王家だ。
でも、もし。その機会があるならば。
いつまでも王座を嫌い空位にしているような王家などより私や大公、そしてディアス君の方がよほど……。

「カリーヌ……私が王家に杖を向けるといったらどうする？」
「どうもしません。私はあなたについていくだけです」
妻は少女のように笑った。
「ディアス君をどう思う？」
「時代の傑物といっていいかと思います。その器量と才能、そして人望はおそらくトリステインで並ぶものがいないほどになるでしょう」
「だが惜しむことにまだ野心と覇気に欠ける」
「まだ幼いからでしょう。成長すればまた違ってきましょう」
どうやら妻は私の考えがわかってきたようだ。
真剣な顔でディアス君を評した。
「彼は大公国を統治させても優れた統治者になるでしょう。けれど彼が望めば、あるいは彼に力を貸すものがいればさらに大きな舞台に立てる人物でしょう」
その視線に射貫かれて私は言葉につまった。
「……私はとても不遜なことを考えている。そんな私を軽蔑しないのか？」
「私はあなたに従うと決めています。たとえどのような道であろうとも……生涯を共にと」
私はまだ決断できない。
だがその準備はしておくべきだろう。
このままではトリステインは一部の心ない貴族の暴走でつぶれる。
王家にそれを押さえる力はなく、またその意志もない。
ならば私の手で、いや私と大公、ディアス君の手でやるべきではないか？
このトリステインの大掃除とその後の立て直しを。
その国王がディアス君であるかどうか、私にはまだ決断が出来ない。
しかしトリステインの立て直しは必要だ。
そのために大公の助力を得る。

私の小さなルイズの将来はそれからのことだ。
あの子を王妃の座につけるか、それともトリステイン立て直しの功労者の妻とするか、まったく別の未来を送らせるか。
すべてはこれからだ。

ああ、こんな事を考える私は罪深いのだろうな。
しかしこのトリステインのために、優れた人物にはそれにふさわしい舞台を用意するべきだろう。
私と大公が組めば他にも味方に出来るものがいるだろう。
まずは大公に恩義があるモンモランシ伯爵家。他にも大公の力によって持ち直した貴族たち。私が面倒を見てきた貴族たちも力になるだろう。
ディアス君は王位継承権を持つ王族の血筋でもある。
トリステイン立て直しの功労者にも、トリステインの新たなる王にもなれるはずだ。
困ったものだ。そのような不遜なことを考える貴族たちを押さえるために大公に頼まれたというのに私自身がその考えに魅了されはじめている。
大公にはしばらくこの件は伏せよう。
あくまでもトリステイン立て直しのための協力体制とするべきだ。
大公はおそらく現時点では息子の王位継承なぞ望まないだろうからな。
いずれ決断したならば、
そのときは説得しなければならないが、いまはまだいい。
今はまだ私は決断ができない。

王家よ。どうか私を失望させないでくれ。
どうか私にトリステインのために王家に杖を向けさせる決断をさせないでくれ。
アンリエッタ王女。

彼女が私の決断を後押しするか、それとも押しとどめるか。
よく見極めなければならない。

十章　黒い翼（後書き）

決着です。
烈風から認められ「黒翼」の二つ名ももらいました。
このイベントを起こすための対決だったといっても過言ではありません。
ヴァリエール公爵が微妙に王家、アンリエッタ王女を見限ることを検討中です。
展開次第では、ひょっとするかもしれません。
もっともディアスは世界の危機に立ち向かうため忙しいので、
そんなことに巻き込まれたら「迷惑だ！」と怒るでしょうけど。

追伸　内容を若干修正しました。

十一章　兄と妹（前書き）

ベアトリス本格登場です。
お兄ちゃん大好きぶりが表現できていればいいです。

自分のペースがどのくらいがいいか試行錯誤中です。
正直最初のペースをずっと続けるのは無理です。
文章量を減らすか、更新ペースを落とすか。あるいは両方か。
長く続けるためには上手なペース配分をしないとそのうち燃え尽きそうですから。

十一章　兄と妹

・ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ視点・

ふう、ひどい目に遭った。
ヴァリエール公爵家での騒動からはや数日。
僕はめでたく五体満足でクルデンホルフ大公家に帰って参りました。
いやぁ、みんなして脅かすから一時はどうなるかと思ったけどなんとかなったね。
意外と僕って強かったのか？
もっとも水の精霊にいわせればまだ足りないらしいけど。

それにしても公爵夫妻。誠心誠意の謝罪をありがとう。
もっとも言葉だけで許しなんかしないけどな。
せいぜい我が父に搾り取られて大公国の発展に寄与してくれ。
父さまには事情をすべて話し、公爵家から謝罪が来ることを伝えてある。
きっと上手く活用して今後のトリステイン本国との関係を有利に持っていくだろう。
せっかく娘の治療をしてやったというのに。
よくわからない訓練を吹っかけられ、あげくそれに勝ったらプライドでも傷ついちゃったのかぶん殴ってくるという無礼をやらかしたのだから、それくらい当然だろう？
ふはは、我が父上もたいそうお怒りのようだった。
きっと容赦のない要求を通させることだろう。
自業自得である。

そんなわけで理不尽に対する報復は父さまに任せて、僕は訓練に

精を出すわけだが。
やっぱりオリジナル魔法ブラックウイングは未完成だったな。
あれ使うと他の魔法を使う余裕がない。
フライで飛びながら他の魔法を使うぐらいは僕でも出来るのだが、ブラックウイングは無理だ。
あれはやたら維持に意識を割かなくてはいけない。
性能は破格だが、難易度でもフライなど比べものにならない。
普通のメイジはフライを使いながら他の魔法は使えないらしい。
というか一部の例外を除いて、魔法の同時使用は原則不可能というのが常識のようだ。
熟練者ならばフライを維持しながら他の魔法を使えるが、それだって単独で使うよりも威力は落ちるし使いにくい。おまけに強力な魔法はほぼ不可能だ。
だからメイジの空中戦は基本は空を飛べる幻獣に乗って行われる。
竜とかね。
そういえば公爵夫人は空飛びながらスクエアスペルつかってなかったか。
僕でさえ今のところそこまでは出来ないぞ？　どんだけ化け物なんだ？
唯一僕がブラックウイング展開中に使用できる魔法はブラックエッジだけ。
もともとこれはブラックウイング展開中に使用するのを前提に開発したオリジナル魔法だ。
ブラックウイングとの相性がいい。使えなければ困る。
もっともやはり単独で使用した方が威力も規模も大きく出来る。
これは仕方がないだろう。
今後の課題はもう少しブラックウイング維持の負担を軽くして、他の簡単な魔法ぐらい使えるようにしよう。
空中機動力と防御力、さらに接近戦の攻撃力まで備えるチート魔法だが、遠距離攻撃方法に乏しいのは不便そうだ。ブラックエッジ

は強力だが手札は多い方がいい。
しかも魔力制御をかなり身体強化にもっていかないと飛んでいるだけで吐きそうになるしな。
あの無茶苦茶な高速空中機動ははっきりいって強化なしだと死にそうになる。
あれを展開中は魔力制御法の技の大半が使えないのも欠点だろう。
使えるのは今のところ瞬動くらい。改善しなければな。
魔力の制御も以前はほぼ完璧だと思っていたが、水の精霊に魔力を強化されて制御能力が追いつかなくなった。
こちらも改善しなければ、正直あのとき全力を出したがあの状態で魔法を完全に制御する自信はあまりない。
周囲からは余裕で勝ったように見られていたが、下手すれば魔法を制御出来ずに無様に負けた可能性だってあった。
ブラックウイングの実戦使用ははじめてだったし、本当にうまくいってよかった。
本当に、運がよかったなぁ。
専用武器である元祖ブラックウイングがどうやら滅多に使用できないため、がんばって開発した第二の『黒い翼（ブラックウイング）』だが。デビュー戦はなんとか成功だ。

セラファナがぜひ二つ名は『黒い翼（ブラックウイング）』で！
と熱烈に希望したため、まぁ僕なりに努力したよ。
正直異名とか二つ名とか別にいらないんだけど、ずいぶん熱心に頼み込まれてつい承諾してしまった。
それにハルケギニアのメイジは普通二つ名とかもつものらしいしな。
ちなみにヴァリエール公爵夫人からもらった『黒翼』はセラファナ的には不評だ。
ちょっと違うんですよね～。微妙にイメージがわかってないですよね～。そもそもそれ別作品じゃないですか～。

とか、ブチブチいっていた。
僕的にはそんなことどうでもいいんだが、二つ名つければ能力が上がるわけでもなし。
聞いた限りでは二つ名を変えたって別に問題ないらしいし。
当分はただのディアス・ラグ・クルデンホルフだ。
そのうち気に入った名前が思いつくかもしれないから別に問題ない。

そういえば今日は久しぶりに妹の魔法を見てあげる予定だった。
ヴァリエール公爵家に出かけて留守にしていたから寂しがっていただろう。
今日は思いっきり慰めて、妹エネルギーを補給させてもらおう。
ふふふ、最近ひどい目に遭ったから……可愛い妹を愛でて十分に癒やされよう。

・ベアトリス・イヴォンヌ・フォン・クルデンホルフ視点・

ヴァリエール公爵家について調べてみた。
どうやらヴァリエール公爵家の歴史は我がクルデンホルフ大公家よりも古いようだ。
おかげでヴァリエール公爵家と大公家の前身、クルデンホルフ公爵家では家柄的にヴァリエールの方が上だったらしい。
それからクルデンホルフ公爵家は領内の発展とその経済力および功績を認められて大公の爵位をいただき、独立国を許された。
独立を許された理由は不明。
調べたけどわからなかった。きっと難しい大人の事情があったのだろう。
そしてクルデンホルフ大公国の誕生だ。

トリステイン王国の属国ながら一国の独立国。
それにもヴァリエールは絡んでいたらしい。
大公国を独立国として認められるように協力してくれたらしい。
おかげで我がクルデンホルフ大公家はヴァリエール公爵家に頭が上がらず。
トリステイン王国での序列も爵位では上回っているにもかかわらずにヴァリエールの下に置かれているらしい。
お母様がいうには「歴史と伝統しか心のよりどころのない」トリステイン貴族たちにとって歴史の古いヴァリエール公爵家は敬意を払う相手なのだそうだ。
独立国を統治する我が大公家よりもだ。
ただ古い家というだけで！
これが今回嫌がるお父様や、あきらかに気乗りしないお兄様の意思を無視してお兄様がヴァリエールの娘を治療しに行った理由だ。
古くさいだけが取り柄の家が私のお兄様を自由にしようなんて！
しかも馬鹿げたことに公爵夫人に決闘まで挑まれたらしい。意味がわからない。
私のお兄様に公爵家の屋敷で古くさいトリステイン貴族とお茶を飲むくらいしかしないオバサンが勝てるわけもなく無様に負けたらしい。ざまあみろ。
お兄様の話では公爵夫人は化け物のように強かったらしい。
お父様やお母様より？
と聞くと、お兄様はどこか疲れたようにいった。
「二人がかりでも無理、僕が勝てたのは奇蹟か運がよかっただけ」
お兄様がそこまでいうなんてどんな化け物だろう？
お兄様がそういうなら公爵夫人は強いのだろう。
けれど運で勝ったなんて信じられない。
もうお兄様の強さはお父様たちを超えているとお父様たち自身が認めているのだ。
お兄様はもっと自信を持つべきだと思う。

お兄様にわたしが調べたヴァリエール公爵家とクルデンホルフ大公家のことを話したら褒められた。
「ベアトリスは僕よりも勉強家だね。偉いよ」
そんなことない。お兄様はすごくいっぱい本を読んでいる。
「僕はただ本を読むのが好きなだけで勉強が好きなわけじゃない。だから知識も広く浅くが基本さ。あまり褒められたことじゃない。ベアトリスの方がずっと偉い。ちゃんとわからないことを調べて勉強しているのだから」
私はときどき疑問に思ったことを調べることがある。いつも暇があれば本を読んでいるお兄様の真似のつもりだった。
それがときどきお兄様も知らなかった知識を調べ上げるときがある。
そんなときは決まってお兄様は嬉しそうな顔をして私の頭を撫でてくれる。
「ベアトリスは勉強家だね」
そういって褒めてくれる。
それが嬉しくて、天才といわれてみんなに尊敬されている兄にもっと褒めて欲しくてわたしはわからないことがあると自分で調べるのが習慣になっていた。
おかげでわたしまで最近天才扱いされている。
わたしなんてお兄様に比べたら全然なのに。

今日はお兄様に魔法を見てもらう日だ。
魔法の訓練中のお兄様はすごく厳しい教師になる。
大人の教師の数倍厳しい。
でもそのおかげでわたしはまだ八歳なのに水のトライアングルになれた。
大人の兵士にだって負けない。
正直魔法学院なんてお兄様さえいてくれたらいかなくてもいいと

思う。
お父様にそういったら魔法学院は魔法だけを習う場所じゃないと叱られた。
それでもわたしはお兄様さえいてくれたらいいと思う。
将来の夢はお兄様のお嫁さんと言い続け、最近では微妙な顔をされている。
お母様に兄妹だからお嫁さんにはなれないといわれたときは一晩泣いた。
でもまだ諦めていない。
なにか方法があるはずと信じて今もこっそり調べている。
お兄様にも内緒だ。

お兄様の前でわたしは心を落ち着けて、軽く深呼吸をした。
身体の中を新鮮な空気が流れていく。
呼吸をゆっくりと落ち着いて繰り返し、魔力を身体に流しはじめる。
もうすっかり身体になじんだ感覚だ。
意識しなくても出来る。
身体に流れる魔力を使って身体機能を強化する。
魔力で体力を補強するようなイメージ。
お兄様が開発した魔法。魔法制御法、身体強化。
最初はほんの少し疲れにくくなったり速く走れるだけだった。
最近ではあきらかに子供には無理な重いものをもったり、実戦経験豊富な家臣にも格闘戦で力負けしなくなった。
魔法制御法の技も瞬動を少しと魔力弾を使える。
もっともまだ実戦で使えるほどの完成度じゃない。
お兄様の背中はまだ遠いのだ。がんばらなくては！
「いいね。制御能力も申し分ない。もう少ししたらもっと強化を強く出来るだろう」
お兄様に褒められた！　お兄様は褒め上手だ。いつもお兄様に褒

められるともっとがんばろうという気になれる。
もっと強くなれる。お兄様に近づける。
わたしは目を輝かせたがお兄様は釘を刺してきた。
「けど無理はいけない。僕もベアトリスもまだ子供だ。身体ができあがっていない。無理な強化をすれば身体を壊す。当分はこのくらいの強化が限界かな」
魔力が強くてもそれを制御出来ていても、身体が持たないのだという。
「お兄様のお話にあった空を速く飛ぶ魔法を使ってみたいです」
わたしはフライの魔法が苦手だ。
お兄様は風のスクエアで水のトライアングルだが、わたしにはあまり風系統の才能がなかった。風に属するフライはあまり得意じゃない。
お兄様の開発した空を自由に飛ぶ魔法はコモンマジックだと聞いている。
ならわたしでもできるかもしれない。
お兄様は少し困った顔をしてからいった。
まだ無理と。
その魔法はまだ試作段階でお兄様でも完全に使いこなせていないという。
「お兄様でも無理なのですか？」
「コモンマジックで難しい魔法を実現するには魔力制御が上手くなくては話にならない。そしてあれはその中でもたぶん最上級に難しい」
お兄様の魔力制御は完璧のはずだ。
それでも難しいなんて、それならわたしではなおさら無理だ。
お兄様の魔力制御はいま一時的に弱くなっているが、それでもわたしとは比べものにならない。
原因は水の精霊に魔力を強化されたことだ。
短期間に強力な魔力を得てしまったため制御が難しくなったとぼ

やいていた。
わたしはお兄様にお願いして水の精霊とお話をさせてもらったことがある。
ぶっきらぼうでえらそうだったけど、水の神様と思えば気にもならなかった。
いろいろなことを聞いたが、結局わかったのは神様のことはよくわからないということだけだった。
「でもコモンマジックでそんな難しい魔法を使えるのはお兄様ぐらいですね」
普通は初心者用の魔法といわれている魔法系統だ。
そんな強力な魔法があることさえほとんどの人は知らないだろう。
「昔はいたかもしれない。けれど使い手がいなければ途絶えてしまうからね」
お兄様がいうにはコモンマジックで難しい魔法を使うのは系統魔法よりもはるかに難しいそうだ。
系統魔法は魔力とイメージ、そして呪文があればある程度出来る。
それは魔法の発動のほとんどを精霊に肩代わりさせているからだとお兄様は考えている。そしてそれは水の精霊も認めていた。
しかしコモンマジックは制御された魔力を自分で操り、呪文をキーワードにして自力で発動しなくてはいけない。
精霊の力が借りられない。
だから簡単な魔法しか伝わっていない。
過去に偉大な達人が難しいコモンマジックを使用していたとしても、使える人間がいなくなってしまえばみんな忘れてしまう。結果誰も知らないということになる。
お兄様はそう考えていた。
「わたしでは無理ですか」
少し落胆した。
自由自在に空を飛んでみるのは楽しそうだと思っていたのだけど。
そんなわたしにお兄様は優しく笑いかけた。

「もう少し待ってくれ、この魔法を完全にして、それからもっと簡単に空を飛べるコモンマジックを開発してみせるから、そうしたらベアトリスもがんばればきっと使えるよ」
「本当ですか？」
「嘘はいわないさ。それに前から考えていたことだし」
お兄様がいうには今回試した『ブラックウイング』という魔法は戦闘用の魔法なのだそうだ。
そこから戦闘の機能を外して空を飛ぶという一点に集中した魔法ならばより簡単で扱いやすい魔法になるとお兄様は断言した。
「だからベアトリスはそのときのために訓練していて欲しい。特に魔力制御は重要だ。自分の魔力を自由自在に操れるようになれば最高だね」
「はい、お兄様。そのときは一緒に空を散歩しましょう」
「そうだな。それは楽しそうだ」
お兄様は笑ってわたしの頭を撫でてくれた。
わたしのお兄様はとても優しくて暖かくて、そしてとても大きく感じる人だ。
将来はきっとすごい人になるに違いない。
わたしは必ずそんなお兄様の隣にいるつもりだ。
妹だからではなくお兄様にも他の人にも認められてお兄様の隣に立つつもりだ。
それぐらいはきっと出来る。
わたしはお兄様の妹で、お兄様の一番の弟子なのだから。

・オルトルス・フォン・クルデンホルフ視点・

「なにを考えているんですか！　ヴァリエールの馬鹿どもは！」
事情を説明し終わったとたん、怖いくらいに沈黙を守っていた妻

が激怒した。
その心情は多いに理解出来る。
私もはじめて事情を聞いたときには腹の中が煮えくりかえった。
ヴァリエールの次女の治療の成功。
三女相手に魔法の教師。
とどめに公爵夫人相手に魔法の訓練。結果決闘騒ぎ。
次女の治療は約束だったから仕方がない。
治療のためにヴァリエールたちの前で水の精霊を召喚し、その力を借りたらしいがそれも仕方がない。
ヴァリエールの頼みを引き受けたときから覚悟していたことだ。
それはいい。
三女の魔法の教師もまぁいい。
モンモランシ伯爵の娘にも同じ事をした。
それを持ち出されれば断りにくかっただろう。
しかし決闘騒ぎとは。
「あまり知られていないが公爵夫人はあの『烈風カリン』だ。おおかたディアスの才能がどのくらいか興味が出たのだろうな」
だからといって客人にいきなり魔法を見せろとはなにを考えている？
絶対に妻は納得しないだろう。どう考えても暴挙だ。
なにも考えていないのではないかとさえ思える。
予想通りに妻は納得しなかった。
「だからといって決闘とはどういう事です！　下手をしたらディアスが命を落としていたかもしれないのですよ！」
「公爵夫人は熟練のメイジだ。自信があったのだろうよ。怪我をさせずにディアスを負けさせるぐらいたやすいとな」
「そんな甘い子ではありません。はっきりいって引退した伝説如きが片手間で相手に出来るほどわたしのディアスは弱くありません」
確かに。我が息子ながらどこまで行くのか気が遠くなりそうなほど才能を伸ばしているからな。

魔力制御という新しい技術の確立。
コモンマジックの特性を理解し、強力なコモンマジックの開発。
正直本当に十歳か疑わしい。
大人の研究者だって手を焼く成果だろう。
我が息子にいわせれば、メイジは魔力をいつも使っているくせにその制御をおろそかにしすぎる。
コモンマジックは魔力を直接操り様々な現象を引き起こすことにかけては系統魔法よりも優れた万能性がある。
などなど。
おまえ本当に子供か？
思わずうめいたほどだ。
天才にも限度があるだろうが、あいにく我が息子はそんなものに気づいた様子もなく飛び越えていく。
これで大人になったらなにをしでかすか。
十歳でこれだぞ？　大人になったらハルケギニアの常識ぐらい軽く粉砕するのではないか？
「とにかく、その後の対応に関してはディアスは上手くやった。ヴァリエールに言質を与えずわたしに謝罪しろの一点張りで押し通したらしい。こんな大失態を子供に頭を下げただけで終わらせたら大公家の名折れだ。というかむしろ今後のディアスの安全に関わる」
謝るだけで済むのならと他の貴族どもまでディアスの噂の真偽を確かめようと模擬戦やら決闘やら挑んで来かねない。
ここは一発、でかい反撃をしてディアスに手を出せばどうなるか。
ヴァリエールにも他の貴族たちにも思い知らせた方がいいだろう。
「まったくです。この件は高くつきますよヴァリエール……よくも私のディアスに決闘など……」
なんか妻が怖い。
世間の噂では私が息子を溺愛しているということになっているが、溺愛ぶりなら妻の方がはるかに上だと思う。
まぁ、私もディアスは大切だし愛してもいるし、ふざけたことを

やらかした馬鹿者どもを叩きつぶすのに躊躇などしないが。
とりあえずヴァリエールにはいろいろ骨を折ってもらおう。
さしあたってトリステイン本国との交易関係をもっと大公国側に有利にしてもらおう。
今まで本国の影響力を笠に着て甘い汁を吸っていた貴族どもは顔色を変えるだろうが、それを押さえるのもヴァリエールにやってもらう。
ふふふ、胃が壊れるほど苦しむがいいわ！
私だって息子のことではかなり苦労して、定期的に水のメイジに治療を受けているのだぞ？

もちろん王宮の押さえもしっかりやってもらわなければ。
どうやらアンリエッタ王女がうちの息子に興味を持ち始めたらしい。
王女に会わせてやるから王宮に寄越せなどと王宮側からいってきている。
ふざけるな。
十歳の子供に王宮での貴族とのつきあいなど早すぎる。
今度のヴァリエールの一件で懲りた。
当分息子は大公領からださん。
あの息子の行くところ騒動が起きる気がしてならない。
さいわい我が息子は本を読んで、ベアトリスと遊んでいれば幸せそうだ。
王族なんぞに会いたくもないだろう。
なにやら訓練も忙しいらしいしな。
行けといっても迷惑そうな顔をするに違いない。
ヴァリエールの時もそうだった。
本人はそんな暇があるなら魔力制御を完全にしたいとはっきりいっていた。
どうやら水の精霊から力を得たことで制御が追いつかなくなった

らしい。
才能を磨くことに余念のない息子にとって、自分の力が不完全になったことが我慢出来ないのだろう。
再び完全な魔力制御を身につけるべく日々努力している。
だからといって別に訓練漬けというわけでもなく。
時間を区切って読書の時間をつくり、ベアトリスと遊ぶ時間もつくり、毎日平穏に暮らしている。
しばらくはその平穏な生活を送らせてやろう。
今回の件では苦労をかけたのだからそのくらいはしてやらなければなるまい。
王宮の件は、そうだな。
息子の教育が一段落するまでといって引き延ばそう。

まだ幼い。
王族の前に出すには礼儀作法に不安がある。
なにかあっては大公家の恥になる。

こんな感じで時間を稼ごう。
息子の平穏な日々のため、これ以上の騒動を起こさせないために。
しばらく外の騒音はシャットアウトしてくれる。
「それでよいかと。まだ幼いのですから王宮なんて魔窟に近寄らせるべきではありません。才能があってもまだ子供なのですから」
妻も同意してくれた。
これで我が家の方針は決まったな。
しばらくディアスには大公領内でのんびりしてもらおう。
いずれ王宮がしびれを切らしたら拝謁もしなければならないだろうが、もう少し時間を稼ぎたい。
せめて騒動に巻き込まれない処世術を我が息子が身につけてくれるまで。
私自ら教育をする必要があるな。

大貴族や王族相手の処世術をもっとも教えられるのは大公家では私だろう。
あの吸収の早い我が息子のことだ。
教えさえすればあっという間に身につくだろう。
さて、何年もたせられるかな？
その間に我が息子には少々大人になってもらわなければな。
せめて騒動を起こさないように。

十一章　兄と妹（後書き）

ディアス式魔法理論その二の回です。
ベアトリスによるよい子にもわかるヴァリエール公爵家とクルデンホルフ大公家の関係もあります。

もっとベアトリスといちゃいちゃさせたかったのですが、
今回は文字数少なめを試そうと考えていたのでまたの機会にしました。
結局似たような文字数ですけど。
もっとコンパクトにまとめる努力をしないとダメかなと思います。

追伸　若干の修正をしました。

十二章　ラグドリアン湖の出会い（前書き）

ラグドリアン湖の園遊会です。
あれから多少時間がすすんでディアスは十二歳になりました。

十二章　ラグドリアン湖の出会い

・ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ視点・

十二歳になり、大公領の政治の勉強をはじめたりもして忙しくなってきた。

まぁ、やっていることは父さまの書類整理を手伝ったり、会議を見学するだけだけど。

「今は見て、触れて、覚えろ。これが将来おまえがやる仕事であり責任だ」

当然子供である僕に発言権などなく、セラファナが悔しがっていた。

内政チートで大公国を改革させたかったのだそうだが、僕は興味ない。というか必要がない。

うちは十分裕福で治安もよく、民衆も比較的豊かで安全な生活を保障されている。

僕如きが口を出すまでもなく大公国にはなんの問題もない。

僕は最近、モンモランシーやルイズそしてワルドと手紙のやりとりをしている。

ワルドは主に王宮内での噂を報告してくれる。

そして魔法の訓練について助言を求めてくる。

どうやら魔力制御法を身につけて有効活用しているらしい。

おかげで魔法衛士隊屈指の実力者になったと感謝されてしまった。

ルイズも主に魔法が用件だ。

魔法の訓練法について尋ねてきたり、どれくらい上達したか報告してくれる。

そしてついでのように家族の近況を教えてくれる。

長女のエレオノールさんはまた男に振られて荒れているらしい。

ルイズはさっさと婿を取って落ち着いて欲しいと切実に願っていた。

カトレアはすっかり元気で、特例としてトリステイン魔法学院で試験を受け、卒業扱いにしてもらったと嬉しそうに書かれていた。

ルイズは本当にこの下の姉が好きなようだ。

公爵夫妻は相変わらず厳しい人たちらしい。

でも最近では魔法の特訓をしていると褒められるようになったと嬉しそうに書いてあった。

なんでもコモンマジックが使えるようになったとか。

かつて不愉快な思いもしたがルイズにとってはいい両親なのだろう。

モンモランシーは主にたわいもない雑談だ。

たまに魔法の訓練法に行き詰まると助言を求めてくる。

特に重要でもない内容のモンモランシーの手紙が一番気軽に読めるので好きだ。

ワルドの手紙はなかば王宮に対するスパイ行為みたいだし、ルイズは魔法の生徒といった感じだ。モンモランシーが一番普通の友人のような手紙をくれる。

なんとなく嬉しいので、魔法の新しい訓練や新しい魔法のアイデアなどを書いて送っている。

最近は久しぶりに会えるので楽しみにしていると手紙をもらった。

ラグドリアン湖でトリステイン王国とアルビオン王国との間で親交を深めることを理由に園遊会が開かれる。

それに大公家も招かれていた。

僕も参加予定だ。

最近はこういったパーティーに顔を出す機会も増えた。

大公領のパーティに出席することは多いがトリステインのははじめてだが。

大公家で主催するパーティではモンモランシ伯爵とモンモランシーも参加することが多かった。

父さまと旧知の仲らしいし、モンモランシ伯爵は大公家に莫大な恩があるので呼ばれてもおかしくはない。

貴族のパーティというものは自分がどれだけ貴族社会に影響力があるか示すという意味もあるらしい。つまり参加者の大半は自分の派閥の人間だということだろう。

おかげで僕とモンモランシーはたまに会っている。

年々少女らしく成長していくモンモランシーがきれいなドレス姿で現れると驚くやら恥ずかしいやらという気分だ。

素直に。

「綺麗になったね」

と口に出したら真っ赤になってそっぽを向かれてしまったこともある。

なにか気に障ったのだろうか……その後の手紙ではパーティは楽しかった。また会いたいと書いてくれているから嫌われてはいないと思うけど。

そしてラグドリアン湖の園遊会にはモンモランシ伯爵家も招待されているらしい。

おかげで再会を楽しみにしていると手紙をもらっているわけで、僕としても楽しみだ。

モンモランシーももう水のトライアングルで魔力制御法もかなりのものだ。

付きっきりで教えたわけでもないのに、ベアトリスよりも才能は上かもしれない。

ああ、そういえばヴァリエール公爵家も招待されているらしい。

ルイズには会いたい気がするが、公爵夫妻に会ったらどんな顔をすればいいかが悩ましいところだ。

現在クルデンホルフ大公家とヴァリエール公爵家はトリステイン王国立て直しのための秘密同盟を結んでいる。

表向きはあまり交流はないが、裏ではいろいろやっている仲だ。
あまり親密な態度をとるのもどうかと思うし、かといって無視していい相手じゃない。
あくまで礼儀正しく大貴族同士の挨拶にとどめれば問題ないか。

今回の園遊会には妹のベアトリスも参加予定だ。
二歳年下の妹とはまだ大の仲良しだ。
そのうち思春期になって僕のことなど気にもかけなくなると思うと寂しい。
前世の妹も中学にあがってから少し距離を置かれたしな。
いつまでも僕の可愛いベアトリスでいて欲しい。
けどきっと無理なんだよね。なので今のうちにかわいがっておこう。
もちろんいくつになってもベアトリスは僕の可愛い妹さ。
でももうすぐ一緒に遊んでくれなくなるんだろうな……一緒に散歩をしたり、水遊びをしたり、ピクニックや狩りに出かけたり……。
く、泣いてなんてないぞ。

・エレーナ・イシス・フォン・クルデンホルフ視点・

「大丈夫でしょうか？」
「ディアスか？　まぁ大丈夫だろう。うちのパーティとは勝手が違うだろうが教えられる限りは教えたからな」
ディアスは確かに賢い子だし、分別もあるけど。
今回は……。
「確かアンリエッタ王女も参加されるとか」
「そうだな」
「大丈夫でしょうか？」

うちの息子はただでさえ有名でしかも目立つのだ。
変にアンリエッタ王女の目を引いたらどうしましょう。
確か婚約者もまだいなかったわね。あのお姫様。
不安だ。
「ディアス一人で行かせるわけではない。我々も行くのだからそう心配はいらないだろう。それに王女は一度ディアスに会いたがっていた。いい機会だ。少なくとも王宮で正式に拝謁するよりかは安心できる」
王宮ではなにをいわれるかわからないからなと夫はいう。
しかも今回の園遊会はトリステイン王家とアルビオン王家が主催するパーティだ。
アンリエッタ王女もディアス一人に関わってはいられないだろうと夫はいう。
だけど……。
「なにもベアトリスまで……」
「保険だ」
夫はあっさりいう。
いくらディアスでも妹をほったらかして騒動は起こさないだろう。むしろ騒動から積極的に妹を守るはずだ。
結果ディアスの暴走は押さえられると夫は自信たっぷりにいう。
そうだろうか？
あの子は自分で騒動を起こすのではなく。騒動のほうが寄ってくるのだ。
仲のよい、可愛がっている妹を守るためにかえって無茶をしないだろうか？
本当に不安だ。
けれどもう決まったことだ。
何事も起きませんように。
ラグドリアン湖というのがまた不吉な気がする。
あそこですでに一回大騒動を起こしているのだから。

すごく不安だ。

・ベアトリス・イヴォンヌ・フォン・クルデンホルフ視点・

すごい。

それしか言葉がなかった。

太陽の光に湖面が輝き、広大なラグドリアン湖の周囲にはパーティーの会場が作られていた。

そこにトリステインとアルビオンの大貴族たちが集まり談笑している。

私はラグドリアン湖の巨大さに圧倒され、たくさんいる貴族たちに少しおびえた。

「大丈夫だよ。僕も一緒にいるからね。こんなものはうちのパーティと一緒さ。ちょっと人数が多いだけで」

緊張をほぐすように軽い口調で話すお兄様は、まるで緊張した様子がなかった。

ごく悠然とわたしをエスコートしている。

さすがお兄様。両国の大貴族たちを見てもまるで気後れしていない。

わたしもしっかりしなくちゃ。

わたしはお兄様の妹で大公家の娘なのだから。

お兄様や両親に恥はかかせられない。

通り過ぎる貴族たちに軽く挨拶を返しながら、私たちは会場を歩いている。

何事も経験とお父様に二人で会場を見て回るように送り出されたのだ。

お母様はすごく心配そうだった。

その間に両親は貴族たちへの挨拶回りをするのだろうとお兄様は

いっていた。
わたしたちが一緒でなくていいのですか？
そう問うと、子供にはまだ早いと考えているんだろうねといった。
僕たちは気楽にパーティを楽しめばいいのさとお兄様は笑った。

そうだ。わたしたちはまだ子供なのだ。
ただパーティを楽しむだけ、難しいお話はお父様たちに任せればいいのだ。
そう考えると不思議と気が楽になった。
そうなると現金なものでお兄様を独占しているこの状態が嬉しくてたまらなくなった。
うちのパーティではいつもお兄様はお客様の相手ばかりでわたしにかまってくれることはなかった。
今日はわたしがお兄様を独占できる。
足取りが軽くなり、周囲に目移りしてしまう。
ふと誰かにぶつかった。
しまった。
「申し訳ありません。妹が失礼しました」
すぐにお兄様がフォローしてくれた。
わたしも慌てて失礼を詫びるとぶつかった少年はなんでもないというように優しく微笑んだ。
「いや、かまわないよ。こう人が多いと歩くのも大変だ」
優しそうな雰囲気がお兄様に少し似ているかな？
金色の髪の綺麗な男の子だった。どこの貴族の子だろう。
「僕はウェールズ・テューダーという。素敵なパーティを楽しませてもらっているよ」
ウェールズ？　ウェールズ・テューダーってあのプリンス・オブ・ウェールズ？　アルビオンの皇太子！
わたしは声が出なかった。
けして自分の立場を卑下するわけではないけど、アルビオンの皇

太子！　しかもなにかとお兄様との比較対象にされるプリンス・オブ・ウェールズ。アルビオンの天才！

「初めまして、僕はディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ。こちらは妹のベアトリス・イヴォンヌ・フォン・クルデンホルフ。高名なウェールズ殿下にお会い出来た幸運を感謝しております」

お兄様は流暢に自己紹介した。

わたしの様子を察してかわたしの紹介までしてくれた。

ウェールズ殿下は驚いたようだ。

「君がクルデンホルフの天才か！　幼くして風のスクエアに上り詰め、水の精霊の加護を受けた天才。噂はアルビオンにまで届いているよ。こうして会えるとは……僕のほうこそこの出会いに感謝するよ」

ウェールズ殿下のさしのべた手をお兄様はごく自然に握りかえし、二人は握手を交わした。

「この園遊会に参加するとは聞いていたけど、まさかこんなに早く会えるとは思わなかった。他の貴族への挨拶などはいいのかい？」

「父がいい機会だからよく見学しなさいと送り出してくれました。なので会場を妹と二人で散歩していました。ウェールズ殿下こそアルビオンの皇太子がこんなところにいていいのですか？」

ウェールズ殿下は苦笑した。

なんだか態度や表情もどこかお兄様に似ている。

「こちらも父が上手くやっていてくれてね。僕はわりと自由にさせてもらっている」

「お互いにいい父親をもちましたね」

「まったくだね」

そういって笑い合う。

まるで兄弟のように仲がいい。会ったばかりなのに。

「実は不安だったんだ。普段からクルデンホルフ大公家のディアス殿下を見習って魔法の修行をしろと父にいわれていたからね。正直、魔法の修行ばかりしていて自分の魔法を鼻にかけている嫌なヤツか

と思っていた」
むかっときた。お兄様が自分の魔法の腕を鼻にかける？　ありえない。
お兄様は少し苦笑した。
「僕も父にこっそりいわれていましたよ。天才などといわれて増長するな。アルビオンにはプリンス・オブ・ウェールズがいるぞと」
あ、それはわたしも聞いたことがある。
魔法の腕ではともかく、人望と才覚ではお兄様にも負けないって、だから油断しているとあっさり追い抜かれるぞとか。
「お互い名前ばかりが売れていると苦労するね。僕はプリンス・オブ・ウェールズなどというたいそうな名前にふさわしい功績などなにもないのに」
「ウェールズ殿下の将来に期待されているのでしょう。僕だって魔法の天才と持ち上げられていますが裏では魔法しか取り柄がない小僧とかいわれているそうですよ」
初耳だ。お兄様の悪口なんて大公国では聞かないから、きっといっているのはトリステイン本国の貴族だろう。
ウェールズ殿下は少し首をかしげた。
「魔法だけしか取り柄がないようには見えないな。それをいっている奴らはきっと見る目がない」
「見る目どころか会ったことさえありませんよ。僕はあまりトリステイン本国とは関わりを持っていないので」
「なぜと聞いていいかな？　君の立場ならトリステインの貴族たちに顔を売るのは大事だと思うけど」
お兄様は苦笑した。
まるで先ほどのウェールズ殿下のようだ。やっぱりよく似ている。
「僕の立場は微妙なのです。あまり目立つのはトリステインのためになりません」
声を潜めてそうささやく。
ウェールズ殿下は驚いたようだ。

そして真剣な顔で何事か考え、やがて小さく首を振った。
「そうか、君は王家の血縁でもあったな……君も苦労しているんだな」
「主な苦労は父が肩代わりしてくれています。僕に出来ることはあまり出しゃばらずにおとなしくしていることだけです」
少し悪戯っぽくウェールズ殿下は笑った。
「それはいい。面倒は父上に押しつけて楽が出来るなんて最高じゃないか」
「ウェールズ殿下も？」
「面倒ごとは優秀で経験豊かな父上がなんとでもするさ。僕は無難に笑っていればいい」
「立派な父をもつと楽が出来ていいですよね」
「まったくだ」
そういった二人はしばらく視線を交わし、やがて二人で笑い合った。
よくわからない。
この二人は仲がいいのだろうか、それとも実は仲が悪いのかしら？
「君とはよい友人になれそうな気がする。どうかな、僕の友になってくれないか？」
「僕も同じ思いです。まさかこんなに気が合う相手がいるとは思いませんでした」
そういって二人はまた握手を交わした。
そしてウェールズ殿下が不意にお兄様に近づいた。
「僕に力になれることがあったら遠慮なくいってくれ。トリステイン国内のことであろうとも多少は影響力はあるつもりだ」
「そんなことをトリステイン貴族の僕にいっていいんですか？」
「公然の秘密さ。今のトリステインは正直がたがただからね」
「いざというときは頼らせていただきます。もし万が一僕の力が必要なときは遠慮なく声をかけてください。可能な限りウェールズ殿下のお力になります。これでも大公国の跡取り息子です。多少のわ

がままを父にいうことも出来ます」
二人はどこか悪戯仲間のような雰囲気で笑い合った。
「ありがとう。それと私的な場で敬語はよしてくれ、ウェールズと呼んでくれると嬉しい」

「わかったよ、ウェールズ。出会ったばかりの僕の親友よ」
「ありがとうディアス。僕の憧れの男にして僕の親友よ」
二人は二王家の主催するパーティ会場でこっそり対等な口をきいて友情を誓い合った。
それからウェールズ殿下は実は君の才能にずっと憧れていたんだと告白した。
そんな殿下にお兄様は努力のたまものですよと平然と答えて小突かれていた。
僕も努力している。いや努力ではけして負けてないぞ？
そうウェールズ殿下は笑っていたけど、男の子ってこんな感じなの？　理解出来ない。
「では僕もさらに努力しよう。次に会ったときはスクエアになってみせる……と思う」
「自信なさげに聞こえますね？」
ウェールズ殿下は肩をすくめた。
「誰でもスクエアになれるわけがないだろう？　世間一般ではこの歳でトライアングルクラスだって立派に天才の範疇なんだからな。君は自分を基準にしない方がいいぞ」
「それではまるで僕が常識外れみたいじゃないですか」
「自覚がないから余計に気をつけろといっているんだよ。君の才能はまぶしすぎる。気をつけないと凡人の嫉妬を買うよ」
「気をつけましょう」
「それでいい。確か僕のほうが年上だったな？　年長者のいうことは聞くものだ」
「僕たちは親友じゃなかったのですか？　いつから僕の兄になった

のです？」
どっちでもいいじゃないかとウェールズ殿下は笑っていた。
「では親友、また会おう。ベアトリス嬢もまた後ほどお会いしましょう」
「では、また後ほど」
二人は軽く言葉を交わして別れた。
お兄様は気後れとか緊張とかなさらないのでしょうか？
なんだかあっという間にウェールズ殿下と対等な友人になってしまった。
「お兄様、ウェールズ殿下とお兄様は雰囲気が似ていますわね」
わたしがそういうとお兄様はしばらくわたしの顔をじっと見ていた。
「そう思うか？」
「はい。お兄様はそう思わなかったのですか？」
「……まぁ、似たような人だとは思ったよ」
憮然とした顔でそう答えた。

その顔がおかしくてわたしはクスクス笑った。
今頃ウェールズ殿下も同じ顔をしているに違いないとなぜか思えた。
二人はとてもよく似ているから。
才能に恵まれ、容貌も優れ、なにより人を惹きつける魅力がある。
性格も穏やかで紳士的、でも優しげな表情の下ではしっかり知恵を巡らしている感じだ。
きっと自分のような人間はそうはいないという自負がお互いにあったのだろう。
そして自分にそっくりな相手を見つけた。
お互いに天才と呼ばれる者同士、しかも国の跡継ぎという立場もよく似ている。
よく似ていて、端から見ても相性の良さそうな二人だった。

でもどこか悪戯仲間というか悪友って感じがするのだけど。
「仲良く出来るといいですね」
わたしはお兄様がアルビオンの皇太子と友情を得たことを素直に喜んだ。
プリンス・オブ・ウェールズと友人。
その事実はお兄様にとってマイナスになることはないだろう。
お兄様はそんなわたしに静かに微笑んでいた。

十二章　ラグドリアン湖の出会い（後書き）

ウェールズと親友になりました。
この作品でのウェールズは優秀な人物である予定です。
笑顔の下ではディアス並みの計算高さをもっていると思っています。
こんな二人が出会えば嫌い抜くか友達になるかのどちらかだろうと。
友達にしてしまいました。

次回は園遊会の続きです。

十三章　ラグドリアン湖の夜（前書き）

ラグドリアン湖の園遊会の続きです。
一晩時間をおいてから修正したらだいぶ形が変わりました。

十三章　ラグドリアン湖の夜

・ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ視点・

ウェールズとお友達になりました。
第一印象としては、人当たりのいい笑顔を浮かべつつ腹の中ではしっかり思考を進めている男といったところか。
僕の微妙な立場をあっさり理解したようだし頭も回るだろう。
さすがプリンス・オブ・ウェールズ。
あんなのがいてアルビオンはなんで滅んだんだ？
セラファナの話では確か滅びたあげく、他国の植民地扱いだったような。
本気で不思議だ。

さてラグドリアン湖で開催されている園遊会だが、実は夜まで続く大イベントだった。
昼の部は貴族たちが自由に会食し、挨拶をして回っている。
夜の部になると、なにやら子供には聞かせられない政治向きな話などがあちこちでされるらしい。
なので僕とベアトリスは夜の部への参加はしなくてよいと両親からいわれていた。
用意されている休憩所で休んでいていいとのことだ。
さすがクルデンホルフ大公家。
一軒の別荘のような屋敷を与えられていた。
今日のためだけに作られたと聞いている。
しかも各貴族に似たような休憩所という名の屋敷が用意されているらしい。
一体何軒建てたんだ？
これはトリステインとアルビオンで費用を折半にでもしているの

だろうか？
さすが王家。見栄を張るのにも金をかけるな。

夜の部の園遊会が始まり、僕とベアトリスは用意された屋敷で休んでいた。
たくさんの人に会って疲れたのだろう。
ベアトリスはそうそうに部屋で眠ってしまった。
昼間会ったルイズやモンモランシーももう休んでいる頃かな。
気持ちよさそうに眠る妹の寝顔を見届けて、僕は一人外をぶらついていた。
特に理由も目的もない。
ただ、なんとなく。夜のラグドリアン湖を歩いてみたかっただけだ。

パーティ会場周辺には近寄らずに夜のラグドリアン湖を散策する。

ここで水の精霊に目をつけられて、事態は急速に動き出した。
僕は聖戦という戦争を回避するためではなく。
その原因である地下の風石鉱脈、ひいては風の精霊の暴走を抑え、ハルケギニアの精霊のバランスを取り戻さなくてはならなくなった。
その具体的手段はまだわからない。
しかしおおよその想像はつく。
水の精霊が僕に求めたのは精霊を自在に操れるだけの精霊との親和性。
精霊を使い、精霊に訴えかけ、精霊の力を借りる精霊魔法の実力。
軽く意識すると、周囲の精霊たちが僕の意志に応えてくれる。
精霊たちが僕のためにほのかな明かりをいくつも灯し、僕は精霊たちの意志を感じ、精霊たちに僕の意志を伝える。
おそらく、水の精霊が望むのは僕という精霊使いによる風の精霊との直接交渉。
そのための精霊との親和性であり精霊魔法の実力なのだろう。

暴走する風の精霊に僕の意志を伝え、その暴走を鎮めさせる。
つまり風の精霊を従えるだけの実力が僕には必要なのだろう。
推測でしかない。
だがもしそうだとしたら出来るだろうか？
水の精霊によればあと少しらしいが……。
「神様相手に交渉か……まぁ、魔王相手に剣をもって戦うよりかはましか」

もう少し。
おそらく、あと少しなのだ。
そうすれば使命は終わる。
あとは、僕の好きに生きていいはずだ。

無性に今の状況を息苦しく感じる時がある。
背負っているのは下手をすれば世界の行く末だ。
重苦しく、胸の内に悲観的な未来が思い浮かぶ事も多い。
僕に出来るのだろうか、僕はただの本好きだ。
どれだけ努力して、どれだけ才能を伸ばしても本質は変わらないと思う。
そんな僕が世界を救う？
なんの冗談だと笑いだしたい。
ひたすら笑って、泣いて、なにも考えられなくなってしまいたい。
僕にはそんなだいそれた事をする自信がない。
僕はそんなにえらい人間ではない。
セラファナ。なんで僕だったんだ？
いや、おまえはこうなることを知っていたのか？
戦争に勝つか、戦争を回避しろといわれた。
それだって十分難事だったが、蓋を開けてみれば暴れている神様をどうにかしろという話だった。
カミサマのサポート。天才といわれる才能。水の精霊の加護と精

霊たちの協力。
それだけの力があっても僕は不安だった。
僕は本当に世界を救えるのか？　セラファナ。

・ウェールズ・テューダー視点・

夜の闇の中で思い悩んでいると、不思議な光を見つけた。
ライトの魔法ではない。
もっと小さくかすかな光がたくさん集まっている。
あれはなんだ？
まさかあれがラグドリアン湖の水の精霊か？
息を潜めて近づいてみると見知った顔の少年がそこにいた。
ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ。
優しい物腰と笑顔の下に、奥深い知恵と胆力を隠しもっていそうな少年だった。
その彼がどこか思い詰めた顔をして、不思議な光たちに囲まれている。
あれは、なにかの魔法なのか？
思い切って声をかけてみることにした。
すると彼は少し驚いたようにこちらを見た。
「こんばんは、親友。よい夜ですね」
「ああ、よい夜だ。月も美しい……ところでこれは君の魔法か？」
彼は小さく笑った。
「僕のではありません。精霊の魔法です」
驚いた。
これは精霊の力なのか？　彼が水の精霊の加護を受けていることは聞いていた。

精霊の力も使えるのか？
「驚いたな。僕はエルフの魔法を見たことがないが、似たようなものなのだろうか？」
「水の精霊によると違うそうです。エルフの魔法は契約によって精霊の力をかき集めるもの。僕の精霊魔法は精霊と意志を通じ、お願い事をする魔法です」
そして系統魔法は呪文によってメイジの意志を精霊に強制する魔法なのだと続けた。
「これは光の精霊とでもいうのかな？」
幻想的な明かりに照らされて、僕は精霊という存在をはじめて身近に感じていた。
これが精霊。
これが精霊の力。
なんて幻想的で、美しい力なのだろう。
「さぁ、この世界には名前も知られていない精霊たちが数多くいるらしいですから。今は僕の意志に触れて、どうやら僕を慰めているようですね」
慰める？
先ほどの思い詰めた表情がちらりとよぎった。
笑顔を浮かべて僕と話す友人に問いかける。
「なにか、悩み事でもあるのか？」
「ええ、いろいろと。もうじき解決する予定ですが」
穏やかな笑顔にそうなのかと安心しかけ、そんなはずがないと思い直す。
あの表情を見ていなければあっさり納得していただろう。
それほど自然な笑顔だった。
けれど僕はそれ以上聞けなかった。
親友と呼びながらも、しょせん僕らは今日会ったばかりだ。
あんなに思い詰めた表情をさせるなにかを聞き出す資格は、僕にはない。

ただこれだけは聞かなければならない。親友として、今日知り合った年長者として。

「深く聞くつもりはない。だが君はその悩みを相談できる相手はいるかい？」

「一応いますね」

そうかと僕は安心した。

少なくとも彼は一人で悩みを抱え込んではいないのだろう。

それだけでも、きっと彼の支えになり、心の救いになるだろう。

「かわりに僕の悩みを聞いてくれるかい？　あいにくと相談相手に困っていてね」

「僕でよければ」

話してしまっていいだろうか？

まだ迷う自分がいるが、どこかで開き直ってもいた。

自分から踏み出さなければ彼に握手を求めた意味がない。

信頼を得たいのならば、自分から一歩を踏み出すべきだ。

「実は僕には想い人がいてね」

僕は話し始めた。

とても大事な。大好きな女性がいること。

彼女には立場があり、僕とは滅多に会えないこと。

ずっと手紙の交換をしていたこと。

今日久しぶりに会って彼女の美しさに目を奪われたこと。

あらためて彼女が好きなことに気がついたこと。

これから会う約束をしていること。

けれど未だに決断できないこと。

たとえ彼女に僕の気持ちを打ち明け、お互いの愛を誓ったとしても結ばれる可能性は限りなく低いこと。

そんな誓いに意味などあるのか。

互いを苦しめるだけではないか。

僕は彼女に会いに行くべきなのかどうか。

「どう思う？」

長い告白に、彼はしばらく考え込んだ。

「お相手はトリステイン貴族の子女ですか？」

「……そのようなものだね」

彼はじっと僕の目を見つめた。

「まさかと思いますがアンリエッタ王女などということはないでしょうね？」

僕の心臓が大きく跳ねたような気がした。

すべてを見透かすような瞳が僕を見つめている。

「いえ、答えなくてもいいです。言わない方がいいこともあるでしょうから」

「助かる。内密にしてもらえると嬉しい」

白状したも同然だ。

僕は観念した。

「アンは僕の従妹でね。昔からつきあいがあるんだ」

「アンリエッタ王女のお気持ちは確かめられたのですか？」

「はっきりと言葉にはしていないが同じ気持ちだと信じている」

彼は小声でなんと報われない恋をなさるのかと呟いた。

僕は腹を立てたりはしなかった、まったく同感だ。

お互い王家の跡取りで、一人っ子。

他に有力な後継者候補もいない。

まったく厄介な相手に恋をしたものだと思う。

けれどお互いの立場を理解していても、惹かれてしまったのだ。

ただ無性に心惹かれて、ついに今夜二人で逢うことになっていた。

そして直前になってうじうじと悩んでいる。

まったくなにがプリンス・オブ。ウェールズだ。

情けない限りだ。

「僕は恋愛をしたことがありません。だから正直恋愛というものがどういうものか実感出来ない。知識としては知っていても理解は出来ない。ウェールズにとっての恋愛とはなんなのですか？」

意外な問いに僕はしばらく考えた。

そして素直に心に浮かんだ言葉を口に出した。

「恋愛というのは、僕にとっては自分よりも大切に思える女性を想うことだ。彼女がしあわせになることを願うことだ」

「相手がしあわせになれば、満足できるのですか？」

「もちろん」

「そのそばにいるのが自分でなくても？」

その問いに僕は言葉につまった。

そして心を静め、考え、心の中の想いを探り出した。

「出来ればそばにいたい。僕自身の手でしあわせにしたい。だがそれがかなわないなら、せめて彼女にはしあわせであって欲しい、笑っていて欲しい。そのためなら僕はこの想いを永遠に胸の奥深くに封じられるだろう」

年下の少年の瞳にどこかこちらを賞賛するような感情が浮かんだ気がした。

「……たとえ今生にてこの恋が成就しなかったとしても、来世にて再び出逢い結ばれよう。たとえこの身は結ばれなくても、魂は常にそばにある」

恋を知らないと宣言した少年の口から、心が温かくなるような言葉が紡がれた。

たとえこの世で結ばれなくても、来世で結ばれよう。

身体は離ればなれでも、魂は常に一緒にいる。

いい言葉だ。

たとえ結ばれなくても、魂は共に。

僕にそんな愛し方が出来るだろうか。

いや、そうじゃない。
それこそが僕たちの愛の形ではないのだろうか。
わがままを通し、背負っている国と多くの人々を振り捨てることは僕には出来ない。
アンリエッタだって望まないに違いない。
それなら僕たちは誇りと希望をもって、結ばれない愛を魂に宿そう。
来世に希望を。
そして魂は共にあることを誓い合いそれを支えに生きよう。
「ありがとう。僕の道が見つかった気がする」
「役に立てたならよかった」
「僕もその言葉のようにあるべきなのかもしれない。アルビオンの皇太子としては彼女と結ばれなかったとしても、来世ではきっと。そして離れ離れでも彼女への想いは消えることなくこの魂に刻み続ける」
僕にも彼女にも立場がある。
互いに生まれながらに背負った使命と責任がある。
だからたとえ今の世で結ばれなかったとしても、来世ではきっと普通に恋をしてあたりまえのように結ばれることも出来るかもしれない。
「それがしあわせなのかどうか、僕は正直自信がありませんが」
「他の誰がどう思おうとも、それが僕の道だ。僕が幸福と信じていればその道は春の庭園のように華やかな道なのさ」
どうも理解出来ないらしい。
不思議そうな顔をする親友の肩を叩き、僕は歩き始めた。

アンリエッタに逢い。今の言葉を伝えなければならない。
そして今は互いに生まれ持った使命と責任を果たすことを誓い合おう。
僕たちはそれぞれの王国の未来を背負って立つ人間だ。

その責任は果たさなければならない。
そして、その責任を果たし今生をまっとうしたそのときは……来世にて幸せに暮らすことを誓い合おう。
僕たちの魂が常に共にあることを互いに願おう。

ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ。
評判の天才児。
水の精霊の加護を受け、どうやら精霊の力まで使える少年。
深い知恵と、優しい心を持つ親友。
僕はよい友人を得た。
この縁を大事にしなければならない。
ただ心配なのは、彼が背負っているであろう運命についてだ。
傑出した才能と力を持つ人物に、始祖はどんな試練と運命を与えたのだろう。
ちらりと垣間見た。彼の重く苦しむような表情。
彼はいったいどんな使命を知り、苦しんでいるのだろう？
いずれ彼から相談を受けられるぐらいには信頼されたいものだ。
そのときは全力で彼の力になろう。

親友よ。その時が来たら僕は全力で君の力になろう。
だからその時は頼ってくれ。
君が運命の困難さに押しつぶされることのないように、僕は祈っている。

十三章　ラグドリアン湖の夜（後書き）

ウェールズと友情を深めました。
ウェールズとアンリエッタの告白内容を変更しました。
ディアスも実はけっこう悩んでいたりもしました。

僕は世界を救えるのか？
やっぱり世界を救う勇者はこれで悩まないと、個人的にお約束だと思っています。

今後の展開はかなり原作を離れていきます。
エルフとの対立？　ガリアの陰謀？　聖地を目指す聖戦？　伝説の虚無？
なにそれ？　うちは関係ないよという感じで。
原作ストーリーが大好きな方は注意してください。
まったく別物の物語になる予定です。

十四章　風の精霊（前書き）

ついに風の精霊へと会いに行くお話です。

今後の展開について悩みましたが初期の構想通りに進めつつ、気の向くまま気楽にやろうという結論で落ち着きました。

十四章　風の精霊

・ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ視点・

ラングドリアン湖の園遊会も無事終わった。
ウェールズとはときどき手紙のやりとりをするようになり、あの夜の顛末も少し聞いた。
結果からいえば、二人は無事にお互いの気持ちを認め合えたらしい。
ただ立場があるからお互いに結ばれることはないだろう。
というところでアンリエッタ王女に泣かれて大変だったらしいが。
そこをプリンス・オブ・ウェールズの口八丁で乗り切り、なんとか納得してもらったらしい。
さすが色男。
事実上振るに等しい行動なのだが、その後も友好的につきあっているとは。
よほどアンリエッタ王女に想われているのか。
それとも口先で丸め込んだのか。
どちらにせよ他人の恋路に興味はない。
我が親友にはがんばってくれとしかいいようがない。

そして僕はついに水の精霊から、精霊使いとしてはすでに一流と認められた。
「盟友よ。汝はすでに精霊使いとして十分な能力を持った。いまの汝ならば我らが根源に会うことも出来るだろう」
そして水の精霊は語った。
その力を使って精霊の門を開き、直接精霊に会いに行くことが出来ると。
僕は目の前に姿を現している水の精霊に問いかけた。

「なら僕は、これから風の精霊に会いに行けばいいのか？　暴走を止めるようにと」
「それが一番早い。もし風の精霊自身で暴走を止められないのならば他の精霊たちの力を借りて抑えればよいだろう」
汝はそれが出来る。
水の精霊はそう保証した。

僕は大きく息を吐いた。
セラファナ。
僕は、ようやく使命とやらを果たせるらしいぞ？
『がんばりましたね。あともう少しという感じです。風の精霊との交渉がうまくいけば、この世界の精霊のバランスが正常化され、地下の風石鉱脈の暴走もなくなるでしょう』
そうすれば聖戦はおきない。
いや、ロマリアが望めば聖地奪還の聖戦が起こる可能性は残るが、少なくとも生き残るためにエルフの土地に侵攻する理由はなくなる。
差し迫った理由がなければ、ロマリアといえども聖戦を強行は出来ないだろう。

最近知ったことだが、ロマリアの権威とやらもだいぶ落ちてきているらしい。
ブリミル教内部の腐敗。数々の聖職者の不祥事。
さらには新興国であり始祖の血を引かない国であるゲルマニア帝国の台頭。
ガリア王国も無能王と揶揄されながらもジョゼフ王が対立していた王弟一派を粛正し、確実に国内を掌握しつつある。
そして噂ではジョゼフ王はブリミル教とロマリアに好意的ではない。
大国ガリアでのブリミル教の影響力は縮小傾向にあるらしい。
アルビオン王国はウェールズ皇太子が老齢の父を補佐し、実質国

のトップに立っている状態らしい。
プリンス・オブ・ウェールズの名に恥じない手腕に多くの者が彼の元へ集っているという。
手紙ではけして褒められたことじゃないこともいろいろやっていると愚痴っていた。
返事として将来の国王は大変ですね。がんばってくださいと応援したら。
大公国の跡継ぎである君も他人事ではないぞ。せいぜい人格が歪まないように気をつけろとからかい混じりの返答が来た。
……人格が歪むようなことをやっているのか、我が親友は。

そして我がトリステイン王国は、宰相であるマザリーニ枢機卿の奮闘でどうにかもっていた状態だった。
しかし彼は元はロマリアから来た聖職者で貴族たちに人望がない。
そのことで国内はいまいちまとまりがなかったのだが、最近ではヴァリエール公爵の一派が積極的に動き、貴族たちをまとめはじめている。
クルデンホルフ大公派もそれに協力し、ヴァリエール公爵とクルデンホルフ大公、そしてマザリーニ枢機卿が現在のトリステイン王国を支える柱になっている。
アンリエッタ王女も園遊会以来、多少は政治の場に参加するようになり、貴族たちはアンリエッタ王女が次期女王となることを大いに期待している。
ちなみに我が父上はその案に多いに賛成のようだった。
我が父上にいわせれば王とは国の象徴であり、その元に貴族たちが力を合わせて国を動かしていけばいいのであって、別に国王自身が名君や英才である必要はないという。
アンリエッタ王女は最低限王としての常識的才覚を持ってさえいれば問題ない。
後は周囲に優秀な臣下を多くつければ、国のことは彼らがやって

くれる。
最初はそれで問題ないというのが我が父上の見解だった。
やがて歳を重ね経験を積めば、自身で力をつけ腕を振るうようになるかもしれないが、それは将来のことと考えているらしい。

アルビオン、トリステイン、ゲルマニアがしっかりしていればロマリアの扇動に乗ってさして必要でも利益があるわけでもない聖戦など始めるはずもない。
ガリアはかつては敵国だった。
今回はどうか不明だが、ロマリアへの批判的態度はどうやら事実らしいので聖戦に賛成する可能性は低いとみている。
セラファナがいうにはすでにこの世界はかつての世界とは別世界といっていいほどに変化してしまったらしい。
よほどのことがなければ同じ悲劇はありえない。
それがセラファナの現状認識だった。

すぐにでも風の精霊の元へ行くかと問う水の精霊に、僕は一日時間をもらった。
その一日で、父さまの仕事を手伝い。母さまへ勉強の成果を褒めてもらい。妹と一緒に本を読んだ。
もうすぐだ。
これが終われば、僕は普通のこの家の息子になれる。
すべてが終わったら、家族に話そう。
すべて終わったことだといって話してしまおう。
どんな顔をされるだろう。
やっと話してくれたといわれるだろうか？
心配をかけさせたと怒られるだろうか？
少し不安で、なぜかとても楽しみだ。

「それでは、いくぞ」

「ああ、いこう」
そして僕は精霊魔法により風の精霊へと至る門を開いた。
僕は風の精霊に会いに行く。
それですべてが終わると、僕は信じて疑わなかった。

そこは懐かしい雰囲気の場所だった。
とても広く、何処までも世界が続いていそうな殺風景な空間。
違うのは今回は白い雲のような地面ではなく、きちんとした石畳の敷かれた地面があることだった。
「少し、似ているな」
『するどいですね～。確かにはじめてあなたを召喚した場によく似ています』
「ここは精霊の世界なのか？」
「違う。ここは我らの世界と人間の世界をつなぐ途中にある世界だ」
セラファナに問いかけたつもりが別の人間の返答に驚いた。
振り返ると銀髪の女性が微笑んでいた。
純白のローブを着た美しい大人の女性だった。
「あなたは？」
「不思議なことをいう。盟友よ。ここはほんの入り口とはいえ精霊の世界、我ら以外になにがいるというのだ」
「……水の精霊か？」
「そうだ。ここでは少し自由がきくのでな。人間の姿をとってみた」
そういって艶やかに微笑む。
いつもの無表情の水人形っぷりが嘘のようだ。
まぁそれはたいした問題ではない。
問題はここがどこかということ。
精霊の世界の入り口。精霊と人間の世界の途中にある世界。
『おそらくですが』
セラファナが思考に没頭する僕の邪魔をする。

うるさい。
僕は思考中だ。
『そう邪険にしない方がいいですよ～。おそらくここは精霊の世界でも人間の世界でもありません。おそらくその途中に存在する小世界。簡単に言うなら両者をつなぐ面会所みたいな感じではないかと思います』
面会所？
セラファナは以前僕を召喚した場所がちょうどそんな感じの場所だったと言った。
神の世界でも人間の世界でもないその途中にある場所。
ちょうどここのような場所。
『おそらく存在として違いすぎる両者が交渉する場所としてある小世界です。この世界は精霊の世界でもあり人間の世界でもあります。またどちらの世界でもありません』
つまり精霊が自分の姿を自在に保てるぐらいに精霊の力が強く、僕が人間としてごく普通に歩いて呼吸できるぐらいに人間の世界に近い？
「ここは精霊と人間がお互いの意志を交換し、言葉を交わし、盟約を交わす場所だ。並の人間では精霊の世界に直接は行けないし、行ったところで精神がもたない。逆に人間の世界では精霊はその力が制限される。ほとんどの者は我らの言葉を聞くことが出来ず姿を見ることも出来ない」
「水の精霊はラグドリアン湖で多くの人間と交渉をもったはずでは？」
「あの地は例外的に精霊の力が強い。特にあの湖では我らの力はかなり強くなる。もっともそれでもかなり制限されている。我らが人間の呪いで使役されることからもわかるだろう」
精霊を使役するまじない？　系統魔法のことか？
ではこの場所では系統魔法は扱えないのか？
試してみようかとも思ったが、それを敵対行動ととられては危険

と判断して思いとどまった。
『賢明です。ここで精霊と戦うなんて自殺行為ですよ～。もともと精霊はこの世界の神様です。人間の勝てる相手ではありません』
別に戦う気はない。
ただ魔法が使えるのか気になっただけだ。
「ここでは僕は魔法が使えないのか？」
「おまえたちのいう系統魔法とやらか？　我らが承知すれば使えるだろう。精霊魔法も同じだ」
つまりここで精霊と敵対したらその精霊の属性の魔法は使えないということか。
確実に使えるのはおそらく魔力制御法関係、あれは自分の魔力を直接制御するから精霊は関係ない。コモンマジックもおそらく可能。
あと念のためもってきた専用武器『ブラックウイング』だけか。
正直心許ないな。
「風の精霊と喧嘩なんてやりたくないぞ？」
「大丈夫だろう。風は落ち着いているようだ。話し合う気があるのだろう」
水の精霊に導かれるままに歩くと、いつの間にか僕らは古くさい神殿のような場所にいた。
まるで遺跡のような場所だった。
石造りの柱が何本も並び、一番奥に祭壇らしきものがある。
天井はない。
空は、青くどこまでも澄んでいて、雲一つなかった。
まるで突然場所が切り替わったような唐突な到着だった。
「瞬間移動でもしたのか？」
「ここは半分精霊の世界だ。距離など意味はあまりない」
水の精霊の言葉に内心呆れ、そしておびえた。
ここは異常だ。
もしここで戦闘になったら、正直逃げ出すのさえ困難だろう。
どこまで逃げても、距離を無視されたらあっという間に捕まる。

とんでもないところに来てしまった。
あまりにも僕に不利すぎる。
頼りになるのは精霊使いとしての実力ぐらいか。
一応水の精霊が認めた、一流の精霊使いだ。
風の精霊を上手くなだめて暴走を止めれば、それでいいはずだ。
「ようやく来たな。天の眷属よ。我らが風の精霊の領域へようこそと言っておこう」
祭壇のすぐそばに青年が立っていた。
荒々しい雰囲気をもった男だった。船乗りだとでも言われたら信じたかもしれない。
僕のイメージする船乗りは大航海時代の海の男といった印象だったから。
青いローブを身につけ、僕を睨みつけている。
彼が風の精霊なのだろう。
「待ちわびた。貴様が水の精霊と契約してからどれほどたった？なぜすぐに我らの元へこない？」
どうやら短気な相手のようだ。
僕はこれでも最大限努力して早く来るようにしたのだが。
「お待たせして申し訳ない。僕はディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ。天の神の使命と水の精霊の加護を受けた者だ」
「そんなことは知っている。しかし妙だ。貴様本当に水の精霊の使命を果たす気があるのか？」
……どういう意味だ？
「それはどういう事か？　我が盟友はすでにあなたと対話するに十分な能力を持っているはずだ」
水の精霊が風の精霊に反論する。
「精霊使いとしての能力は認める。我らのみならず根源とすら対話できる人間は久しぶりだ」
「ならばなにが不足しているというのか？」
「力だ。力が足りない。この者では貴様の願いは叶わない」

力が足りない？
「少し待って欲しい。僕は水の精霊にあなたの暴走を止めるように交渉を依頼された。それには力がいるのか？」
精霊同士の言い合いに割り込んだ僕を風の精霊は一睨みした。
「どうやら我が同胞も、貴様もなにもわかっていないようだ」
「どういうことか？」
水の精霊が問うと風の精霊は衝撃的なことを言った。
「我らは暴走などしていない。故に暴走を止めるために交渉するなど無意味だ」
風の精霊が暴走しているから、世界の精霊のバランスが崩れたのではなかったか。
だから風石鉱脈で魔力の暴走がおき、大地の浮遊という危機を迎えるのではなかったのか。
それを回避するために、かつてのこの世界は戦争を選び、現在のこの世界で僕は根本である風の精霊の暴走を止めるために……。
その大前提が違っていた？
どういうことだ？
風の精霊は暴走などしていない。
ならば風の精霊の異変は風の精霊自身の意志なのか。
なぜ？
どうして彼らは自ら精霊のバランスを崩している？
どうやらまだ僕の知らない事情があるのかもしれない。
厄介なことにならなければいいが……。

十四章　風の精霊（後書き）

主人公、風の精霊に突っ込まれるの回です。
アルビオンではウェールズが活躍し、国をまとめつつあります。
レコン・キスタの自由にはさせません。
トリステインもアンリエッタを旗頭に、大貴族が連携し結束しつつあります。
ウェールズに上手く丸め込まれたアンリエッタ。がんばって欲しいです。

十五章　精霊たちの真相（前書き）

いよいよ精霊の異常、その真相が判明します。

十五章　精霊たちの真相

・ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ視点・

目の前で精霊たちが向き合っている。
白いローブを着た女性の姿をした水の精霊。
青いローブを着た青年の姿をした風の精霊。
両者とも緊迫した雰囲気で視線をぶつけ合っている。
……あれが決裂したら、僕はどうなるのだろうね？
というか、話がちがくないか？
風の精霊の暴走を止めるはずが、とうの風の精霊が「暴走？　してないけどおまえらなにいってんの？」的な感じだぞ。

「暴走していないというのならば、世界の精霊の影響力を正しき状態へ戻せ。汝が力が強すぎて迷惑をしている」
水の精霊の要請を風の精霊はあっさり拒絶した。
「それは出来ない。いま我らが力を緩めれば世界は滅びかねない」
世界が滅びる？
どういうことだ？
なぜ風の精霊の力を弱めることが世界の滅びにつながる？
ああ、くそっ情報が足りない。
まったく誰か説明してくれ、お願いだから。
「我らには汝の言うことが理解出来ない。世界を滅ぼしかねないのは汝の力であろう。我らは場合によっては盟友たる精霊使いの助力を受け、汝を強制的に抑えることも出来るのだ」
なるほど交渉だけなら、精霊同士でやればいい。
僕は万が一に交渉決裂した場合の抑え役か。
って、おい！　僕は風の神様相手に戦うのか？
『いまさらですよ～。おそらく精霊使いの能力と水の精霊の力で風

の精霊を抑える役目だったのでしょうね』
　正直、この場所で風の精霊を抑える自信がないです。
『だから水の精霊が一緒にいるのではありませんか。神様相手には神様の力を借りるのが定石です。あなたの能力なら水の精霊の助力を得れば勝てないことはないと思いますよ。単独ではまず無理ですが』
　家族に今生の別れぐらいしてきた方がよかったかな……。
　遠い目をしていると風の精霊がため息をついた。
　ため息をつきたいのはこちらなのだが。
「話にならん。貴様らはなにもわかっていない。我らはこの地に仇なすものを封じているのだ。それは強大な力を持つ故に我らも力を強くする必要があった」
「なぜ封じる？　滅ぼしてしまえばいい」
「滅ぼすことは不可能だった。故に封じた」
　風の神様が倒せないってそれは一体どんな化け物だよ。
　水の精霊も同じ思いだったらしく驚いていた。
「汝が滅ぼせないほどの敵なのか？」
「ああ、かつて何度か現れたことがある奴らだ。世界の外から落ちてくる異形のモノ。世界を喰らい尽くす獣」
　水の精霊が絶句した。
「我が封じているのは世界の外より現れた『悪魔』だ」

『そんな馬鹿な！』
　セラファナが絶叫した。
　うるさい。
　どうしたんだ。そんなにすごいことなのか？
『悪魔は我々神に敵対するモノたちです。世界を喰らい尽くし滅ぼす存在です。でも私はここに悪魔がいることを知らなかった。いえ、今だって感知できません。以前の世界にだって存在しなかった！　そんなことはありえない！』

……風の精霊が封じているから、わからないという可能性は？
『……あ、ありえます。ありえますがこれはまずいです。まさか……こんなことになっているとは……』
どうやらセラファナは狼狽して平静でいられないらしい。
そこまでのことなのか……。
『貴様が連れてきた天の眷属はたしかに精霊使いとしては優秀だ。だが世界の外から来たあの化け物を打ち倒すほどの力は感じない」
悪魔を倒す方法がない以上封印を解くことは出来ない。
そして封印を続ける限り、風の精霊の力は強いまま。精霊の力のバランスは崩れたままだ。
「貴様が使命を果たすというのはそういうことだ。天の眷属にして我らの盟友よ。おまえにあの悪魔を倒すことが出来るのか？」
あ、やっぱりそれも僕の役目なんですか？
そんな気はしていたんですけどね。
風の神様が勝てない相手？　僕をここに送りこんだカミサマが狼狽するほどの相手？
無理です。
僕一人にどうこうできるとは思えない。
勝機があるとすれば……。
「あなた方の助力を得ても、不可能なのですか？」
「不可能であろう。かつて悪魔と戦った古き盟友も自身神の加護を得た優れた人物であった。そして協力者もいた」
神の加護。そして協力者。
もっとだ。もっと情報を。
勝利条件を確認できる情報をくれ。
「協力者とは？」
「かつての古き盟友は、我ら精霊たちの力を束ねる精霊使いを仲間とし、悪魔の力を弱め、天の神の力をもって倒した」
精霊使いの仲間の協力。
自身が神の力を振るって悪魔を倒したほどの力の持ち主。

かつての勝利条件が。
神の力を扱える天の眷属。
悪魔の力を弱体化できる精霊使いの協力。
この二点だとすると。
それに比べて、いまの僕は……。
「貴様は天の神の力をほとんど使えず。我らの力を使える協力者もいない。人間たちの使う魔法はたいした実力のようだが、あんな魔法では悪魔とは戦えない」
神の力。
以前ちらりと聞いた神の力を借りる魔法のことか。
確かに僕はそちらの訓練はほとんどしなかった。
精霊使いの仲間のあてもない。
おまけに系統魔法は悪魔相手では役に立たないらしい。

ははは、どうした。困ったぞ。
どうやら本当に僕では世界を救えないらしい。
なぁ、困ったな。セラファナ？
『自暴自棄にならないでください！　忘れたのですか？　経験値百倍ですよ！　訓練すれば神の力ぐらい扱えるようになります！』
精霊使いの仲間は？
『そ、それはこれから探して、訓練すれば……』
系統魔法ばかりが発達して、精霊の力など誰も使えないこの世界で？
精霊の力が使えると聞いているのはエルフぐらいだが、エルフはこちらのことを蛮族と蔑んでいるらしいぞ。協力してくれるとは思えない。
「貴様では無理なのだ。未熟な天の眷属よ」
ほらね。
無理だってさ。
僕もそう思う。

神の力に関しては努力すればおそらく解決する。
しかし仲間はどうしようもない。
しかも精霊使いの仲間だ。
この世界の魔法使いは系統魔法の使い手だ。
精霊魔法の使い手はいない。
いや彼らの話では過去にはいたのだろう。
初代モンモランシ伯爵はどうやら水の精霊と契約するほどの人物だったらしいじゃないか。精霊使いとしての素質もあったかもしれない。
過去にはあった。だが現在に伝わっていない魔法。
エルフたちでさえ、先住魔法は使えても僕のような精霊魔法は使えないはずだ。
つまりどうしようもない。
いないものは仲間にできない。
しょせん本好きなだけの人間が世界を救うなんて無茶だったんだ。
……僕には世界は救えない。そんな力はないんだよ。
『ディアス……落胆するのはわかりますがそんな情けないことをいわないでください。いままでだって努力してきたじゃないですか、きっとなにか方法があります。私も一緒に考えますから』
精霊魔法を身につけ、風の精霊に会い。
これで終わりかと思ったら、実は真のラスボスが他にいましたか。
どんだけこの世界は僕に意地悪なんだ？
『ディアス……』
セラファナがついに言葉につまったらしい。
仕方がない。いまの僕にかける言葉などないだろう。
我ながら情けないぐらいに気落ちしてしまった。
これで終わると思っていた。
これからは普通に暮らせると信じていた。
それが、蓋を開ければこのざまだ。
実は事情はもっと複雑で、ラスボスはとても強くて、僕などでは

役にも立たないらしい。
なにがスクエアクラスの天才だ。
そんなものなんの役にも立たないらしいぞ？
必要なのは神の力で、系統魔法などではないらしいぞ？
僕は一体、なんのためにあんなに努力したんだろうな……。

「そう苛めてやるな。我が同胞よ！」
突然別の声が響いた。
周囲を見渡すが新たな人影などない。
「よぉ、姿も見せずに失礼させてもらうよ。俺サマは精霊の根源。世界の精霊。この世界を司る精霊だ。おまえさんが昔言った精霊王ってヤツだ」
風の精霊と水の精霊が無言で頭を垂れた。
この神様たちの上位者の登場か。
今度はいったいなんだ？
これ以上厄介なことになったら僕はもう泣くぞ？
「まったくなんとも頼りない天の眷属が来たもんだ！　ちょっと我が同胞に苛められたぐらいですっかりしょげかえってやがる」
空から声が響いてくるように聞こえる。
これが精霊王。
精霊のいう根源。
世界を司る精霊。
なんというか神様らしい威厳みたいなものに欠けるやつだな？
「俺サマも俺サマの世界が悪魔に食い尽くされて滅びるのは困る。というわけで力と知恵を貸してやる。喜べ！　おまえは精霊王の加護を得た！」
カミサマの加護に、精霊の加護、次は精霊王の加護か……。
次から次へと。
もういい加減にして欲しい。
次はなんだ？　セラファナの上司でも現れるのか？

「なんだ？　その微妙なツラは？　喜べよ？　張り合いがねぇだろうが！　いいことを教えてやる。おまえは精霊使いを育てることが出来る。そして精霊使いの素質を持った者を見分けることが出来る。そしてさらにおまえはおまえの仲間となるべき人間とこれから出会うことになる」

いいことといわれても、確かにそれが出来れば問題は解決するかもしれない。

けれど僕にそんな能力は……あ、そういう能力を与えるという意味か？

それに仲間と出会うということを知っているということは、この精霊王は未来を知ることでもできるのか？

「あなたは未来がわかるのか？」

「けっ……今視たってろくな未来なんて視えやしねぇ。おまえの因果をいじった。そういう風になるようにな！　世界を司る精霊舐めんなよ？　そのぐらい余裕だぜ？」

こいつ、ガラは悪いが実はセラファナよりすごいのか？

『私だって本当はすごいんです！　馬鹿にしないでください！　これでもいろいろ協力していたんですよ！？』

セラファナが憤慨する。

いろいろ協力？　聞いてないな。

なにをやったんだ？　後で聞くとしよう。

「俺サマはやるときは派手にやるヤツだからな。出し惜しみはしない主義だ。おまえはこれから仲間に出会って、そいつらを鍛えろ。そしてある程度になったら全員まとめて俺のところへこい。その時があの悪魔をブチのめす時だ。俺サマと四大の精霊がおまえの仲間に加護を与え、共にあの忌々しい悪魔をボコりに行くことになるだろうぜ」

精霊王が楽しげに笑う。

「楽しみだなぁ、おい。あのクソ忌々しい化け物を、俺サマたちが力を貸した人間たちがフルボッコにするのが待ち遠しいぜぇ」

精霊王の笑い声を聞きながら、僕は決意した。
ここでいじけていても仕方ない。
もう一度だ。
一回死んでまでこの世界に生まれたんだ。
せめてこの世界では幸せに楽しく生きてやる。
そのためにもう一度。
僕は努力してみよう。
……セラファナ。
僕に神の力の使い方を教えてくれ。
必ず必要になる。そんな気がする。
精霊王の加護、四大の精霊の協力。仲間たちの存在。
それを得ても僕が弱くては話にならない。
だから僕に教えてくれ。
悪魔を倒せる力を。
『わかりました。あなたには私自身すら召喚出来るほどの神聖魔法の達人になってもらいます。相手が相手です。神自身が討伐することもありえる本当の敵が相手なのです。あなたには本当の意味で最強になってもらいます』
精霊王がこちらを見た気がした。
「少しはましな顔になったじゃないか？　天の眷属。そうだ。おまえにもう一つ贈り物をしてやる。おまえがこれから戦う相手のことを教えてやる。その頭の中に直接放り込んでやるから覚悟しな。なにかあっても気にするな。水の精霊がもしもの時はおまえを治すだろうから、安心して壊れてもいいぜ？」
頭の中に放り込む？
壊れてもいい？
情報をくれるのはありがたいが、なんだか物騒な予感が。
『な……やめなさい！　ディアスを殺すつもりですか！』
瞬間、僕の背後に誰かが姿を現し僕を抱き寄せた。

振り向くと銀髪に赤い目をした少女が必死な顔で僕を抱き寄せ、なにかから庇おうとしていた。
女の子の華奢で柔らかな身体に包まれながら、呆然とした。
セラファナ？
どうしたんだ。そんなに必死になって。
もしかして、それほど危険なことなのか？
今までけして姿を見せなかったおまえが、ここに現れるほどの？
「固いこと言うなよ。いきなり悪魔を目にしてビビって戦えないとやばいだろ？」
「やめなさい……ディアスを殺せば私がこの世界を滅ぼしてやりますよ！」
そんなに大事に思われていたとは、予想外だ。
ひょっとしたらすごい危機に直面しているにもかかわらず。僕はどこか現実感がない状態でセラファナに抱きしめられていた。
なんかいい匂いがする。
しかも柔らかくてなんか気持ちいい。特に胸のあたりが。
やっぱりカミサマでも女の子なんだなぁ……などと場違いなことを考えていたり。
「おお怖い。大丈夫大丈夫」
精霊王の声が優しく響いた。
「死にはしない。ちょっと壊れるぐらいさ」
瞬間、僕の受けた衝撃はかつての死の体験すらはるかに超えるものだった。
あえて言葉にするなら圧倒的な恐怖のイメージ。
それは強大な力。
それは無差別な破壊。
それは貪り食う獣。
それは滅びしか与えないモノ。
それは理解出来ない異形。
それが『悪魔』

僕の倒すべき敵。
「ディアス！　しっかりしなさい！」
そして僕はセラファナの絶叫を聞きながら。
彼女の胸に抱かれたまま……心が、砕け散った。

十五章　精霊たちの真相（後書き）

カミサマことセラファナがデレました。
ディアス君。
恋愛に疎くても普通に女の子は好きらしく、抱きしめられて喜んでいました。

ラスボス判明、さらに使命追加。
「仲間を集めて、一緒に悪魔と戦おうよ！」
使命を受けた後ぶっ壊されるというおまけ付き。
俺サマな精霊王、無茶をしました。
けど反省はきっとしてません。
「治せば問題なくね？」
とか思っています。きっと。

十六章　目覚めとこれからの戦いと

・セラファナ視点・

ぽたんと一滴の水滴が落ちる。
水面に落ちた水滴は波紋を広げ、静かに落ち着いていた水面はその表情を変える。
水滴は落ち続ける。
そのたびに水面は変化し続ける。
その水滴は私。
そして私の従者ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ。
私たちによって世界は変わり続ける。
たとえ私たちがなにもしなくても。
水面を揺らす水滴は落ち続ける。
波紋はどこまでも広がっていく。
その行き着く先が、ハッピーエンドであることを私は望んでいる。

世界に介入した私たちは、この世界を変え続ける。

ロマリアとブリミル教。
精霊の加護を得たディアスを弾圧しかねない存在だった。
トリステイン王国。
トリステインが腐り落ちて崩壊すれば、その属国でありディアスの実家でもあるクルデンホルフ大公国も無事で済まない可能性が高い。
私は世界の因果に密かに干渉して、まずこの二つの障害を取り除いた。

ブリミル教は聖職者の質がもともと低かったので楽だった。
彼らの悪事を少しばかり世間にバレやすくするだけで勝手に自滅した。
ロマリアはそのあおりをくらって、威信と影響力を低下させた。
いまは失った信頼を回復しようと奮闘している。
教皇自ら陣頭指揮をとってがんばっているが、焼け石に水といった感じだ。
長い年月で腐敗した組織と、質の低下した名ばかりの聖職者たちに頭を悩ませる日々のようだ。

トリステインは心ある貴族にこのままでは国がもたないという危機感と、なんとかして国を立て直すという気概を持たせるだけで十分だった。
彼らは大貴族の旗の下に結集し、不正をただし、国に巣くう悪徳貴族を粛正し、なんとかトリステインを崩壊から救いつつある。
さらにディアスがウェールズ皇太子に入れ知恵した影響で、かつての世界ではウェールズ皇太子と愛を誓い合い、その誓いを破られたことでなかば自暴自棄となったアンリエッタ王女。
この世界では彼に王族として生まれた使命を説かれ、今生で結ばれなくても来世では結ばれようという約束を信じ、王女としての勤めを果たそうと懸命に努力している。
そんな王女をクルデンホルフ大公は期待しているし、ヴァリエール公爵も多少は評価する気になっている。マザリーニ枢機卿は泣いて喜んでいた。
彼女がしっかりしていれば彼女を旗印に貴族たちが集結し、国を無難に治めていくことだろう。

アルビオンはディアスがウェールズ皇太子に干渉したおかげで、彼が精力的に動き出した。
国内の不平分子を割り出し、彼らの身辺を探り、様々な罪状で地

位と権力を取り上げ投獄していった。
同時に優秀で信頼のできる人材を多く集めている。
アルビオン貴族たちは人望もあり、優れた手腕を発揮する皇太子の元に続々と集結していた。
かつては反乱によって滅びた国だが、いまではウェールズ皇太子を中心にした強固な政治体制を固めつつある。
この世界でのアルビオンはおそらく滅びない。
トリステインのよき盟友。そしてディアスの後ろ盾として期待できるだろう。

そんなわけで、ディアスにも黙っていろいろ裏で手を回していたわけだけど……。
結果として国々は安定し、将来的に一丸となって世界の危機に立ち向かう下地ができたと思える。
意図しない変化もある。
なにもしていないのに変わってしまったこともある。

水滴はいまも落ち続ける。
世界はまだ変わり続けている。
その行き先は、私にもわからない。

精霊王にぶっ壊されたディアスはクルデンホルフの屋敷に放り出され、通りかかった使用人に発見されて大騒ぎになった。
部屋へ運び込まれ、ベッドに寝かされ、治療を得意とするメイジの診察を受け。
そしてまったく目を覚まさなかった。
大公夫妻は蒼白になり、妹である少女は泣きながら兄の手を握っていた。
それを見て私は、怒りがわきおこるのを抑えられなかった。

ディアスがなにをした？
彼は必死にこの世界を救うために努力していただけだ。
私はそれをずっと見守ってきた。
生まれたときからずっとだ。
小さかった赤ん坊が大きくなり、言葉をしゃべり、多彩な才能を身につけ、必死に努力している光景を見守り続けるうちに不思議な愛着のようなものを感じ始めていた。
この子をこの世界に生まれさせたのは私だ。
この子をずっと見守り続けたのも私だ。
この子は私の大切な人間だ。
私の……愛する人間だ。

私はいまさら悔やむことがある。
あのとき私はなぜ、召喚する対象を限定しなかったのか？
せめて死者の魂に限定していれば、普通に生きて平穏に暮らしていた少年を殺すことはなかった。
せめて召喚期限を限定すれば、一時的に別世界に転生させても元の世界にもどすこともできたかもしれない。
平和な国で、平穏な生活を楽しみにしていた少年。
彼はいま、世界を滅ぼしかねない悪魔と戦う使命を背負わされている。
すべてが私のせいなのだ。
彼を殺し、新たなる生を与え、使命を与え、さらに問題は大きくなり、ついに悪魔なんて化け物を相手にさせようとしている。

私は、彼になにができるだろう？
多少の手助けと、
彼が使命を果たした後。彼が幸せに暮らせるようにすることくらいだ。
愛する女性と出会い、結ばれて。

平和で豊かな国で、幸福に満たされた生活をゆっくりと送らせること。
それくらいしか、できない。
せめて使命を無事果たし、彼の大好きな本に囲まれた幸せな生活を送れるように。
私にはそれくらいしか、できない。

せめて全力で守ろう。
力になれるなら、力になろう。
私のすべてをもって。
彼が幸せになれるように。

水滴は落ち続ける。
水滴自身の色さえ変化させて、水滴は落ち続ける。

・ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ視点・

目が覚めると自分の部屋でベッドに寝かせられていた。
僕が気がついたことを知ると控えていたメイドが部屋の外へ出て行った。
たぶん両親に僕が目覚めたことを告げにいったのだろう。
しかしどうにも。
なにがどうなったんだ？
『無事目覚めましたね～。心配しましたよ？』
セラファナか。なにがあったんだ？
セラファナによると僕は精霊王の精神攻撃並の因果律変換とやらに耐えきれず精神崩壊していたらしい。
そしてうちの屋敷に放り出され、使用人に発見されて保護されて、

数日寝込んで現在に至ると……。
よく目覚めたな。僕は。
『こっそり水の精霊が治療していきました。それがなければ今頃も寝たきりの廃人でしたね』
枕元にある水差しを眺めて納得した。
あそこの水からこっそりと水の精霊が治療していったのだろう。
精霊王も水の精霊なら治療出来るっていっていたような気がするしな。
廃人すら復活させる水の精霊。
ひょっとして死んでなけりゃ、なんでも大丈夫なんじゃないか？
『あまり精霊の力を過信してはいけませんよ～。精霊は協力を約束してくれていますが、しょせん他人の力です。あなたの自由になるわけではありません』
それもそうだな。
精霊の加護といってもいつまで続くのか不明だし。
それにしても……気分が悪い。
『大丈夫ですか？』
頭の中こねくり回された気分だ。
『だいぶいじくられたようですからね。悪魔に関する知識は得られたんですか？』
ある。
ろくでもない化け物らしいな。
かつての英雄サマはよくあんなバケモノ倒せたな？
なかには一人で立ち向かってぶち殺したすごいのもいたらしいぞ？
『悪魔に対抗する方法はまず神の力、次に魔力です……そして人間の強い意志、これは場合によっては人間の力だけで悪魔を倒せてしまえる場合もあります』
神の力と魔力はともかく、人間の意志とはね……どちらかといえば悪魔の餌みたいな感じなんだが。
『純粋で強力な意志は悪魔を滅ぼすことが可能です。悪魔が食べる

のはどちらかといえば濁りきった弱い心ですから』
つまり必要なのは正義の心ってヤツか？
『さぁ、正義という感じではないかも……極端な話、純粋な悪でもある意味強力な意志でしょうし』
必要なのは強力な意志というわけか、善悪関係なく。
『そうなりますね～』
さて僕の意志の力は強いのだろうか？
あまり自信はないな。
そちらはあまり期待しない方がいいかもしれない。
やはり神の力。神聖魔法の習得が重要になりそうだ。
『仲間はどうしましょう。いまのところある程度事情を知っているのはワルドとモンモランシーだけですが』
二人の精霊使いの素質が高ければそのまま仲間に引き込む。
そうでなければ他を探す。
『わかるのですか？』
わかる気がする。
先ほどちらりとメイドの姿を見たが、なんとなく彼女は精霊との親和性が低いように思えた。
わずかに見ただけでこれなら、しっかりと観察すればきちんと理解出来るのだろう。
『たいしたものですね。さすがに一度人間的に壊されただけのことはあります』
……能力的にはありがたいが、他に方法はなかったのだろうか？
『……ご両親も心配していましたね。妹さんなんて泣いていました』
なんといってごまかそう？
徹夜で本を読んでいて倒れたとかで納得してくれるだろうか？
『四日も昏睡状態でしたから、無理でしょう。もうある程度は話すべきでは？　どのみち不審がっていましたよ。息子がなにかに巻き込まれたのではないかという感じに』
そうか……。

話すか。
どのみち父さまと母さまはおまえのことを知っているのだしな。
すべてが終わってから話すつもりだったのだけど。
仕方がないか。
『だいじょうぶです。理解あるご両親ですから、たぶん……納得してくれるといいですね』
なんでだんだん言葉が弱くなる？
『だってあの二人、あなたへの溺愛っぷりが半端じゃありませんし』
確かに。
なんとか説得するしかないか。

セラファナ、僕は悪魔に勝てるのだろうか？
『いまのままなら無理です。最低でも神の力が扱えるように神聖魔法の習得が必要です』
そうか……それなら勝てるのか？
『断言はできません。悪魔の知識を得たなら知っているでしょうが、悪魔にも格があります。雑魚のような相手から神が直接討伐に乗り出すような大物までいろいろですから』
この世界にいる悪魔は、少なくとも風の神様よりは強いらしいな。
風の精霊は悪魔を『滅ぼせなかった』から封印した。
少なくとも風の精霊よりは強いということになる。
『そうですね』
それでも封印は一応できている。
精霊たちがまったく手に負えないとも思えないが。
『戦って倒すのと、力を抑えて封じ込めるのでは条件が違います。条件にもよりますが、今回は封印のほうが容易かったのでしょう』
楽観はできないか。
精霊使いは何人必要なんだ？
一人、二人でいいのか？
『可能ならば四人集めるべきです。そうすればそれぞれ四大の精霊

の加護を受けられます。悪魔の力を抑制する効果も一人より四人で四柱の精霊の力をそれぞれ借りる方が効率がいいでしょう』

四人それぞれに四大の精霊の加護を受けさせるか、四人……五人ではなく？

精霊王の加護を得る精霊使いはいらないのか？

『五人目があなたになるでしょう。とはいえ五人いた方があなたの負担は減りますし、優秀な精霊使いならば多い方がいいでしょう。もっともこれからあなた一人で育てるのです。あまり手広くやるより少数を徹底的に鍛えた方がいいと思いますが』

役に立たない半人前を大勢より、達人クラスを少数か。

なんというか魔王に挑む勇者パーティーみたいだな。

ということは僕が勇者役か。

我ながら似合わない。僕は読書マニアだぞ？

『正直、悪魔相手に多少力がある有象無象の軍勢で挑むより、少人数の達人たちで挑んだ方が効率がいいです。犠牲も少なく、かつ足手まといにもなりません。あまり自覚がないようですが、いまのあなたでさえ普通のこの世界のメイジでは十分足手まといです。共に戦えるのは達人クラスと呼ばれる人たちぐらいでしょう』

ヴァリエール公爵夫人クラスなら、確かに足手まといにはならないな。

『正直、彼女はこの国で最強クラスです。それでも悪魔相手では分が悪い。彼女はあくまでも系統魔法の達人でしかありません。あなたに必要なのは精霊魔法の達人です』

正直自信ない。

そんなに都合よく、才能のある人間に出会えるのか？

『それは世界を司る精霊王が言い切ったのですから、会うことは会うのでしょう。仲間にできるかどうか、そして彼らが戦力になるかどうかはあなた次第なのでしょうが』

才能のある人物に出会い。

仲間に引き入れ、鍛えなければならない。

なんといって仲間にすればいいものか、まさか『一緒に世界を滅ぼす悪魔と戦おう』などと口には出せない。笑い飛ばされるのがオチだろう。

『そのあたりは考えないといけませんね。相手の信頼を得て、十分に信頼できると思ったら打ち明ける。そんな感じでしょうか』

まずワルドには話そう。

そして可能なら彼で精霊使いを育てるということを僕自身が学習する。

なにせ経験値百倍だ。

一人育てれば二人目からはかなり楽になるだろう。

『彼は信頼できますか？』

すくなくともまったく話にならないということはないだろう。

彼に精霊たちの王に会ったことを話し、彼らから真実を聞いたことを打ち明ければ、彼はおそらく協力を申し出るだろう。

彼は僕を仲間というよりも、どうも主君でも見ているかのように感じる。

よほどの理不尽をいわない限り僕を信じるだろう。

『ワルドに精霊使いの素質がない場合は？』

次の候補はモンモランシーだろうな。

彼女も僕に親しい。事情もある程度知っている。

僕の話を聞いてくれる可能性は高い。

『それに彼女なら、おそらく最低限の才能は持っているでしょうからね』

なぜそういえる？

おまえにも精霊使いの素質が見極められるのか？

『従者がその能力を得たおかげでいまの私にもその能力があります。ですが、それ以外に彼女はすでに精霊使いとしての基礎訓練をおそらくしています』

そんなものを彼女が？

いや、まて彼女の訓練法は僕が教えた。

僕の魔法理論か？
精霊に強制するのではなく、精霊にお願いする魔法……。
『ええ、おそらくそれが精霊との親和性の向上につながるはずです。あなたが精霊使いとして、水の精霊に会った頃からかなりの才能を持っていたのもおそらくはあの訓練の成果でしょう』
僕の努力も無駄ではなかったということか。
そうなると候補は後三人増えるな。
僕の魔法理論の生徒は、モンモランシーとルイズ。ベアトリスとティフォーンだ。
ワルドも直接ではないが僕の訓練法で訓練していたらしいし期待できそうだ。
ヴァリエール公爵家のルイズ。
妹のベアトリス。
幼い頃の魔法の教師であり、その後僕の魔法理論に興味を持って弟子入りしてきたティフォーン先生。
なんだ。意外に簡単に四人集まりそうじゃないか？
『どうでしょうね。私の知識からいえば精霊などの未知へのものへの親和性は幼い子供のほうが優れている可能性が高いです。その点、あなたの魔法理論に触れたのがすでに大人になってからだったワルドとティフォーン先生はあまり多くは期待できない気がします』
そうか、そううまくはいかないか。
『それとあなたの妹ですが、あなた自身さえ危険に巻き込まれるのを嫌うご両親が、さらに娘までそれに巻き込まれるのを了承するか、厳しいと思います』
あ、あー、それはあり得る。
ベアトリスにはぜひ普通に生きて欲しいというのが我が両親の切なる願いのようだからなぁ……。
セラフィナ。どうも僕はやる気になっているらしい。
自分でも不思議だ。

正直すべてを放り出して引きこもりたい気分だったんだが、とりあえずやれることからやってみようという気になる。
『前向きなのはいいことだと思います』
まさかこのために僕をぶっ壊したわけじゃないだろうな？
前向きに戦うように作り替えたとか？
『……まさか、と思いたいですが……あの精霊王ですからね』
まぁ、壊される前からやる気にはなっていたからそれはないか。
世界を救えるかどうかはわからない。
ただできることをやっていこう。
まずは神聖魔法の習得と、精霊魔法の指導の習得だ。
自分で身につけるのと他人に教えるのでは勝手が違うからな。
それにしても精霊魔法の伝授か。
あまり大っぴらにやるとまた我が父上が頭を抱えそうだな。
『ロマリアはあまり気にしなくていいですよ？　あちらはいまあなたのことにかまっている余裕はありません』
……まさかなにかやったのか？
『身から出たサビというヤツです。私はほんの少しそういったものが目立ちやすくしただけですよ～』
そうか。
まぁ、いい。
どちらにせよあまり盛大にやる気はない。
信頼できる人間だけにこっそり伝授するつもりだ。
あまり騒ぎになっても動きにくくなるだろうしな。
『そうですね』
さて、また忙しくなるな。
世界を救う勇者パーティーを集めて、鍛え上げる。
そして僕自身も悪魔に対抗できる力を身につける。
本当に、僕に似合わないことをやっているな……僕はどちらかといえばそういう物語をただ読んでいれば満足する人間なのに。
その前に……。

ノックの後、室内に入ってきた両親に事情を説明しなければならないだろう。

どこまで話したらいいんだ？

十六章　目覚めとこれからの戦いと（後書き）

セラファナ視点です。
生まれたときから見守っていればそれは情が移るだろうと思うのです。

ディアスは前向きに問題を処理する気になりました。
どのみち逃げ場がないですから、腹をくくるしかない立場です。
きっと『なんで僕がこんな事を』とぼやきながら努力していくことでしょう。

十七章　精霊使いの初弟子（前書き）

ディアスによる精霊使い育成編です。
精霊魔法に関してはオリジナル設定です。

十七章　精霊使いの初弟子

・ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド視点・

二人きりの室内で明かされた事実に僕は言葉を失った。
大陸浮遊の原因である精霊の異常が、風の精霊が外敵を封印するために力を強化した結果だとは……しかもそれを解消するためにはその敵を滅ぼさなければならない。
風の精霊すら滅ぼすことを断念し、封印するにとどめた敵を人間が打ち倒さなければならない。
突如手紙で『重要な話があるからできるなら至急に会って話がしたい』とディアス殿下から伝えられ、ディアス殿下に魔法の訓練を受けてくるという理由で数日の休暇を取り、大急ぎでクルデンホルフ大公国まで飛んできたが。
想像以上の事態だ。
僕がのんきに修行している間にディアス殿下は風の精霊と対面して事情を聞き出し、精霊の王とすら対話してその加護を得たという。
惜しむらくは僕がその現場に呼ばれなかったことだが、仕方がない。
精霊との対話なんて戦うしか能のない僕の専門外だ。
だが護衛としてぐらいなら、一緒にいたかったと思うが。
しかしこうして事情を打ち明けてもらえるということは信頼されているということだろう。
うかつに話せる事ではないのだ。

休暇の申請？
僕がディアス殿下から魔法の指南を受けていることは周知の事実なので、彼が直々に指導してくれることになったと小躍りして休暇を希望したらみんな納得してくれたさ。

かなりうらやましがられたがね。
ディアス殿下が自身魔法の天才であるのみならず魔法指導の天才であることは知れ渡っており、しかも滅多な人物では指導を受けられない人物との評判があるのでずいぶんうらやましがられたさ。
当然羨望だけじゃなく嫉妬もつきまとうが、そういう輩は模擬戦で丁重に叩きのめしてさしあげると以後おとなしくなるものだ。
おかげで最近では魔法衛士隊最強とか呼ばれはじめている。
最強？　僕程度が？
僕などディアス殿下と比べれば、おそらく戦ったらなにもできずに粉砕されそうな気がするのだが。
あれから僕も腕を上げ、ディアス殿下式の魔法理論を身につけて魔力制御法も学んだが、正直勝てる気がしない。
『烈風』を翻弄し、彼女の最大の魔法を苦もなく一刀両断して見せたディアス殿下に僕はまだ及ばない。
あれからきっとさらに強くなっているだろう。
最強の名はディアス殿下にこそふさわしいと確信している。

「四人の精霊使いによる『悪魔』の力の封印ですか……」
「最低四人です。五人いれば望ましい。ですがあまり贅沢も言えないでしょう。精霊使いをほとんど一から育て上げて使い物になるようにしなくてはならないのですから」
僕はその話の内容に、僕自身がその四人の一人になることを期待されているのだろうと漠然と考えていた。
こんな話を打ち明けられる人物などそうはいないだろうし、僕も腕には覚えがある。
ただ悲しいかな。僕は精霊使いというのが今ひとつわからないのだ。
「殿下は僕にその一人になることを期待されているのですか？」
「可能性はあると思っています。精霊王から精霊使いの資質を見抜く能力を与えられましたが、それによるとワルド子爵は少なくとも

素養は持っていますから」
素質があるか。
ないよりは喜ぶべき事だろう。
それだけディアス殿下の役に立てるのだ。
だが。
「殿下。僕も腕に覚えはあります。だがそれは系統魔法の話であって、正直精霊魔法というものでどれだけ戦えるのか自信がありません」
「精霊魔法を見たことがないのです。仕方がないでしょうね」
「殿下は使えるのですか？」
「水の精霊によると精霊使いとしてはすでに一流らしいです」
さすがディアス殿下。
きっとこっそり訓練されていたのだろうな。
「まずその精霊魔法というのを見せてもらうわけにはいきませんか？」
まず精霊魔法とはなにかわからないと、身につけられるのか、身につけたとしてそれで戦えるのかわからない。
ディアス殿下はごく当然という顔で提案してきた。
「では模擬戦でもやりますか？　僕は精霊魔法限定、ワルド子爵は何でもありで」
は？
模擬戦？
僕とディアス殿下が？
しかもディアス殿下は系統魔法を使わない？
しかも精霊魔法限定って事は魔力制御法すら使わないつもりですか？
いくらなんでもそれは……僕を過小評価しすぎなのでは？
「それでもたぶん僕の楽勝だと思いますよ？」
不敬なことだと思うが、にこやかに微笑むその余裕の姿に正直カチンときた。

僕だって。
僕だって訓練を続けてきた。
いつまでもヴァリエール公爵夫人に腕を折られて半泣きになっていた坊やではないのだ。
どうもディアス殿下は僕の実力を過小評価しているようだ。
そういえばディアス殿下に僕の魔法を見せたことはなかったな。
ここはきっちり実力を示して、僕の実力を再認識していただこう。
そう決意し、大公家の屋敷を出て魔法の訓練場で向き合う。

大公国に来て驚いたことは、大公国には首都もあり立派な城もあるくせに大公一家はなぜか城には住まず。城の敷地内に屋敷を構えてそこで生活していることだった。
普通城に住まないのだろうか？
聞いてみたら『母が城は落ち着かないし、住みづらいといって屋敷を作らせたそうです』とさらに真面目な顔で続けた。
「まったく同感です。城は夏は暑いし、冬は寒い。無駄にでかくて住みづらいといいところがありません。家族で住むなら屋敷で十分です。敵が攻めてくるわけじゃないのですから」
殿下的には、城で年中生活しているであろうアンリエッタ王女はその一点だけで尊敬に値するほど城の生活が気にくわないらしい。
……お母上に似られたのですねぇ。

それはともかく。
「本当によろしいのですか？」
「かまいません」
「僕は魔力制御法も当然使いますが、殿下は？」
「使いません。精霊魔法だけです」
ふっふっふ、なめられたものですね。この僕も。
いいでしょう。

ちょっと年下の師匠に現実というものを教えて差し上げましょう。
いくらなんでも得意魔法と得意技法を封じて僕に勝とうなど。
無謀。
それ以外にない。
では、やりましょうか……。

「力の精霊よ。我にその力を貸し与えよ」
魔力制御法で身体強化し、杖にブレイドの魔法をまとわせて接近戦を挑んだら、なんとディアス殿下は杖ももたずに小声でささやいた。
コモンマジック？
いやコモンマジックでも杖は必要なはず。
ならばこれが精霊魔法なのか？
瞬間、ディアス殿下が猛然と突っ込んできた。
すさまじい速さだ。
僕の身体強化などはるかに及ばない速度。
一瞬呆気にとられ、軽やかなステップで死角に回った殿下から回し蹴りをくらった。
回避も防御もできずに見事に横っ腹に叩き込まれた。
骨を折るような蹴り方ではなかったが、その重さが身体の芯までしびれさせる。
これは……精霊魔法の身体強化なのか？
精霊魔法でも魔力制御法と同じ事ができるのか？
だとしたら殿下は得意技能を封印したのではなく……。
「もう気がついたと思いますが、一応いっておくと精霊魔法なら魔力制御法でできるほとんどが使用可能です。むしろ使い勝手がいいくらいです」
もちろん。系統魔法のようなこともできますよ。
ディアス殿下が笑った。
にこやかな笑顔に僕は心底ぞっとした。

精霊魔法限定なんてルールはディアス殿下にとってなんの制限にもならない。
つまり？
僕は……なにか悪い事をしたのだろうか？
思わず懺悔して神に祈りたくなる。
つまり手加減なしに近い状態のディアス殿下との模擬戦。
悲惨な未来しか想像がつかない……。

その後僕は、
ディアス殿下に殴られ蹴られ。
なんとか距離をとって魔法を放ってもなぜか無効化され、
逆に強烈な魔法を叩きつけられて吹き飛ばされた。
ディアス殿下の移動速度は僕の反応速度をはるかに超えていて、
ろくに反撃すらできずにサンドバック状態……。
もう無理。
ごめんなさい。
僕少し調子に乗ってました！
魔法衛士隊最強なんてちやほやされて調子に乗ってましたぁ！
殿下に現実を教えてやるなんて思い上がってましたぁ！
反省してます。
心底反省してますから……その笑顔はヤメテ。
怖いです。
はっきりいって公爵夫人の笑顔より怖いです。
一応手加減されているらしく致命的な外傷はないけど、身体中ボロボロです。
いまなら血尿が出る自信があります。
そして精神はもっとズタボロです。
やめて！　微笑まないで！
笑いながら回し蹴り入れないで！　痛いというより怖いから！
僕がようやく多少の冷静さを取り戻し、杖を投げ捨てて降伏を宣

言するまでディアス殿下の執拗な攻撃は続いた。
どうも殿下はいつまでも杖を握りしめている僕が戦意を失わずに立ち向かい続けていると誤解していたらしい。
杖を投げ捨てて降伏したら「いやぁ、さすがワルド子爵。ずいぶん粘りましたね」と健闘を称えられてしまった。
……違うんです。
あまりに殿下が怖くて、杖を捨てることも思いつかないほど追い詰められていたんです。
さすがに言えない。
言ったら、なんだかもっと悲惨なことになりそうな気がする。

ディアス殿下、殿下って意外に容赦ない方だったんですね？
ヴァリエール家では猫かぶってましたね？
ここなら誰にも話が漏れないだろうと容赦しませんでしたね？
ついでにいうならきっと僕が、殿下が精霊魔法しか使わないと聞いて内心馬鹿にしたことを怒っているのでしょう？
きっとそうでしょう？
精霊魔法のすごさは骨身にしみてわかりましたよ。
ホント、殿下の拳や蹴りは骨や内臓にモロに響きます。
魔法もなぜかこちらの魔法は無効化されるうえに、そっちの魔法は防御すらできない凶悪さですからね。
ヤる気だったら、すでに血だるまになって死んでましたね。
やはり殿下は最強です。
僕程度では勝てませんよ。ホントに。

・ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ視点・

なにやらワルドがビクついている。

少しやり過ぎたか？
精霊魔法と系統魔法がやり合ったら絶対に勝てないことを理解してもらうためにわりと容赦なくやったけど。
さすがに怯えすぎじゃないか？
「わかってもらえたと思うけど、精霊魔法は非常に強力でしかも汎用性が高い」
怪我も精霊魔法でしっかり治したのだけど。
なぜワルドはこちらと視線を合わせない？　汗をかきながら地面を凝視しているぞ？
「こんな僕でも、いまの状態では『悪魔』相手に手も足も出ないらしい。なので協力者が必要なわけなんだが……聞いているの？」
「は、はい！　聞いております！」
そんな軍隊で怖い上官に問い詰められたような必死な声を張り上げなくても……。
微妙に傷つくな。
「精霊王の話では僕はこれから精霊使いの素質を持つものに出会うらしい。彼らを効率よく鍛えるためにも、一度精霊魔法を人に教えるということを経験しておきたくてね。悪いけどワルド子爵、協力してもらえないかな？」
「それはかまいませんが……それは自分では力になれないということですか？」
「精霊使いは最低四人。できれば五人必要で、使い物になるなら多い方がいいのだからワルド子爵にも期待していますよ？　特に僕の魔法理論を学んだ人は精霊使いとしての基礎訓練をしたようなものだそうですからね」
「基礎訓練？　そのようなものは……」
「僕の魔法理論。魔法は強制するのではなく、世界もしくは精霊にお願いするように使うべきである。これが精霊使いに必須な素質である精霊との親和性をあげるみたいなんですよ。魔力制御法も精霊を使った魔法というのをイメージしやすくなるかもしれません。魔

力が精霊に変わるだけですから」
なるほどとワルドが頷く。
「と、いってもいまのワルド子爵にいきなり精霊魔法を使えといってもできないでしょう？」
「確かに殿下の魔法は拝見しましたが、あれだけでは……」
見ただけで使えたら、すごい才能を持っているか、あるいは人外レベルのどっちかだろうなぁ。
「なので、まずはワルド子爵に精霊というものを知覚してもらいます」
「どうやって？」
「魔力制御法に把握法という技があるのですが、それを使ってワルド子爵の魔力を誘導して精霊を認識させ、とりあえず精霊魔法の一つも使ってもらいます」
「そんなことができるのですか？」
把握法。
元はその場にある魔力の強弱や流れなどを見切り予測し、場合によっては操るオリジナル技なんですけど、精霊王に叩き込まれた知識によればこれで無理矢理精霊を知覚できるようにもできるらしい。
現時点での魔力制御法の到達点。
他人の魔力すら限定的ながら操れる技。
相手がメイジならいつどこでどんな魔法を使おうとしているかが丸わかりという反則っぽい技なんだが。
長時間全力で使うと頭痛がすごいことになる。
一時的に使う分には問題ないけど。
どうも脳の処理能力に過負荷がかかる技みたいなんだよな。
だけど、これを使えば自分に飛んできた魔法を拳一発で撃ち落とすなんて楽勝です。
対メイジ用の技としてはおそらく奥義といっていいほど最強な技なんだよな。

ものは試しとワルドの左腕を握って把握法発動。
ワルドにいって杖を手放させ、目を閉じさせる。
魔力把握。制御割り込み。よしっ乗っ取った。
では精霊を感知できるレベルに魔力の質を変化。
さすがワルド。
あまり高くないとはいえ素質のある人間だけはある。
あまりいじらなくても精霊を知覚できるレベルの魔力になった。

試しにティフォーン先生を見てみたら、適性は限りなく低く、試しに把握法を使っても「漠然となにかいることはわかる」程度にしかならなかった。
ティフォーン先生にとっての僕の魔法理論や魔力制御は研究対象としては大変興味深いものという認識らしく。
それを実地して血肉とするほどではなかったらしい。
それでも風のスクエアで水のトライアングルに昇格してしまったのだからすごい。
まぁ、ティフォーン先生はもともと戦闘向けではなかったからあまり期待はしていなかったが……。
代わりにベアトリスはすごかった。
素質なら僕並み。
けれど両親との話し合いの結果。
妹には精霊魔法を教えないこと、この件に巻き込まないことを約束しているためどうしようもない。
おしいけど。
でも可愛い妹をバケモノの前に連れて行くのも嫌だしな。
他人ならいいのかと責められそうだが、僕にとっては妹はすべてに優先して保護する対象なんだよ。
危険なことなんてさせるものか。
そんなことをさせるぐらいなら僕が一人で特攻して悪魔だろうが八つ裂きにしてくれる！

「……これが精霊なのですか？」
おっワルドが精霊を認識できたか？
「わかりましたか？」
「すさまじい力が僕の周囲に、特に殿下の周囲に満ちているのがわかります。さらに周囲にも……いやもしかしたら世界中がこうなのですか！？」
世界に満ちる精霊の力を認識できたらしい。
第一段階クリア。
「右手の人差し指をたてて空に向けてください。魔力制御法の要領で周囲の精霊の力をその指先に集めるんです。精霊に力を貸してくれと頼みながら、精霊は自分たちを認識する人間の頼みはわりと聞いてくれますからだいじょうぶです」
ワルドはいわれたままに空に人差し指を突きつけ、その指先に魔力を集めている。
違う。
そうじゃない。
「自分の魔力を使うのではなく、周囲の精霊にお願いするんです。そうですね『力の精霊よ。我に力を与えたまえ』そう唱えて集中してください。周囲の精霊に呼びかけ、その力を借りるつもりで」
「難しいものですね……力の精霊とはなんですか？　聞いたことがないのですが」
「精霊なんて星の数ほどいるのです。四大精霊は特に有名なだけです。その中で力の精霊は力を貸してくれる精霊という意味で使っています。僕も精霊魔法での身体強化や簡単な魔法ではそう呼びかけています」
ああ、あの時の。
ワルドは納得し、深呼吸して心を落ち着かせ。
「力の精霊よ。我に力を与えたまえ」
少し周囲の精霊がざわめいた。

ワルドもそれを感じたらしく次は自信を持って呪文を唱えた。
「力の精霊よ。我に力を与えたまえ！」
数度の失敗の後、ワルドの指先に精霊の力が集まりだした。
「魔力制御の要領で、精霊の力を制御してください。確か魔力制御の魔力弾は使えましたね？　あれの要領で」
「はい」
ワルドは指先に集まった精霊の力を圧縮し、一つの弾丸とする。
「撃て」
「はい！」
僕の言葉にワルドは子供のように素直に返事をして指先から精霊の力を放つ。
精霊による魔力弾は空へ消えていった。
……あれ、人間に当たったらスプラッタ確実な威力だな。
やはり精霊魔法の威力は強いな。
初心者であれか。
僕がやったら、たぶん大砲クラスは楽勝だな。
戦艦だって沈められるんじゃないか？
僕は把握法を停止して、ワルドに再び同じ事をやるように指示した。
感動した面持ちだったワルドだったが、すぐに同じ訓練をはじめる。
僕のサポートなしでは精霊の存在を認識しづらいのかずいぶん手こずった。
だが、さすが若くして系統魔法をスクエアまで極めた人物。
数度把握法で精霊を認識させるとコツをつかみ、自力で精霊の力を集められるようになった。
ワルドの撃った精霊の魔力弾が空を貫く。
「おめでとう。ワルド子爵。君は自力で精霊魔法が使えるレベルに到達した」
さすがメイジ。

飲み込みが早いな。
精霊魔法の素質は系統魔法の素質とは別だが、やはり魔法を使っているもののほうが精霊の力にも適応しやすいのだろうか？
それとも魔力制御法か？
まだ簡単な力を集めて撃つというただそれだけのことだが、使えたということは大きい。
この調子で訓練していけばより自由自在に使えるようになるはずだ。
僕もそうだったし。
「いやぁ、はじめてコモンマジックが使えたときのような気分です」
ワルドが子供のような無邪気な笑顔で言った。
はじめて魔法を使ったあの時のような興奮と感動だと。
「あとは系統魔法と魔力制御法でできるようなことはすべて精霊魔法で使えるように訓練していけばいいでしょう。訓練すればするほど精霊との親和性が高まり精霊魔法の使いかってもよくなるはずです」
「わかりました。努力します。ですが休暇の間しばらく訓練を見てもらえないでしょうか？　まだわからないところも多いのでお教え願えれば助かるのですが」
僕はワルドに数日滞在することを勧めて、その間精霊魔法の訓練につきあうことを約束した。

これでワルドは仲間になる資格ができた。
事情を知り、おそらく力をこれから身につけるだろう仲間。
この調子で仲間を得ていきたい。
今回のことでわかったのは、精霊の存在を認識させてしまえばあとはわりと簡単ということだ。
精霊は認識されれば力を貸す。
把握法で認識するコツをつかませれば、おそらく素質があるならば精霊魔法を習得できるはずだ。

素質さえあればだが。
素質がなければティフォーン先生のように把握法を使っても精霊を認識できない。
いままで精霊使いの素質が一番高かったのがベアトリス。がくんと落ちるが一応素質はあるワルド。
使用人たちは個人差はあるがまずワルド以下、ほとんど素質なしという人物ばかりだった。
家臣たちも数人見たがワルド程度さえもいない。
両親でさえ、素質はなかった。
どうも僕の周囲にはあまり精霊使いの素質を持つものはいないらしい。
あるいは全体的に素質を持つものが少ないのかもしれない。
精霊との親和性なんて、あまり聞かない才能だ。
誰も精霊のことなど意識しないで暮らしている。
精霊の力を一応使っているはずのメイジでさえだ。
これでは精霊との親和性が高いはずがない。

これは苦労するかもしれないな。
もっと手っ取り早く大勢の素質のありそうな人間と出会う場はないだろうか？

あった。
トリステイン魔法学院。
僕はそこへ入学する予定だ。
セラファナの話では大人よりも子供のほうが見込みがありそうだ。
ベアトリスの群を抜いた才能は、僕の教えを受けたという他に子供であるということもあるのではないか？
技術では圧倒的に大人よりも劣るだろうが、そこは鍛えればいい。
別に期限が切られているわけではない。
そこで素質を持つ人物をスカウトし、鍛えて、仲間に入れる。

どうやって仲間に入れるかは相手次第だが、まずは信頼を得るのが重要だろう。

はぁ、仲間を集めて悪魔退治か……。
勇者役の他に、仲間の勧誘までしなければならないとか。
素質を持つ人間を攻略でもすればいいのか？
ＲＰＧかと思ったらギャルゲー要素ありだった。
いろいろありすぎだろ！
なんで僕がこんな面倒なことをしなければならないんだ？
あぁ、やらないと世界ごと僕も死ぬかもしれないんだよなぁ。
大陸浮遊現象で生き残る自信ないし、いつまで風石の暴走を止めていられるかわからないし。
くそう、すべて終わったら絶対に本に囲まれた自堕落な生活をしてやる！
大公国？　そんなもん我が父上に任せておけ！
将来の話？
ああ、これが終わっても大公国の跡取りの責任があるんだな。
なにもしないなんてきっと許されないに決まっている。
なぜ！
どうして！
僕は本に囲まれて幸せに暮らしたいのに……。
カミサマ……なんだか世界が僕をイジメている気がします。

十七章　精霊使いの初弟子（後書き）

ワルド、意気揚々と挑んでボコられました。

精霊魔法の強さを印象づけるため容赦なくボコる。

←

ワルド、ボコられつつもなぜか杖を握りしめて立ち上がってくる。

←

おや、まだまだやる気十分だな。もう少しやらないとダメかな？

とさらにボコる。

←

ワルド一方的に叩きのめされながらも杖を手放さずになぜか立ち上がる。

←

おや、まだまだやる気十分だな？　以下略。

そして無限ループへ。

ディアスがあまりにも怖すぎて杖を捨てるという発想が頭から飛んでいたワルドです。

そしてディアスは仲間集めの場としてトリステイン魔法学院に目をつけます。

さぁ、いよいよ魔法学院編だ。

ここまで長かった……いやっほう、ようやくタバサが出せるぞ！

作者は原作キャラではタバサがかなり好きです。

十八章　トリステイン魔法学院へ（前書き）

魔法学院編開始！
長かったですね。
しかもまだ原作始まっていないのですから少し長すぎたかなとも思います。

十八章　トリステイン魔法学院へ

・オルトルス・フォン・クルデンホルフ視点・

ディアスが十五歳になり、ついにトリステイン魔法学院に行くことになった。

魔法学院では、魔法の他に貴族としての礼節や教養を学び。また貴族同士の将来の友好関係を築く社交の場でもある。

魔法については心配していない。

すでに風と水のスクエア。土と火もトライアングルという天才だ。

将来は四系統スクエアとなるだろうと有望視されている。

むしろ教わることがあるのか疑問だ。

礼節や教養も大公家の跡取りとして恥ずかしくないように叩き込んだ。

内心はともかく外面は完璧だろう。

問題はディアスが魔法学院に行く動機だ。

我が息子からすべてを打ち明けられたとき、私たち夫婦はついに来るべきものが来たと感じた。

突如我が息子が昏倒し、原因不明のまま数日間意識不明状態になったことでもはや覚悟ができていた。

おそらくなにかがあったと察するのは容易だった。

目覚めた我が息子は、精霊の使命を語り、この世界の状態を語り、倒すべき敵とそのためにしなくてはならないことを語った。

覚悟はできているのか？

そう問わずにいられなかった。

私たちの子供は、世界の命運を背負っていこうというのだから。

我が息子は小さく笑ってこう答えた。

「死にたくはないので、努力してみます」

その言葉にどこかほっとした。
少なくとも我が息子は狂信的に精霊や神から与えられた使命を盲信しているわけではないと感じたからだ。
死にたくない。
生きていたいからがんばる。
ごくまっとうな理由だと私は思う。
少なくとも子供が世界の危機に挑むにあたって、難しい屁理屈をこねたり自分が選ばれた者だなどと増長するよりはるかにましだ。
放っておけば世界の危機、それをなんとかできるのは自分だけ。
下手をすればその重圧に苦しんだり、選ばれた人間なのだと増長したりしそうだが。
我が息子は『死にたくないからがんばる』という。
いかにも俗で、あまりにも平凡で、そして痛快だった。
我が息子にとって、神や精霊の使命などなにほどのことはないのだ。
ただ自分のために。
自己中心的だというものもいるかもしれない。
けれど私はそれでいいと思う。
そういう考えであるならば、むやみに自己を犠牲にしたり、神や精霊に盲目的に従ったりはしないだろう。
将来大公国を治めるときにはまた違った考えをしてもらいたいが、いまはそれでいい。
いまは自分のために、使命を果たし幸せをつかんで欲しい。

そんな我が息子ディアスが仲間を求めてトリステイン魔法学院へ行く。
なにか騒動を起こすのではないか。
それが心配だ。
ただでさえ息子は有名人だ。
最近では『精霊』の二つ名までついている。

出所はアルビオンのウェールズ皇太子らしい。
「彼は精霊の加護を受けた現在唯一のメイジだ。その名は『精霊』こそふさわしい」
そう主張したらしい。
迷惑な話だ。
いっそのことヴァリエール公爵夫人のつけてくれた『黒翼』を名乗らせればよかった。
我が息子が二つ名に無頓着でいつまでも特に決めずにいたおかげで、より他人の興味を引きそうな二つ名が定着してしまった。
『精霊』などという二つ名は、息子が普通のメイジではないと宣言しているようなものではないか？
まったく、ウェールズ皇太子ももう少し考えて発言して欲しかった。
本人は好意のつもりなのだろうが、こちらとしては迷惑だ。
ああ、頼むから騒動を起こさないでくれ。
あまりに心配だから護衛と称した見張り役を送りこもうとしたが拒否されてしまった。
確かに名目が護衛ではな……あの息子を護衛できるメイジなんてうちにはいない。
もはやクルデンホルフ最強だからな。
まぁ、それで護衛の意味がなくなるわけではないのだが。
原則として魔法学院には付き人や護衛のたぐいは送らないものだと主張されれば正論故に黙るしかない。
我が妻はむしろ騒動のほうが寄ってくるのだと主張している。
だが、私はその騒動を避けようともせずに平然と受け止めている我が息子にも問題がある気がしてならない。
器が大きいのか、それとも意外に後先考えないのか。
とにかく心配だ。
ベアトリスを同時に入学させて監視させようかとも思ったが妻が反対した。

あの仲のよい兄妹を一緒に学院に放り込めば、監視どころか結託して悪巧みをしそうだと。
もっともだった。
我が娘は父親よりも兄にべったりだからな。
ふふふ、お兄様のお嫁さんになるか。
お父様のお嫁さんになるとは一度も言ってくれない。
ディアス……おまえは私にさんざん苦労をかけたあげく娘の愛情まで奪うのか？
いやいや、息子に嫉妬しても始まらない。
とりあえず学院長であるオールド・オスマン氏と連絡を密にして、いつでも不測の事態に対処できるようにしておこう。
普段の見かけはああだが、あれでなかなかの人物だ。
たぶん力になってくれるだろう。
たのむ。
あまり無茶をしてくれるな。
頼むから自重してくれよ……。

・ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ視点・

魔法学院に行くにあたり両親にひたすらお願いをされてしまいました。
問題息子のディアスです。
無茶をするな。
自重してくれ。
クルデンホルフとは違うんだ。
などなど。
僕はよほどの問題児らしい。
まぁ入学の動機からして不純ですけどネ。

勉強するためじゃなくて、仲間集めと自分の訓練のためですから。
入学式で愉快な学院長が会場を凍えさせたりもしましたが、なんの問題もない。
男子寮の一室をもらい受け、学園のメイドに手伝ってもらって部屋の整理もすぐに済みました。
働き者のメイドだったのでチップを多めにあげたら驚かれましたよ。
トリステインではチップの概念がないのかな？　クルデンホルフでは普通に店の者や使用人にお小遣いとして少々お金を握らせるのは普通なんだけどな。
黒髪のなかなか可愛い子でしたよ。
遠慮する彼女にクルデンホルフでは普通のことと押し切ってチップを渡し、今後もよろしくと頼んでおいた。
そういえばこの黒髪のメイド、案外精霊との親和性が高いんだよな。
彼女の周囲にはたくさんの精霊が楽しそうに飛び回っている。
でも平民なんだよな。
平民に魔法を教えるのはどうなんだろう？
なんかやばいことになりそうな気がする。主に将来的に。
しばらくは自重しよう。
他にも候補はいるだろうし。

入学式でざっと見たところ精霊使いの才能のありそうな奴らが結構いた。
やはり子供のほうが精霊との親和性がいいのかな？
ほとんどはワルドレベルだけど、群を抜いて強いのも数人。
知り合いにも会いました。
僕の魔法の生徒のモンモランシーとルイズ。
二人とも精霊使いの素質はワルド以上。
特にモンモランシーはベアトリスに匹敵するレベルだった。

さすが水の精霊の交渉役。精霊との親和性はすごいね。
すでに水のトライアングルになったらしく。
二つ名をどうしようと迷っているらしい。
可愛いのがいいです。
とはにかみながら言った姿は思わず萌えてしまいましたよ。
可愛くなったなぁ、モンモランシー。

ルイズもなかなかの素質持ちだった。
やはり僕の生徒は適性が高いのだろうか？
ならば僕の訓練を受けさせれば精霊との親和性を向上させ、精霊魔法の素質を高めることもできるかもしれない。
そうそう相変わらずルイズは系統魔法は使えないらしい。
ルイズは学院在学中に系統魔法を使えるようになってみせると鼻息が荒いが、正直あの爆発魔法を自由自在に扱えている時点でここの生徒のほとんどより強いと思うけどな。
ルイズを注意深く見ていると、どうもルイズは四大の精霊に嫌われているように見える。
ルイズの周辺には四大の精霊は近寄らないのだ。
これが系統魔法が使えない理由だろうか？
もしかして精霊魔法を覚えても四大関係の魔法は使えないのではないだろうか？
適性は高いが、少々難しい才能の持ち主のようだ。

そして僕は、僕的最大イベントのためにわざわざここに足を運んだわけです。
どこか？
もちろん図書館ですとも。
ここにはベアトリスがいない。
そう我が愛する妹がいない。
したがって僕の癒やしとなるものはもう本しかないのですよ？

魔法の訓練は最初の頃は魔法が上達するのが楽しかったけれど、最近では生き残るために訓練しているためにはっきりいって楽しくはない。

むしろストレスがたまる。

そんな僕を癒やしてくれるのは愛しいベアトリスとの時間と本だけなのです。

そのベアトリスがいない。

なので僕の平穏と癒やしの時間を提供してくれる本がどれくらいあるのか下見に来たわけです。

結果は。

なかなかのものですね。

さすが歴史あるトリステイン魔法学院。

ジャンル問わずに様々な本が所狭しと！

ここは楽園か！

思わずにやけていると同じような歓喜の表情でふらふらと図書館をふらつく複数の生徒たち、中には僕と同じ新入生もいる。

入学早々、さっそく自分の本拠地を確かめに来た猛者たちが結構いますね。

同志が多いのは嬉しいですよ。

さて僕もいくつかめぼしい本を探しますか。

歓喜の表情で図書館を徘徊する生徒たち。

普通の人が見たらおおいに引くらしいですが、別に珍しい光景ではありません。

本好きにとって山ほどの本がある場所は楽園なのですよ。

できればそこで生活したいくらいに。

不意に精霊たちがものすごく集まっている区画を発見して、そちらに足を向ける。

そこには同じ新入生で背の小さな女の子が、本棚の上の方を見上げてなにやら悩んでいた。

その視線の先にある本を見やり、彼女の手にある大きな杖を見て。

これは手が届かなくて困っている系のイベントではないなと判断。
そんなもの魔法でとればいいだけだ。
魔法学院にコモンマジックすら使えずに入学する生徒はごく少数だろう。
しかもあんな大層な杖をもっていてコモンマジック使えませんってありえないだろう。
となると。
「僕的にはハルケギニアのおもしろい偉人伝よりも、ハルケギニアの歴史おもしろ逸話編のほうがおすすめかな。そっちの方が普通におもしろい。おもしろ偉人伝ははっきりいってただの変人特集だった」
「……読んだことがあるの？」
「うちにあった」
「そう」
しばらく悩んだ後、こくりと小動物のような仕草で頷き、魔法で目的の本を手元に取り寄せた。
題名ハルケギニアの歴史おもしろ逸話編。
よっしゃ。
なにかに勝ったような気分だ。
自分のおすすめの本を手にとってもらえるとなんというか達成感というか、なにかに勝利したような高揚感を感じる。
「……ガリアの歴史～偉人たちの軌跡」
ぽつりと本の題名を呟く。
「おすすめかな？」
「……昔読んだ。なかなか愉快」
「わかった」
僕もその本を魔法で手元に取り寄せる。
眼鏡をかけた小さな女の子。
その青い髪を見て僕は内心密かにたじろいだ。

青い髪って確かガリアでは確か王族関係者じゃないか？
まさか王族が外国の魔法学院に留学とかありえないし、あったらもっと大騒ぎになっているだろう。
おそらくガリア王族の縁戚の貴族あたりだろう。
まだ彼女がガリアの人とは決まっていないのだけど。
「本好きの同志がいてくれて嬉しいよ。僕はディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ。君と同じ新入生だ。よろしく」
「……タバサ」
家名は名乗らないか……もしかしてかなり上の方の家なのかな？
念のため……。
「ガリアの方かな？」
「……そう」
一瞬警戒されたようにも見えたが、素直に答えてくれた。
はい、決定。
王族とも縁戚の有力貴族の娘だ。
「留学生か、ならいろいろ大変なこともあるだろう。僕にできることなら力になるよ」
ガリアとトリステインじゃ、たぶんかなり勝手が違うだろうからなぁ。
「それはあなたも同じ」
「そうかな？」
「クルデンホルフの天才。事実上独立国のクルデンホルフ大公国からの留学生。トリステインには不慣れなはず」
あらま、バレてーら。
名乗った以上当然だが、ガリア貴族があっさりと『クルデンホルフの天才』という呼び方をしてくるとは。
「ひょっとしてガリアでも僕って有名？」
「有名……アルビオンの天才プリンス・オブ・ウェールズと並び称される。ハルケギニアの二人の天才」
ウェールズ……僕らなんだか知らないうちにえらくなっているな

あ。

君はともかく僕はなにもしていないぞ？

「そんなにたいしたことしていないんだけど」

「……水の精霊の加護を受けた『精霊』のディアスはあなたが思うより有名」

そんな二つ名がついていたのか？

青い髪の少女は少しためらったように口を開いた。

「噂ではあなたは精霊の力を使えると聞いた……それって本当？」

「事実だ。水の精霊を使って病人を治療したこともある。トリステインではわりと有名な話だよ」

そう、なぜか有名になっていた。

あのことはヴァリエール公爵と僕と、カトレアさんしか知らないはずなのに。

いつの間にか僕が水の精霊を召喚してカトレアさんの治療をさせたことが広まっていた。なぜだろうね？

僕の言葉に青い髪の少女は一瞬息をのんだようだ。

なんだ？

そんなに驚くようなことか？

まぁ……普通は驚くか。

普通はありえないらしいし。

水の精霊を使役して病人を治療なんて、普通なら誰も信じない。

水の精霊は水の神様みたいな相手だぞ？　交渉役がいくらがんばってもたかが人間一人をわざわざ治療してくれたりしない。

それを平然とやってのけたのだから、それは驚くだろうな。

「あなたは……すごい」

うん……いまあきらかに途中で言葉をすり替えたな。

まぁ気にしないことにしよう。

常識的に考えて、僕の存在はあきらかにこの噂だけでも常識外。

実態はもはや人外レベルに近い感じだからな。

あまり聞いて愉快になる言葉ではなかったのだろう。

彼女も途中で非礼と気がついて言葉を取り繕ったのだろうな。
「じゃあ、また機会があったら会おう。本好き同士仲良くしたいね」
僕はそういって彼女に別れを告げた。
タバサか。
ベアトリスと同等か、それ以上に精霊使いとして高い素質を持つ彼女の名前をしっかり胸に刻んで。
周囲に凍てつく風の精霊を大量にまとった少女。
むしろすでに精霊使いなんじゃないかと疑いたくなるくらいに。
彼女は精霊に、特に風の精霊との相性がいい。
天才といっていい。
仲間にできたらどんなに助かるか……。
それは今後次第だな。

・タバサ視点・

あれが『精霊』のディアス。
クルデンホルフの天才。
水の精霊の加護を受けたおそらく唯一のメイジ。
そしてヴァリエール公爵家次女の不治の病と呼ばれた病を完治させた人物。
どこか親しみやすく、暖かい空気の持ち主だった。
頼れば、それに応えてくれそうな雰囲気の人物だった。
けれどまだ早い。
事情を打ち明けるのならば、彼が信頼できる人物であることを見極めなければ。
精神を壊されたお母様を治療出来るおそらく唯一の可能性。
本国から要注意人物に指定されたクルデンホルフ大公家の跡取り。
彼の情報は伝えられている。

力尽くでどうこうできる相手ではない。
できれば彼の信頼を勝ち得て、こちらに協力してもいいと思わせなければならない。
彼を仲間にできればお母様は助かるかもしれない。
そしてジョゼフ王に対抗するのに彼の実力と人脈は多いに有効だ。
四系統スクエアを期待される風のスクエア。
独自の魔法理論と魔法技術を開発した独創的なメイジ。
トリステインで隠然たる勢力を持つクルデンホルフ大公が溺愛する息子。
アルビオンで辣腕を振るうウェールズ皇太子の親友。
ぜひ味方に欲しい。
復讐のために。
いやそこまで望みはしない。
せめてお母様だけは救って欲しい。
そのためには……。
彼が薦めてくれた本を見つめる。
また会えるだろうか？
本好きだと言っていた。
ならばここに通っていれば自然に会い。仲良くなることもできるのでは？
「……仲良くなるには、どうすればいいんだろう？」
わからない。
わからないけれど。
とりあえず趣味は同じらしいから、それをきっかけになんとか仲良くなってこちらを信頼してもらわなければ。
「男の子と仲良くなる方法……そんな本あるかな？」
ふと思いつくが、それはまた今度にしよう。
まだ会ったばかりだ。
なんとかなるだろう。
自分の対人関係の能力の低さを少し嘆きながら、わたしは自室へ

戻ることにした。

まずは彼おすすめの本を読んで、趣味が合うかどうか確かめよう。

十八章　トリステイン魔法学院へ（後書き）

やっぱり御両親はどこまでも苦労します。
そしてタバサ登場。
やはり本好き同士仲良くしてもらいたいです。

十九章　学院の生活

・オールド・オスマン視点・

本年の新入生は優秀な者が多いの。
水のトライアングルのモンモランシ伯爵家の娘。
火のトライアングルのツェルプストー辺境泊の娘。
そして、
クルデンホルフ大公の息子。
風と水のスクエア。火と土のトライアングルという天才。
あと気になるのは、ガリアからの留学生かの。
本人はドットと書類上では申告しておるが、アレはどうみてもトライアングル以上に見える。
なにか理由があって実力を隠しているのか、わしの目が老いたか。
タバサといったか、学院関係者にすら家名を明かさないが、その身元保証をしているのはガリア王国そのものじゃ。
おそらく表向きに留学できない身分なのか、あるいは彼女自身が表沙汰にできない人物なのか。
まぁ、この学院に入学した以上はうちの生徒じゃ。
問題のないように見守っていこうかの。
さてもう一人の問題児。
実の父親によると『騒動を招く天災』らしいが、
ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ。
しばらく魔法で観察させてもらったが、特に問題を起こす様子は見られない。
授業は真面目に受けるし、本好きらしくよく図書館に出入りして同じ本好き同士で交友関係を広げておる。
問題といえば夜中に寮を抜け出して、こっそり魔法の訓練をしておるくらいだが、この程度なら熱心な生徒なら大抵やることじゃか

ら、毎年大目にみとる。
しかし練習している魔法がいささか問題かの。
アレは系統魔法ではない。
精霊の魔法じゃ。
しかもエルフとも違う。
精霊の加護を受けていると聞いていたからもしやと思っていたが、
彼もそうなのだろうか？
もしそうならばあの時と同じ事が起こるかもしれんのか。
彼はなにか知っているのだろうか？
なにも知らずに精霊の加護を受け、精霊の魔法を熱心に学ぶとも思えない。
いずれ時期を見て詳しい話を聞かねばならないじゃろうな。
まぁ、しばらくは様子見か。
見たところ今のところ彼は精霊の魔法を他人には教えておらん。
放課後にヴァリエールの娘やモンモランシの娘と訓練するときには精霊の魔法を使っていない。
魔力の自力制御による魔法行使というなんとも独創的な技術を伝授しておる。
アレは便利そうな魔法ではあるの。
基礎くらいは昔わしも似たようなことを試したが、彼ほどそれに熟練することはなかった。
才能の差か、熱意の差か。
まさにアレは魔法の天才と呼ぶにふさわしい。
だがそれだけで済むか。
わしの予感が正しければ。
彼はより大きな存在となり、やがてはそのために命を賭けることになるじゃろう。
その時、わしのような老骨が彼の力になれるか？
やれやれ。
少しなまった身体と腕を磨き治す必要があるかもしれん。

あくまで念のためじゃ、なにもなければあの天才を導く役に立てればいいじゃろう。
ながいこと学院長室の置物じゃったが、
この『四大』のオールド・オスマンがもう一度他人様の役に立つかもしれんの。

・タバサ視点・

あれからたびたびディアスとは会うようになった。
といっても図書館で偶然に会い。
ほんの少しおすすめの本についての情報を交換するくらいだけど。
彼の本のセンスはなかなかのものだった。
いまのところあまりハズレがない。
お互い名前で呼び合う程度には親しくなった……と思う。
正直他人とのつきあい方がよくわからないのでどうしたらいいのか困っている。
ぜひ味方に欲しい。
彼の力が欲しい。
こんな下心を持っている自分はきっと嫌な人間なのだろう。
それでも、お母様の治療だけは頼みたい。
復讐に巻き込むのはさすがに気が引けるが、せめてそれだけなら……。
でも現実は、そんな話など切り出せずにいつも本の話題ばかり。
会ったばかりの他人に『お母様を治療して』と頼むのがさすがにまずいことは理解している。
杖を突きつけて命が惜しければお母様の治療をしろといっても、
彼なら逆に私を叩きのめしそうな気がする。
普段穏やかで優しげだけど、その内側では冷静でもしかしたら酷

薄ですらある意志があるように感じる時がある。
彼と戦う光景を何度も頭の中に思い描き、彼に勝てるかまだ自信が持てない。
授業で魔法の実技を見たこともある。
あきらかに実戦を想定した魔法の使い方だった。
なによりも速い。
魔法の実戦使用でもっとも重要なのは詠唱の速さだ。
実戦でのんびり呪文を唱えていれば殺されるだけ、速く確実に致命の一撃を相手に叩き込む。
彼の魔法はまさにその通りの魔法だった。
クルデンホルフ大公家の跡取りがなぜあれほど実戦を想定した魔法の使い方に熟練しているのか疑問だが、天才と呼ばれるほどの人物なのだと納得もできる。
見たところ体術などにも秀でているように感じる。
接近戦では体格差もあるからわたしではまず勝てない。
魔法戦でも風と水のスクエア、土と火のトライアングルというほとんど全系統を自在に扱うメイジ相手にどれだけ戦えるものか自信がない。

そういえば彼は有名人でしかも人気者だった。
『精霊』のディアスの名はガリアにまで聞こえるほどだから有名なのはわかる。
しかしこの人気はなぜ？
特に女生徒がすごい。
露骨に群がることはしないけれど隙さえあれば彼に話しかけようとしている。
疑問に思っていると長身の女生徒がわたしに教えてくれた。
「だって彼、クルデンホルフ大公国の跡取りでしかもまだ婚約者も決まっていないのよ？　それはどの女だって狙うでしょうよ。彼の心を射止めれば未来の大公妃サマだもの。しかも顔よし、才能抜群、

性格もいいという優良物件よ？　まぁ、みんながんばるわよね」
とどこか馬鹿にしたような口調だった。
「あなたも？」
「私は……そうねぇ、いい男だと思うけど。完璧すぎてなんかうさんくさいわね。だから今のところ様子見」
赤い髪の女生徒はそれから少し悪戯っぽく忠告してきた。
「あなた図書館でしょっちゅう彼に会っているでしょう。噂になっているわよ？　気をつけなさい。嫉妬に狂った女は怖いわよ？」
噂……私はあまりその手の情報収集はやらないので疎い。
どんな噂かと聞くと。
ガリアの没落貴族の娘が、彼の趣味に合わせて本好きをよそおって近づき密かに玉の輿を狙っているというものらしい。
「そんなつもりはない」
「噂なんて無責任なものよ」
「それに私が本を読むのは本が好きだから、彼は関係ない」
「私にいわれても……私が言いだした噂じゃないんだし」
それはわかっている。
けれどなぜか胸がむかむかする。
なぜだろう？
下心は確かにあるが、そんな浮ついた目的じゃないし。
図書館で会ったのは偶然だし、話しているのは本のことだけだし、そんな風に噂される理由がないはず。
本好きなのは本当だ。嘘なんてついてない。
没落貴族？　確かにその通りかもしれないが大きなお世話だ。
内心憤っていると、赤毛の女生徒は肩をすくめて見せた。
「ただの噂なんだから気にしなくてもいいのよ。おおかた彼と仲良くなりたいけどきっかけがないなんて泣き言をいうへたれな女がやっかみで流した噂なんだから」
「仲良くなりたいなら話しかければいい。彼はたぶん話しかければちゃんと応対する」

「それがなかなかできないらしいのよ。なんでもトリステインでは女のほうから男に声をかけるのはマナー違反なんだそうよ。女性は貞淑でなければならないとかなんとか。馬鹿みたいよね」

この人、トリステインの人間ではない？

疑問を読み取ったのか彼女はゲルマニアからの留学生だと語った。

「キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーよ。よろしく、おちびちゃん」

「タバサ……ガリアから来た」

「タバサ？　妙な名前ね。それと家名は教えてくれないの？」

私はただのタバサ。

いまは、ただそれだけの存在。

「ま、人それぞれ事情があるわね。別に詮索はしないから気にしないで、ゲルマニアの貴族にも礼儀というものはあるのよ？」

茶目っ気たっぷりにウインクする。

悪い人ではない気がする。

それに学院の噂など自分よりは詳しそうだ。

仲良くできれば私の情報能力の不足を補えるかもしれないけど。

……どうやったら仲良くできるんだろう？

困った。

どうやら私の対人関係のスキルは思っていた以上に低いのかもしれない。

別に友達を作りたいとは思わないが、味方は欲しい。

将来的に今のままの対人スキルだと復讐など夢幻と消えそうだ。

少しは改善するべきかもしれない。

・キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー視点・

今日はおもしろい友人と出会った。
ガリアからの留学生のような少女だった。
背の小さいお人形のような少女だった。
あきらかに偽名っぽいけど、詮索はしない。
誰だって会ったばかりの他人にあれこれ詮索されるのはおもしろくないだろう。
私だったらあれこれ言われたら無視するか、しつこければ一睨みで黙らせ、それでも食い下がる愚か者は張り倒すわね。
噂を聞いたときは玉の輿を狙うその他大勢に比べれば多少知恵の回る方だとなかば感心していたけど、実物はどうもあまりそういう気はなさそうに見えた。
たぶんたまたま趣味がかぶってよく会うようになっただけなのだろう。

ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフか。
確かに美男子でお金持ちで家柄もよくて才能もある。
けどなんだか完璧すぎておもしろくない。
おかげでこの胸の炎は燃えてくれなかった。
彼の隣に立って大公妃になるのも愉快そうだけど、大公妃ってなんだか堅苦しそう。
やっぱり私は興味がわかない。
もっとおもしろくて私をどきどきさせてくれる男がいいわ。
あの子には一応忠告しておいたけど、別にそれほど深刻に恨まれているわけでもなさそうだし、今は別に問題はないと思う。
むしろ彼の魔法の生徒であるヴァリエールのちびとモンモランシ伯爵家の娘のほうが目の敵にされているわね。
どちらも名門の家柄だから表だってなにかされることはないけど。
あの子は私がそれとなく庇ってあげようかしら？
家名を隠している以上後ろ盾もないでしょうし、私がそばにいれば私が後ろ盾代わりになれる。

ツェルプストーに正面切って喧嘩を売る考えなしの馬鹿はさすがにいないでしょう。
下手をすればお父様が即座に攻め込むわよ。
仇敵のヴァリエールのところにね。
それはもういい口実ができたと嬉々として攻め込むでしょうね。
お父様なら。
ま、それは置いておいて問題はあの子ね。
いまはそう根強い反感というわけじゃないけど、話した印象からするとどうも人付き合いは苦手そうに見えた。
このままいくと手出しできないヴァリエールやモンモランシ伯爵の娘の代わりにやり玉に挙げられそうかも。
女のイジメほどはたから見ていて苛立つものはない。
素直そうないい子だったし、私が守ってあげようかしら。
しかもヴァリエールの身代わりというところがむかつく。
イジメるなら遠慮なくヴァリエールを的にすればいいのよ。
そうすればいい気味だと笑って無視できるのに。
ヴァリエールの身代わりにあの子がイジメの的になる。
うん、どう考えても許せそうにないわね。
決めた。
私あの子の親友になりましょ。
それでなにかあったら遠慮なく相手はツェルプストーの炎でこんがり焼いて差し上げましょう。
なんとなくあの子放っておけないオーラが出ているのよね。
同じおちびでも可愛げのないヴァリエールとは大違いだわ。
留学生同士、仲良くやっていきましょう。

十九章　学院の生活（後書き）

タバサとキュルケの友情開始です。
タバサって守ってあげたいオーラがときどき出ていると思うのです。
キュルケってそういうのを見たらなんとなく保護欲をくすぐられて守っちゃう女性のような気がします。
反面、完璧超人に見えるディアスはおもしろみがないと感じるかもしれないなぁと。

二十章　学院の生徒（前書き）

なんというか一人称って地の文を書くのが楽しい。
思わず熱中して、ほとんど台詞なしになってしまいました。
今後はバランスを考えないといけませんね。

二十章　学院の生徒

・キュルケ視点・

あれから一緒にいることが多くなったタバサという小柄な少女は、なかなかおもしろい子だった。

学院ではやや距離を置かれているゲルマニア貴族の私がそばにいっても嫌がる様子もなく。

放っておけば誰とも話さずにただ静かに本を読んでいる。

なにがそんなに楽しいのだろうかと私も図書館に同行したことがあるが、あの独特の空気にやられてしまい一冊も手に取らずに退散してしまった。

他人の趣味をとやかく言う気はないから放っておくけど、よく飽きないものだと内心では呆れている。

彼女の周辺の雰囲気もおおよそつかめた。

まず親しい友人は皆無。

話しかけてくる者さえいない。

どうも正体不明の留学生として敬遠されているらしい。

まぁ、家名すら明かさないのだから訳ありだと思うわよね。

敬遠されている理由は、勝手に出自の怪しい者と決めつけて見下してくる者と、あるいは格の高い家柄故に明かせないのではないかと恐れる者がいるみたい。

おおかたは後者が多い。

この子、変に雰囲気があるのよね。

無口だからかしら？

妙な威圧感があるし、トリステインのふぬけどもでは腰が引けるのも仕方がないわね。

しかも魔法の実演をしてみたらその実力はたぶんトライアングルクラス。

下手したらスクエアに届くのではないかしら、というほどだ。
正体不明の実力者。
そんな相手にケンカを売る根性はないらしく、私が心配したようなことはないようだ。
そんな無口で無愛想な子だけど、話しかければきちんと応対するしけして悪い子ではない。
むしろときどき見せるどこか幼い仕草が小動物っぽくて可愛い。
これで愛想がよかったらきっと女の子たちのマスコットになっていただろう。
今のところ彼女の可愛さに気がついている目敏い人物は少数派らしいので、思う存分私が独占して愛でている。

あ、実はこの子、男子に隠れた人気があるらしい。
あくまで少数派だけど、無口でミステリアス。
しかも小柄で可愛らしく魔法の実力も確かということで密かに惚れ込んでいる者もいるようだ。
もっとも直接声をかける度胸はないらしく。
遠巻きに見ているだけだけど。
そしてこの子はそんなことは欠片も気がついていないらしい。
と、いうか自分の容姿が愛らしく他者の関心を引くという発想そのものがないのでは？
私は彼女を抱きしめ。
思う存分、小柄で華奢な身体を堪能して周囲で彼女をうかがっている男どもに見せつけていたりする。
ときどき、「おおー」とか「うらやましい……」とか聞こえてくるけど。
気にしない。
この子、やせているけど柔らかくて暖かくて気持ちいいのよ。
ああ、クセになりそう。
……そういえば最近新しい男見繕ってなかったわ。

最近この子に夢中だったから。
どっかにいい男いないかしら。
ふとこちらを見つめていた男子生徒と目が合った。
「目の保養になる……」
顔を赤らめて私たちを凝視している。
金髪の顔立ちはまぁまぁだけどどこかぬけてそうな男だった。
あの胸元を開いたヒラヒラシャツにバラの造花……正直趣味が悪いわね。
アレはないわ。

・ギーシュ・ド・グラモン視点・

ああ、いいものを見た。
アレが百合というものか。
たしかゲルマニアのツェルプストーと正体不明の留学生だったな。
最近は仲がよいらしく二人でよくつるんでいると聞いていたが、まさか昼間の人目のある中で抱きしめるような関係とは思わなかった。
いや女の子同士ならあの程度のスキンシップは普通なのだろうか？
いや、でもゲルマニアの女だからな。
トリステインとはきっと常識が違うのだろう。
僕としてはもっと奥ゆかしくて、清楚な女の子のほうが好みだ。
そう笑うと花が咲くような感じの。
モンモランシーのような……。
僕はモンモランシーのことが好きだ。
幼い頃からの知り合いで、ずっと好きだった。
でもモンモランシーはどうやらディアス殿下のほうが気になるらしい。

……それはそうだろう。
このギーシュ・ド・グラモン。
顔ではディアス殿下にも劣らないつもりだが。
家柄はしょせん傾きかけた伯爵家の四男坊。
将来は兄の家臣になるか、なんとか手を尽くして独立するしかない。
魔法の腕も絶望的だ。
一時はディアス殿下に対抗心を燃やして魔法の訓練に励んだが、しょせん土のドットクラス。
ゴーレム操作の腕前は教師から褒められたが、しょせんドット。
風のスクエアのディアス殿下に勝てる道理がない。
ディアス殿下は男の僕から見てもほれぼれする人物だ。
生まれついての人の上に立つ人物というのはあの人のような感じなのだろう。
魔法の才能に加えて、人柄もよく、僕のような付き合ってもなんの足しにもならない四男坊にも笑顔で応対してくれる。
おもわず将来はクルデンホルフ大公家に仕えてもいいかななどと思ってしまったほどだ。
まぁ、先方が僕みたいな未熟者はお断りするだろうがね。

しかしモンモランシーもめげないよな。
僕の目から見てもモンモランシーの恋が成就する可能性は低い。
モンモランシ家はうちと違って大公家からの援助で家を持ち直し、おまけにディアス殿下のご厚意で水の精霊との交渉役にも復帰した。
トリステイン有数の名家といっていい。
うち？
うちも大公家から援助を受けているが、経済状況は火の車一歩手前な感じさ。
これでも大公家から経済や統治知識の豊富な家臣を借りて領内統治をあらためてからは多少はましになったんだよ？

だけど父上が……やたら軍備で金を使うクセをあらためないから相変わらず家計は厳しい。

まぁ、一応トリステインの軍事といえばグラモン家といわれるぐらいの名家ではあるんだけどね。

貧乏なだけで。

それはともかく家柄的にはモンモランシ伯爵家からクルデンホルフ大公家に嫁入りしてもおかしくない。

家柄はいいのだ。

が、モンモランシ伯爵家には子供がモンモランシーしかいない。

つまり跡継ぎが他にいない。

モンモランシーが大公家に嫁入りしたら、モンモランシ家がつぶれかねない。

まぁ、家を保つだけならいろいろ方法はあるらしいけど。

その点がモンモランシーの泣き所だ。

モンモランシ家の唯一の子供。

普通なら婿をもらって家の安泰をはかる。

なのでモンモランシーがディアス殿下の元へ嫁入りできる可能性は不可能とはいわないが限りなく低い。

モンモランシ伯爵家を潰す危険をおかしてまで大公家へ嫁入りするのを他の貴族がどう思うか。

横やりが入るのは確実だね。

大公家に娘を嫁がせたい貴族なんて山ほどいるのだから。

おまけにディアス殿下も問題だ。

どうも彼はモンモランシーのことを異性としてよりも自分の魔法の生徒、友人としてみているように思える。

ディアス殿下がどうしてもとモンモランシーを望めば、あるいは他の貴族も黙らざるを得ないかもしれないが。

現状ではありえない。

ディアス殿下がモンモランシーに恋人とか婚約者としての立場を求めているように見えない。

もちろんモンモランシーの好意には気がついているだろう。
気がついていて友人として求めているとすれば、モンモランシーには勝ち目がない。
異性としての好意ではなく、親しい友人としての好意。
正直、ディアス殿下も罪なことをなさると思うが。
ディアス殿下の立場ならうかつに恋人をつくることも、愛をささやくことも不可能だろう。
そんなことをした瞬間に、舞台は二人の恋愛というより貴族たちの政争の場に変わってしまいかねないのだから。

そう考えると二人とも不憫な生まれだ。
モンモランシーにもし兄や弟がいれば。
ディアス殿下がもし、跡取りではなく次男三男の立場なら。
二人は意外にあっさり結ばれたかもしれない。
僕はモンモランシーの幸せを願っているけど。
もし、モンモランシーがこの恋を諦めるときが来たら、僕はモンモランシーに愛を誓おうと思う。
それまではモンモランシーを見守りつつ、たくさんの女の子たちとの恋の物語を楽しむことにしようと決めている。
ただひたむきにモンモランシーを見守るのは僕には無理だ。
そんなことをしていたら僕の心が砕け散ってしまう。
だからそんな僕の心を癒やす恋をしながら、見守ることにしている。
女性に不誠実？
ふふ、まぁ、いいじゃないか。
しょせん学生時代の恋など貴族社会では一時期の遊びに過ぎないのだからね。
やがては親が決めた婚約者と結ばれる。
その時までつかの間の自由恋愛を楽しむ。
ただそれだけのものさ。

ただの四男坊でさえ、貴族の家に生まれた以上、大人になったら家同士の決めた婚約者と結婚することになる。
それが嫌ならそれまでの間に、家同士が納得する相手と恋愛するしかない。
モンモランシーとなら。
グラモン伯爵家とモンモランシ伯爵家なら。
僕とモンモランシーが結ばれる可能性は低くはないのだけどな。
お互いが望めば、だけどね……。

・モンモランシー視点・

入学当初は騒がしかった周囲もだいぶ落ち着いてきた。
ディアスとも再会して再び魔法の指導をしてもらえることになり、友人もできた。
趣味でやっていた魔法薬の調合が友人作りに役に立った。
同じような水系統の女の子たちと一緒に魔法薬を作ったり、新しい魔法薬の実験をしたり、ときどき系統魔法の指導も頼まれるときがある。
ディアスに教えられたことは勝手に教えられないけど、水系統の魔法ならば多少は教えられるのでそれも友人作りに役に立った。

『精霊』のディアスの弟子。
その立場がどれだけ周囲の嫉妬と羨望の的なのか、私は学院に来てから肌で感じ取った。
優秀な魔法指導者として名高い反面。
ディアスから教えを受けた者は少ない。
しかもそのほとんどが教えを受けた後、飛躍的に成長している。
妹姫のベアトリス殿下はもうわたしと同じ水のトライアングルで

実戦訓練すらこなすらしい。
魔法衛士隊のワルド子爵はディアスの教えを受けてディアスに心服、その後魔法衛士隊最強と呼ばれるほどになった。
私は落ちこぼれ扱いから一転、水のトライアングルになった。
また魔力制御に熟練したおかげで魔法薬調合の腕も飛躍的にあがり、かなり上級の魔法薬すら作れる。
『精霊』のディアスの弟子。
それは一種のステータスであり、エリート扱いさえ受ける羨望の的なのだ。
当然嫉妬という感情もつきまとう。
私が入学当初、周囲からやや浮いた存在だったのはディアスに親しかったからだけじゃない。
ディアスの魔法の生徒という事への嫉妬もあったと思う。
私は周囲との融和に努めることで向けられる嫉妬の感情をなんとか回避した。
魔法薬の調合法を惜しげもなく教え、頼まれれば魔法も教える。
さすがにディアス直伝の理論や技術は勝手には教えられないと断っているが、系統魔法のアドバイスくらいなら引き受けている。
その結果魔法が上達した子もいて、周囲からは『名門貴族で、親しみやすい子』として認知された。

最近一つ考えていることがある。
ディアスと私との間で周囲に秘密にされていること。
精霊の使命。
あれはどうなったのだろう。
聞いてみたいけど他人の耳のある場所で口に出せることじゃない。
二人っきりになったら聞いてみようと思うけど、なかなか機会がない。
いずれディアスからなにか言ってきてくれるのではないか。
私たちは仲間なのだから。

……そういえばルイズはどうなのだろう。
同じ魔法の生徒だけど、彼女は知っているのだろうか？

・ルイズ視点・

ふぅ、思わずため息をつきたくなるわ。
授業も真剣に受けて、毎日特訓もしているけど相変わらず系統魔法は全滅だわ。
使えるのは爆発魔法とコモンマジック。
あとは魔力制御法だけね。
それだけでもたぶん普通のメイジよりも強い気がするのだけど。
諦めてはダメよね。
なんとか在学中に系統魔法を最低一つは使いこなしてみせるわ。
最初の頃は周囲から系統魔法が使えないと陰口をたたかれていたけど、授業で爆発魔法を縦横無尽に駆使して見せたら誰もなにもいわなくなった。
教師でさえ、文句を言わなくなった。
どうも私の爆発魔法はすごいらしい。
お母様も私の爆発魔法は普通の魔法と違っていて避けにくいといっていたし……その割にはひょいひょい避けて私を蹴り飛ばしていたけどね。
ディアスにも相談したけど、ディアスでもわからないらしい。
ただ私は四大の精霊にやたら嫌われているらしいと聞いた。
精霊の加護を得ているだけあってディアスは精霊のことがわかるらしい。
……別に嫌われる覚えはないんだけど。
系統魔法が使えないおかげで、友達もできないし。
最近、仲のよい友達ができたらしい仇敵のツェルプストーはここ

ぞとばかりに「友達もできないの？　かわいそうね。私がなってあげよっか？」などとニヤニヤと笑いながら嫌みをいう。
ふん。
私だって友達ぐらい……。
えっとディアスは友達よね？
あと、モンモランシーも一応魔法の訓練で顔を合わせるし。
と、友達ぐらいいるんだから！

広場を一人で散策していると不意に人だかりに巻き込まれた。
どうやらケンカらしい。
どっかの男子生徒が二人、杖を構えて向き合っている。
危ないわね。
どうせやるなら人のいないところでやりなさいよ。
周囲の人だかりはどうやら野次馬らしい。
盛んにはやし立てたり、やる気のない仲裁の言葉をおくったりまとまりがない。
どうしよう。
二人まとめて吹き飛ばして終わらせようかしら？
でもそれだと私が恨まれそうね。
野次馬の中に憎き赤毛の色気女とその連れの青い髪のちびっ子を発見。
ツェルプストー……いるんなら止めなさいよ。
あんた強いでしょうが。

・キュルケ視点・
「ねぇ、どっちが勝つと思う？」
「興味ない」
私の問いに小さな親友は心底どうでも良さそうに答える。

「決闘は禁止なんだけどケンカならいいのかしらね？」
「それは屁理屈。私闘も禁止のはず」
「どっちにしろこんな目立つところではじめるなんて馬鹿よね。あとでこっそり白黒つければいいのに」
「それに周囲に被害が出るかもしれない。彼らはまだ未熟」
「そうなったら止めましょうか、二人でやれば楽勝でしょ？」
「私たちなら無力化は容易。でも今手を出すと余計な恨みを買う」
「それは面倒ねぇ」
「面倒」
相変わらずタバサとの会話は楽しい。
普段がやたらお世辞を並べ立てる男ばかり相手にしていたから、口数少なく要点のみを話す会話が楽しく感じる。
お互いににらみ合いの状況から、ついに一方が魔法を使った。
ドットランクの火の魔法だ。
しかしそれは明後日の方向に飛んでいく。
呆れるほどへたくそね。
不意にタバサが緊張するのを感じた。
その魔法は一人の女生徒の方向へ飛んでいく。
私は無意識に杖を握り、間に合わないと悟った。
瞬間、その場に忽然と一人の男子生徒が現れた。ように見えた。
金色の髪の同学年の生徒。
彼は左手の拳で飛んでくる火の玉を殴りつけた。
すると炎の魔法はあっさりと消滅してしまった。
続けて右手の人差し指を二人の男子生徒に向ける。
すると男子生徒たちの手から杖が吹き飛ばされた。
……いまの、なに？
拳で炎の魔法を無効化。
さらに指さしただけで、相手の杖が吹き飛んだ。
「ね、ねえ。あなたにはなにが起こったかわかった？」

タバサに尋ねると彼女はその視線を乱入してきた金髪の男子生徒に向けたまま答えた。
「左の拳に魔力を集中させて、飛んできた魔法を無効化したように見えた。その後、右の指先から魔力の弾丸のようなものを二発飛ばして杖をはじき飛ばした……ように見えた」
「変わった魔法ね。初めて見るわ」
「わたしも初めて見た。呪文を唱えずに魔法を使うなんて非常識」
え、呪文を唱えなかったって？
嘘でしょ？
そういえば彼、杖をもってさえいない。
「嘘でしょ？　彼、何者？」
「あれがクルデンホルフの天才『精霊』のディアス」
改めてみると、まさにディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフその人だった。
天才ときいていたけど、ここまで常識外れとは……。
「アレ、あなたできる？」
少なくとも私は無理だわ。
「魔法を防御するのはできるかもしれない。でも無詠唱で魔力を打ち出すのは無理」
「……防御のほうはできるのね」
「できるかもしれないだけ、実戦ではまずやらない」
「なぜ？」
「危険すぎる。よほど自信がなければあんな無茶な防御方法はできない」
確かに素手で魔法を殴りつけるなんて、普通できないわよね。
その後、『精霊』のディアスの仲介で二人のケンカはお開きとなった。
彼の言葉を要約すると『場所を選べ、他人に迷惑をかけるな』だった。
知らないところでこっそりやる分には止めないというか、むしろ

煽っていたわね。
じっとディアスを見つめるタバサにわたしは思わずからかいの言葉を投げかけた。
「どうしたの？　彼の勇姿に心奪われたかしら？」
「……彼が欲しい」
この子の呟いた言葉にわたしは硬直した。
なんと。
異性どころか他人におよそ無関心なこの子が「彼が欲しい」なんて情熱的な言葉を吐くなんて！
「任せなさい！　恋の情熱はツェルプストーの得意分野よ。必ずタバサに彼の心をつかませてみせるわ！」
ふふふ、なんて心が沸き立つのかしら。
他人の恋路でこれほど胸の炎が燃えるとは思わなかったわ。
さて、どうやって墜とそうかしら！

・タバサ視点・

彼の力が欲しい。
切実にそう思った。
別に彼に復讐の手伝いをして欲しいわけじゃない。
けれど彼の魔法を習得すれば、それは必ず力になるだろう。
魔力を込めた拳一つで弱いとはいえ魔法を無効化した技術。
杖もいらず。詠唱の隙もない魔法。
欲しい。
彼のあの力が欲しい。
その思いが思わず口に出てしまった。
するとなぜかキュルケが狂喜した。
「任せなさい！　恋の情熱はツェルプストーの得意分野よ。必ずタ

バサに彼の心をつかませてみせるわ！」
なぜ？
なぜそうなるの？
疑問を口に出す暇もなくわたしはどうも思い込みが激しいらしい親友に引きづられていった。

・ギーシュ視点・

な、なんだったんだあの魔法は？
シンシアとの約束の場に来たら、なんだかケンカ騒ぎになっていた。
しかもそのシンシアが危うく下手くその魔法で怪我をするところだった。
そこへまるで瞬間移動のような速さで割り込み、飛んできた魔法を消し去り、ケンカしていた二人の杖をはじき飛ばして無力化して見せたディアス殿下。
なんとも、言葉が出ない。
僕は慌ててシンシアに駆け寄り無事を確認するが、シンシアは呆然とディアス殿下を見つめていた。
「無事でなによりです。でも今後はこういう危ない場所に近づかないようにね」
ディアス殿下はシンシアにそう言い残し後のことは僕に任せて去って行った。
なんというか、かっこいいな！
シンシアなんか頬を染めてディアス殿下の後ろ姿に見とれているぞ？
ああ、なんというか恋愛関係においてディアス殿下は僕の天敵なのだろうか？

そんなことはともかく。
あの魔法はすごい。
できれば僕も習いたい。
けれど魔法の指導を希望した連中は軒並み断られているらしい。
僕が頼んでも無理だろう。
多少面識はある。
グラモン家はクルデンホルフ大公派だから、あの家のパーティにはよく呼ばれていた。
僕も何度か参加し、ディアス殿下とご挨拶した。
しかしその程度のつながりではとうてい了承してくださるとは思えない。
……そうだ。
モンモランシーはディアス殿下の生徒だ。
彼女ならあの魔法も知っているかもしれない。
彼女に頼もう。
彼女に教えてもらうか、あるいは彼女からディアス殿下に弟子入りを取り次いでもらえればもしかしたら上手くいくかも。
そうと決まったらさっそくモンモランシーに頭を下げて頼まなければ。
シンシアは……うっとりとディアス殿下が去って行った方向を見つめているね。
これはもうデートどころではないね。
部屋まで送って、それで終わりだな。
はぁ、彼女までディアス殿下に入れ込んだらどうしよう。
正直勝てる気がしないのだがね。
まぁ、今は女の子のことよりあの魔法のことが大事だろう。
まずはモンモランシーを説得しなければ……。

二十章　学院の生徒（後書き）

うちのキュルケは男漁るよりもタバサを愛でる方が楽しいそうです。
滅多に弟子をとらない高名な指導者の弟子って、普通に考えて苦労しそうですよね？　というわけでモンモランシーもがんばっています。
ルイズはまぁ、あまり周囲を気にする子じゃなさそうです。
友達が少ない？
原作初期はたぶん一人もいなかったのでは？
気にしなくてもだいじょうぶですよね。たぶん。

うちのギーシュはそこそこ頭が回ります。
けれどやっぱりギーシュです。モンモランシー好き、女の子大好きです。

知らない間にタバサとキュルケに非常識の烙印を押される主人公。
うん、存在自体がすでに非常識ですよね。

自分から動かなくても周りが勝手に物語を進めて巻き込んでくれる。
やっぱりうちの主人公は巻き込まれ型かな？

ご都合主義と笑えば笑え、されど見よ！　このメカニック！　……メカじゃないけど。
作者はご都合主義も劇場版ナデシコも大好きです。

追記　間違って一学年下のケティを登場させてしまいました。
修正してシンシアというオリジナルキャラにしました。
今後登場するか未定です。

ご指摘ありがとうございます。
あと〇〇視点のフルネーム表記をやめました。

二十一章　新しい生徒たち

・モンモランシー視点・

困った。

目の前で必死に熱弁を振るっている人物を見て、どうしたものかと考える。

「……モンモランシー、僕は強くなりたい。そのためにぜひディアス殿下の魔法を習いたい」

自分がどれほどディアスの魔法を見て心を動かされたか。

その憧れと魔法への情熱を熱心に語る友人に私はため息をついた。

つまりはディアスの弟子になりたい。

そのために私の口添えが欲しい。

そういうことだった。

この手の申し出は、別に初めてのことではない。

似たようなことを遠回しに他の生徒たちからも多く頼まれた。

なるべく穏やかに断っていたが。

ディアスが滅多に弟子をとらないことはすでにみんな知っているのだから。

「ギーシュ。そんなにディアスに魔法を習いたいならば、自分で頼んだら？」

「僕程度が頼んだところで相手にされないかもしれないじゃないか」

ギーシュ・ド・グラモン。

この私の友人はそんな情けないことを胸を張って言った。

「顔見知り程度の僕だけで頼むよりも、君の口添えがあったほうがきっと上手くいくよ」

グラモン家の四男で昔から、私とはなにかと親しい。

だからディアスの生徒である私から口添えを。

ということらしいが。

ディアス自身が、自分が気に入るかよほど親しい相手でもない限り面倒見切れないとこぼしているのだ。

どうやら無責任に魔法の指導を頼む生徒たちにうんざりしているようだった。

どうもディアスに教われば手軽に魔法の腕前が上達すると思われているらしい。

そんな彼らがディアスのある意味常識外れな魔法理論を受け入れられるだろうか？

あきらかに系統魔法とは異なる魔法技術を抵抗なく身につけられるだろうか？

正直ディアスに師事を望む大半の生徒はディアスの思想や指導について行けずに落ちこぼれると私は見ている。

ディアスの教えは独創的で常識外れ、しかも指導は厳しい。

お手軽な魔法の家庭教師程度の認識では、正直あっという間に挫折するだろう。

正直魔法の指導をしているときのディアスは怖い。

貴族の子供としてちやほやと魔法の手ほどきを受けただろうクラスメイトたちがあのディアスの迫力に耐えられるだろうか？

普段の優しいディアスしか知らない女の子なら泣き出しかねないし、男子でもよほど根性がなければ萎縮するか反発するかだろう。

「ディアスの指導の厳しさははっきりいって授業の比じゃないわよ？　根性なしのギーシュなら一日で逃げ出すかもね」

「なにをいうモンモランシー。君は僕を誤解している。僕は確かにいい加減なところもあるがこれと決めたことはなにがあってもやり抜く男だ。たとえば女の子のこととか」

最後の一言が余計ね。

「あっちこっちの女の子に声をかけているらしいけど、今に痛い目に遭うわよ？」

「それは僕の生き様というものだ。いくらモンモランシーでも変え

ることはできない」
ふっと気障ったらしく笑う。
これでもう少し性格がまともなら普通にもてるでしょうに。
「正直ディアスが新しい生徒を迎え入れるとは思えないのだけど」
「そこは僕の熱意と情熱で説得する。口添えが無理なら、君は僕を紹介してくれればいい。あとはもし断られても君の責任ではないし、君に迷惑をかけることもしない」
あら、一応自分で説得する気だったのね。
他の子たちはそこら辺まで私任せだったのよね。
なんとかして説得してくれって。
少しこの友人を見直す気になった。
一応熱意はあるらしい。

「紹介するだけならいいけど。一応あなたもディアスと面識があるから見知らぬ他人を連れてきたと怒られることもないでしょうし」
ふとギーシュは眉をしかめた。
「ディアス殿下は君を叱るのかい？」
「しょっちゅうよ。訓練が上手くできなかったり、集中できなかったりすればすぐに叱られる。この間訓練を見学したいと押しかけてきた子たちを連れて行ったら後で怒られたわ」
見学だけでもと食い下がるから連れて行ったのに、その場で弟子にして欲しいと頼みはじめるのだもの。
ディアスは「なんで見知らぬ他人を僕が鍛えなければならないんだ？」と私の目を見つめながら微笑んだ。
恐怖で腰が抜けるかと思ったわ。
ディアスなら視線だけできっと敵を殺せると確信したわよ。
「どうやら本当に厳しいらしいね。普段の殿下からは想像ができないが……とりあえず紹介はしてもらえるのかな」
「紹介だけよ？　私はなにも口添えなんてしないからね」
「かまわないよ。紹介してもらえるだけでありがたい」

たぶん無理だと思うけど。
まぁ、一度きっぱり断られればあきらめもつくでしょう。

・キュルケ視点・

「どこへ行くの？」
「いいところよ。下調べはばっちり、ヴァリエールは口が軽いから」
不審そうなタバサの手を引いて、放課後に学院外れの場所へ向かっていた。
ヴァリエールを適当にからかって情報を引き出し、ディアス殿下が放課後訓練する場所を突き止めた私はこうしてタバサを引っ張ってそこへ押しかけるつもりだ。
まずはタバサとディアス殿下の距離を縮める。
目下のライバルはおそらくモンモランシ伯爵の娘とヴァリエールね。
彼女たちが女生徒の中でも特にディアス殿下と親しい二人。
そこへタバサを放り込む。
タバサもディアス殿下の生徒にしてしまいディアス殿下との距離を詰め、かつ親しくなり、一緒にいる時間を増やす。
道中でそうタバサに説明するとこの子も目を輝かせた。
「彼の魔法を習えるの？」
「まずはそこから彼を攻略するわ。まずは懐に入らないとね」
本好きの趣味を利用することも考えたけど、それだと魔法の生徒という特殊な立場の二人に勝てないかもしれないのよね。
魔法の生徒兼本好きの同士……これよ。
後は時間をかけてゆっくり距離を詰めていけば墜とせるはず。
「任せなさい。必ず彼をあなたのものにしてみせるわ！」
「……だから違うって言っている」

そんな恥ずかしがらなくっていいのよ？
恋をするのは普通のことだもの。
国が違う？
もしかしたら身分違い？
そんなこと関係ないわ！
むしろ障害がある方が恋の炎は燃えさかるのよ！
「恥ずかしがらなくていいのよ！　あなたは十分に魅力的なのだから自信を持ちなさい！」
「あなたはもっと人の話を聞くべき」
ああ、他人の恋路って結構楽しいわ！

・ディアス視点・

いつもの通りに放課後の訓練に来ると、いつもと違う光景があった。
「ディアス殿下！　ぜひ僕をあなたの弟子にしてください！」
えーと、確かグラモン家の、ギーシュだっけか。
確かうちのパーティで見かけたな。
「モンモランシー？」
軽く彼の隣に立つ少女に視線を向けると彼女はびくりと全身を震わせた。
そんなに怯えなくてもいいじゃないか。
ちょっと傷つくぞ？
「えっと……彼がどうしてもディアスに紹介して欲しいとお願いしてきたので連れてきたの」
「以前も似たようなことがあったね」
「そ、そうね」
「その時僕はもう二度とこのようなことはしないでくれといったね。

それで君はなんと答えたかな」
モンモランシーが沈黙した。
「ディアス殿下！　彼女を叱らないで欲しい。僕が無理矢理頼んだことです」
一歩前に進み出てモンモランシーを庇う。
おお、かっこいいね～。
パーティで見かけたときはあまり印象に残らなかったが、こうしてみると意外に根性が座ってそうだ。
「つまりすべての責任は自分にあると」
「はい」
断言したよ。躊躇なく。
ふむ、意外といい人物なのかな？
「僕の弟子になりたいというけど、僕の弟子になってなにを学びたいのかな？」
「昨日のケンカ騒ぎ、アレを止めた魔法。あれを学びたいのです」
ああ、あの時つい魔力制御法を使っちゃったんだよな。
精霊魔法をつい使っちゃうよりかはましだけど、少し不用心だったか。
魔力制御法は一般的な魔法ではないのだから。
「それに僕はいまだドットクラスのメイジです。ゴーレムの扱いには自信がありますが正直伸び悩んでいます。殿下の指導を受ければより腕を磨けると思ったのです」
ドットメイジ。もっと魔法が上手くなりたい。殿下の指導を受ければきっともっと上手くなれるはず。
学院に来てから聞き飽きた台詞だ。
「魔法の技術を習いたいのならば教師に頼めばいい。そのための学院ではないのですか？」
「しかし学院の教師はあのような魔法を教えてくれない」
「あれは一般的な魔法ではない。身につけたところで自慢にはなりませんよ。あんな魔法を身につけてどうしようというのです？」

ギーシュはふと目の色を暗くした。
「僕は大切な人を、いざというときに守れる力が欲しい。だけど今の僕ではあまりにも弱すぎる。殿下に鍛えていただきたい」
彼は……目的を持って魔法を習い、そして強くなりたいのか。
目的も理由もなく、ただ見栄だけでメイジとしてのランクを上げたいとほざく馬鹿どもよりはずいぶんましだ。
それにさすが土のグラモン家。
精霊に好かれているね。特に大地の精霊に。
やはり血統とかそういうものも影響するのかな？
水のモンモランシ家のモンモランシーも素質があるが、土のグラモン家のギーシュもそれには劣るが素質はある。
精霊使いとしての素質が。
生徒にして鍛えたところで仲間になるとは限らない。
だけど才能があるのなら、仲間になる可能性があるのなら。
手元に置いて鍛え、親しくなるべきだろう。
人格面も悪くない。
トリステイン貴族の坊ちゃんとしてはましな部類だろう。

どうしたものか。
大切な人を守るために力を求める。
そんな人間は世界の危機を知ったときにどうするだろう。
大切な人のそばにいて離れないだろうか。
それとも危険を覚悟で戦いに身を投じるだろうか？
「もし、大切な人の身に危機が迫るとしたら、君は大切な人を守るために戦うのだろうか？」
それは独り言のようなものだった。
しかしモンモランシーはなにかに気がついたようにこちらを見つめ、ギーシュは真剣な顔で答えた。
「その時には僕は杖をもって戦うでしょう。たとえどれだけ非力だろうとも」

よし、味方にするべきだろう。
少なくとも味方にする努力はするべきだろう。
彼を生徒とし、鍛え、信頼を得て味方にしてしまえばいい。
戦う決意があるのなら、僕の立場としては歓迎すべきだ。
たとえまだなにもわかっていなかったとしても。
「いいだろうギーシュ、君に魔法の指導をしよう。君が守りたいものを守れるように」
「は、はい！　ありがとうございます！」
モンモランシーと他人事のように様子を見ていたルイズが少し驚いた顔をする。
てっきり断って追い返すものと思っていたのだろう。
僕もそうしようと思った。
けれど僕には仲間が必要だ。
いずれ来る戦いの仲間が。
その仲間になる可能性のある人物に恩を売るのもいいだろう。
「おもしろそうなことやっているわね。私たちも仲間に入れてくれないかしら？」
その声に振り返ると二人の女生徒がいた。
赤い髪の炎の精霊をまとわりつかせた女生徒と、図書館で会った莫大な風の精霊を身にまとう小さな少女タバサ。
今日は客の多い日だな。
しかもタバサもそうだが、あの赤い髪の女生徒も相当な素質持ちだ。
たしかゲルマニアの留学生だったかな……。

・タバサ視点・

隠れて様子をうかがっていると、ギーシュという名の男子生徒が

彼に弟子入りしたようだった。
うらやましい。
彼は滅多に弟子をとらないと聞いている。
いったいなにが彼の心を動かしたのだろう？
そんなことを考えているとキュルケに引っ張られて彼らの前に姿を現していた。
「おもしろそうなことやっているわね。私たちも仲間に入れてくれないかしら？」
キュルケの言葉に桃色の髪の小柄な少女が噛みついてきた。
「ツェルプストー！　なんでこんなところにいるのよ！」
「散歩よ。ただの散歩。まぁ、なんて偶然！」
「嘘おっしゃい！　そういえば私からここを聞き出していたわね？　ディアスの生徒になるのが目的だったのね！」
「だとしたらなに？　あなたにとやかく言われる筋合いはないわ、ヴァリエール。私たちが用があるのはディアス殿下、あなたじゃないのよ」
確かに彼女には用はない。
しかしなんでこう仲が悪いのだろう。
そういえば家同士仲が悪いと聞いたような気もするけど……。
「そちらも生徒希望ですか、今日は多いですね」
「ええ、あなたの魔法に興味がありまして。先日の活躍は拝見いたしましたわ」
「我ながらうかつでしたね。つい手が出てしまったけどこう面倒な事になるとは」
「あら女性に言い寄られるのは殿方にとって名誉なことですわ。面倒ごととはあんまりです」
「目的は僕でなくて、僕の魔法でしょう？」
「ええ、もちろんあなたにも興味がありますわ。クルデンホルフの天才。『精霊』のディアス」
「それは光栄ですね。そういえば自己紹介をしていませんでした。

たぶんご存じでしょうが僕はディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフです」
「ご丁寧にどうも私はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーですわ。ゲルマニアからここへ学びに来ましたの」
「野蛮なゲルマニアの女なんか相手にすることないわ。さっさと追い返して訓練をはじめましょう！」
「あらあら、歴史と伝統しか取り柄のないかび臭いトリステイン貴族がなにやらうるさいですわね。もちろん殿下は別ですわ。クルデンホルフ大公国は本国のトリステインとは比べものにならないほど繁栄しているとか」
「成り上がりのくせに！」
「黙ってなさい！　家柄しか取り柄のないおちび！」
「な、な、な、なんですってぇ！」
二人はそのまま激しい口論をはじめてしまった。
彼は少し肩をすくめるとこちらに問いかけた。
「ケンカを売りに来たわけではないでしょう？　目的はなんです？」
「あなたの魔法を教えて欲しい」
「僕がそういう申し出のほとんどを断っていることをご存じで？」
「知っている。だけど目の前でその例外が起きた」
あの金髪の男が認められて、私が認められないとしたらその理由はなんだろう？
彼は少し皮肉げに金髪の男を見やり、ため息をついた。
「僕は、本来面倒くさがりなんです。魔法の指導が大好きというわけではない。だからあまり大勢に教えるなんて面倒きわまりないのです」
「でも彼は受け入れた」
「そうですね。なんとなく気に入ったので」
「わたしは……だめ？」
理由が本当になんとなくなら、彼の気分次第ということになる。

「あなたはなんのために魔法を習うのです。言っておきますが僕の魔法は普通の魔法とはだいぶ違います。身につけてもあまり褒められることはない。むしろ下手をすれば異端扱いかもしれませんよ？」
「それでもかまわない。わたしは力が欲しい」
「力ですか？　なんのために」
復讐のことは言えない。
わたしの事情は話せない。
それでも嘘やごまかしでは通らない。
なんと答える？
この答えですべてが決まってしまう。
そんな予感があった。
「……わたしが生きるために」
嘘ではない。
力がなければわたしは生き残れない。
力がなければ本国からの過酷な任務をこなせない。
任務がこなせないということは、つまり任務に失敗して死ぬということだ。
わたしは力がなくては、生き残れない。
彼は少し驚いたようだった。
「生き残るためですか……戦って生き残ろうと思ったら、力は欲しいですからね」
どこか自嘲するようなつぶやきだった。
ふと、彼はわたしの同類ではないかという気がした。
学院にいる平和に生きる学生メイジとは違う。
命を賭けてやるべき事があり、そのために力を望む人間。
彼もそういう人間なのだろうか？
「どうか、わたしに生き残る力を教えて欲しい」
わたしは自然に彼に頭を下げていた。
彼はおそらく、わたしが頭を下げ教えを請うに値する人物だと直感が訴えていた。

「いいでしょう。僕の力をあなたに教えましょう」
顔を上げるといつもの穏やかな笑顔ではなく、どこか冷たく光る目がわたしを見つめていた。
一瞬、背筋に寒気が走った。
その感情は、恐怖。
わたしは確かに彼に一瞬恐怖した。
その瞳に感じさせる底知れなさ、その深淵の深さを感じ、恐怖した。
そして安堵してもいた。
やっぱりだ。
彼はわたしと同じだと。
少なくとも彼は平和の中で平穏に生きている人間ではない。
おそらく彼しか知らない戦いの中で、生き抜いていこうとする人間だ。
それがどんな戦いなのかはわたしにはわからなかったけど。
彼は信用できる。
少なくともわたしに利用価値がある間は彼はわたしを裏切らない。
彼は情や気まぐれで生徒を集めているのではないだろう。
おそらく彼の目的のために、必要な人物を集め、鍛えているのだと直感した。
あんな目をする人間が何の意味もなく自分の魔法を、自分の手札を他人に教え与えるはずがない。
わたしを生徒とするのも、おそらくわたしになんらかの価値を見いだしたためだろう。
トリステイン一の大貴族の娘。
自分の家の派閥でありトリステインの名家の娘。
同じく自分の家の派閥でありトリステインの軍事を代表する家の息子。
そしてわたし。
おそらくゲルマニアの有力な貴族であるキュルケも彼は生徒に迎

えるだろう。
顔ぶれを見ただけで、偶然集めた人材とは思えない。
あきらかにトリステイン有数の貴族の子供を集めていた。
わたしは、あるいはなにかしら事情を察したのかもしれない。
彼はわたしがガリア出身だということは知っている。
ならばガリアの有力な貴族と思ったのか？
わからないが、彼はなにか目的を持って生徒を集めている。
そしていずれわたしたちを自分の目的のために使うだろう。
それはかまわない。
その時わたしは交換条件として、お母様の治療を持ち出すだけだから。
利用されたとしても、わたしも彼を利用する。
それでいい。

・ディアス視点・

なんとまぁ、あれほど悲観していた精霊使いの素質を持つ仲間集めがなかば達成されてしまった。
あれからタバサが生徒になったと知ったキュルケも生徒になった。
風の精霊に異様な適正を見せるタバサ。
水の精霊の交渉役であるモンモランシー。
炎の精霊に愛されているとしか思えないほどの適正を持つキュルケ。
昔からの僕の生徒で適性の高いルイズ。
土の精霊との相性のいいギーシュ。
これで五人。
そしてワルドからも知らせが来ている。
つきっきりで教えたのはわずか数日でしかないが、その後自己鍛

錬を続けついには系統魔法並みに精霊魔法を扱えるようになったらしい。
これで六人。
一人抜けたとしても五人。
二人抜けても最低人数はそろう。
ワルドは精霊魔法の習得に成功した。
ならばこれから教える僕の仲間も精霊魔法を習得できる可能性は高い。
素質なら全員ワルド以上のものをもっているのだから。
問題はどうやって事実を明かし僕の仲間に引き込むかだ。
基本理論と魔力制御法の訓練をしながら信頼を得て、時期を見て説得するか。
基本的にそれしか手がない。
戦いなど嫌だと拒否されればそれまでだが、無理強いはできない。
しかしこのメンバーなら事情さえ納得してもらえれば引き受けてくれるのではないかと期待してしまう。
モンモランシーはもともと事情をある程度知っている。
あの時僕の仲間になるといった言葉に嘘がなければ、おそらく事情を話せば協力してくれるだろう。
ルイズは誇り高い。
そんな危機があると知れば逃げるなどできないだろう。おそらく立ち向かうはずだ。
ギーシュは大切な人を守るために力を求めた。
世界の危機を放置すればその大切な人も守れないのだから、協力してくれる可能性はある。見かけよりも根性はありそうだし。
わからないのはタバサとキュルケ。
タバサはなにか思い詰めたところがある。
生き残るための力。
つまり力がなければ命の危機がある環境に彼女は生きていることになる。

まるで歴戦の戦士のようなそんな気配さえある。
彼女の信頼を得ることができれば、強力な味方になってくれるかもしれない。
キュルケは友達思いの女性に思える。
タバサがもし味方になれば、そのタバサを放って自分だけ逃げられるだろうか？
一緒に来てタバサを守ろうとするのではないか？
世界のためというより友達のために、彼女の協力は期待できないだろうか？

あせってはいけない。
僕は必死に自制する。
まだ彼女たちは僕の魔法の生徒になるのを望んだだけだ。
世界の危機に立ち向かう覚悟などないだろう。
僕は彼女たちの信頼を得て、協力してもいいと思わせなければならない。
当分は魔法の教師役を懸命にこなすことになるだろう。
僕自身の訓練もだいぶ目処がたった。
精霊魔法の実戦使用を想定した使い方。
そして神聖魔法の習得。
順調に進んでいる。
あせらず、ゆっくりと。
けれど確実に進む。

まずはモンモランシーに事情を打ち明けよう。
仲間になるとしたら、おそらく彼女が一番に理解してくれるはずだ。
精霊の使命を受けたその場に居合わせ、その時に僕と共に戦うことを決意した彼女なら。
きっと誰よりも理解してくれる。

けれど戦いに向いているとはとても思えない少女だ。
まだ、わからない。

二十一章　新しい生徒たち（後書き）

主人公がなにもしなくても、生徒が集まってきましたの回。
まだ仲間じゃないんですけどね。

魔法指導者として有名だけど、生徒数は少なく、ほとんどの人は断られている。
理由、『別に先生がやりたいわけじゃないし』
基本あんまりそういうことに熱意のないディアス君です。
使命さえなければただ図書館にこもって本を読む学生生活を送ったことでしょう。

ディアスに同類の雰囲気を感じたタバサ。
タバサとディアスではだいぶ違うのですけど、他人に言えない使命を持っていてそのために戦っているのは同じだと思うのです。
タバサはジョゼフ王への復讐と母の救済。
ディアスは世界の危機回避のための悪魔退治。
それぞれ普通の学生ではありませんから、なにか感じるところがあったのでしょう。

でもタバサの復讐は、この作品で果たされるかどうか。
本筋の物語から外れますし、たぶん無理じゃないかなと。
というかそこまで書けないよ？　そんなところまで脱線したら修復不能だよ？
物語が破綻するわ！
……というわけでタバサの復讐は、そのうち諦めてくれないかなと思っています。
無理っす。悪魔退治の片手間にあのジョゼフさんの相手はつらいです。

むしろ味方に欲しいぐらいですよ。ジョゼフさん。
僕はタバサも好きですが、ジョゼフ王もわりと好きです。
あの人も公式チートですよね。
主に頭脳面で。

二十二章　責任の重さ（前書き）

仲間加入イベント開始です。

二十二章　責任の重さ

・モンモランシー視点・

急にディアスに二人で話したいことがあると言われたとき、私はついに来たと覚悟した。
ディアスの部屋に行く前に、自室で髪の乱れはないか、服装は問題ないかなどあれこれ悩んだ。
あまり意味はないけど。
彼と二人っきりで会うなど久しぶりのことなので少し舞い上がってしまったのだ。
男子寮の彼の部屋に行き、部屋で待っていたディアスと会う。
性格が出ていそうな几帳面に整理整頓された部屋。
そこで話された内容に私は驚愕した。
私の目の前で精霊から使命を受けたディアス。
その使命を果たすために風の精霊と対面し、風の精霊の暴走の原因を知る。
暴走ではなく、外敵に対するための力の強化。
それが精霊の力のバランスが崩れた原因だった。
現在風の精霊が封じているその敵の排除。
それこそが現在ディアスが背負っている使命だった。
その敵は強大で、風の精霊すら滅ぼすことを断念した存在だという。
ディアス一人ではとうてい勝てない相手だと。
精霊たちはディアスに助言をした。
仲間を集めろ。仲間を集めて精霊の魔法を教えろと。
最低でも四人の仲間に精霊の魔法を教え、四大の精霊の力を借りてその敵の力を押さえ込み、滅ぼす。
系統魔法の通じない敵。

系統魔法はディアスの説明によれば魔力により様々な現象を起こす魔法。
つまりスクエアクラスの魔法であっても、精霊などの視点から見ればそれは自然現象の一つの形に過ぎないらしい。
その敵に通常の現象や武器など通じない。
倒すためには神の力でも借りるか、この世界を司る神である精霊の力を借りるか、あるいは魔力でもって戦うしかない。
普通のメイジでは勝てない敵。
ディアスとその仲間たちにしか対処不能な敵。
「それが僕の敵である『悪魔』だ」
ディアスはそう説明を締めくくった。

ディアスでなければ戦えない。
でもディアス一人では勝てない。
そのために仲間が必要。
つい先日のことが思い出される。
「じゃあギーシュたちを生徒として認めたのも、仲間集めのためなの？」
「僕の生徒たちは君も含めて精霊魔法に高い適性がある。ギーシュもタバサもキュルケもだ。だから生徒として認めた。いつか仲間に加えられる可能性を考えて」
私は長い間心の奥で思ってきたことが事実だったことを確信した。
ディアスは才能がある。
ディアスは責任感がある。
ディアスは優しい。
けれどその反面、目的のためなら他者を利用するような冷たい側面ももっている。
水の精霊に使命を受けたときに、まず私を交渉役に指名したのがなによりの証拠だろう。
それによってディアスはモンモランシ家に莫大な恩を売った。

ただの好意だったとは幼い頃はともかく、今では思えない。
あきらかに彼は大公家の跡取りとしてモンモランシ家に恩を売る機会を逃さなかった。
それは彼の立場を考えれば悪い事ではない。
彼はいずれクルデンホルフ大公国を継いで、一国を守っていく存在だ。
優しいだけ、責任感があるだけ、才能があるだけではつとまらない。
冷徹に他者を利用し、場合によっては蹴落とすようなこともしなければならない。
貴族とは、特に大貴族とはそういうものだと私は理解していた。

ほんの少しの寂しさがすきま風のように胸に冷たい風を吹き付ける。
私も、彼にとって目的を果たすための駒なのだろうか？
そう思われているとしたら、それはとても悲しくて、思わずなにも考えずに彼を責めてしまいそうなほどつらい。
でもそれでもいいと思う自分もいる。
もともと自分から協力をいいだしたのだから、利用されようともむしろ望むところだ。
徹底して彼の役に立つ手駒になってやる。
私はディアスが好きだ。
愛していると断言できる。
でもディアスは？
おそらく私の好意には気がついているだろう。
ときどき戸惑った顔でこちらを見ることがあった。
どうしたらいいかわからないというように迷い。
結局なにもしないで微笑んでいた。
おそらく、好意は持ってくれているだろう。
けれどきっとそれだけだ。

ディアスは私を女性として求めていない。
友人として、仲間として求めている。
せつない。
身を切られるように苦しい。
私をもっと見て欲しい。
私をもっと知って、私を求めて欲しい。
モンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシはあなたに恋い焦がれる女なのだと叫びたい。
想っているだけでもよかった。
ただ愛して、恋い焦がれているだけでも満足できた。
でも、こうしてすぐそばに彼がいると。
ほんの少し勇気を出せば彼の身体に抱きつき、唇を重ねられる場所にいると想いが抑えられない。
トリステイン女性は貞淑でなければならない？
そんなもの犬にでも食わしてしまえ。
ほんの少し勇気を出すだけで彼が愛してくれるのなら、私は喜んで淫らな女に成り下がろう。

私の中で、これはチャンスだとささやく声がある。
彼は他の誰にも容易には打ち明けられない秘密を私に打ち明けた。
おそらく私の協力が欲しいのだ。
ここで協力を約束すれば、私は彼にとってただの友人より特別な存在になるだろう。
いや。
協力と引き替えに彼に望むことだってできる。
将来の大公妃の立場を、婚約者という立場を、生涯彼のそばで添い遂げられる立場を要求することさえできるだろう。
それほど彼にとって協力者の確保は重大な問題のはずだ。
今なら、それを言いだせば彼は肯くかもしれない。
多少軽蔑されても、愛されていなくても。

彼のそばに生涯いられるというのは魅力的だった。
「このことを今知っているのは僕の両親と、先に精霊魔法の指導をしたワルド子爵だけだ」
両親には事情を話さざるを得なかった。
ワルド子爵はすでに世界の危機を独自に知っており、協力を約束されていた。
そして実際に精霊魔法を教えることができるか、習得することができるかといういわば実験に付き合ってもらった。
そして数日のディアスの訓練でワルド子爵は精霊魔法の基礎を身につけ、その後の自己鍛錬で今では系統魔法並みに使えるようになったらしい。
その報告を受けて、素質のあるものならば精霊魔法の習得は可能と結論づけ、こうして私に話すことにした。
「ルイズもまだ知らないの？」
「まだ話していない。彼女はなにも事情を知らない。話すなら事情を知っていて協力を約束してくれたモンモランシーが先だと思った」
ワルド子爵が私より先に事情を知り、精霊の魔法を習ったことは少なからずショックだったが、ルイズがなにも知らないことは私の自尊心を多いに満足させた。
ルイズは今のところ特にディアスに好意を寄せるようなそぶりを見せない。
けれど学院では私と同じぐらいにディアスに親しい女生徒として認識されている。
だが実際にはルイズはディアスのことをなにも知らず。
私はこうしてすべてを打ち明けられている。
ルイズのことを少しでもライバル扱いした自分が馬鹿らしい。
けれどルイズも彼の生徒である以上、いずれディアスは協力を申し入れるかもしれない。
まだ油断できない。

「どうだろう。すぐに結論を出す必要はないが、僕に協力してもらえないだろうか？」

私の望んでいた言葉が来た。

交換条件が頭の中で繰り返される。

それを口に出そうとしてはっと正気に戻らされた。

彼の目は、どこまでも冷たく私を観察していた。

いつもの優しい視線ではない。

訓練の時の威圧感のある目でもない。

そこにあるのは目の前にいる人物は果たして自分の手駒になるかと見定める王者の姿だった。

他者を当然のように従え、他者を操り、目的を遂げる王。

一時期トリステインの王にディアスが望まれているという噂を聞いたことがある。

納得した。

彼は王だ。

生まれながらに人を従え、導く王なのだ。

その導く先にあるのは、世界の危機の打開であり敵である『悪魔』の討伐である。

その手駒として選ばれた一人が私だった。

そう、彼にとってこの申し出は対等な取引などではない。

私が使える手駒かどうか確認するための場でしかない。

使えないと判断すれば、彼は容赦なく私を捨てるだろう。

そして別の人物を探し、それを手駒に育て上げるだろう。

交換条件など持ち出せる場面ではない。

承諾か拒絶か、彼の求める答えはそれだけ。

私は自分の浅ましさに吐き気すら感じた。

自分はなんと愚かで浅ましい女なのだろう。

そして目の前の人物は、そんな私をどう見ていたのだろう。

私はディアスという人物を見誤っていた。

彼の本質はきっと王なのだ。
人を従え、操り目的を果たす王。
王に対し、手伝ってさしあげるから私をあなたの妻になど。
そんな条件を王が認めるはずがない。
王者は手駒が賢しげに交換条件を出すことなど許さない。
使えぬ駒だと、ただ見限るだけだろう。
いやだ。
愛されなくてもいい。
大公妃も、婚約者の立場もいらない。
彼に見捨てられるのだけは耐えられない。
愛することすら許されなくなったら私はきっと生きていけない。
「私はディアスの仲間です……どこまでもついて行きます」
私の口からこぼれ出た言葉はまるで他人の言葉のようにかすれていた。

・ディアス視点・

モンモランシーの様子がおかしい。
協力を申し出てくれたが、その様子は顔は真っ青、声は震えているという有様だ。
僕は素直に喜び「ではよろしく頼む」といえなかった。
なんだ?
彼女はなんでこんな顔をしている?
僕はなにかおかしなことを言ったか?
僕はただ、協力して欲しいと。
『悪魔』との戦いに協力して欲しいといっただけ……。
僕は唐突に気がついた。
そうだ。

僕はこの女の子を戦いの場に引きずり出すことを提案したのだ。
彼女は幼い頃に僕に協力を誓っている。
幼い子供の純真さで、僕の力になると申し出てくれた。
責任感の強い子だ。
いまさらその約束を反古になど出来ないだろう。
なんということをしたんだ僕は！
選択の余地のない相手に、命を賭けるような要求を突きつけたのだ！
「結論を急ぐことはないよ。事は命にも関わりかねないことだ。風の精霊でさえ退治を断念した相手と戦うんだ。命の危険はあると思った方がいい」
真っ青な顔をしたモンモランシーに僕は決断の猶予を提案した。
なるべく優しく。
相手をこれ以上追い詰めないように。
「事は重大だ。特にモンモランシーになにかあったらモンモランシ伯爵家の存亡にも関わる。ゆっくり考えてくれ、昔の約束のことなら気にする必要はない。あの時とは状況が変わった。ゆっくり考えてどうするのか決めて欲しい」
そういってなにか言いたそうなモンモランシーを帰らせた。

そうだ。
ゆっくり考えて欲しい。
今すぐの結論など僕は望まない。
いや、僕はそんな決断を背負いきれない。
自分の命がかかっていることは自覚していたし覚悟もしていた。
僕が失敗すれば大勢の人が災厄に襲われることも理解していた。
けれど目的を果たすために、他者を巻き込む覚悟は、愚かなことにまったく考えていなかった。
ただ仲間を集めて、育てて、一緒に戦う。
まるでゲームをこなすように、表面だけ理解したつもりになって

本当の意味を考えようとしなかった。
なにが天才か。
とんでもない間抜けじゃないか。
才能には試練が、力には責任がついてまわる。
我が父上の言葉が脳裏によみがえる。
そして他者を巻き込むことも、他者への責任ができるだろう。
モンモランシーを巻き込んで僕は彼女になにができる。
なにもできはしない。
この話は彼女の利益にはならない。
なんの得にもならない危険に彼女が首を突っ込む理由などない。
確かに精霊のバランスを取り戻さなければ、いずれ大陸は悲劇に襲われるだろう。
もし『悪魔』が封印から抜け出したりしたら、どれほどの被害が出るだろう。
だがそれでも、モンモランシーが戦う理由になるだろうか？
誰かがなんとかすればいいだけの話ではないか。
ただ少し人より魔法が得意で、精霊魔法の素質を持っているからといって命を賭けて戦う理由が彼女にあるだろうか？

僕にはわからない。
僕はそもそもこの世界を襲う悲劇の回避のために生まれた。
それは聖戦の回避であり、その原因の排除であり、そして『悪魔』の討伐になった。
生まれながらの使命であり、そのために努力してきた。
才能を伸ばし、万が一の時にそなえて戦闘技術を学び。
その過程として新たなる魔法技術を会得した。
もともとそういう生き方しかできないとわかっていたし、その使命さえ果たせば後は自由になるとも思っていた。
自由を獲得するために、まずは使命を果たす。
それが僕の戦う理由だった。

僕自身や家族、親しい人の安全ももちろん大事だ。
だが根本の動機は、さっさと使命を果たして自由に生きようというなんとも俗な考えだった。
そのために仲間を欲し、ワルドを仲間に引き込み、モンモランシーにも声をかけた。
ただ使命を果たして自由になりたい一心で。
ただの僕のわがままで、戦いの運命を背負わそうとした。
確かに大事な使命だ。
これを達成しなければ彼女たちだって危ない。
だが、それも誰かがなんとかすればいい話じゃないのか？
命が危ないから、命を賭けろ。
それを強要する権利が僕にはあるのか？
あるわけがない。
だが、仲間は必要だ。
一緒に戦ってくれる仲間はどうしても必要だ。
一人では勝てないのだから。

セラファナ……僕はどうしたらいいんだ？
僕は平穏に生きている女の子を自分の戦いに巻き込んでしまっていいのだろうか？
いまさらな話と笑うだろうが。
僕はまさにいまさらその責任の重さに気がついた。
気がついて怯えている。
僕にそんな資格があるのかと。
どうしたらいいのだろう？
なにも考えず。
彼女を手駒とでも思って利用すればいいのか。
それでいいのか？
僕にはわからない。
『とっくに覚悟ができているのかと思ったら……いきなりヘタレて

ますねぇ。そういうキャラなのでしょうか？』

たぶん。そうなのかもな。

『私自身あなたに無理矢理使命を押しつけた身なのでえらそうな助言はできそうにありません。でもあなたに助言を与えてくれそうな人には心当たりがあります』

誰だ？

『あなたのお父様ですよ。あの方は大公国の主として多くの人の上に立ち、人を使ってきました。あなたの使命も知っています。相談に乗ってくれるのではないですか？』

父さまか……人の上に立ち、人を使ってきた人間。

僕が悩んでいることは他人への責任なのだろう。

だとしたら父さまなら、なにか教えてくれるかもしれない。

あの人は大公国を背負い、多くの部下と領民を従え導いてきた人だ。

責任の重さ、その決断についてなら僕よりはるかに知っているだろう。

「話してみるか……」

この歳になって父親に泣きつくのも恥ずかしいが、自分ではどうしようもない。

覚悟ができない。

手駒と割り切ることも、彼女の人生を背負うことも僕にはできない。

会って話してみよう。

きっとなにか教えてくれる。

あるいは叱られるかもしれないが、それも仕方がない。

すべてはそんなことも考えてなかった愚かな僕がいけないのだから。

・モンモランシー視点・

よく考えるようにと返事を保留され、私は自室に戻っていた。
命の危険がある。
私になにかあればモンモランシ伯爵家にも関わる。
確かに簡単に決めていい問題ではないのかもしれない。
きっとそれほどに危険なことなのだ。
ひょっとして私はディアスに心配されているのだろうか？
手駒として取り込もうとしながら、それでもどこかで私を巻き込みたくないと考えているのだろうか。
だとしたら私は、彼に大事に思われているとうぬぼれていいのだろうか。
私はどうするべきなのだろう。
協力するべきだ。
だけどそれが彼の負担になったら、意味がない。
悪しき考えももったが、彼の負担になりたくて協力を申し出たのではない。
たった一人で精霊の使命に立ち向かおうとする彼の力になりたくて、仲間になったのだ。
彼の重荷を少しでも軽くしたかった。
私はどうしたらいいだろう？
もはや交換条件など申し出る気持ちは消し飛んでいた。
そんな邪な感情が立ち入る隙がないほど、これは重要な問題なのだと自分に言い聞かせた。
どうしたら彼は喜んでくれるだろう。
どうしたら彼はいつものような笑顔を向けてくれるだろう。
考えることは彼のことばかり。
ディアスのためになるにはどうすればいいか。
そのためには私自身のこともモンモランシ家のことも些細な問題だった。

「私は、どうすればいいの？」
思い浮かぶのは優しく微笑み、たった一人で歩いて行こうとする彼の姿だけだった。

二十二章　責任の重さ（後書き）

「人間はしょせんわかりあえないのか」
って感じで盛大に誤解しまくるモンモランシーとディアスです。

モンモランシーには少し悪い事考えてもらいました。
恋する女の子ですから、このぐらいの計算はします。当然でしょう？
モンモランシー的に最優先はディアスで他は二の次です。
いやぁ愛されてますね。そのうちヤンデレ化しないか心配です。

ディアスはいまさら他人を巻き込むという現実にヘタレました。
可愛い女の子に命がけで戦えっていいにくいですよね。
今までとくに深く考えてこなかったツケが来てます。

ディアスは外面と能力的に完璧超人ですが、ときどき精神弱いです。
元がただの読書マニアですしね。
おまけに使命を果たすためにどんなことでもするとかいう熱血盲信タイプでもないですし。
さらにいえばなんの欠点もなかったら物語の主人公として不適格ですし。

しかし「いまさらかよ！」と突っ込みが入りそうなほど気がつくのが遅いです。
物語の展開的に仲間加入イベントに合わせようと、今で深く考えさせませんでした。

さらにカリスマチートを舐めています。
自分が真面目な顔をして話し込んだら他人からどう見えるかまるでわかっていません。

その点、能力はすごいけど人生経験がまだまだなお子様なのです。

そういえば系統魔法が悪魔に通じない理由って書いたっけか？
と疑問に思って今回説明を入れています。
まぁ、本当のところはメイジの数集めて退治されたら物語にならないから、普通のメイジでは戦えないことにしたのですけど。

二十三章　信頼と覚悟

・モンモランシー視点・

ディアスが学院を休んで実家へ戻った。
「あんたはなにも聞いてないの？」
「知らないわ。おおかた家の事情でしょう。なにせ大公家の跡取りだもの」
ルイズの問いに私はそう答えたが、内心では違うことを思っていた。
彼は私に時間をくれたのではないか。
顔を合わせれば私はなにかしら彼にいうだろう。
だから彼は一度学院を離れ、私に考える時間をくれたのではないか？
考えすぎだろうか。
それとも本当に大公家の事情なのだろうか。
なにか大公夫妻に相談しなければならない事情でもできたのか。
もしかして私に事情を話し、仲間に誘ったことを大公夫妻に報告するためだろうか？
いや、それなら返答を聞いてからの方が自然な気がする。
わからない。
けれどおかげで私が時間を得たのも事実だった。
考えなければならない。
私はどうすべきか。
私はどうしたいのか。
その結論次第では、私は覚悟を決めなければならない。

・クルデンホルフ大公視点・

急に息子が学院を休んで戻ってきたときは何事かと思ったが、私は目の前でしょげかえっている息子に苦笑を隠せなかった。天才だなんだともてはやされていても、私の息子はやはり年相応の子供だった。

事情を聞いて、私は少し考え込んだ。

他人に対する責任。

他人を自分の意志で動かし、巻き込み、その人生を左右させてしまうという重圧。

私はこの息子に私の仕事を教えはしたが、人の上に立つ責任の重さについては教えなかった。

まだ幼いと判断したからだ。

幼さ故にその問題を軽く考え、そのまま成長されては困る。

だからそういう問題からは意図的に遠ざけておいた。

そして息子はまったく予想外のところで他人の人生に責任を負うということを自覚し、その重圧を恐れ、判断に迷って父親を頼ってきた。

幼い頃から手のかからなかった息子が人並みに父親に泣きついてきたのだ。

父としては若干嬉しくもある。

だがこの件は甘くすることはできない。

事はモンモランシ家の娘だけではなく、将来の大公国の民の問題にもなり得る。

他人を導き、他人に責任を持ち続ける将来のクルデンホルフ大公としての下地を築く時期が来たのだ。

けして甘やかすことは許されない。

「それで、おまえはどうしたいのだ？　世界を救う、結構なことだ。仲間が必要？　それも仕方がない。ではおまえはどうする？　これ

は私が手を貸してやれる問題ではない。結局はおまえが決断しなければならない問題だ」

「……わからない」

肩を落とし、声もか細い。

なんとも情けない姿だった。

こんな情けない息子を見たのは初めてだ。

「なにがわからないのかね？」

「……どうしてモンモランシーは僕に協力すると簡単に言える？　少し考えればそんな義理はないことはわかるはずなのに」

そこからわかっていないのか、この馬鹿息子は。

「モンモランシ伯爵の娘がおまえに好意を寄せているのは気がついているだろう？」

「……はい」

「ならば簡単だろう。その娘はおまえの力になりたいと考えたのだろうよ。おまえはなにかと自分一人で背負おうとする。危なっかしくて見ておれんのだろうな」

意表を突かれたように息子は私を見た。

「おまえはずいぶん以前から使命とやらを受け、この世界が危ういことを知っていた。だがそれを誰にも相談せずに自分の胸に秘め、一人でただ努力していた。なぜ私たちにすぐに相談しなかった？　私たちが問いただすまで黙っていたのはなぜだ？」

「僕が、努力すればすむ問題だと、思ったから」

「それもあるだろう。だがおまえは内心恐れたのではないか？　そんな世界の危機とやらに私たちを巻き込むことを」

うつむいて黙ってしまった。

図星だろう。

この子は優しい。

そして責任感が強い。

自分一人ががんばればすむのならば、親しいものを巻き込めるは

ずがない。
妹を巻き込まないという条件にまったく反対することなく、むしろ積極的に同意した。
聞けばベアトリスの精霊との相性はディアス並みに高いらしい。
そこらの人物とは比べものにならない才能だと。
ただ使命を果たすという視点ならば、ベアトリスの才能は是非に欲しかっただろうに。
この息子はその才能に手を出さないことをあっさり誓った。
親しいものを危険に巻き込みたくないのだ。
もし可能ならば、自分一人でその『悪魔』と戦っただろう。
この馬鹿息子が事情を話したのは自分一人ではどうにもならないと知ってからだ。
必要なのは自分一人ではなく、複数の仲間を含めた自分。
他者を巻き込むことが前提になったその時に初めて、息子は私たちに事情を話すことにした。
もし一人でなんとでもできるなら、最後まで誰にも話さなかったのではないか。
「おまえはその時から、いやずっと前から恐れていたのだろう。他人を巻き込むことを、その責任の重さをうすうす察して恐れるが故に」
息子は沈黙している。
「自分から目をそらすな。おまえはとうの昔に気がついていたはずだ。他人を巻き込むという責任の重さ。なにもモンモランシ伯爵の娘が初めてではないはずだ。ワルド子爵の時はどう感じた？　その時はなにを考えて彼の協力を受け入れた？」
顔色はもはや真っ青だ。
この息子がこうも精神面で脆いとは、いやはや親失格かもしれん。
今まで気がつかなかった。
「黙っていてはわからん。答えなさい」
「……便利な手駒になる。その程度にしか考えていなかった」

手駒。

その言葉に私は内心、この子の育て方を間違えたかもしれないと感じた。

この子には他者と協力してなにかを成すという経験がない。

その影響か、仲間や協力者という存在に対する認識が希薄だ。

幼い頃から鍛錬するか、読書するか、妹と遊ぶかしかしてこなかった。

教師や友人はいたが、その関係は深いものではなかった。

あくまでも知識や技術を教えてくれる存在。

一時付き合うだけの存在だった。

もっとたくさんの人間と触れさせて、人間関係を学ばせるべきだった。

この子は賢い。

自分が人の上に立つ人間であることを幼い頃から理解していただろう。

それが他者を、自分ととくに親しくないものを見下す習慣になっていたら?

この子はこのままでは将来民衆をただの自分の支配下の人々としか見ないだろう。

優れた才覚と、他者を軽んじる感性が合成されれば恐るべき暴君を生みかねない。

いま正すべきだ。

いましか機会はないだろう。

「おまえは自分に惜しみない協力を約束した男を、手駒と感じたのか?」

「……はい」

「恐るべき傲慢というべきだな。ワルド子爵はおまえよりはるかに実戦経験を積み、系統魔法でも達人と呼ばれる人物を手駒か。おまえは知らないうちにずいぶんえらくなったのだな?」

目の前で目を伏せ、ただじっと私の視線に耐えている。

おのれを恥じているようにも見える。
この様子なら自分の考えが間違っていることに気がついているようだが、ここは釘を刺さなければならない。なによりもこの子の将来のために。
「幼いときに聞かせた私の言葉を覚えているか？　私は才能に増長するなといったはずだ。おまえは天才ともてはやされているうちに自分は特別な人間で他者は自分の道具だとでも増長したのか！」
私の怒声が室内に響く。
「おまえは確かに精霊に選ばれ、加護を受け使命を受けた。だがただの人間だ。それを他人を道具扱いとは何様のつもりだ！　どこまで増長したか！」
「いまは反省しています……彼は僕に忠誠すら誓った。僕は彼にたいして責任がある。だけど僕には彼に出来ることはないのです。モンモランシーも同じです。彼女にしてやれることなど僕にはない」
出来ることなどないか。
まったく手のかかる息子だ。
目に見える形で手を伸ばさなければ仲間の信頼に応えたことにならないとでも思っているのか？

「あるではないか。ワルド子爵は亡き御母上の研究により世界の危機を知り、それを回避する方法を求め続けた。ならばその世界の危機を回避することがなによりも彼の忠誠と信頼に応える方法ではないか」
彼とは少し話をした。
母の研究は無駄ではなかった。
母の研究のおかげで僕は殿下と出会えた。
そう熱意を込めて語っていた。
彼の忠誠心はもはや王家になど向いていないだろう。
自らの悲願を叶えてくれるだろう目の前の息子にこそ向けられている。

「モンモランシ伯爵の娘も同じだ。おまえの力になりたいと望むなら、おまえは全力で使命を果たせばいい。それこそ彼女の望みなのだから。危険がある？　それがどうした。おまえはなんのためにひたすらおのれの腕を磨き続けた？　仲間の一人や二人、おまえが守ってみせればいいことだ」

「しかし……僕は」

「ぐだぐだと言い訳をするな。おまえにできることは一つだけだ。おまえを信じてくれるものたちの信頼を裏切らないこと。ただそれだけがおまえを信じついてきてくれるものにしてやれることなのだ」

ぽかんと息子はこちらを凝視した。

まったく世話の焼ける馬鹿息子だ。

そんなに悩むくらいならもっと早く相談に来ればいいものを。

「たった、それだけですか」

「たったそれだけだ。信頼してついてくるものたちの心を背負い、共に目的を果たすために邁進する。ただそれだけのことなのだ。そもそも彼らがおまえになにか見返りを要求したのか？　しなかっただろう？　ただおまえの力になりたい。共に悲劇を回避したい。一緒に戦いたい。そう願うものに他になにをしてやるつもりだったのだ？」

責任にもいろいろな形がある。

息子の場合は仲間の信頼に応えることが、もっともよい責任の取り方だと私には思えた。

仲間の想いを背負い、希望を背負い、期待を背負って使命を果たす。

いうほど易しくはあるまい。

あるいはまたその重さに嘆き苦しむかもしれない。

その時はまた手を伸ばしてやればいい。

出口のある方へ導いてやればいい。

それが親というものだろう。

不意に息子が肩を震わせはじめた。
泣いているのかと思ったが違った。
笑っていた。
やがて声を上げて笑った。
今まで悩みふさぎ込んでいた自分を吹き飛ばすような闊達とした笑い声だった。
「どうやら僕は難しく考えすぎていたようです。そうですね。別に見返りを期待されたわけでも要求されたわけでもない。ただ一緒に戦おうと手を結んだだけです。ならば一緒に戦えばいいだけですね」
それでいい。
いずれその責任の重さを感じ、苦しむかもしれないがまずは一歩踏み出すことだ。
「それでいい。信頼し合うから協力できる。協力して目標に向かうからこそお互いの信頼に応えられるのだ」
これでいい。
今回のことで仲間と協力し信頼に応えるということに対する回答を見つけ出したなら、この子が将来暴君と化す可能性は低くなるだろう。
大公国を治めるのも同じなのだ。
民衆の期待を背負い。
共に国を発展させ信頼関係を築く。
利害の一致という関係でもあり、互いに信頼に応えるという関係でもある。
今回のことがそれに気がつく土台になれたなら、この悩みも悪いものではなかった。
まだ先は長い、この子を立派な大公国の次代の主とするために私はまだまだがんばらなければならないようだ。
アルビオンの天才プリンス・オブ・ウェールズに匹敵するクルデンホルフの天才か。
人の上に立つ責任と覚悟に関してはどうやらあちらが先んじたよ

うだが、我が息子も悪いものではない。
いずれクルデンホルフの天才もアルビオンを実質支配するに至ったウェールズ皇太子に負けない存在になるだろう。
なにせ私が鍛えるのだからな。
そうそう負けはせぬよ。

・モンモランシー視点・

ディアスが学院に戻ってきた。
いつものように授業を受け、いつものように放課後はディアスの生徒たちと集まり魔法の訓練を受ける。
私はディアスと一緒に最後まで残った。
皆が去った訓練場所に一人で立つ彼を見つめ、私は決意していた。
「ディアス。私はあなたの力になりたい」
振り向いたディアスは別に驚くわけでもなく私を見つめた。
静かで、どこまでも覗き込まれそうな瞳であった。
「とても危険ですよ？」
「それでもいい。あなたは放っておくとなんでも一人で抱え込むように見えるから、私がすぐそばで監視してあげるわ」
私の中のディアスの印象はいつも笑顔で、そして一人で歩いて行く姿だった。
友も連れず。恋人も連れずにただ一人で歩いて行く男。
すべての苦悩や苦痛を笑顔の下に隠して誰にも見せない男。
放っておけるはずがない。
「断ろうとしても無駄よ。私はもう決めたのだから」
私はこの数日悩み、考え、決断した。
なにがあろうと、私だけはディアスの側にいよう。
隣を歩けなくてもすぐ側を歩いて行こう。

なにがあっても、一人ではないのだと笑いかけよう。
それだけしか、私にはできないだろうから。
「それは僕に好意を持っているからですか？」
不意に聞かれて、私は狼狽を押し殺した。
こんな程度でうろたえては女がすたる。
「ええ、その通りよ。私はあなたが好きです。ずっと好きだった。だからあなたの力になりたい」
「けれど僕はモンモランシーの好意に応えられるとは限りませんよ？　それでも協力してくれると？」
「女を舐めないことですわ。好きな人の力になりたいと願う。ただそれだけではいけませんか？」
たったそれだけでいい。
私は恋の成就を願わない。
ただ私が彼を想い続けていられるように願う。
彼の力になり、彼を助け、彼を見守り続ける。
もし彼に他に好きな女性ができたとしても、私は彼を想い続けるだろう。
彼の幸せを願いながら、ただ一人で彼を想い続けるだろう。
それが私の覚悟。
この想いにこそ私は殉じる。
悲しい恋かもしれない。
愚かな女かもしれない。
それでも私はそうしたいと強く思った。
なによりも強い思い。
それに従って私は決断し、覚悟した。
何度でもいう。
私は恋の成就など望まない。
私は彼を想い、彼を守る。
彼が力を求めるなら、力になる。
それが私の覚悟。

ディアスは少し笑った。
苦笑いのような、どこか呆れたような笑いだった。
「今確信した。君はとてもいい女だ。僕などにはもったいない」
「ようやく気がついてくれてどうもありがとう。でもねディアス。私はあなたしか愛さないと決めているのよ。たとえ愛されることも結ばれることもなくてもね」
「それは不幸な生き方かもしれないよ」
「あなたを愛せなくなる方がよほど不幸よ。たとえあなたが他の女性を愛しても、私はあなた一人を愛し、あなたを守り、あなたの力になる。それが私の覚悟よ」
それでも、もし許されるならば。
もしその時が来たならば。
私は思う存分あなたに甘え、あなたの愛を全身に感じて生きていきたい。
矛盾している。
けれど私は納得している。
結ばれなくてもいい。
けれど結ばれたい。
この想いもまた私自身。
きっと私は矛盾した愛の形をもつ歪な女なのだろう。
ディアスは笑った。
「やはり僕にはもったいない。僕はそれほど立派な男ではない」
「わかっているわ。私にこんな重要な決意をさせたあげく逃げ出した腰抜けさん。ご両親は優しくしてくれたかしら」
「叱られたよ」
いささか憮然とディアスは答えた。
なんと、当てずっぽうだったけど本当に逃げ出していたらしい。
それもディアスらしい。
おおよそ私をそんなことに巻き込んでいいのか悩んだのではないだろうか？

今のディアスの顔を見るとそう思える。
優しくて鈍感で優柔不断で、本当にどうしようもない人だわ。
私がしっかり面倒見てあげなくちゃね。

二十三章　信頼と覚悟（後書き）

ディアス、父親に叱られるの回です。
天才でも子供ですから、やっぱり親や年長者に叱られるイベントは外せません。

責任や信頼云々はとりあえずディアスを立ち直らせ、かつ他人を軽く見ないように誘導する理屈ですから、あんまり突っ込まないでください。
正直あの理屈は自信がありません。
様々な物語の勇者たちはどういう覚悟で仲間の命を背負っているのでしょうね？

モンモランシーは覚悟を決めちゃいました。
一途な女の子なのです。
前回の交換条件でお嫁さんになどというのは気の迷いなのです。
それとディアスという人間を少し理解しはじめました。
いままでは自分とは違う天才として尊敬していましたが、今後は一人にすると危なっかしい男の子として優しく見守るでしょう。

矛盾する恋愛感情？　そんなの普通ですよね？
できれば結ばれたい。
でもそれが出来ないのならばせめて幸せになって欲しい。
できれば見守っていたい。
変かな？

もっと内容をシンプルに簡単にして、読みやすくした方がいいのかなと考えていますが。
作風はそんなに簡単に変わらない……。

他の僕の好きな作品と比べると、文章多いんですよね。
もっとシンプルのほうが書くのが楽だし、読みやすいでしょうか？

二十四章　ディアスの生徒たち

・ギーシュ視点・

「ディアス。君は最近モンモランシーと仲がいいね？　なにか進展があったのかい？」

「特にはないさ。気になるのか？」

もちろん、と答えるとディアス殿下は「本当に特にはないさ」と肩をすくめて見せた。

そうは見えないのだけどね。

あれからディアス殿下とは友人づきあいをさせてもらっている。

お互いを名前で呼び合い。

親しく接させてもらっている。

それはグラモン家としても、僕個人としてもいいことだろう。

ただ僕がディアス殿下、いやディアスの生徒になったことで、多少周囲にやっかまれてはいる。

学院入学から今まで誰も生徒をとらなかったのに、ここに来ていきなり三人だ。

僕同様、タバサとキュルケも多少風当たりが強いようだ。

彼女たちはまだいい。

トライアングルメイジで学院トップクラスのエリートだ。

それ故の弟子入りと、その才能に憧れながらも自身を振り返って諦めるものもいる。

ただ僕は、数多くいるドットメイジに過ぎない。

しかも知り合いのつてを頼っての弟子入り、思ったより風当たりは強い。

自然、僕はディアスや彼の生徒たちと付き合うことが多くなった。

他の生徒たちに敬遠されがちになったからだ。

まぁ、しばらくすれば収まるだろう。

なんというかディアスの生徒は女の子ばかり、しかもどれもこれもかなりの美少女たちばかり。

ルイズは性格がきついが可愛い女の子だ。

キュルケは色気過剰気味で僕の好みではないが、学院で男子生徒の人気を一身に受けている。

タバサは無愛想な態度で気がつかないものも多いが、意外に顔立ちは可愛らしく、小柄な体格と相まって非常に魅力的だ。

モンモランシーは、わざわざ言うまでもない。

彼女は最高だとも。

なんともディアスは魅力的な女性に囲まれる運命でももっているのだろうか？

訓練も順調だ。

ゴーレム操作で鍛えたおかげで魔力制御法のコツはすぐにつかめた。

おかげで身体強化はすぐに習得し、瞬動という高速移動法も一応できる。

その訓練のおかげか、あっという間にランクが上がって今やラインメイジだ。

ディアスは僕に接近戦や格闘術を熱心に教えた。

彼に言わせればドットやラインクラスのゴーレムで戦えるのは雑魚相手だけらしい。

実際、模擬戦ではあっという間にゴーレムの防御を抜かれ、素手で地に叩きふせられた。

なのでゴーレムを無力化、あるいは抜かれても戦えるように接近戦の技術を学んでいる。

ブレイドの魔法を使用した剣術が基本だ。

将来はおそらく軍人になるだろう僕にとっては有意義な訓練だ。

グラモン家は軍人の家系だからね。
軍人ならば接近戦闘もこなせなければならない。
実際魔法衛士隊で最強といわれるワルド子爵は風のスクエアメイジだが、その戦闘スタイルは非常に速い接近戦闘を得意とする。
話に聞いただけだが、あっという間に接近し、すさまじい速度の斬撃を浴びせてあっという間に相手を無力化するらしい。
僕もそういう高レベルな戦闘がしてみたいものだ。
さいわい剣術の基礎は家にいた頃に習っていたから、実践的な型や技を習っている。
というかディアスはバケモノか？
魔法の天才で剣術もできる。
できないことなんてないのではないだろうか？

「で、モンモランシー。実際のところはどうなんだ？　ディアスとはなにか進展があったのかね？」
「なんであなたにそんなことを報告しないといけないの？」
冷たい視線で睨まれた。
「僕としては非常に気になる。最近やけに親しげじゃないか」
「うん、まぁ、多少は距離が縮まった感じね」
「告白でもしたのかい？」
「あなたには関係ないでしょう」
うわぁ、ばっさりだよ。
僕だってモンモランシーのことが……くそう。
せめて知りたいという想いさえいけないのか！？
最近妙に二人が一緒にいることが多い気がする。
別にいちゃいちゃしているわけではないが、微妙に以前より二人の立ち位置の距離が近い気がする。
男の勘を舐めないでくれたまえ。
きっとなにかあったに違いない！
「隠し事かい？　つまり隠さないといけないようななにかが……は

っ、ま、まさかモンモランシー、学生の身でこえてはならない大人の世界を体験……ぐぼっ！」

殴られた。

しかも魔力で強化した拳を腹に叩き込まれた。

あ、あぶない。

もう少しで腹の中身を口からぶちまけるところだった……。

しかし、うん。自分でいってなんだがそれはないな。

モンモランシーは貞淑な女性だし、ディアスも大公国の跡取りとして自覚して女性関係には気をつけているように見える。

いきなり貴族の娘を孕ませるような真似はしないだろう。

ああ、僕が悪かったからその汚物を見るような目で見下すのはヤメテ。

背筋が思わずぞくりと来たヨ。

変な趣味は僕にはない。断じてない。

・タバサ視点・

ディアスの魔法は実に楽しい。

独創的な理論や技術を身につけるのが楽しい。

そしてそれが自分を強くしているのがわかり、余計に嬉しい。

もうルイズと模擬戦をしても負けない。

いつ、どこに、どのタイミングで爆発魔法を発動するかわからない彼女は戦いにくい相手だ。

けれど瞬動の高速移動で絶え間なく移動して、目標を絞らせずに接近戦に持ち込めばほぼ勝てる。

彼女の弱点は接近戦闘のセンスのなさだ。

魔力制御法はかなりのもので身体強化もできるし、瞬動も使える。

呪文詠唱もなしに魔力弾を撃ってきたのには驚いた。

けれど接近戦闘のスキルがない。
杖をたたき落とし関節をきめてしまえばあっという間に終わりだ。
それに比べるとモンモランシーは少しやりにくい。
接近戦に持ち込んでも、あらゆる手を使って引きはがしにかかる。
魔力を直接放射しての魔力弾を至近で炸裂させ、こちらを牽制して瞬動で距離を置き、魔法で攻撃してくる。
中距離での魔法の撃ち合いならわたしが勝つが、かなり粘られてしまう。
短時間で勝つには接近戦闘に持ち込むしかない。
けれど上手くかわされ、逃げられる。
ルイズとは違い自分の欠点を把握して徹底的に接近戦を避けているらしい。
まだ瞬動の技術では彼女の方が上だ。
追いかけっこでは捕まえられない。
もっと訓練する必要がありそうだ。

楽しい。
他人と技術を競ったことなどないので、この訓練は実に楽しい。
「うれしそうね？」
キュルケがどこか不満そうにしている。
うれしそう？
そう。
たのしいし、うれしい。
「最近ディアスとモンモランシーが妙に親しいのだけど……」
そうかな？
まぁ、べつにどうでもいい。
今は訓練をして次はモンモランシーに勝って、今度はディアスに模擬戦の相手を……。
がしっと肩をつかまれぐらんぐらん揺らされた。
……頭が揺らされて、気持ち悪い。

「いいの！？　それでいいの！？　このままじゃ取られちゃうわよ！？」

だからそれはどうでもいい。

わたしは今は魔法の訓練を……。

「しっかりしなさい！　こんな事で負けたらダメよ！」

「だから、わたしは別に……」

「弱気になってはダメよ。まだ挽回できるわ！　そうだわ今度から模擬戦の相手はディアスに頼みなさい。ギーシュばっかりつきっきりは不公平よ！　そして訓練を通じてもっと仲良くなるの！」

「……あなたはもっと人の話を聞くべき」

あ、でも模擬戦の相手をしてくれるなら嬉しい。

強い相手の方が訓練としていいに決まっている。

彼の魔法や技を間近で見られるのだ。

参考になるだろう。

それに仲良くなっておいたほうが、後々頼み事もしやすくなるかも……。

「……わかった。ディアスに模擬戦を頼む」

「それでこそ私の親友よ！　諦めたらダメよ！」

諦めたらダメ。

うん、諦めたくはないけど。

この親友の勘違いを修正するのは、もう諦めた方がいいかもしれない。

・ルイズ視点・

「う、ううう、負けた。また負けた……」

……また新入りのちびに負けた。

私が先輩風を吹かせられた期間は、実に短かった。

憎きツェルプストーが連れてきた青い悪魔は、あっという間に私の立場を崩壊させた。

先輩風を吹かせて指導できたのはわずか数日だった。

あっという間に魔力制御法を身につけ、瞬動を身につけ、模擬戦で私を叩きのめした。

がんばったのよ？

なのにあのちび、爆発魔法が発動する前にぽんぽん瞬動に入るから捕まらないのよ。

あげく接近されて杖をたたき落とされ、腕の関節決められて終わり。

普通の決闘なら、杖を落とされただけで負けだわ。

けれどディアスの生徒たちにとって杖を失うことは負けに直結しない。

杖がなくても魔力制御法を使えば戦えるから。

なので杖を失い、かつ戦意を失ったら負けというルールになっている。

悔しいからツェルプストーに模擬戦を挑んだけど。

……相手にもされない。

なんでも今は基礎をしっかり身につけたいとか。

逃げてんじゃないわよ！

きー、私は先輩なのよ！

なのになんで青髪ちびに叩きのめされて、ツェルプストーに鼻で笑われなければならないのよ！

うう……私って実は系統魔法だけじゃなくて、こっちの魔法にも才能がなかったのかしら？

そういえばモンモランシーにも勝てないのよね。

あの子も瞬動使って爆発魔法を避けまくって、山のような魔力弾を連射してくるのよ？

どういう制御技術してるのよ？

私はあんなにたくさんの魔力弾、撃てないわよ？

と、とりあえずがんばろう。
がんばればまだ挽回できるわ。
得にツェルプストーには、キュルケには負けたくない……。
あいつ絶対自分が勝つと判断するまで戦わないつもりよ。
ならこっちもしっかり訓練して、腕を上げて驚かせてやる。
やってやるわ！

・ディアス視点・

タバサたちが生徒になってからはや一月。
彼女たちはずいぶん上達して、もはやルイズを追い越してしまった。
ルイズもけして弱くはないのだけど、接近戦ができないという弱点を抱えているためそこを突かれると脆い。
モンモランシーも接近戦はあまり得意ではないが、それを自覚しているため模擬戦では接近戦を徹底して避けて戦っている。
ギーシュは接近戦に才能があるようで、剣術の腕をめきめきと上げている。
タバサは魔力制御法の適正が驚異的だった。
おそらく以前から魔力制御の訓練をしていたのだろう。
あっという間に魔力制御法の基礎を身につけてしまった。
キュルケもタバサほどではないが上達が早い。
模擬戦をやりたがらないが、おそらく戦えばルイズにも勝てるだろう。
どうも最近ギーシュやタバサに負けて、ルイズが落ち込んでいるようだ。
魔力制御法の腕ではギーシュに勝り、爆発魔法と合わせればモンモランシーと互角に張り合えるほどなのだが、接近戦に持ち込まれ

るとやはり弱い。
接近戦を上手く回避する方法を考えろと教えておいた。
あの小さな身体でギーシュや反則的に体術が達者なタバサの相手はつらいだろう。

表の生徒たちが順調に才能を伸ばしているのを見守り、そして予想通り訓練が進むごとにギーシュやキュルケの精霊との親和性が増していった。
やはり仲間に欲しい人材だ。
さてどうやって誘おうかと考え、モンモランシーにも相談した。
ギーシュなら簡単に応じるのではないかと彼女は言う。
理由は他ならぬ彼女自身の存在だった。
ギーシュは多くの女性に声をかけているが、本心ではモンモランシーに惚れ抜いている。
彼女はそれを知っていた。
だからギーシュなら仲間になると断言した。
ギーシュの恋心を利用するようで気が引けたが、実際彼を仲間に引き込むにはそれが一番のきっかけになり得るのも確かだった。
「というかギーシュの気持ちに気がついていたんだね？」
「ええ、何度も告白されたから……そのたびに断っているのだけど」
それでも諦めないギーシュは、なんというか根性があるな。
「その気持ちを利用しろと？」
いささか複雑な気分で尋ねると彼女は少しだけ苦笑した。
「だってあなたには必要なのでしょう？」
僕のためだから。
僕のためなら他人の心も利用する。
そこまでして僕の力になろうという姿になんとも罪悪感を感じる。
僕はそんな彼女になにもしてあげられないのに。
「あなたが気に病む必要はないわ。ただ私が悪い女の子なだけだから」

僕の表情を読んだのか彼女はそんなことを言って微笑む。

相変わらず僕のモンモランシーに対する態度は親しい友人相手のものだった。

恋というものも、恋人というのもよくわからない。

モンモランシーは好きだけど、それを言ったらタバサやルイズだって好きということになる。

タバサは趣味を語り合えるから好きだし、ルイズは妹みたいで好きだ。

モンモランシーは初めてできた友人だ。

好きだし、大切だ。

でも一番大事な、特別な人かといわれればわからなくなる。

優柔不断。

そう言われてもなにも言い返せないな。

モンモランシーとは夜の訓練を行っている。

今まで一人で行っていた精霊魔法と神聖魔法の訓練にモンモランシーも招いたのだ。

そして精霊魔法を教えた。

さすが素質に恵まれているだけあって、モンモランシーはあっという間に精霊魔法を習得していった。

基礎はすでに身につけてしまった。

今は独自の魔法を練習している。

何しろ精霊魔法は先生もいなければ、教本もない。

系統魔法のように有名な魔法があるわけでもなく、すべて自分で考えて習得しなければならない。

唯一の救いは精霊魔法は難解な呪文など不要で、魔法のイメージさえ固まればそれを精霊に頼み込むことで実現可能という点だろう。

僕は精霊魔法による身体強化、精霊による魔法無効化、四大の精霊による簡単な攻撃魔法を基礎として考案していたが、これだけで

はあまりにも頼りない。
ワルドは系統魔法を手本にして精霊魔法を習得したらしい。
風のスクエアたるワルドは、風の系統魔法をほぼ精霊魔法で再現出来るらしい。
なので基本として系統魔法を精霊魔法で再現するところから初めて、いま精霊魔法独自の強力な魔法を考えているわけだ。
モンモランシーと二人知恵を出し合ってより強力な魔法を、より使いやすい魔法を考えている。
「ではやってみるか」
「はい」
モンモランシーが緊張したように肯いた。
静かな夜の風景にモンモランシーの透き通った声が響く。
「我は精霊を讃える。水の精霊よ。我が手に集え、濁流となり敵を打ち砕け！」
精霊への祈りと願い。
その言葉と意志に従って、モンモランシーの右手から莫大な水が鉄砲水のように撃ち出された。
これを喰らった相手は膨大な、しかも圧縮された水の直撃を受けて多大なダメージを受けるだろう。
人間相手なら十分な破壊力を持つ。
だけど、それだけだろう。
「見た目は派手だけど、破壊力ではいまいちかな」
「そうね。人間相手なら十分な威力だと思うけど」
モンモランシーも同意見のようだ。
僕らの魔法をぶつける相手は人間ではないのだ。
ありえないほどの破壊力。
それが僕らの目指す魔法だ。
そのぐらいの魔法を身につけないと、正直通用するか自信が持てない。
「もっと破壊力のあるイメージを考えないとダメね」

「火とかは使えないかな？」
「使えるけど、やっぱり水の精霊の方が使いやすいのよ」
やっぱり相性があるのかな？
僕もやってみますか。
「祈り願う。風の精霊は我が手に集え、嵐と化して吹き荒れろ！」
右手に集まった風を空へ撃ち放つ。
それは小型の嵐だった。
暴風の塊が空を切り裂き、荒れ狂って空の彼方に消える。
「やっぱりディアスにはかなわないわね。アレなら竜だって一撃で殺せるわ」
モンモランシーがため息をつく。
うん、なにしろスクエアスペルのカッタートルネードを凝縮した暴風の魔法だからね。
暴風自体が無数の刃の塊、しかも規模をさらに巨大にもできる。
全力で撃てば竜騎士の編隊だろうと薙ぎ倒せるだろう。
やはり精霊魔法を使うには、
精霊への祈りと、願いを言葉に出した方がより上手く使える気がする。
無言で撃つこともできるが、それよりもあの呪文っぽいものを口に出した方がより使いやすい。
力を集めやすく、制御しやすい。
おまけに魔法のイメージもしやすくなる。
よほどの緊急時でない限り、あの呪文詠唱はした方がいいだろう。
それにしても。
「やはり風は攻撃に向いているのかもね」
「水は向いていないのかしら？」
「いっそ氷にしてしまえば？　たぶん使えるんじゃないかな？」
「氷も使えるだろうけど……氷をぶつけるだけってのも芸がない気がするわ」
「凍結魔法とかどうだろう？　あらゆるものを凍らせる攻撃って強

そうじゃないかな？」
「あなたの敵って、凍るの？」
「……さぁ？」
頼りない返答にモンモランシーが苦笑する。
「私は治癒魔法を練習した方が役に立つかしら。水の精霊の力を借りた治癒魔法なら系統魔法よりも優れているはずだし」
それもありかなと二人で相談する。
僕は何気ない風を装ってある方向を見た。
そしてすぐに興味なさげに視線をそらした。
「まだ時間はあるし、お互い得意系統の精霊しか使わないというのももったいない。いろいろ考えていこう」
「そうね」

さて、どうやら僕の次の方針も決まったようだ。
どういう理由でのぞきに来たのかは知らないが、知られた以上は最低口止め、できれば仲間になってもらいたい。
物陰からこちらをうかがっていた少女。
特徴的な大きな杖をもつ青い髪の女の子。
タバサ。
この光景を目撃してなにを考えるか？
それはわからないが、できればこちら側に引き込みたいな。
どうやって説得しよう？

・タバサ視点・

すごい魔法だった。
夜中にモンモランシーが寮を抜け出して行くのをこっそり追ってみれば、二人してすごい魔法を使っている。

そして、二人の使った魔法は系統魔法ではなかった。
系統魔法の呪文ではない言葉。
けれどコモンマジックではありえない魔法。
魔力制御法も驚くべき独自技法だと感嘆したが、アレはそれ以上だ。
『精霊』のディアスは、精霊の加護を受けその力を操る。
それだけではなくて、その魔法を他者に教えることさえできるのか？
彼は。
いったい彼は何者なのだろう？
ただの天才では説明がつかない。
本国に報告すべきだろうか。
だが彼は要注意人物だが、別に監視の任務は受けていない。
報告の義務はわたしにはない。
いや、むしろ。
彼に協力を申し込めないだろうか。
おそらく彼はこの件をある程度秘密にしたがっているのではないだろうか。
みんなの前でこの魔法を使わず。また教えもしない。
そして夜にこっそり訓練している。
なら交渉の余地があるのではないか？
多くは望めないだろうが、せめて。
お母様の治療ぐらいならば、望めないだろうか？

二十四章　ディアスの生徒たち（後書き）

モンモランシーとディアスの秘密の逢い引きを偶然見つけたタバサは不意に感じる胸の痛みに苦しむ。
これが恋なのだろうか？
彼女は燃え上がる恋の情熱のままに彼を奪うことを決断する。
三人の関係はどうなるのか？
次回に期待されたし……なんて展開もありですかね。

うちのタバサはお母様の治療が至上命題です。
なのでそのためには交渉だってします。
交渉ですよ？　脅迫なんて事は可愛いシャルロットちゃんはしないのです。
交換条件だって立派な交渉ですよね。

そしてディアス……人はいきなり変われません。
父に叱られても、そう簡単に人間性は変わらないので相変わらずモンモランシー相手にへたれてます。
ヘタレな主人公。
ハーレムものの王道ですね。
これは王道勇者ものだった……うん、そのうちかっこよくなりますよ。
たぶん。

二十五章　シャルロット

・タバサ視点・

「わたしの名前はシャルロット・エレーヌ・オルレアン。今は亡きオルレアン公シャルルの娘」

わたしは胸を張って本当の名前を名乗った。

目の前でこちらを見定めるように見つめてくる彼に、精一杯の意地と誇りを見せるように。

夜中に彼の部屋に押しかけ、交換条件と称した交渉を持ちかけた。

彼の秘密を黙っている。その代わりに協力して欲しいことがあると。

陳腐な脅迫は彼に一蹴された。

話したければ話せばいい。別に困らない。

それで君は僕に何を望む気か？

その態度に生半可な脅しなど通じる相手ではないと感じた。

わたしは覚悟を決めた。

すべてを打ち明け、彼を味方につける。

ジョゼフ王への復讐はともかく、お母様の治療だけでも彼の手は借りたい。

「まず最初に確認したい。あなたは精神に異常をきたした人間を治せる？」

「水の精霊なら可能だろう。僕自身精神を破壊されたことがあるが、こうしてぴんぴんしている」

初耳だが、それが本当なら心強い話だ。

「水の精霊の力を借りることは可能？」

「ヴァリエール公爵家の次女もそうして治療した。可能だ」

「それが毒薬によるものでも？」

「おそらく可能だろう。なんなら確認を取るかい？」

そう言うと彼は事もなく水の精霊をその場に呼び寄せた。
空中に小さな水が集まりそれは人型となった。
水の精霊は言った。
いかなる毒や魔法によってであろうとも、それを治癒することは可能であると。
聞きたいことだけ聞いて水の精霊を還し、彼は笑った。
「納得したかい？」
彼が自分の力を証明するためにあえて水の精霊を呼んで見せたことも、わかった。
彼は自在に水の精霊を呼べる。
そして自らの意志に従わせることができる。
彼の協力さえあれば、お母様の治療はできる！
「毒薬によって精神を壊されたお母様の治療を頼みたい」
彼は少しの間考え込んだ。
「それはオルレアン公爵夫人か？」
「そう」
「ならばそれはガリア国内の、しかも王族の問題だ。他国の貴族が関わることではないな」
あっさり拒絶され、わたしは思わず杖を握りしめた。
「そこをなんとか頼みたい。あなた以外にお母様を治療出来る人間が思いつかない」
「治療したとして、僕になんの利益がある？　ガリアのジョゼフ王が危険視するオルレアン一派に荷担したと目をつけられ、不利益を被るだけではないか？」
愕然とした。
わたしは彼を見誤っていた。
優しいだけの男ではない。
魔法の才能があるだけの男ではない。
彼はクルデンホルフ大公国の跡継ぎとして大局を見て、政治的判断のできる男だった。

すなわちおのれに利益にならないこと、大公国にとって不利益になりかねないことを絶対にしない男。

彼を動かすのは誠意でも友情でもなく、利益であり、不利益でないという証明だ。

もしわたしがただの平民なら、あるいはトリステインの一貴族であれば彼はここまであからさまな言い方はしなかったかもしれない。

あるいは情に動かされて承諾したかもしれない。

だがわたしはガリアの王族であることを明かしてしまった。

事の問題がガリアの王族間の権力問題であることを彼に悟らせてしまった。

だから彼は、ディアスという個人ではなく。

クルデンホルフ大公国のディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフとして答えた。

それはガリアの問題である。トリステイン貴族を巻き込むなと。

それを論破する言葉をわたしは必死に探った。

これしかない。

わたしにはこの身一つしかない。

「わたしのこの身をあなたにさしあげます。いかように使い。いかように使い潰してもかまいません。お母様を治療してください」

女性としての魅力に恵まれた人間なら強力な言葉だっただろう。

相手が女性の肉体に目がないような好色な人物なら、好条件と判断を曇らせただろう。

だがわたしは年齢よりも幼く見える小柄で貧相な少女に過ぎず。

彼はアルビオンで辣腕を振るうプリンス・オブ・ウェールズと並び称された英才だった。

「申し訳ないが君の身体一つでは済まない損失を喰らうことになる。条件が釣り合わないな」

彼は言った。

この問題に介入すればクルデンホルフ大公国はガリアの内乱に巻

き込まれかねないと。
ガリアではガリアの天才と称された亡きオルレアン公爵を支持する貴族は多い。
ジョゼフ王は独裁的傾向のある人物であり豪腕で貴族たちを黙らせ、ガリア一国を安定させたがそれに不服をもつ貴族も多いだろう。
そういった勢力がオルレアン公爵夫人とその娘を手に入れたらどうなるか。
しかもオルレアン公爵夫人を治癒したのがクルデンホルフ大公国の一人息子とわかればなにを期待するか。
彼らは決起し、ジョゼフ王に反旗を翻すだろう。
クルデンホルフ大公国、引いてはトリステイン王国とその同盟国アルビオン王国の援助を期待して。
あっという間に大戦が起こる。
ガリアのジョゼフ派とオルレアン派、およびトリステインとアルビオンの連合軍。
そこにゲルマニアが横やりを入れたらどうなる。
世界規模の大戦になりかねない。

「僕は戦争を望まない。故に戦争の引き金は引きたくない」
わたしは言葉がなかった。
そこまで考えたことがなかった。
お母様を治療することがそこまでの問題になるとは思わなかった。
むろん確実に戦争が起こると決まったわけではない。
けれど確実にクルデンホルフ大公国と目の前の人物はオルレアン派とジョゼフ王からは判断されるだろう。
それはガリアとの関係悪化につながる。
たしかにわたし一人の身体をさしだしたくらいでは割に合わないだろう。
わたしは。
わたしにできることは。

「わたしの父は優れた人物だったと聞いています。ジョゼフ王はそんな父から正当なガリア王の地位を奪い、命さえ奪いました」
先王はジョゼフを指名した。そんな噂もあるが信じられない。
無能と評判の人物を王に指名するだろうか？
弟に嫉妬し、宮殿にこもってなにもしない兄。
ただ先に生まれたというだけで王に指名するだろうか？
わたしはジョゼフが自分の正当性を高めるために故意に流した噂だと思っている。
いやわたしだけじゃない。多くの人がそう疑っている。
それほどガリアの天才の名は大きかったのだ。
現在のアルビオンの天才とクルデンホルフの天才。
この二人にも負けないほどに。
「そしてそれだけでは飽き足らずあるパーティの場でわたしに毒酒を飲ませようと企みました。オルレアン公の遺児が生きているのが目障りだったのでしょう」
こんなにしゃべるのはいつ以来だろう？
だけど今はしゃべらなくてはならない。
一生分の声と舌を駆使して、目の前の人物の弱点を攻めなくてはならない。

「母はそれを察しわたしの代わりに毒酒を飲み、心を壊しました。以後わたしは母を人質に取られ、王族としての権利を取り上げられ、冷遇され続けました」
とにかくしゃべれ。
事実を洗いざらいぶちまけろ。
それこそが最高の武器のはず。
目の前の少年が心優しい人物であるのは偽りではないだろう。
ならば徹底的に情に訴えるしか手がない。
「わたしに魔法の才があることに気がついたジョゼフはわたしを密偵の一人として北花壇騎士団に配属し、そこで酷使しました」

魔法の腕を磨き、生き残るために戦う技を身につけた。
「まだ幼いわたしに様々な任務を言いつけました。任務中に戦死することを期待して」
本来なら熟練の騎士が数人がかりで挑むような任務でもなんの支援もなく一人で放り出された。
死ぬことを期待されたとしか思えない。
オルレアン派はまだ生き残っている。
彼らの手前自分の手でわたしを殺せなくなったジョゼフ王は卑怯にも任務中の戦死という方法でわたしを殺そうとした。
「わたしはおよそまともな扱いを受けなかった。王族どころか人としてさえも、わたしがなんと呼ばれていたかお教えしましょうか？　人形です。わたしは彼らの人形だったのです」
目の前の少年は表情を動かさない。
まだ弱いか。
まだ恥をさらさなければならないか？
「わたしの従妹にイザベラという人物がいます。彼女はジョゼフ王の娘ですが父に似て魔法の才がなくわたしに嫉妬していました。そんな彼女がわたしにたいしてなにをしたと思いますか？　わたしを人形と呼び、わたしの服をはぎ、卵を投げつけるなどして喜んでいました。もし彼女が男だったなら、大喜びでわたしを犯して遊んだことでしょう」
犯すという言葉に多少彼の表情が歪んだ。
彼は女性に甘い。
確証はないが本能的にそう感じた。
ここが攻めどころだと。
「いまのところわたしは純潔です。でも数年先はどうでしょう？　イザベラは戯れにわたしを男に襲わせるかもしれません。杖を取り上げ手足を縛り、服を剥いで男たちの中に放り込むかもしれません。わたしは母が人質に取られている限り抵抗も許されないでしょう」
すっと彼の視線がわたしからそれた。

わたしは羞恥に耐えながらさらに言葉を続けた。
「いまのわたしはこんな身体です。男たちも欲情など感じないでしょう。でも数年後はわからない。あるいは人並みに成長するかもしれない。そうなったときイザベラがわたしへの嫌がらせと退屈しのぎにそのような遊びをしないという保証はありません。私のよく知る彼女ならむしろ嬉々としてやるでしょう。そして男たちに組み敷かれ、力尽くで犯されるわたしを見ながら笑うでしょう」
「もういい」
彼が止めた。
やめない。
やめるわけがない。
ここが攻めどころだ。
「わたしはいずれそんな風にジョゼフ親子の玩具となります。王族どころか人間ですらなく人形として、ひょっとしたらどこの誰ともしれない子供を孕むかもしれませんが生むことは許されないでしょう。生んだところで殺されるだけです」
「もういいと言っている」
「このままではわたしは一生彼らの玩具でただの人形です。どのような遊びに使われても文句も抵抗もできない人形です。でもあなたが母を治療してくれれば違う。わたしは自由を手に入れることができる」
母を人質に取られているからこそ人形に甘んじているのだから。
母が健康になれば、共に逃げることもできる。
そうなればもうそんな屈辱に耐える必要もない。
わたしはなかば勝利を確信していた。
彼は確かに英才だ。
非情にもなれる男だろう。
だがまだ若く、甘い。
目の前で不幸にあえぐ者がいて自分に救える力があるのなら、つい手を伸ばしてしまう。

そんな心の優しい男だ。
わたしは酷いことをしている。
とても卑怯なことをしている。
自らを卑下し、恥をさらすことで同情を買い。彼の判断力を惑わせようとしている。
それでもお母様は助けたい。
どれだけ軽蔑されてでも、お母様を救って欲しい。

「……一つ確認したいがいいか？」
「なんでしょう？」
「君の目的は母上の治療だけか？」
「はい」
「ジョゼフ王への復讐ではなく？」
「はい」
嘘だ。
復讐は成し遂げる。
だけどそれに彼の力は借りない。
そこまで迷惑をかけるつもりはない。
「ならば君に協力するのにいくつか条件がある」
わたしは目を輝かせ、そして自重した。
まだだ。
彼の条件がどんなものか、それ次第ではまだわたしはもっと卑猥で口にするだけでも羞恥で舌を噛み切りそうなことを彼の耳に吹き込み、彼を惑わさなければならない。
場合によっては嘘を並べ立ててでも、彼の同情を引き出す。
「条件とは？」
「まず第一に君とオルレアン公爵夫人のガリアにおける王族の権利のすべてを放棄してもらう」
わたしは驚愕した。
それでは、そんなことをしたらわたしは……。

「第二にそれをトリステイン王女の前で公式に誓約してもらう。今後一切、ガリアに関わらないこともだ」

この男！

わたしをガリアから引きはがし、王族としてのすべてを奪う気か！

「第三に今後の生活の保障はクルデンホルフ大公国が引き受ける。よって君たちには我が国に亡命してもらう。すべてを捨てた上で、その後のことは我が国が安全を保証する」

亡命。

すべてを捨てて。

その上で安全を保証する？

この男……わたしを完全にガリアとは無関係と宣言させた上で亡命しろという。

関わらない。

ただそれだけのことだ。

だがそれではもうジョゼフ王に復讐はできない。

そんなことを公式に宣言すれば、ガリアに残るオルレアン派は完全に求心力を失い崩壊するだろう。

王族としての権利が公然と無視されていても、わたしが、シャルロット・エレーヌ・オルレアンが生きてここにいるから皆希望をもってくれる。協力も期待できる。

それを捨てよという。

王族の名も、力も、期待してくれる人々もすべてを捨てろという。

わたしはガリアの王族としての地位も名誉も取り戻すことなく、ただの一人の娘として大公国で生きる。

そうするならば助けてやると。

「以上三点。これが最低限の条件だな。これを飲んでくれるなら、僕は君の母上の治療をしよう」

この男！

力の限り杖を握りしめた。

思わず魔法で目の前の男の首を刎ねてしまいたいほどの激情が身

体を駆け巡った。
「君は王族としての地位も名誉も、多くのガリア貴族の信頼も失うだろう」
目の前の男はいっそ飄々と語る。
「だけど君の母親は戻ってくる。そして母親と一緒に暮らす平凡な幸福は手に入る」

さぁどうすると目の前の男は問いかけてきた。
助けて欲しければ復讐など諦めろ。
クルデンホルフ大公国にとって無害な存在になり庇護を受けろ。
彼はそうわたしに提案した。
「ジョゼフがそれを認めるとは限らない」
「認めないなら力尽くで認めさせる。我が父クルデンホルフ大公、ヴァリエール公爵を通じてトリステインは動かせる。そしてアルビオンのウェールズは親友だ。しかもガリアのことはきっと気にしているだろう。ガリアが安定化するのはおもしろくはないだろうが、戦争よりかはましだと考えるだろう。アルビオンも自分の国を固めるのにまだ時間が必要だ。いま大国ガリアが割れる内乱が起こり、それに巻き込まれるリスクを考えれば協力は期待できる」
クルデンホルフ、トリステイン、アルビオンの三国をもってガリアのジョゼフ王に認めさせればいいという。
そしてこの話はジョゼフ王にとっても利益がある。
なにかと目障りなオルレアン派が力を失い。
扱いに困っていたオルレアン公の遺児を他国に遠ざけられる。
しかもガリア王族としてのすべての権利を公式に奪った上で、しかも本人の意志でそれらを放棄するというのだ。
ジョゼフ王がオルレアン派の怒りを買う可能性よりも、わたしがオルレアン派の貴族の失望を買う可能性の方が高い。
なにしろすべてを捨てて自分たちの安全だけを求めて他国に亡命するのだから。

そしてシャルロット・エレーヌ・オルレアンは無力な少女になり、ジョゼフ王が危険視する必要性はかなり減る。

「君がガリア王家の血を引く人物であることに変わりはないが、公式に王族の権利を放棄した以上、再びガリアに干渉することはほぼ不可能といっていい」

わたしはじっと考えた。

考えながら彼の語る話を聞いていた。

「正直なところトリステイン側には利益は薄い。だがトリステインの現在の王にあたる人物は年若い女性だ。君の話を聞けば同情されることだろう。またガリアの王族として認められなくてもガリア王家の人間には違いない。君の子はガリア王家の血を引く子であり、その血を取り込むことを考えればなんの利益もない話ではない。また話の持っていきようではガリア王に恩を売れる可能性もある」

わたしは。

すぐには答えられなかった。

肯定すれば、お母様の治療は行われ、おそらく回復する。

わたしたちはガリアを離れ大公国で新しい生活を送ることになるだろう。

それは今までとは比べものにならない平穏で幸せな日々だろう。

けれど。

ジョゼフはガリアをより盤石にし、いっそう権力を強めるだろう。

復讐などできない。

もし誓約を破ってそれをすればおそらく保護してくれたすべての国が敵になる。

孤立無援でジョゼフ王を倒せるはずがない。

否定すれば、彼は治療を行わずお母様は救えない。

むろん復讐に協力などもしないだろう。

いままでと同じ、お母様を治療する手立てもなく。

復讐がいつ行えるかもわからずに、ただ彼らの人形として生き続け機会をうかがう日々に戻る。

復讐さえ諦めれば、お母様は助かる。
その後の安全も彼と彼の協力者が確保するだろう。
もうこんな生活を続けることもない。
だけど。
だけど！
「悩むということは復讐心はあったようだね。でも考えてみて欲しい。君は本当に復讐などする理由があるのか？」
「なにをいうの？　お父様の仇を討ちたい、そう願ってなにが悪い」
「母親を見捨ててまで仇を討ってそれからどうする気だ？　女王にでもなるのか？　女王になってなにをする？　オルレアン派の貴族は喜ぶだろうがそんなものは君からすれば赤の他人だろう？　第一今まで彼らが君を少しでも助けてくれたのか？　話を聞く限りそうとは思えないがな」
貴族たちは……わたしに期待していた。
……期待していただけだった。
誰も手を差しのべてはくれなかった。
一緒に立ち上がろうとはしなかった。
誰もジョゼフに逆らおうとすらしなかった。
「君は仇を討ちたいと言うが、君の父を殺したのは誰か知っているのか？」
「ジョゼフ以外誰がいる？」
「短絡的だな。他にも候補はいくらでもいる。君の父を快く思わなかった者、ジョゼフ派の貴族、ガリアの内紛を期待した他国の者という線もあるな」
容疑者はいくらでもいるぞと手を広げてみせる。
そのうちどこの誰が殺したのか、もう知る術はないと。
そしてそれにジョゼフ王が関与したと証明するのは絶望的だと。
「時間がかかりすぎたな。とっくに暗殺者は口封じされて墓の下。証拠は消え失せているだろうさ。そして裏で手を引いていた者がいたとしても特定など出来るわけがない」

不可能だという。
「しかもジョゼフ王を殺して、その後は本当にどうする気だ？　まさか復讐を果たしたら後はどうでもいいとか言うなよ？　大国ガリアが群雄割拠状態になるぞ。仮にガリアの女王になるとして、君はガリアをどうしたいんだ？」
答えられない。
ジョゼフ王を討つ。父の仇を討つと復讐心を燃やしていた。
だけどその後のことなど、考えていなかった。
わたしが女王？
女王になってどうする？
ガリアをどうする？
「十中八九、君はオルレアン派やジョゼフ王に不満をもった貴族に利用されるだけだろう。王といってもなんでも出来るわけではない。臣下の協力を得られない王などただ玉座で孤立するだけだ。もっとも喜ぶのはジョゼフ王を内心嫌っていた貴族どもだ。ただ下を向いて耐えていただけで君がジョゼフ王を取り除いてくれた。邪魔者が消えた。なんともありがたい。後は好き勝手できるとね」
わたしは、そんなことのために復讐したいわけでは。
「君の願いはどっちだ？　母親と一緒の暮らしか、玉座で一人孤立する女王の地位か。好きな方を選ぶといい」
わたしは気がつくと涙を流していた。
そんなもの選ぶまでもない。
わたしは、ただお母様を助けたかった。
わたしのせいで、わたしの身代わりに心を壊されたお母様を助けたかった。
「さあ選ぶといい。僕の手を取って母と共に生きるか、この部屋をすぐに去って孤独な女王として生きるか」
彼のさしだした右手を見つめわたしはただ泣いた。
泣けば誰かが助けてくれる。
そんな甘いことはありえないと誰よりも知っているつもりだった

のに。
ただ泣いて。
復讐を諦めたくはない。
お母様も助けたい。
どちらも嫌だと駄々をこねるように泣き続けた。
「タバサ、君は僕の友人だ。君が僕を頼ってくれるなら僕の力の及ぶ限り君を守ることを誓おう。ただ復讐はだめだ。君はそんなことよりももっと幸せになる生き方をしなければいけない」
優しく頭を撫でてくれる手の温かさ。
かけられ声の心地よさ。
「君は幸せになるべきだ。僕ならできる。僕の元に来るんだ。そして僕の側にいればいい。お母さんと一緒にみんなで幸せに暮らせばいい。ジョゼフ王が玉座で仕事に追われている様子を指さして笑いながら、僕らはただ幸せに生きればいい」
優しい声がわたしの胸に染み渡る。
先ほどまでわたしを責めるかのような厳しい男の人はもういなかった。
ただ優しくわたしを受け入れてくれる少年がいた。
優しくて、温かくて、頼ればきっと助けてくれると信じられるような不思議な雰囲気を持つ少年。
「お願い……お母様を助けて」
わたしはただそれだけを少年に願った。
少年は優しく肯くと泣きじゃくるわたしを優しく抱きしめてくれた。
「幸せになるんだシャルロット。復讐も仇も忘れて、ただ幸せに生きるんだよ」
耳元でささやかれる声が、まるでお父様のようでわたしはまた涙があふれてきた。
わたしは見つけたのかもしれない。

復讐も仇も捨てる代わりに、わたしを助け守ってくれる強い人。
わたしのイーヴァルディ。
わたしの勇者は仇を討ってはくれない。
わたしの勇者は復讐の手助けなどしてくれない。
けれどわたしの勇者はガリアという魔城から、ジョゼフという悪い魔法使いからわたしとお母様を助け出すと約束してくれた。
ならばわたしはすべてを捨てて見せよう。
そして彼の言葉通り、ずっと彼の側にいて、彼に守ってもらおう。
わたしはとらわれのお姫様。
お母様を人質に、鎖につながれたお姫様。
彼はわたしにお姫様であることを捨てる代わりに、わたしを救い出してくれると約束してくれた。
ならば捨てよう。
復讐も仇も、王族のすべても。
ああ、わたしのイーヴァルディ。
すべてを捨てる代わりに、わたしはずっとあなたの側にいます。
イーヴァルディの勇者。
わたしの大好きな物語。
わたしは今日、わたしだけの勇者に出会った。

・ディアス視点・

「あなたの言うとおりすべてを捨てる……その代わりずっとあなたの側にいる……」
ん？
ん～？
あれ？
なぜそうなる？

なんで顔を赤らめる。
なんで潤んだ目で熱っぽく僕を見つめる。
ぼ、僕はなにかおかしな事を言ったか？
あ。
あ～。
僕の元にこいとか。
僕の側にいろとか言ったな。
アレって聞きようによってはプロポーズにも聞こえるのか？
そしてそう解釈したのか？
いや、まずくないか？
彼女はガリアの王族だぞ？
しかも亡命する条件が、王族としての権利の放棄だぞ？
それが僕の側にって、もし僕と結婚なんてことになったら大問題じゃないか？
えーと。
いまさら前言撤回できる雰囲気じゃないな。
どうしよう？

それとやっぱり今回の話はあまりトリステイン側に利益はないんだよな。
強いていえば将来ガリアの王家の血筋を取り込めるというところか。
あとはガリアの不穏分子であるシャルロット王女を穏便に引き取ることでジョゼフ王に恩を売るという形にできればいいのだけど。
オルレアン派からは恨まれるかな？
シャルロット王女を厚遇すれば、だいじょうぶかもしれないが。
となると、僕との婚姻という方法も悪くない。
冷遇された日陰者の王族が将来の大公国の大公妃になるのだ。
そしてさらに将来、僕とシャルロットの子をアンリエッタ王女の子に嫁がせれば、トリステイン王家はガリア王家の血筋も取り込め

るだろう。
すでにアルビオン王家の血も引いているアンリエッタ王女だ。
さらにガリア王家の血も取り込めば、ハルケギニアの始祖の末裔の血のほとんどを受け継ぐことになる。
なにより歴史と伝統にこだわるトリステイン貴族にとっては喜ばしいことかもしれない。
むろん気に入らないという者もいるだろうが……。
僕の腕の中でなんだかすっかり心穏やかに身を任せているタバサ。
うん。
可愛いネ。
なんでこんなに懐かれているんだろう？
かなり酷いことも言ったはずなんだが？
最後に優しい言葉をかけたからか？
責めて泣かして、優しく慰めて惚れさせるって。
どんだけ鬼畜な女ったらしだよ。
あー！
もうしょうがない。
なるようになる！
「シャルロット……心配はいらない。僕が必ず助けてあげるからね」
「うん……ありがとう」
頬を染めて小声でささやく。
なんか小動物っぽくて、なんだか守ってくださいというオーラが出ているよ？
可愛いなぁ、おい！
しかし、まぁ苦労するのは我が父上なんだけどね。
まぁ僕も動くけど。
まずはウェールズに万が一の時に手を貸してくれるように手紙で説得だな。
そして父上に事情を説明して協力してもらう。
ヴァリエール公爵への工作は父上に任せた方がいいだろう。

トリステインを動かし、アンリエッタ王女を動かし。
ガリアと交渉する。
時間がかかるな。
上手く事が運べばいいが。

二十五章　シャルロット（後書き）

強引ですかね？
死をよそおうというのは他の作品で読んだことがあるので、
素直に亡命してもらうことにしました。
しかし見ようによってはガリアから嫁をぶんどったようにも見えるかな？
それもありですね。

責めて泣かして、優しく慰めて……落とす。
なんというか主人公が天然で女ったらしになりました。
タバサのハートをゲットです。
うん、悪党ですね。
人の弱みにつけ込んでいます。天然で。
それでもサイトなんぞにはくれてやらんのじゃぁ！

ここまで書いておいて「亡命無理でした」にはしないのでだいじょうぶです。
ご都合主義？
いまさらでしょう？
タバサが手に入ればそれでいいんです。
ジョゼフにもサイトにもくれてやらん。
うちのタバサは幸せにならないといけないんだ！
人形？　はっ、フザケんな。
ハーレムの中の愛人扱い？　犬でも抱いて寝ていろ！

……ふぅ、少し熱くなってしまったヨ。
幸せになるといいなぁ。
モンモランシー？　だいじょうぶ。

彼女のことも大好きだからネ。

二十六章　亡命と母娘

・ディアス視点・

あれから一ヶ月あまり、忙しい時間を過ごした。
まず父に連絡を取ると、父は急いでトリステインの別宅にやってきた。
そこでタバサを連れて父に会い。
亡命の件と彼女の母親の治療のことを話す。
我が父はどこか遠い目をした後、「任せておけ」と請け負った。
タバサに僕に話したことをそのまま話させたのが効いたのかもしれない。
他国のこととはいえ、王族がそれほど悲惨な目に遭っているとなれば同情を引くには十分だろう。
まして王族の権利すべてを捨てて亡命を希望している。
しかも由緒あるガリアの直系王族だ。
いろいろな意味で無視できる話ではない。

我が父上は優秀だった。
すぐさまヴァリエール公爵と連絡をとり貴族たちへの根回しを依頼すると、アンリエッタ王女にガリアのシャルロット王女の悲惨な扱いを訴え、彼女が王族としてのすべてを捨ててでも亡命を願っていると話した。
クルデンホルフ大公国は独立国とはいえ、外交はトリステイン王国に押さえられている。
この件はトリステインが主導になって行われなければならない。
アンリエッタ王女はシャルロット王女と自らお会いになり、その話を聞き涙を流して協力を約束した。
そして立ち会った僕に、必ず彼女の母親の病を治すようにと手を

取ってお願いされてしまった。
その上で二人ともクルデンホルフ大公国への亡命を認めると。
もちろんガリアとの交渉では彼女たちがガリア王族としての権利を放棄していることは伝えるとも言ったが。
そのあたり無条件に同情して受け入れたわけではないらしい。
評判を聞く限り、あまり才覚豊かな方とは聞かなかったから。
意外に頭の回る人なのかと見直した。

それでトリステインは一応シャルロット王女に同情的な空気に持って行けた。
中には過激な意見を吐く者もいたらしいが父やヴァリエール公爵が押さえつけた。
シャルロット王女を擁してジョゼフ王を打倒したらどうか？
ふざけるなと言いたい。
その戦争を避けたいから苦労しているのだと殴ってやりたい。
アルビオンもウェールズからの手紙で「トリステインとクルデンホルフ大公国の方針を支持する」と約束してくれた。
手紙の末尾に「ガリアのシャルロット王女はそんなに君好みの女性だったのかい？」などとからかいの文句が書いてあった。
頭に来たので「とても可愛らしい方だよ。うらやましいだろう」と返事に書いてやった。
くそう、まるで僕がシャルロット王女に惚れてこんなことをしでかしたように！
ウェールズによればアルビオンではさっそく噂が流れ、ガリアでのシャルロット王女の苦労が語られ、留学先のトリステインでクルデンホルフ大公国の子息と出会い、彼が今すべての力を使って王女を救い出そうとしていると拍手喝采だと語っていた。
嘘をつけ！
どうせ全部君が流した噂だろうが！
悪辣なガリア王と悲劇の姫、そして姫を助ける若き公子。

ウェールズが手を叩いて喜びそうな噂だ。
ガリア王の評判を落としつつ僕を持ち上げ、さらに自分がそちらに味方していることでちゃっかり自分の人気もあげる。
君のやりそうなことだよ。親友よ。

ところがそれがトリステインでも広まり、悲劇の王女とそれを救おうと奮闘する公子という物語が大流行になってしまった。
ち、父上？　さてはウェールズに乗っかりましたね？
確かに風評操作として有効なのは認めますが……ますます僕の退路がなくなっていく。
数度目かの謁見でアンリエッタ王女は「二人の婚礼の時は是非参加したい」などと仰りやがりました。
た、退路が……。

ガリアとの数度にわたる交渉の結果。
シャルロット王女とオルレアン公爵夫人の亡命は穏便に認められた。
条件は二人が今後ガリア国内に関わらないこと。
子が生まれた場合、その子にはガリアの王位継承権が与えられないこと。
二人の身分の返上は不要だが、以後公的な場所でガリア王族として活動することを禁止すること。以下細々と。
意外な内容だった。
ガリア王族としての資格を持ったまま亡命してもいいというのだ。
ただしガリア王族としての活動は許さないし、ガリア国内の問題に関わることも許さない。子が生まれても王位継承問題に関わることはありえない。
ガリアの名は残す。ただし実は一切与えない。
ガリアの王族としての名を残すことが問題だった。
仮にシャルロット王女がトリステイン貴族の誰かと婚姻した場合。

彼女は亡命した身分なしの状態ではなく、ガリア王族として嫁入りできる。

たとえなんの権力もなくてもだ。

嫁入り先の家も彼女をガリアの王族出身として遇さなければならない。

ただの名もない亡命者を引き取ってやったなどと大きい顔が出来るはずもなく、これは彼女の将来にとってプラスになるだろう。

わざと条件を甘くして反発を防いだのかと評判だった。

その頃には周囲の空気はかわいそうなシャルロット王女と悪辣なジョゼフ王で一色だったから。

どう考えても十代の少女と、弟殺しの疑いのある男では分が悪い。

ジョゼフ王はシャルロット王女を国外に出し、以後ガリアに関わらせないだけで十分と考えたのかもしれない。

そして妙な条件が付け加えられていた。

「オルレアン公爵夫人の治療に来るであろうディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ殿下を首都リュティスに招き、王城でジョゼフ王と謁見して今後のことを話し合うこと」

意味不明だ。

今後を話し合うのなら、すでに十分担当者と話し合った。

さらに話し合いが必要なら、トリステイン関係者か我が父クルデンホルフ大公と話し合うのが当然で、現在学生でしかない僕が出向く理由がない。

しかし向こうは「これは陛下の強い意向でして」と引っ込めない。

おかげで僕はジョゼフ王と謁見する羽目になった。

だいじょうぶだろうな？

僕は今回の事態を引き起こした張本人だぞ？

その不安はトリステイン側もあったのかガリアに護衛の同行を認めさせた。

しかしジョゼフ王か。

人望のあった弟一派を粛正し、大国ガリアを小揺るぎすらさせず

に治めた『無能王』に興味はある。
無能のはずがないと僕は確信していた。
配下に有能な人物がいるとも聞かない。
ならば今ガリアを割らずに見事に落ち着かせているのは彼の実力だろう。
大国ガリア。そういうが大国ならではの弱点がある。
国土が広すぎるのだ。
そしてそのほとんどは貴族たちが治めている。
つまり貴族たちが不満を持ち結託すればあっという間に内乱の一つ二つは起きかねない国なのだ。
その国を治める王。
まさか「姪がこれからお世話になります。どうぞ幸せにしてあげてください」なんて話ではないだろう。
ないだろう……たぶん。

そして僕は魔法衛士隊グリフォン隊隊長ワルド子爵と、その部下十数名に護衛されてガリアに向かった。
竜籠に乗り、タバサを連れて彼女の母親の元へ向かう。
竜籠は二つ用意され、一つは治療後、僕がワルドたちに護衛されて王都リュティスへ向かう。
もう一つはタバサとその母親を乗せ、護衛をつけてトリステインにもどされる。
さすがに彼女たちをジョゼフ王のお膝元へ連れて行くのは危険だと判断されたのだ。
竜籠の中でタバサはずっと僕の手を握っていた。
「だいじょうぶ、必ず治してあげるからね」
「うん」
話しかけると少し緊張が解けたように微笑んだ。
彼女にとって念願の時が来たのだ。

オルレアン公の屋敷は寂しい場所だった。
人の気配がなく、建物も古びていた。
僕はタバサの先導で屋敷に入った。
供をするのはワルドだけで、他の隊員は周囲を警戒している。
老執事に出迎えられ、僕らは公爵夫人がいるという部屋へ向かった。
「お母様……」
タバサが扉を開け、母親に声をかける。
戻ってきたのは怒声だった。
「なんです！　ジョゼフの手先がまた私のシャルロットを襲いに来たのですか！」
タバサの身体が震え、ワルドは目を見開いた。
僕は事前に状況を聞いていたから、ある程度冷静にその光景を見ていた。
目の前の夫人は、心を病んでいる。
人形を胸に抱き、それを娘と思い込み。実の娘を襲いに来た刺客と認識する。
ずっと母親に罵声を浴びせられ続けたタバサを思うと胸が痛む。
僕はすっと自然に足を進めた。
「何者です！　無礼な！」
「ご無礼をお許しくださいオルレアン公爵夫人。自分はシャルル殿下が生前目をかけていただいたオルトルス・ダルクの息子でディアス・ラグ・ダルクと申します」
椅子に座りこちらを睨みつける彼女の前で会釈し、膝を突いて彼女に頭を下げる。
彼女は心を病んでいる。
無理矢理の治療はしたくない。
ならばここは騙すしかないだろう？
「オルトルス・ダルク？　聞かぬ名前ですが」
「しがない貧乏貴族でありました。しかし魔法の腕前をシャルル殿

下に格別に評価していただき父は働きどころを得ていたのです」
夫人は表情を緩めた。
「おお、夫の家臣であったか。父は息災か？」
「いえ、シャルル殿下の死後父はジョゼフによって卑怯にも闇討ちされました」
「おお、おお……なんと、そのような非道なことを行うとは」
「家もなにもかも失ったわたくしですが父の言葉は憶えております。父はシャルル殿下にとても感謝していました。いつか恩返しがしたいと申しておりました」
「なんと、なんとも惜しい忠臣を失ったものか……その方も苦労したであろうに」
「いえわたくしごときの苦労など公爵夫人とシャルロット殿下に比べればなにほどのことはありません」
夫人は機嫌良く肯いて、僕の労をねぎらった。
「わたくしはトリステインで魔法の修行をしておりました。そしてふとしたことから水の精霊と契約し、あらゆる病も毒も効かなくなるという奇蹟をたまわることができました。一度しかつかえない奇蹟でございます。ならば大恩ある公爵夫人とシャルロット殿下に使うのが父の心にもかなうと信じ、こうして御前にまかりこしました」
「おお、ならば是非娘にその奇蹟を！　わたくしはもういいが娘には健やかに生きて欲しい」
夫人は歓喜して胸に抱いた人形をこちらに見せた。
古い人形だった。
胸になんともいえない悲しさが広がる。
自分よりも娘を。
夫人は心を壊してなお娘を想っていた。
けれど彼女の娘は離れた場所でじっと母親の様子を見つめている。
母親はそんな実の娘に見向きもしなかった。
ただ人形を大事そうに抱え、こちらに期待の視線を向けている。
「では……我が盟友よ。来てくれ。そして彼女を癒やして欲しい」

空中に水が集まり、それは人型になった。
僕はもう水を用意しなくても水の精霊を召喚出来る。
風や大地、炎もだ。
この世界は彼らの世界だと知ったからか、精霊魔法の使い手として成長したからか。
水の精霊は期待に表情を輝かせる夫人を前に沈黙し、そしてその力を振るった。
夫人が眠るように、椅子にももたれかかる。
「うまくいったかな？」
「盟友よ。おぬしは本当に多芸だな。実に見事な芝居であったと我らが根源が笑い転げておる」
あの精霊王か。
結局僕はまだ精霊王に会っていない。召喚もできないでいる。
「そうかい。それで首尾は？」
「うむ、この者はすでに健常よ。毒もすべて清め、精神も癒やした。問題ない。すぐに目覚めるであろう」
「ありがとう。またよろしく」
「本当におぬしは我らを扱き使うやつじゃの」
水の精霊が去るとタバサが近づいてきた。
「治ったの？」
「ああ、すぐに目が覚めるそうだ」
おそるおそるタバサが母親に近づいていく。
タバサが母親の顔をうかがっていると、夫人の目が開いた。
「……シャルロット？」
「はい……お母様」
夫人は慌てて立ち上がるとタバサを抱きしめ、その身体を確認しはじめた。
「どこも怪我はない？　身体が痛いところはない？　だいじょうぶ！？」
タバサは涙を流して、そんな母親をなだめた。

「だいじょうぶです。お母様のおかげでわたしはどこも怪我などいたしませんでした」
娘の顔を涙の浮かんだ瞳で見つめ、夫人は本当の娘を抱きしめた。
足下にある古びた人形。
娘の代役を務めた人形。娘から母親を取り上げ続けた人形。
拾おうかと思ったが、やめた。
これについてもタバサと夫人が話し合うことだろう。
夫人はどうも心が壊れた間の記憶がないようだ。
きっとタバサの代わりに毒酒を飲んだその瞬間から、彼女の時間は止まっていたのだろう。
だというのにすぐに娘を認識できたのは、さすが母親というところか。
「ワルド子爵、僕らは部屋を出よう。彼女たちには落ち着ける時間が必要だ」
「はっ……了解いたしました」
そしてワルドを連れて部屋を出た。
後は二人だけで話し合うべきだろう。
老執事も一緒に部屋を出た。
「ありがとうございます！　今まで誰も治せなかった公爵夫人を治療してくださされたこと。感謝の言葉もありません」
「友達との約束だったからね。しばらく二人きりにしてあげよう。積もる話もあるだろうしね」
「はい、こちらで部屋を用意します。ご休憩ください」

「ワルド子爵。周囲の状況は？」
「特に異変はないようです。偏在を放ってもみましたがなにもありません。ここまでなにもないと不気味ですな」
用意された部屋で部下からの報告を受けたワルドにたずねるが異常はないという。
あるいは。

「もうジョゼフ王にとって彼女たちは特に価値がないのかな？」
「まさか、オルレアン公爵の夫人と娘です。いくらトリステインと話はついたとはいえ、そう簡単に諦めるとは思えません」
少し楽観しすぎかな。
「そうか、警戒をよろしく頼む」
「お任せください」
周囲の警戒は部下に任せ、ワルド自身は僕に張り付いている。
タバサたちにはそれとなく隣室に部下と自身の偏在をつけているらしい。
優秀な隊長ぶりだった。
ワルドの読みでは一番危ないのが僕であり、次がタバサ、そしてオルレアン公爵夫人だという。
夫人はタバサへの人質として、タバサはオルレアン派が崇拝するシャルロット王女本人である故に。
この二人はジョゼフ派だけではなくオルレアン派からも狙われる可能性があるという。
前者は殺害、後者は誘拐だろうと。
そして両者の恨みを買っているのが僕ということになる。
ジョゼフ王の手元から弟の忘れ形見を取り上げ、オルレアン派からはその旗印を失わせた。
なんでもワルドは僕のリュティス行きを知り、かなり強引に護衛に名乗り出たらしい。
それほど危ういとみたという。
アンリエッタ王女も魔法衛士隊最強といわれる彼ならばとそれを認め、こうして同行しているわけだが。
正直うっとうしいほどの完璧な護衛ぶりだった。
部屋に入って僕が椅子に腰をかけても、扉の前で直立不動でいる。
椅子をすすめても頑として承知しない。
ただひたすらに周囲に気を配っている。
なんとも完璧な護衛ぶりだ。

まるで自分がトリステインの王子にでもなった気分だよ。
うんざりするね。
そう考えるとうちはわりと自由だったんだなと深々と思う。
「ワルド子爵。すでに知らせてあるが、モンモランシーは仲間になった」
「はい」
「僕はタバサも誘おうと思う。彼女の素質はモンモランシーをも凌駕する」
「よろしいかと思います。今回のことで殿下に恩を感じているでしょう。協力してくれる可能性は高いと考えます」
僕たちは肯きあった。
僕たちにとって今回の亡命騒動も重要だが、やはり最も重要なのは世界の破滅の回避だ。
彼女はそのために必要な仲間になるだろう。
なんとか説得しないといけないな。
「殿下、そのことは帰国後にお考えください。今はジョゼフ王を警戒された方がよろしいかと」
「そうだな。だがタバサを捕らえていた魔城へおもむかなければならないのは気が重いな」
「先方がなにを企んでいようと必ず殿下をお守りします」
「頼りにしているよ。ワルド子爵」
「はっ」
ほんと、実際なにを企んでいるのだか。
あるいは僕に興味を持ったのか？
あり得るが、迷惑な話だ。
「ジョゼフ王か、味方にできれば頼もしいのだけどね」
ガリア一国が味方になれば最悪の展開にも対抗できるだろう。
最悪の展開。
僕らの準備が間に合わず風の精霊の封印が破れた場合。
『悪魔』はハルケギニアの地に災厄を振りまくだろう。

眷属である魔物を集め、この地を蹂躙するだろう。
その時のための準備も必要だろうか？
だが多くの人に明かせる段階ではない。
ウェールズにもヴァリエール公爵にも明かしていない秘事だ。
ジョゼフ王が信頼できる人物であれば……。
「期待は薄いか」
タバサに聞く限り、あまり信用できそうな人物とは思えない。
ジョゼフ王を敵視する彼女のいうことだから鵜呑みにはできないが。
さて、どうしよう？
すべてはジョゼフ王を見定めてからか。

二十六章　亡命と母娘（後書き）

タバサの亡命ほぼ成功。
お母様も治療完了。
よかったよかった。
と、すべて終わったわけではなく。

着々と布陣される包囲網。
きっと笑いながらそれを眺めている親友ウェールズと、もう諦めて開き直った父上が着々とディアスを追い詰めています。
うん、もうすぐ詰むネ。

そして、
なにを企んでいるかわからないジョゼフ王と対面しなければならないのです。
さてどうしよう？
ジョゼフ王の性格……こういまいちイメージが固まらないのですよね。
物語の流れ的に魔法が使えないから無能扱いされているけど、大国ガリアを無事に治めている手腕のある王ですから。
原作通りの壊れっぷりは、うちの物語的にちょっと違うかなと感じています。

二十七章　無能王

・ディアス視点・

謁見は非公式のものとなった。
王城に招かれた僕はワルドを供に謁見の間に足を踏み入れる。
途中杖を預けるはめになり、ワルドがかなり難色を示したが一国の王と会うのでは仕方がないと渋々了承した。
「いざとなれば切り札を使う」
「承知しました」
あいにく僕らは杖がなくても魔法が使える。
あまり公にしたくないが、魔力制御法とさらに精霊魔法を使ってでもいざというときはここを脱出するつもりだ。
僕ら二人が本気で暴れたらこの綺麗なお城が廃墟になるね。

「ようこそ、クルデンホルフ公子よ」
玉座から立ち上がり役者のような仕草で両腕を広げ、ジョゼフ王は歓迎を示した。
聞いた年齢よりも若々しい。
ずいぶんな美男だな。
伊達男のワルドも彼には及ばないだろう。
謁見の間に他に人影はなく。
あくまで非公式、個人的な対面なのだと思われた。
「初めまして、ジョゼフ陛下。私はディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフと申します」
「私は殿下の護衛でジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド子爵であります」
我々の名乗りにジョゼフ王は表情をほころばせた。
「高名なクルデンホルフの天才とトリステイン最強の近衛騎士に会

えて嬉しく思う」
さてさて、嬉しいですか。
僕としてはめんどくさい限りなのですがね。
「今回は陛下ご自身が私如きにお目にかかりたいとはいかなる理由でしょうか？」
「謙遜されるな。今回のことの発端もその絵図を書いたのもその方であろう？　正直このような真っ正面から姪をかっさらわれるとは考えていなかった。余は興味を覚えてな」
光る目がこちらを射すくめる。
要はかんに触ったということか。
「思い通りに事が運んだわけではありませんが、シャルロット王女に名ばかりとはいえ王族の地位を与えたまま亡命させるとは思いませんでした」
「その方が扱いに困るだろうと思ってな。王族であることを捨てた子供ならどうとでもできるだろうが、王族の名がついて回る以上、そうそう手軽には扱えまい」
嫌がらせか。
ま、妥当なところだろう。
実際彼女が王族の名を持ったまま亡命と決まったとたん目の色を変えた貴族連中もいたらしい。
我が息子の嫁に、とね。
それをウェールズが流し、父が乗った噂が押さえている。
まず第一候補は、王女を救ったディアス殿下だろうと。
「で、その方は我が姪を妻にするのかな？」
「その方が彼女を守れるならば、そうします」
「愛しているからではなく、か？」
「友人とは思っていますが、あいにくまだ愛していると断言できません。好意はありますし、彼女になんの不満もありません。妻に迎えるならば愛することになるでしょう」
くっくっくとジョゼフ王はおかしげに笑った。

「おかしな男だ。ではその方はただの友人を救うためにこんな大騒動を起こしたのか」
「結果から見れば、そうなります」
「結果から見れば、か？」
「はい」
少しジョゼフ王は考え込んだ。
「別の思惑があった……いや、むしろそのためにこそ今回の騒動はあったのか？　誰も知らぬその方だけの思惑があるのか？」
「そう思われてもかまいません。ただ自分がシャルロット王女の安全を願ったのは真実本心です。彼女たちの安全を確保し、かつこちらに不利益のないように彼女の母上を治療するには他に方法がなかった」
「ただ治療すれば騒ぐものもいただろうな。それを嫌ったか」
「ガリアの内乱に巻き込まれて大戦を起こしたくありませんでした」
「大戦か、見てみたかった気もするが……その方は戦が嫌いか」
「ええ、大嫌いですとも」
視線を交わし、笑いあう。
「そうか大嫌いか、余はどちらかといえば退屈の方が大嫌いだな」
「それはもったいない。退屈こそ人生を楽しく生きる方法であるのに」
「それは何故に？」
「退屈だからこそ、好きなことができます。なんでも考えられます。目標や使命に追われていてはできないことです」
「その方は退屈しておらぬようだな……退屈に憧れるということは退屈を知らぬということだ」
「そうかもしれません」
「その方には目標やら使命があるのか？」
「あります」
「それはなんだ？」
「お教えするわけにはいきません」

あっさり拒絶されて、ジョゼフ王は苦笑した。
「教えられぬようなことなのか？」
「ええ、そう考えられて結構です」
ふむ、とまたジョゼフ王は考え込んだ。
「それはそなたの二つ名に関することか？　『精霊』のディアス？」
隣でワルドがわずかに緊張した。
それを見てジョゼフ王が笑った。
「そうか、その男はその方の部下か」
ワルドはあまりこういう交渉ごとには向かないな。
いや、相手が悪すぎるか。
こんなにあっさりつながりを見破るってどういう目をしているんだ？
「同志のようなものですね」
「ふむ、おもしろいな。あまりにもおもしろいから余も秘事を教えてやろう」
秘事ときたか。
笑顔で促す。
「それはなんでしょう？」
ジョゼフ王は実に楽しそうな笑顔で言った。
「その方ら、もうじきこのハルケギニアが滅ぶといったら信じるか？」

ワルドが唖然とし、僕も顔をしかめた。
この男、どこまで気がついている？
ただのはったりか？
それとも風石鉱脈のことか？
それによる大陸浮遊現象か。
あるいは精霊の異常。『悪魔』のことは気がつくはずがないが。
「ハルケギニアの地下深くには莫大な風石鉱脈がある。その風石の魔力が暴走する。するとどうなる？　大地はかのアルビオン大陸の

ように浮き上がるだろう。いやいやあれほど綺麗な形を保って浮き上がるのは全体の何割であろうか？　そのほとんどは崩落し、人々は土砂と共に落ちていくだろう」

この男、そこまで知っているのか。

「知っているようだな。まだまだ甘いぞクルデンホルフの小僧。考えが顔に出る」

「あまりのことに驚いてしまいました」

ごまかせないだろうな。

どうもこの男、ウェールズ以上の腹黒だ。

認めよう。

このガリアの王は無能ではない。

それどころかガリアの天才の名は彼にこそふさわしい。

今までガリアを治めてきた手腕。

目の前にたいして感じる存在感。

わずかな会話でこちらの秘密に触れた知恵。

いや、これは事前に調べられていたか？

どちらにせよ。無能に出来ることではない。

彼は天才だ。

その呼称にふさわしい才能がある。

主に政治と、謀略かな？

「そなたは精霊の加護を受けたらしいな？　ならば聞いたのではないか精霊の秘密を」

「なんのことでしょう？」

「この地の精霊の力が乱れていることだ」

まて、これはさすがに異常だ。

なぜそれがわかる？

メイジであっても精霊の異常などわかるはずがない。

わかるとしたら僕と同じ精霊使い。

あるいは精霊から事情を聞いたもの。

どういう事だ？

「なぜ精霊の力が乱れているとおわかりに？　おそれながらどんなに熟練のメイジでも精霊の異常などわかるとは聞いたことがありません」
「メイジではわからぬ。ならばわかる者に聞けばいいだけのことだ」
わかる者？
精霊についてわかる者……。
そうか、エルフか！
「……エルフですか？」
ジョゼフ王は唇の端で笑った。
「そうだ。その者から聞いた。この世界の危機を、そしてそれは人の手ではどうにもならないことをな」
エルフなら、精霊の異常を感じ取れるだろう。
彼らは先住魔法の使い手だ。精霊の力の使い手ならわかっても不思議はない。
だが、そこまでだろう。
精霊と意志を交わさない限り『悪魔』のことを知ることはできない。
「だがおかしなことがある」
ジョゼフがこちらを見つめた。
「順調に魔力を溢れさせていた風石鉱脈が突然おとなしくなった。まるでもう暴走などしないと思われるほどにな」
「まるで暴走して欲しいように聞こえますね。喜ばしいことなのでは？」
「エルフでさえ不可能と断言したことをやった者がいるのだ。興味がわくというものだろう」
「なるほど、確かに」
「おまけに、ならば精霊の異常が解消したのかと思えばそうでもないらしい。何者かが風石の暴走を押さえているのだ。どこかの誰かがな」
これは確信しているっぽいな。

確かにそんなことができる。その可能性をもつ者は。
精霊の加護を得た者。
つまり僕だけだろう。
少なくとも僕はもっとも有名なその候補者だろう。
どうしようかね。
すべてを打ち明けて、協力を願うか。
だけどな。
どうもこの人、物騒なことを考えてそうなんだよな。
「陛下は大陸の破滅を願っているのですか？」
「それもおもしろかろうと思っている。なにもない退屈な日々よりかはな」
おもしろそう。
退屈が嫌い。
まるで子供のようなことをいうおっさんだな。
「ではそれよりもおもしろい話があったら興味を引かれますか？」
「話によるな」
さて、どうなるか。
「ある世界が危機に瀕しています。それは恐るべき敵が現れたからです。精霊はその敵を滅ぼせずになんとか封じました。その結果精霊の力のバランスは多いに狂うことになりました」
ジョゼフ王は興味深げにこちらを見ている。
「状況を打開するためにはその敵を滅ぼすしかありません。そして精霊たちは一人の勇者を見いだします。彼に使命を与え、精霊たちは彼に協力することにしました」
ジョゼフ王の目が若干見開かれた。
「勇者は一人ではその敵にかなわないことを知りました。勇者は仲間を求め、また仲間と共に自らも鍛えました。そしていつの日か勇者はその敵に仲間たちと共に挑むでしょう」
「勇者は勝てるのか？」
「さぁ、かつてこの世界にその敵が現れたときにかつての英雄たち

はそれを倒したそうですが、なにぶん現代の勇者は非力な小僧なので一人ではとてもかなわない。仲間を鍛え、自らを鍛え、挑もうとしているようです」

「それで、どうなる？」

「勇者は考えます。自分たちが間に合えばいい。ただ敵を倒すだけ、それだけです。だが間に合わなかった場合。その敵は封印を破りこの世界に大いなる災厄をまき散らすことでしょう」

「ほう、それはそれは」

「どうでしょう。勇者は間に合うでしょうか？　あるいは勝てるでしょうか？　見てみたくはありませんか？　まるで物語の英雄のように勇者たちが戦いに行き、勝利できるかどうか」

ジョゼフ王は笑い出した。

大きな声で笑い。

そして言った。

「おもしろいな、それは」

「おもしろいですか？」

「ああ、最高だ。そこらの芝居など比べものにならない、何しろ本物の英雄の物語を見られるかもしれないのだ。滅多に見られるものではあるまい」

「ええ、その時代に居合わせているのは不幸なことかもしれませんが」

「不幸？　不幸とはなにをやっても充足感を得られないことをいうのだ。余はこれほど心が躍ったのは久しぶりだ」

ジョゼフ王は味方になるか？

せめて邪魔だけはして欲しくないが。

「勇者を妨げる者がいるとすれば誰だろうな？」

「勇者とその仲間は系統魔法ではない魔法を使います。それでなければ敵に勝てないからです。ロマリアあたりが知れば文句を言いたいところでしょう。彼らにとっては始祖の与えた魔法こそが至高なのですから」

「ロマリアが嫌いか？」
「あまり好きません」
「気が合うな俺も嫌いだ」
いつの間にかずいぶん乱暴な口をきくようになったな、この王様。
「あいつらは口を開けば偉大な始祖と始祖の与えた魔法というが、それほど魔法が偉大か？　それほど偉大ならばなぜ今も多くの平民が苦しんでいる？　なぜ魔法や始祖は彼らを救わないのだ？」
ふむ、どうしよう。
少し本音を出すか？
ロマリアが嫌いならば、僕の本音を聞けばあるいは共感を得られる可能性もある。
下手をすればロマリアに密告されて立場が悪くなるが、非公式の会談の内容を漏らすのは信用に関わる。まぁ、方法はいくらでもあるけどな。
それに今のロマリアを敵にしてもあまり怖くない。
周辺国に頭を下げて援助してもらうことでなんとか体面を保っている状態だ。
クルデンホルフも当然援助している。
その跡継ぎに難癖をつけたらどうなるか？
こっちが孤立する可能性よりも、ロマリアが各国からそっぽを向かれる可能性が高い。
誰だって回収の見込みのない金銭を払うのは嫌だからな。
各国が援助を絶つ口実になり得る。
それに今のロマリアよりは現在の僕の方がはるかに人気が高い。
今回の亡命騒動でずいぶん名前をあげたからな。
少しくらいの無茶ならできるだろう。
ここはロマリアに悪党になってもらい、ジョゼフ王の共感を得るべきだろうか。
ならばぶっちゃけますか。
「理由は簡単でしょう。すべては支配するための方便だからです」

ジョゼフ王はこちらを見て、また大口を開けて笑った。
痛快に感じただろうか。
誰もが思い、誰も口に出さないロマリアとブリミル教の本質だからな。
「現にロマリアの衰退ぶりはすさまじいと聞いております。それほど偉大な始祖を讃える総本山がなぜそのようなことになるのか？理由は簡単です。始祖は子孫やハルケギニアの人々を救わない。魔法は支配のための力、それだけでしょう」
この男はブリミル教を嫌っている。
理由はおそらく魔法が使えないためにこれほどの男が無能扱いされたことだろう。
魔法至上主義の源泉はブリミル教だ。
魔法が苦手という一点で蔑まれた彼がブリミル教に好意的なはずがない。
そういえばルイズはどうだっただろう？
普通に始祖を讃えていたが、内心思うところはなかったのだろうか？
僕は始祖の残したこの風潮が大嫌いだ。
魔法が使えるだけでえらい？
ふざけるなと言いたい。
おかげで貴族は支配することに慣れ、普通の統治さえまともにできない貴族が多い。
うちではありえないが、特に理由もなく虐待を受ける平民だっているらしい。
なぜその力で人を救おうとは思わない？
僕自身が世界を救うことを強要されているだけに余計そう思う。
力を与えたから世界を救えと放り出され四苦八苦しているのに、貴族たちはそこそこの力を持ちながらそれを支配のためのあたりまえの力としか思っていない。
「驚いた。魔法の天才と聞いていたからてっきり始祖を讃える敬虔

な信徒かと思ったがな」
「僕にとって魔法は技術の一つです。信仰の対象ではありません」
「始祖さえか」
「昔そんなえらい人がいたらしいですね」
ついにジョゼフ王、噴き出したよ。
「愉快だ。おまえは実におもしろい男だ。最初の印象では弟に似ているかと思ったが、話してみると中身はまるで別物だ」
「シャルル殿下はどのような方でした？」
若干興味がある。
ガリアの天才と呼ばれた男だ。
どんな人だったのだろう？
「そうだな真面目で誠実で有能な男だった。魔法の天才でな。皆の人望も厚かった」
どこか懐かしむようなジョゼフ王に僕は眉をしかめた。
次々と弟に対する賛辞の言葉が出てくる。
誰にでも優しくて、思いやりがあって、裏表がなく。また才能を鼻にかけることもなかった。
……なんだその完璧超人は？
僕やウェールズでさえ外面はともかく内面はかなり問題のある人間だぞ？
他人ならともかく、実の兄に対してもそうだったのか？
「シャルロット殿下も似たようなことを言っていましたが、僕にはどうも信用できません。世の中そんなに完璧な人間はいません」
意外な顔をしつつどこかなにかに憧れるような、忌々しいような表情でジョゼフ王はこちらを見ていた。
そんな顔で見るな。
僕がそんな完璧超人だとでも思っているのか？
「おまえだってクルデンホルフの天才と呼ばれた男だろう？　まれにいるのだ世界に愛された人間がな」
ふん、笑止なり。

「僕の夢を知っていますか？　毎日本を読み、本に囲まれて自堕落に暮らし、たまに妹と一緒に遊べればそれで十分なのです」

あ、ジョゼフ王が固まった。

「ウェールズなんてプリンス・オブ・ウェールズなんて呼ばれて外面は完璧ですが中身はとんだ腹黒ですよ？　彼がアルビオンでなにをやっているかは陛下もよくご存じでしょう？　自分に刃向かいそうな輩をまとめて処分するのに熱中してますよ。少なくとも誠実とか人格者からはほど遠いですね」

天才と呼ばれるからよくわかる。

どれほど外面を取り繕うのに苦労するかということを。

「天才の正体なんてそんなものです。僕は父上に跡取りとしてせめて外面だけでも取り繕ってくれと頼まれて仕方なくですし、ウェールズだって将来の国王だから人気があった方がいいと外面を取り繕っているだけです」

「そういえばおまえはアルビオンのウェールズ皇太子と親しいと聞いていたが、そんな男なのか？」

「アレは僕以上の腹黒ですよ？　男だったら思わず殴りたくなるほど外面を取り繕う天才ですが」

いやぁ親友じゃなかったら絶対毛嫌いしただろうな。

「シャルル殿下も似たようなものでしょ。天才という評判があるから必死に外面を取り繕っていたんじゃないですか？　実際しんどいのですよ天才という評判は。どこに行っても人目がある」

ついにジョゼフ王、肩を振るわせ涙を流して笑い転げた。

「そ、そうか、天才は外面を取り繕う天才か！　なるほど言われてみれば弟は確かにうさんくさかったな！」

「面倒なんですよ？　本当に……下手なことするとあっという間に評判が地に落ちますからね。プレッシャーも相当です。僕の場合そんなことをしたら両親からどんな叱責を受けるか、正直それが怖いので必死に外面だけは立派にしましたよ？」

「ふ、ふはは！　そ、そうか！　大変か！　そういえばあの時の

あやつももしかしたら必死に外面を取り繕っていたのかもしれんな……いい弟、立派な人格者としての外面を」

笑い死ぬんじゃないかなと思っていると、不意に真面目な顔をして過去を懐かしみはじめた。

「いや、よい話を聞いた。礼に食事でもどうだ？　ガリアの料理もなかなか味わいがあるものだぞ？」

どこかなにかを吹っ切った表情でジョゼフ王は食事に誘ってきた。

断るのも無礼なので引き受けたが……おい、ワルド。

必死に笑いをかみ殺しているようだが、笑ってもいいぞ？

・ワルド視点・

今日は死ぬかと思った。

まさかあの完璧を絵に描いたような殿下があんな考えをもっていたとは。

しかし考えてみれば彼もまだ子供だ。

あたりまえのことかもしれない。

しかし、あの殿下のどこか投げやりな口調と、斜に構えた態度！

思い返すと笑いが止まらない。

普段が貴公子然としているから、その殿下があんなふてくされた子供のような態度を取るとおかしくて仕方がない。

しかし、そうして腹を割って話したおかげかジョゼフ王の態度もだいぶ打ち解けたものになりその後の食事会も和やかな雰囲気で行われた。

「では姪のことをよろしく頼むぞ。実家から奪っていったのだから責任をとれよ？」

そうジョゼフ王に言われた殿下の表情が、また笑えるものだった。

・ジョゼフ一世視点・

今日は愉快な少年に会った。
俺はなぜそう考えることができなかったのだろう？
周囲の期待に応えるため本心を覆い隠し、必死に立派な自分を演じている。
あの少年もアルビオンの小僧もそうらしい。
ならば我が弟だけが例外であるはずがない。
確かにあいつにかかる期待は大きいものだった。それに応えようとしたら本心など顔に出せるはずがない。
完璧な人間などいない。
嫌なことがあっても笑顔でやり過ごし、自身の評判に傷をつけない。
そうして生きてきた弟があの場面で取る態度はなんだ？
「おめでとう兄さん。兄さんこそ王にふさわしい」
本心がどうであれ。
いい弟、人格者、誠実で真面目な人物。
そういう評判の通りの自分を演じるとしたら他に言いようなどあるまい。
まさか自分こそが王になど口が裂けても言えないであろう。
あれもプライドの高い男だったしな。
自分が指名されずに無能の俺が指名された。そこで俺を指弾したらどうなる？
少なからず王位を狙っていたとみられるだろう。
それだけの野心を隠していたと。

そんなことはできないのだとあの少年は言う。
どこに行っても人目がある。評判が地に落ちるなどあっという間

だと。
　自身を守るためにも、あの場でシャルルは俺を称えなければならなかった。
　たとえ本心がどうであれ、俺を認めて祝福しなければならなかった。
　弟であるから、ガリアの天才と称される優れた人物が野心と嫉妬に駆られて兄を責めるなどあってはならないから。
「俺は思いつかなかったな……天才と祭り上げられた同士わかりあえるということか」
　あの少年も幼くして天才と周囲にもてはやされた。
　アルビオンの小僧もだ。
　だから二人は親しくなったのかもしれない。
　同じ苦労と悩みを知る故に。
「収穫はあったか？」
　そう問いかけると、背後にあの男が現れた。
　おおかた魔法で姿を隠してずっと様子を見ていたのだろう。
　ビダーシャル、俺に協力してくれるエルフだ。
　向こうは向こうの思惑があるようだがな。
　こちらはこちらで利用させてもらう。
「あれほどの精霊を従える者は我が同胞でさえいないだろう。間違いない。あの少年は精霊に選ばれた者だ」
　あれほど「蛮族が精霊の加護を得るなどありえん」と断言していたが本人を見て気が変わったか、確かに非凡な雰囲気を持った少年だった。
「彼の言う敵とはなんだ？　精霊でさえ滅ぼせずに封じているという。彼の話が本当なら過去にも現れたはずだが」
「わからん。帰ってから調べてみることにしよう。少なくとも嘘を語ってはいなかった。精霊の祝福を受けた者が言うことならば、無視はできない」
　このエルフでも知らないか……さて調べてわかることかな？

結局あの少年は詳しい事情はなにも明かさなかった。
まだ俺が信用できるか、判断がつかなかったかな？
「一つ忠告をしておく。彼がもし本当に世界の敵とやらに挑む者であるのならば彼らに害なすことは我らが許さない」
「ずいぶん入れ込むものだ。まだ事実かどうかもわからんのに」
「忠告はしたぞ。精霊の祝福を受けた者が全力をもって戦う敵だ。邪魔することは許されない。もし彼らを害するのであれば我らはこれ以上の協力はできないだろう」
ふん、つまり敵対するということか。
そこまで断言できるということは、こいつはなにか知っているな？
「わかった。調べが終わったら俺にも教えて欲しい。確証が持てれば俺も安心できる」
「約束しよう。調べがついたら貴様には教える。だが事は重大なことのようだ。けして他言するなよ？」
「約束しよう」
すっとビダーシャルが離れていく。
おそらくエルフ本国の指示を仰ぐつもりなのだろうな。
俺はどうするか？
もはや世界の破滅などどうでもいい気がする。
ならばあの英雄の物語を鑑賞するのもいい。
上手くいけばアレは姪の婿になるのだからな。
今までさんざんな仕打ちをしていまさら叔父貴面をするのもどうだろうな。
いや、むしろその方がおもしろいか？
ふふ、シャルロットはどんな顔をするだろうな。
この俺が急に優しい叔父に様変わりしたら、きっと化かされているのではないかと疑心暗鬼に陥るのではないか？
それはそれで見てみたい。
なんだ。
この俺にも楽しみがあるではないか。

なるほど退屈だからこそ、いろいろ考えるか。
今まではシャルルのことばかりで頭がいっぱいでそんな暇がなかったか。
あの少年にはいろいろ教わってばかりだな。
そのうち礼をしなければならんな。

二十七章　無能王（後書き）

天才は天才の正体を知る。
というわけでジョゼフ王のトラウマをカウンセリングしました。

ジョゼフ王を敵にすると物語の展開的に戦争ルートに行きかねないので、ちょっと好意的立場に立ってもらいます。
これで主人公はトリステイン、アルビオン、ガリアの三国につながりをもちました。
ロマリアはうちではどんどん落ちぶれていきます。

他国の王にいきなり本音ぶちまけるのはどうかと思いますが、それが一番効果的と判断したのなら、いいのでしょう。たぶん。
非公式の対面だし。
先に言葉を崩したのは向こうですし。

チクリとジョゼフ王に釘を刺されてもいます。
シャルロット大公妃、ほぼ確定ですかね。

二十八章　婚約者

・ディアス視点・

なぜこうなった？
僕の目の前にとてもイイ笑顔の両親がいる。
そして僕の両隣にはタバサとモンモランシーがこれ以上ない笑顔で座っている。
向かいの隅の席ではベアトリスが殺意のオーラをまとっている。
もう一度言おう。
なぜこうなった？

・クルデンホルフ大公視点・

また我が息子がやらかした。
今度は国家規模の外交問題だと？
しかし話を聞いてみれば確かに心情的に見過ごせぬ問題ではあるし、上手くいけば被る不利益は最小限にできる。
どうせ止めても止まるまいと観念して、私はこの件に全面的に協力した。
アルビオンから例の噂が流れてきたときには、かつて会った貴公子然としたアルビオンの小僧の顔が浮かび、絞め殺してやりたいと殺意さえ抱いた。
悲劇の姫と悪辣なガリア王、そしてそれを救うクルデンホルフ公子の奮闘。
民衆の好みそうな物語までできあがっている。
私は可能な限りディアスを正面に押し出す気はなかった。
そんなに大袈裟にする気はなかった。

内々に、裏でこっそりと話をまとめてそれでおしまいにするつもりだった。

それが不可能になった。

一躍息子は時の人になった。

それも悲劇の姫を救うヒーローとしてだ。

私は諦めた。

これはもうこの流れに乗るしかないと。

その結果はきっと息子にとっても不本意なものになるだろうが、断じて私のせいではない。

恨むならおまえの親友を恨め。

そして当然のように亡命後のシャルロット王女の身の振り方が問題になり、そして自然に息子の嫁にという流れになった。

当然だ。

ちまたの噂や物語では姫と公子が愛しあい。公子が全力で姫を助け出しそして結ばれるだろうと皆が期待している。

噂だけの問題でもない。

実際亡命したガリア王族をどう扱うか？

一番いいのは国内の有力者の子息との婚姻で、トリステイン貴族として取り込むことだ。

その第一候補は、当然我が息子になる。当然だ。

この問題を持ち出したのも息子ならば、もはや国中が息子の物語の英雄じみた行動に拍手喝采の状態だ。

これで他の誰ともしれぬところに嫁がせたら民衆が暴動を起こしかねん。

そこまでいかなくても不満には思うだろう。

民衆は綺麗な物語を望む。

物語のハッピーエンドは姫と公子が結ばれて、めでたしめでたし以外にはありえないだろう。この場合は。

それに他の誰に嫁がせても角が立つ。

亡命先はクルデンホルフ大公国なのだ。

しかもガリアの直系王族。並の貴族では釣り合わない。
王族としての資格を失ったのならともかく、その名前は残されることになったから余計始末が悪い。
と、なるともう我が息子以外に選択肢はないのだ。
マザリーニ枢機卿は渋い顔をし、ヴァリエール公爵もおもしろくなさそうだったがな。
マザリーニの魂胆はわかる。
これを機にクルデンホルフがガリア寄りになることを警戒しているのだろう。
ヴァリエール公爵は、どうも娘を我が息子に嫁がせようと画策していたらしい。
横からかっさらわれてはおもしろくあるまい。
しかしここでやはり問題が起こる。
次代クルデンホルフ大公と大公妃が、トリステインよりもガリア寄りの存在になったらどうするかという疑念だ。
そこで手を上げたのが、
モンモランシ伯爵だった。

・モンモランシー視点・

まるで夢のようだった。
突然トリステインの別宅に呼びつけられ、何事かと思ったら。
「いいか、我が娘よ。おまえはクルデンホルフ大公家、ディアス殿下の婚約者になる」
お父様がなにをいっているのか、いきなりのことで理解出来なかった。
そんな私にお父様は丁寧に説明した。
「ガリアのシャルロット王女がディアス殿下と婚約する。おそらく将来の大公妃になるだろう」

しかしそれではクルデンホルフはガリア寄りの家になってしまう。
そう危惧されている。
ならばもう一人、トリステイン側からも妻を迎えればいい。
トリステインの有力貴族であり、クルデンホルフとも関係の深い我が家はまさにうってつけなのだと。
「私がディアスの妻になったら、モンモランシ家はどうなります？」
「心配するな。しばらくは私がいるし、私の死後はおまえがモンモランシ家の当主代理になる」
「当主代理？」
「うむ、そしておまえの産んだ子が次代モンモランシ伯爵家を継ぐことになる」
そういう方法もあるのだと父は笑った。
モンモランシ家はなんの問題はない。
そして私はディアスの元に嫁ぐことができる。
夢のような話だった。
「立場的におそらく大公妃の地位はシャルロット王女に譲ることになるだろうが、それでもただの側室とは違う。おまえはトリステインを代表して嫁ぐのだからけして粗略にはされないだろう」
そんなことはどうでもいい。
大公妃の名誉なんていらない。
私はただディアスの側にいたい。
この話が本当なら、私は一生をディアスの側で添い遂げることができる。
ディアスが私を冷たく扱うなど想像もできない。
あの優しいディアスはきっといきなり二人の妻を得たことにうろたえるだろうが、必死に不器用でも二人とも愛そうと努力するだろう。
彼を独り占めできないのは少しだけ残念に思うが、それは贅沢だろう。
大貴族の当主を一人の女が独り占めできる方がまれなことなのだ。

「どうかな私の愛しいモンモランシー。ディアス殿下との婚約に賛成してくれるかな？」
父の問いに私は歓喜の感情を抑えきれなかった。
「喜んでディアスのもとへ嫁ぎます」
後で父が言うにはその時の私はとても美しい笑顔を浮かべていたそうだ。

・タバサ視点・

今、わたしはお母様と二人でクルデンホルフ大公家のトリスティン別宅で過ごしている。
しばらく学院を休んで、思う存分お母様に甘えていた。
ジョゼフの元に向かったディアスのことが心配だったが、彼を信じて待つしかない。
そんなわたしたちの元にクルデンホルフ大公が驚くべき知らせをもってきた。
母とわたしに新たにクルデンホルフ大公国の貴族の地位を与えること。
それによって公の場所にも参加できるようになること、ただしガリアに関わることは慎んでもらいたいという注意は受けた。
そしてわたしはディアスの婚約者となること。
将来はクルデンホルフ大公妃におそらくなるであろうことを告げられた。
「急なことで気持ちの整理ができないとは思うが、これが一番安全にあなた方を守る方法なのだ。できれば受け入れて欲しい」
そう言って頭を下げたクルデンホルフ大公にわたしは言葉が出なかった。
わたしがディアスの妻になる。
夢想したことがないわけではない。

あの時から、もしそうなれば幸せだろうなと思っていた。
だけどそれが現実になるなんて……。
戸惑うわたしにお母様が優しく声をかけてくれた。
「シャルロット、これは大公殿下のご好意です。ありがたくお受けしなさい。あの方ならば心配はいりません。きっとあなたを幸せにしてくれます」
「お母様……」
わたしはなにをいったらいいかわからなかった。
けして嫌なわけではないのです。
むしろ嬉しいのです。
けれどなぜか怖い。
踏み出してしまえば、もう引き返せないような。
なにかがすべて変わってしまうような恐怖感が背中に張り付いているような。
「あなたはディアス殿下をどう思っていますか？」
「……好きです」
「なら覚悟を決めなさい。好きな人と一生を共にする覚悟を、あなたは私の可愛いシャルロットではなく、ディアス殿下に愛され、ディアス殿下を愛する一人の女になるのです」
ディアスを愛し、愛される女。
その覚悟。
「だいじょうぶです。あなたがどんなに変わっても私の娘であることに変わりはありません。もしつらいことがあったらいつでも泣きに来なさい。その時は私がディアス殿下を叱ってあげます」
わたしは……ディアスが好きなのだろう。
一生彼の側にいられる。
それはとても幸せなことだろう。
彼の愛を受け、彼を精一杯愛する。
それはとても幸福な生き方だろう。
ただ……一つ心配なことがある。

彼はわたしになにか隠している。
わたしだけではなく、大勢の人に隠している秘密がある。
最初はあの魔法こそ彼の秘密なのだと思った。
系統魔法とは違う。強力な魔法。
けれどしだいに疑問が出てきた。
なぜ彼はそんな魔法の訓練をしていたのか？
なぜそんな魔法をモンモランシーにだけ教えていたのか？
そしてかつてわたしが感じたわたしと同じ匂い。
彼はなにか重大な目的を持っているのではないか？
そしてそれを周囲には秘密にしている。
彼の婚約者となれば、あるいは打ち明けてもらえるのだろうか？
いや、こちらから打ち明けるように迫ろう。
わたしは彼の力になることを決めている。
どんな目的であろうとも、わたしはディアスについていく。
そう、妻としても。
「そのお話、確かにお受けいたしました」
わたしはクルデンホルフ大公にそう言って頭を下げていた。
なにがあろうとディアスはわたしが守る。
今はまだ力が足りない。
だがきっと彼の力になれるように努力する。
妻としても、きっと魅力的な女性に成長して彼の側にいられるように努力しよう。
キュルケにでも相談しよう……彼女は異性から見たら大層魅力的らしいから。

・クルデンホルフ大公夫人視点・

息子の巻き起こした大騒動が一段落し、ついでに息子の婚約者が決まりました。

それもいきなり二人も。
思わず目眩がしましたよ。
モンモランシ伯爵の娘と、ガリアのシャルロット王女。
婚約が内々に決まり二人が挨拶に来ましたが、まぁなかなかいい子たちのようです。
モンモランシ伯爵のご息女は貴族令嬢らしく、物腰も上品で可憐な少女でした。
シャルロット王女もガリア王家の血を鼻にかけるでもなく、丁寧にこちらに礼を尽くしていました。
多少不満と言えば、あまりにも幼く見えることでしょうか？
年齢を聞いてみると１４歳とのこと。
成長には個人差がありますし、まだ仕方がない年齢かもしれません。
あと数年もすれば女性らしく成長することでしょう。
それに息子の好みは妹を溺愛する性格からして、おそらく彼女のような小柄で男性の保護欲をくすぐるタイプは好むでしょう。
ロリコンではないでしょう。たぶん。
でも間違いなくシスコンなので、妹じみた彼女をきっと息子は多いに気に入ることでしょう。
ああ、この娘たちが将来息子の嫁になるのですか。
私のディアスの嫁に……。
私からディアスを奪っていく小娘どもなのですね？
笑顔で応対しながらも、節度ある態度でディアスに接するようにと釘を刺しました。
婚約者になったぐらいで私のディアスを好きにできると思ったら大間違いです。
少なくとも結婚までは、私の大事な息子です。
ええ、結婚までは私のモノです。
その後は仕方がないから嫁たちに譲りましょう。
これはもう仕方がないですから。

本当に……この娘たち相手にディアスが鼻の下を伸ばしていちゃいちゃする光景を思い浮かべると思わず魔法で吹き飛ばしたくなります。

でも自制しなければ。

いつかは嫁に取られるとわかっていたはずです。

そう、いつかはと覚悟をしていましたが……。

いきなりは心の整理ができません。

婚約は認めましょう。婚約者として対応もしましょう。

でもまだディアスは私の大事な息子で私のモノです。

まだこの子娘どものモノではありません。

少なくとも結婚までは……そのぐらいのわがままは許されるべきでしょう？

だって大事な一人息子ですよ？

それが学院に通い出したと思ったらいきなり婚約者ができる。

しかも二人も。

私の意志とは関係ないところで！

嫁は私が厳選する気でいたのに！

しかしこれもこうなったからには仕方がありません。

受け入れましょう。

私もいい大人ですからね。

小娘どもに嫉妬して八つ当たりなんてみっともないことはしないのです。

さて、今夜は久しぶりに魔法の特訓でもしましょうか。

もちろん一人でです。

今日は倒れるまで撃ちまくりましょう。

まったく。

本当に。

私のディアスが。

なんでこんな急に。

いきなり二人の婚約者なんぞ。

やってられません！

・ディアス視点・

かくして、僕に二人の婚約者ができました。
シャルロットとモンモランシーです。
シャルロットは今まで通りタバサという偽名で学院に通い続けることになりました。
もちろん身元責任はガリア王国からクルデンホルフ大公国に変わっていますが。
結婚は学院卒業後、時期を見てということになりました。
「いいか、それまで間違っても手をつけるなよ？　相手はガリアの王族とトリステインの総意で嫁いでくる娘なのだからな」
いやだなぁ、我が父上。僕がそんなに手がはやい男に見えますか？
……というかどう接していいかすらわかりませんから、あとで心得でも教えてください。
タバサの家名であるオルレアンの名前はいろいろ不都合があるので以後公的には名乗らず。
以後はシャルロット・エレーヌ・オリオールとなる。
オリオール伯爵家をオルレアン公爵夫人が名乗ることになった。
なんか似た名前で紛らわしいな。
ガリアに対する嫌がらせかなにかですかね？

僕の婚約者になった二人が幸せそうに微笑んでいるのと対照的に終始不機嫌なのが我が妹ベアトリスでした。
あー、妹よ。
お兄ちゃんは婚約しても我が愛しいベアトリスのお兄ちゃんだから心配するな。
だから、もう遊んであげないとか言わないで。

婚約者のお姉さまと遊べばいいですわとか言わないで。
僕にとってのオアシスなんだよ？
僕から心の安息を奪わないで欲しい。

こうして亡命事件は幕を閉じることになる。
うん、なんというか予想外な展開だね。
しかし婚約者か。
本当にどうすればいいんだろう？
ああ、父上、そんな呆れた顔をしないで僕に婚約者と接する心得を伝授してください。
しかたがないでしょう？
今まで婚約者どころか恋人すらいなかったのにいきなり嫁候補二人ですよ？
僕にどうしろというのですか？

二十八章　婚約者（後書き）

めでたく婚約が決まりました。

タバサもモンモランシーも幸せになるといいですね。

モンモランシーも政治的配慮から婚約となりました。

ルイズ？

あっちはヴァリエール公爵家ですからね。

ガリア王族とヴァリエール公爵家の娘を嫁にもらったら、クルデンホルフはトリステインを乗っ取れそうです。

きっとマザリーニさんが必死に止めたことでしょう。

二十九章　婚約騒動

・ウェールズ・テューダー視点・

我が親友が婚約した。
相手はガリア王女シャルロット殿下とトリステイン貴族モンモランシ伯爵家令嬢だ。
悲劇の姫を救った公子、そして二人は末永く幸せに暮らしましたのさ。
いい物語だ。
おまけにその公子の親友が姫を助けるために手を貸したところがなおいい。
おかげで僕の評判も上々だ。
言ってはなんだが父上はモード大公粛正の件で人気がなくなっていたからな。
ここで僕が人気を稼いでおけば王位継承もスムーズに行くだろう。
すでに実質アルビオンの王は僕といっても過言ではない。
もう笑いが止まらないね。

そんな僕が辟易しているのは僕自身の婚約話だ。
親友であり、僕より年少のディアスが婚約したのだから、僕もそろそろということだろう。
国中の貴族の娘が毎日紹介されてくる。
正直もうしばらくは女性を見なくてもいい気分だ。
次期アルビオン王として、王妃候補を決めておくことは重要だ。
問題はそれをどこから連れてくるかだが。
やはり国内をまとめる意味でアルビオン貴族の娘をもらうのが一番だろう。
しかし中には違う意見の者もいて他国との親交のためによその貴

族の娘をすすめてくる者もいる。

もっとも有力視されるのはクルデンホルフ大公国のベアトリス姫だ。

クルデンホルフ大公国自体が裕福な国であり、アルビオンの交易先としても強力な存在だ。

しかもクルデンホルフ大公は現在のトリステインの実権をなかば握っている状態だ。

正直王女のアンリエッタより、クルデンホルフ大公の方が権力があるという状態だからな。

ヴァリエール公爵家とクルデンホルフ大公家が両輪となり、アンリエッタ王女の側でマザリーニ枢機卿が支えている。

正直トリステインは貴族の力が大きくなりすぎた感がある。

これでは王家の威信は低下するだろう。

実際それを心配してマザリーニ枢機卿がディアスをアンリエッタの夫に迎えようと画策していたらしい。

巨大な権力を握る大公の息子を王家に抱え込み、その力を吸収しようと企んだ。

だが、今回の亡命騒動とその後の婚約でその企みは潰えた。

きっと歯ぎしりして悔しがっていることだろう。

僕としてはほっとしたような残念なような微妙な気分だ。

ディアスにならば安心して僕のアンを任せられた気もするが、それでも彼にだけは取られたくないという気持ちもある。

どちらにせよ過去の話だ。

ガリア王女を婚約者にした以上。もうこの話が出ることはないだろう。

そしてディアスだ。
クルデンホルフ大公国の跡取り息子。
僕と親交があり、国内外の人気も高い。
あげくガリアのジョゼフ王とも面識があり、その関係は意外に良好であるらしい。
婚約の祝いとしてトリステインやクルデンホルフとは別にディアス個人宛に山のような祝いの品が届いたらしいからな。
どうやら気に入られたらしいと評判だ。
僕はジョゼフ王がどういう人物か直接は知らないが、ディアスからの手紙によると。
「けして油断するな。王としてならおそらくハルケギニア一だろう」
我が親友にそこまで言わせるのだから、無能王などではあるまい。
ジョゼフ王のことは警戒しておくとしても、
我が親友も十分警戒が必要な相手だ。

次期クルデンホルフ大公。
次期アルビオン王たる僕の親友であり、ガリア王ジョゼフと親交を持ち、ガリア王女をおそらく大公妃に迎える。
トリステインの大貴族の令嬢を同時に娶るのだから念が入っている。
クルデンホルフ、トリステイン、アルビオン、ガリアと彼の影響力はすさまじいの一言だ。

ガリアへの影響力は微妙だが、シャルロット王女のガリアへの不干渉などの約束事などジョゼフ王が死んだらどうなるかわからない。
その子の王位継承権問題もだ。
現在の次期ガリア王は不透明だ。
おそらくジョゼフ王の息女イザベラ王女になるだろうが、彼女はまだ未婚だ。
婚約者さえいない。

王位継承の子が生まれるのは当分先、あるいは生まれないかもしれない。
そうなれば王位継承の資格問題がクルデンホルフ大公妃の子にかかってくる。
シャルロット王女の子だ。

王位継承権を認めないなんて約束は、自国にちゃんとした王位継承者がいる場合の約束だ。
王位継承者に不安を感じればガリア側はすぐにこの約束を取り下げるだろう。
そうなればガリアとクルデンホルフはますます近くなる。
そこまでいかなくてもジョゼフ王の死後、なんらかの形でシャルロット王女の王族としての権利が復活するようなことがあればそれだけでクルデンホルフとガリアの仲は近づくだろう。

トリステインの属国である小国が、まさにハルケギニアを左右する存在になるのだ。
いや、そこまで事態が動けば属国という立場もどうかな？
おそらく完全な独立を得るのではないか？
それどころかトリステインに取って代わることさえ可能では？

しかも後を継ぐのがあのディアスだ。
彼は間違っても暗愚な大公にはならないだろう。
将来を考えれば、クルデンホルフの姫を王妃に迎えるのは悪くない。
おそらく将来このハルケギニアに対する多大な影響力を得る国だ。
縁をつなぐのも悪くない。
さいわいベアトリス姫とは面識がある。
なかなか可愛らしい姫だったな。
彼女なら王妃に迎えても不満はない。

容貌も伝え聞く性格も才能も、立場もだ。

問題があるとすれば、ディアスの妹への溺愛ぶりだろう。
手紙でもさんざん妹のことを自慢していた。
あれは間違いなく妹を溺愛している。
僕の妻にといったら、なんというだろう？
少なくとも大喜びで祝福はしてくれない気がする。
もっともそれほど溺愛される姫だからこそ、王妃候補として有力なのだが。

「僕がディアスの義理の弟か……僕個人への感情はともかく、妹に不利になるようなことはできないだろうな」
未来のクルデンホルフ大公の最大の弱点を手の中に収める。
アルビオンと僕にとってそれは最大の利益になるだろう。
「そう考えると多いにありだな。真面目に検討してみるかな」
しかしそれをすると宗主国であるトリステインの立場はより危ういものとなるな。
クルデンホルフがアルビオンとガリアに血縁で直接つながる。
トリステイン本国は持ちこたえられるだろうか？

現在はヴァリエール公爵とマザリーニ枢機卿がいるが、次代のトリステインにディアスや僕に匹敵する人材はいるだろうか？
「アンにはかわいそうなことになるかもしれないな」
もし国を失ったら、その時は僕の元に来るといい。
僕はいつでも、いつまでも君を愛している。
でもそれとトリステインに対する態度は別だ。
現状と未来においてトリステインよりもクルデンホルフの方が付き合う相手としてはより条件がいいからね。
「悪い男になったものだね。僕は……」
トリステインを潰して、アンを手に入れる。

それも悪くない。
まだ可能性の話に過ぎないがね。

・アンリエッタ・ド・トリステイン視点・

大変な事件でした。
シャルロット王女の亡命騒ぎ。
その後のクルデンホルフ大公子息との婚約。
ようやく事件は一段落して皆一息ついているところです。

それにしてもマザリーニの落胆ぶりは見ていておもしろいですね。
どうやらディアス殿下をわたくしの夫にと画策していたらしいですが、見事に振られてしまいました。
クルデンホルフ大公の力を王家に取り込む。
いい方法だと思いますが、さてディアス殿下はそれほど御しやすい男でしょうか？
それほど面識はありませんが、どことなくウェールズ様の面影を感じます。
間違っても他者の言いなりにはならない王者の気風を感じました。
夫として迎えても、逆にトリステインが乗っ取られたかもしれません。
お話が流れてトリステインとしてはむしろよかったのではと思います。
わたくし個人の感想では惜しい男を逃したと思いますが。

ウェールズ様と並び称されるほどの男です。
わたくしだって女ですから彼を見て思うところはありましたよ？
けれど、彼はわたくしの言いなりになる男ではないと一目見て感じましたから、あまり彼を婚約者にという話に乗り気の様子を見せ

ませんでした。
彼は王位継承権をもつクルデンホルフ大公家の人間です。
夫とすれば、おそらく彼こそがトリステインの王にふさわしいと誰もが言うでしょう。
近い将来女王の座につくであろうわたくしにとってはいささか問題です。
むしろ将来のクルデンホルフ大公としてわたくしを支えてくれる方がよいでしょう。
彼ほどの男を逃がすのはもったいないとは思いますが。

ウェールズ様とは私的な文通を続けています。
もちろん色恋を匂わす文は一切ありません。
あくまでも王族同士、友人としてのつきあいです。
ディアス殿下とウェールズ様が親友というのは本当のようですね。
今回のことでも助力を頼まれたとウェールズ様が手紙で教えてくれました。
評判の天才同士気が合うのでしょうか？
ウェールズ様も今回の事件の余波を受けて婚約をすすめられて往生しているそうです。
実はわたくしもなんですよね。
まったく人をなんだと思っているのか。
王家の血を残すのが大事な使命なのはわかりますが、あからさまに王家の子供を産むための人間扱いされると腹が立ちます。
貴族連中が忠誠を示すのはわたくしではなく、
わたくしの血であり、いずれ生まれるわたくしの子供なのだと実感しましたよ。

結婚して子供を産む。
もしウェールズ様と結ばれたならそれを幸福と思えたでしょう。
けれどそれは不可能だと諭され、今では理解しています。

わたくしはこのトリステインを守らなければならない。
もしウェールズ様に嫁げば、トリステインは一時的にとはいえアルビオンの下に立たねばならないでしょう。
わたくしの子供がトリステイン王に即位するまで、アルビオンの属国のような扱いになりかねない。

ウェールズ様がそう望まなくても、アルビオンの貴族はそうするでしょう。
貴族というのがいかに身勝手で、自国と自己の利益を強く望んでいるか。
もう身に染みて理解しました。
トリステインの歴史と誇りを守るためには、アルビオンに嫁ぐなど夢物語です。
いっそシャルロット王女のように亡命できればいいのですが、あいにくわたくしには兄弟がいない。
いればこんなことで悩んでいませんよね。
わたくしが国を捨てればトリステインは潰えるでしょう。
それはできない。
ウェールズ様がアルビオンを守るためにがんばっているように、わたくしもトリステインを守らなければならないのですから。

さしあたってはディアス殿下ですか。
彼をなんとか味方にできれば、彼をしてわたくしをトリステイン女王と認めさせれば多くの者も従うでしょう。
ただの貴族ならそれほど悩まないのですが、彼は王家の縁戚で王位継承権さえもつ大公国の跡継ぎです。
独立を許された大公国の跡継ぎ。
わたくしでさえ、あまり彼に非礼は働けません。
名目上は一国の王子に等しいのですから。
おまけに王家はクルデンホルフ大公家に莫大な借金がありますし。

立場的にもお財布事情的にもあまり強く出られないのですよね。

……我がトリステインがここまで弱小なのが恨めしい。

最近ではクルデンホルフ大公国の方が諸国に聞こえがいい有様です。

諸外国との交易でもだいぶ稼いでいるらしいですし、ガリア王女を婚約者に迎えるし、おまけになぜかガリア王にも気に入られたらしいですし、ウェールズ様とも親友ですし。

あら、ほとんどディアス殿下のせいな気がしますね？

ホントに夫にした方がよかったかしら？

今からなんとか……なりませんよね。

ああ、もう！

どこかにいい男いないかしら？

本当に惜しい男を逃がしました……。

いっそ彼を夫にしてついでに国王もやってもらった方がよかったかもしれません。

それは無理でも、宰相としてわたくしを補佐してくれたらどれほど心強かったでしょうか。

いまさらな話ですが。

もっと積極的に彼とも婚約話をすすめておけばよかったですかね……。

・ディアス視点・

学院では僕の快挙に拍手喝采だった。

ガリア王によって冷遇された王女を救い出した英雄。

みんなそういうお話好きですね？

僕はあれからタバサとモンモランシー相手になんとか婚約者らしく振る舞おうと四苦八苦しているのに。

婚約を祝福されて悪い気はしませんが。
モンモランシーも友人たちに祝福され、タバサも周囲の人たちに祝福されていました。
今回の一件で彼女がガリアの王女であるのは公然の秘密になってしまいましたから、周囲の彼女を見る目もずいぶん変わりましたね。

僕は彼女にすべてを打ち明け、協力を願い。
彼女は了承してくれました。
「わたしはあなたの力になるのならば、なんでもやる」
なんとも力強いお言葉か。
ただあんまり力みすぎないで？
危険があるかもしれないのだからもう少し考えた方が。
「危険があるのは今までも同じ、気にならない」
そうですか……まぁ苦労したらしいからね。
そういうわけで彼女にも精霊魔法を教え、なんとあっという間にモンモランシーを抜き去りました。
なにこの天才。ありえない適応力ですよ？

これで三人。
あとはギーシュとキュルケを引き込みたい。
モンモランシーとタバサに相談すれば可能だろうとは思える。
ルイズは、どうだろう？
彼女は四大の精霊と相性が悪い。
少なくとも四大の精霊の加護を得る四人の一人としては不適格ではないか？
でも戦力になるのなら引き込みたい。
まぁのんびりいこう。
まだ時間はあるだろう。
水の精霊にも確認したが風の精霊の封印はそう簡単に破れるものではないらしい。

まだ時間はあるのだ。
焦らずじっくりと行こう。

二十九章　婚約騒動（後書き）

今回は前回の婚約騒動の結果話です。
主にアルビオンとトリステインの立場の違いでしょうか。

クルデンホルフの将来性に目をつけるウェールズと、
逃がした魚の大きさにいまさら気がつくアンリエッタです。

うちのアンリエッタはアホではないのですが英才でもありません。
普通のお嬢様です。
後になってああしておけばと後悔する普通の人間です。

クルデンホルフはお金持ち、ならばお金儲けも得意のはずだ。
というわけで交易でも手広くやっているオリジナル設定です。

あと公子という呼称もオリジナルです。
原作ではないはずです。
ベアトリスも姫殿下でした。公女とは呼ばれなかったはずです。
爵位からすれば大公子なのかなとも思いましたがそっちは聞いたことがないので、公子で統一しております。
貴族関係になるととたんに無知がばれますね。
貴族に関して、ほとんど知らないんですよ。
勉強するほどの熱意もないですし。
（追加　公子の呼称の意味を感想で教わり、自分でも調べました。
どうやら間違って使っていたようです。貴族の子供という意味なら、間違ってはいないのですが）

今回から所々に改行による余白を入れてみました。
こうした方が読みやすいのでしょうか？

もっと余白を入れた方がいいのかな？

三十章　古の賢者

・オールド・オスマン視点・

目を見張る光景じゃった。
天を引き裂く雷光が学院のすぐ側に発生した。
学院そのものを焼き滅ぼせそうな規模の雷。
わしは密かに学院に結界を張って学院を守り、その莫大な魔法に誰も気がつかぬように気を配った。
……魔法の修行を止める気はないが、あそこまで派手な魔法を学院の側で使って欲しくないの。
今度言っておかなければな。
鏡の向こうで彼も多少慌てている。
あそこまでの威力と知らずに使ったのか。まだまだじゃな。

久しぶりに精霊を召喚し、事情を聞いたが結果は予想通りじゃった。
彼は当代の英雄であり、敵はすでにこの世界におる。
今は風の精霊が封じているらしいの。
わしは尋ねずにはおれんかった。
わしは力になれないのかと。
精霊の返事は非情じゃった。
わしは再び精霊の加護を受けることはできない。
当代の英雄に運命によって選ばれた者はわしではない。
未熟な若者が、再び使命と世界を背負い戦うのか。
かつてのわしたちのように。
英雄たる人物の元に集い、力を蓄えて挑むのか。
わしは思い出さずにはいられなかった。
まだわしが若く恐れを知らない年頃だった頃に出会った青年を。

たった一人で悪魔に立ち向かった英雄を。

かつての友。
もはや家名も絶え、彼の名を語り継ぐ者もいなくなった。
地方の平民の昔語りにわずかにその名残が残るのみじゃ。

偉大なる魔法使い。
勇猛な炎。
冷徹な風。
優しき水。
穏やかなる大地。
四人の使徒と共に、
さあ挑まん。
世界の敵にさあ挑まん。
世界すべての祈りを受けて、
偉大なる魔法使い。
大いなる災いを打ち払う。
そして偉大なる魔法使い、遠い遠いところへと去る。
優しく偉大な魔法使い、もう帰らぬ。

最近では聞かれることもなくなった昔語りを口ずさみながら、わしは久しぶりに涙を流した。
おぬしは、幸せだったのか？
満足だったか？
不満はなかったか？
心残りはなかったのか？
わしはなぜもっと彼と話し、彼の胸の内を聞いてやらなかったのだろう。
ただ彼に従い、彼と共に戦うことを誇りに思い。
そして最も重要な時になにもできなかった。

彼はあの当時おそらくただ一人の神聖魔法の使い手だった。
系統魔法の天才であり、独自の魔法の開発者であり、精霊魔法の使い手であり、優れた魔法指導者であった。
似ている。
あまりにも似すぎている。
繰り返すのか、あの悲劇を。
この少年は彼と同じなのだろうか？
使命を背負い、そのために努力し、そして使命を果たすために命さえ捨てた。
だとしたらあまりにも悲しい。
わしにできることは、なにかないのだろうか……。

・タバサ視点・

夜の訓練に来ると、いつも思うことがある。
彼はなぜ、こうも世界を救うことに情熱を燃やすのだろう。
世界を救う力があるから？
それとも使命を受けたから？
どちらにせよ。
理由としては弱いと感じる。
わたしやモンモランシーには危険があるなどさんざん言っておきながら、
彼自身は危険があることなど気にもとめていないように見える。

わたし自身が復讐を目標に生きてきたから強く思う。
自分の命を賭けた目標というのは、強い想いの塊だ。
がんじがらめに凝り固まった想いがただひたすら出口に向かって突き進む、止めようもない暗い情熱だ。

もちろんわたしの復讐と彼の世界を救うという目標では天と地ほど違うだろう。
それでも思う。
彼はなにを考えて世界を救うことに邁進するのだろう。

魔法の訓練は。
モンモランシーは主に防御と治癒を、
わたしは徹底して戦闘系の魔法を習得していった。
最近では風の精霊だけではなく、光の精霊を使えるようになった。
ディアスがもっとも得意とする属性だ。
ディアスはどの精霊も不得意なく使える。
その中でも好んで使うのが基礎である力の精霊と光の精霊だった。
光といってもライトのようなただの明かりじゃない。
邪悪を滅する聖なる光、らしい。
実際人間だったらチリ一つ残らないと彼は断言している。
彼の得意技を自分も使いたくて、必死に練習して習得した。
精霊魔法『破壊の光』
あらゆるものを焼き尽くす光による砲撃。
さらに『光の盾』
あらゆる者を防ぐ盾。
この二つはわりとあっさり習得できたのでその先を訓練中。
悔しいことにわたしが習得した後、モンモランシーもこの二つを習得した。
……わたしとディアスだけの魔法と思えて幸せだったのに。
あっという間にささやかな幸福感は打ち砕かれた。
あの時の彼女のどこか勝ち誇った顔。
思わず魔法を叩き込みたくなった。
……ええ、そういえば彼女も婚約者なのよね。
ならば仕方ないか。
それに戦力が増えるのはいいことのはずだし。

・ディアス視点・

「ほっほっほ、がんばっとるな。生徒諸君」
ようやく現れたか、覗き魔め。
この間派手に神聖魔法の雷を使ってやったから、そろそろ出てくる頃だと思っていたぞ？
予想以上に派手すぎて僕自身驚いたことと、
覗きに気がついたのはセラファナだったことは内緒だ。
暗闇から現れた学院長にモンモランシーとタバサが緊張する。
なにしろ夜中の魔法訓練は立派な校則違反。
おまけに使っている魔法は精霊魔法と来ている。
ロマリアが元気だったら異端審問ものだね。

「なに、たいした用ではないから緊張しなくてよろしい。別に叱りに来たわけでもないしの」
そういうと練金の魔法で椅子を作って腰掛けた。
そして無造作に切り出した。
「おまえさんがた世界を滅ぼす悪魔という存在を知っておるかの？」
僕は少し緊張した。
なぜ知っている？
それを知ることができる人間は、精霊と意思を疎通できる人間ぐらいだぞ？
「そう怖い顔をしなくてよろしい。なぜ知っておるのか、それは簡単じゃ。わしはかつてその悪魔と戦った生き残りじゃからの」
かつて悪魔と戦った？
いやまて精霊王が寄越した知識によればかつての悪魔襲来はずいぶん昔の話だ。

たしか三百年くらい昔のはずだが。
「かつての英雄の仲間として、現代の英雄殿と少し話がしたくての？　それともわしの勘違いかの。そんな話はしらんかの？」
オールド・オスマンに対する情報を改めて思い出す。
魔法の達人らしい。
ずいぶん昔から生きているらしい、実は不死ではないかと噂がある。
セクハラの常習犯でユーモアセンスがずれている。
最後のはどうでもいいが。
「あなたが不死というのは事実なのですか？」
「事実ではないの。わしとて死ぬときは死ぬ。ただ人より長生きなだけじゃ」
「では三百年前の戦いにあなたは参加したというのか？」
タバサとモンモランシーが僕の言葉に驚いている。
三百年は人間にとって長い。
普通、三百年前の事件の当事者が今も生きているとは誰も思わない。
しかしオスマンは軽く肯定した。
「うむ、あの頃はわしも若くての。なかなかにハンサムじゃったからモテモテじゃったぞ」
それはどうでもいい。
オスマンは話を続けた。
「わしはとある人物に誘われてその戦いに参加した。その男は天才じゃった。わしも評判の天才だったが、その男はわしでさえかなわぬと思うほど桁の外れた男じゃった」
その男から精霊魔法を教わり、仲間を集め、ついに悪魔と戦った。
オスマンは懐かしむような寂しいようなそんな顔をした。
「誰も知らない英雄談じゃ、誰も知らないところで世界の危機はあり、誰も知らないうちに英雄によって倒された」
誰も知らない英雄。

上手くいけば僕もそうなるだろう。
誰も世界の危機があったことなど知らないままに、世界の敵を倒す。
かつての英雄は上手くやったようだな。

「……その後、英雄となった人はどうなったの？」
タバサが問いかけた。
モンモランシーも興味深げにしている。
オスマンはしばらく沈黙し、やがて口を開いた。
「英雄は世界を救った。世界を救って自らも消えた」
消えた？
それは姿を隠したということか。
確かにそれほどの力を持っていたら、周囲がやかましいだろう。
僕のように自分を守れるだけの家に生まれ、かつロマリアがこれほど力を失っている状態でなければ、姿をくらますしかないかもしれない。
「あの悪魔は強大だった。とても強かった。とても人間ではかなわないと思えるほどに強かった」
オスマンは涙を流した。
なんだ？
「わしらは増長していた。精霊魔法を操り、もはや最強の力を手に入れたと有頂天じゃった。上には上がいると気がつかんかった」
オスマンの目は僕たちを見つめていた。
とくに僕を。
寂しそうな、悲しそうな目で。
「わしらは悪魔に負けた。そう、勝てなかった。わしらの力では悪魔に勝てなかった」
「でも世界は滅びていない……」
そう、負けたのなら莫大な被害が出たはずだ。
悪魔は世界を喰らう。世界に属する者を喰らい尽くす。

ならば彼らが負ければ世界が無事であるはずがない。
なによりそれだけの大事件が起これば人々の記憶に残るはずだ。
しかし三百年前の悲劇など、どこにも伝わっていない。
「彼じゃ」
オスマンは重い口調で言った。
「彼は真の英雄だった。世界のすべての力をその身に宿し、いや神々の力さえその身に宿して悪魔と戦った。そして勝った。たった一人でな。わしらはそれを倒れ伏してみていることしか出来なんだ」
たった一人で悪魔に勝った英雄。
彼か？
精霊王に与えられた知識の中でひときわ鮮明に記憶に刻まれた姿がある。
たった一人で悪魔に立ち向かい。
傷だらけになりながらも立ち上がり、ついには悪魔を倒した英雄。
「代償に彼は死んだ。遺体すら残さずに消え失せた。彼は笑っていた。笑って謝っていた。『こんなことに巻き込んですまない』とな」
不意に強く腕が掴まれた。
タバサとモンモランシーが僕の左右の腕を握りしめていた。
まるでそうしないと消えてしまうといいたげな。心細い表情で。
「わしは負けた。わしたちは負けた。彼の力になれず。彼一人を戦わせ、彼を失った」
オスマンの目はまっすぐ僕を見つめていた。
「おぬしは負けてくれるな。おぬしたちは負けてくれるな。あのような悲劇はおこしてはならない。慢心するな、増長するな。悪魔は強いぞ。けして侮ってはならぬ」
まるで。
一人で背負って戦うな。
一人で戦って勝手に死ぬなと言い聞かされているようだった。
そこにいるのは、かつて友の力になれずに友に死なれた男だった。
僕が死ねば。

タバサやモンモランシーがこんな顔をするのか。
後悔と苦痛に苛まれ、過去の自分を呪うかのような顔をするのか。

僕は死にたくない。
今までそれは使命を果たしたあと好きに生きたいだけだった。
でもこれからは。
死んではいけないのだと。
そんなことをすれば残された仲間がこのような顔をするのだと。
思い知らされた。
僕は死んではならない。
命を捨てて世界を救っても、仲間たちは救えないのだ。
とくに婚約者であるタバサやモンモランシーは、僕が死ねばどうなるのだろう？
どこか他の男の元に嫁ぐのだろうか。
僕を助けられなかったと一生後悔しながら。

「ここまで話しといてなんじゃが、おまえさん悪魔退治の英雄で間違ってないかの？　間違ってたらわし、ちょー恥ずかしいんじゃが」
今までの表情はなんだったのかと思われるひょうきん顔でオスマンが問いかけてきた。
僕は笑った。
彼はきっと真面目な顔などしたくはないのだろう。
真面目な顔で昔を悔やむよりも、ひょうきんに道化のように笑いを誘って周囲を明るくしたいのだろう。
「ええ、精霊の使命を受けました。勝てば現代の英雄ですね」
「負ける気かいの？」
「とんでもない。僕はさっさと使命を果たして後は気楽に幸せに生きると決めているんです。悪いですが僕は命を捨てて世界を救うような立派な人間ではありません」
「ほっほ、その意気じゃ。わしにできることがあるなら気軽にいっ

てくるがいい。望むならわしの魔法も教えよう。こう見えても三百年の先輩じゃ、わしの精霊魔法も捨てたものではないぞ」

「それはありがたいですね」

「授業料はおぬしの婚約者のパンツでいいぞ」

視線がタバサとモンモランシーを行ったり来たり。

「死にたいですか？」

「冗談じゃ……おさわりぐらいならありかの？」

「なしです」

「ケチじゃの。独占欲の強い男は嫌われるぞい」

む、そうなのだろうか？

「だいじょうぶですわ、学院長。私はディアスを愛していますから、むしろ独占されたいです」

「わたしがディアスを嫌うことはありえない。というかディアス以外の男がわたしに触れたら命の保証はしない」

モンモランシーとタバサの力強い応援の言葉に僕は勝ち誇ってオスマンを見下した。

「だ、そうですよ？　学院長」

「けっ……イケメンくたばりやがれ！」

呪詛の言葉を吐きつけてオスマンは去って行った。

その姿はいつもの愉快な学院長だった。

そうか。

僕は死ねないのか。

死にたくないではなくて。

死ねない。

ほんの少しの違いだが、大きな違いだ。

僕は使命を果たすためと称して命を犠牲にすることも許されない。

もっと強くならないとな。

すべてを守れるように。

僕自身さえも守りきって勝てるように。

三十章　古の賢者（後書き）

オールド・オスマンの正体暴露。
ただの愉快なセクハラ爺ではないのです。

うちのオスマンは偉大なる賢者なのです。
やはり若者を導く老賢者はお約束でしょう。

でも表面上はお茶目なセクハラ爺です。
愛すべき馬鹿です。

初期案ではオスマンにディアスをボコってもらい「この未熟者が！」と叱ってもらう予定だったのですが、
なんだか昔話でしんみりしてしまいました。
ディアスも思うところがあったでしょう。
この話を聞いた二人もね。

悪魔に立ち向かったかつての英雄たち。
オールド・オスマンは今回、精霊に選ばれませんでした。
かつての英雄の一人で、現在最強クラスの彼が選ばれないのはぶっちゃけ作者的都合です。
オスマンが仲間になると仲間内のバランスが一気に崩壊しますから。

彼は別の形で主人公たちを助けることになるでしょう。

三十一章　タバサとモンモランシー

・ディアス視点・

あれからオールド・オスマンの言葉に危機感を感じたのか、タバサとモンモランシーが、キュルケとギーシュを仲間に引き込んだ。
僕になんの相談もなしに。
……ま、いいんだけど。

いつまでも先延ばしにしていた僕が悪いのです。
もっと早く仲間に誘って徹底的に鍛えるべきだったのです。
彼女たちの言い分は正しい。
危険だなんだと四の五の言ってないで、必要ならさっさと仲間を集めろ。
そして鍛えろ。
そうしない方がよほど危険だ。
もっともです。

二人も、
「おもしろそうだからいいわよ」
「僕が力になれるなら喜んで」
と、あっさり承諾するし……事の大きさをわかっているのかいないのか。

これでワルドも入れれば五人。
ルイズはどうしよう？
素質はある。あるけど微妙なんだよね。
彼女はなぜか四大の精霊に嫌われている。

オールド・オスマンに相談したら、
「なら四大以外を使えば問題ないじゃろ」
と軽く言われてしまった。
ごもっともだけど、僕が欲しいのは四大の加護を受ける精霊使いなんだよな。

それ以外にも戦力になるなら欲しいけど。
ルイズは微妙なんだよ。
素質ではタバサやモンモランシーに及ばず。
戦闘技術ではタバサや僕にかなわず。
とくに接近戦のダメさは致命的。
取り柄は爆発魔法だけ。
正直戦力になるの？
という感じだ。

鍛えるだけ鍛えてみるか？
彼女の勧誘は僕がしなくてはならないだろう。
うん、誘うだけ誘ってみるか。
ものになればラッキーということで。

・タバサ視点・

オールド・オスマンを師に迎えて、わたしたちは精霊魔法の訓練をしている。
さすがに三百年前の英雄の名は伊達ではない。
ディアスでも考えつかなかった魔法をほいほい使ってみせるのには驚いた。
現状ではわたしたち四人でかかっても、オールド・オスマン一人

に勝てない。
ディアスが一対一で戦ったことがあるけど、彼でも勝てなかった。
もっとも本気でやったらどうなのだろうと思うけど。
彼はあきらかに途中、大きな魔法を使おうとして躊躇し、結局使わなかった。
おそらく奥の手があるのだろう。
たぶん神聖魔法。神々の力を借りる魔法。
彼だけが使える魔法。
精霊魔法よりも強力と聞いている。

わたしはキュルケの助言に従って、ディアスと順調に仲良くなっている……はずだ。
二人で一緒に食事をしたり、休日にピクニックや買い物に出かけたり、一緒に本を読んだり。
最近では夜に彼の部屋で二人きりになるほどだ。
訓練が終わった後、彼の部屋で二人っきり。
訓練のこと、これからのことなどを話しながらくつろぐ。
ディアスのお気に入りは膝枕だ。
最初は恥ずかしかったし、彼もすごく恥ずかしがっていたが慣れてくるとなんとなく楽しい。
あのディアスがわたしの膝の上で無防備な顔で目を閉じている。
さらさらの髪を撫でると若干恥ずかしがる。
わたしもされてみたが、アレは結構落ち着くものがある。
最初こそ恥ずかしかったけど、だんだん落ち着けるようになり、もっと甘えてみたいという気になる。
なんだか子供にもどって親に甘えている気分だ。
すごくいい。
甘えるのも甘えさせるのもなんというか胸にすごく心地よい。

最近ではモンモランシーとも仲良くしている。

一番の原因は彼女がディアスとわたしにたいして一歩譲歩して見せたからだろう。
なんとなく一歩引いた立場で接してくれる。
なぜそんなことをするのかわからないが、気遣われているのだとしたら嬉しい。
わたしにとってディアスは一番大切な人だ。
その彼との仲を尊重されるのはとてもありがたい。

モンモランシーとディアスの仲もよいのだろう。
もともと幼なじみといっていいぐらい親しかったから、婚約者になってもごく自然に親しく付き合っている。
わたしも邪魔するつもりはない。
彼女も婚約者なのだから、彼と仲良くする権利はある。
この間なんて、木陰で二人仲良く座っていた。
ディアスの肩に頭をあずけて、彼に寄り添うようにぴったりと。

……ちょっとうらやましかった。
今度やってもらおう。

・モンモランシー視点・

「モンモランシー、君はしあわせなのかい？」
ギーシュの唐突な問いに私は当然のように答えた。
「ええ、しあわせよ。それがどうしたの？」
するとギーシュは微妙に眉をひそめた。
「タバサとディアスはずいぶん仲がよいようだけど」
「婚約者だもの、仲が悪かったら困るでしょう？」
「君も婚約者だろう？」

「私も仲良くしているわよ。別に嫌われても遠ざけられてもいない」
そう、ディアスもタバサも私を遠ざけようとはしない。
近づけば自然に受け入れてくれる。

「それでいいのかい。僕から見ると今の君はあまりしあわせそうには見えない」
「いいもなにもないわ。相手は未来の大公妃、正妃よ。ある程度相手をたてるのがあたりまえでしょう」
「そんなものは将来の話だろう。それにまだ決まったわけでは」
「決まったのよ」
ギーシュがぽかんとする。
「つい最近決まったの。シャルロット王女は正式にディアスの正妃になる。ガリアとトリステイン、クルデンホルフの間で決まった事よ」
そうこれは国同士の決定事項。
彼女はディアスの正妃になる。
私は……。

「君はどうなる」
「どうもなりはしないわ。私は婚約者のまま、将来は政治的理由でディアスの元に嫁ぐでしょう」
クルデンホルフがトリステインから離れないようにつなぎ止める鎖。
それが私。
「だからといって……やはりそれは将来の話だ。君がタバサに譲って二人を見ているだけという立場に甘んじる理由にはならない」
「見ているだけじゃないわ。それなりに仲良くやっているわよ」
仲良くやれていると思う。
見ているだけ、憧れるだけだったあの頃に比べれば。
触れることもできる。

寄り添うことも。
甘えることさえ許される。
叶わぬ恋と覚悟していたあの頃に比べれば私は恵まれている。

「正妃が第二夫人より愛されると決まったわけではない。君がもっと積極的になればタバサよりも君の方が愛されることだってできるだろう」

ギーシュの言いたいことはわかる。
きっと見ていて私の態度は歯がゆいのだろう。
私の気持ちをずっと知っていたギーシュならなおさら。
「そんなことをすれば私とタバサの間が上手くいかなくなるわ。ギーシュは三角関係の泥沼劇場が観たいの？」
「モンモランシー、君はディアスの元へ嫁いでしあわせになれるのかい？　僕にはとてもそうは思えない」
普通ならそうでしょう。
好きな人を独占したい。
一番に愛されたい。
そう考える女性なら無理でしょう。
「ギーシュ、勘違いしないで。私はディアスの一番になりたいわけじゃないの。彼の側にいて、彼を愛せればそれで十分なの」
「君がそこまでいうのなら、僕はもうなにもいわないよ。ただ僕たちは友人だ。なにか困ったことがあれば相談に乗るし、愚痴ぐらいなら黙ってこの胸に納めるぐらいはできる」
そう胸を張って言うギーシュはどこか寂しげだった。
「……ありがとう。ギーシュ」
もしディアスと出会っていなかったら。
もしかしたらこの不器用で、軽薄に見えて実は誰よりもまっすぐな少年に惹かれたかもしれない。

私はディアスの側にいられればいい。

彼を愛し続けることを許されるなら、一番でなくてもかまわない。
彼を独占しようなどとも思わない。
ただ彼の側にいられて、愛することを許されるだけで十分しあわせだから。
叶わない恋と諦め、それでも想い続けた日々。
それが思いもよらぬ形で叶ってしまった。
それ以上を望むのはきっと贅沢だろう。
私は彼の妻になることを許され、将来彼の子供を産むことを許された。
それだけで十分すぎる。

それが私の結論。
唐突な婚約騒ぎと、正妃となるシャルロット王女の存在に悩んだ。
その答え。
私は一番を望まない。
ただ彼を愛することを許され、たとえ二番目でも彼に愛されるならば、
それだけで十分。

ごめんね。ギーシュ。
私は結局あなたを振り回し続けて、あなたの気持ちに応えてあげられなかった。
我が儘で身勝手で、どうしようもない馬鹿女よ。
あなたはあなたにふさわしい素晴らしい女性を見つけてしあわせになって。
こんな私を今でも友人と呼んでくれる優しいギーシュ。
私はどうしようもない馬鹿だから、
二番目でも、愛する人の側にいられればいいと思えてしまうほど馬鹿な女だから。
あなたのようなまっすぐな人にはきっとふさわしくないわ。

・ディアス視点・

なんというか激動の一年という感じだった。
魔法学院に入学してたった一年で仲間が増えて、婚約者が二人できました。
しかも仲間たちや僕はひたすら強くなっています。
水の精霊にいつ頃精霊王に会えばいいのかと問いかけたら、「まだ先の話」と言われた。
さすがにまだ気がはやかったらしい。

しかし、なんていうか。
さすが精霊王の予言。
見事に仲間を見つけましたよ。
ルイズにも声をかけたら、
「そんな大事なことはもっとはやく言いなさい！　具体的にはツェルプストーよりはやく！」
とキュルケより誘われたのが後だったことに大層ご立腹だった。
世界の危機と聞いたらなにもしないのは貴族の誇りに関わるとやる気十分だし。
精霊魔法もやっぱり四大の精霊は苦手みたいだけど他の精霊なら軽々と使う。
才能は十分すごい。
やる気もある。
問題は相変わらず接近戦に弱すぎるところだな。
運動神経切れているんじゃないか？
少しは接近戦を避ける頭を使え、接近されそうになったら距離を開けるぐらいしろ。

馬鹿の一つ覚えのように魔法を連発するな。
……こいつ、戦闘センスはゼロだな。

タバサとモンモランシーとの関係も良好だ。
心配していた二人の仲も普通に仲良くしているから杞憂だったし、将来はタバサことシャルロットが正妃にモンモランシーが第二夫人になる事が決定している。
なんとなくモンモランシーがタバサに遠慮しているようにも見えるが、そのおかげで二人の間に問題が起きないのだろう。
かといってタバサが僕を独占して離さないわけでもない。
自然にモンモランシーに譲るところは譲っている。
二人がケンカしないことはなによりだ。
どろどろの三角関係なんて嫌だからな。

僕としてはタバサと仲良くしつつ、モンモランシーとも仲良くするという。
ある意味二股野郎をやっているわけだが。
……仕方ないじゃないか。
二人とも婚約者なんだし。
たまに「死ね、二股野郎」と遠くから男たちの呪詛の声が聞こえるよ。
いや、そう言われてもね？
僕の場合片方だけと仲良くすると問題が起きるのだから仕方ないじゃないか！

もうすぐ使い魔の召喚儀式だ。
確かあれって二年生への進級試験でもあるんだよね。
僕はどんな使い魔が出るんだろうね？
普通は得意系統に属する魔獣や幻獣らしいけど。
僕の得意系統は一応風って事になっているけど、四系統ほぼ全部

使えるから。
なにがでるのやら。

三十一章　タバサとモンモランシー（後書き）

キュルケ、ギーシュ、ルイズの仲間加入イベントが省略されました。

だって！

タバサイベントですでに力尽きちゃったんだから仕方ないじゃないか！

……いやぁ、全員分やる？　無理っすよ。

ルイズはサイトが来てから本気を出します。

サイトのいないルイズなんて……。

なのでサイトが来てから本気を出します。

主人公は二股野郎の称号を手に入れた！

タグに入れておこう。

ハーレムにするつもりはなかったけど。

二股野郎にはなりました。

モンモランシーは健気な女です。

なんというかタバサよりもモンモランシーの方がヒロインっぽい？

一応メインヒロインはタバサの予定だったのだけど。

なんかモンモランシーの方が書いていて力が入る。

最近不調なので、困っています。

いや、マジで。

三十二章　使い魔

・ディアス視点・

魔法学院では天気にも恵まれ、進級試験も兼ねた使い魔召喚の儀式が行われていた。
皆様々な使い魔を呼び出して、落ち込んだり喜んだりしている。
「ふふふ、カエル……わたしはカエル」
モンモランシーが隅っこで手のひらサイズのカエルをじっと見つめて寂しく笑っている。
……うん。気を落とさないように。
可愛いよ？　その金色のカエル。

そして風竜を呼び出したタバサは無表情に竜の鼻面を撫でている。
親しい人ならわかるはずだ。
アレは喜んでいる。
すごく喜んでいる。
うん、竜ってかっこいいよね。

かくして僕はどちらにも声をかけずに自分の順番を待っていた。
なんと声をかけろと？
水のトライアングルと風のトライアングルの使い魔対決。
結果はカエルと竜。
なにを言えと？

なんか理不尽じゃないか、この使い魔召喚。
タバサが風竜でなんでモンモランシーがカエルなんだろう？
実力的にはかなり近いはずなのに。
この差はなんだろうね？

「あんた婚約者なら慰めてあげたら？」
「僕になにを言えと？　僕だってなにを呼び出すかわからないのに」
もうね。
自分がなにを呼び出すか心配で。
キュルケがちょっと驚いたように口を押さえた。
「もしかして緊張しているの？」
「悪いか？」
「いえ、あなたもそういう可愛いところがあるのは新発見ね」
可愛いんですか。
僕的には胃に穴があきそうな勢いなんですが。

なにせ僕はカミサマと契約した天の眷属とやらで、精霊と契約し、その加護を得た人間だぞ？
普通の使い魔ならいい。
それこそカエルだって大歓迎だ。
カエルは別に苦手ではないからな。
ただなんだか想像を上回るバケモノ的ななにかを呼び出してしまいそうでおっかないんだよ。
まさかセラフファナを呼んだり、精霊王を引っ張り出したりしないだろうな？
そんなことになったらどうすればいいんだ？

『普通カミサマを使い魔にする人間はいませんよ。そもそも呼べません。普通は』
僕は普通だろうか？
セラフファナの言葉もなんの慰めにもならない。
『まぁ、きっとだいじょうぶですよ……たぶん』
たぶんって言われた！
うう……お腹痛いって言って休めないかな。

『なにを情けないことを……進級がかかっているんですよ。とりあえずなんか呼び出せばいいじゃないですか。問題があったらその時考えればいいんです』

なんの解決にもならねぇ。

相変わらず役に立たないな。このポンコツカミサマ。

かくして僕の順番が来たよ。

監督役のコルベール先生が笑顔で促してくる。

「ミスタ・クルデンホルフはスクエアメイジですからね。使い魔もきっと素晴らしいものが出てくるでしょう。期待してますよ」

プレッシャーをかけるなぁ！

そしてハードルをあげるな！

これでヘビでも呼び出したらどうしてくれる！

いや、別にいい。

周囲が落胆しようと笑われようとむしろそっちの方がいい。

なんというかペット感覚で飼えるような。

そんな手頃な使い魔が来てくれれば万々歳だ。

間違っても変なのが来るなよ？

「我が名はディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ。五つの力を司るペンタゴン。我の運命に従いし、使い魔を召喚せよ」

どくんと身体の中でなにかが脈動した。

嫌な予感がする。

猛烈に取り返しのつかないことをした気がする。

「おや、召喚のゲートが開きませんね。どうしたのでしょうか？」

コルベール先生がそんなのんきな声を上げる。

不意に膨大な魔力を感じて空を見上げると、そこに巨大なゲートがあった。

……おいおい。

あれ、学院より大きくないか？

そこから現れたのは、控えめにいっても大怪獣だった。

ダメじゃん。
気軽に飼えるサイズじゃないじゃん。
なにあの巨大な竜は？
皆声もなく巨大な竜を見上げている。
黄金色の姿をした巨大な竜。
人間なんぞ一山いくらで食いちぎれそうな口。
鋭いかぎ爪のはえた前足。
巨大な翼。
太く頑丈そうな後ろ足。
一振りで学院が廃墟になりそうな太く長いしっぽ。
なんか神々しい威厳まであるよ。
アレはなんでしょうね？
『な、なにを呼び出しているんですかぁ！』
セラファナが絶叫する。
なにって……でかい竜？
『アレは、神々の竜です。その世界の竜ではありません』
じゃあどの世界だよ。
『だから神々の世界の竜です。神さえ殺せる竜の神ですよ』
神殺しの竜？
『そんな感じですかね』
どっかの小説では対立する神々を滅ぼすために神殺しの竜とかいうものが活躍したらしいね。
物語の中の神話の話だけど。
『その神話の竜を呼び出したのですよ。あなたは』
……ダメじゃん。
「えっと、コルベール先生。さすがにアレは無理でしょう。送り返せませんか？」
はっと我に返ったコルベール先生。しばらく僕を見て、それから巨大な竜を見て、小さく首を振った。

「いえ、サモン・サーヴァントは神聖なものです。呼び出した以上契約しなければなりません」
マジで？
「いや、アレはいくらなんでもありえないでしょう？」
僕に大怪獣を飼えと？
コルベール先生は大きく肯いた。
「諦めて覚悟を決めてください。先生も現実を受け入れました」
確かにこの現実は受け入れるのに時間がかかるよね。
周囲を見ると、さっさと行けと身振りで示す輩がちらほら。
暴れられでもしたらたまらないからさっさと契約して欲しいのだろう。
くそう……。
「フェザーウイング」
両足の足首に小さな魔力の翼が形成される。
ふわりと身体が浮いた。
これが『ブラックウイング』未完成版からこつこつ改良を重ねて開発した飛行用コモンマジックだ。
つい最近できたばかり。
ベアトリスにも教えるつもりだ。約束だったからね。
最近はだいぶ関係が修復されてきたけど、やっぱりまだ根に持っているからここらで好感度を上げないと。
妹よ。婚約者ができても君は僕の大事な妹だよ？
見かけは魔力で形成された小さな羽根。
羽を実体化させない反面、制御が楽で性能もいい。
風の系統魔法のフライと競争しても負けないだろう。
問題はやっぱり熟練しないと魔法の同時使用は厳しいということだね。
初期型『ブラックウイング』に比べればはるかにましだけど。

空に舞い上がり、黄金竜と向き合う。
「はじめまして、僕はディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ。君を召喚した者だ」
言葉が通じるだろうか？
そう考えていると頭に声が響いた。
『我を召喚せし人間よ。我の力を求めるか？』
えーと。
「君には僕の使い魔になって欲しいのだけど」
『力を望むなら、我はおまえを新たな同胞として迎えよう』
ん？　ん～？
『つまり竜の力を望むなら、竜に転生させてやると言っているのですよ。竜のカミサマが』
セラフィナ……わかっているなら最初から教えてくれ。
さすがに人間やめる気にはなれないな。
「僕は竜の力を望まない。ただ君の助力は欲しい。僕の使い魔になってくれるかな」
『かまわない。しょせん人間の一生など儚いもの故に』
うわ、どうせすぐ死ぬからかまわないって言われた。
竜のカミサマからしたら確かにそうだろうけど、もう少し言葉を選ぶとかしないのかな。
「我が名はディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」
でかい竜の口のあたりに唇をあてる。
うん、なんか妙な感じだな。
みんなどんな気分で、契約のキスをしたんだろう？

とりあえず。でかすぎて迷惑だから小さくなれないかと愚痴っぽく呟いたら普通の竜のサイズになった。
うん、これがこの世界の竜のサイズだよ。
竜騎士とか乗っているアレね。

間違っても都市一つ滅ぼせそうな大怪獣じゃない。
でも金色の竜って目立つよね。
黄金竜……金鱗の竜王、なつかしいな。
大好きだったよな。あの小説。
「君をマイセンと呼んでもいいかな」
『かまわない。我が主よ。汝の命果てるまで我はその名を名乗り汝に従おう』
かくして僕は金鱗の竜王マイセンを使い魔にした。
その正体は竜のカミサマみたいなものだ。
あはは……もっとお手軽な使い魔でよかったのに。

かくして一騒動起こして僕の使い魔契約は無事に済み、なんだかマイセンが物見高い生徒たちに囲まれている。
暴れないとわかったとたんに金色の竜が珍しくて仕方が無いらしい。
「……すごいわね」
モンモランシー、そう暗い顔で言われるとなんと返答したらいいかわからないよ。
「私なんてカエルよ。なのにタバサは風竜であなたはなにあの大怪獣。しかも今は小さくなってるし、あなたの魔法？」
「僕じゃない。あいつの魔法だ」
モンモランシーは驚いたらしい。
普通竜は魔法使わないもんなぁ。
「じゃあもしかして韻竜なの！？」
「違う。もうちょっと上」
「上ってなによ？」
「竜のカミサマだよ」
モンモランシーは呆れた顔をした後、しばらく宙を見つめ力なく首を振った。
「……ディアスだものねぇ」

「なんか傷つくね。その言い方は」
「あなたが常識外れなのはいまさらだから、あまり驚かないわ」
……僕だって、使い魔ぐらいは普通のがよかったさ。

かくして最後にルイズが颯爽と登場する。
だいじょうぶかな？
「だいじょうぶなの？」
タバサも心配らしい。
うん、ルイズだからね。
「サモン・サーヴァントはコモンマジックだからだいじょうぶじゃないかな」
たぶん。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。我の運命に従いし、使い魔を召喚せよ」
周囲の恐れと期待に反して爆発は起きなかった。
彼女の前に魔法のゲートが開き、そこから……。
一人の少年が現れた。
黒髪黒目の少年。
現代日本人らしき風貌と服装。
僕は思わず呟いていた。
「日本人……？」
タバサがこちらを見つめたことにも気がつかずに僕はその少年を凝視していた。
日本人が召喚された？
なぜだ？
いや、そういえばセラフファナに見せられたあの映像に彼はいたじゃないか。
確かルイズを守って最後まで戦った剣士。

彼だ。
間違いない。
『そう彼こそがこの物語の本来の主人公』
セラファナの声が頭に響く。
『ルイズや仲間たちと協力し、難敵に打ち勝ち世界の秘密に迫った主人公』
彼が、本当の主人公。
『ゼロの使い魔の主人公。平賀才人です』
ゼロの使い魔……そうか、この世界は。
『そう、とある物語の世界。本来の物語から逸脱した小世界です』
題名だけは知っている。
あいにく読んだことがなかったが、読んでおけば役に立ったかな。
そうか、彼が本来の主人公か。
ということはここは本来は彼の世界だったのか。
『ええ、けれどこの世界は歪み、本来の物語から外れてあの悲劇を迎えました』
聖戦の敗北。
そして主人公たちの死か。
『この世界はすでにあの物語から外れた世界です。この世界の主人公はディアスなのです。その物語はおそらく……』
悪魔退治の英雄か。
彼はその登場人物の一人なのか。
『はい。伝説の使い魔『神の左手ガンダールヴ』それが彼です。そしてその主のルイズは伝説の虚無の担い手です』
そんなご大層なものなら、代わりに悪魔ぐらい退治してくれないかな。
『無理でしょう。彼女が虚無の魔法に目覚めるには条件があります。本来の物語なら自然にその条件を満たしましたが、この世界でそれ

が可能かどうか不明です』
あてにはできないか。
戦争の旗印にされるほどだから強力なのかな？
でも結局負けたところを見るとそうでもないのか。
『ガンダールヴは呪文詠唱の長い虚無の魔法を主が放つまでの間、主を守る神の盾です。ルイズが接近戦を苦手としていても彼がいれば十分戦えるでしょう』
前衛、後衛というわけか。
そういえば集団戦の訓練というのをやったことがないな。
今度オールド・オスマン相手に全員がかりで集団戦闘の訓練でもしてみるか。
試したいこともあるし。

彼は味方にすべきだな。
『はい、かつての世界で七万相手に一歩も引かなかった英雄です。鍛えれば力になるでしょう』
そうか。
見たところ精霊魔法の素質はある。
サイト、ギーシュ、ワルドが前衛になれば、ルイズ、キュルケ、モンモランシーを完全に後方からの砲撃や支援に回せる。
タバサと僕は遊撃か、前衛後衛どちらもこなせる。

モンモランシーは回復に特化している。
回復魔法なら彼女にかなうのは水の精霊くらいだ。

キュルケとルイズは火力なら最大級だ。
前衛に守られていれば、最大火力の砲撃を喰らわせられる。

ギーシュの剣術はもはや並の兵士など相手にもならないだろう。
ワルドも接近戦闘を得意とするメイジだ。遠距離もこなせる。

タバサと僕は万能型といったところか、あらゆる状況に対応できる。

そしてサイト。

彼が接近戦闘のエキスパートになってくれれば。

ふふふ、意外にバランスがいいじゃないか。

まるでなにもかも最初から決められていたかのようにぴったりと役割分担ができている。

気味が悪いほどだ。

これも精霊王の仕業かな。

それともこれが僕を主人公とした物語なら、そうだなご都合主義といったところか。

だが都合がいいのも確かだ。

誰が用意した舞台か知らないがのってやる。

僕はこの物語をハッピーエンドまで生き抜いてやる。

悲劇なんてくそくらえだ。

三十二章　使い魔（後書き）

お待ちかねの使い魔召喚です。
ついにようやく原作開始時期です。
長かった……ここまで長かった……。

ディアス、竜のカミサマを召喚。
もうね。
この人単独で国を滅ぼせそうですね。
めんどくさいからやらないでしょうが。

そして神を殺せる竜より強い『悪魔』ってどうなのだろうと自分の物語設定の無茶さに呆れたりしています。
設定上、『殺せる』だけで神々の方が神狩りの竜より強い設定ですけど。

ようは王様を殺せる兵士って感じでしょうか、
カミサマが『タマとってこいや』と鉄砲玉として送り出した一般兵士が神狩りの竜という存在。
要するにカミサマにとっては一般兵士扱い。
強いし、下手すれば殺されるけど。
かなわないほど強力な存在じゃない。
確かソードワールドの小説でも甦った邪神相手に苦戦してましたからね神狩りの竜。

タバサは無事竜っ娘を、モンモランシーもカエルを召喚しました。
モンモランシーは迷ったのですけどね。
ユニコーンとかケルピーにしようかなと。

とくにケルピーは魅力的でしたね。
どっかのエセ伯爵の婚約者になるくらいの勢いでケルピーを登場させたかったです。
あの妖精博士の女性のようにケルピーに惚れられたり、
でもこの物語、一部を除いて使い魔が活躍する余地がないですから……。
なのでカエルです。

いいのです。
使い魔がしょぼくてもうちのモンモランシーは優秀ですから。

そして我らが原作主人公サイト登場！
ようやくですよ。
これでルイズイベントとシエスタイベントが発生できます。

サイト未登場でイベント起こすと下手するとディアスにフラグが立ちそうなので避けてきましたが、
もう自重する必要がありません！

あはは、君も三角関係の地獄極楽風味を存分に味わいたまえ！
君のお相手はタバサやモンモランシーほど優しくはないぞ？

そしてサイト登場により、ディアスに前衛後衛に別れての集団戦闘という発想が生まれました。
今までは完全に個人戦闘だけでしたから。

そしてあまりにも都合よく仲間が集まり、役割わけまでされていることに疑問を感じる主人公。
後の伏線か、ただの戯言か。

それは今後の展開次第です。

戦闘表（お試し版）

・注意事項　この表は暫定的かつ適当なものです。
　あまり突っ込まないでください。

オスマン	１万強
ディアス	１万程度
タバサ	６０００程度
モンモランシー	５０００程度
キュルケ	３０００強
ルイズ	３０００強
ギーシュ	３０００弱
ワルド	２５００程度
カリン	１６００程度
達人クラスメイジ	８００程度
一般メイジ	３００程度
メイジ殺し	２００程度
一般平民兵士	１００程度
一般平民	１０～５０程度

相性と地の利と戦い方でどうとでもなるのですが単純な戦闘力としてはこのくらいかなと。

ちなみに、

神殺しの竜マイセン	６万程度
ディアス（全力状態）	３万程度

オスマン（全力状態）　２万程度
セラファナ（通常状態）　１万程度
セラファナ（全力状態）１５万程度
四大精霊（風地水火）　４万程度
精霊王　８万程度

そして我らが敵は、
悪魔　１０万～２０万程度？
『絶望を知れ！』な感じにすごいです。

セラファナがなにげに強いですが、彼女の場合はカミサマ的制限があるので全力が出せません。
それこそかつての英雄のごとく命を捨てて召喚でもすれば別ですが。

なにげにあの四人がかりならオスマン倒せそうじゃない？
と思うでしょうが、オスマンの戦闘技術を舐めたらいけません。
足し算なら確かに上回りそうですが、各個撃破されて終わります。

四大精霊と精霊王が力を合わせたら『悪魔』倒せない？
倒せないんです。
四大精霊＋精霊王　１０万弱です（物語設定計算式による計算）。
なんとか戦える程度ですね。
戦闘力は足し算すると弱くなる設定です。

１万のバケモノ一人対１００ｘ一万人の軍勢が戦ったら、バケモノに蹂躙されて終わります。

数の暴力？　そんなもの圧倒的戦闘力の前には無意味なのですよ。
大魔王に一般兵士が何十万押し寄せようともあっという間に粉砕で

す。

用兵的常道？　戦いは数の多い方が勝つ？
これは戦史ものではなく、王道勇者ものです。
そんな戦争の常識知ったこっちゃないのですよ！

ああ、なんか戦闘力数値で遊ぶのが楽しい。
だからみんな戦闘力を数値化するのですね。
でもしょせん数字です。
作者的介入には勝てないのですよ。

まぁ、適当に作った数値なので参考程度にお願いします。

三十三章　平民の使い魔（前書き）

最近調子が悪いので更新遅めです。

三十三章　平民の使い魔

・ルイズ視点・

なんなのよこいつは。
目の前にいる冴えない、平凡な少年を見る。
同い年くらいの少年だ。
珍しい黒髪と黒い瞳。
顔立ちも普通、特別綺麗でもなければ醜くもない。
身体も普通。
背が高かったり、見るからに強そうではない。
珍しいのは服装くらいか。
あまり見ない服だ。
そこそこ高級品かもしれない。
でも似たような服を以前町の古着屋で見かけた気もする。
そして態度は最悪。

おそらくは平民だろうが、
よほどの田舎で育ったのか、あるいは箱入りのぼんぼんだったのか知らないが、
常識がない。
貴族に向かって平然と対等な口をきく。
いや、むしろこちらを罵倒している。
二言目には「拉致だ」の「誘拐だ」の。
さらに『地球』の『日本』に帰せだのわけのわからないことを言う。
おまけに気が短く怒りっぽい。
こっちが事情を説明しているのに怒り出し、あげくには「ふざけるなこのちび！」とまで罵ってくれた。

……頭痛い。
使い魔として召喚されてしまったのだから、私にもどうにも出来ないのだといっても理解しない。
ただ怒り、罵詈雑言を吐き、そして元いた場所へ返せと要求する。
泣きたくなってきた。
私は系統魔法ははっきりいって才能がないから、使い魔はせいぜい小さな動物だろうと思っていたのに。
そう思ってベッドの横に藁を敷いて、使い魔と一緒に暮らせるように準備していたのに。
ちゃんと可愛がろう。
ちゃんと世話しようと楽しみにしていたのに。

なにこれ？
なんで人間が召喚されるの？
誰かに相談しようにもコルベール先生はこいつのルーンを書き写したらあっという間にどこかにいなくなるし、
ディアスたちも今は自分たちの使い魔の世話で忙しい。
とくに大怪獣を召喚したディアスは精神的に変になっていたわ。
なんだかお腹を押さえながら暗く笑っていたわね。
……アレはアレで大変よね。
そもそもあの竜はなんなの？
落ち着いたら聞いてみよう。

そして私も負けず劣らず大変だし。
どうしよう？
こんなとき頼りになるのはディアスだけど、
肝心のディアスが今はダメそうだ。
もうどうしたらいいのかさっぱりわからない。

仕方がない。
明日にでもなんとかディアスに相談しましょう。
彼ならきっといい方法を考えてくれる……と思う。
少なくとも私の知り合いで一番頼りになるのは彼だ。
タバサの亡命事件はなかなか衝撃だったわね。
一介の学生の身分で国を動かして、彼女と彼女の母親を救い出すのだからすごいわ。

「とりあえず。おいおいあなたのことは決めていくからとりあえず今日はこの部屋で休んでちょうだい」
「帰れないのかよ！」
だから、使い魔として呼んじゃった以上帰せないって何度も言っているでしょう？
私はイライラを必死に押さえつけて、彼に話しかけた。
「何度も説明したでしょう？　あなた聞いてなかったの？」
「聞いたけど、無茶苦茶だろうが！」
だからそれを私に言われても困るの！
私だって好きであなたを呼んだわけじゃないのだから……。

ああ、もうコイツ部屋から叩きだして泣きたくなってきたわ。
なんでこう聞き分けがないのかしら？
まぁいきなり使い魔として召喚されたら混乱するでしょう。
しかも人間が使い魔として召喚されるなんて聞いたことがない。
それほど珍しいことだ。
だから多少は仕方ないと思う。
だけどそれはこっちも同じなのよ！
もうどうしたらいいのかわからないの！
もう泣きわめいて部屋にこもりたいくらい頭がパンクしそうなの！

「とりあえず。あんた今日は……そこに寝なさい」

一瞬躊躇しつつ、ベッドの横の藁ベッドを指さす。
……動物用なのよねぇ。
人間は想定外なんだけど、他に場所もないし。
「お、おまえ人権無視もたいがいにしろよ！　おまえはどこで寝る気だよ」
「このベッドだけど」
「ふざけんな！　オレにもベッドよこせ！」
もう胃が痛くなってきた。
コイツは私が一声かければこの部屋にベッドが運び込まれるとでも思っているのだろうか？
実家なら可能かも。

でも、ここは魔法学院の女子寮なのよ。
いくらヴァリエール公爵家の娘でもそんな無茶が通るはずはないわ。
それとも一緒に寝ろと？
こっちは結婚前の女性なのよ？
ありえないわ。

「ベッドは一つしかないのよ」
「ならおまえが藁で寝ろよ」
かちんときた。
コイツは貴族をなんだと思っているの？
あんた平民でしょ？　おまけに使い魔よね？
黙って私の言うこと聞きなさいよ！
怒鳴りたかったがあまりの怒りに口が動かない。

……もういや。
コイツに付き合うのはもうたくさんよ。
もうどうにでもなればいいんだわ。

「選択肢は二つ。あなたがこの部屋を出て行くか、私が出て行くかよ」

もうコイツと同じ部屋にいることに耐えられない。

「俺に部屋から出てどこに寝ろというんだよ」

「自分でどうにかしなさいよ。私は知らないわ」

コイツ、私から見限られたら野垂れ死ぬって理解しているのかしら？

名前も知らない国から来た少年。

どう見ても一人でこの国で生きていけるとは思えない。

魔法も使えない。

身分もない。

特技もなにもないらしい。

おまけに態度が最悪。

私が使い魔として保護しなければ、飲まず食わずで飢え死ぬのがオチね。

仮にも私が呼び出したんだからそんなことする気はないけど。

いえ、なかったけど……コイツはあんまりだわ。

「ならおまえが出て行けよ。俺はベッドで寝る」

コイツ、貴族を部屋から追い出してそのベッドを奪うと宣言したわね。

というか貴族とか平民とか以前に、本来の部屋の主を追い出してその部屋に居座ろうというのはどうよ？

そういえばコイツは男で私は女よね。

コイツの国では女性を深夜に部屋から追い出して、ベッドを奪っても男として問題が無いのかしら。

ディアスならどうするだろう？

そもそもディアスなら話がこれほどこじれない気がするわね。

彼は頭がいいし、理解がはやい。
おまけに自分の立場を自覚して上手く動くことにかけてはお父様も賞賛していたわ。
たぶんディアスならここまでもめない。
もめたとしても藁のベッドが納得できないなら、自分から部屋を出て行って眠れる場所を探すだろう。
そのぐらい自分でなんとかするという気概と行動力があると思う。

それに比べるとコイツはなんだろう。
コイツはきっと平民でもそれなりに裕福なところのぼんぼんだろう。
少なくとも彼の周囲では彼がなにか口を開けば、その通りに周囲が動いていたのでしょうね。
まるで貴族のお坊ちゃんみたい。
それもダメな坊ちゃんタイプ。

なんでこんなの呼んじゃったんだろう？
どうせならワルド様のように優しくて、ディアスのようにしっかりして頼りになる人間が来てくれればよかったのに。
あ、なんか涙が出てきた。
「いいわ。ベッドを好きに使いなさい。ただし部屋のものはいじらないで。朝になったら戻って来るわ」
「おう！　じゃあな」
部屋を出る私になんの罪悪感もなく、むしろ満足そうにこの男は声をかけてきた。
私は唇をかみしめて、泣くのを耐えた。

最初はディアスに相談しようと思ったけど、
こんな夜中に訪問して、しかも泊まったりしたらモンモランシーとタバサに悪いと考え直してモンモランシーの部屋に向かった。

夜中に起こされて不機嫌そうだったけど事情を話したら、
「私の部屋に泊まりなさい。明日になったらディアスに相談しましょう」
そう言って優しく受け入れてくれた。
ベッドはやっぱり一つしか無いけど、二人で眠ることになった。
私は床でもいいといったが、「遠慮する必要は無いわよ」と笑っていた。

思わず泣いたわよ。
泣き出した私をモンモランシーはずっと優しく抱きしめてくれた。
「きっとだいじょうぶ」
その言葉に私は悔しくて悲しくて、そして訳がわからないぐちゃぐちゃの感情のまま、ただ泣いた。

・サイト視点・

突然、月が二つある異世界に召喚された。
目の前には桃色の髪の美少女がいて、
お、これって異世界勇者モノ？
とか浮かれた。
きっと俺は伝説の勇者とかで世界の危機に呼ばれたんだ。
そんな想像をして喜んでいた。

甘かった。
俺はどうやら使い魔とやらにされたらしい。
ここは魔法使いの支配する世界で、魔法の使えないヤツは平民と馬鹿にされて支配される世界らしい。
そして俺を呼び出したのはルイズとかいうちびだ。

顔は可愛い。
けど背は低いし、胸なんか無いぜ？
なんか残念な感じだよ。
しかも貴族とかいってやたらえらそうだし。
なんかむかつくから、ひたすら「俺を元の世界へ帰せ」とひたすら繰り返してやった。
やっぱ無理矢理召喚されたら、そういうのがお約束だろ？

そしたら笑えることにだんだん涙目になってやんの。
しまいには部屋を出て行ったぜ。
俺の勝ち！
なんだよ。貴族っていって威張ってもたいしたことないじゃん。
ふかふかのベッドで横になり、今後のことを考える。
ああ、なんかいい匂いがするな。
そういえばこのベッドってあの女が毎日寝ているんだよな。
俺、女の子のベッドで寝るの初めて。
というか女の子の部屋自体初めてだぞ。
やっべ！　どきどきしてきた。

そういえばあの女の部屋なんだよな？
もしかして俺的お宝とかあるかも？
そう思ってちょっと宝探しをして、見つけたぜ財宝を！
あの女のパンツ発見！
へぇー、異世界のパンツってこんな感じなんだ。
だいたい似たようなもんだな。
ちょっと違うっぽいけど。
なんか肌触りがよくて気持ちいい。
……そういえば部屋のもんいじるなとか言ってたっけ。
ま、いっか元に戻しとけば。
バレないだろ。

知的好奇心と冒険心を満足させて、俺は再びベッドでごろん。
さてこれからどうしよう。
あてもない異世界で大冒険って無理かな？
もしかしたら隠された力とかあって大活躍できたりして。
ああ、あんなクソつまんない毎日よりずっと楽しい暮らしになるといいな。
とりあえずはあのルイズとかいったけ？　あの女を適当に丸め込んでこの世界の案内役にさせよう。
貴族だから金だって持っているだろ？
そして俺はこの異世界で大冒険をするんだ。
もう平凡でなんの取り柄もない高校生じゃない。
俺は異世界に召喚された勇者平賀才人だ！
なんてな……はっはっは。

……なんて上手くいくわけねーよな。
明日からどうしよう。
よく考えたらこの世界で初めて会った相手を部屋から叩きだしたのはまずかったか？
金もなにも与えられずに一人で放り出されたらどうしよう？

俺、この世界のことなにも知らないんだぜ？
どこへ行けば町があるとか、金はどうやって稼ぐとか。
ゲームとちがってモンスター倒せば金と経験値が手に入るわけじゃない。
そもそもこの世界にモンスターはいるのか？
いたとして俺で倒せるのか？
自慢じゃないが、俺ってケンカ弱いぜ？

それにこれは現実だ。

死んだらそれで終わり、セーブポイントからやり直しなんてありえない。
どうしたらいい？
俺はなにをすればいいんだ？
必死に虚勢を張っていた俺の心がとたんに弱気になる。
俺はどうすればいい？
これから俺はどうなるんだ？

誰か、俺を助けてくれ！
あるだろ！？
こういう異世界勇者モノなら召喚されて困っている勇者を助けてくれる仲間とかさ？
俺は気がついたら泣いていた。
俺をこんな異世界に呼び出したあの女の前では意地でも強気でいたが、もう限界だ。
俺はもう帰れないのか？
俺はどうすればいい？
誰か助けてくれ！
俺は、俺は……平凡でもなんの取り柄がなくてもいいから、普通に生きたいんだよ！
こんなわけわかんない異世界に呼ばれて死んだり、ものすごく苦労したりなんか嫌だ！

誰か、俺を助けてくれ……。

三十三章　平民の使い魔（後書き）

ルイズのサイトの第一印象、最悪です。

おまけに夜中に女の子を部屋から追い出して部屋を占拠、あげく女の子の部屋を物色して下着まで漁る。

そんなハイテンションも一人になったら持続せずに悩み出す。

普通に最低な男になりつつあります。

というわけで原作サイトと微妙にちがいます。

自分より小さい女の子の言いなりになりません。

ケンカになったら勝つと思い込んで舐めています。

実際にはルイズが本気になったら素人の男ぐらいかるくボコれます。

その女の子に見捨てられたら生きていけないかもしれないと理解しきれていません。

しかも夢見がちで、考えなし。

ルイズをその場の勢いで追い出してから今後のことで悩んでいます。

だったら最初からルイズに相談しろよという話です。

ルイズも原作とちがいます。

まず平民だからとむやみに虐げません。

友人が平民を大事にするクルデンホルフの跡継ぎでしたからね。

むやみに魔法を撃ちません。
ディアスの訓練で自分の魔法の威力は思い知っています。
下手に人間相手に撃っていい魔法ではないと自覚しています。

ルイズ賛美サイトアンチ……ではありません。
サイトはこの物語で二人目の異世界から現れた『勇者』です。
なのでサイト君にはこれから勇者らしく成長することを期待しています。

そのためには試練がつきものです。
ルイズとの関係、貴族とのつきあい、その他諸々。
当分苦労することでしょう。

三十四章　ヴァリエールの従者（前書き）

今日は調子がよかったので連続更新です。

三十四章　ヴァリエールの従者

・ディアス視点・

早朝の空気の中で、ただゆっくりと自分の身体に魔力を通す。
さらに精霊の力を取り込み、精霊の力と自らを一体化する。
魔力が精霊の力と一体となりさらに力を増す。
『精霊魔法・精霊強化』
精霊魔法による身体強化、魔力強化のおそらく完成形。

ここまではいい。

さらに先へ。

精霊の力を体外へ、体内へ神々の気を引き込む。
世界の外に存在する神々。
その力を。
この身体に宿らせ、この身体を駆け巡り、自らと一体化する。
『神聖魔法・神気憑依』

魔力や精霊による身体強化のような威圧感はなく、ただ自然にそこにある。

圧倒的強者として。

振るう拳は神の怒りそのものとなり、紡がれる言葉は神の意志となって具現化する。
神聖魔法の一つの完成形。
自らを神々にも等しくする技。

より極めれば神々をこの身に降ろし、その力を自在に使える。
さらにその先に……。

「……ディアス？」
不意に戸惑ったように声をかけられた。
モンモランシーだった。
うん？　ああ、この魔法に驚いたのかな？
「なにかな、モンモランシー。ルイズもいるようだね」
「ディアス、よね。なんだか雰囲気がちがうから……」
「ちょっとちがう魔法を試していたんだ。割と上手くいったよ」

訓練終了。

憑依解除。

神気の憑依を解除して、僕は二人に向き合った。
「それでこんな朝早くになにか用かな？」

・ルイズ視点・

私は一瞬そこにいるのが誰かわからなかった。
そこで彼が早朝の訓練をしているのは聞いていたし、外見的に彼以外ではありえないのに、まるで別人に思えた。
まるで……。
そう教会の聖人がこの地に降り立ったのではないかと錯覚しそうなほど、そこにいた彼の存在は人間離れしていた。

人間とは思えない。
まるで神様のような自然すぎる存在感。
気を抜けば地に膝をついて、祈ってしまいそうな神々しささえ感じた。

振り向いた彼はやがていつものディアスに戻った。
本人は魔法だというけど。
あんな魔法は聞いたことがない。
やっぱりディアスは常識外の存在だわ。

モンモランシーに連れられて早朝のディアスの魔法訓練の場に来たけど。
本当はこの時間の訓練はあまり邪魔して欲しくないと言われているのよね。
彼が一人で訓練する時間だからと。

けれど今日は用事がある。
それもできれば可能な限り早く解決したい問題が。

「それでなにか用？」
訓練を邪魔されたのに別に気を悪くした様子もなく聞いてくる。
そんなディアスに私は自分の使い魔のことを話した。

まったく私の言うことを聞かないこと。
こちらの常識がないこと。
人間の使い魔などどう扱っていいかわからないこと。
今は私の部屋にいること。

それらを聞くとディアスは少し眉をひそめた。
「ルイズ。確か君の使い魔は同い年くらいの少年だったね。君は昨

日どこで眠ったんだ？」
「モンモランシーの部屋に泊めてもらったの」
すっと視線がモンモランシーの方に向き、なにやら納得した表情をした。
「ずいぶん困った使い魔のようだね」
「ええ、人間が使い魔なんて聞いたことがなくて、どうしたらいいかわからないの」
ディアスはしばらく考えてから、小さく肯いた。
「使い魔と思わなければいい」

「でも、私の使い魔なのよ？」
慌てる私にディアスは優しく微笑んだ。
「だいじょうぶだよ。別に君から彼を取り上げるわけじゃない。ただ彼に使い魔以外の肩書きを持ってもらえばいいと思っただけだ」
「肩書き？」
「ああ、君の従者にしてしまえばいいんだよ。正確にはヴァリエール公爵家の使用人だね。そうすれば彼は君の従者になる。原則として学院は従者や護衛などを受け入れていないが、今回は特殊な例だからね。おそらく認められるだろう」

うちの使用人にする。あいつを？
でもそうすれば少なくともあいつの扱いで悩む必要は無い。
なにしろ使用人なのだから。
普通の使用人と同じように扱えばいい。

私の従者という名目なら一緒にいても不都合はない。
使い魔なら、常識的に人間扱いされないし、人間の使い魔など誰もどうしていいかわからないだろう。
けれど従者なら、悩む必要さえ無い。
従者は主の側にいて主の世話や護衛をする人間。

ごく当たり前のことだ。

「ヴァリエール公爵に事情を説明して、彼を君の家の使用人かあるいはその見習いでもいい。とにかく彼の身分をヴァリエール公爵家で保証してしまえば、誰も文句は言えないだろう」

「文句って？」

「君の平民は常識がないのだろう？　あるいは他の貴族にたいして無礼があるかもしれない。そのとき君は家の名前を出して謝罪することで使い魔の少年を守れる」

あ、ありうる。

あの馬鹿なら貴族に無礼ぐらい働きそうだわ。

ただの使い魔ならその貴族に処分を受けるかもしれない。

けれどうちの使用人なら、かばうこともできる。

限度はあるし、うちの名前に多少傷がつきそうだけど。

あんな馬鹿でも、どこかの貴族に殺されでもしたら目覚めが悪いわ。

「さっそくお父様に手紙を書くわ」

「うん、あとで学院長にも話をつけにいこう。彼の住む部屋と食事などの確保も必要だから」

「どうするの？」

「使用人の寮の空き部屋にでも入れてもらうさ。食事も他の使用人たちととればいい。学院の生徒に混じって食事を取るよりかはその方が彼にとってもいいだろう」

確かに生徒たちと一緒に食事なんていったら、他の生徒がうるさそうね。

だってあそこは貴族専用の食堂だもの。

平民が同じテーブルに着くなんて耐えられないって生徒もいるに

違いないわ。

やっぱりディアスは頼りになるわ。

昔から思うのだけど、なんでもできるのよね。こいつ。

ちょっと昔に私の婚約者にって話もあったらしいけど。

結局あの話は流れちゃったみたい。

タバサとモンモランシーが婚約したし。

ちょっともったいなかったかもしれないわね。

「なんとかなりそうじゃない？」

「うん、ありがとう。モンモランシー」

「私はなにもしていないわ」

いいえ、一晩泊めてくれた恩は忘れないわ。

あの時の私はいろいろいっぱいいっぱいで、大泣きして迷惑をかけた。

いずれこの恩は返すわ。

・サイト視点・

朝目が覚めたら、あの桃髪娘が机に向かってなにか書いていた。

人が寝ている部屋に勝手に入ってきたのかよ。

……まぁ、あいつの部屋だから仕方ないか。

「おい、なにやってるんだよ？」

「お父様に手紙を書いているだけよ」

手紙……こっちにも郵便ってあるのか？

「俺のことはどうなったんだよ。なんとかしてくれるんだろうな？」

まさか毎日ベッドを占領するわけにもいかないだろう。

なんかあのあとちょっと罪悪感がちくちくとしたぞ。

「心配しなくてももう学院長と話はついているわ。あの人も早起きよね」
「話ってなんだよ？」
「あんたは使用人たちの住んでいる寮に部屋を借りて、そこに住むことになったわ。食事も使用人たちと一緒に食べられるから、飢え死ぬことはないわね」
部屋と食事の問題は解決済みか。
意外にこの女優秀なのか？
昨日の今日であっという間に。

「そ、そうか、わざわざありがとな」
礼ぐらい言っておこう。
一応世話になったのだから。
「そうね。お礼をいうならこの件を考えてくれた人にいってちょうだい」
「おまえじゃないのか？」
「私じゃないわ。私の友達が考えてくれたの」
「ふーん。おまえの友達は頭いいんだな」
「ええ、ディアスは優秀よ」
ディアス？
誰だろ、後で会えたら礼ぐらい言っとこう。

「ところで手紙ってなに書いてるんだ？」
まさか、俺のこと？
「あなたの事よ」
……まさか昨日のことを根にもって親の権力使って復讐しようっていうんじゃ？

ま、まさかパンツを漁ったことがばれた？

別にちょっと見ただけじゃないか！
触ったけど、普通に手で触っただけだ！
匂いを嗅ぐのはさすがに自重したし、それ以上のこともしていない！

そ、それともアレかベッドのシーツの匂いがいい匂いだなぁとクンカクンカしたことか！
だけどおまえ、ベッドは好きに使っていいって言ったじゃないか！
それにそういう意味ではまだ使っていない！
確かに思わずビンビンになったけど、さすがにいきなり他人の部屋の女の子のベッドではさすがにハードルが高すぎて処理しなかった！

俺は、俺は無実だ！

「あなたをうちの使用人にしてもらえるように頼んでみるの」
ほっ……なんだそんなことかよ。
あん、使用人？
なんでいきなり俺が他人の家の使用人になるんだよ？

「なんで俺がそんなのにならなきゃならないんだ。勝手に決めるなよ」
むかっとくる。
なんで俺のことなのに本人に一言も相談がないんだよ？

しかも使用人？
この女の家の？
ふざけんなよ。なに勝手に他人の人生決めちゃっているんですかー。
たいがいにしないと女でも殴るぞ、コラ？

「あんたのためなのよ？　使い魔って基本的に人間扱いされないだろうから、うちの使用人ってことにして従者として私の側にいられるようにするの」
「どういうこと？」
ルイズが面倒そうに顔を上げた。
つまりこいつがいうにはこうだ。

使い魔とは基本的に動物とか幻獣とかそういうもので、普通人間はいないらしい。
しかし俺は人間である。
となると使い魔として俺をそばに置いておくと、周囲から俺が人間扱いされない可能性が出てくる。
なのでコイツの家の使用人にして従者としてそばに置く。
従者ならば人間扱いもされるし、なによりこいつの家が身元保証人になる。
こいつの家は名家で偉いらしい。
その家の使用人になればなにか問題を起こした場合でも問答無用で処罰を受ける可能性が減る。

なるほど。
いい話みたいだ。
しかも使用人って事は雇われるって事だよな？
給料とかもらえたり？
もしかしてすごくえらい貴族サマの家に就職って事はお給料もがっぽりとか？

へへへ、それをはやく言ってくれよ。
おまえも人が悪いな。
そういうことなら大賛成さ！

さぁ、俺を雇え！　そして俺にたくさんのお給料をプリーズ！

「それもおまえの友達が考えたのか？」

「そうよ。使い魔の肩書きだと人間扱いされないだろうって」

へぇ～、そいつ頭いいな。

会ったらお礼言わないと、そんなに真剣に俺のことを考えてくれるなんてありがたい。

たっぷり給料が出たらメシぐらいおごるぜ？　まだ見ぬ親友（ダチ）よ。

「じゃあ俺はここで暮らせるのか？」

「とりあえず私が卒業するまではね。卒業後はお父様やお母様と相談しないといけないけど」

卒業って明日、明後日の話じゃないだろ？

なら当分俺はこの異世界で生きていけるって事だ。

ふぅ、安心した。

それにこの調子なら部屋を漁ったこともパンツ見たこともバレてないな。

よかったよかった。

バレないならもうちょっと堪能しておくべきだった。

女の子の部屋を宝探しできる機会なんてそうそうない。

ましてや見た目美少女のパンツときたら、もうこれは財宝だろう。

……あとで一枚くらいもらってもバレないんじゃないか？

「あとで使用人に部屋に案内してもらいなさい。人を寄越してもらうように言ってあるから、後はその子に説明を受けるといいわ」

「オーケイ。そうするよ」

ちっ、さっそくお引っ越しか。

この女とっとと出かけないかな？

引越祝いに財宝を一つ持ち出したいのにこの女がいるせいで出来

ねぇ！

それはともかく、よかった。

下手すれば朝起きたらここから叩き出されるかとびくびくしてたからな。

これでとりあえず生きていける。

その間になんとか帰る方法を探せばいい。

こいつはないって言ってるけど、こいつが知らないだけかもしれないからな。

……ああ、そうだ。

「昨日は部屋から追い出して悪かったな。俺も結構いっぱいいっぱいでさ。余裕がなかったんだ。ごめん」

ここまでしてもらったら、やっぱり昨日の行動は謝るべきだろう。

今後もつきあうことになりそうだし、少しでも心証をよくしておけば待遇アップもあるかもしれん。

すると桃髪娘は少し驚いたような顔をしたあと小さく首を振った。

「別にもういいわ。すぐにあなたの部屋を用意したり、そういうことを思いつけなかった私も悪いんだし」

根に持ってねちねち責められるかと思ったけど、

なんだ意外にいい娘じゃないか。

顔は可愛いし、背が低いのもむしろ可愛い感じがするし、胸がないのは……まぁ今後に期待だな。

や、やはり財宝を一つくらいお土産に持たせてもらえないだろうか？

素直に頼んだらくれるかな……無理だろうなぁ。

「それじゃ改めて、俺は平賀才人。よろしくな」

「私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ」
長い名前だなぁ……よく憶えられるな。
「じゃ、ルイズ。今後ともよろしく」
「ええ、サイトもね」

三十四章　ヴァリエールの従者（後書き）

サイト、使い魔から従者にランクアップ（予定）

サイトがまさに変態街道を爆進しているように思えますが、
うちのサイトの仕様です。
うちのサイトはスケベの変態です。

ディアス順調に進化中。
たぶんそのうち人間の限界超えます。

戦闘バカと評判のディアスが今回は頭を使いました。
本来は頭のいい人なんです。
クルデンホルフの天才の名は伊達ではありません。

ここまでやっておいてヴァリエール公爵が雇うのを渋るということはありませんから安心してください。

続きは深夜０時以降に更新します。
一度予約掲載という機能を使ってみたいので。

三十五章　平民と貴族（前書き）

更新三連、最後です。

三十五章　平民と貴族

・サイト視点・

「ああ、サイト。いい機会だから言っておくことがあるけど」
案内の使用人が来るまでの間に、ルイズに若干注意された。
いまさら自分への無礼をどうこう言う気はないが、他の貴族には気をつけなさい。
下手をすれば無礼を働いたというだけで難癖をつけられる可能性があると。

「え？　でも俺はおまえの家の使用人になるんだろう？」
だから大丈夫なんじゃないかというとルイズはため息をついた。
「それをこれから頼むの、まだ決まったわけじゃないわ。それにたとえうちの名前があってもサイトは平民よ。それは変わらないわ」
平民と貴族の地位の差はものすごいらしい。
「なんだよ。じゃあ結局役に立たないのか？」
「ないよりはまし程度よ。あまり過信はしないで」

……なんか貴族がえらいと言われてもぴんとこないんだけどな。
貴族だったら平民のお姉さんに今履いてるパンツよこせっていったらくれるって事？
だとしたらすごいな。
もしかしたらもっとすごいこともできるのか？
チチ揉ませろとか、さらにその先の桃源郷とか？

うお！　すげえ！　貴族サマすげえ！
俺もそんなんだったら貴族になりたい！
出会い系サイトいらないじゃん貴族サマ！

町中出会い系状態？
というかむしろ選び放題食い放題？

すげぇ、マジすげぇ、ハンパねぇぜ貴族サマ。

……って、目の前の桃髪ちびも貴族ナンダヨネ？
やばくない？
怒らせたら洒落にならなくない？
あの件がばれたら、オレコロサレル？

いやいや、本気でやばいことはやらなかった。
だから俺的にセーフだが、こいつ的にはアウトか？
いや、ちょっとパンツ見ただけじゃん！
ちょっとどんな服着ているのか確かめただけじゃん！
ちょっとした好奇心じゃん。

異世界の女性がどんな服を着ているのか純粋に好奇心から調べただけで、悪気はなかったんやー！
けしてハフハフくんかくんかして、思い知れ桃髪チビなどとやってない！
だから俺は悪くない！　俺は無実だー！
だからコロサナイデ？

俺流解釈で貴族のすごさを実感して興奮したり恐怖したりしていると、ルイズが手紙を書き終わったのか便せんに入れて封をしている。
どこのポストに出すのだろうと思っていると、窓を開けて鳩に手紙をくくりつけた。
「お、おい、なにやってんだよ！」
「なにって、手紙を運んでもらうのよ」

「伝書鳩かよ！？」
呆れかえる俺をよそに鳩は空に飛んでいく。
……アレ、ほんとに届くのか？
アレに俺の今後の生活がかかってそうなんだけど。

この世界って文明遅れてるよな？
伝書鳩とかいつの時代だよ？
貴族はハンパねぇけど、この世界の文明はしょぼくねぇ？

ああ、文明が未発達だから人権とか軽くスルーされそうだなぁ。
ヤベぇ、本気で殺されるかもしれん。
以後はあまり怒らせないようにしよう。

扉がノックされた。
「ミス・ヴァリエール。従者の方のご案内を仰せつかりました」
「入ってちょうだい」
「失礼します」
扉を開けて黒髪のメイドさんが入ってきた。

うぉー、メイドさんだよ！？
リアルメイドだよ！？
初めて見た！
メイドカフェって行ってみたかったけど、行ったことないんだよな。
一人でいく度胸がなかった……。

「彼を案内してあげて、遠くの国の出身だからこちらの常識がないけど悪い人間ではないわ。いろいろ教えてあげて」
「承知しました」
礼儀正しくメイドさんが一礼して俺を見る。

あん。
そのすっとした姿勢と物腰、しびれる。
そして萌える！

「どうぞこちらに」
「あ、ああ……じゃ、いってくる」
「いってらっしゃい、あんまり迷惑をかけるんじゃないわよ」
俺は子供かよ！
迷惑なんてかけるか。
こんな可愛いメイドさんに迷惑なんて、むしろ迷惑かけられたいです。
ドジっ娘属性発動して、コーヒーぶちまけられたいです！
そして俺は可愛いメイドさんに連れられていった。

ああ、ぴんと伸びた背筋が色っぺー……。
そして長いスカートに包まれたお尻がぷりぷり動くんだよ。
これはもう襲ってくれと言っているよね？
しかし俺はこう見えてもチキンな紳士だ。
女を襲う度胸もなければ、欲望に負けない理性もある。
ひたすらこの両目で鑑賞して堪能させていただきます！
眼福眼福。

なんか、昨日は人生を悲観しまくったけど。
なんか運気急上昇って感じじゃね？
なんとなくルイズとも仲良くやれそうだし、このメイドさんも可愛いし。
やっぱ俺って異世界から召喚された勇者とかだったりして、いわゆる主人公補正ってヤツ？
これで女の子にモテモテになったら確実だな。

「ねぇ、君はここのメイドさん？　俺は平賀才人って言うんだけど」
「私はこの学院で働くメイドでシエスタといいます」
黒髪のメイドは笑顔でそう自己紹介した。
ああ、可愛いなぁ。
こんな女の子が彼女だったら最高なのに。

・シエスタ視点・

ミス・ヴァリエールが召喚した使い魔。
ヒラガ・サイトさん。

使い魔という身分では問題が起きるからとミス・ヴァリエールのご実家と相談して従者という立場にするらしい。
オスマン様はすでにサイトさんをミス・ヴァリエールの従者として認める方針だという。
なので使用人用の部屋を貸し出し、以後は私たち学院の使用人たちと一緒に生活させる。
もっともサイトさんは遠方から召喚されたらしくこの国の常識や知識に疎い。
だからその世話役に私が選ばれたのだけど。
正直、嫌かも。

この件を頼んできたのがミスタ・クルデンホルフだというから引き受けたけど、ミスタ・クルデンホルフも彼のことはよく知らなかったのだろうか？

噂では深夜にミス・ヴァリエールを部屋から追い出し、彼女の部

屋のベッドで眠っていたとか。
ミス・ヴァリエールはご友人のミス・モンモランシの部屋で一晩過ごしたらしい。
酷い話だ。
なぜミス・ヴァリエールが部屋を明け渡さなければならないのだろう？
男女が同じ部屋で眠るのが問題なら男性こそが部屋を出るのが礼儀ではないの？

それ以前に貴族を部屋から追い出して平然としているなんて信じられない。
ミス・ヴァリエールは優しい方だから召喚してしまった負い目で強くでられなかったのだろうか。
それにしても貴族のそれも女性を部屋から追い出して、その女性のベッドで眠るなんて、まともな神経の持ち主なら出来るはずがない。

それに初対面からこちらのことをじろじろ無遠慮に見てくるし、少し不快だ。
メイドのなにが珍しいのだろう？

この黒髪のせいではないだろう。
だって彼も同じ黒髪なのだから。

前を歩いていても後ろから視線を感じる。
気のせいじゃなければ背中や腰に。
……いやらしい男。

このくらいの年齢の男性は多かれ少なかれそういう面があるけれど、この人は露骨すぎる。

ある程度見られることには慣れているけれど、やっぱりこう凝視されたら恥ずかしいし、不愉快だ。
なにがそんなにおもしろいのだろう。
ミスタ・クルデンホルフの頼みじゃなかったら、ミス・ヴァリエールの使い魔じゃなかったら引っぱたいているところだ。

学院の使用人たちの間でミスタ・クルデンホルフの評判はいい。
もともとクルデンホルフ大公国が平民に優しい国と評判だし、ミスタ・クルデンホルフも私たちのような平民にも気遣ってくれる優しい方だ。
先輩使用人の話では学生に暴力を振るわれたり、少し悪戯されたりするメイドも昔はいたらしいが、ミスタ・クルデンホルフが来てからそれがなくなった。

なんでもミスタ・クルデンホルフが学院長のオスマン様にかけあってくれたらしい。
使用人たちが安心して働けるようにと。
使用人に言われなき侮蔑や暴力、あるいは悪戯をすれば罰するとオスマン様が生徒たちに説教したらしい。

「わしでさえ、使用人には手をだしておらんぞ？」
と付け加えたという噂だ。

あの方らしい冗談だが、事実だ。
オスマン様がメイドに手をつけたことはない。
オスマン様のセクハラ相手は主に秘書だったミス・ロングビルだった。
もう辞めて故郷に帰ってしまったからオスマン様は寂しそうだった。

ミス・ヴァリエールはそんなミスタ・クルデンホルフのご友人であり、魔法の生徒だ。
何度かお声をかけていただいた。
さすがヴァリエール公爵の令嬢だけあって威厳のある方だが、それを笠に着ることもなく「いつも洗濯をありがとう」と労っていただいた。

使用人たちは怪我や病気の場合はミスタ・クルデンホルフたちに魔法で治療してもらえる。
なんでも魔法の実地訓練らしい。

なかでもミス・モンモランシの腕前は素晴らしく。
水仕事で荒れた手まで綺麗に治してしまえるほどだ。

ミスタ・グラモンは金属の修理が得意で、古くなった調理器具も彼の魔法にかかればあっという間に新品同様になる。

ミス・ツェルプストーやミス・タバサも優れた魔法の使い手だ。
ミス・ツェルプストーは面倒見がいい方だし、ミス・タバサは少し無口だが親切な方だ。

私たちはそれがどんな魔法だったかを口外しないことを条件に皆様の魔法の恩恵を受けられる。
オスマン様も御存知のことだ。

だからそのミスタ・クルデンホルフの頼みでミス・ヴァリエールが困っていらっしゃるならと引き受けたのだけど。
少し後悔している。

ミス・ヴァリエールは貴族のご令嬢だ。

おそらく男性の視線など気にならなかったのだろう。

ミスタ・クルデンホルフはミス・ヴァリエールに相談を受けて動いたらしい。

なら直接サイトさんを知らないのではないだろうか。

それに男性であるミスタ・クルデンホルフは、サイトさんがこれほど女性に好色な視線を向けると気がつかれなかったかもしれない。

ミスタ・クルデンホルフは女性に優しいが、けしていやらしい目で見ない方だ。

婚約者であるミス・タバサとミス・モンモランシにも慈しむような視線を向けるのを見かけたことはあっても欲望の目で見ているのは見たことがない。

それに比べて。

この男はなんだろう？

ミス・ヴァリエールを部屋から追い出し、今は私を舐めるように凝視している。

最低な男。

それが私が感じたサイトさんの評価だ。

別に女性に興味を持つのは悪い事ではないと思う。

けれど、少しはこちらのことも気遣って欲しい。

じろじろ見られれば恥ずかしいし、いやなものなのだ。

それだけなら、ただちょっとスケベな男の子程度に思えたかもしれないけど。

やっぱりミス・ヴァリエールへの仕打ちは納得できない。

召喚されたのが不本意なのはわかる。
けれどこちらでの衣食住に不自由ないように取りはからってくれているのはミス・ヴァリエールだ。
そのところを彼はどう思っているのかしら。

「サイトさん。ミス・ヴァリエールのことを恨んでいらっしゃいますか？」
「へ？　いや……まぁ、多少はね」
やっぱり。
「でもさ、こうしていろいろ世話してもらっているからさ。それに話してみたらそう悪いやつでもないし、使用人だの従者だのになったら、少しは役に立たなきゃいけないかなぁと思ってるんだけど。俺ってなにもできないからなぁ」
へぇ……。

「大丈夫です。私たちが使用人としての心得から仕事まで教えますから」
「ほんと？　たすかるよ！　さすがに無駄飯喰らいとかいわれたくないからさ、少しは役に立ちたいんだ」
「ただし私たちは厳しいですよ。相手がヴァリエール公爵家の使用人でも容赦しません」
「はは……お手柔らかに頼むよ。俺って未経験者だし」
「ダメです。誰だって最初は未経験なんですから」

ミス・ヴァリエールへの仕打ちの仕返しに、うんと厳しく仕込んであげます。
そして立派な使用人にして、ミスタ・クルデンホルフやミス・ヴァリエールの期待に応えて見せます。

いやらしい視線になんて負けません！

「それとサイトさん。女性をじろじろ見るのはマナー違反ですよ。以後気をつけてください。最初の使用人の心得です」
ホントは一般常識だと思うけど。

言われたサイトさんは今まで見ていたことに気づかれていないとでも思っていたのか、とたんに挙動不審になった。
「い、いや、そう！　あまりにシエスタが魅力的でついっ！」
「今回はそういうことにしてあげます。次からは気をつけてくださいね」

不意に笑みがこぼれた。
この新人教育は苦労しそうだ。

三十五章　平民と貴族（後書き）

サイトは貴族の怖さを想像して震え上がった。
サイトは貴族の怖さを知った。
サイトはルイズを怒らせる怖さを知った。

以後、ルイズに強気に出るのはほどほどにすることにした。

さっそく貴族の怖さを知り、びびりました。
うちのサイト、果たして貴族から決闘を申し込まれたら戦えるでしょうか？
不安になってきました。

そしてサイトは使用人見習いになった。
シエスタ他の使用人たちに鍛えられることになった。
……立派な使用人になれよ。
いやいや、君は戦闘要員だから、家事とかばっかり修行させられないから。

ちなみに学院の使用人はディアス贔屓です。
そのおかげでルイズ贔屓です。
したがってルイズを部屋から追い出したサイトは好感度マイナスの中でがんばるハメになります。

噂って怖いね？
光の速さで広まったね？
がんばれ！　主人公補正なんて君にはないんだ！

シエスタ、好感度マイナス状態。

『最低な男』の称号をサイトに贈りました。
うん、これからがんばって好感度あげようね。
最後にちょっと評価を上げたからがんばれば挽回可能さ！

勇者サイトの困難はまだまだ続きます。

三十六章　ヴァリエールの娘

・ルイズ視点・

使い魔召喚試験から数日、学院はようやく日常を取り戻した感があるわね。
使い魔の披露から、お互いの使い魔の自慢話、批評。
私にとってはため息の出る日々だったわ。

もっとも話題を集めたのはやはりディアスの金竜だった。
アレは一体なんなのか？
みんなはあるいは古代の竜族なのでは？
などと噂していたわね。

ディアスに聞いてみたら、
「竜のカミサマ」
という冗談か本気かわからない言葉が返ってきた。
もっともそんな答えはごく親しい人以外には言わずにいるようだけど。
もっぱらディアスの呼び出したのは古代の竜族という認識が学院に広がっていた。

さすがに神様を呼びだしたなんて、いくらディアスでも……ありえないでしょう？

私は悪い意味で目立った。
なにしろ人間を、それもとくに役に立ちそうにもない平凡な平民を呼び出したのだから、当然かしら？

皆が使い魔を連れ歩く中で、私は使い魔を連れ歩かなかった。

連れ歩くのが恥ずかしいというより、今のサイトを貴族たちの中に放り込むのは危険と感じたからだ。

「恥ずかしくて呼び出した使い魔も連れられないのか」

「さっそく逃げられたんじゃないか？」

そんな陰口が聞こえてくるが、我慢するしかない。

徹底してこちらの常識と貴族に対する態度をしつけて欲しいと使用人たち、とくに世話役のシエスタに頼み、その成果が現れるまでは私はサイトを人前にだす気はない。

わざわざ騒動を起こしそうな人物を連れまわして自爆する必要は無い。

ディアスやモンモランシーもその判断を理解してむしろ賛成してくれた。

サイトには悪いが、彼はまだ人前にだせる状態ではないと思う。

でもむしろその方が彼にとっては良かったかも、

こんな晒し者のような見世物にされるくらいなら、使用人の心得でも伝授されていた方がはるかに彼の役に立つだろう。

下手をすればあの短気な性格なら、そこらの貴族に殴りかからないか心配だわ。

やっぱり彼を連れ歩けるのは当分先ね。

実家に連絡し、サイトを使用人見習いとして雇うことも承諾してもらった。

あくまで見習いだ。

私から見てサイトは使用人としての技術も心構えもない。

シエスタも同意見だった。

それを正式な使用人にとはさすがに言えない。

おかげで給料は正式な使用人よりも安くなるが、一応身分はこれで保証される。

学院長に頼んでサイトはヴァリエール公爵家の使用人であり、私の従者であることを徹底してもらった。

彼がただの平民でも使い魔でもなく、ヴァリエール公爵家の保護下にあることを周知させたのだ。

おかげで彼にちょっかいをかける者はいない。

これで一安心だわ。

とりあえず当面の彼の生活は保障できた。

あとは彼が切望する帰る方法とやらを探すことと、もし帰れない場合はこの世界でしっかり生きていけるようにすることね。

使い魔の送還に関しては、実家に連絡したときに調べて欲しいと頼んでおいた。

私が個人的に調べ回るよりも効率よく、かつ詳しく調べられるでしょう。

彼がこちらに永住する場合は、うちの使用人としてならなんの問題も無い。

それ以外の生き方を望むのであれば、それまでにこの世界の常識を教え、生きていく方法と技術を身につけさせればいい。

どちらを選ぶかは今後相談しないとね。

すぐに決めなければいけないことではないから、ゆっくりと考えてもらえばいい。

それと従者というからには形だけでも護衛らしく、剣でももたせようと考えて買いに行ったけど。

なんだかサイトは変な剣を気に入ってそれを欲しがった。

古くてボロボロのインテリジェンスソード。

自称伝説の剣のデルフリンガー。

つまりただのしゃべる剣なのだが、サイトは気に入ったらしい。
私としてはもう少し見栄えのする剣をもって欲しい。
どうせ形だけなのだからせめて見栄えぐらいはと思うけど。

なんだかやけにはしゃいでるから買ってあげたわ。
よく考えれば異国にひとりぼっちで召喚された身の上だもの。
こちらには友達さえいないだろう。
サイトの話し相手にでもなって彼が満足してくれるなら、多少の見栄えの悪さは我慢しよう。

あとでディアスとギーシュに見せたら、二人そろって。
「確かに古いが、頑丈でいい剣だ」
とデルフリンガーを評価した。
おそらく戦場で振るうことを目的に作られた剣なのだろうと二人で話していた。
これだけ古いくせに今まで折れもせずに生き残ってきたのだから、その頑丈さはかなりのものだと関心さえしていた。

意外とサイトは見る目があったのかしら？
……たぶん偶然だろうけど。

剣を買ったその日のうちにいきなりサイトが部屋にやってきて、
「俺ってすごいんだぜ！」
と、はしゃいだのには驚いた。
話を聞くと剣をもつと身体が軽くなり、驚くほどの速さで剣を振れるのだという。
試しに素振りしていて気がついたらしい。

「あなた剣の経験があったの？」
「ん？　ないけど？　でもすごいだろ！　俺って実はすごく強いんじゃねぇか？」
試しに見せてもらう。
確かに素人とは思えない速さで剣を振っていた。
魔力で身体強化したディアスやギーシュに比べると見劣りするけど、普通の平民として考えたらすごいかもね。

でも振り方がなんというか、不格好ね。
ディアスたちに比べると素人丸出しという感じだわ。
確かに速いけど、やっぱり素人なのね。

「あなたにその気があるのなら剣を習ってみる？　強くなれるかもしれないわよ？」
「え、マジ？　もっと強くなれるのかよ！？」
やっぱり男の子よね。
強くなれると聞いて喜んでいるわ。
「ええ、友達が剣が得意だから、基礎から教えてもらえばきっと強くなるんじゃないかしら？　どうせ知らないんでしょう、剣術の基礎？」
「……基礎か。どうせならどんな相手でも倒せる必殺技とか習いたいかな」
「無茶言わないでよ。たぶんデタラメに振り回すより基礎からしっかり習った方が強くなれると思うわよ」
「うーん、じゃあ頼むわ。やっぱりこんな異世界で生きていくのなら身を守る手段は欲しいからな」
「剣の達人になれば、お金持ちの護衛とか傭兵とかいろいろ生きていく方法もあるしね」
「あ、やっぱり強いといいことあるんだな？　というか俺ってルイ

ズの従者なんだろ？　他の仕事していいの？」
「将来の話よ。私のそばで仕事するよりも、別の場所で生きたいと思ったときに役に立つって話」
「将来か……俺としては帰りたいんだけどな」
やっぱり帰りたいのね。
一応調べてもらっているけど。
どうだろう？　方法があるのだろうか。
「一応そっちも実家に調べてもらっているわ。でも正直前例がないことだからわからない。あまり期待はしないで」
「一応調べてくれてるのか……悪いな、いろいろと」
「仕方がないわ。私が呼び出しちゃったのだから」

剣術の先生はディアスかギーシュね。
どちらに頼もう。
頼みやすいのはディアスだけど、彼は忙しいし。
ギーシュに声をかけてみるかしら、平民の相手なんていやだっていわれたらディアスに頼むしかないわね。
ディアスは平民だからという理由では断らないでしょう。
忙しいからという理由でなら断られるかもだけど。

「剣術の先生役かい？　この僕が？」
「やっぱり平民相手なんていやかしら？」
私の不安をギーシュは明確に否定した。
「いやそれはないよ。軍人になったら平民の兵士を相手に訓練だってするだろうし、そんなことを言っていては軍人にはなれない」
そういえば軍人の家系だったわね。
将来は軍人になるつもりなのかしら。
ギーシュなら優秀な軍人になるでしょうね。
頭も悪くないし、なにしろ強いから。

「別にかまわないが、なぜ僕なんだい？　正直ディアスの方が強いし、教えるのも上手いのに」
「ディアスはいろいろと忙しいでしょう？　ただでさえいろいろあるのに、私の従者の剣の訓練までは頼みにくくて」
　正直、世界の行く末のかかった戦いにサイトが役に立つなんて思わない。
　役にも立たない平民を鍛える暇なんてディアスにあるかどうか、今だって自分の訓練と私たちへの指南で毎日忙しいのに。
「なるほど、確かに彼は忙しいね。それなら僕にというのも納得できる。他に人もいないだろうしね」
　魔法学院で剣術を身につけているような変わり者はディアスと軍人家系のギーシュぐらいだろう。
　普通はみんな魔法の訓練ばかりしているものね。
　ギーシュは一つ肯くと承諾してくれた。
「ならかまわないよ。僕も訓練相手ができれば嬉しいからね。話を聞く限り強いんだろう？」
「強いというか、なぜか剣をもつと速くなるのよ」
「使い魔としての能力かな？　剣士の能力？　聞いたことがないけど、まぁそういうこともあるかもしれないね」
「剣術の経験はないらしいし、私から見てもたぶん素人よ。戦えばギーシュに絶対勝てないわ」
「ふむ、なら鍛えれば僕とやりあえるくらいになるかな」
「さぁ、私にはわからないわ」
「まぁ引き受けた以上はきちんと鍛えるさ。ものになるかどうかは君の従者の根性と努力次第だね」
「才能じゃなくて？」
　ギーシュは少しだけ自嘲ぽっく笑った。
「才能なんてある程度までは必要はないんだ。誰だって努力すればある程度強くなる。問題はその上にいけるかどうかだが、そこが才能の分かれ目だね。たとえば僕のはるか上にディアスがいるが、僕

は彼にまったく追いつける気がしない。つまり才能の限界ってことさ」

天才と凡人の差とも言うねと笑っていた。

とても眩しいものに憧れているような。

そんな明るい笑い方だった。

サイトの教育方針はあらかた決まった。

この世界での常識、使用人としての技術と心構えはシエスタたちが、剣術をギーシュが教えてくれる。

私はいい友人たちをもった。

普通どこの誰ともしれない平民のためにここまで親身になってくれるとは思えない。

私は友人に恵まれた。

そのきっかけは……きっとディアスだろう。

ある日彼が私の日常に突然現れて、おとぎ話の魔法使いみたいにちいねえさまの病気を治し、お母様と戦って勝利し、私には私にも使える魔法を教えてくれた。

おかげで私は系統魔法が使えなくてもメイジとして誇りを持てた。

お母様とすら戦える私を見下すなら見下せ、蔑むなら蔑め。

だけど私は強いわよと胸を張れた。

私は、きっとディアスが好きだ。

恋かどうかはわからないけど、たぶん好きなのだろう。

もし彼の婚約者になれていたらきっと喜んだわ。

けれどもう彼にはタバサとモンモランシーがいる。

少し胸が痛むときもあるけど、私は平気よ。

私は彼の生徒で親友だ。

彼は私の恩人だ。

きっと彼とは一生のつきあいになるだろう。
恋人としてではなく親友として。
それでも別にかまわない。
私はこの感情が恋なのかどうかわからない。
恋であろうとどうであろうとかまわない。
私は彼の親友であり続ける。

そしていつも胸を張って生きる。
私は彼の親友なのだと。
系統魔法が使えなくても、私は彼の生徒で……親友なのだと。

だから彼の使命にも協力する。
恩人が世界の危機に挑むのだ。
ここで力を貸さなければ私はなんのために力を育ててきたのかわからない。

私の恩人で、親友で、先生で、そしてたぶん大好きな男性。
私は必ずあなたの力になる。
今は世話をかけてばかりだけど、必ずあなたの役に立ってみせる。

私はヴァリエールの娘。
貴族の誇りにかけて、彼に返しきれない恩を返す。

三十六章　ヴァリエールの娘（後書き）

サイトイベントの予定でしたが、僕の書くサイトがあまりに不評なため、
サイトの出番を自重しました。

ルイズは責任感が強い子になりました。
自分には責任があるからといろいろとサイトのために行動しています。

そして感想でも言われてしまったので、ディアスに好意があることを書きました。
幼い頃の恩人で、憧れの天才で、親友で、
普通惚れますよね？　少なくとも好意は持ちますよね？

でもあくまでも親友ポジションを望んでいます。
だってもう婚約者二人ですからね……。

サイトの剣の先生はギーシュ。
うちのギーシュは強い上に優秀なので大丈夫です。

サイトの扱いが今後どうなるか。
少なくとも二人の勇者ルートはないですね。
サイトがもう一人の主人公になるルートはなしです。

理由として、サイトイベントをやるとあの不評なサイトのキャラを前面に出す必要があり、受け入れられないだろう事。
あれだけ不評だとなんかもう書く気がなくなってきたことですね。

別にサイトをわざわざ主人公格に押し上げなくても普通に物語はできますから。
問題ありません。
サイトには目立たないところでこっそり努力してもらうことになりますが、まぁ仕方ないですね。
あれだけ嫌われちゃうとね。

作者も人間です。
やる気が出れば書きますが、やる気がなくなれば書かないのです。
タダの趣味だし。

さらばうちのサイト。
君の幻の活躍は僕の頭の中に輝いているよ。
今後は地味で目立たない平民剣士としてがんばってください。

そろそろ物語も最終決戦ルートに入ります。
余計なイベントしなくていいなら、もうすぐなのです。
エンディングまではがんばろうと思う。

「僕、エンディングまで書き上がったら今度はアンチ解禁してしっちゃかめっちゃか個性的なキャラを楽しく書くんだ……！」

三十七章　ロマリアからの使者（前書き）

いよいよラストイベントの開始です。
エンディングまではまだありますが、がんばります。

三十七章　ロマリアからの使者

・ディアス視点・

ウェールズからの手紙を自室で読みながら考える。

「……あいつは僕を破滅させたいのか？」

手紙にはモード大公の遺児とサウスゴータの令嬢を保護したことが書いてあった。

なんとそのサウスゴータの令嬢とはオールド・オスマンの秘書のミス・ロングビルのことだった。

モード大公の遺児ティファニアは母親の血筋に問題があるため王族としては認められないらしい。

しかしモード大公の娘としてウェールズが保護しその生活を保障したと書いてある。

つまりは人気とりだな。

そこまではいいが、

『それで周りがティファニアを僕の妻にとうるさい。ここらで婚約者を決めようと思う。君の妹などとても好ましく思っているのだがどうかな？』

……どうかなじゃねーよ。

ただでさえガリア王族を妻に迎える僕だぞ？

そのうえ妹がアルビオン皇太子の妻になる？

クルデンホルフがガリアとアルビオンにつながる。

そんなことになったらうちのトリステイン王国の属国としての立場は崩壊する。

ただでさえ経済状態ではトリステインを上回っているのだ。

その上外交能力でも宗主国を上回ったら、もはやそれは属国とは

いえないだろう。

僕にトリステインを乗っ取れとでもいいたいのか？

黙っていればクルデンホルフはトリステインによって力を削がれるだろう。

属国に収まる範囲まで力を弱める。

その手段の中には父や僕の暗殺も当然含まれるだろう。

辣腕を誇る経験豊富な父が失われれば？

他国に顔が利きクルデンホルフを一躍有名国に変えた当事者である僕がいなくなれば？

クルデンホルフは元の一属国に戻る。

短絡的にそう考えるアホがでても僕は驚かない。

もしそんな状況で僕が不慮の死を遂げれば、ガリアはそれをトリステインの謀略と断定し、シャルロット王女の夫を謀殺したトリステインの不義をならして進軍するだろう。

アルビオンも同様だ。

皇太子に嫁いだベアトリスの兄を殺したトリステインに味方するはずがない。

トリステインは簡単に滅ぶだろう。

そして僕は死ぬ。

ふざけるな。

それが嫌なら自分から動いてトリステインを押さえるしかない。

つまり主従逆転だ。

そして僕がトリステイン王になるか。

つまりウェールズの望みは僕の手によってトリステインを滅ぼすことだろうと推測できる。
おそらくあいつは見限ったのだろう。
いまだに国内の経済をろくに回復させられないトリステインを。
ならクルデンホルフにつく、そしてその力を増しトリステインを飲み込ませ、僕の手によってトリステインを再生させる。
そして新たに再建されたトリステインとの関係を深めガリアやゲルマニアに対抗する。
そういうことだろう。

まったく。
呆れる腹黒さだ。

……こっちはそれどころではないというのに。

サイトにこの間会った。
正直期待はずれだと思った。
話に聞いていたような英雄にはとても思えず。
ごく普通の現代日本の少年に見えた。

剣術の腕も見た。
確かに速い。
だが身体強化したギーシュはさらに速い。
技術で劣り、速度で劣り、体力で劣る。
そんな彼に勝ち目があるはずはなく、サイトは何度も負けていた。
ただ気になったのは彼の目だ。
何度負けても気合いの声を上げてギーシュに挑む。
その気迫と根性はギーシュも賞賛していた。

あるいは化けるかもしれない。

僕はそう期待して彼に精霊魔法の手ほどきをした。
ギーシュやルイズには平民でも使えるのかどうか実験してみたいと言った。

事実僕は精霊魔法を平民に教え、使わせたことがない。
彼は素質はある。
素質があれば、メイジでなくても使えるのか？
そんな実験だった。

そして彼は精霊魔法の身体強化、そして武器強化をすぐに修得した。
身体能力のさらなる向上と武器に精霊の力を込めることにより威力を増す。
武器強化の方は、対『悪魔』用のものだ。
『悪魔』に普通の武器は効かないのだから。
彼は大喜びで魔法を使っていた。

逆に僕らにとっては衝撃的なことだ。
平民が魔法を使える。
たとえ系統魔法でなくても、それは貴族にとっては衝撃的な事実だ。
貴族の支配体制を支えたのは魔法の力だ。
その力を貴族が独占したからこそ、こんな支配体制が長く続いていられる。
しかしここにきて例外ができた。

僕の精霊魔法なら、平民でも素質があれば使える。
そしてその魔法は系統魔法より強力なのだ。

僕はサイトにこの魔法のことは他言しないように言い聞かせた。
もちろんルイズやギーシュにもだ。
二人とも事態の深刻さを理解しているらしい。真剣な顔で肯いた。

もし平民たちに精霊魔法が広まったら、貴族の支配体制は終わる。
あるいはとも思う。
貴族の支配体制なんぞ、終わらせるべきなのかもしれない。
とてもギーシュやルイズには言えないが。
そう思うのだ。
心ある貴族、領民と上手くつきあえる貴族の少ないトリステインを見るととくに。

今はまだ心配いらない。
精霊魔法を教えられるのは僕か、あるいはオールド・オスマンぐらいだろうからだ。
最初に精霊を知覚させるための魔法。
僕の把握法であり、オールド・オスマンも似たような魔法を使う。
これが使えなくては精霊魔法の使い手を育てられない。
ギーシュやルイズ。あるいはタバサやモンモランシーでも不可能なことだ。
ならば当面問題はない。
だがいずれ誰かが使えるようになる。
その誰かが精霊魔法を広く教えたら？

そのときは、来たるべき時が来たのだと思うしかないかもしれない。

魔法を貴族が独占せず。広く人々のために使う時代。
それが来たのだと。

そんなわけで僕は今疲労困憊状態だ。
悩み事の種は尽きないね。
とりあえずウェールズには『まだ早い阿呆』と書いてやろう。
ベアトリスはまだ魔法学院に入学すらしていない。
まだ将来を決めるには早い。

それにいざそうするのなら、それ相応の覚悟と準備がいる。
即答できるたぐいの問題ではない。
そもそも僕に決定権はないしな。

平民が精霊魔法を使えることについては、その事実を伏せつつ今度オールド・オスマンと話し合おう。
彼ならばあるいはすでに知っていたかもしれず。
なにかしら考えがあるかもしれない。

よく考えれば事前に彼に相談すべきだったかもしれない。
僕はあまり他人に相談事をしない。
父さまに泣きついたときは、もう自分ではどうにもならなくなってからだ。
僕はもっと他人を頼るべきだろう。
きちんと改善するべきだな。

そして、最大の頭痛の相手がそろそろ来る頃なんだがね。
『一体何の用でしょうね？　没落国家如きが』
没落させたのはおまえだろう？　セラフィナ。
ノックの音が部屋に響いた。
「ミスタ・クルデンホルフ。お客様が到着しました。貴賓室へおいでくださるようにとオスマン様から言伝です」

扉を開けて伝言を伝えるメイドに微笑みながら肯く。
……彼女に罪はない。
苛立つ心を静めて席を立つ。
「わかった。急ぐとしよう」
すべての元凶はこれから会う奴だ。

「初めまして、ミスタ・クルデンホルフ。私はジュリオ・チェザーレと申します。聖エイジス32世猊下に従う者です」
初対面で驚いたのは左右の瞳の色が違うことだった。
その美貌といい。個性的な目といい。
さぞかし女性にもてるだろうと思わせる。

『いえいえ、ディアスも相当なものですよ?』
うるさい。
別にこいつと顔の善し悪しや女にもてるかで競う気はない。

「初めまして、ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフです。今日はわざわざご足労いただいて、ただただ驚いております。ロマリアからわざわざ僕如きに会いに来られるとは……」
ロマリア皇国からの使者。
最大の頭痛の種だ。

『落ち目のロマリア坊主がなんのようだ。私はおまえらなどに興味は無い失せろ。といってやったらどうです?』

そうもいかんから頭が痛いんだ!

「ロマリアの方が一体なんの用でしょう?」
「ディアス殿下は少々気が短い方のようだ。少し噂と違いますね」

「あいにく噂というのがなんなのか知らないですが、どうせろくでもない噂でしょうね」
「とんでもない。とても慈悲深く、思慮と知性に溢れた優れた人物と評判です。お会いするのを楽しみにしていました」

ケッ、こっちは嬉しくないんだよ。
というかおまえだって本心では嬉しくないだろう？
内心はなんと言って言いくるめてやろうかと考えているんだろうさ！

「目的というのは他でもない。殿下には是非ロマリアにお越し願いたい」

なに？
僕をロマリアに……僕をロマリアにか。
なるほど起死回生の一手だな。

「それで司祭にでもしてくださるのですか？」
「おお、やはり素晴らしい。あっという間にこちらの考えなど見抜かれる。さすがアルビオンのウェールズ皇太子と並ぶ天才ですね」
ふん、ウェールズだったらきっと会いもせずに追い返しているだろうな。
あっちはアルビオンの皇太子、僕よりも地位と実力で上だから、つまらない手も打ちにくい。
僕程度がちょうどいいわけかね？
『お話が見えないのですが？』
黙っていろ、直にわかる。

「恐れ多くも猊下は、殿下ならば司教の位を用意すると」
大盤振る舞いだな。

一昔前ならその肩書きを買うのにいくらの寄進が必要だったことか。

「僕はあいにく聖職者になろうとは思いませんが？」

「これは異な事を。このハルケギニアに生まれ育つ以上、皆始祖ブリミルの敬虔なる信徒。まして殿下は平民にも分け隔てなく慈愛の心で接するお心の持ち主、殿下以上にふさわしい方はおりますまい」

別に始祖のために平民に優しいわけじゃない。

その方が統治に都合がいいからだ。

平民とは持ちつ持たれつうまくつきあう。

クルデンホルフの基本方針だ。

「僕はまだ四系統スクエアではありませんよ？」

「……しかしいずれなるのは確実視されています。時間の問題でしょう？」

少し動揺したな。

確かにまだ四系統を極めていない。

こいつらが欲しいのは始祖の残した魔法を極めたメイジだろう。

始祖の遺産を継承したメイジ。

確かに落ち目のロマリアなら欲しがる肩書きだな。

ましてや僕ならすでに無視できない人気があるか……嫌なところに目をつけられたな。

「また仮にそこまで届かなくても、現材このハルケギニアにおいてもっとも始祖の才能を受け継いでおられるのは殿下をおいて他にないでしょう」

「僕が精霊の加護を受けていることはどうします？」

「むしろ良いことです。まさに始祖の祝福といえるでしょう」

精霊と始祖はあまり関係ないだろうに。

むしろブリミル信仰が、大昔の精霊信仰を駆逐したのではないの

かな？

「ロマリアはそれほど苦しいのですか？」

ジュリオは表情をこわばらせた。

「嘆かわしいことに人々は信仰を忘れています。正しい信仰を再び広めるためにも殿下のお力をお借りしたい」

『どういう事です？』

つまり僕にロマリアの広告塔になって欲しいということだね。

今の僕の人気を利用すれば、イメージアップも図れるだろう。

『つまりロマリアで『俺の歌をきけー！』とアイドルをやるわけですね』

……どういうイメージだ？

まぁアイドルというのは間違ってないかな？

『やりますか？』

やると思うか？

『思いません。この話はおそらくディアスに利益がないでしょう？』

ないな。

司教という名誉を与えて、それで終わり。

あとはロマリアとブリミル教のイメージアップのために必死に働かされるだけさ。

『ならやりませんね』

あたりまえだろう？　なんで僕がブリミル教を立て直さなければならないんだ？

むしろ敵対関係に近いだろう？　僕の実態からすれば。

『独自の魔法技術に精霊魔法、おまけに異教の神の魔法の使い手ですから、普通に敵ですね』

その通り。

「申し訳ないが僕はまだ一介の学生に過ぎない。また卒業後はクル

デンホルフ大公国を継ぐべく修行しなければならない身だ。貴国とブリミル教のために身を粉にすることはできませんね」

「……クルデンホルフ大公国に猊下は特別に新たなる王家を立ち上げるお許しを与えても良いと仰せですが？」

ふん、くだらん。

いまさら教皇のお墨付きがなんになる。

空手形に終わるに決まっている。

それにただ独立したところでなんになる。

クルデンホルフ大公国がクルデンホルフ王国になるまで、準備にどれだけの時間と金と人がいると思っている？

それにどのみちあの腹黒皇太子のせいで、直に王にならなければならないところまで追い込まれかねない身だぞ。こっちは。

「クルデンホルフ大公国はトリステインの属国であり、トリステインの貴族であることを認められ保証されています。貴国は我が国と宗主国であるトリステインとの関係悪化を望まれるか？」

睨みすえるとジュリオは硬直した。

「い、いえ、そのようなことはありません。猊下はただ殿下が始祖のためにその身を捧げるならばそれ相応の名誉を与えねばならないとお考えになっただけでありましょう」

ふん、こいつは政治向きではないな。

ただの使者のくせにいつの間にか、よりにもよって教皇の内心を代弁している。

落ちぶれたとはいえ教皇猊下の肩書きは諸国の王よりも位が上なのだ。

その誰も知らない内心を一介の使者如きが勝手に推測して交渉の場で述べるなど。

ありえざる愚挙だ。

使者自ら教皇猊下の神聖な立場を土足で踏み荒らしているととられかねない。

しかもその内容は要約すれば「なにも考えていませんでした。ただ褒美を与えようと思っただけです」だと？

なめているのか？

これを材料にロマリアはクルデンホルフとトリステインの離間工作を行ったとして援助を打ちきる手もあるんだぞ？

そもそも交渉の場になんでこんな若造が来る？

小僧と思って侮られたか？

それとも……もはやロマリアには教皇の信頼できる人間がそれほど少ないのか？

僕は軽く笑った。

「ミスタ・チェザーレ。あなたは教皇猊下にそう打ち明けられたのか、それとも恐れ多くも教皇猊下のお心を勝手に推測しているのかどちらかな？　前者ならば教皇猊下は恐れながらあまりにも無体なことをなさる。教皇猊下は名誉と称して我々からトリステイン貴族の称号を奪い。本国からは裏切り者と非難されることをお望みか？」

言うままになればそうなるだろう。

トリステイン貴族の称号を失い。

トリステインからは教皇の権威で強引に独立した裏切り者と責められる。

どこが名誉なのか？

「い……いえ、あくまでもそうお考えなのではないかと」

「あなたの推測であると？」

「はい」

「ならあなたは恐れ多くも教皇猊下の内心を勝手に推し量り、交渉の場でのべたわけだ。不敬ではないかな？　そしてクルデンホルフ

にたいしてあまりにも礼を失していないか？」
ジュリオ・チェザーレの顔色はもはや真っ白だった。
けけけ、小僧と思って見くびったな。この阿呆。
こちとら貴様よりもよほど怖いガリア王とも会見しているのだ。
なめるな、甘ちゃん坊主。

・ジュリオ・チェザーレ視点・

やれやれだ。
魔法しか取り柄のないぼんぼんと聞いてきてみれば、アレはそこらの貴族よりよほど手強いじゃないか。
おまけにあの威圧感ときたら、まったく冷や汗でびっしょりだ。
「交渉は失敗か……まったく意気揚々と出てきた分情けないね」
魔法しか取り柄のない貴族の坊ちゃんなど、簡単に丸め込めると甘く見たのが失敗だった。

さすが天才。まったく忌々しい限りだ！

あれはブリミル教などなんとも思っていない男だ。
あれは猊下の……ヴィットーリオ様の敵だ。
あれは必ずブリミル教に、ロマリアに牙を向ける。
「……あの男は敵だ」
僕は笑った。
生意気な田舎貴族。
今のうちに得意になっているがいい。

……僕たちの力を思い知らせてやる。

三十七章　ロマリアからの使者（後書き）

ウェールズ、ちゃっかりティファニアとマチルダを確保。

ティファニアはウェールズの指示によって魔法で変装済み、なのでウェールズとごく一部の側近以外は普通にモード大公の隠し子と思っています。

そして悪巧み、ベアトリスを嫁にもらいクルデンホルフにさらに力をつける。

その後の流れはディアスの予想通り。

さすが腹黒皇太子です。

うちのウェールズは優秀だけど腹黒です。

うちのサイトの負けず嫌いは原作並か原作以上です。

根性はあるんです。

ときどきへたれるだけで。

そして精霊魔法習得。

身体強化と武器強化。

遠距離攻撃はもたせようかどうか微妙。

魔法剣士なサイトって違和感がありますね。

そして貴族の支配体制崩壊の可能性。

クルデンホルフのその後といい、エンディング後のディアスは大変そうですね。

そしてついに来ました。

ラストイベント開始を告げる使者。

ジュリオ・チェザーレ。

ディアスを勧誘に来ましたが、一方的に言い負かされました。
拒否されたので敵宣言、極端です。

交渉時は『私』、私的な場面では『僕』になっています。
ルイズを誘わなかったのは原作と違ってまだ虚無に目覚めていないのと知名度ならディアスの方が圧倒的に上だからです。
原作でもさすがにこの時期に虚無に目覚めてませんけどね。

ロマリアはかなり性格改変が悪い方へ入っています。
ロマリアアンチタグ入れようかな？

さぁ、メインストーリーイベント『悪魔戦争（仮）』をはじめましょう。

三十八章　悪魔襲来

・ディアス視点・

『あれは……『悪魔』の分身体です……』

セラファナが声を絞り出した。

『本体よりはるかに弱いですが、それでも今のディアスでは互角に戦えるかどうかです』

黒い男。

真っ白い肌に黒い瞳。黒い髪を乱暴に肩に流して笑っている。

全身を覆う黒ローブ。

身体的特徴ではのっぽの男といったところだが、その威圧感は半端ないな。

その笑みも邪悪に見える。

なんか存在自体邪悪ですと全身で主張しているように思える。

日課の深夜の訓練の途中だった。

皆はもう部屋に戻り一人で訓練をしていると、

突然の悪寒を感じて振り向く。

闇の中にその男がいた。

一目でただの人間ではないとわかった。

なにしろ完全に精霊の気配を感じないわりに莫大な威圧感を放っているのだから。

人間なら多少の差はあっても若干精霊の気配をもつ、生きている以上生命の精霊がいる。

この男にはそれがない。

警戒する僕にセラファナが警告を出した。

あれは『悪魔』の分身体だと。
僕でさえ互角に戦える程度、つまり勝てない相手だという。

『まず学院から引きはがすべきです。あれが学院に入ったら人死にがでます！』

学院にはたくさんの生徒が、タバサやモンモランシーがいる。
僕は覚悟を決めた。

倒す。

『神気憑依』

神聖魔法による強化、さらに右手に風の精霊を集める。
「風よ、風よ！　嵐となりて吹き荒れろ！」
全力に近い暴風が悪魔を襲い。
吹き飛ばす。
瞬動で僕はすぐに追った。
全力で戦う。
そのためにも学院の近くはまずい。

学院にはオールド・オスマンがいる。
今の莫大な精霊魔法の力。彼ならば察知するはずだ。
学院は彼が守る。

僕はあの敵を倒す。

・オスマン視点・

まさか！
仰天した。
まさか再びこの気配を感じるとは！？

話を聞いてから覚悟してはいたが、まさか学院に来るとは考えておらんかった。
風の精霊の封印はどうなった？
まさか破れたのか！？

すぐさま神聖魔法の気配と莫大な風の精霊魔法の気配が感覚に叩きつけられた。
彼じゃ。
彼は本気じゃ。
本気で、一人で戦う気じゃ。

まずい。
現れた悪魔はまだ小さい。
それでも彼を一人で戦わせるのはまずい。

わしは精霊魔法の伝達魔法を使い彼の生徒たちを叩き起こした。
感心なことに全員が起きておった。
あの気配を感じれば目も覚めような。
「学院近くに悪魔が現れた！　ディアス君が戦っておる。よいか？　全員で彼を助けよ。間違っても彼を一人で戦わせてはならん！」
生徒たちを、子供たちを戦いの場へ向かわせる。
わしは最低の大人じゃ。
だがわしには他に手がない。
子供たちに希望を託すしかない。
少なくともしばらく時間を稼いでもらう必要がある。

ここにはさらにたくさんの子供たちがおる。
戦う力を持たない無力な子供たちが。
彼らを守るために悪魔が進入不可能な結界を張らなければならん。
時間がかかる。
その間子供たちに託すしかない。
「よいか！？　無理をするでない！　学院を結界で守ったらわしも迎撃に出る。それまでなんとか持ちこたえよ！」
せめてあの当時の仲間が一人でもこの場にいてくれたら！
そう悔やむが仕方がない。
無い物ねだりをしておる場合じゃないの。

わしは全力で結界を張り始めた。
彼は聡明じゃ、おそらくわしが学院を守ると考えて悪魔を引き離し、自らは打って出たのじゃろう。
じゃが、彼は危うい。
とても一人で戦わせられない。
彼を守り、彼が守る仲間が必要じゃ。

さいわい彼は良い仲間に恵まれた。
皆部屋を飛び出し、あっという間に一カ所に集まった。
彼らでもあの莫大な力は察知できよう。合流は可能じゃ。
さてわしはわしの仕事をせんとな。

わしの生徒たち、誰一人として殺させはせぬぞ。

久しぶりに全力をもって結界魔法を使う。
頼む、もたせてくれよ。
ここの子供たちを守ったら、すぐに助けに行くからの。

・ルイズ視点・

頭を殴られるような衝撃だった。
今までの訓練では感じたことのないほどのすさまじい精霊の力が爆発した。
ベッドから跳ね起きる。
この気配は……学院の外？
ディアスがいる。
でもこの気配は、普通のディアスではない？
魔力制御法の気配探知を使い困惑した。
そこへオールド・オスマンの声が頭に響いた。

悪魔が現れた。
ディアスが戦っている。
すぐに迎え。

私は素早く着替え、窓から部屋を飛び出した。
コモンマジック『フェザーウイング』
コモンマジックしか使えない私でも使える飛行魔法。
習っていて良かった。

すぐにタバサ、モンモランシー、キュルケと合流する。
男子寮からギーシュもやってきた。
皆フェザーウイングで飛んでいる。これが一番速いものね。

「聞いたわね？」
一カ所に集まって話し合う。モンモランシーが問うと皆が肯いた。
「悪魔は封印されているのではなかったのかな？　それがなぜ学院に？」

「今はそんなことよりはやく助けに行く方が先でしょ！」
のんきそうに疑問を口にするギーシュに私は怒鳴った。
なにをそんなにのんきにしているの？
ディアスが戦っているのよ！？

「まぁ落ち着きたまえ、戦いを前に冷静さを失うのは良くない」
「その通りね」
ギーシュの言葉にキュルケが肯く。
「それに私たちが行って役に立つのかという問題もあるわ。私たちはディアスより数段弱いのよ？」
「ディアス一人よりまし、わたしは一人でも助けに行く」
キュルケの言葉にタバサが鋭く反論する。
「なにも助けに行かないとは言っていないよ。問題は戦い方だ」
ギーシュはそう言った後、さらりと確認した。
「ここにいる全員、悪魔と戦うということで異存ないね？」
全員肯いた。
「よし、なら基本戦術の確認だ。現場に着いたらディアスが指揮してくれるはずだ。ディアスが指揮ができない状況を想定する」
ギーシュが接近戦で足を止め、キュルケと私が砲撃、モンモランシーはディアスの治療。タバサはその護衛。
「僕が身体を張ってでも君たちの盾となる。安心して魔法を使ってくれたまえ」
ギーシュはそう言って締めくくった。

さて行こうとしたときに間の抜けた声がかかった。
「おーい、おまえらなにやってんの？」
サイトだった。

・ギーシュ視点・

ふう、なんとか仮のリーダー役をこなせたか。
ルイズもタバサもモンモランシーも頭に血が上っていたからね。
冷静なのはキュルケだけ、これじゃあ特攻しかできない。
なんとか意思を統一し、戦術も練り、さあこれからと思ったらサイトが来た。
彼もオールド・オスマンに呼ばれたのか？

なんでも素振りをしていたら空を飛ぶ僕らを見つけて追いかけてきたらしい。
さすがに彼を戦力とは数えなかったらしいな。オールド・オスマンも。

ルイズが危ないから帰れというのに彼はついていくと聞かない。
相手は『悪魔』という強力な存在なのだと言っても「なら俺が倒してやる」と息巻いている。
やれやれ、訓練で半端に自信をつけたから手に負えない。
仕方がないか、置いていっても勝手についてきそうだ。
さいわい武器も持っているようだしね。
「押し問答をしている時間が惜しい。サイト、来るなら覚悟を決めたまえ。ルイズ、今は時間が惜しい。彼が行くというのなら連れて行く。かまわないね？」
「……わかったわ。いい？　危ないと思ったら隅っこでおとなしくしていなさい？」
「ふざけるな！　俺はそんな腰抜けじゃねぇ！」
話を聞く限り、隅っこで震えていても恥にならない敵だと思うけどね。

サイトは僕が抱えていくことになった。

他は皆女性だからね。仕方が無い。
なにしろ抱きつくようにして運ぶのだから女性は抵抗があるだろう。
僕も男なんかに抱きつかれたくないけどね。

待っていたまえ、ディアス。
君一人で戦うなど水くさい。
僕らは仲間だろう？
なら頼ってくれたまえ、まあ少し頼りないのは認めるがそれでも君の力になるためにこうして集まったのだ。

だから無理をするなよ。僕らが到着するまで無事でいてくれ。

・ディアス視点・

まいったね、これは。
精霊魔法の攻撃でほぼ無傷。
格闘戦でもこれといったダメージを与えられない。
どうしようね？
『ダメージが目に見えないだけです。効いているはずです。魔力ならダメージを与えられます。今のあなたの身体は神々の力で動き、守られているのですから格闘も効果があるはずです』
そういわれてもね。
まったく、嫌な敵だな！

クルダ流交殺法表技。
「ハーケン！」
拳から真空刃を飛ばして吹き飛ばす。

ちっ、踏ん張りやがった。

一人だと呪文詠唱の暇がない。

もっぱら無詠唱か短縮詠唱の精霊魔法と、クルダ流交殺法で戦っている。

実に久しぶりだなこれ、ワルドを模擬戦で叩きのめして以来か？

精霊魔法だけといったが、接近戦ではこっそりクルダ流交殺法使っていたんだよな。

いや、僕の格闘術ってクルダ流交殺法が基本だし？

クルダ流交殺法影技。

「ブレード！」

相手の首を狙った蹴りは腕に防がれた。

足と腕の間でわずかに黒いもやがあがる。

あれは？

『できれば技名は正規の名前を名乗って欲しいところです……冗談はともかくダメージは通っています。あれがその証拠でしょう』

あの黒いもやか。

相手の手刀を避け、蹴りを防ぎ、拳を叩き込む。

「表技、トンファー！」

腹に喰らった悪魔が後方に吹き飛ばされる。

距離が空いた！

「光よ。聖なる光よ。我が右腕に収束せよ。邪悪を滅する極光となせ！」

『極光砲』

光系精霊魔法の最大魔法。

オールド・オスマン直伝の三百年ものだ！　これでどうだ！

オーロラのような色彩の魔力砲撃。

眩い光に目を細めつつ、状況を確認する。

本当はさらに追い打ちをかけたいが、極光系の魔法からさらに連続で魔法を使うのはつらい。

……まだ、無事か。

悪魔は健在だった。

全身から黒いもやをあげているが、五体満足だ。

頑丈だねぇ、人間どころか竜でも蒸発するらしいけど。

息を整え、神気をさらに強化する。

これは、あれだね。

セラファナ御降臨とかで倒してくれない？

『今の私ではあなたより弱いです。全力の私を召喚したかったらもっと修行してください。今の実力だとディアスが死にます』

命を対価の召喚か、死にたくはないねぇ。

改良型魔法ブラックウイング使っても地上戦だから意味なし。

専用武器ブラックウイング使っても焼け石に水かな、あれどっちかというと対軍勢用な感じだしな。

『本物の『黒い翼（ブラックウイング）』は個人戦で使っても強かったですがね。あなた程度じゃ使いこなせないということですね』

悪かったね。

あれの修行している暇が最近無かったんだ。

もうあれだね。

こうなったら奥の手いきますか？

でも、あれ未完成なんだよな……。

唐突に悪魔が拳を振るった。

ハーケン！？

両腕でガードしたが衝撃波に吹き飛ばされた。

……どういうことだ？

『……たぶん学習したんです。あなたの技を見て』
まずくね？
こいつは分身体でこのあと本体と戦うんだろう？
手の内をコピーされるのは大変よろしくないぞ、この野郎！
飛んできたブレード、鋭い蹴りを避ける。

一体僕はいくつ技を使った？
そのうちいくつをコピーされた？
『ディアス！　今はただ目の前の戦いに集中してください！　あとのことを考えて戦えるほどこの敵は容易くない！』
「くっそ！」
踵落としをなんとか回避し……ぐっ！
すさまじい拳の突きがぶち込まれた。
表技メイスかよ……自分で喰らうとすごく痛いのな？

悪魔が右腕に力を集中させた。
あれは避けないとまずそうだ。
瞬動で逃げる。
距離を取って魔法の撃ち合いしかない。
これ以上クルダ流交殺法をコピーされたら、今後の戦いで前衛を務めるギーシュの負担がでかくなる。
しっかり動けよ？　僕の両足！
「ディアス！！」
誰かの悲鳴のような声と、目の前に唐突に現れた小さな人影。
そして悪魔の拳は、彼女の小さな身体を貫いた。

タバサ？
青い髪の少女は腹を貫かれる形で串刺しになっていた。
なぜ？　なぜここにいる？
悪魔が腕を振るう。

タバサの身体が宙を飛び、地面に、叩きつけられた。
なぜ間に入った？
なぜタバサが？

僕の危機とみたからだ。
だから盾になることを選んだ。
瞬動で割り込んだのだろう。

頭の中で冷静に分析して、僕は叫んだ。
言葉にならない叫びを上げてふらつく瞬動でタバサの元へ飛んだ。
周囲に声が満ちる。誰かが動く、魔法を使い始める。
戦いが再開される。

タバサ……。
「……シャルロット？」
血を流して、シャルロットが倒れている。
僕の、僕を好きだと言ってくれたシャルロットが。僕が守らなければいけないシャルロットが！　僕のシャルロットが！
『ディアス！　しっかりしなさい！　まだ間に合う！　治療しなさい！！』
僕のせいでシャルロットが……。
『ディアス！』
突然頬に熱い痛みが走った。
「しっかりしなさい！」
「……モンモランシー？」
そこにはもう一人の僕の守るべき少女がいた。
目に涙を浮かべて、強い眼光で僕を睨んでいた。

三十八章　悪魔襲来（後書き）

悪魔の手先襲来です。

封印がどうなったか不明。
なぜここに現れたかも不明。
戦闘力はディアス以上。

唐突すぎますか？
でも、事件は突然起こるのです。

極光系魔法はテイルズオブエターニアとエメラルドドラゴンからです。

エメラルドドラゴンの小説でレイヴァースだったかな？
そんな名前の破壊の光線魔法がありました。
後書きでＰＣ版ゲーム後半になってヒロインのタムリンがその魔法を覚えるとそればかり使うと書いてありました。
その作者いわく「タムリンレーザー」

ディアス、クルダ流交殺法をコピーされて若干動揺したところを突かれました。
しかもタバサが身代わりになって、もう錯乱一歩手前です。

こういう精神的なもろさがディアスの最大の弱点でしょう。
最終戦前に克服できるといいですが。

あ、一応宣言します。
タバサ死にません。

なにしろ治療にかけてはディアスより上のモンモランシーがいますから。
もう彼女の上は水の精霊ぐらいしかいませんよ。

腹に穴が空いて死なないってどうよ？
別にいいんですよ。
よくあるでしょう？　心臓と頭が無事なら治療可能なんですよ。きっと。
よくあるお約束です。

タバサの行動はある意味らしくないです。
戦闘に慣れているタバサなら、盾になるなら攻撃して相手の体勢を崩したでしょう。
それで十分ディアスを守れます。
こういう行動に出たのは、タバサ自身の心の問題です。
その点もたぶん次回にやります。

そういえば実戦は初めてですね。
これが主人公たちの初陣です。

いきなり壮絶ですね。初陣で人間一人串刺し。
普通トラウマものです。

三十九章　天罰術式

・キュルケ視点・

「モンモランシーはタバサの治療を！　僕が前に立つからルイズとキュルケで援護を。三人で足止めする！」

ギーシュの指示が飛び、モンモランシーが瞬動でタバサの元へ飛ぶ。

私たちは精霊魔法の身体強化を使い、黒い男に立ちふさがる。

ちらりとタバサを見た。

なにをやっているのよ、あの子は。

血まみれの彼女を見て思う。

あなたならもっと上手くディアスを助けられたでしょう？

なにを素人のように彼の身代わりになっているの？

あなた、死にたいの？

不意にディアスのためにと私を説得に来たときの表情を思い出した。

ディアスが困っている。

ディアスには仲間が必要。

だから助けて。

タバサはディアスのためになんでもする覚悟だと言った。

でもこれは違うでしょう？

あなたが死んだら、ディアスはどうなるの？

あなたが命を捨てて助けてくれたと感謝する男なの？

少なくとも今の彼は見ていられないほど無様よ。

これは説教が必要ね。
危なっかしいと思って協力する気になったけど。
やっぱり二人とも危なっかしいわ。
私がそばにいてしっかり叱ってあげなくちゃね。

そのとき私の横を雄叫びをあげてルイズの従者が駆け抜けていった。
わお、戦意旺盛ね。

……って彼、身体強化を使っていない？
なに考えているの？　なんで魔法を使わないの？
使えるんでしょうが！？

・サイト視点・

そこに辿り着いたとき、あっという間にタバサが敵にやられた。
あの男に串刺しのように腹を貫かれ、
血まみれになって、
地面に放り出されて！
頭の中でぐるぐると感情が渦巻く。

なんだこれ？
これは現実か？

ありえないだろ？
人間が串刺しになるなんてありえないだろ！
それにタバサは確かこの中じゃ、強い方なんだろう？
なんでこんな事になるんだ？

『相棒、感情を高めるのはいいが落ち着けって。これが戦いだ。ここはもう戦場なんだよ』
デルフの声が聞こえてはっとする。
そうだ。
俺は戦いに来たんだ。
あいつを倒しに来たんだ。
俺があいつを倒せばいいんだ！

俺は走り始めた。
いつもより身体が軽く感じる。
いまならなんだって叩き斬ってやれそうだ。

『相棒、魔法を使え！　使えるんだろう？　あれを使えば多少有利になる！』
デルフの声も頭に入らなかった。
俺は強い。
剣をもつと強くなれる不思議な力がある。
魔法だって使えた。
俺は強い。
こんな奴になんざ負けねぇ！

・ギーシュ視点・

ディアスの戦線離脱が痛いね。
見たところ負傷はなさそうだが、タバサの負傷で心理的に使い物にならない。
モンモランシーが向かったからタバサは大丈夫だろう。

タバサが無事だとわかれば、ディアスだって立ち直る。
彼はこんな事で折れる弱い男ではないはずだからね。

キュルケが炎の連弾を、ルイズが光の矢を。
僕がやばくなるたびに魔法で援護してくれるから、どうにか僕の拙い剣術で押さえきれている。
しかし強いな。
悪魔っていうのは。
一撃が重い。おまけに速い。しかも接近戦闘の技術がディアス並みだ。
僕一人だったらあっという間にやられていたね。
集団戦闘の訓練をしておいて良かったよ。

それにしてもブレイドの魔法では限界があるな。
僕も剣をもつべきか？
ディアスは確かマジックアイテムも作れたはずだ。
自分専用の武器を作ったことがあると言っていたな。

これが終わったら頼んでみよう。
接近戦担当なら武器を持つべきだろう。
あるいはレイピア形状の杖に持ち替えるか、軍人は大抵そっちだからそれもいいね。

ものすごい雄叫びを上げてサイトが突っ込んでくる気配がする。
その戦意の高さに苦笑した。
いきなりあんな場面を見たから萎縮してなにもできないかと思ったが、根性あるじゃないか。
そしてぎょっとした。
見ればわかる。
彼は魔法を使っていない！

なぜ使わない？
出し惜しみできる相手ではないし、普通の武器では戦えない……しまった！

僕たちはディアスやオールド・オスマンからある程度、悪魔のことを聞いて知っている。
通常の武器、系統魔法が効かないことも。
戦うなら純粋な魔力攻撃か、精霊魔法、あるいはディアスの使う神聖魔法しかないことを。
サイトにはそれを話していない……事前に教えるべきだった！

「サイト、いったん下がって魔法を使え！　そのままでは戦えない！」
サイトは僕の言葉を無視して悪魔に斬りかかった。
一撃、二撃。
すさまじい速さの斬撃が悪魔にあたるがびくともしない。
『相棒！　まずいぜ、効いてねぇ！』
剣から声が響く。
が、サイトは止まらない。
ただ闇雲に剣を振るう。
教えた型もなにもあったものではない。
ただ暴れているだけだ。

もしかして初めての実戦で頭に血が上ったか？

世話の焼ける！
僕は慌てて悪魔に斬りかかった。
サイト一人で相手にできる敵ではないのだ。

慌てたのがいけなかったのだろう。

僕は悪魔の蹴りを受けて吹き飛んだ。
ちっ……痛いじゃないか。
身体強化してなければ骨ぐらい折れるぞこれは。

そしてサイトは悪魔の拳を受けて吹き飛んでいった。
彼は……身体強化をしていない。

僕はすぐに起き上がり悪魔に斬りかかった。
ひたすら手数を増やして悪魔の行動を阻む。
「キュルケ！　サイトの治療を！」
「無理！　いま私が抜けたらあなたが死ぬわよ！」
ちくしょう、その通りだよ！
今もキュルケとルイズの援護のおかげで押さえ込めている。
どちらかが抜ければ手数が足りず。押さえきれない。

仕方が無い。
さすがに即死級のダメージではなかったと思う。
肋骨が折れた程度だろう。それだって重傷だが。
モンモランシーがタバサの治療を終えるまで待ってもらう。

サイトには悪いが、僕が倒れたら前に立って敵を押さえる人間がいなくなる。
キュルケとルイズではこいつ相手に接近戦闘は無理だ。
あっという間にやられる。全員殺される。
ならば我慢してもらうしかない。

もう少しだ。
モンモランシーならそう治療に時間はかからないはずだ。
そうすればタバサは無理でもディアスは戦線復帰する。
してくれないと困る。

お願いだから、ここで折れてくれるなよ。
ディアス。
君が頼りなんだよ。

・ディアス視点・

「世界に満ちる大いなる生命の精霊よ」
「彼女の身体に宿りし、小さな生命の精霊たちよ」
モンモランシーと僕の呪文が響く。
モンモランシーは怪我の治療。
僕がタバサの体力の回復、とくに失われた血を増やす。

醜態をさらした。

モンモランシーに殴られてようやく正気に戻った。
シャルロットはまだ死んだわけではない。
僕らなら治療可能なのだ。

ただの系統魔法の使い手なら絶望する重傷だろう。
だが、僕らは精霊魔法の『治癒』を習得した魔法使いだ。
水の精霊に次ぐ癒やしの名手だ。

絶望することも、取り乱すこともない。
ただ我が盟友たる精霊たちに頼み、彼女の治療をすればいいのだ。

「これでとりあえず大丈夫ね……ディアスは平気？」
「おかげさまで目が覚めたよ。迷惑をかけたね」
モンモランシーは少し怒った顔をした。

「そう思うならさっさとあのバケモノを倒してきてちょうだい。私はサイトのところに行くわ。どうやら負傷したらしいし、みんなは手が離せないでしょう」
無茶を言う。
けれどまったく同感だ。
シャルロットにこれほどの怪我を負わせた。
彼女を苦しませた相手をこれ以上生かしておくつもりはない。
多少の無理をしてでもこの世から消滅させてやる。

「じゃあ、サイトの方は頼む。僕はあいつを倒す」
「お願いね」
瞬動で再び戦場に舞い戻る。

「遅い登場ね？」
「タバサはもう大丈夫だ。ついでに僕も醜態をさらしたがもう大丈夫だ」
キュルケの皮肉げな声にそう答える。
「タバサは平気なの？」
「ああ、怪我は治療したし、体力や血も大丈夫だ」
ルイズの心配そうな声に肯きかえす。

「さて、ギーシュ！　みんな！　もうしばらく時間を稼いでくれ！僕が一撃で消し飛ばす！」
「承知！」
ギーシュがブレイドをまとった杖を振るい。
「任せたわ」
キュルケが炎の連弾を撃ちまくり。
「期待しているわよ」
ルイズが光の矢を連続射出する。

僕には守るべき仲間がいる。
僕には協力してくれる仲間がいる。
僕はその期待に応えよう。
たとえ未だ届かぬ領域であろうと手を伸ばし、つかみ取って見せよう。
『ディアス？　なにをする気です？』
見てのお楽しみさ。
『神気憑依』
さらに神気を高める。
神々の力たる神気。
魔力よりも強力な力にして神々を神々たらしめる力。
さらに世界の外から神気を引き込む。
生まれながら持つ魔力が消し飛ぶほど、神気を体内に宿し、その身に包む。
その先へ……！
「我は雷神の系譜に連なる神々の従者である」
僕の声が戦場に響く。
「偉大なる神々の愛娘よ。強大なる我が主よ」
今こそ届け！
「我が身にその力を降ろし、その力を振るえ」
セラファナ、力を貸して欲しい。

『ふふふ、そうですね。今のあなたなら可能かもしれません。我が従者よ。我が名を呼びなさい。そして人の子に天罰のなんたるかをしめしなさい』

「我が主にして雷神の愛娘セラファナよ。我が身に降りて我が敵を打ち砕かれよ」

『雷神・セラファナ憑依』

身体に雷が落ちた錯覚を感じた。
僕の身体は雷神の娘の身体。
僕の意識は雷神の娘の意識。
僕の意志は目の前の不埒な悪魔の欠片を抹消することを望み。
雷神の娘はそれを肯定する。

莫大な力が世界の外、身体の内側、魂の奥底からわき上がる。

皆その異常な気配に冷や汗すらかきながら、必死に戦い続ける。
よく頑張ってくれたね。
僕が頼りないせいで、負担をかけてしまった。
もうだいじょうぶ。
僕がこの戦いを終わらせる。

神聖魔法『天罰術式』起動。

神を宿し、神の怒りを人の身で振るう神聖魔法。
僕の目に、この敵の奥深くに一人の男性の姿が見えた。
豪華に着飾った一人の男。
人間だ。
僕の敵は人間なのだ。

シャルロットを傷つけ、仲間たちにこれほど苦労を強いたのは人間だった。

「人間よ。天罰というものを知っているか？」

刮目してみるが良い。これが神の怒りだ。

「億千万の雷が告げる。焼き払え、消し去り、抹消せよ。それは神の怒り、神の振り下ろす怒りの拳である」

悪魔の足下にサークルが浮かび、悪魔を拘束する。

「離れろ！」

僕の指示でギーシュが、ルイズがキュルケが即座に距離を開ける。

「消滅せよ」

天から降る光の柱。

莫大な数の雷が束ねられた光の柱は天と地をつなぎ、そこにある悪しき者を焼き滅ぼす。

悪魔の分身体は断末魔の声さえなく、消滅した。

『ついに私を憑依させ、悪魔殲滅用の天罰術式を行使するまでになりましたか、そのうち全力の私を召喚出来るようになるかもしれませんね』

そうなれば、みんなを危険にさらさないですむかな？

僕は戦えるかな？

悪魔と戦って、悪魔を倒して、誰も死なせず。

みんなを守って、僕は勝てるかな？

『もう休みなさい。後は私に任せて、今は休みなさい……ディアス』

僕の意識はまどろみ、眠りについた。

不思議と女神に抱きしめられているような、そんな安らぎを感じ

た。

・サイト視点・

痛みに動くこともできず。
血を吐いて、地面に倒れていた。

いてぇ、いてぇよ。

なんでこんな事になっているんだ？
俺は強くなったんだ。
もうただの高校生じゃないんだ。
不思議な力だってあるし、魔法だって使えるんだ。

選ばれた勇者だったらこんな時は傷ついても立ち上がって、敵を倒すものだろう？

なんで立てないんだよ！
なんで身体が動かないんだよ！

息が苦しくて、痛くて、つらくて……。
こんなの勇者じゃねぇ。
勇者って違うだろ？
こんなはずないだろ？

「動かないで、今治療するから」
そんな声が聞こえて、しだいに身体が楽になっていった。
顔を動かすとそこにはまるで神様のような存在感を放つ男が立っ

ていた。
よく通る声で呪文のような言葉を響かせ、仲間たちを周囲に従えている。

ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ。

俺のことを気にかけて世話するように言ってくれた恩人。
なんであいつなんだ？
なんでそこに立っているのが俺じゃないんだ？
俺が異世界から呼ばれた勇者なら、そこに立っているのは俺のはずだろう？

……わかっているさ。
俺は勇者なんかじゃない。
俺はただの使い魔として呼ばれた。
この場にいるのも成り行きで、本当は勇者どころか勇者の仲間ですらないんだ。

ちくしょう！
どうせだったら俺だっておまえみたいになりたかったよ。
才能に溢れていて、みんなに好かれて、金持ちのえらい貴族の生まれで。
俺は、俺はただの平凡な高校生で、別に特別な家系でもなければ本当は不思議な力なんてない。
この力は使い魔のルーンとかいうやつの力に過ぎない。

涙が溢れてきた。
涙でぼやける視界で、空から落ちてくる光の柱を見た。
俺を殴り飛ばしたヤツが、あっという間に消えていった。

なんだよ。俺いらないじゃん。
そんなに強いなら、最初からおまえが勇者やれば良かっただろう？
俺が勘違いして、調子に乗ってただけだってわかっているけど！

俺は……どうせならおまえになりたかったよ。
どうせ異世界に呼ばれて帰れないなら、すごい勇者になりたかったよ。

俺は、なんのためにこの異世界に呼ばれたんだろうな？
おまえだったらわかるかな？
おまえがこの世界の勇者だったら、俺のことも助けてくれるのかな？

俺は、たぶんただの平民Ａなんだ。
それが使い魔になってルイズの従者になっただけで。

ははははは！

俺はただの雑魚で脇役なんだ……。

・タバサ視点・

身体が動くようになったときにはすべてが終わっていた。
ディアスの魔法はすごい。
あれは神聖魔法というものだろうか。
でもあれは一人では発動できない。
仲間が敵を食い止め時間を稼いでくれなければ無理。
だからディアスは苦戦していた。

やっぱりディアスには仲間が必要。

歩いて近寄ったら、いきなりキュルケにビンタを食らった。
なにをするのかと思ったが仕方が無い。
わたしはみんなに心配をかけただろうから。
「あんた死ぬ気？」
え？
意外なことを言われてわたしは言葉が出なかった。

ああ、そうか。
もしかしたら死んでいたかもしれないんだ。
でもディアスを守って死ぬのなら、それもしょうがない。
「わたしはディアスの力になる。そのために命を捨てても惜しくない」
また叩かれた。
むっとくる。
「バカなこと言ってるんじゃないわよ。あんたの惚れた男はあんたが死んで平気な男だと思っているの？　あの取り乱しざまを見せてやりたかったわよ」
取り乱した？　ディアスが？
ありえない。
彼がわたしごときが負傷したぐらいで。
また叩かれた。
なにも言ってないのに……。

それからは説教された。
言われてみれば納得した。
そういえばあの状況ならわたしの最善手は敵に攻撃を加えて牽制することだっただろう。わたしならそれができた。
なにもできない無力な素人じゃない。

自分の身体を盾にするなんて馬鹿げたことを、わたしはなぜやったのだろう？

「あなた死にたがってない？　お母様が救われた。あとはディアスに恩を返したら死んでもいいとでも思っていない？」

胸が痛んだ。

息が止まった気がした。

……なにも言い返せなかった。

そんなわたしの頬をキュルケの両手が包む。

「いい？　あなたはこれから幸せになるのよ。ディアスと結婚して彼の妻になって、彼の子供を産んで母親になって、子供を育てておばあちゃんになっても彼と一緒にいるのよ」

わたしが母親になる？

そう、わたしは婚約者だ。いずれ彼と結婚する。

ありえない話じゃない。いやむしろ普通はそうなる。

「こんな戦いで死んでいいはずがないでしょう？　もっと自分を大事にしなさい」

自分を大事に。

わたしは……そうわたしはもう人形じゃない。

命を軽々しく扱っていいはずがない。

わたしは彼のために生き、彼と一緒に幸せになる。

幸せになっていいんだ。

わたしは……まだ人形の性根が残っていたのかもしれない。

そうか、わたしはもうシャルロット・エレーヌ・オリオール。

ディアスの婚約者にして、彼の将来の正妃。

命を捨ててもなんて考えていいはずがない。

彼に謝らないと。

無茶をしたことを彼はきっと心配して、そして怒っている。
キュルケのように。
わたしは自然に顔がほころんだ。
わたしはとても大事に思われているんだ。

・ジュリオ視点・

教皇の自室で突然ヴィットーリオ様が血を吐いた。
慌てて駆け寄ると、身体中にものすごい火傷が浮かび上がり、すぐに偉大なる始祖のお力で治癒された。
「どうなさいました！？」
「ふふっ、どうやら手駒がやられたようです。それも途方もない力で」
途方もない力？
「ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフですか？」
「ええ、彼は精霊の加護を受けていると聞いていましたから、もしかしたら精霊の力かもしれません」
ヴィットーリオ様に彼が危険人物だと報告して数日だ。
もう刺客を送られていたのか。
それを撃退された？
偉大なる始祖の力を受けたヴィットーリオ様の力を退けた？
ありえない。
そして不遜だ。

やはりあの男は危険人物だった。
必ずその力でヴィットーリオ様に立ちはだかるだろう。
「ヴィットーリオ様、僕が行きましょう。必ずあの小僧の息の根を止めてご覧に入れます」

「まちなさい。あなたはまだ始祖の祝福を受けていない。それからでも遅くはないでしょう」
僕は歓喜した。
始祖のお力を受けられる！
この僕が！

「よろしいのですか？」
「ええ、私の力になってください。……ところで偉大なる始祖への供物のあてはありますか？　めぼしい者は私がすでに始祖に捧げてしまいましたから」
僕は笑った。
一人の少女の顔が浮かぶ。
「大丈夫です。例の小娘を使いましょう。始祖の王家の血を引く小娘です。偉大なる始祖への供物にはちょうどいいでしょう」
「おお、これも始祖のお導きでしょう。偉大なる始祖もきっと満足されます」

僕を兄と慕う少女。
そんなに僕のことが好きなら僕のために力になってくれ。
その身を偉大なる始祖に捧げ、僕に偉大な力を授けてくれ。
きっと喜んで引き受けてくれるだろう。

いや、いっそあの修道院の人間丸ごと始祖に捧げてしまおう。
彼女も一人では寂しいだろうからな。

「それが済んだらいよいよ各王家に偉大なる始祖に心服し、そのための力になるように使者を出しましょう」
「ディアスはいいのですか？」
「たかが大公国の息子です。各王家が私に従えばなにほどのことはないでしょう」

確かにそうだ。
しょせん名前だけが有名な属国の小僧だ。
どんなに力があってもハルケギニア中の国家が従えばおとなしくなるだろう。
そしてそれからヴィットーリオ様を傷つけたことを後悔させながら殺せばいい。
「では儀式を始めましょう。儀式場へ」
「はい、ヴィットーリオ様」
いよいよだ。
僕も偉大なる始祖の力を宿し、ヴィットーリオ様の力になれる。
ディアスなんてしょせん系統魔法が得意なだけの小僧だ。
偉大なる始祖の力を得た僕とヴィットーリオ様なら、ひねり潰せるさ。

「ヴィットーリオ様も新たな供物を探さなければなりませんね」
「そうですね。また供物の選定を行いましょう。聖職者の数もだいぶ減りました。皆偉大なる始祖の元へ行ってしまいましたからね」
次は平民でもいいでしょうと提案する。
平民でも数を集めればきっと偉大なる始祖も満足されるはず。
ヴィットーリオ様も笑って承諾された。
供物狩りだ。
皆偉大なる始祖の元へ行けるのだ。
きっと喜んで身を差し出すだろう。

三十九章　天罰術式（後書き）

戦いの続きです。

いろいろありますが、ディアスが無事勝ちました。
土壇場で成長するのは主人公の特権ですね。

サイトはこの戦いで自分が勇者のようなかっこいいものではないと思い知りました。
サイト、挫折イベントです。
この先に彼の成長イベントがあります。

タバサはようやく自分がもう人形と呼ばれていた頃とは違うのだと実感しました。
命を捨ててもディアスのために、ではなく。
ディアスと幸せになるために、今後は戦うでしょう。

そしていよいよ黒幕登場です。
あいかわらずジュリオはディアスをなめきってます。
基本的にうちのジュリオはこんなのです。
傲慢で他者を見下し、ヴィットーリオだけに忠誠を誓う犬というイメージです。

ヴィットーリオは理屈をつけてディアスに刺客を送るのを諦めました。
ジュリオは前向きにあんな小僧などあとでどうにでもできると素直に受け取りましたが、実際はどうなんでしょうね。
単にヴィットーリオがびびっただけかもしれません。
あれは死ぬほど痛かったでしょうから。

そして例の少女は哀れ自称『偉大なる始祖』に仕える二人によって供物にされてしまいます（現在生存ルートの可能性も出てきました）。

『偉大なる始祖』といってもヴィットーリオが勝手にそう呼び、ジュリオは盲目的に信じ込んだだけでブリミル様じゃないのですけどね。

うちのヴィットーリオは原作のような悪辣な知謀を発揮しません。
単なる狂信者です。
いやぁやっぱりロマリアアンチタグつけて良かった。
『？』もいらない感じに最悪っぽいですね。

四十話　神の従者

・キュルケ視点・

すごいわね。
こう言ったら誤解されそうだけど。
まるで人間じゃないみたいだわ。

そのくらいあの時のディアスは人間離れした気配の持ち主だった。
つい好奇心で魔力制御法の気配探知で探ったら、おどろいたわ。
もう人間の気配じゃないんだもの。
メイジの持つ魔力も感じない。
生命の精霊すら感じられない。
ただただ理解出来ない莫大な力がそこにあっただけだったわ。

今は眠っているけど。
女の子の膝の上で。
モンモランシーでもタバサでもないわよ。
長い銀髪の、うちの制服に似た白いローブ姿の女の子よ。

同じように気配を探るとディアスの気配が元の普通の人間に戻っている。
そしてこの女の子から、人間の気配がせず先ほどのディアスと同じ気配がする。
赤い瞳を優しそうに細めてディアスを愛おしそうに見ている。
他人事だけど、あまりいい気分じゃないわね。
彼はタバサとモンモランシーの婚約者よ？
あんただれよ？

「君は何者かね。見たところ人間ではないね？」
ギーシュが声をかけた。
ナイスよ。
つい雰囲気に負けて誰も声を出せなかったけど、さすがギーシュだわ。
彼、空気読めないものね。

「私はディアスの主にして神々の系譜に連なるもの、セラファナと申します」
彼女はそう自己紹介した。
赤い瞳と目が合ってぞくりとした。
まるで魂をとられるかと思うほど怖かったわ。
神様？　なんの冗談？

「ディアスに使命を与えたのも私です。もうあなたたちは十分関わった。だから私も姿を見せ話をする気になりました」
「話は聞いているわ。あなたがディアスの言っていた神様ね？」
「……あなた知ってるの？」
「私とタバサはね……話してもらったわ」
ルイズの問いにモンモランシーは少しだけ言いにくそうに答えた。
婚約者だけが知っていたわけね。

「あなたたちはディアスの仲間です。共に世界の危機に立ち向かう同志です。そう信じてお話しします」
そう言われると、ちょっとこそばゆいわね。
私としてはそんな大層なことをしている気はないのだけど。

・オスマン視点・

ふむ、出遅れたか。
精霊魔法『瞬間移動』でこの場に転移したが、すべては終わったあとじゃった。
新しい弟子にも手伝ってもらって大急ぎで結界を張ったんじゃが、間に合わんかったか。

その場に突然現れたわしを子供たちが驚いた目で見ておる。
そして、そこにいるのは神々か。
こうして見るのは初めてじゃの。
声を聞いたことならあるんじゃが。
姿を見るのは初めてじゃ。
まるで普通の人間に見えるの、外見だけは。

子供たちは、全員無事じゃの。
タバサ嬢が服が血まみれになっておるが元気そうじゃ、負傷したが治癒したといったところか。
あとはサイト君か。
口元に血の跡があるし、表情にも元気がない。
おおかた負傷して足を引っ張ったか。
今の彼では戦力にはなるまいと声をかけなかったのだがのう。

やはり負傷者は出たか。
全員に『治癒』の魔法を教え込んでおいて良かった。
とくにディアス君とモンモランシー嬢は重傷でも簡単に治癒出来る実力を持っておるからの。
よほどのことがなければ死者はでまいと思ったが、やはり心配じゃったからの。

だからこうして大急ぎできたわけじゃが……。

「初めまして、お嬢さん。あんたは神々かの？」
「はい、オールド・オスマン。ディアスの主にして彼を守護する神セラファナです」
「ディアス君はどうしたのじゃ？」
「初めて使う大魔法で少し疲れただけです。少し眠れば目を覚ましますし」
まずは安心と言ったところか。

初めて使う大魔法のう。
そこまでしなければ勝てない強敵じゃったわけか。
無理をして欲しくはなかったのじゃが。

「とりあえずこんなところではなんじゃ、学院にもどるぞい」
皆が肯き飛行魔法を使おうとするのを止めて『瞬間移動』の魔法を使う。
行き先は、学院長室がいいかの。
あそこなら人目を気にせず話ができる。

もっとも話す気があればじゃがの。
わしは幾分含みのある目を銀髪の少女に向けた。
わしの知る神々は、少しばかり秘密主義じゃった。
重要なことは直前になるまで教えてはくれなんだ。
あの神々がもっと協力的で、もっとわしらに情報をくれていたらと思うこともある。

しょせん言い訳じゃ。
わしらが負けたのは、わしらの心と実力が足りなかったからに過ぎん。
それでも子供たちは同じ目にあわせるわけにはいかん。
この神々は、子供たちに協力的じゃろうか？

それが心配じゃの。

・ルイズ視点・

オールド・オスマンが魔法を使うと、あっという間にそこは学院長室だった。

「ふむ、腕はなまっておらんのう」

そう言ってひげをいじっているけど、ホントにすごいメイジだったのね。この人は。

最初の頃は頭がかわいそうなセクハラ爺くらいにしか思ってなかったわ。

セクハラ爺って言っても、この人が女生徒にセクハラしたことってないのよね。

もっぱら被害にあったのは秘書の方ね。

もう辞めちゃったらしいけど。

「少しばかり長い話になるのですが、タバサさんは服を着替えてきますか？」

「かまわない。あなたの話の方が重要」

セラファナと名乗った神様？　がそう提案するけどタバサはあっさり拒否した。

血まみれの服も気にならないらしい。

それにちょっと穴が空いていて肌がちらちら見えているのだけど気にならないのかしら？

なんだかいつもより、目が怖い。

たぶんいまだに彼女がディアスを抱きかかえているからかな？

この子も嫉妬とかするのね。

まぁ婚約者が見知らぬ女性に抱きかかえられてたら普通の反応ね。
私だったら即座に奪い返すわ。

ノックの音。
「お来たか。入りなさい」
オスマンがそうおおらかに応えると扉が開いた。
「皆様、ご無事でなによりです」
そこにいたのはメイドのシエスタだった。
そしてオスマンはとんでもないことを言った。
「わしの弟子のシエスタじゃ。なかなか見込みがあっての。今回手伝ってもらったのじゃ」
弟子？
シエスタが？
彼女は平民でしょう？

「オールド・オスマン！　平民に魔法を教えたのか？」
ギーシュが真剣な顔で詰問する。
それに対してオスマンは飄々と答えた。
「教えたがなにか問題かの？」
「ディアスの話を聞かなかったのですか？　平民に魔法を教える危険性を！」
「相談なら受けたぞい。まったくクソ真面目に悩んでおるからそんなことは気にするなと言ってやったわ。そんなもんなるようにしかならん。個人で背負い込むようなものではないわ」
……あれだけ悩んだ私やディアスはなんだったの？
私も従者が魔法を使えるようになった事で結構悩んだのよ？
両親にはどう説明しようかとか。
これからどうしたらいいのかとか。
それを気にするなと言われても……。

オスマンはどこか悪戯っぽく笑った。
「わしだって平民の弟子ぐらいもっておる。ディアス君のような子供がたかが平民一人に魔法を教えたことを悩む必要もなければ、責任を感じる必要もない」
ひょっとして、ディアスに責任を感じさせないためにわざわざ弟子を取ったの？

シエスタはそれでいいの？
「シエスタ。あなたは精霊魔法を習ったの？」
「はい、オスマン様から習いました」
「それがどういう事かわかっているの？　巻き込まれるかもしれないのよ？　危険なのよ？」
シエスタは柔らかく微笑んだ。
「たいしたことはできないかもしれませんが、私も皆様のお手伝いがしたいのです。すべてオスマン様から説明を受けて決めたことです。覚悟もできています」
その笑顔に私はなにも言えなくなった。

決意の表情？　ちがう。
ならなんだろう？
まるで……そう。大切な人の役に立てるとただ喜んでいるかのような笑顔。
まるで私のように。

私がディアスの役に立てると喜んでいるように。

・セラフィナ視点・

少々ごたごたがあったようですが、ようやく皆さん私の話を聞く気になったようです。
しかしシエスタさんですか。
短期間に結構な実力を身につけましたね。
戦闘向きではないですが、あの結界魔法は見事でしたよ？

私は語ります。

ディアス・ラグの名を私から与えられた少年の物語を。
いまだ途上の物語。
その秘密の欠片を。

彼が生まれるときから私の使命を受けていたことを。
彼はそれを知って、受け入れていたことを。
そのために彼は努力し続けてきたことを。

最初はこの世界に起こる大戦を止めることを目的としていた。
しかしその戦争が起きた理由を知り、精霊の使命を受けたことで彼の使命も変わった。
そして精霊からさらに詳しい事情を知り、世界の敵『悪魔』の存在を知った。
そしてそれを倒すことが彼の使命となり、そのために仲間を求めた。

私はゆっくりと語ります。
柔らかいソファーに座り、ディアスを膝枕して彼の髪を撫でながら。

皆が真剣に私の話を聞いていました。
そして話が終わったとき、オールド・オスマンはどこか悲哀を感

じる口調で呟きました。
「英雄として生まれ、英雄として生きるか……それが生まれたときから決まっていたとは、それではこの子の人生はどこにあるのじゃ」
私はその言葉になにも答えられません。

そんな資格はないからです。
彼から平凡な人生を奪い。
新たな命として転生させ、使命で縛りそのためだけに生きさせた。

彼が使命を早く終えることを夢見るのは当然のことです。
そのときこそ、彼のもっとも望む平穏な生き方があるはずだと思っているのですから。

ですがオールド・オスマンは気がついているようです。
彼に平凡な生き方などないのではないかと。

英雄として生まれ、
使命を果たして本当に英雄になったら、
果たして彼は平凡な一般人に戻れるでしょうか？

例え世間に知られない英雄になったとしても、彼のもつ力は莫大です。
そんな常人を超えた人間が、平凡な生き方ができるのか？
私にはわかりません。

ただ私は彼がなるべく平穏に生きられるようにほんの少しだけ力を貸すだけです。
それだけしかできませんから……。

もしディアスがこの世界で幸せになれないのなら、

私は彼を神々の世界に招くでしょう。
悪魔退治の英雄であり、すでに神たる私をその身に降ろし、神々の力たる『天罰術式』を操るディアスは神々の末席に迎えられる資格があるでしょう。

……私にできることは、たったそれくらいでしかありません。

・サイト視点・

とんでもない話だった。
この世界はマジに世界の危機にあって、ディアスは本物の世界を救う勇者らしい。
これが漫画なら、素直に応援できたかもしれない。
これがゲームなら、張り切って世界を救うためにプレイしたかもしれない。

でもこれは現実だ。

戦えば怪我をするし、
怪我をすれば血を流す。
下手をすれば死ぬような怪我だってする。

タバサは今はぴんぴんしているが、俺の目にした光景は即死していてもおかしくないような光景だった。
人間が、人間の姿をしたバケモノの拳に身体を貫かれて串刺しにされたんだぜ？
生きていたのは運が良かったのと、魔法の力のおかげだろう。

俺がそうならなかったのは、たぶん運が良かっただけだ。
それにしたって死ぬほど痛かった。
息をするのも苦しくて、そのまま死ぬのかと思った。

俺はイヤだ。
あんな事は二度とごめんだ。
だいたい俺は部外者だ。
俺がこの世界のために戦わなくてはならない理由なんてないだろう？

それにこの世界にはもうすごく強い勇者がいるじゃないか。
俺なんてお呼びすらかからないさ。

「あなたはこの学院にいればいいわ。ここなら安全だから」
主たるルイズのありがたいお言葉だ。
俺のことなんかあてになんかしていないってさ。

俺はふらふらと自室に戻り、デルフに話しかけた。
「……実戦って怖いんだな」
『そうだな。実戦ってのはようするに殺しあいだから、相棒にはいきなりあの敵はきつかったな』
「あいつは強かったのか？」
『俺っちが今まで戦った中では結構な強さだったよ……そういえば俺っちって悪魔と戦ったことがあるようなないような……わからねぇや』
頼りないなぁ……。
俺は笑った。
俺が気兼ねなく話せるのはデルフくらいだ。

「そういえば給料ももらったんだよな……使わないからしまいっぱ

なしだったけど」
机の引き出しの奥に突っ込んだこの世界の貨幣の入った袋を取り出す。
俺はそれをじっと眺めた。

俺は剣を使える。並の相手よりはよほど強い。
俺は使用人としての基本的な経験がある。
俺は……一人でも生きていけるんじゃないか？

「なぁデルフ……俺がここを出て行くっていったらどうする？」
『どうもしないさね。相棒の気の済むようにすればいい』
「一緒に来てくれるか？」
『俺っちを誰だと思っているんだ？　相棒はただ俺っちについてこいっていえばいいんだよ』
よし、ならそうしよう。
俺は世界を守る戦いなんて関わりたくない。
ルイズは今は戦わなくていいと言っているがいつ気が変わるかわからない。
間違いなく俺は戦う力を持っているのだから、いざとなったらあてにするかもしれない。
だったらさっさと逃げるべきだろう。

そうさ、俺は勇者じゃないんだ。
ただの高校生、こっちじゃただの平民だ。
危ないことから逃げたって誰も文句なんていわないさ。

「ちょっと他の場所へ行こうぜ、デルフ。もしかしたらもっといい場所があるかもしれない」
『おう、相棒の気の向くまま行こうじゃねぇか』

わかっている。
俺は本当は怖くなって逃げだそうとしている。
誰も俺に戦えなんて言わないだろう。
でも俺は怖い。

ここにいればまたあのバケモノが襲ってくるかもしれない。

俺は……こんなに臆病だっただろうか？

『相棒……今は気の済むままに行動しな。そのうち相棒の気も晴れるさ』

気が晴れる？　なんのことだ？

俺は荷物をまとめると、部屋を出た。
笑ってしまうほど荷物は少なかった。

シエスタ。
いろいろ教えてくれてありがとう。

ルイズ。
こんな俺にいろいろよくしてくれてありがとう。

ギーシュ。
おまえのおかげで俺も多少は強くなった。感謝している。

ディアス。
きっとおまえならこの世界を救う英雄にだってなれるさ。
俺には無理だけど、おまえは本当にすごいんだからな。

「じゃあ、みんな……さよなら」

俺は使用人の寮を出て、
少々罪悪感がわいたが馬を一頭、無断借用した。

馬の乗り方を教えてくれたのはルイズだった。
町に行くのに、馬に乗れないとどうしようもないと言って。

そうだあの町に行こう。
トリスタニアだったか、あそこに行けばきっとなんとかなるだろう。
俺は夜の街道に馬を歩かせた。
街灯なんてない道をとぼとぼと馬を歩かせる。
月明かりだけを頼りに背筋が寒くなるような暗闇の道を進みはじめる。
街道沿いに行くだけだから、なんとかなるはずだ。

ここ以外の場所に行けば、きっとなにかが変わる。
俺はそう信じたかった。

四十話　神の従者（後書き）

セラファナ登場。
そして事情を少し説明。
しかしセラファナってディアスが意識がないときばかり現れるよね。
特に理由は無く、単にそうなっただけなんだけど。

そうだ。
ディアスが安易にセラファナを頼らないように姿を現すのを自重していたという理由はどうだろう？
うん、そうしようかな。

このようにこの物語はノリと勢いで構成されています。

そしてサイト。
新天地を探して家出です。

デルフリンガーはサイトの様子になにか気がついているようですね。
さすが伝説の剣です。

このまま行方不明になったりしないから大丈夫です。

そしてシエスタが精霊魔法使いになりました。
師匠はオールド・オスマンです。

シエスタの弟子入りイベントをすっ飛ばしたのでいきなりの登場です。
お互いそれなりの理由があっての弟子入りです。
その内容はおいおいやる、かもしれません。

そしてコルベール先生イベントがつぶれていたため、先生が未登場です。
コルベール先生がサイトを立ち直らせる案もあったのですが。

次回はたぶん家出したサイトのお話になります。

四十一章　魅惑の妖精亭のジェシカ

・ジェシカ視点・

私はこれでも面倒見がいい方だと思っている。
人によってはお節介とも言う。
でも他人を平気で見捨てられる薄情な人間になるよりも何倍もマシでしょう？

私はジェシカ。
魅惑の妖精亭のジェシカ。
店主スカロンの娘で、店の看板娘よ。

今朝早く私が市場からの帰りに拾ってきた彼は、厨房で元気よく働いている。
一本の剣を背負った少年。
広場で見たときは、まるでこれから自殺でもするのかと思ったわ。
それほどうちひしがれた表情で、一人座り込んでいた。

話を聞いてみると。
「行くところがない」
ということなので店に連れて来た。

人情が自慢の下町の店だ。
皆素性のわからない少年を快く受け入れた。
「俺、サイトっていいます。使用人の見習いみたいなことしてました」
温かく受け入れられたことがよほど嬉しいのか、サイトは涙ぐんでいた。

前の仕事先で苦労したのかな？
それとも嫌なことがあって逃げ出したのか。

誰もとくに詮索しない。
ここはそういう場所だからだ。
うちの従業員の中には他人には話したくない過去を持っていそうな女の子も結構いる。
私たちはなにも聞かない。
ただ同じ職場の仲間として受け入れて、ここを去るというのならば笑顔で送り出すだけだ。

サイトにはとりあえず空いている部屋を貸して、剣は部屋に置かせた。
さすがにお店を剣をもって歩かれるのはまずい。
本人が言うには結構強いらしいが、用心棒だって普段は店の裏にいてお客から見えないところにいるものだ。
剣を見せびらかしながら働くなんてありえない。

「いい手際じゃない。こういうお店で働いたことがあるの？」
「あ～、以前いたところで教えられたから」
ふ～ん。
そういえば使用人見習いみたいなことをしていたって言ってたわね。
なかなかの手つきで食器を洗っていく。
ぼそっと。
「……なにが幸いするかわからないなぁ」
なんて呟いていた。
以前の仕事場の教育に感謝でもしているのかしら？

「トレビア～ン！　サイト君、いい仕事ぶりね。いつまでもうちで

働いてくれていいわよぉ！」

クネクネと身をくねらせながらオカマ言葉で話す父を見て、私は少しだけ驚いた。

どうやら父はサイトが気に入ったらしい。

オカマ言葉を操り、似合わない女装と女というものを勘違いしていそうなやたらクネクネした仕草。

これが私の父スカロンだ。

こんなオカマな父だけど、私の大好きな父よ。

母がいないぶん、私は父に愛されて育ってきた。

ちょっと変だけど、慣れると案外平気になるものよ。

うちのお店は、ようはお酒を出す店だ。

それも年頃の女の子が可愛い服をして給仕するお店。

宿でもあるけど、身体を売るような商売はやっていない。

父曰く。

「女の子は愛でるものであって、食い物にするものではないわ」

ということらしい。

父なりのこだわりがあるのだろう。

そんな父が私は大好きだ。

なかには勘違いして、女の子を連れ出そうとしたり、部屋に連れ込もうとするお客もいるが父が上手くあしらっている。

そのあたりのお客のあしらい方も父はすごい。

お客を怒らすことなく、かといって卑屈にもならずに上手くその場を治める。

私でもまだあの域には届かないわ。

一日目は無事終わり、サイトも素人にしてはがんばった方だろう。

厨房で働くだけなら、なんの問題も無い。

ただどうも彼は口が悪いところがあるから、接客は無理ね。

「客商売なんだから、笑顔よ、笑顔」
そういっても。
「こ、こうか」
と引きつったように唇をひん曲げる。
その表情にお店中の女の子が笑ったわ。
サイトは憮然と皿を洗い始めてしまった。
「どうせ俺はバイト経験もないよ……ちくしょう」
ばいとってなに？

「お父さん、彼をいつまでここに置くつもり？」
「いつまででも、彼が出て行きたいといわない限りわね」
珍しい。
いつもはたいてい次の仕事を世話してあげたりするのに。
別に追い出したいわけではないけど、やっぱり女ばかりの店に若い男がいるのは少し問題がある。
いつもはそういう男性従業員はしばらくここで働いたあと、父が働き先を探してきて紹介する。
大抵はみんなそれを喜ぶ。
女の子ばかりの職場というのは男性にとっては居心地が多少悪いらしい。

いえ、それだけではないわね。
ここは女の子が給仕する酒場。
大の男が働くにはあまり褒められた仕事ではないでしょう。
もちろん女もだ。
たまに私たちのことを身体を売ってお金を稼いでいると勘違いして蔑むように見てくる人たちもいる。
あるいは哀れまれるか。

……ふざけるなと怒鳴ってやりたい。

父はそんな仕事はさせないし、許さない。
このお店はただお客さんにお酒を楽しんでもらうお店だ。
ただ給仕が若い女の子というだけで、それ以上のことはない。
普通の酒場となにも変わりはしない。

「サイトをずっと雇い続けるの？」
「彼しだいね。彼はずっとここにいることを選ぶかしら？」
まるで彼がいつか出て行くとわかっているようだ。
不思議そうな顔をしていると父が優しく笑った。
「ジェシカ、サイト君はね。小鳥さんなのよ」
「小鳥？」
「そう、どこか遠くを目指して空を飛ぶ小鳥さん。でもほんの少し疲れて今は枝に止まっているだけ、やがて疲れが癒えたら、また空を飛んで目的の場所へ行こうとする。彼はそういう人なのよ」
よくわからない。
それは彼がなにか目的があるということ？
今はただここで休んでいるけど、いずれその目的のために出て行く？
目的ってなに？
というか、なんでそんなに詳しくわかるの？
父は少しだけ目を細めた。
「ジェシカにはまだ早いわね。いい女になりなさいジェシカ。いい女はね。男のことならなんだってわかるのよ」
父さん、男じゃない。
そんな文句を口に出すより早く、優しく頭を撫でられた。
「だからサイト君のことはとくに気にすることはないわ。きっと彼は自分で飛び立っていくでしょうから」
父さんがいうのなら、きっとそうなんだろう。

サイト。父さんがここまで見込んだのだから、うちの居心地の良さに負けて腑抜けたりしたら許さないわよ。

・サイト視点・

ここはいい場所だった。
みんな親切で、優しくて、俺なんかのことを気遣ってくれる。
町に来ればなんとかなるなんて甘い考えは実際に町に来たら吹き飛んでしまった。

町に来て、それからなにをするか。
俺はなにも考えていなかった。
ただなんとかなるだろう。違う場所に行けば何か変わるだろう。
けれどなにも変わりはしなかった。

見知らぬ町、見知らぬ人。
どこになにがあるのかさえほとんどわからない。
なにをしたらいいのかもわからない。
お金があるから飯ぐらいは食えるだろうけど、それだってお金がなくなったら？
そうしたらどうやってお金を稼げばいい？

剣が使える。使用人の経験がある。
けれどゲームみたいに酒場に行けば仲間を募集しているなんて事があるわけはない。
現代日本のようにバイトの求人雑誌があるわけでもない。
俺は途方に暮れた。

そして広場で一人ぽつんと座り込んでいた。

そしてそこに黒髪の女の子が現れた。

事情を話すと、彼女は俺をこの店に連れてきてくれた。

住む部屋を貸してくれて、飯を食わせてくれて、働く場所もくれた。

俺は運がいい。

そういえば学院でもそうだった。

結局俺はなにも不自由しなかった。

周囲がなんでもそろえてくれた。

住む場所も、仕事も、教育も、剣の訓練も、魔法も。

すべて周囲のみんなが与えてくれた。

俺が自分で勝ち取ったものなど、なにもない。

俺は恵まれていたんだ。

見知らぬ異世界に召喚されて、心細くて不安で、ただそれだけでなにも気がつかなかったけど。

周囲は俺を心配して、俺のためにできることはなんでもしてくれていた。

俺はみんなに感謝の言葉を言っただろうか？

言ったとしても義理程度で、本心から言ったことなどないような気がする。

俺のことなど放っておくということだってできたはずだ。

実際シエスタに習ったこの世界の常識では平民の地位は低く、平民一人が野垂れ死のうと貴族がそれを気にかけるなどありえないと習った。

そのときはなんてひどい世界だとしか思わなかった。

けれど違った。

シエスタはそんなことを言いたかったのではないだろう。
いかに俺が恵まれているかと言うことをきっと伝えたかったのだ。
貴族たちが俺のためにいろいろと手を回して俺が不自由しないように取りはからってくれる。
それがどれほど幸運なことなのか、この町に来て実感した。

誰も俺のことなど見ようとしない人々。
俺が広場で座りこけていても声をかけることなく、人々は通り過ぎていく。
現代日本だって同じだ。
公園で一人座り込んでいる人間がいたとして、誰が声をかけて世話などする？
誰もそんなことはしない。

そして幸運にも俺はジェシカと名乗る女の子に連れられ、その世話を受けた。
俺は泣いたさ。
与えられた部屋で一人で泣いた。
自分がどれほど幸運なのか思い知らされた。
あの学院でも、俺はなにもひどい目になど遭わなかった。

あの戦いだって、ルイズは俺を止めた。
ギーシュは「来るのならば覚悟しろ」と言った。
ルイズの制止を無視し、ギーシュの忠告を聞き流した結果があのざまだ。
俺は浮かれていたんだ。
剣が使える。魔法も使えた。
ならば次は悪い奴をやっつけるのが当然だろうと。
まるでゲームの主人公になったみたいに。
現れる敵はちょっと苦戦するけど、ちゃんと倒せる強さで、それ

を倒して俺はさらにレベルアップする。
そんな妄想に取り憑かれていた。

これは現実なんだ。
現れる敵がこちらの強さに合わせた敵のはずがない。
ディアスはずっと努力し続け、ルイズたちも彼の仲間になってからずっと訓練し続けた。
それに比べれば俺は昨日今日現れてちょっと訓練をかじった程度の素人だ。
ルイズが心配して止めるのも当然だった。

ルイズは俺を『いらない』と言ったのではないのだとようやくわかった。
俺を心配して、「安全な場所にいなさい」と言ってくれたんだ。
俺が弱いから、なんの覚悟もない素人だから。

もし俺がもっと強くなったら、
きちんと覚悟を決めて戦場に立てる剣士になれたら、
ルイズたちは「一緒に戦おう」と言ってくれるだろうか？

俺は数日、魅惑の妖精亭で働いた。
せめてお世話になった分は働いて返そうと思った。
みんな親切だった。
スカロンさんは変な人だけど、なんの事情も聞かずに俺を雇ってくれた。
どこの誰ともわからないのにだ。
ジェシカは俺の面倒を見てくれた。
仕事でわからないことや間違っていることを丁寧に教えてくれた。
他の女の子たちも、事情はなにも聞かずにただ同じ店で働く仲間

として受け入れてくれた。
「ここはいいお店でしょう？」
そう笑う彼女たちに俺は泣きそうになるのをこらえながら肯いた。

もし世界が滅びれば、みんな死んでしまう。
『悪魔』が現れればみんな殺されてしまう。
そうならないようにディアスたちは努力している。
なら、俺は？
俺はなにをすればいいんだ？

「なぁ、デルフ」
『なんだい相棒？』
お店が終わって部屋に戻ると俺はデルフに話しかけた。
「俺にできる事ってなにかあるのか？」
『相棒はなにがしたいんだい？』
デルフの問いに俺は考えた。
考えてからこう答えた。

「俺は、俺に親切にしてくれた人に恩返しがしたい。俺はこの世界に来て不自由をしたことがない。みんな周囲の人たちがなんとかしてくれた。俺はその恩になにも返していない」
デルフはしばらく沈黙した。
『相棒にできることをやればいい』
「俺ができることってなんだ？」
『相棒は俺っちを振るえる。魔法だって使える。あの化け物にだって相棒はまぐれとはいえ何発か俺っちを叩き込んだんだぜ？　もしあの時相棒が魔法を使っていたら、もしかしたら勝っていたかもわからねぇ』
普通の武器が効かない敵。
あの時はなにも知らず考えずにただがむしゃらに剣を振りまくっ

た。
もし魔法でデルフを強化していたら？
俺はあの敵に勝てただろうか？

『勝てないまでも手傷は確実に与えられた。それは間違いない。俺っちが保証する』
そうすれば俺はみんなの役に立てたのだろうか？

『相棒。相棒はまだまだ強くなる。相棒が望めばだがね』
俺はもっと強くなれる？

そうしたらみんなの役に立てるのか？
みんなを守ることもできるのか？

勇者にはなれなくても、勇者を守る剣士ぐらいにはなれるだろうか？

「俺は……きっと勇者になりたかったんだと思う」
『相棒なら、望めばなれるさ』
「ちがうよ。勇者は他にいる。なら俺は勇者を守り、仲間を守る剣士になる」
『危険かもしれないぜ？』
「そうだな。正直怖い。痛いのもいやだし死にたくない」
『ならなんで？　相棒が戦わなくても誰も責めはしないだろうさ』
俺はデルフを抜き、目の前にかざした。
サビだらけのボロボロの剣だ。
だけで本当は頑丈で、とてもいい剣だとディアスもギーシュも言っていたとルイズから聞いた。
見栄えが悪くても、かっこわるくても。
俺は……がんばってみたい。

「俺は異世界に無理矢理召喚された。帰る方法もわからない」
もしかしたらないかもしれない。
それでも俺は、まだ生きている。
たくさんの人に生かされている。
「俺も男だ。召喚されたからには一回ぐらい役に立ってやる。俺の意地だ。なんの役にも立たない平民Aではいたくない」
『意地か、いいねぇ。男だったら意地のために命を賭けるぐらいがちょうどいいってもんよ』
俺は無謀なことをしようとしているのかもしれない。
だから俺はもっと強くなる。
そして俺はこの世界で親切にしてくれたみんなを守る。
みんなが「一緒に戦おう」と言ってくれる男になる。

・スカロン視点・

サイト君が店を去るときが来た。
「ありがとう。俺、帰るよ。きっとみんなが待っていると思うから」
そう言って何度もお礼をいってサイト君は店をあとにした。
わずか数日のつきあいだったけど、とてもまっすぐで心地よい少年だったわ。
店のみんなでお見送りして、私は願っていた。
彼がなにを悩んでいたか知らない。
彼がどんな答えを見つけたかわからない。
それでも彼が後悔しない人生を生きられるように、私はただそれだけを願っていた。

「父さん」
「なぁに、ジェシカ？」
「父さんの言ったとおりになったね」
「あら、私の偉大さをようやく理解したかしら？」
「うん」
あら、素直ね。
「大丈夫、ジェシカもいい女になるわ。あと数年かかるかもしれないけど」
「ついでにいい男も見つけてやるわ」
「その意気よ。いい女にはいい男がつきものですもの」

私の大切なジェシカ。
きっといい女になるでしょう。
そしていい男を見つけて、恋をして、結ばれるでしょう。

私は娘が幸せになることを知っている。
私の娘が不幸になんてなるわけがない。
なんといっても私が育てて、妻が天から見守っている娘ですもの。
不幸になるなんてありえないわ。

「さぁ私の妖精たち！　今日も張り切っていくわよぉ！」
「はい！　ミ・マドモワゼル！」
魅惑の妖精亭は今日も張り切って営業するわ。
たまに来るお客さんの止まり木にもなる。
下町人情のお店。
私たちの暖かい居場所。
きっとこんな毎日がこれからもずっと続くのでしょうね。

四十一章　魅惑の妖精亭のジェシカ（後書き）

サイト家出編、一話で終了。

我らがサイト君、持ち前の前向きさで再び戻ることを決めました。
サイト的には戦いが怖かったことよりも、
自分が誰にも必要とされていないことがショックだったようです。

人情の店「魅惑の妖精亭」
サイトのお話と見せかけて、ジェシカ、スカロン親子のお話。
と見せかけてサイトがあっさり立ち直るお話。

簡単に復活しすぎ？
ご都合主義発動？
気にしないでください。
うちのサイトは基本夢見がちなお調子者ですよ？
落ち込んでもちょっと頭が冷えれば考えも変わるのです。

もっともまだサイト大活躍！　とはいきません。
サイトの成長はさらに物語が進めば起きる予定です。

次回は物語の本筋に戻ります。

四十二章　開け扉よ

・ディアス視点・

僕らの方針はすでに決まっている。
異界へ至る道を開き、精霊の根源たる精霊王に会うこと。
セラファナが僕が寝ている間に仲間たちにそう主張したらしい。

封印から逃れた『悪魔』が人間に取り憑いていること。
その人間はやがて取り込まれ、完全な『悪魔』になること。
そして『悪魔』は封印された本体を呼び寄せ、封印を破るだろう。

そう『悪魔』の封印はもういつ破られてもおかしくない状況であり、僕は予定通り仲間を集めた。
ならば今こそ精霊王と会い、その加護を得るべきだろう。

しかし問題がある。
僕は精霊王と交信はできず。
精霊王に会うための門も開けない。
他の精霊にたずねても要領を得ない。
『会う資格を持っているのならばいけるだろう』
とのことだ。

だけど、僕は門を開けない。

悩む僕にオールド・オスマンは言った。
精霊魔法は強力な魔法であるが、その真価は複数の魔法使いが協力したときにこそ発揮されると。
『悪魔』を弱体化させる結界も最低人数は四人である。

それは単独で行うよりも四人の精霊魔法の使い手が協力した方がより効果が高いからだ。
オスマンが急に弟子を求めたのも、一人では使えない魔法を使うために他の精霊使いを必要としたからだと。

僕は精霊王の言葉を思い出していた。
精霊王は僕一人を招いたのではない。
僕の仲間たち全員を連れてこいと言ったのだ。

ならば精霊王に会うための魔法。
彼のいる異界への扉を開く魔法は、もしかしたら僕ら全員がそろっていなければならないのかもしれない。

僕はワルド子爵に手紙を送り、学院に来るように願った。
彼が来れば、僕の仲間は全員そろう。
ワルド子爵。
モンモランシー。
タバサ。
ギーシュ。
キュルケ。
ルイズ。
この六人だ。

ワルドからの返事はすぐに来た。
数日中に必ず学院に行くとあった。

全員の力で精霊王のいる異界への扉を開く。
これでだめなら僕らの力不足ということになる。

成功させなければならない。

もう猶予はあまりない。
悠長に訓練に明け暮れている余裕はないのだ。
『悪魔』はすでにこの世界にあり、その力を増し、やがて封印された本体を呼び寄せる。
可能ならば、封印が完全に破れる前に戦いたい。
そうすればかつての英雄のように、大きな被害もなく誰にも知られぬままに戦いを終わらせられる。

僕は……勝てるのか？
まだ自信が持てない。
分身体でさえ、全力をもって戦い。
仲間たちの助力を得て、最大の魔法を使ってようやく滅ぼした。
この上さらに強大な本体と戦えるのか？

『そのために精霊王の加護と協力を得るのですよ～』
そうだな、セラファナ。
不安がっても仕方がない。
僕は今できることをやろう。

・タバサ視点・

ディアスからみんなに話があった。
数日のうちに全員の力で異界への門を開き、精霊王に会うと。
それは本格的な戦いがはじまるということだった。
「いまさら聞くことではないかもしれないが、いいのか？」
そうたずねるディアスにギーシュは大袈裟に嘆いて見せた。
「なんと水くさい！　いまさら僕らに手を引けというのかい？　少なくとも僕は君に手を貸すことを決めている。親友が命を賭けて戦

うのにそれを黙ってみているなんてできないさ！」
……親友だったの？
「私はディアスの力になると決めているわ。断られてもついていく」
モンモランシーも穏やかに笑う。
「私たちはもう仲間でしょう？　ディアスはただついてこいっていえばいいのよ！」
ルイズがディアスを叱る。
「あんたたちって危なっかしくて放っておけないのよ」
キュルケが仕方なさそうに肩をすくめる。

わたしはディアスの手を握ってその目を見つめた。
彼はまだ迷っている。
みんなを危険に巻き込んでいいのかと迷い続けている。
なんとなくそれがわかった。

ディアスは優しい。
場合によっては他者を利用することもできる人だろうけど、友達をなんの心の痛みもなく利用できる人ではない。

わたしはディアスの手を取って宣言した。
「あなたはわたしたちの勇者。わたしたちはあなたと共に戦い。そして勝つ」
そう、ディアスはわたしたちの勇者。
わたしたちがこの人ならばと信じた英雄。
少なくともわたしは、どこまでもついて行く。

「わかった。みんなで精霊王のもとへ行こう。そして戦おう」
ディアスはわたしの手を優しく握り、みんなを見た。
皆穏やかな表情でその視線を受け止める。

彼はまさしく英雄だろう。
こうして彼の元に、それにふさわしい力を持つ者が集っている。
ここにいる誰一人とっても、千人の軍勢相手にも退かないだろう実力者たちだ。
そうなれるようにみんな努力した。
戦えるように。彼の力になれるように。生き残れるように。

わたしたちは必ずディアスを勝たせてみせる。
一緒にどんな敵にも勝ってみせる。

わたしたちは仲間なのだから。

・ルイズ視点・

わたしたちは精霊王に会うための、異界への扉を開く魔法を特訓した。
まず満足できる内容だった。
あとはワルド様が到着すれば、いよいよ精霊王に会いに行く。

部屋に戻った私は室内に意外な人物を見て驚いた。
それから少し怒って見せた。
「女性の部屋に勝手に入ってはいけないのよ？」
「ごめん、でもここにいれば確実に会えるだろ？」
サイトだった。
まったくこの数日どこをふらついていたのだか。

なんだかずいぶん久しぶりに感じる。

なぜだろう。
ああ、そうか。
なんとなくサイトの雰囲気が違うからだ。
以前は不安そうで、短気で、どうにも落ち着かない男だと思ったけど。
目の前のサイトはなにがあったか知らないけど、落ち着いた雰囲気を持っている。

「外をほっつき歩いていいことでもあった？」
「ああ、俺がすごく恵まれていることがよくわかった」
恵まれている？
今までは口を開けば不満ばかりだったのに。

「町に行ったよ」
サイトは語り出した。
そこでは誰も知っている人がいなくて、誰も自分のことなど気にもとめなかったと。
それでもたった一人世話を焼いてくれた人がいて、とあるお店で働いたこと。
見知らぬ世界に来て、本当ならそのまま放り出されてもおかしくないのにいつも誰かが世話をしてくれていたことに気がついたこと。
「俺は運がいいんだなって実感した」
……そうね。
サイトは運がいいわ。
もしディアスがいなかったら、私はサイトにこれほどの環境を与えようと考えついただろうか？
使い魔だから、平民だからと言い訳して適当に放っておいたかもしれない。
さすがに虐待はしなかっただろうけど、ここまで世話するなんてきっと考えつかなかったわ。

「だから俺はその恩返しがしたいと思ったんだ」
別にいいのに。
「あなたを勝手に召喚したのは私よ。別に気にしなくていいわ」
「召喚したから世話をしなきゃいけない義務なんて、ほんとはないんだろう？」
確かにない。
普通の使い魔でさえ、まともに世話をしている貴族がどれだけいるか。
大抵は最初は物珍しがって可愛がるが、あとは使用人任せだろう。

サイトはどこかさっぱりした笑顔だった。
「俺はみんなに恩返しがしたい。だから俺を仲間に入れてくれないか？　俺はまだ弱いけど、努力する。きっとみんなの力になってみせる」
「死ぬかもしれないのよ？」
「それは前回の戦いでわかった」
「死んだら帰れないのよ？」
「それでも俺はなにもしないでいられない。なんの役にも立たない自分が許せない。なにより召喚されたのに誰にも必要とされないことには絶対に耐えられない」
誰にも必要とされない。
それだけはいやだと。

私にはその気持ちがわかる。
系統魔法が使えず。
幼い頃はなんの魔法も使えなかった。
メイジなのに魔法が使えない。

たまらなく惨めで、情けなかった。

両親は「努力しなさい」というけど期待していないことはわかっていた。
魔法の使えない貴族なんて、まともな嫁入り先すらあるか怪しい。
私は女としてもヴァリエール公爵家にとってなんの役にも立たない存在だった。
嫁入りもできない女性なんて、貴族の家では不名誉以外の何物でもない。

誰にも期待されず。必要ともされていない。
その惨めさを私はよく知っている。

彼もそうなのか。
いえ、私がそう感じさせたのね。
彼の安全を考えて関わるなと、安全な場所にいろと言ったけど。
サイトはむしろ「頼りにしている」と、そう言われたかったのね。

なら、私に出来ることはなんだろう？
考えるまでもない、彼を信じてあげることだ。
必要だと手を差し出すことだ。
その上で、彼が死んだりしないように力になることだ。

「途中で逃げるのはなしよ。仮にも私の従者なのだから、最後まで戦って生き残ってもらうわよ」
「任せろ！」
挑発的に笑う私にサイトは不敵に請け負った。
彼はあまり強くはないかもしれない。
それでも彼に「あなたは必要ない」と私は言えない。

ディアスを説得しなければならないわね。
彼は納得してくれるかしら？

・ディアス視点・

深夜の学院、その広場に仲間たちが集った。
ワルドも到着した。
もはや実行あるのみだ。
精霊王に会い、その加護を受ける。

それを聞いたワルドは感激した面持ちで、改めて奮戦を誓った。
「このジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド。殿下の杖となり、必ず殿下に勝利をもたらしましょう」
まるで僕の家臣のような姿に、周囲は驚いていたね。

ここにいる中で参加しないのはオールド・オスマンのみ。
彼は過去の戦いで精霊の加護を受けている。
そして今回の戦いではなぜか知らないが精霊たちはオスマンを認めなかったらしい。
だから留守番。
僕としては彼が来てくれれば心強いんだけどね。

メンバーは僕。
モンモランシー。
タバサ。
ギーシュ。
キュルケ。
ルイズ。
ワルド。

そして。
シエスタ。
サイト。

以上九名だ。

シエスタはオスマンが連れて行けと推薦した。
直接戦闘の技術は低いが精霊魔法使いとしてなら優秀だと。

サイトはルイズが頼んできた。
本人が望み、覚悟があるのならいいと受け入れた。

サイトは以前とは別人のように落ち着いて見えた。
数日学院を離れていたらしいが、なにか心境の変化があったのだろうか？

ああ、あの映像の剣士を思い出すな。
かつての世界のサイト。
彼もあんな風にルイズの横に立ち、最後までルイズを守っていた。

さて、行こうか？
『はい、いよいよですね』
うん、もうすこしだ。
今度こそ、もう少しだ。
『はい。精霊王の加護を受け、悪魔を滅ぼす……それで終わりです』
それが一番難問なんだけどね。
『だいじょうぶです。ディアスは私の自慢の勇者なのですから』
そうだといい……本当に僕なんかが勇者や英雄になれるなら、みんなの期待に応えられるなら、それにこしたことはない。

僕を中心に周囲に円陣を組む。
中心に立つ僕をぐるりと囲むように八人の仲間が立つ。
「世界を司る精霊よ。精霊たちの根源にして王よ」
僕の言葉が夜の広場に響く。
「我はかつての約定を果たす。仲間たちはここに集い、今こそあなたに会いに行こう」
精霊の力が広場に満ちる。
仲間たちがそれぞれ杖を掲げた。
杖のないシエスタは祈るように胸の前で手を組み。
サイトはデルフリンガーを抜いて天にかざした。
「我らが前に道をしめせ。我らが勇者の前に道を開け」
仲間たちの声が唱和する。

「世界よ。我らが意志に応えよ」
周囲の精霊の力がさらに強くなる。
僕らの声は一つとなり、ただ一つの現実を望む。

「我らが前に、開け扉よ！」

周囲が光に包まれた。
成功したという安堵感が広がる。
僕たちは精霊王に招かれた。
『おう、そのとおりだ。俺サマが会ってやるんだ。ありがたく思えよ？』
精霊王の声が響く。
なんだか懐かしい。
ようやくだ。
ようやく僕は仲間を得て、戦いの舞台にのぼる。

かつて力不足と断じられた。

今の力はかつての比ではない。
仲間さえいないと嘆かれた。
頼りになり信頼できる仲間たちを得た。
僕は約束を果たしたぞ。
精霊王よ。
今こそ僕らにその加護を、世界の敵と戦う力を与えてくれ。

・オスマン視点・

いったか……。
急に寂しくなった広場を見渡し。
全員の姿が消えていることを確認した。
精霊王の門は開いた。
皆は精霊王に招かれた。

さてどれほどかかるかの？
彼らが無事に戻ってくることを祈るぐらいしかわしにはできんの。

子供たちよ。
がんばるのじゃぞ。

四十二章　開け扉よ（後書き）

さりげなく精霊魔法に関して設定付け足し、
「一人で使うよりも複数の魔法使いが協力した方が強力」

そしてサイト復活。
仲間入りしました。

すべての仲間がそろい。
主人公たちは精霊王の元へと行きます。

サイトがもはや別人？
気にしないでください。
覚悟を決めた男の子は強いのですよ。

四十三章　精霊王

・ディアス視点・

そこはかつて訪れた場所とはまるで違った。
まるで宮殿のような豪華な部屋。
開放感のある広間は空気もまるで自然の中にいるように澄んでいて室内独特の圧迫感は微塵も感じない。
金の飾りがふんだんに使われ、室内は魔法の明かりで隅々まで照らされている。
深紅の絨毯が敷かれ、天井は夜空のような漆黒だ。
窓の外にはどこともしれない広大な大地と青空が見える。

一段上には玉座があり、そこに一人の青年が足を組んでこちらを見ている。
その周囲には四人の男女。
水の精霊と風の精霊の姿もある。
とするとあとの二人は大地の精霊と炎の精霊か。

まるで王の謁見の間だ。

「よく来た。現在の勇者たち。ようこそ俺サマの宮殿へ。歓迎しよう」
玉座の青年がよく響く美しい声で僕らを迎えた。
金色の髪を長くのばし、青い目を好奇心で輝かせている。
控えめに表現しても美男子であった。
ゆったりとした白い衣服を着て、くつろぐように玉座に腰をかけている。
僕やウェールズですら及ばないほどの気品と威厳を感じさせる美

しい青年。

「あなたが精霊王か？」

「いかにも、俺サマこそがこの世界を司る精霊。この世界の精霊の根源。この世界そのものであり、この世界を守護するもの。精霊たち、いや世界の王である」

この世界そのものか……どういう事かな？

仮に目の前の青年を滅ぼしたら、この世界も滅ぶという意味かな？

そして世界が滅べば、この青年も滅ぶ？

あるいはこの世界の化身とでもいうべき存在なのか？

『あたりです。そのまま言葉通りの意味で彼はこの世界の主であり王です。そして世界そのものでもある』

頭に声が響いたとたん僕の目の前に銀髪の少女、セラファナが現れた。

白いローブ姿の彼女は女神にふさわしい威厳がある。

まるで僕らを護るかのように僕と精霊王の間に立った。

「今回はお早いお出ましだな。異界の神よ」

「前回は様子を見ていたらディアスを殺されかけましたからね」

その言葉に周囲の仲間たちがぎょっとする。

精霊王が肩をすくめた。

「おおげさだな。ちょっと精神をぶっ壊しただけだろ？　ちゃんと治療もさせたじゃないか。いつまで根にもってるんだよ？」

「今回はなにをするつもりです？」

警戒心丸出しのセラファナに精霊王は大袈裟に両手を広げた。

「もちろん。俺サマの加護と祝福を与えるのさ。あの忌々しい異界の化け物を滅ぼすためにな」

「危険はないのですね？」

セラファナの問いに精霊王は楽しそうに笑った。

「妙なことを聞くなぁ。そんなもの……あるに決まってるじゃねぇ

か」

周囲の空気が重苦しくなった。

「あれ？　なにいきなり緊張してんの？　いまさらだろう？　おまえらまさかなんの苦労も危険もなく力が手に入るなんて甘いこと考えていたのかよ？　現在の勇者はずいぶん甘っちょろいな」

そう嘲笑う。

なまじ顔立ちがきれいで、声も美しいから凄みがあるね。

「しいていえば俺サマからの最終試験だ。これをクリアできないなら、そもそも『悪魔』なんぞと戦わない方がいい。この場で死んだ方が苦しみ無く死ねるぜ？」

「試験ですか、合格したらご褒美でもくれるのかな？」

僕が問うと精霊王は愉快そうに笑った。

「おやおや、あのときのヘタレがずいぶん生意気になったもんだ！　仲間ができて強気になったか？　それとも力を手に入れたからか？」

「さぁ、どちらだろうね？」

「くっく、いいぜ……いいじゃねぇか。いい目になってきたよ。おまえ」

「それで、試験に合格すれば加護を受けられる。そう受け取っていいのかな？」

「おう、そうだ。逆に言えばこれを越えられなければ見込みがない。ここで死んだ方がましだな」

精霊王は組んだ手にあごをのせてこちらを楽しそうに見ている。

「命の惜しいヤツは今のうちにいいな。優しく元の世界に強制送還してやるよ」

・キュルケ視点・

命を賭ける覚悟があるか、ね。
正直、他は知らないけど私には命を賭ける気はあまりない。
ギーシュは親友のため、そしてモンモランシーのため。
モンモランシー、タバサ、ルイズはディアスのため。
ワルド子爵はもうほとんどディアスの忠臣っぽいわね。
シエスタとサイトはどうだろう？

皆黙っているとサイトが怒鳴った。
「俺は逃げない！　俺はみんなのために戦う！」
あら、以前とは大違いね。
ずいぶんかっこいいじゃない。
あれだけ痛い目を見て、まだ戦えるのだからその根性はたいしたものね。

シエスタも静かだが妙に耳に残る声で宣言した。
「私にも戦う理由があります。私はそのために命を落としても悔いはありません」
平民なのに、ずいぶんいい覚悟しているわね。
戦う理由？
なにかしら、彼女が戦う理由。
彼女のことをよく知らないからちょっと想像がつかないわね。

「僕はディアスの仲間になると決めたときから、命を賭ける覚悟をしている。いまさらだね」
ギーシュはそうキザっぽく笑い。
「貴族の誇りにかけて、戦いを前にして背を向けるようなことはしないわ」
ルイズがそう宣言する。
貴族の誇りねぇ？

あなたの場合はどちらかというと女のプライドじゃないのかしら？
どうもあなたを見ているとそうとしか思えないのだけど。

「私はディアスの力になる。そう決めているわ。いまさら命を惜しんだりしない」
「わたしも同じ、それに戦いはいつも命を賭けておこなうもの、ギーシュの言うようにいまさらな問い」
モンモランシーとタバサも同意する。
……まったくこの子たちは。
ワルド子爵も「自分は殿下と共に戦うのみ」とか言っているし。

「私はいやよ」
そういうと周囲の視線が一斉に集まった。
いまさらなにを言うのかという目だ。
タバサなどどこか裏切られたような傷ついた表情をしている。
まったく、ほんとうにまったく。
「私は死ぬ気はないし、死ぬ覚悟などしていないわ」
「ならお嬢さんは帰るかい？」
精霊王が優しく語りかけてくる。
声は優しい、まるでこちらを思いやってくれていると勘違いしそうだ。
だけどのその目はまるでヘビが獲物を捕らえたような目だわ。

あいにくだけど、私は綺麗なだけの男には興味は無いの。
そしてあなたのような表面と腹の中がまったく違うような男。
そういう相手は疲れるから嫌いなのよね。

「私は死ぬ気はない。私は必ず勝利して生きて帰る。試験だろうが試練だろうが、『悪魔』との戦いだろうが同じだわ」
私の言葉に精霊王は目を見張った。

「私は死なない。私は生きて帰る。みんなも目を覚ましなさい。あなたたちが死んだら悲しむ人はいないの？　あなたたちを戦いに巻き込んだ彼はあなたたちが死んでもなにも感じないような男なの？　あなたたち簡単に命を賭けるなんて口にしていいの？」

皆の視線がディアスに集中し、彼は少し苦笑した。

私はずっと彼の表情を視界に入れておいた。

この場でもっとも事情を知るのは彼だ。

セラファナはもっと詳しいだろうけど、あいにく彼女のことはよく知らない。

彼ならばある程度付き合いがあり、その人柄を知っている。

表情が読めれば考えていることはわかる。

彼は困惑していた。

皆が命を賭けると次々に宣言することに戸惑い。

そして苦しむような顔をした。

それを見て精霊王は、かすかに笑った。

あれは嘲笑だ。

あの性悪長髪男は、ディアスを苦しめて楽しんでいた。

彼は優しい。

友人が死んで、なにも感じないような男ではない。

きっとこの戦いに巻き込むことさえ、かなり悩んだに違いないのよ。

その彼の前で自分の命を軽視する発言は許されない。

例え内心の覚悟があっても、口に出すべきではない。

だから私は。

「私は死なない。死ぬ気はないわ。だから死の覚悟なんて私には必要ない。だって私は必ず生きて帰るから」

あなたたちも気づきなさい。
おそらく精霊王の試験はもう始まっている。
この回答さえ、精霊王の試験に影響を与える。
……たぶん。

「わたしたちは全員生きて帰る。戦いに勝利し、敵を滅ぼし、家族や友人の待つ家に帰る。……なにか違うかしら？　変な覚悟をするよりよほど前向きよ？」
周囲の仲間たちが苦笑する。
「キュルケらしい」
そうギーシュが肩をすくめた。

「あんたの言うとおりだ。俺は勝って、そして生き残る。別に死にたいわけじゃないしな」
サイトがそう言って肯く。
「みんなもそうだろ？　死んじまったらそれで終わりだ。でも生き残れば、家族や友達とまた一緒に暮らせる。ようは勝って生き残ればいいんだ」
「わたしも死ぬ気はない」
タバサが同意する。
ディアスが微笑んだ。
柔らかく温かい微笑だった。
「みんな、死ぬ覚悟なんていらない。ようは勝って生き残ればいいんだ。サイトの言うとおりだよ。僕らは別に軍人でも兵隊でもない。国のため世界のために犠牲になる必要は無い。ただ自分たちの幸せのために戦い、勝てばいい。生き残らなければ幸せな暮らしもできないのだから」
そう死ぬ必要はない。
死の覚悟など、わたしたちには必要無い。
わたしは精霊王を見つめ笑った。

「覚悟を決めることと、命を捨ててもいいと思うことは別でしょう？　精霊王さん」

精霊王は笑った。
大口を開けて笑い転げた。
玉座の周囲の四人は表情さえ変えないでこちらを見ている。
「いや、傑作だ！　まったく本当にいい仲間を得たな天の眷属」
「ええ、最高の仲間たちです」
ディアスがこちらを見て微笑んだ。

あら可愛い笑顔。
ちょっと胸の炎が燃えたわね。
でも残念。
あなたはもうタバサのものですもの。
親友の男はさすがにとれないわ。

しかし本当に世話の焼ける子たちね。
これだからほっとけないのよ。
それが私の戦う理由かしら。
この気持ちのいい友人たちを死なせないために、私は戦いに参加する。
その覚悟はある。
だけど死ぬ気なんて一切無いわ。

覚悟を決めることと、死んでもいいと思うことは別でしょう？

・セラファナ視点・

あ、焦りました。
まさかもう精霊王の試練が始まっているとは思いませんでした。
周囲が命を捨ててでも戦うという空気一色になったとき、わたしは半ば失敗を覚悟しましたよ。

この手の試練は命を捨てることを覚悟してはいけない。
死ぬ気になった人間は強い。
けれど死の誘惑に負けやすい。
困難な状況になったとき「死んでもかまわない」と自棄になったり諦めてしまう。
『悪魔』相手にそれは致命的な弱点になる。

あの世界の敵は弱い心を喰らう。
死の誘惑に負けた心で挑んでも、返り討ちにあうだけでしょう。

『悪魔』相手の戦いは生き残るための戦い。
命を軽視する者は『悪魔』に喰われて終わる。

命を捨てる覚悟をしたものは確かに強く見える。
けれど実際は死の誘惑に常につきまとわれ、それに簡単に屈してしまう弱い心でしかない。
戦いの場で本当に強い者は、生きることを諦めない者。
命の輝きを信じ、力強く命を燃やせる者こそ。
『悪魔』の天敵になり得る。

あの赤毛の女性。
キュルケでしたか。
たいした女性ですね。
精霊王の隠された意図を見抜き、その挑発を見事かわした。

もしかしたらこの戦いの本質すら理解しているのかもしれません。
本当にディアスは良い仲間に恵まれましたね。

・ディアス視点・

や、やばかった。
おそらく精霊王の試練はここに来たときから始まっている。
僕は半ば予想し覚悟していた。
でもそれを周囲には言わなかった。
確信がなかったからだ。

精霊王はこの世界の神といっていい。
そんな存在が無条件に力を貸すなんて信じられなかった。
必ず僕らを試す。
そして僕らが本当に『悪魔』と戦うにふさわしいかどうか見極めるだろうと思っていた。

それがあの言葉であり。
それによる僕らの反応だったのだろう。
あの話に飛びつき、戦いから降りようとするなら論外。
反発して「命など惜しくない」と言ってもおそらくいけない。

『悪魔』は人間の弱い心を糧とする。
命を軽視する人間の心は、おそらく弱い。
それはいつ死んでもよいということだからだ。
いつ終わってもいい。
そんな考えで戦える相手ではない。

命にしがみつき、最後まで勝つことを諦めない気迫がいる。
それは死の覚悟をした人間では無理だ。

それがはっきりわかったのはあの戦いだ。
『悪魔』の分身体との戦い。
タバサは命を捨ててでも僕を守ろうとして重傷を負った。
他の仲間は最後まで僕が復帰することを信じ、諦めずに戦った。

そして僕は、その期待に応えようと思った。
今まで成功したことのない。
『天罰術式』の行使。
そして思った。
最後まで諦めない。
苦しくても、不安でも、踏ん張り続ける。
そういう人間の方が死を覚悟した人間よりはるかに強い。

『悪魔』を倒すのは魔力、精霊の力、神々の力……そして人間の強い意志。

おそらくあの時僕の仲間たちはその最後の条件を満たしていたのではないか？
そしておそらくそれこそが、この戦いに大きく影響する。

キュルケに感謝しなければならない。
僕には周囲の空気を一変させることはできなかった。
なぜなら、みんな僕のためにと言ってくれているからだ。
その僕が「それはいけない」と言っても納得しなかっただろう。

「いいねぇ……意外に見込みがあるじゃないか」

精霊王は実に楽しそうだ。
こっちは胃が痛いよ。
こんな事ならみんなとちゃんと話し合うべきだった。
精霊王に会うことばかり考えていてそのあとのことを話し合うことをしなかった。
僕は阿呆だな。

精霊王は嬉しそうに手を広げた。
「最高だよ、現在の勇者たち！　俺サマの試練を受けるにふさわしい高潔なる魂たちよ。俺サマはおまえたちが試練をくぐり抜け再び俺サマの元に来ることを楽しみにしている！」
試練？
まだなにかあるのか！？

僕の意識はそこで途絶えた。
ああ、またかと一瞬思った。

四十三章　精霊王（後書き）

精霊王登場！　です。
金髪碧眼。ウェールズといいディアスといい。
金髪美形が多い作品です。

精霊王の回かと思ったら、キュルケの見せ場でした。
彼女は周囲を冷静に見られる女性な気がするので、こういう役回りです。

ちなみにディアスには手を出しません。
親友の男にはさすがに手はつけません。
うちのキュルケは恋のためなら見境なしではありません。

四十四章　優しい夢

・シャルロット視点・

「どうしたのかい？　シャルロット」
お父様に問いかけられ、わたしは思わず顔を伏せた。
だいじょうぶだろうか？
はしたないと叱られないだろうか？
お父様は優しくわたしの頭を撫でた。
「そんな顔をする必要は無いよ。婚約者に久し振りに会えるのだから、喜ぶのは当然だ」
そう久し振りだ。
ここ数年、彼は魔法学院に通っていてガリアには来られなかった。
クルデンホルフ大公家の長男。
ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ。
本来ならばクルデンホルフ大公家の跡継ぎだが、様々な政治的やりとりの末、わたしの夫になることが決まっている。

将来のガリア王。
彼自身はガリア王家の血を引かないが、正妃はわたしであり、その子供は間違いなくガリア王家の血を引くことになる。
わたしが女王になり、彼をその補佐に置くという案もあった。
けれど叔父に言わせれば「玉座に座るだけなら血統にこだわっても仕方が無い。能力があればいいのだ。それにどのみちその子供はガリア王家の血を引くのだ」と周囲の反対をばっさり切り捨てた。

アルビオンのウェールズ皇太子と並ぶ天才。
彼をガリアに迎えられると決まったとき、叔父と父は「これでクルデンホルフは取ったも同然」と笑って喜んでいた。

クルデンホルフ大公国の正当な跡継ぎ、トリステイン王家の血さえひく彼をガリア王に迎え、その子供に王位を継がせる。
跡取りを取られたクルデンホルフ大公国の顔を立て、恩を売り、その経済力をこちらに取り込む。

わたしは正直女王の座など重荷なだけで自信がない。
だから彼がガリア王になるのならとても嬉しい。
彼ならきっと上手くガリアを統治するだろう。

現在はお父様がガリア王に、ジョゼフ叔父様が宰相となってガリアを無事に治めている。
次はディアス殿下とわたしがガリアを治め、その次はわたしたちの子供がガリア王になる。
難しいお話はわからないけれど、ディアス殿下と結婚できるのはとても嬉しい。
双子の妹もうらやましがっていた。
とてもかっこよくて優しくて、天才と評判の貴公子。
女の子なら誰でも憧れるあの人がわたしの夫になる。
想像しただけで頬が熱くなる。

そのディアス殿下がいよいよ魔法学院を卒業して、今日はその挨拶に来られる。
結婚はいつの話になるだろう？
おそらくそう遠いことではないだろう。
それまでにわたしはディアス殿下が見とれるほどの美しい貴婦人になってみせる。
今でも「可愛いよ」とか「とても綺麗だ」と言ってくれるけど、もっと成長すればきっと喜んでくれる。

お母様もディアス殿下を気に入っているし、お父様も文句のない

人物と言ってくれる。
きっと家族みんなで仲良く暮らせる。

ずっと、家族みんなで……。

ふとディアス殿下が一人で誰かと戦う光景が脳裏によぎった。
あれ？
なんだろう。
胸がざわめく。

なんだろう？

・モンモランシー視点・

私は幸せだ。
幼い頃からずっと想ってきた。
お慕いしてきた。
その彼とついに結ばれた。

モンモランシ伯爵家の唯一の子であるわたしがクルデンホルフ大公家の跡継ぎと結ばれるわけがないと思っていたけど。
お父様がそのあたりは上手くやってくれた。
将来わたしの子供の一人がモンモランシ伯爵家を継ぐ。
それまではわたしがモンモランシ伯爵家の当主代理。
学院在籍中に婚約。
そして卒業後嫁入り。

私はディアスの妻。

将来はクルデンホルフ大公国の大公妃になる。
ディアスは大公家を継ぐための勉強をしながら、私を愛してくれる。
私だけを愛してくれる。
彼ほどの大貴族ならば、彼の身体と心を独占できることなどありえない。
それでも彼は真摯に私だけを愛してくれる。

毎晩のようにわたしたちはお互いを求め、愛しあった。
幸福のあまりおかしくなってしまいそうな時間だった。
いつもこの時間が終わらないことを願ってしまう。
いつまでも彼を抱きしめ、彼に抱かれ、彼の愛を受け入れていたい。

父からも「たくさん子供を産みなさい」と言われているけど、そんなことは関係なく私はディアスを求めた。
はしたない女と思われるかと不安だったけど、ディアスはそんなことは言わない。
むしろ積極的に私をその胸に抱き、私を優しく包み込み、私の中の情欲の炎が燃え尽きるまで愛してくれる。

幸福で、涙が出そうだった。

私の脳裏にちらりと一人、戦場に立つディアスの姿が浮かぶことがある。
そんなとき私は無性にディアスが恋しくなり、夢中で彼を求めた。
胸が痛む。
なにかが私の中で叫んでいる。

私はその叫びに胸が張り裂けそうなほど切なくなる。

なんだろう？

私はなにを感じているのだろう？

・ルイズ視点・

今日はいよいよ私の結婚式だ。
相手は私の元に婿に来て、次期ヴァリエール公爵となる。
エレオノール姉さまがいつまでたっても結婚できず。
ちいねえさまは嫁入りが決まった。
そしてついにお父様が動いた。
なんとクルデンホルフ大公に頭を下げて、跡継ぎ息子を婿にもらってきたのだ。

当然大公は反対した。
けれどそこをなんとかとひたすら頭を下げ、しまいには泣いて説得したらしい。
「ヴァリエール公爵家がこのままでは私の代で終わってしまうのです！」
そういって説得したらしい。
さいわい大公にはまだ娘がいる。
婿を取れば大公家がつぶれることはない。

熱意で押し切って婿をぶんどってきたと評判だ。
そして話はとんとん拍子に進み、婚約から結婚へ。
最初の交渉の難航が嘘のようにスムーズに話は進んだ。

そして今日は結婚式。

「綺麗よ。ルイズ」
ちいねえさまがそう言って褒めてくれる。
純白のドレスに身を包んだ私はなんと答えていいかわからずに下を向いた。
本当だろうか？
私は彼にふさわしい女だろうか？
「自信を持ちなさいルイズ。あなたはとても綺麗だわ」
ちいねえさまがそう言って私を軽く抱きしめた。

教会の聖堂で私たちは向き合った。
目の前に立つのは私の親友で、恩人。
すらりとした長身をスーツで包み、金色の髪を丁寧に櫛で整えている。
「綺麗だよ。ルイズ」
その声を聞いたとたん、心臓が爆発するかと思ったわ。
「ひゃ、ひゃい」
「落ち着いて、大丈夫。なにも心配することはないよ」
「は、はい」
優しく微笑みかける彼に私はなんとか返事した。
結婚式は無事に進み、私たちは参加者たちの祝福を受けながら口づけを交わした。

ああ、ディアス。
私なんかで本当にいいの？
大公家を捨てて、系統魔法の使えない女の元へ婿に来て後悔していない？
不安でいっぱいの私にディアスはどこまでも優しかった。
「最高の花嫁だよ。僕のルイズ」
涙がこぼれる。
改めて唇を合わせる。

お互いの舌がふれあうような深く熱いキス。

きっといい妻になろう。
一生懸命努力しよう。
ディアスが後悔しないぐらい、いいえ胸を張って幸福だと言えるぐらい努力しよう。

だってようやく私は……愛する人と結ばれたのだから。

脳裏に一人で誰かと戦うディアスの姿が浮かぶ。
なんだろう？
あれは誰だろう？
なんでディアスは戦っているんだろう？

なにかが引っかかる。
なにかが思い出せない。
とても、大事なことのような気がするのに。

「さあ行こう」
ディアスに手を引かれて、私は歩き始めた。
その間も、脳裏のディアスは一人で戦い続けていた。

・セラファナ視点・

「やってくれましたね。精霊王」
目の前の小憎らしい笑みを浮かべる小世界の神を八つ裂きにしたい。
謁見の間のような広間、そこには玉座の精霊王と私しかいない。

四人の精霊たちは姿を消し、ディアスと仲間たちは精霊王によってどこかへ送られた。

私はそれを見ていることしかできなかった。
今の私では精霊王に対抗できない。
神々の約定で制限された状態では、なにもできない。

「そう怒るなよ。いつもやっていることだぜ？　これは」
ああ、世界ごとこいつを滅ぼしてやりたい。
約定なんて踏み倒して、今すぐこいつをブン殴りたい。
神々の約定。
人間は神ならなんでもできると思っているものもいるが神にもルールがある。
私程度の階級では、干渉できる世界は限られている。
干渉できる方法もだ。

私はこの世界を再構成し、やり直させた。
そこに従者を送りこみ、世界の行く末を変えた。
そしてその従者を最大限サポートした。
そこまでが今の私に許される権限だ。

私自身が全力を振るい悪魔を討伐することは許されない。
そのためには上の許可がいる。
許可を求めてはいるが、まだ返答は来ない。
この世界が数多くある並行世界の一つでしかないため、重要性が低いのだ。

本来の物語から分岐した並行世界。数多くある小さな世界の一つ。

相手が『悪魔』とはいえ、神々を直接派遣するほどの重要性は認

められない。
せいぜい、人間への助力程度が限度だろう。
おかげでディアスにばかり負担をかけている。
「どうせディアスたちに頼るしか手がないのですから、もったいぶらずに手を貸せばいいものを……」
「そこはそれ、お約束ってヤツよ」
……脳天気に笑うその顎を砕いてやりたい。
「おや？　そろそろ幻想世界に感づいた奴らがいるな。ふふっ、そのまま幸福な夢を選ぶか、それとも困難に立ち向かうことを選ぶか見物だな」
頼みますよ。
ディアスの信じた仲間たちなのですからこんなところで腑抜けないでください。
夢の世界に捕らわれて終わるような弱い人間ではないはずです。
……たぶん。

・ギーシュ視点・

ありえない。
それが僕の感想だ。
モンモランシーが僕を愛することは百歩譲ってありえたとしよう。
けれど彼女がディアスを忘れるなどありえない。
「どうしたのギーシュ？」
「ああ、モンモランシー……」

僕は可愛らしく小首をかしげるモンモランシーを抱きしめた。
彼女は嫌がりもせず。むしろ頬を染めて僕の腕の中で力を抜く。

幸福なのだろう。
愛する女性と相思相愛となり、やがて結ばれる。
これ以上ない幸福な物語だ。

「だからこそ嘘くさい」
「え？」
モンモランシーが驚いたように僕を見る。
「僕はね、モンモランシー。君がひたむきに彼を愛する姿が美しいと感じていた。その美しさに余計に惹かれ、焦がれた。君は僕を愛してくれるけど、僕の愛したモンモランシーじゃない」
「な、なにをいっているの？　私がなにか怒らせるようなことをした？」
「いや、君は素晴らしい女性だ。だけど僕にとって最高の女性は彼に一途に想いを捧げる彼女なのさ」
僕はなんて愚かなのだろう。
自分に想いを向けない女性にこれほど恋い焦がれるとは。
その姿をなによりも美しいと思うとは。

救いようのない愚かな男だよ。僕は。

「精霊王に願う。優しい夢を感謝する。けれど僕は夢を望まず。ただ現実の彼女が幸福になる事をのみ望む！」

世界が砕け散った。

・シエスタ視点・

ありえない世界。
ありえない彼の姿。
ありえない幸福。

それらは私の否定の言葉で一瞬のうちに崩壊した。
私は気がつくと荒野に一人立ち、目の前には巨大な竜がいる。
巨大といってもミスタ・クルデンホルフが呼ばれた大怪獣のような金竜とは比べものにならない小さな竜だ。
それでも私一人を丸呑みにできるほどには大きい。
「これが次の試練ですか？」
私は若干気分を害していた。
誰にも打ち明けたことのない想いを、あんな形で見せつけた精霊王に憤りを感じていた。
「今の私は、優しくないですよ」
オスマン様に習った結界魔法が竜を縛り、拘束する。
「跡形もなく消し飛んでください」
結界魔法の内部ですさまじい光が発生し、竜を焼き殺す。

あっけない。
見かけ倒しでしたね。

私はただ前へ進んだ。
どこへ行けばいいのかは精霊が教えてくれる。
私はただ前へ進み、あの方の力になればいい。
すべてはあの方のために。

ディアス・ラグ・フォン・クルデンホルフ殿下。
平民のわたし如きを気にかけ優しくしてくれた貴族様。

あの方こそ本当の貴族なのだと私は信じている。

だからこそあの方の力になる。
別に見返りが欲しいわけではない。
ただ、力になりたいという私のわがままだ。

「待っていてください。シエスタは今すぐに参ります」
あの方はおそらく、今戦っておられる……。
たった一人で。

四十四章　優しい夢（後書き）

精霊王の試練です。

優しい夢の世界。
そこから抜け出せる強い意志があるのか？
そんな感じです。

セラファナは神々のルールにより、あまり自由に動けません。
彼女が自由に全力が出せたら、物語にならないです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2655x/

悲劇を覆すもの～クルデンホルフの黒い翼

2011年12月22日00時25分発行